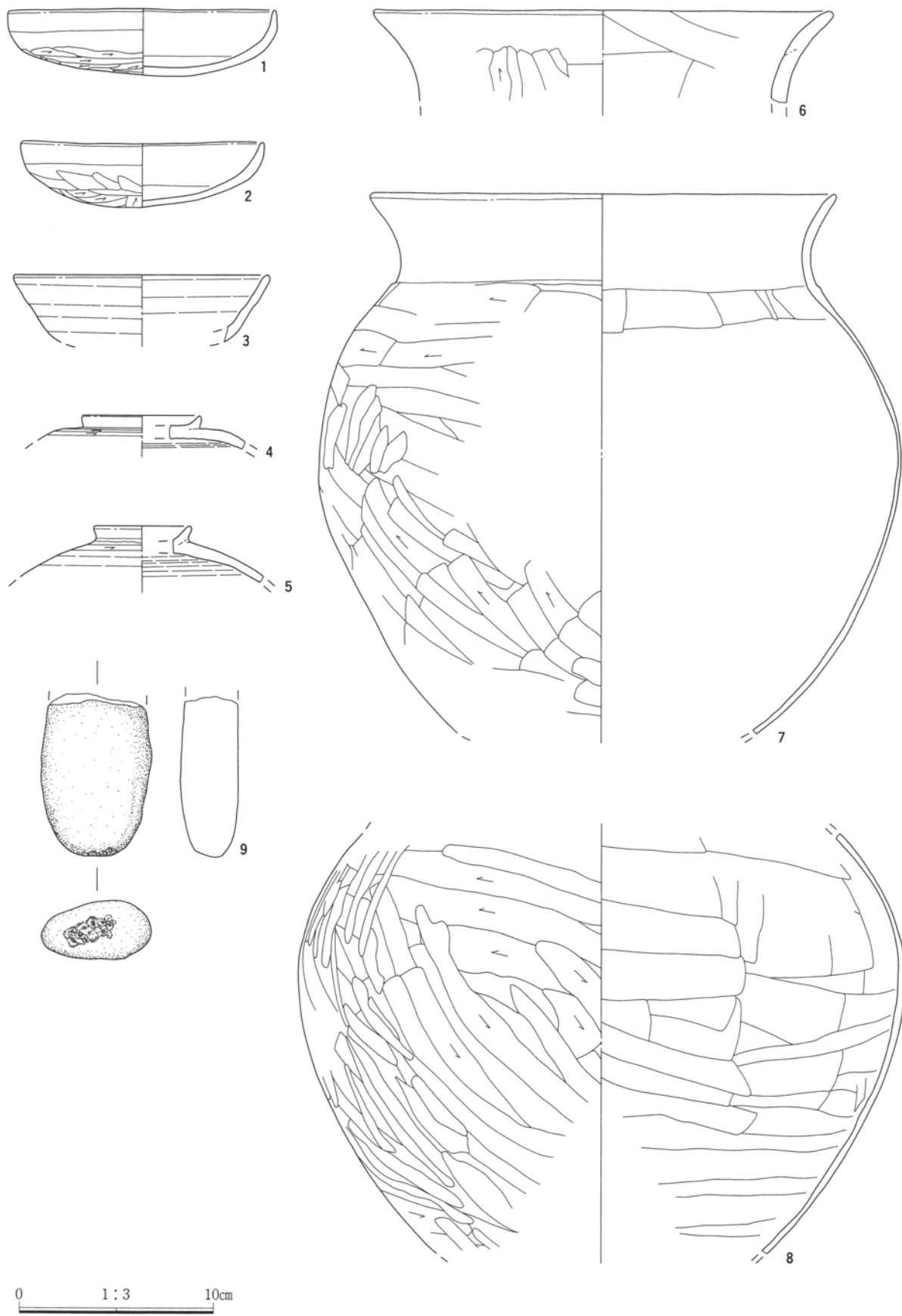
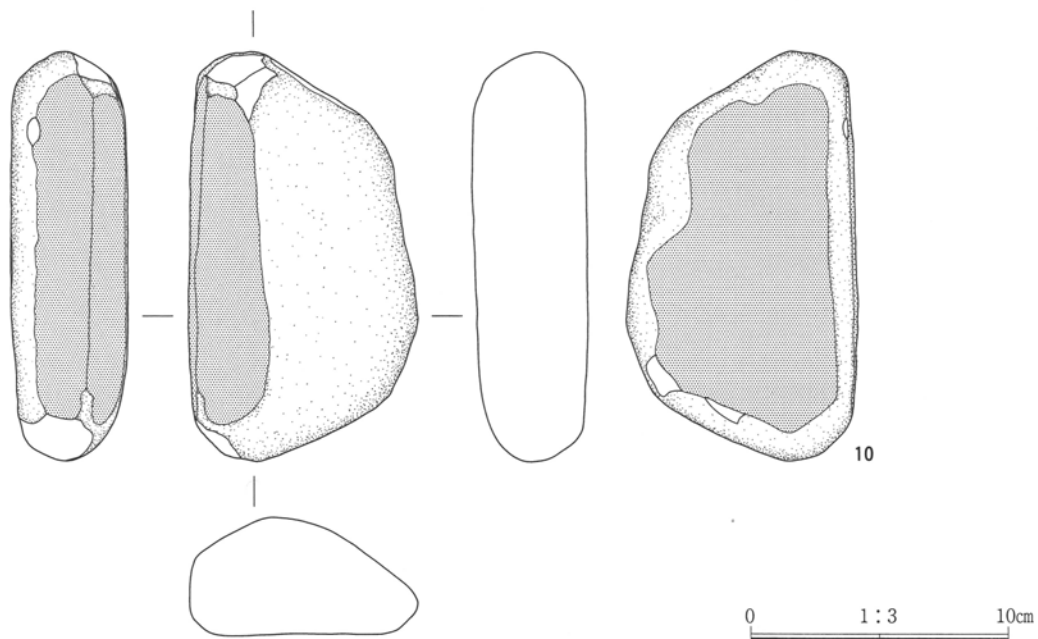


第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



第269図 B区9号住居出土遺物(1)



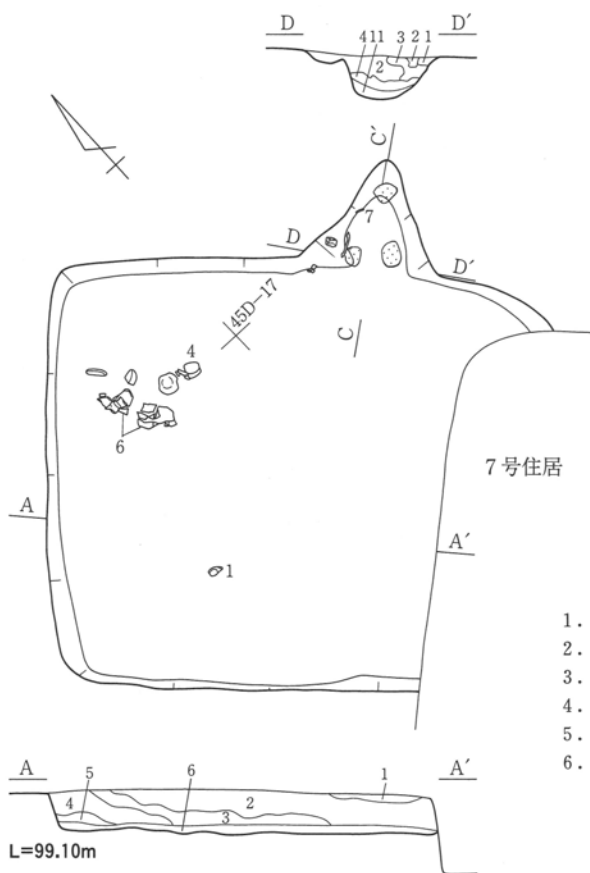
第270図 B区9号住居出土遺物(2)

B区 11号住居 (第271~274図、PL60・129)

位置 45C・D-16・17

重複 7号住居と重複し、これに先出する。

形状 南側は7号住居により削平を受けているが南北方向に長軸を有する長方形を呈する。長軸の残存長は4.10m、短軸は3.68mである。



宮下B区 11号住居 竈

1. 黒褐色土 白色軽石、ローム粒を多く含む。
2. 暗褐色土 ローム粒を非常に多く含む。
3. 黒褐色土 焼土小ブロックを少量含む。
4. 黒褐色土 焼土小ブロック、灰色粘土小ブロックを少量含む。
5. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
6. 暗褐色土 焼土小ブロック、灰色粘土小ブロックを少量含む。
7. 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む。
8. 黒褐色土 焼土小ブロックを含む。
9. 暗褐色土 焼土小ブロックを少量含む。
10. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
11. 黒褐色土 黒褐色土主体とし、ローム粒を含む。

1. 黒褐色土 白色軽石、ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
3. 黒褐色土 白色軽石を少量含む。
4. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
5. 暗褐色土 ローム小ブロックを非常に多く含む。
6. 黄褐色土 黄褐色ローム土主体とし黒色土を少量含む。

0 1:60 2m

第271図 B区11号住居(1)

面積 (11.63)m² 方位 N-54°-E

黒褐色土、暗褐色土がレンズ状に堆積。

床面 遺構確認面から27cm程掘り込んで床面となる。床面は5cm前後の小さな凹凸を有しながらも全体的には平坦に形成されていた。

竈 東壁に造られていた。中央よりわずかに南側寄りに位置していたと考えられる。燃烧部は壁面を掘り込んで設けられており、最奥部は幅を狭め煙道部へ移行する様相を呈している。使用面には焼土が散見された。左側の基部には礫が据えられていたが、袖部の存在は明瞭には確認できなかった。規模は全長89cm、焚口部幅52cm、燃烧部幅45cmである。

周溝・柱穴・貯蔵穴 確認できなかった。

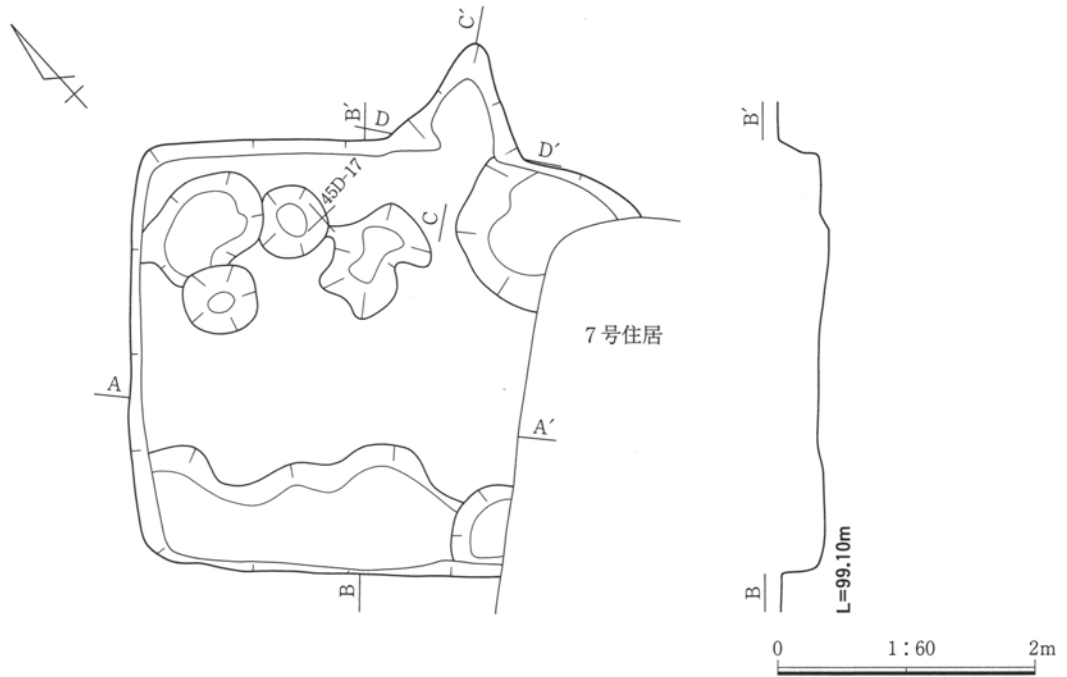
床下 全体的には5cm程で掘り方基底面にいたる。この他に北東隅から東壁寄り、および西壁寄りには土坑・ピット状、あるいは布掘り状の掘り込みがみられた。

竈右前には平面形が円形の深さ19cmの掘り込みを検出した。位置的には貯蔵穴を設置するところであるがその性格を断定するにはいたらなかった。

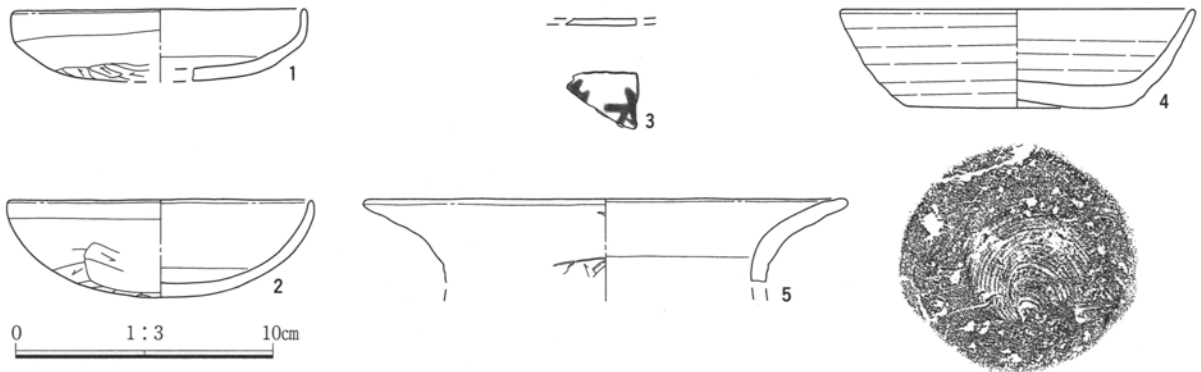
遺物 住居の北東隅からややまとまって出土している。その中で須恵器杯(4)は床面直上からの出土である。土錘(7)は竈燃烧部から出土した。

掲載した資料の他に土師器破片180点、須恵器破片7点、弥生土器破片2点が出土した。(観P56)

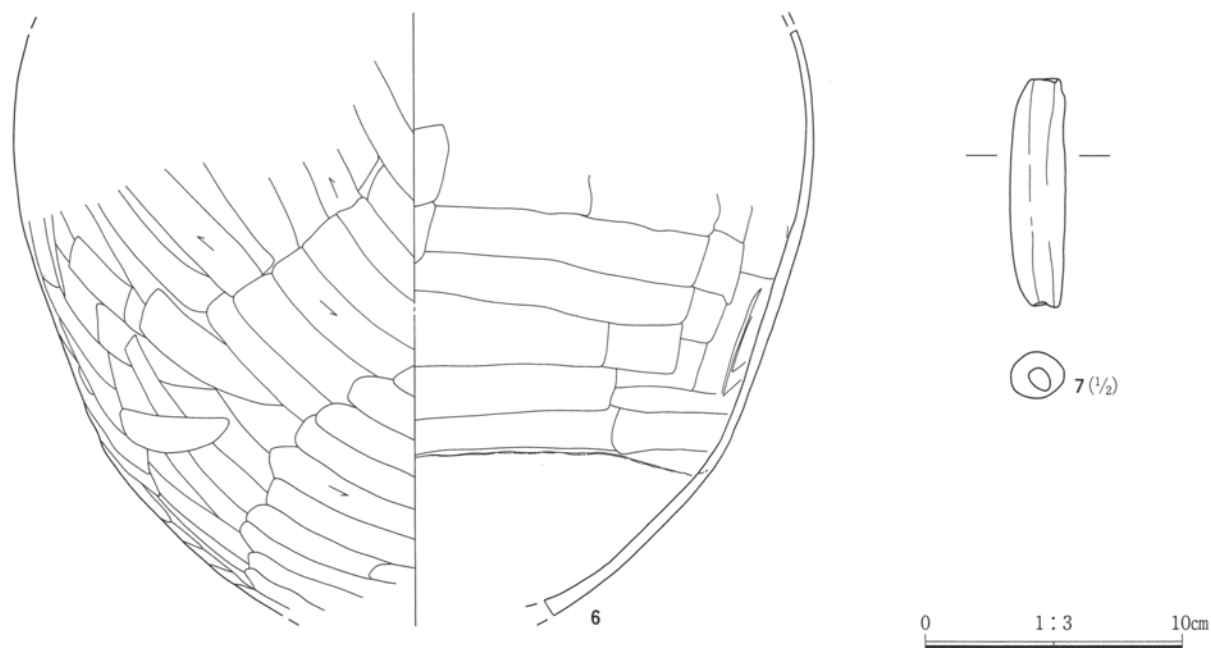
所見 奈良時代の住居である。



第272図 B区11号住居(2)



第273図 B区11号住居出土遺物(1)



第274図 B区11号住居出土遺物(2)

B区 14号住居 (第275~277図、PL60・129)

位置 44Q・R-18・19

重複 8号・15号住居、3号溝、23号土坑と重複、15号住居に後出、他の遺構より先出である。

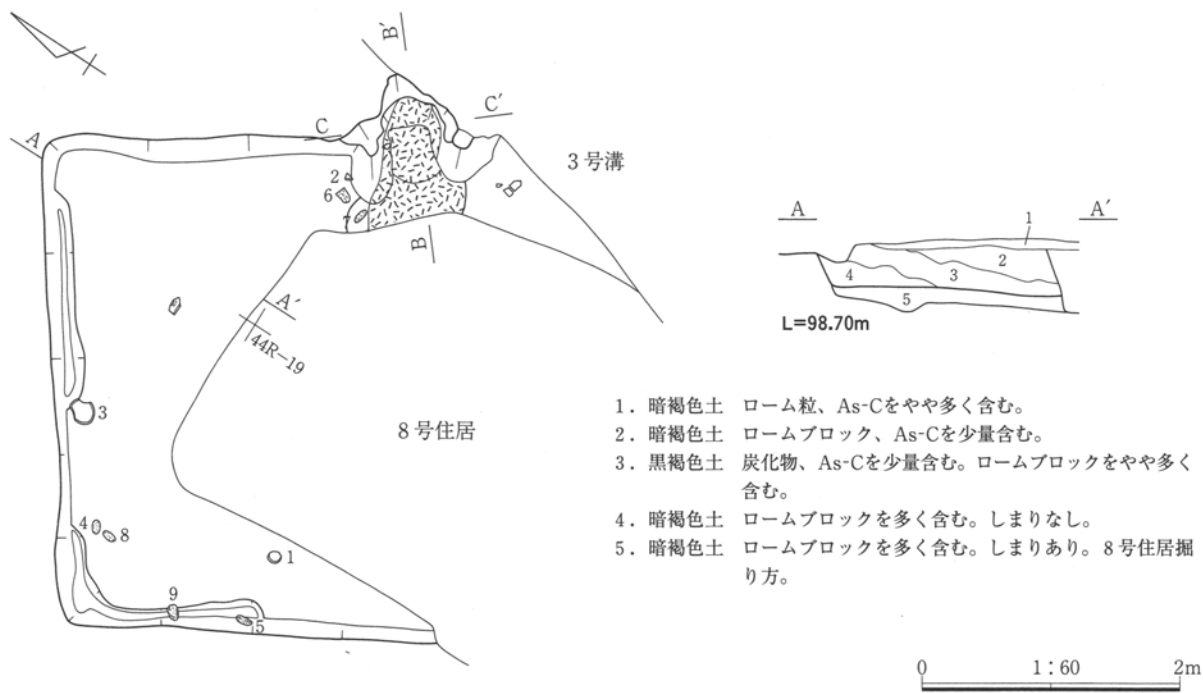
形状 他遺構との重複により、中央から南側部分は大きく削平を受けていた。南北に長軸を有する方形を呈していたと考えられる。規模は長軸の残存長

が3.85m、短軸が3.67mである。

面積 計測不能 **方位** N-48°-E

床面 遺構確認面を44cmほど掘り込んで床面となる。

竈 東壁に造られていた。中央より南側寄りに位置していたものと推定される。燃烧部は住居内の床面上に設けられ、最奥部の立ち上がりが一部住居壁



第275図 B区14号住居(1)

1. 暗褐色土 ローム粒、As-Cをやや多く含む。
2. 暗褐色土 ロームブロック、As-Cを少量含む。
3. 黒褐色土 炭化物、As-Cを少量含む。ロームブロックをやや多く含む。
4. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。しまりなし。
5. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。しまりあり。8号住居掘り方。

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

面を掘り込んで造られていた。左右の袖部は灰褐色ロームを構築材としていたが残存状態は不良であった。燃烧部使用面から焚口部にかけて広範囲にわたり灰の堆積が認められた。規模は全長115cm、焚口部幅53cm、燃烧部幅32cmである。

周溝・柱穴・貯蔵穴 確認できなかった。

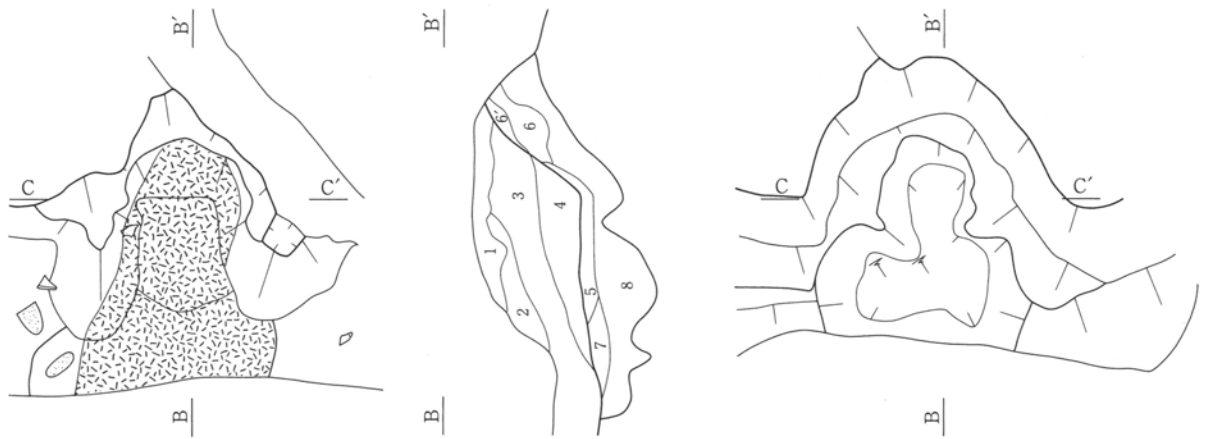
床下 床面下6~10cm程で掘り方基底面にいたった。北壁際をはじめ3方の壁面近くは幅25~70cm、

深さ4~16cmにわたり布掘り状の掘り込みがみられた。

遺物 床面直上からの出土はほとんどみられなかった。杯(1)や須恵器蓋(3)は残存は良好であったもののいずれも床面から15cm以上離れての出土である。

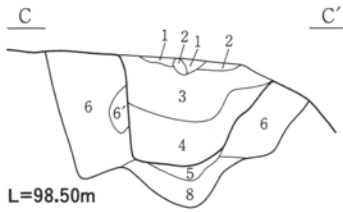
掲載した資料の他に土師器破片17点、須恵器破片2点が出土した。(観P56・57)

所見 奈良時代の住居である。



宮下B区 14号住居 竈

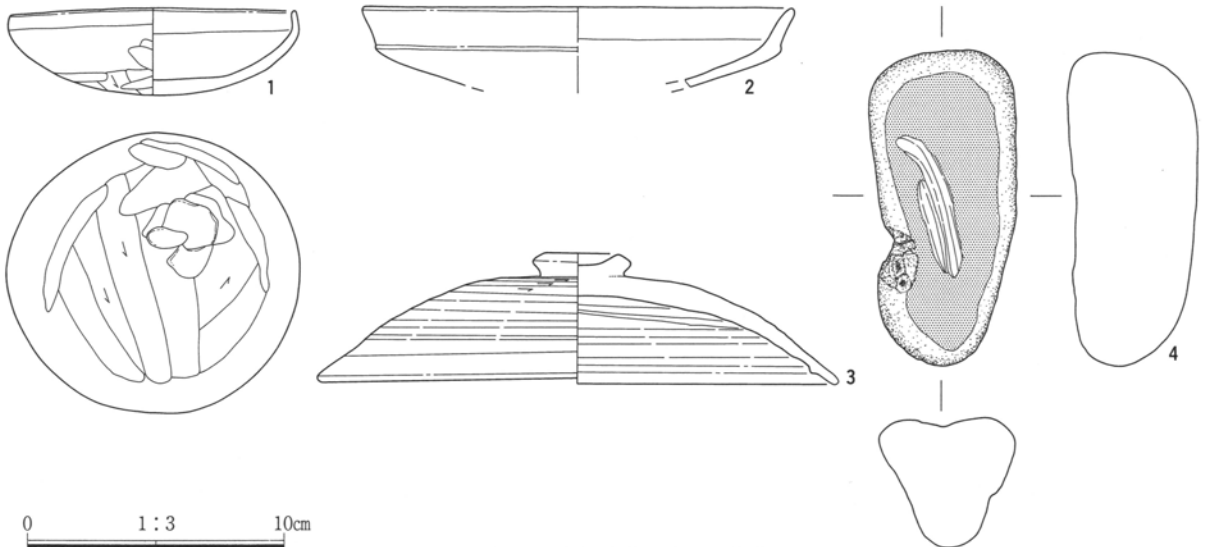
1. 暗褐色土 白色軽石をやや多く含む。
2. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。天井の崩落土。
3. 暗褐色土 白色軽石、焼土小ブロックを少量含む。
4. 暗褐色土 灰、焼土、ロームブロックを多く含む。しまりなし。
5. 黒褐色土 焼土粒、灰、炭を非常に多く含む。
6. 灰褐色ローム 竈構築材。
- 6'. 灰褐色ローム 6層が被熱により焼土化している部分。
7. ロームを主体とした暗褐色土との混土層 しまりあり。
8. 暗褐色土とロームブロックの混土層 竈の掘り方。



L=98.50m

0 1:30 1m

第276図 B区14号住居(2)



第277図 B区14号住居出土遺物

B区 15号住居 (第278・279図、PL61・130)

位置 44Q・R-18

重複 8号・14号住居、3号溝と重複、いずれの遺構に先出する。

形状 竈と南東隅が3号溝により削平されているが東西を長軸とする。東壁と西壁の長さの差が大きく全体形状は台形状を呈する。規模は長軸3.43m、短軸2.21mである。

面積 (6.32) m² **方位** N-48°-E

埋没土 暗褐色土が堆積していた。

床面 遺構確認面から18cm程掘り込んで床面となる。8号住居の床面下での確認となったためか床面の凹凸は著しかった。所々で非常に硬化した面が検出された。

竈 東壁の南東隅寄りに造られていた。残存状態

は不良であったが、燃烧部を住居内から一部壁面を掘り込んで設けられていた。左側は短い袖部が住居内に延びていた。使用面には薄く膜状に灰が堆積していた。

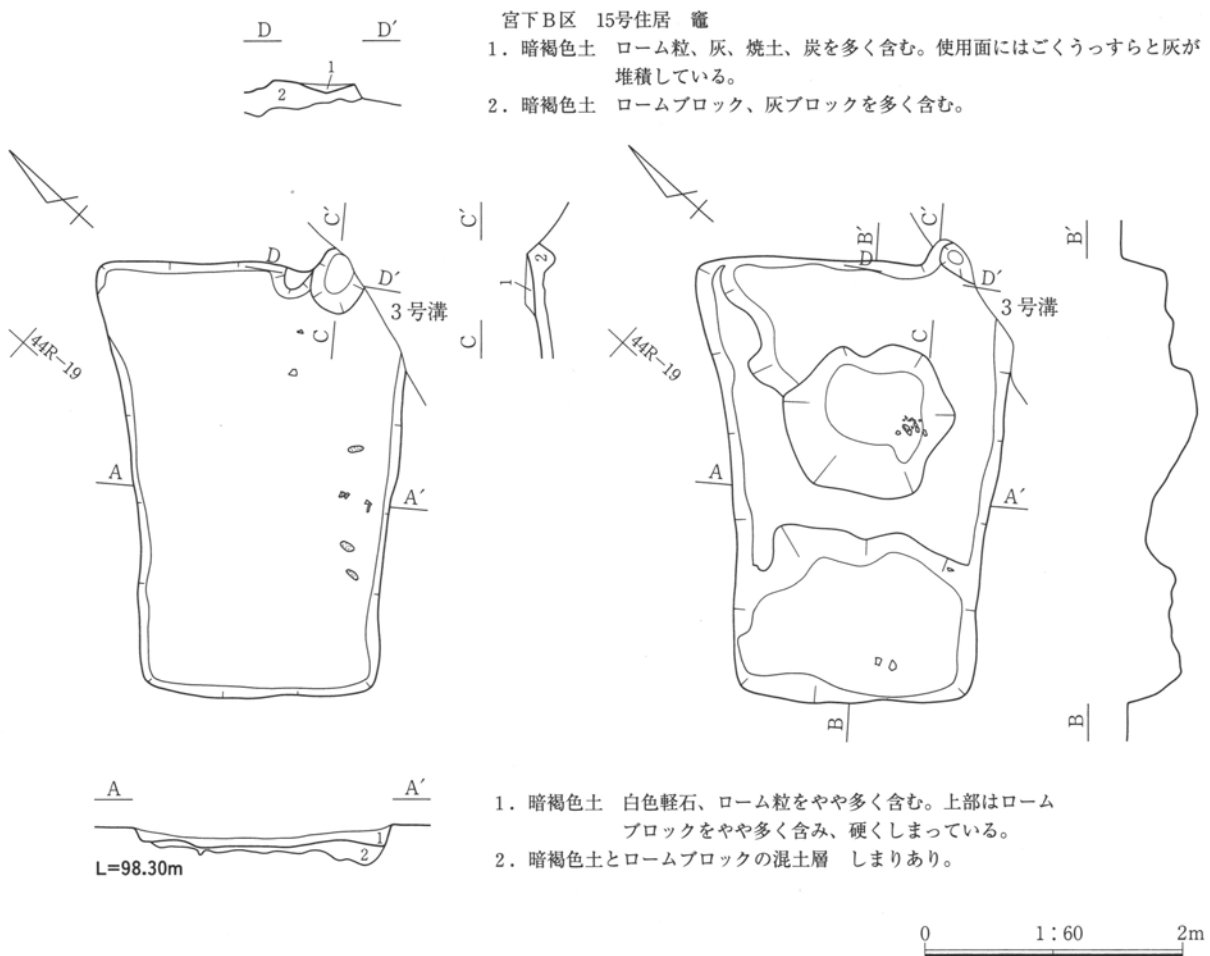
周溝・柱穴・貯蔵穴 確認されなかった。

床下 床面下4~20cmで掘り方基底面にいたった。基底面は起伏に富み、中央からやや東側寄りと西壁寄りには土坑状の掘り込みがみられた。

遺物 床面直上からの良好な出土遺物はなかった。須恵器瓶(3)の破片は埋没土中からの出土である。杯(1・2)は掘り方埋没土中からの出土である。この他に棒状の礫5点が床面上から出土している。

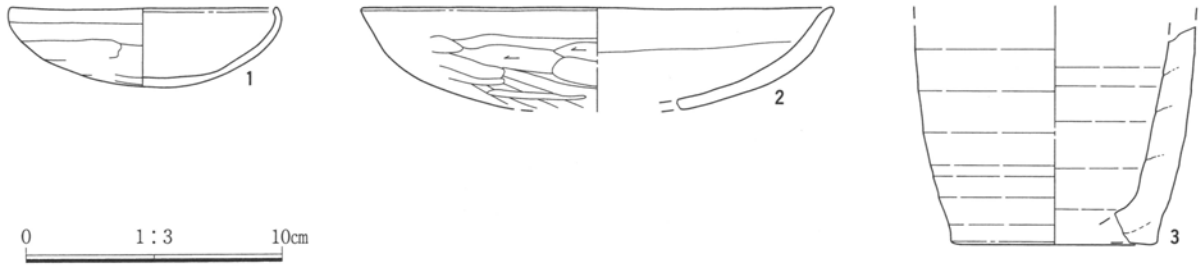
掲載した資料の他に土師器破片32点が出土した。(観P57)

所見 奈良時代の住居である。

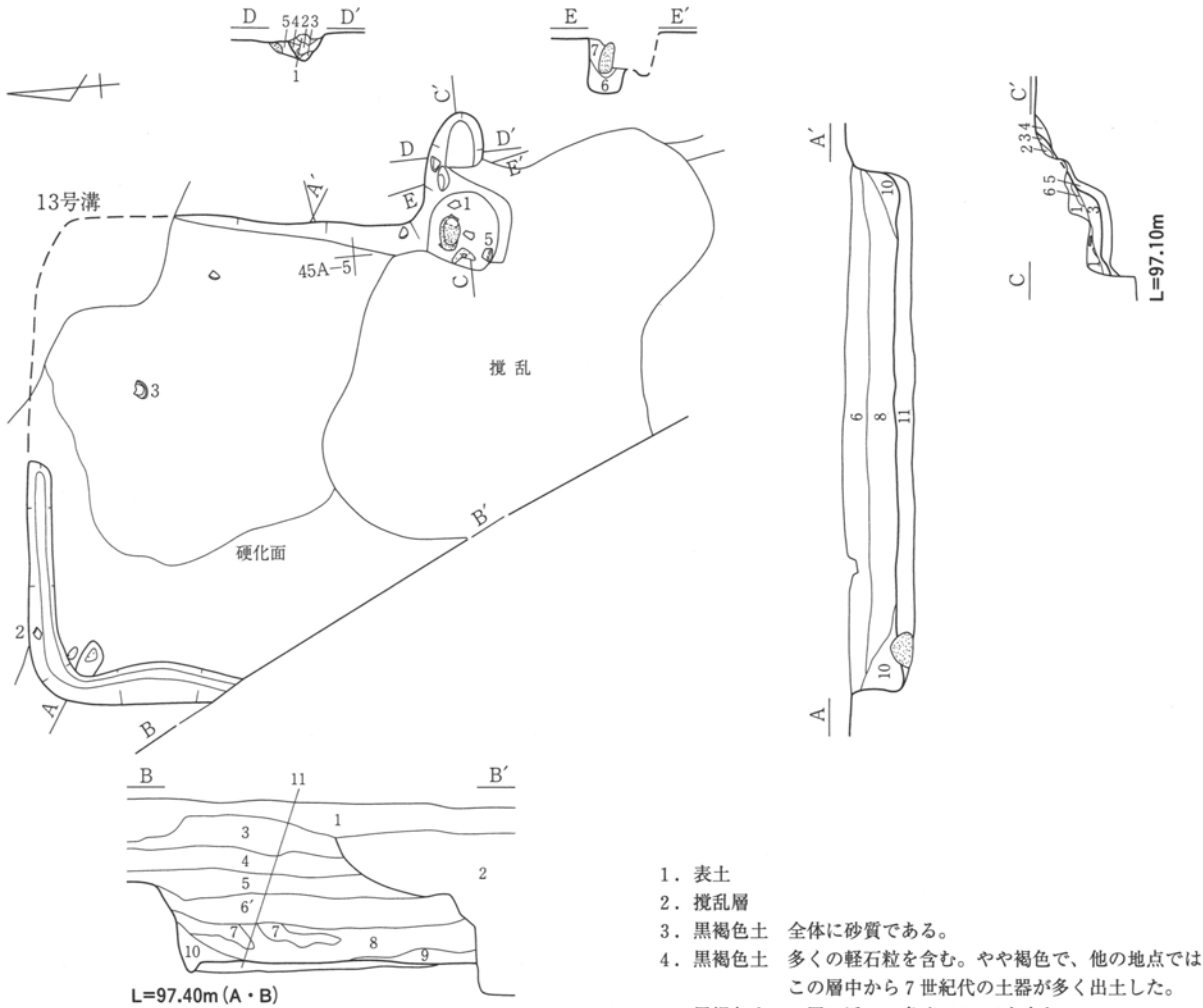


第278図 B区15号住居

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



第279図 B区15号住居出土遺物



宮下B区 17号住居 竈

1. 黒色土 やや茶色味をおびる。粘性を有し、粒子が密である。少量の灰白色粘質土の小ブロックを含む。
2. 赤褐色土 赤色の焼土と赤褐色の焼土を主とした層。
3. 灰色層土 灰色の炭を多量に含む層。
4. 黒色土 灰白色粘質土の小ブロックを含む。
5. 黒色土 地山の黒色土を主とする。少量の焼土粒を含む。
6. 暗褐色土 粒子が密で粘性をおびる。
7. 黒褐色土 暗褐色土と混土状をなす。

1. 表土
2. 攪乱層
3. 黒褐色土 全体に砂質である。
4. 黒褐色土 多くの軽石粒を含む。やや褐色で、他の地点ではこの層中から7世紀代の土器が多く出土した。
5. 黒褐色土 4層に近い。多くのAs-Cを含む。
6. 黒褐色土 As-Cをわずかに含む。下層の茶褐色ロームを少量含む。
- 6'. 黒褐色土 As-Cを少量含む。粒子密。
7. 黒褐色土 6層に近い。6層よりやや黒色味が増す。
8. 暗褐色土 茶褐色のローム粒を多く含む。粒子は密である。
9. 暗褐色土 8層に類似するが少量の焼土粒を含む。
10. 暗褐色土 地山の茶褐色のローム粒を多く含む。
11. 暗褐色土 茶褐色のローム粒・小ブロックを含む。上層は床面として踏み固められ硬い。

第280図 B区17号住居

B区 17号住居 (第280・281図、PL61・130)

位置 44A-4・5、54T-4・5

重複 13号溝に先出する。

形状 南北に長軸を有する長方形を呈すると考えられるが、南西隅とその周辺は調査区域外に及ぶ。また、北東隅は13号溝によって削平されていた。他にも竈手前をはじめ広範囲にわたり攪乱を受けている。規模は東西3.79m、南北の残存長5.54mを測る。

面積 計測不能 **方位** N-85°-W

埋没土 上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。

床面 遺構確認面から45cm程掘り込まれて床面となる。床面は、ほぼ水平に造られており、中央から東壁寄りには硬く踏み固められていた。

竈 東壁に造られていた。全長は111cmを測った。

中央より南側寄りに位置する。燃焼部は住居内の床面上に造られ、最奥部の立ち上がりの一部壁面を掘り込んでいた。煙道部は基部寄りの一部が残存していた。燃焼部左奥壁には礫を据え、壁面が補強されていた。袖部は右側は攪乱を受けたため、左側は崩壊し、両裾部とも残存しなかった。使用面直下には灰が厚く堆積していた。

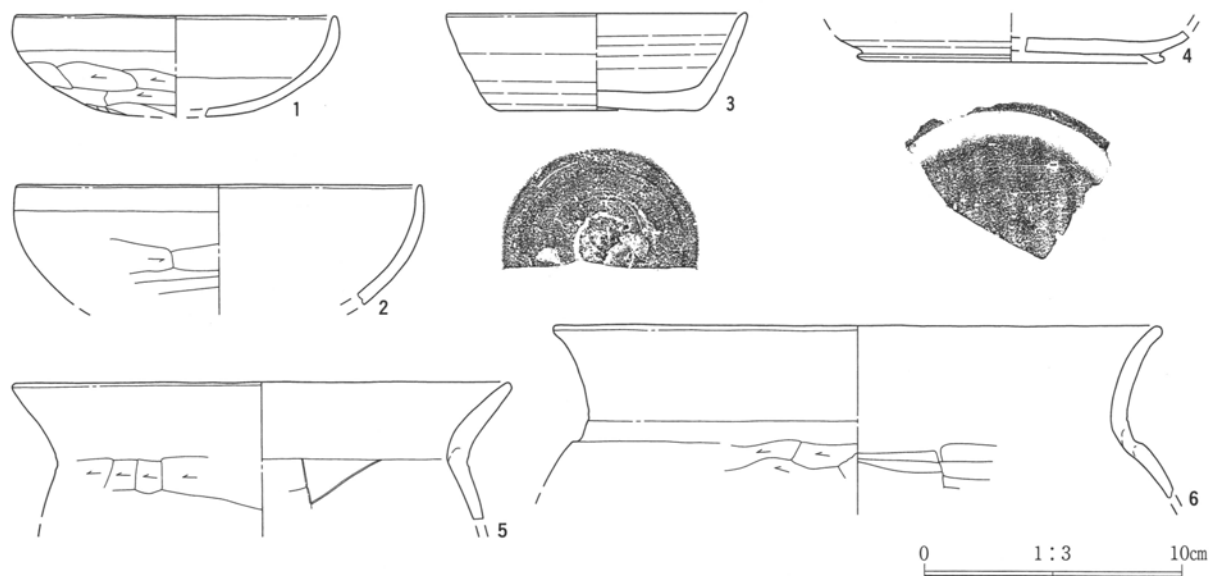
周溝・柱穴・貯蔵穴 確認できなかった。

床下 床面下5~16cmで掘り方基底面にいたる。

遺物 床面直上から残存状態の良い遺物は出土していない。須恵器杯(3)は2分の1の残存で北側床面上からの出土である。

掲載した資料の他に土師器破片93点、須恵器破片2点、縄文土器破片1点が出土した。(観P57・58)

所見 奈良時代の住居である。



第281図 B区17号住居出土遺物

C区 5号住居 (第282~285図、PL62・130)

位置 65D・E-7・8

重複 本遺構が6号住居を掘り込んでいた。

形状 長軸を南北にする長方形を呈する。規模は長軸4.32m、短軸3.72mである。

面積 13.67m² **方位** N-76°-E

床面 遺構確認面から28cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 軽石と少量のローム粒を含むシルト質の砂

で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。燃焼部を住居内に設け、煙道部への立ち上がり面を地山中に掘り込む構造をとっていた。掘り方から多量の焼土粒と灰が出土した。右袖は壁面から75cm、左袖は壁面から73cm残存していた。左袖部先端は甕(9)が、右袖部先端は倒立状態で甕(10)が補強材として設置されていた。構築材には焼土が多数含まれることから、造り変えが行われた可能性もある。全長127cm、

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

燃烧部幅58cm、焚口部幅49cmである。

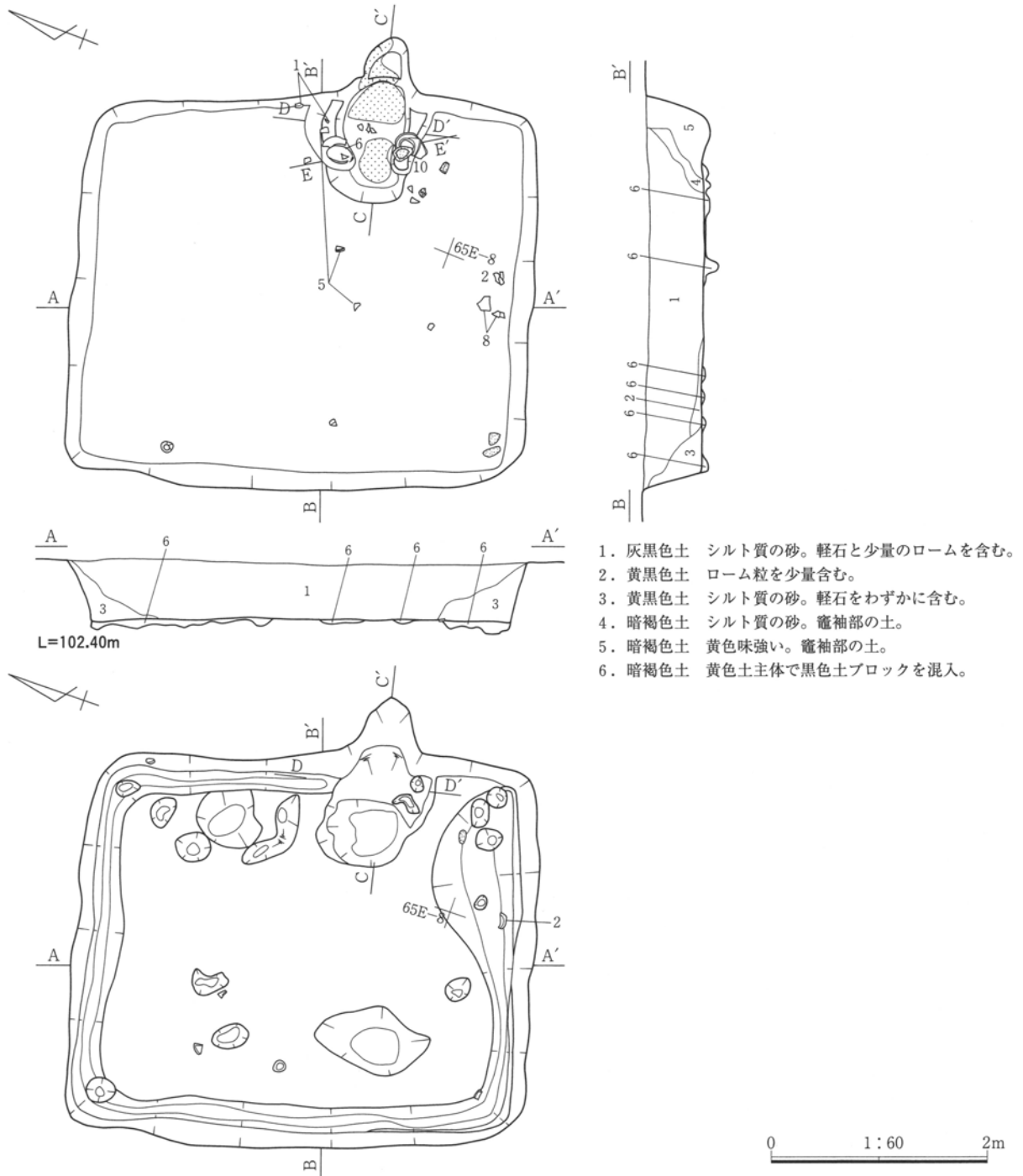
周溝 全面にわたり壁面下に掘られていた。幅は16~28cmで、深さは13~22cmである。

柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

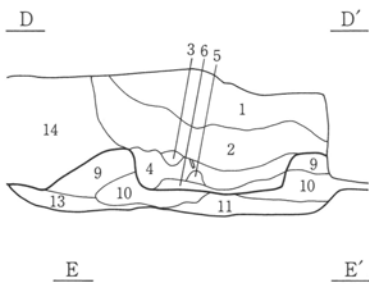
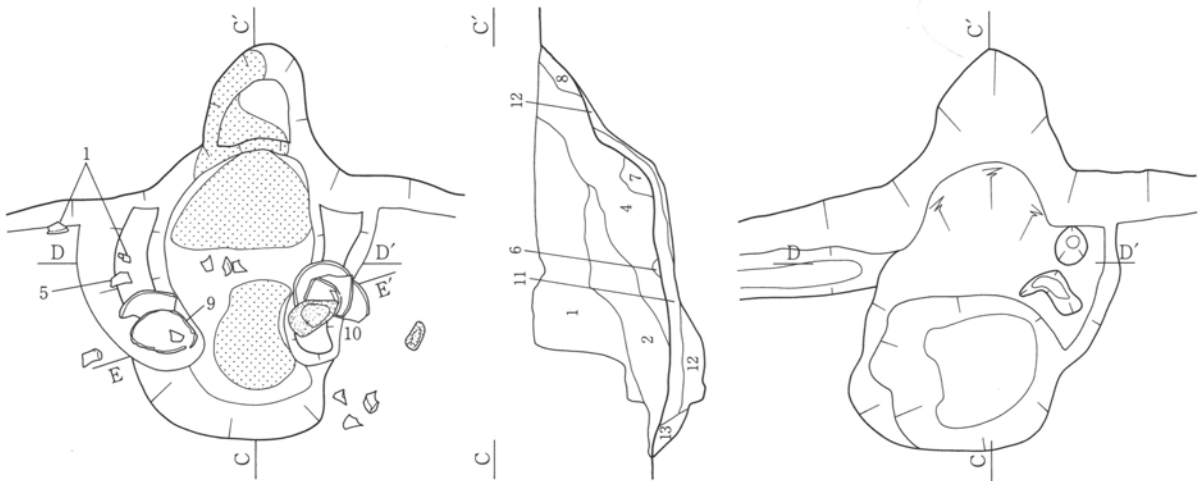
遺物 床面直上の出土遺物は少量で、竈左袖外側周辺から土師器杯(1)が、須恵器高台付杯(5)の破片が出土、高台付杯は床面中央から出土した破片と接

合した。南壁際中央の周溝内からは土師器杯(2)が出土した。埋没土中からは土師器甕、須恵器高台付杯・杯とともに鉄製鎌の(11)が出土している。掲載資料の他に土師器破片530点、須恵器破片7点、弥生土器破片15点が出土している。(観P58・59)

所見 奈良時代の住居と考えられる。



第282図 C区5号住居(1)

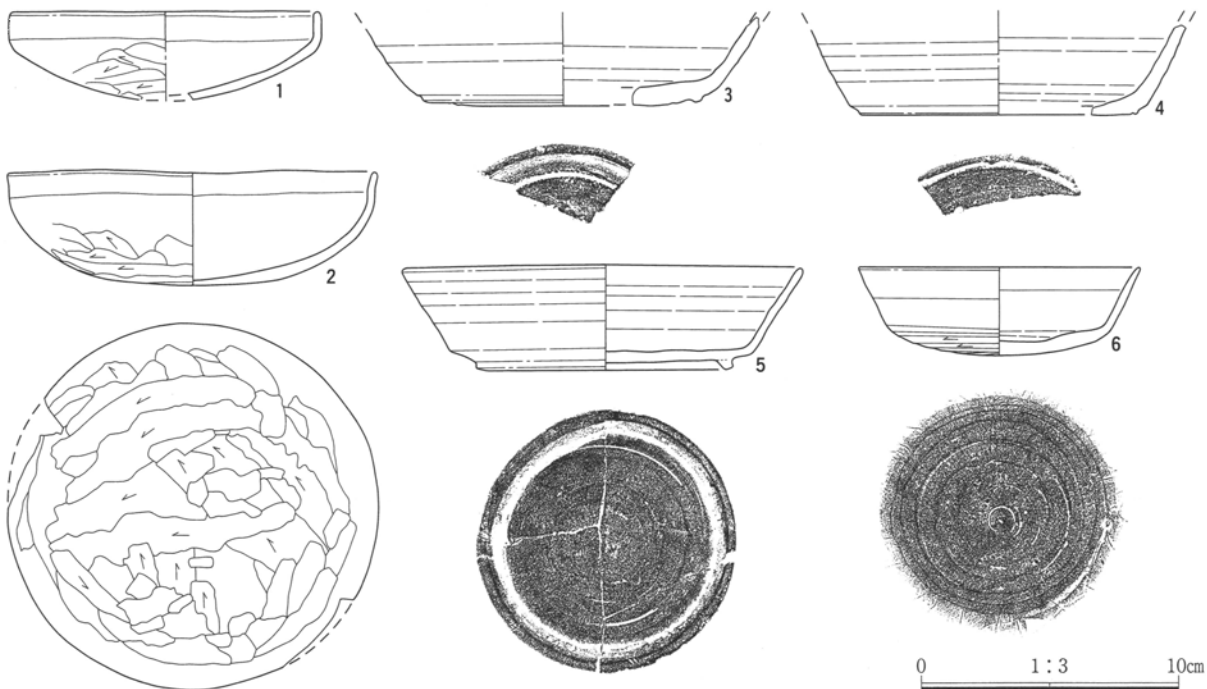


宮下C区 5号住居 竈

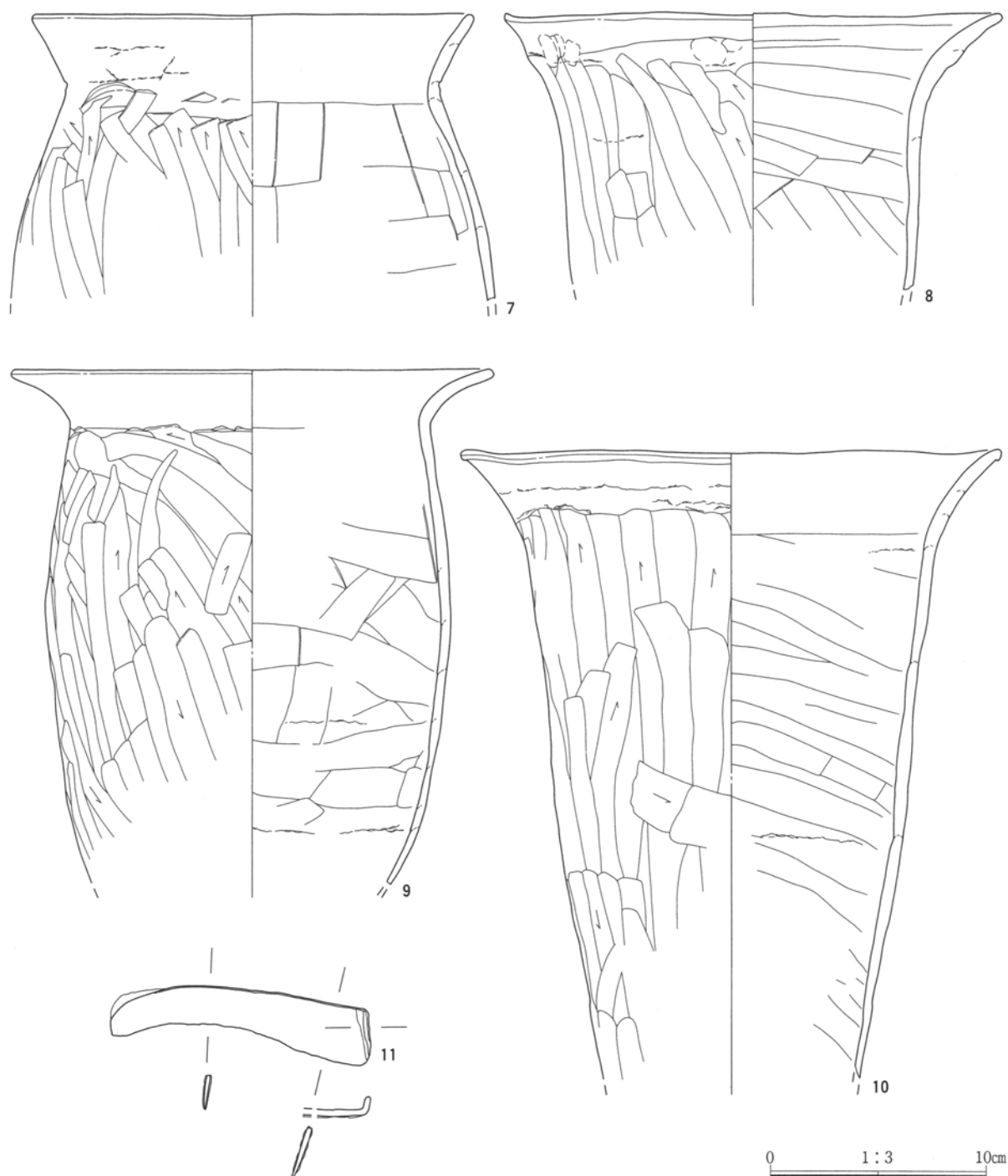
1. 暗灰黒色土 シルト質の砂。軽石を少量含む。
2. 灰黒色土 シルト質の砂。焼土を少量含む。
3. 灰黒色土 シルト質の砂。灰がブロック状に含まれる。
4. 褐色土 シルト質の砂。炭、焼土を多量に含む。天井部崩落土。
5. 赤褐色土 シルト質の砂。焼土ブロック。
6. 黒色土 シルト質の砂。灰層、焼土を少量含む。
7. 褐色土 焼土を多量に含む。
8. 暗灰黒色土 As-C混土。6号住居埋没土。
9. 褐色土 多くの焼土粒とローム粒を含む。
10. 黒褐色土 灰を多量に含む。
11. 褐色土 多くの焼土粒とローム粒、灰を含む。
12. 褐色土 ロームを多く含む。
13. 褐色土 ローム粒を多く含む。
14. 暗褐色土

0 1:30 1m

第283図 C区5号住居(2)



第284図 C区5号住居出土遺物(1)



第285図 C区5号住居出土遺物(2)

C区 8号住居 (第286~288図、PL61)

位置 65C・D-6・7

重複 南側で9号・17号住居と重複し、本遺構が9号・17号住居を掘り込んでいた。3軒の新旧関係は17号住居→9号住居→8号住居である。

形状 南北を長軸とする隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.02m、短軸3.43mである。

面積 11.52㎡ **方位** N-89°-E

床面 遺構確認面から25cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 床面直上層は中央付近にAs-Cを多く含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。燃焼部下面には焼土、炭を多く含むシルト質の砂が堆積

していた。全長108cm、燃焼部幅46.5cm、焚口部幅67cmである。

周溝 掘られていなかった。

柱穴 柱穴は確認できなかった。

ピットは5本掘られていた。ピット1は直径64cm、深さ22cm。ピット2は長径46cm短径37cm、深さ80cm。ピット3は長径33cm短径29cm、深さ29cm。ピット4は長径28cm短径21cm、深さ64cm。ピット5は直径26cm、深さ13cmである。ピット4・5は床面精査時に検出した。

貯蔵穴 北東部分に掘られていた。規模は長径87cm

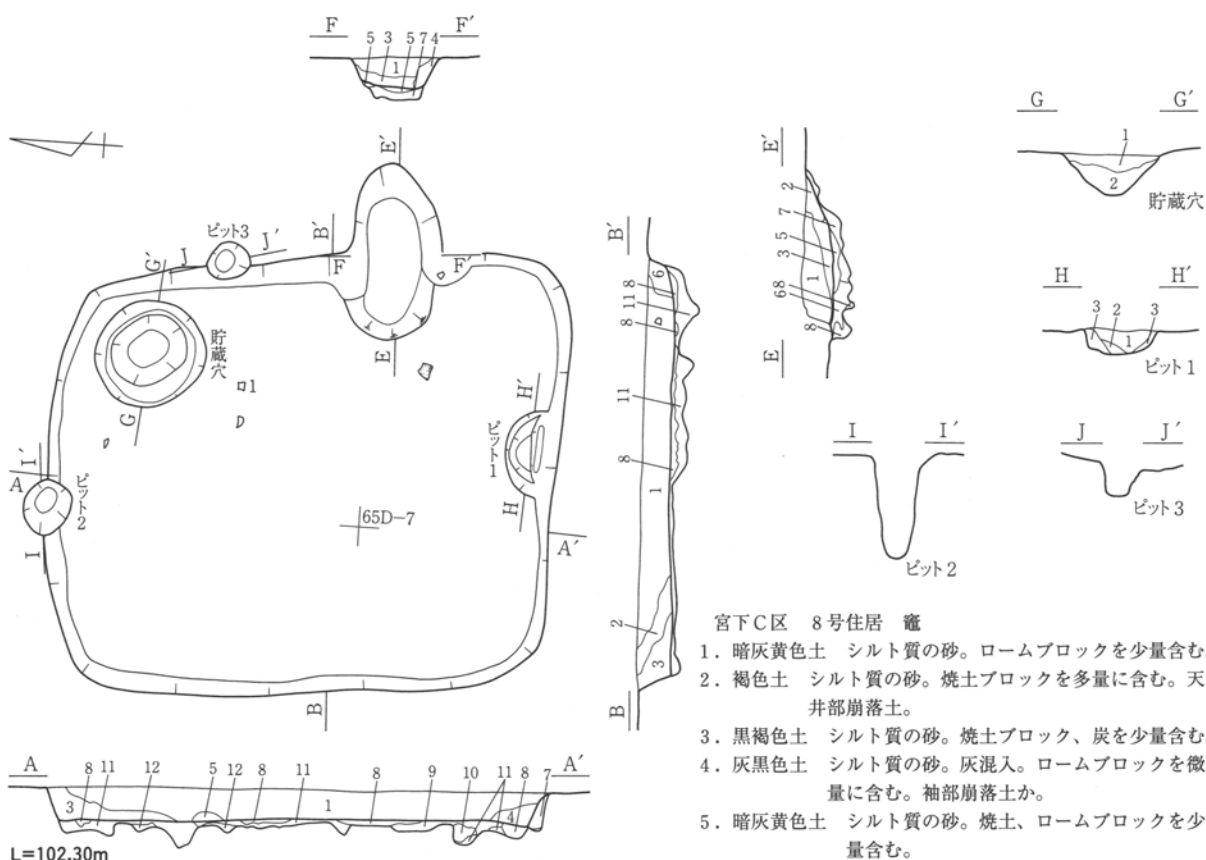
短径84cmで床面からの深さは32cm程である。上端の形状はほぼ円形を呈する。

床下 床面調査後、床下を調査した際、床下土坑1基を南東部分で確認した。規模は長径64cm短径46cmで床面からの深さは33cm程である。

遺物 出土量は少量で床面直上からの出土はなかった。掲載した資料の他に土師器破片313点、須恵器破片6点、縄文土器破片4点が出土している。

(観P59)

所見 奈良時代の住居と考えられる。



1. 暗褐色土 多くのAs-Cと少量のローム粒を含む。
2. 1層と3層の混土 As-Cを少量含む。
3. 暗褐色土 少量のAs-Cとローム粒を含む。
4. 黒褐色土 6層に類似。As-Cを少量含む。流れ込みか。
5. 黒褐色土 As-Cは含まず、灰を含む。
6. 竈袖部
7. 黒褐色土 As-Cを少量含む。9号住居埋没土。
8. ロームと黒褐色土の混土層
9. 暗褐色土をやや多く含むローム
10. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
11. 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土をわずかに含む。
12. 黄褐色土 ロームブロックを主体。

宮下C区 8号住居 竈

1. 暗灰黄色土 シルト質の砂。ロームブロックを少量含む。
2. 褐色土 シルト質の砂。焼土ブロックを多量に含む。天井部崩落土。
3. 黒褐色土 シルト質の砂。焼土ブロック、炭を少量含む。
4. 灰黒色土 シルト質の砂。灰混入。ロームブロックを微量に含む。袖部崩落土か。
5. 暗灰黄色土 シルト質の砂。焼土、ロームブロックを少量含む。
6. 暗灰黒色土 シルト質の砂。焼土、炭を多く含む。
7. 灰黄色土 シルト質の砂。ロームブロックを多く含む。
8. 黄色土 シルト質の砂。掘り方埋没土。

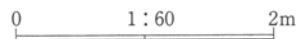
宮下C区 8号住居 貯蔵穴

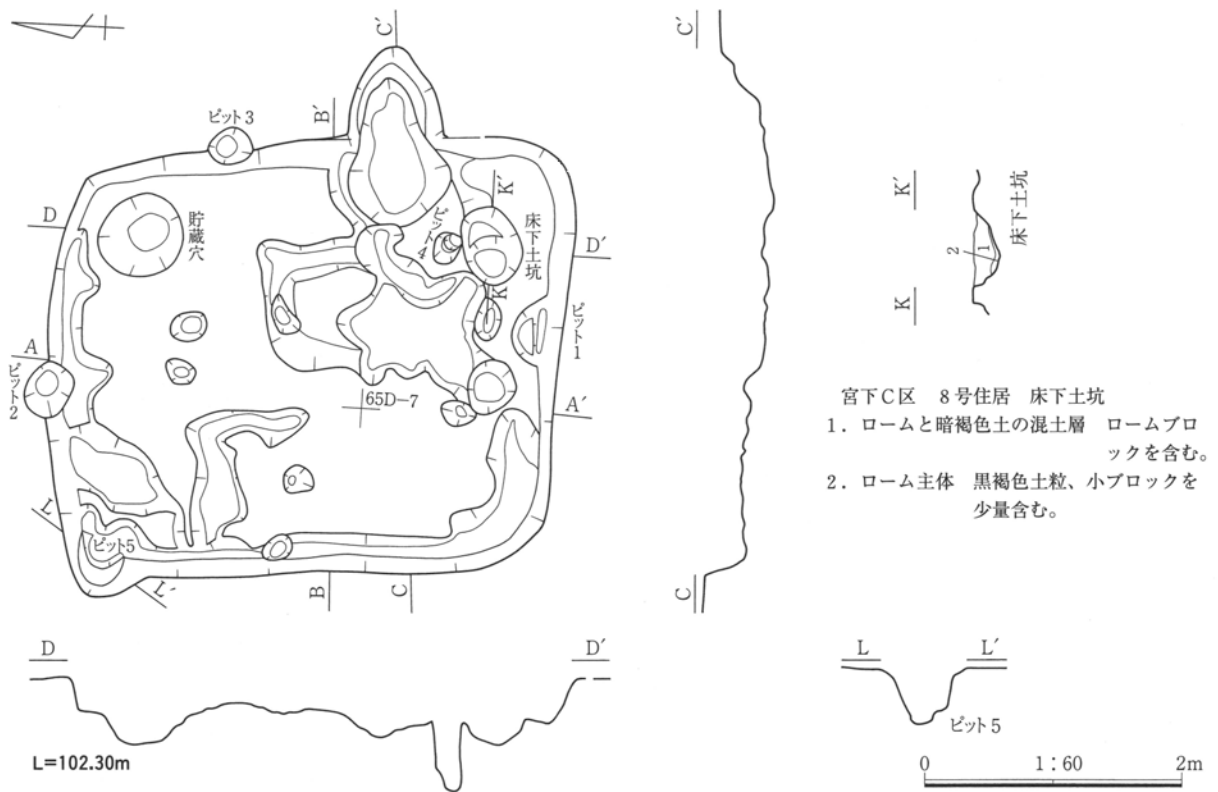
1. 暗灰黄色土 シルト質の砂。ロームと黒色土の混土。
2. 暗黄色土 シルト質の砂。地山ロームより黒色味がかかる。

宮下C区 8号住居 ピット1

1. 灰黒色土 シルト質の砂。ロームブロックを少量含む。
2. 暗黄黒色土 シルト質の砂。ロームブロックを多く含む。
3. 黒色土 シルト質の砂。掘り方埋没土。

第286図 C区8号住居(1)





第287図 C区8号住居(2)



第288図 C区8号住居出土遺物

C区 10号住居 (第289~291図、PL62・131)

位置 65D・E-5・6

重複 北西部分で11号住居と重複し、北東部分で17号住居と重複する。本遺構が11号・17号住居を掘り込んでいた。

形状 南北を長軸とする長方形を呈すると推定されるが、南壁は攪乱を受けている。規模は長軸4.04m、短軸3.65mである。

面積 9.75㎡ **方位** N-86°-E

床面 遺構確認面から58cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 黒褐色土、黄暗褐色土、ローム粒が混合した土で埋まっていた。

竈 東壁中央南寄りに造られていた。全長173cm、燃烧部幅53cm、焚口部幅106cmである。左右の袖部を比べると燃烧部方向でその長さに差が見られた。

周溝 攪乱により壊されている南壁面を除き、東・西・北の各壁面下に掘られていた。幅は14~32cmで、深さは4~13cmである。

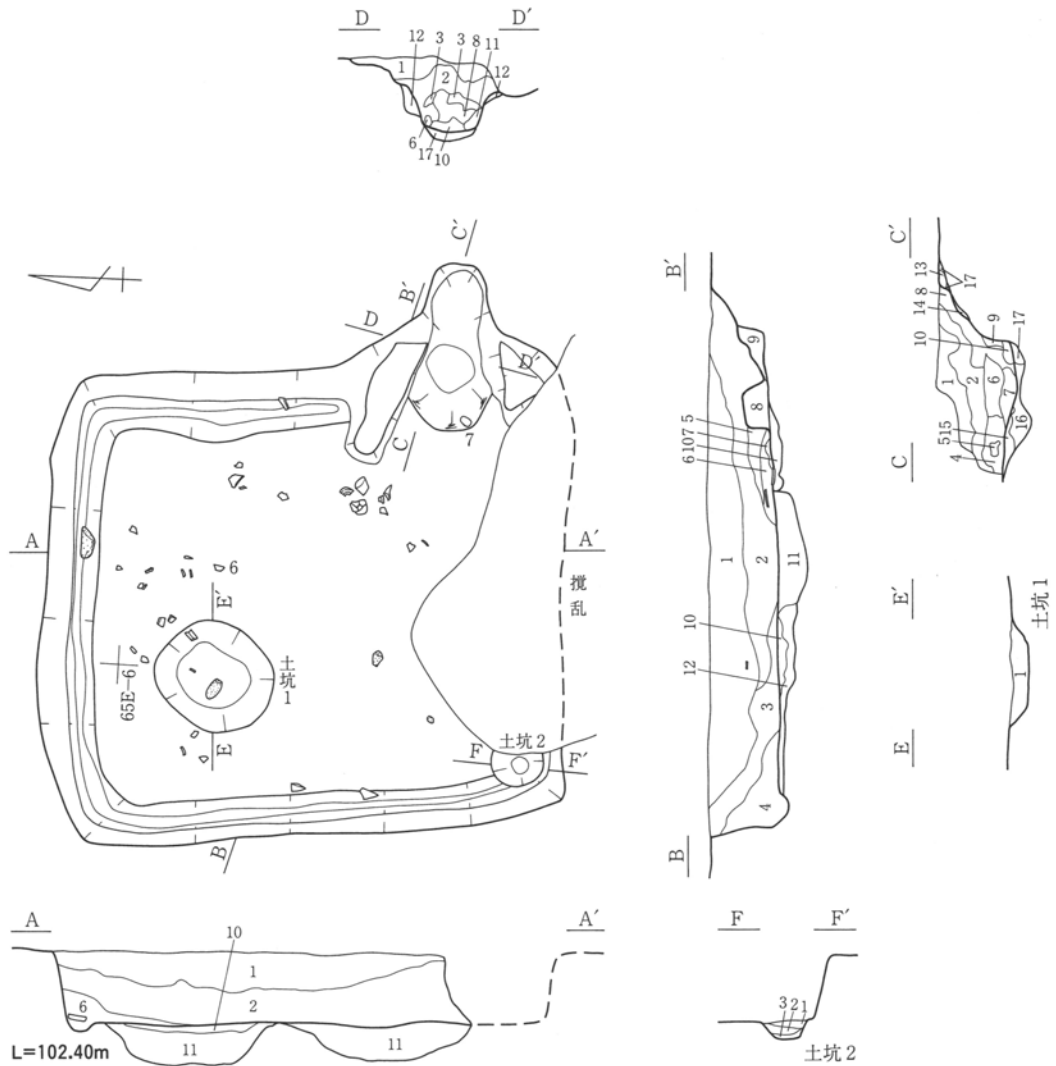
柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

土坑 2基掘られていた。土坑1は長径98cm短径86cmで床面からの深さは19cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。土坑2は攪乱により一部が壊される。南北長41cm、深さ19cm程である。

遺物 出土量は少量で、竈焚口部から出土した台付甕の破片(7)を除いていずれも、埋没土中あるいは掘り方中からの出土である。墨書の記された土師器杯3個体(4~6)の出土が特記される。

掲載した資料の他に土師器破片1,314点、須恵器破片57点、弥生土器破片8点、縄文土器破片4点、陶磁器破片3点が出土している。(観P59)

所見 奈良時代の住居と考えられる。



1. 暗褐色土 黄暗褐色土小ブロック（ロームと暗褐色土の混土）をやや多く含む。
2. 暗褐色土 ローム粒を全体に混入。
3. 暗褐色土と黄暗褐色土の混土層
4. 黒褐色土 ローム粒、黄暗褐色土が不均等に混土。
5. 明黄褐色土 ローム粒・ブロックが全体の2/3、暗褐色土が1/3の混土状態をなす。
6. 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土粒を含む。
7. 黄黒色土 ブロック状に含む。
8. 黄黒色土 ローム主体で黒色土を混入。
9. 黄色土 ローム。竈袖部。
10. 黄黒色土 黒色土主体でロームを多量に含む。
11. 暗黒褐色土 焼土粒を多量に、上位はロームを多く含む。
12. 黄黒色土 ローム主体で黒色土を少量含む。

宮下C区 10号住居 竈

1. 暗黒褐色土 焼土粒、ロームブロックを少量含む。
2. 暗黒褐色土 多くのロームブロックと少量の軽石を含む。
3. 黄褐色土 ロームと焼土の混土。天井部崩落土。
4. 黄黒色土 黒色土主体。ローム、焼土、軽石を少量含む。
5. 黄褐色土 粘土粒か。
6. 明黄褐色土 ローム主体。焼土粒、黒色土を少量含む。

7. 黒褐色土 黒色土主体。上位に多くの焼土粒と少量のロームを含む。
8. 褐色土 焼土主体。ロームを少量含む。天井部崩落土。
9. 黒色土 黒色土主体。焼土を多量に含む。
10. 黄黒色土 黒色土主体。焼土を少量含む。
11. 灰黒色土 ロームブロックを少量含む。
12. 黄色土 ローム。竈袖部。
13. 暗黄色土 ローム主体(茶色)。上位に焼土を含む。
14. 黄褐色土 ローム主体で上位に焼土を含む。
15. 暗黒褐色土 黒色土主体で焼土粒、ロームブロックを少量含む。
16. 黄黒色土 ローム主体で黒色土を混入。
17. 地山ローム

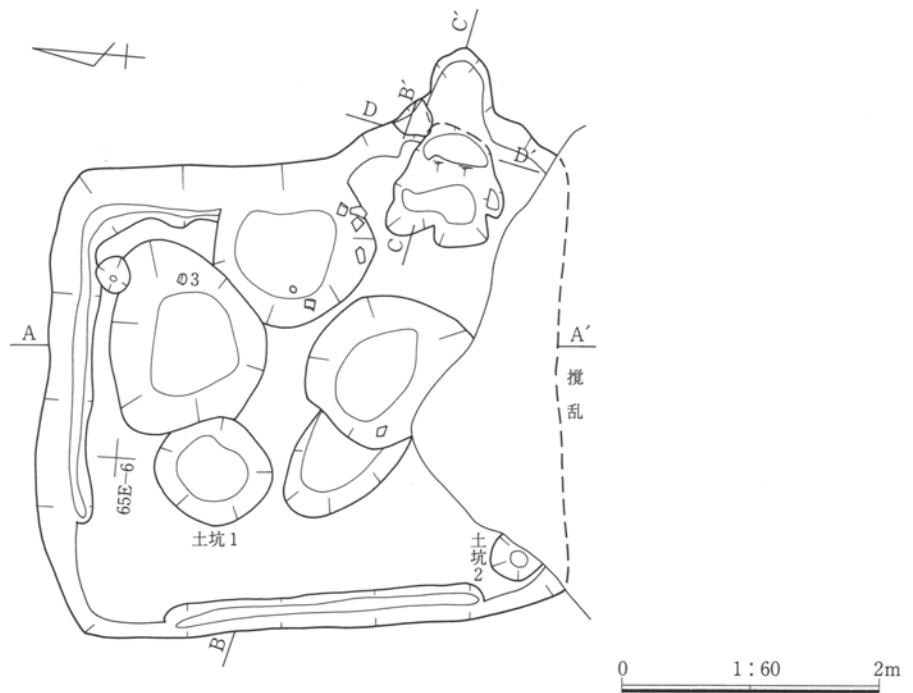
宮下C区 10号住居 土坑1

1. 黒色土 黒色土主体で多量のロームブロックと少量の焼土を含む。

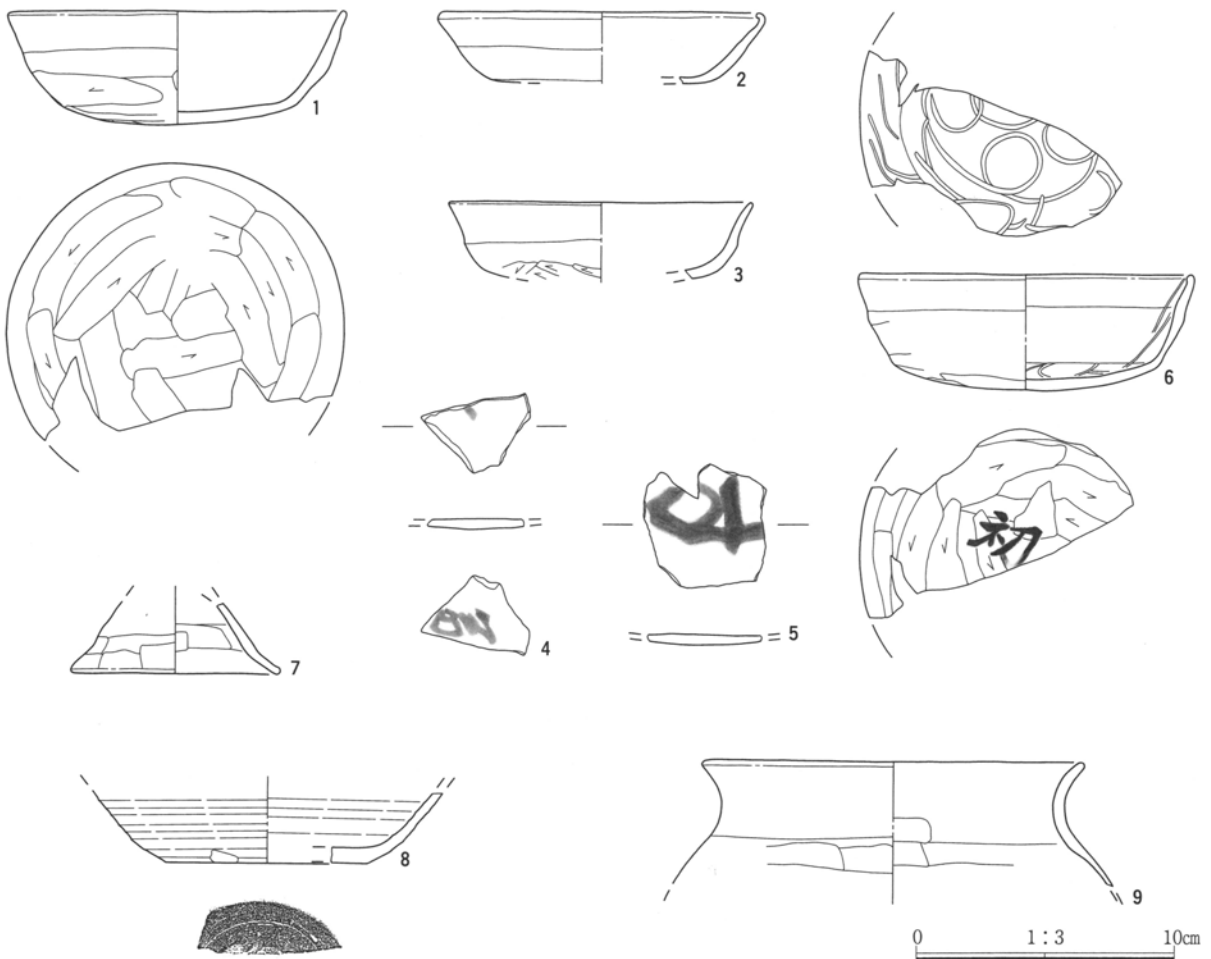
宮下C区 10号住居 土坑2

1. 灰黒色土 ローム粒を少量含む。
2. 黒色土 ローム粒を少量含む。
3. 暗灰黒色土 黒色土主体でロームを多く含む。

第289図 C区10号住居(1)



第290図 C区10号住居(2)



第291図 C区10号住居出土遺物

C区 20号住居

(第292~297図、PL63・131~133)

位置 65D・E-1・2

重複 北東部分で19号住居と重複し、本遺構が19号住居を掘り込んでいた。1号溝に先出、3号・4号土坑とも重複する。

形状 東西を長軸とする隅丸長方形を呈する。規模は長軸3.53m、短軸3.06mである。

面積 9.00m² 方位 N-97°-E

床面 遺構確認面から31cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 床面直上層は、多くの炭と少量の焼土、軽石を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。燃烧部を住居内から一部地山を掘り込み壁外に置いている。小さな段差をなして煙道部へ移行するが、基部を除いて削平されていた。壁内に延びる袖部は礫を補強材に粘土を貼って構築されていた。全長85cm、燃烧部幅32cm、焚口部幅43cmである。

周溝・柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

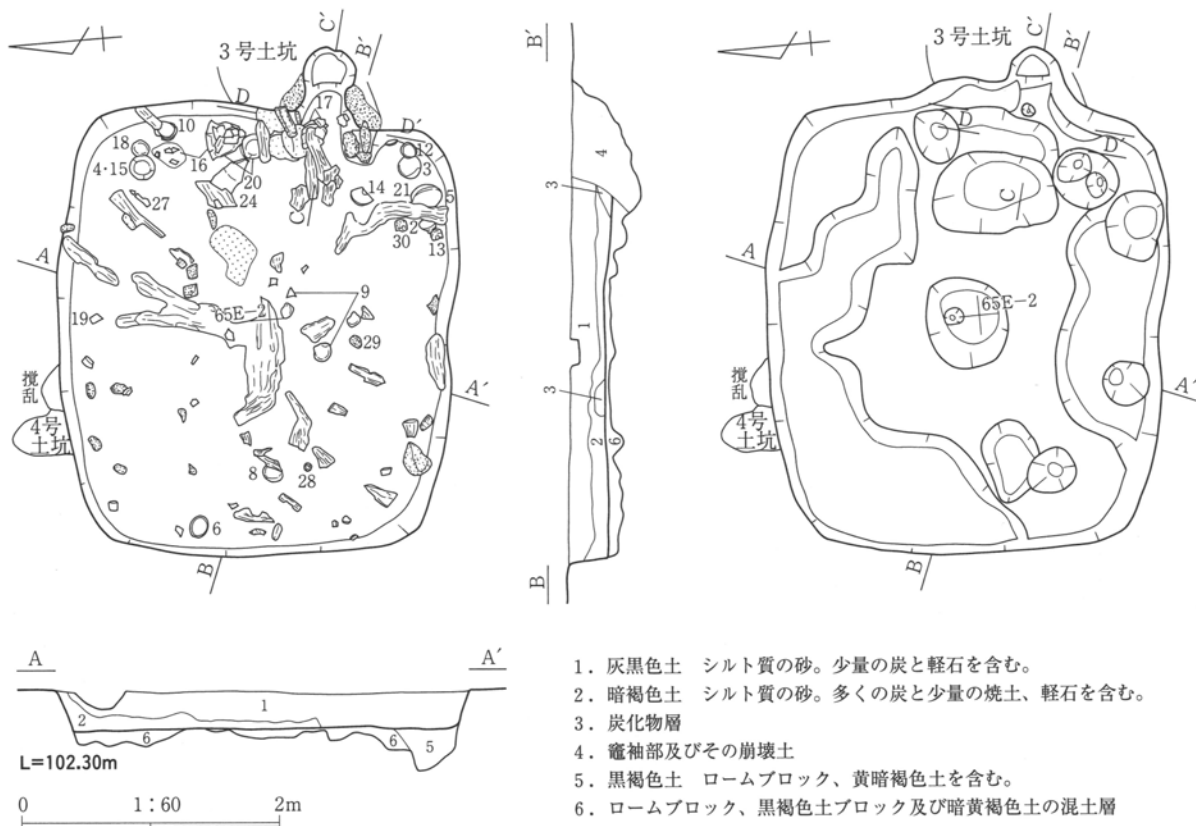
床下 床面下を精査したところ竈前をはじめ全体にわたり凹凸に富んだ掘り方基底面を検出した。南東隅には直径50cmのピットが2本確認できた。同様のピットは南壁際、南西部分にも1本ずつ検出された。

炭化材 埋没土中から炭化材が多数検出された。棒状を呈し、住居の掘り方の中央に向かって放射状に散在するものが多くみられる。これらは上屋の建築部材の一部が火災により落下したものと考えられる。

遺物 焼失家屋ということから床面直上あるいは間近からの完形・半完形の出土土器が多数あったが、概括的には床面中央よりもやや壁際に寄った位置が多く、器種としては土師器杯がその大半である。

台付甕(17)は竈燃烧部内のやや左袖部に寄った位置から、正立した状態で出土した。支脚として据えられていた可能性が高い。

竈焚口部の左側、住居の東側から土師器甕(20)、杯(1・7)、須恵器甕(24)の大型破片が出土した。こ



第292図 C区20号住居(1)

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

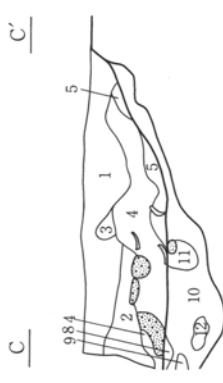
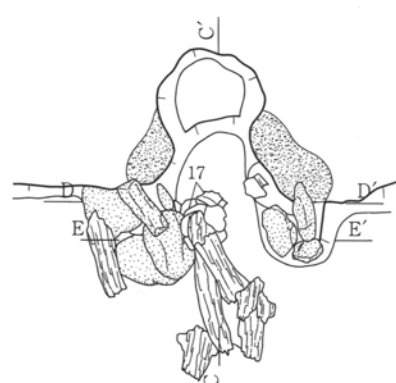
て杯(10)を内側に入れる状態で出土、その北側50cmの位置でも内側に杯(4)を入れた状態で鉢(15)が出土、その東側に接した位置に小型甕(18)が置かれていた。竈の右側、南東隅から南側の壁際からまとまって土器が出土している。南東隅では杯(3)とこれに接して杯(12)が出土。これらの西側、炭化材の下位から甕(21)の下半部、杯(2・5)が見つかった。竈の反対側、北西隅の壁際からは杯(6)が、西側部分からは杯(8)が検出された。

北東部分では床面から7cm離れて鉄製鎌(27)が完

形の状態で出土した。他に埋没土中からも鉄製鎌(26)の基部破片が出土している。石製紡錘車(28)は杯(8)の南側から出土した。

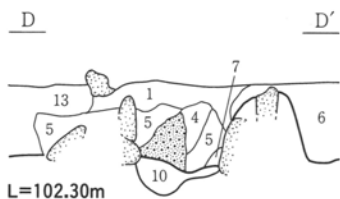
掲載した資料の他に土師器破片430点、須恵器破片5点、軟質陶器破片1点、弥生土器破片1点、縄文土器破片1点が出土した。(観P60~62)

所見 奈良時代の住居と考えられる。床面直上に炭化物層が出土していることから、本遺構が焼失住居跡と考えられる。



宮下C区 20号住居 竈

1. 灰褐色土 軽石を少量含む。
2. 暗茶褐色土 軽石を少量含む。
3. 暗茶色土 焼土粒を少量含む。
4. 茶黒色土 炭化物1点と少量の炭、焼土粒を含む。
5. 灰褐色土 焼土と灰、粘土の混土。粘土は焼土化。
6. 灰褐色土 焼土粒を多く含む。
7. 暗灰色土 焼土、粘土をわずかに含む。
8. 黒色土 炭化物を少量含む。
9. 黄黒色土 黄色土主体で焼土粒を少量含む。
10. 黒褐色土 黒色土主体で全体に焼土を含む。
11. 灰色土 粘土ブロックを含む。天井部または壁の崩落土か。
12. 褐色土 焼土粒・ブロックを特に多く含む。
13. 灰黒色土 軽石を少量含む。3号土坑埋没土。

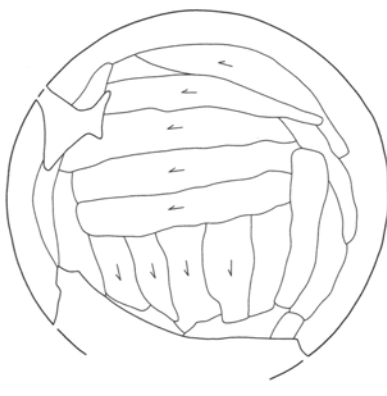
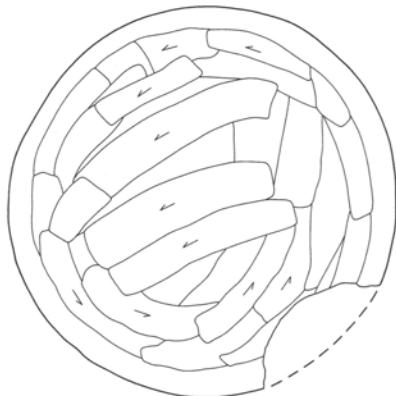
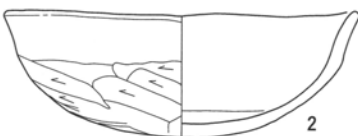
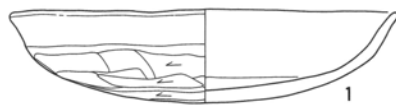


L=102.30m



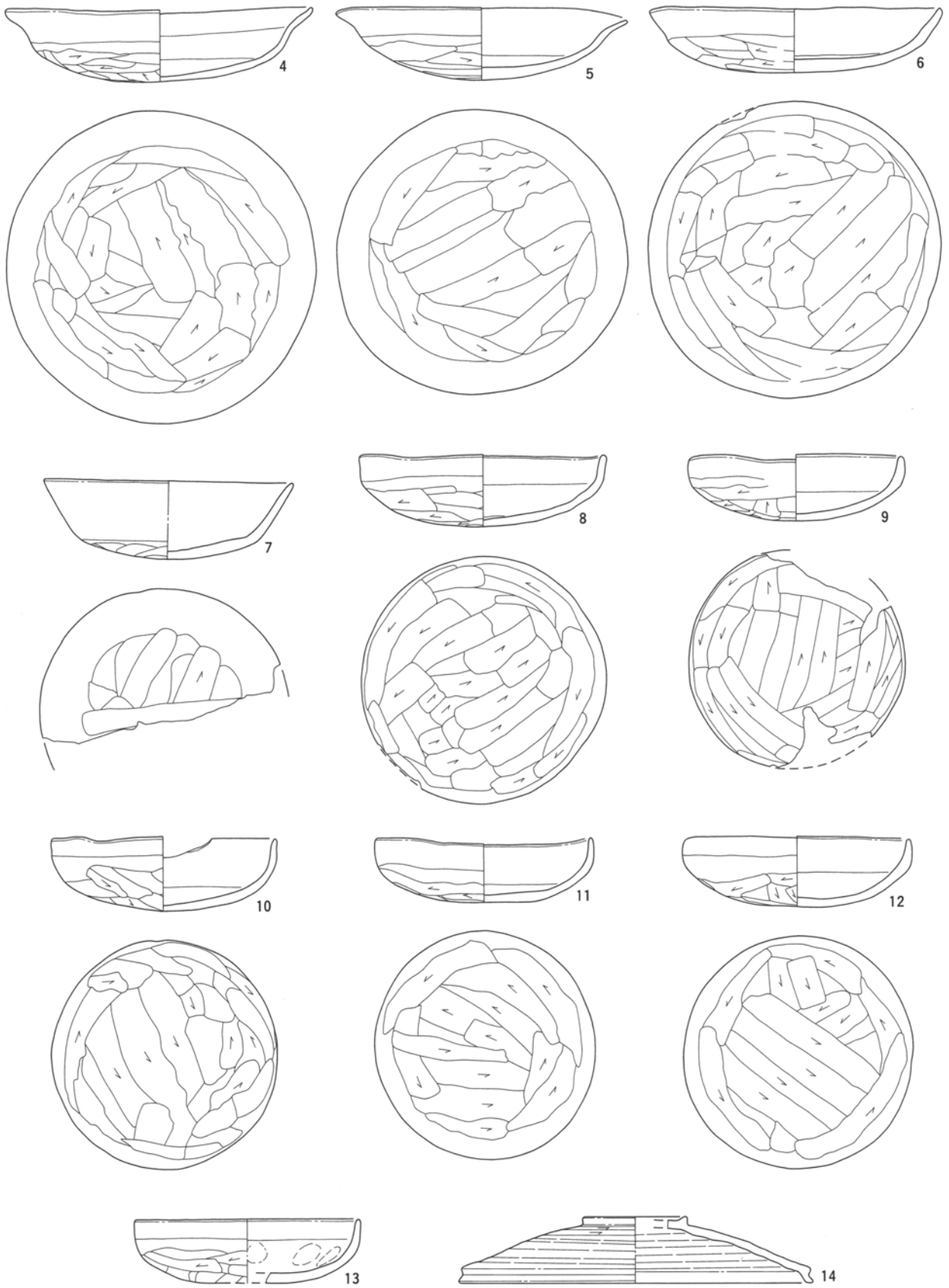
0 1:30 1m

第293図 C区20号住居(2)



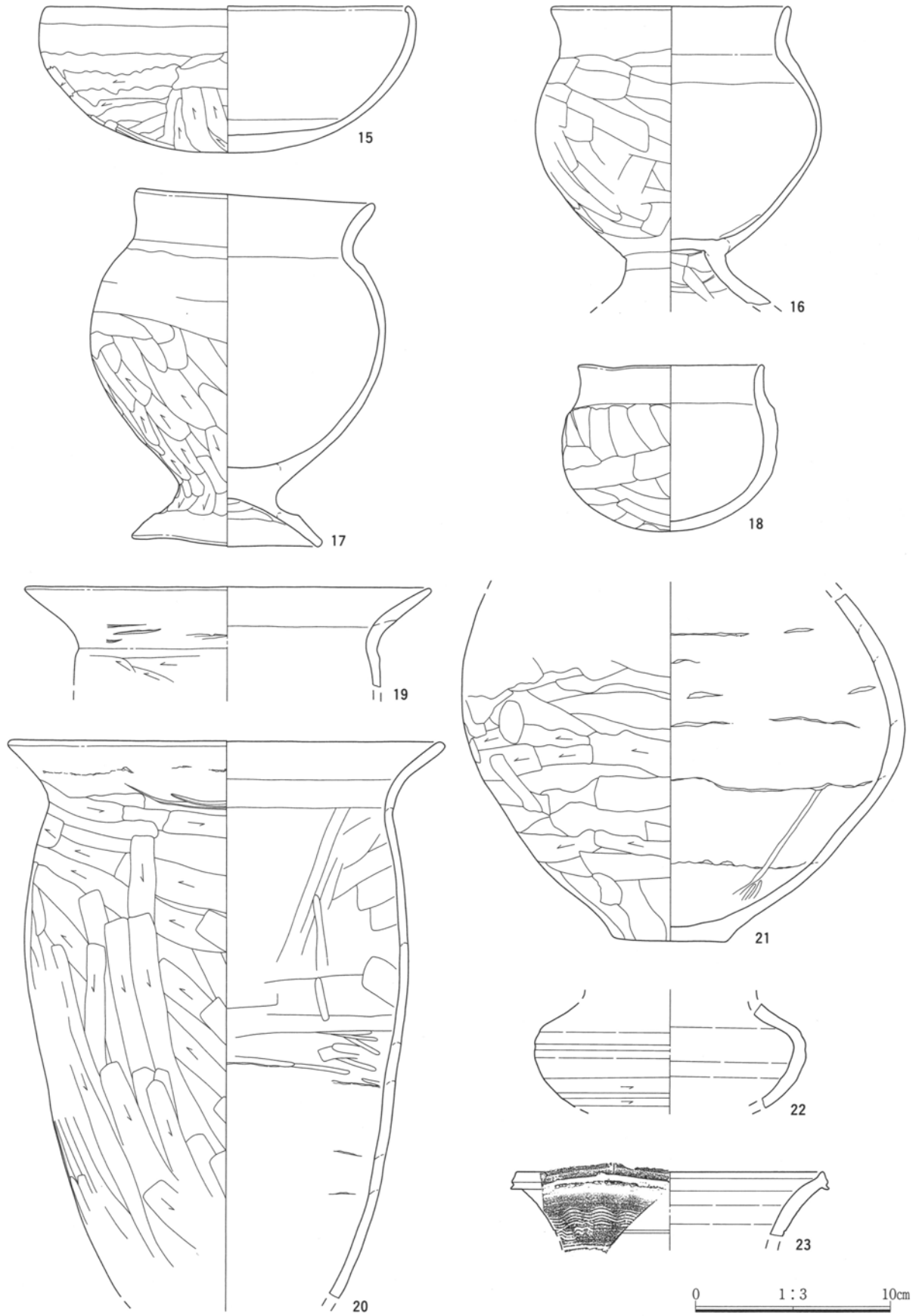
第294図 C区20号住居出土遺物(1)

0 1:3 10cm

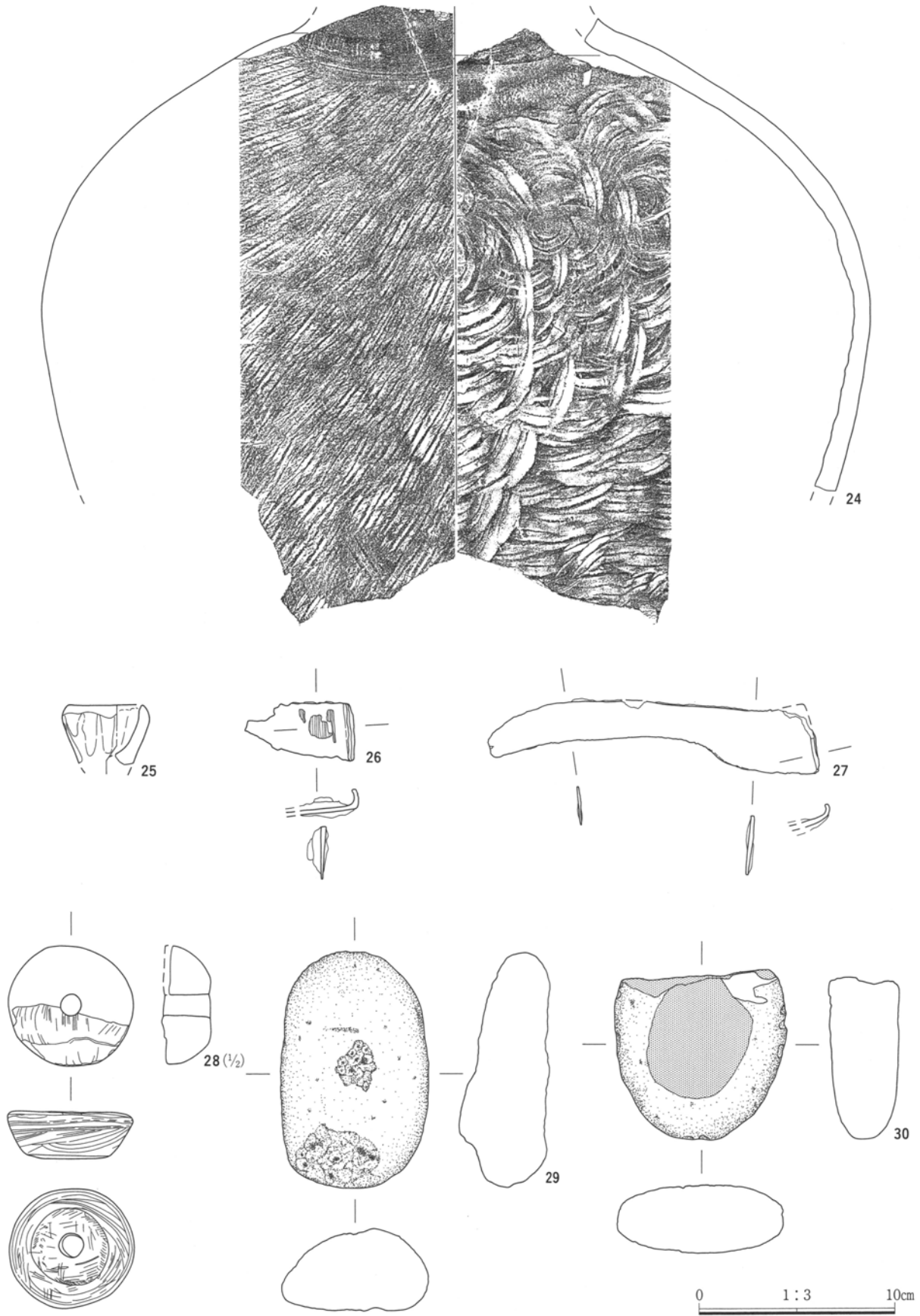


第295図 C区20号住居出土遺物(2)

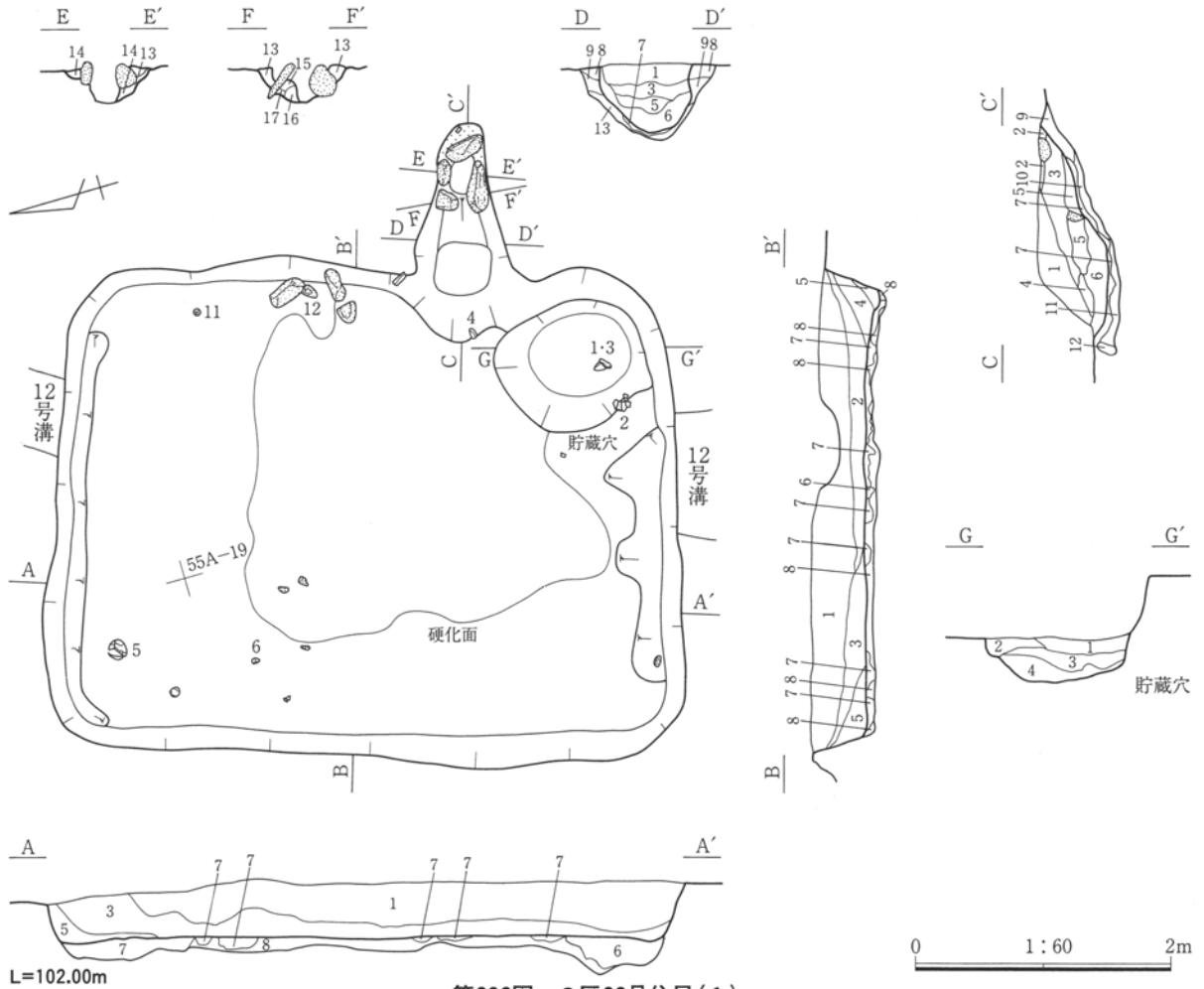
0 1:3 10cm



第296図 C区20号住居出土遺物(3)



第297図 C区20号住居出土遺物(4)



第298図 C区28号住居(1)

C区 28号住居 (第298~301図、PL64・133)

位置 54T-18・19、55T-18・19

重複 南東側で29号住居と、南・北側で12号溝と重複する。本遺構が12号溝により掘り込まれ、29号住居を掘り込んでいた。

形状 南北を長軸とする隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.93m、短軸3.86mである。

面積 15.94m² **方位** N-108°-E

床面 遺構確認面から44cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で、竈手前部分から床面中央部分にかけて硬化していた。

埋没土 上層はAs-Cを少量含む黒褐色土で、床面直上層はロームブロックを少量含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁やや南寄りに造られていた。燃烧部の大半は地山を掘り込み壁外に設けられており、奥壁は

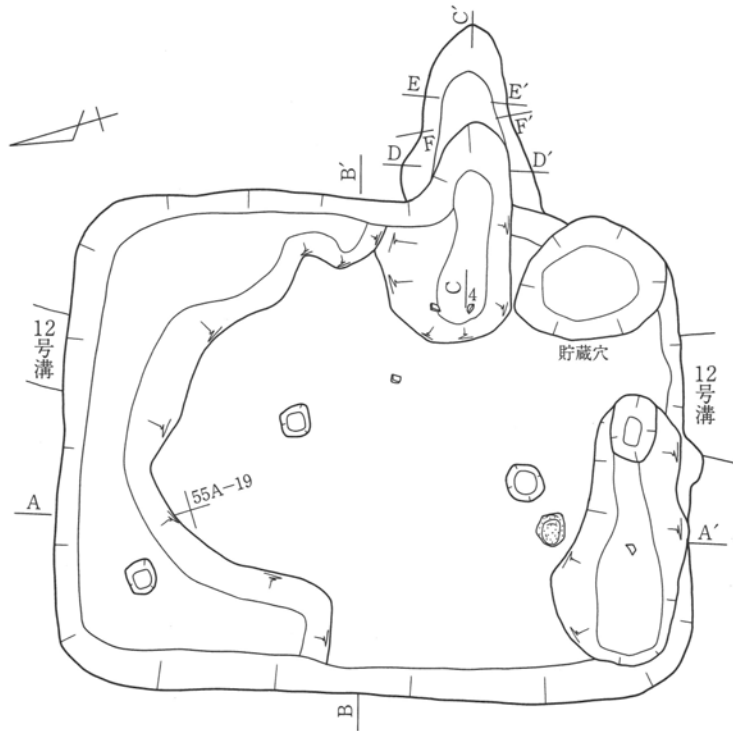
斜めに立ち上がり煙道部へと移行していた。壁内には造り付けの袖部がわずかに突出していたものと考えられる。燃烧部の幅は37cmである。煙道部から構築に使用した石4点が出土した。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は長径120cm短径102cmで床面からの深さは41cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

遺物 形状を把握するにいたる資料の出土は少なかった。杯(2)は貯蔵穴西側上縁から、杯(3)は貯蔵穴埋没土中からの出土であるがいずれも破片である。また、埋没土中から鉄製品(9・10)が出土しているが、その帰属について不明瞭である。石製紡錘車(11)は北東部分からの出土である。(観P62・63)

所見 奈良時代の住居と考えられる。



- | | |
|---------------------------------|--|
| 1. 黒褐色土 As-Cが少量混入。 | 8. 暗褐色土 黒色土とロームの混土。As-Cを含み、上面が焼土化。 |
| 2. 黒褐色土 黒色味が強い。29号住居埋没土にやや近い。 | 9. 黒褐色土 As-Cを含む。ローム粒を混入。 |
| 3. 黒褐色土 ロームブロックが少量混入。 | 10. 黒褐色土 As-Cを含む。ローム粒・ブロックを含む。 |
| 4. 黒褐色土 ロームブロックを含む。29号住居埋没土に近い。 | 11. 暗褐色土 わずかなAs-Cとローム粒・ブロックを含む。上面に焼土を含む。 |
| 5. 黒褐色土 ロームブロックを含む。 | 12. 暗灰色土 多くの灰色粘土とロームとわずかな焼土粒を含む。 |
| 6. 黒褐色土 As-C、ローム粒・ブロックを含む。 | 13. 暗褐色土 ロームと黒色土の混土。焼土粒を少量含む。 |
| 7. 暗褐色土 ローム、黒褐色土が斑に混入。 | 14. 黒褐色土 15層と20層の混土。 |
| 8. 褐色土 濁った地山ローム。 | 15. 黒褐色土 焼土粒、ローム粒が少量混入。 |
| | 16. 黒褐色土 ロームブロックを含む。 |
| | 17. 黒褐色土 29号住居埋没土。 |

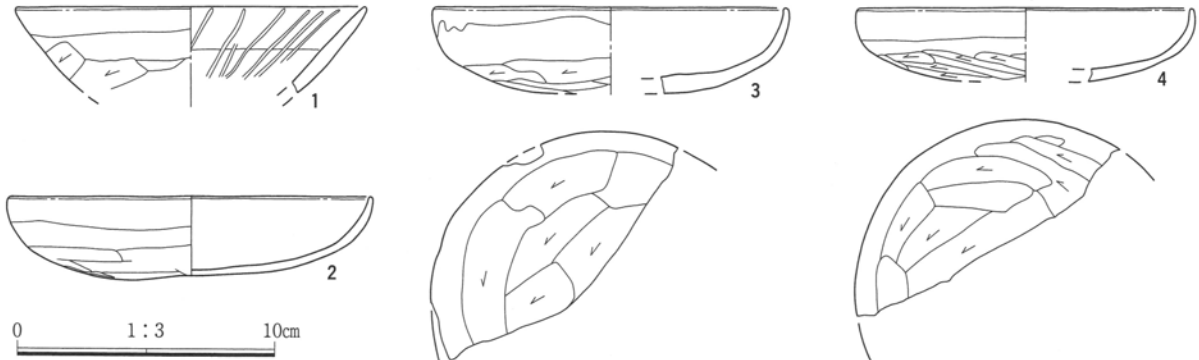
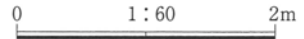
宮下C区 28号住居 竈

1. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
2. 赤褐色土 焼土粒を多く含む。
3. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
4. 黒褐色土 3層に近いが、灰を多く含む。
5. 黒褐色土 多くの焼土粒・ブロックを含む。
6. 黒褐色土 少量の焼土粒とローム粒を含む。
7. 暗褐色土 少量の焼土粒と微量のローム粒・ブロックを含む。

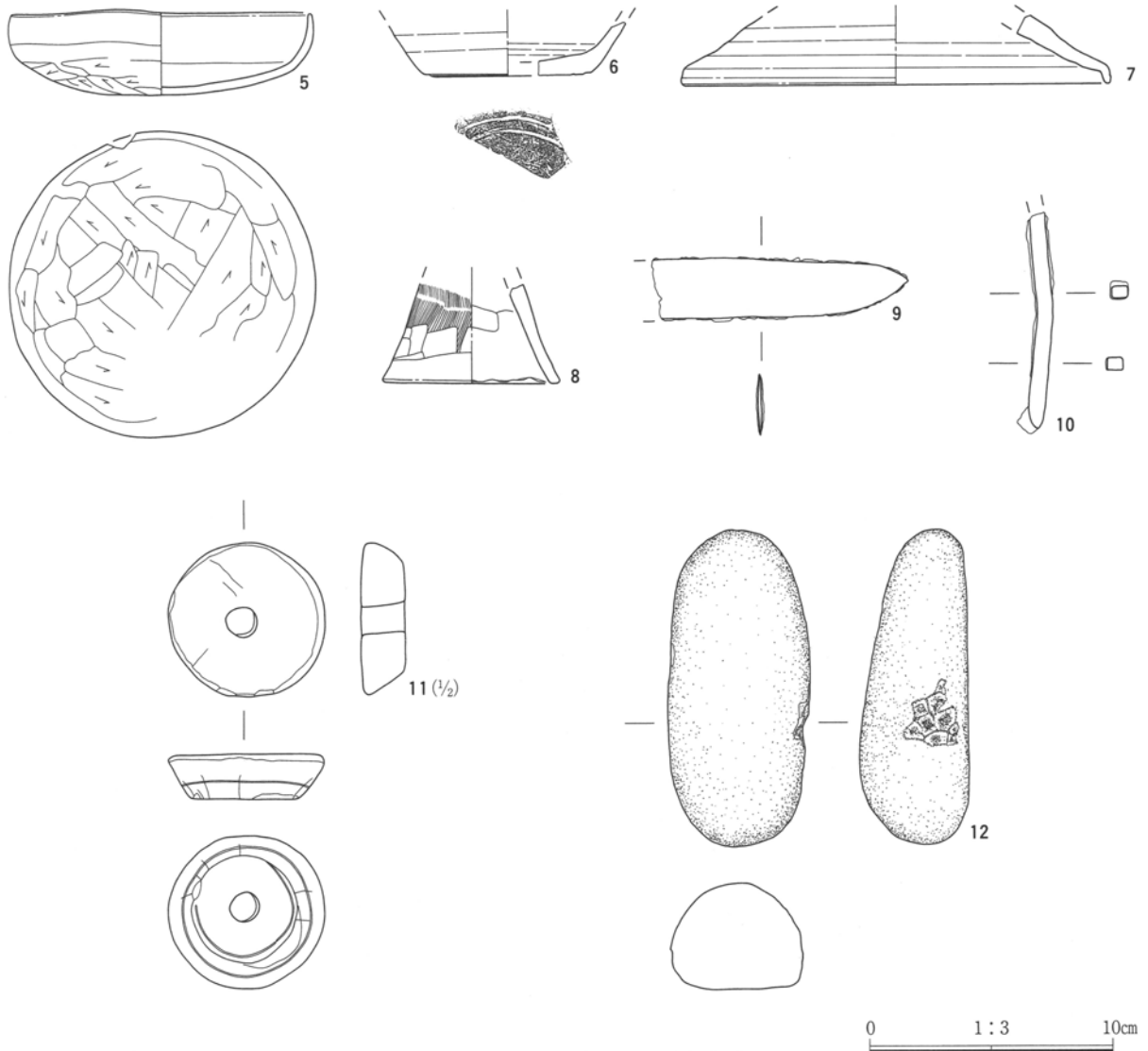
宮下C区 28号住居 貯蔵穴

1. 暗灰褐色土 灰を含む。少量の焼土粒、ローム粒もみられる。
2. 黒褐色土 ロームブロックを含む。焼土粒も少量含む。
3. 黒色土 ロームブロックを少量含む。
4. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。

第299図 C区28号住居(2)



第300図 C区28号住居出土遺物(1)



第301図 C区28号住居出土遺物(2)

C区 31号住居 (第302~304図、PL64・133)

位置 54T・55A-15・16

重複 現代の井戸と後世の溝と重複し、本遺構が両遺構により掘り込まれていた。

形状 方形を呈すると考えられるが、全体形状は不明である。規模は東西4.13m、南北の残存長3.80mである。

面積 計測不能 **方位** N-73°-E

床面 遺構確認面から36cm程掘り込んで床面となる。他遺構と重複する部分があるが、床面は中央部が硬化していた。

埋没土 ロームブロックを含む暗褐色土で埋まっていた。

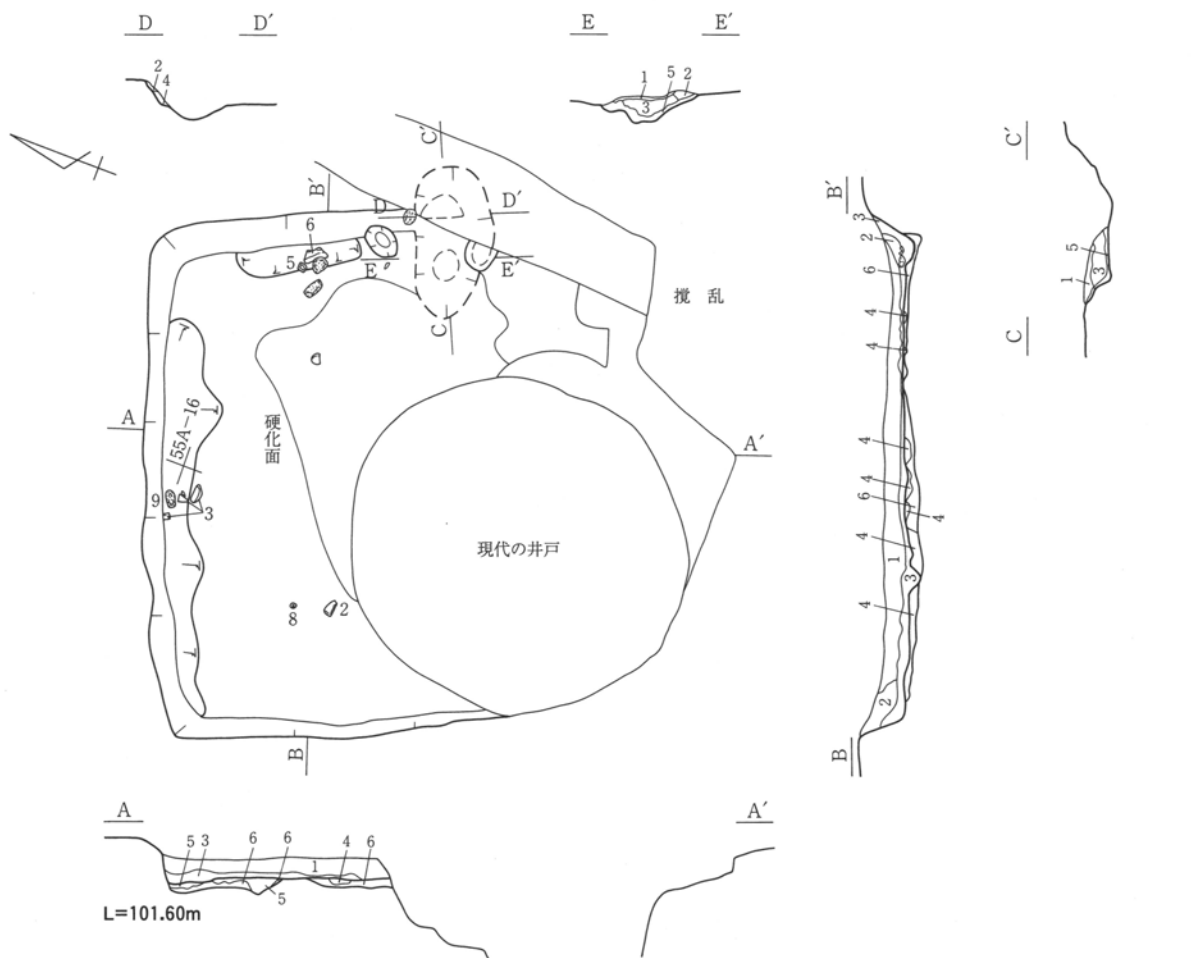
竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。竈の主要部分が他遺構等により壊されていたが、粘土塊が散在しており、住居内に袖部が延びていた可能性も考えられる。燃焼部から焚口部前には深い掘り方がみられた。

周溝・柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

遺物 土師器杯・甕が出土したがいずれも破片で床面直上からの出土もなかった。石製紡錘車(8)は北西隅の床面直上からの出土であった。

掲載した資料の他に土師器破片212点、須恵器破片8点、軟質陶器破片3点、陶磁器破片1点が出土している。(観P63)

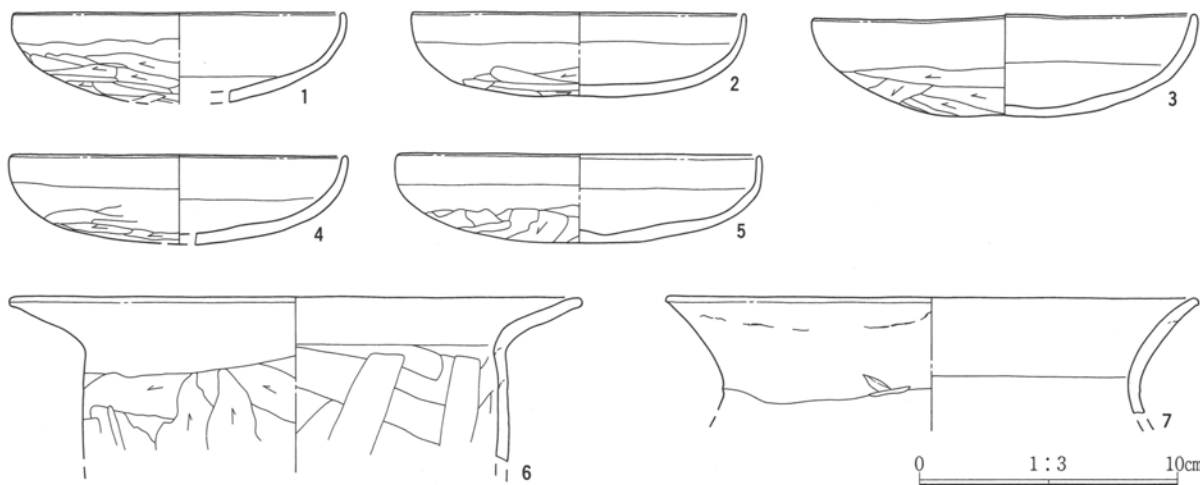
所見 奈良時代の住居と考えられる。



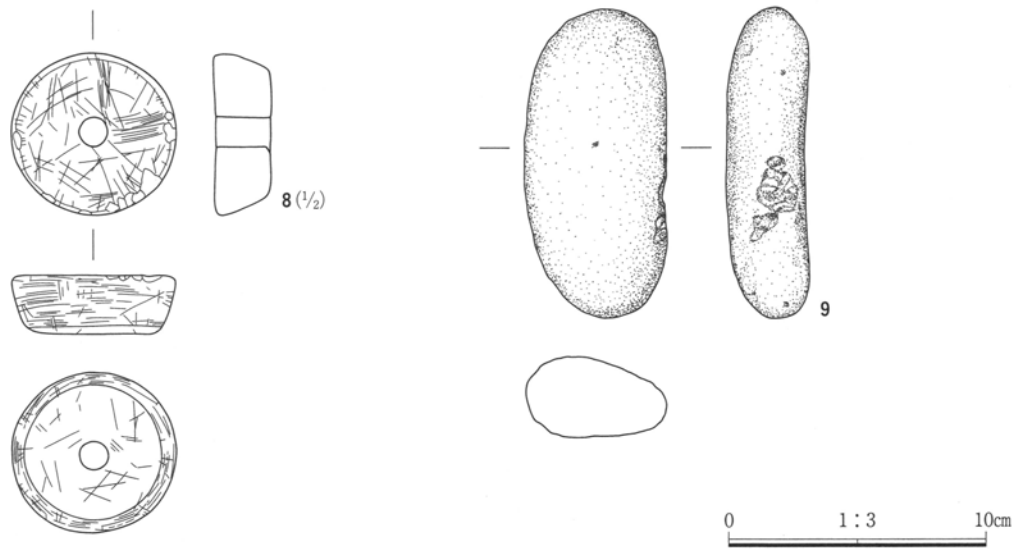
- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 黒褐色土 ロームブロックをわずかに含む。 2. 黒褐色土 1層より色調明るい。 3. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。 4. 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。 5. 暗褐色土 ロームブロックを斑に含む。 6. 褐色土 少し濁ったローム。 | <p>宮下C区 31号住居 竈</p> <ul style="list-style-type: none"> 1. 黒灰色土 2層と黒色土の混土。 2. 暗灰色土 暗灰色粘質土主体。ローム、暗褐色土を混入。 3. 暗褐色土 ローム粒を混入。焼土粒を少量含む。 4. 暗褐色土 3層に比べ焼土はなし。 5. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。 |
|--|--|

0 1:60 2m

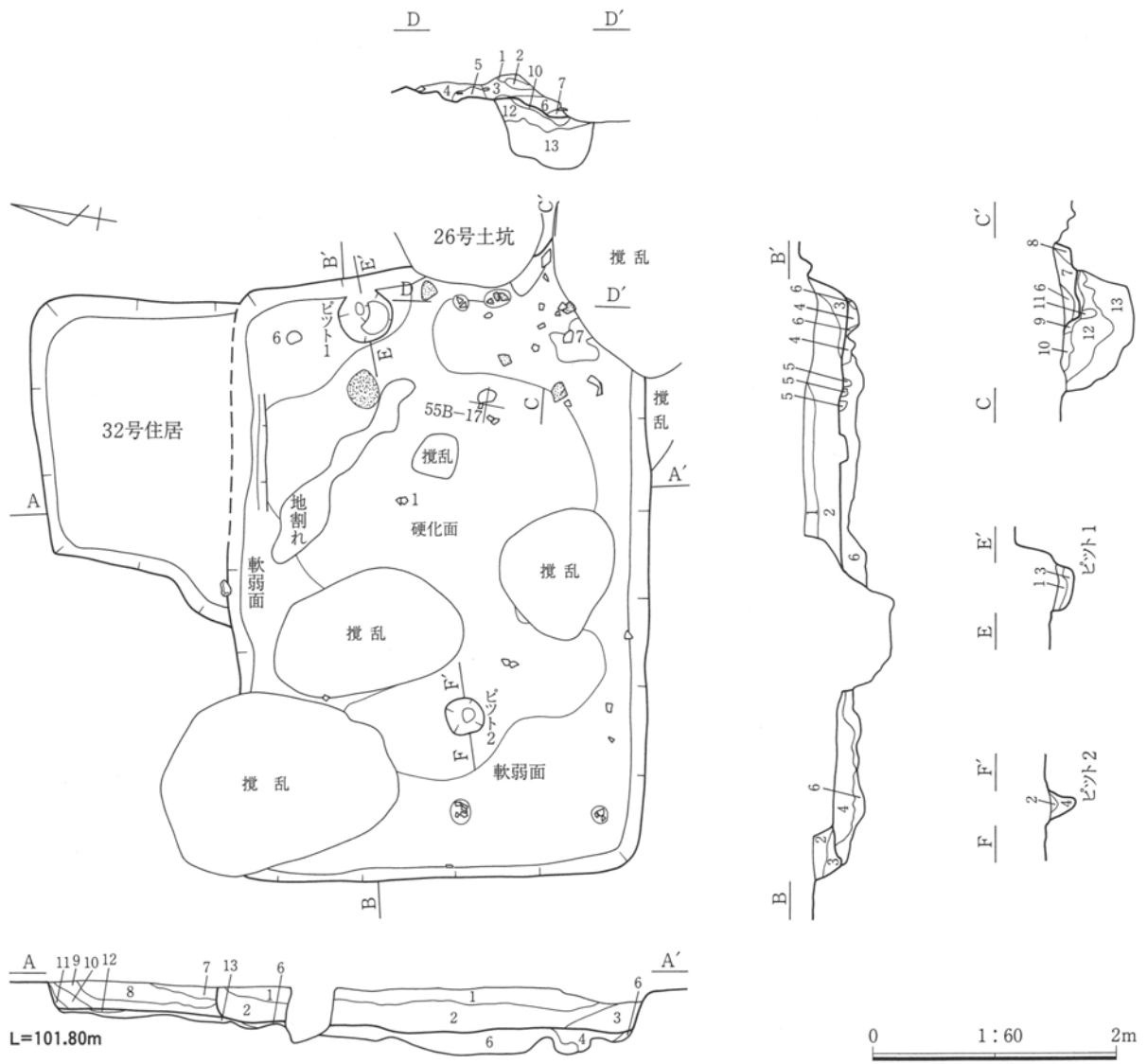
第302図 C区31号住居



第303図 C区31号住居出土遺物(1)



第304図 C区31号住居出土遺物(2)



第305図 C区32・33号住居(1)

C区 33号住居 (第305~307図、PL65・134)

位置 55A・B-16・17

重複 本遺構が32号住居を掘り込み、12号溝により掘り込まれていた。26号土坑とも重複する。

形状 東西を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸5.00m、短軸3.55mである。

面積 (15.45)m² **方位** N-80°-E

床面 遺構確認面から36cm程掘り込んで床面となる。攪乱を多数受け遺存状況は不良であった。床面はほとんど平坦で、中央部分で床面の大半が硬化していた。

埋没土 上層はAs-Cを含む黒褐色土で、床面直上層はAs-C、ロームブロックを少量含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁の南側に造られていた。全長84cmである。左袖部の一部が残存していた。構築材に黒色粘土が使用されていた。床面北東部で同様な粘土を確認し

た。

周溝・貯蔵穴 掘られていなかった。

ピット 2本掘られていた。ピット1は長径45cm短径40cm、深さ23cm。ピット2は直径30cm、深さ27cmである。

床下 床面調査後、床下を調査した際、床下土坑1基を南東部分で確認した。規模は長径105cm短径98cmで床面からの深さは52cm程である。

遺物 竈焚口部前をはじめ床面の各所から小破片が出土した。床面直上から出土した資料は杯(1)、須恵器杯(6)があるが両者とも破片である。また埋没土中から鉄刀(8)が出土している。

掲載した資料の他に土師器破片601点、須恵器破片18点、軟質陶器破片6点、陶磁器破片2点、弥生土器破片1点、縄文土器破片1点が出土している。

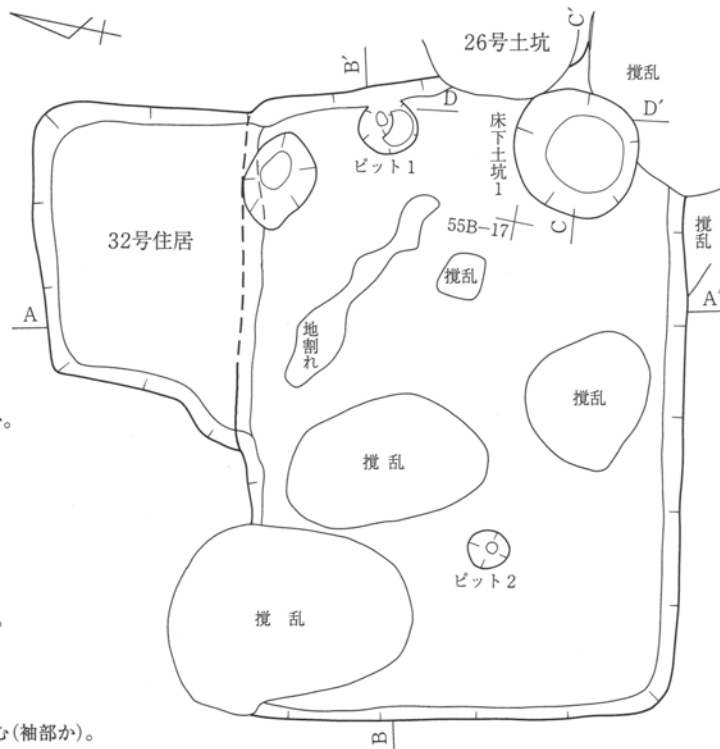
(観P64)

所見 奈良時代の住居と考えられる。

1. 黒褐色土 As-Cを含む。
 2. 黒褐色土 微量のAs-Cと少量のロームブロックを含む。
 3. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
 4. 暗褐色土 ロームブロックを斑に、As-Cを少量含む。
 5. 黒灰色粘質土 粘土。ローム小ブロックが少量混入。
 6. 褐色土 黒褐色土で少し濁ったローム。
 7. 黒褐色土 As-Cと少量のロームブロックを含む。
 8. 黒褐色土 As-Cを含む。
 9. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
 10. 黒褐色土 As-Cをわずかに含む。
 11. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
 12. 暗褐色土 ロームブロックを斑に、As-Cを少量含む。
 13. 褐色土 黒褐色土で少し濁ったローム。
- * 1~6 33号住居埋没土。7~13 32号住居埋没土。

宮下C区 33号住居 竈

1. 暗褐色土 焼土粒、ローム小ブロックを少量含む。
2. 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
3. 暗褐色土 焼土粒、ローム小ブロック、炭片を含む。
4. 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
5. 黒褐色土 焼土粒、ローム小ブロックを少量含む。
6. 黒色土 焼土粒、ローム粒をわずかに含む。
7. 暗褐色土 焼土ブロック、ロームブロックを少量含む(袖部)。
8. 暗褐色土 7層よりロームの量が多い。
9. 黒褐色土 灰混入か(9~13層、床下土坑埋没土)。
10. 黒褐色土 少量のAs-Cとロームブロックを含む。
11. 暗褐色土 ロームブロックが微量に混入。
12. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
13. 褐色土 ロームブロック、暗灰色粘土ブロックを含む。



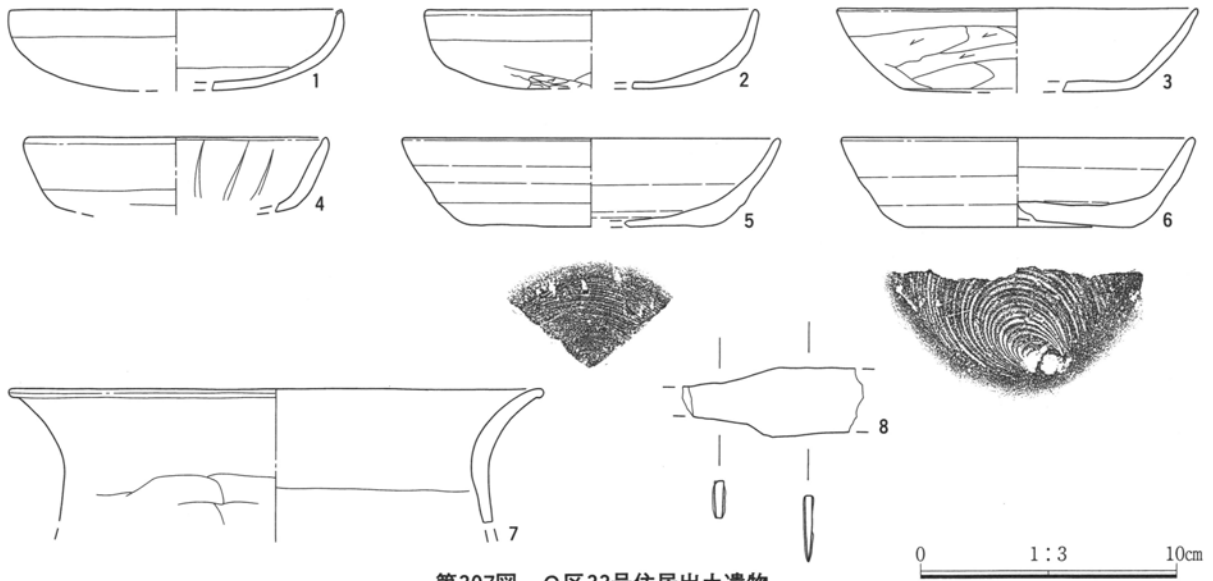
宮下C区 33号住居 ピット1・2

1. 黒褐色土 ローム粒が少量混入。
2. 黒褐色土 ロームブロックが少量混入。
3. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
4. 暗褐色土 ロームを斑に含む。

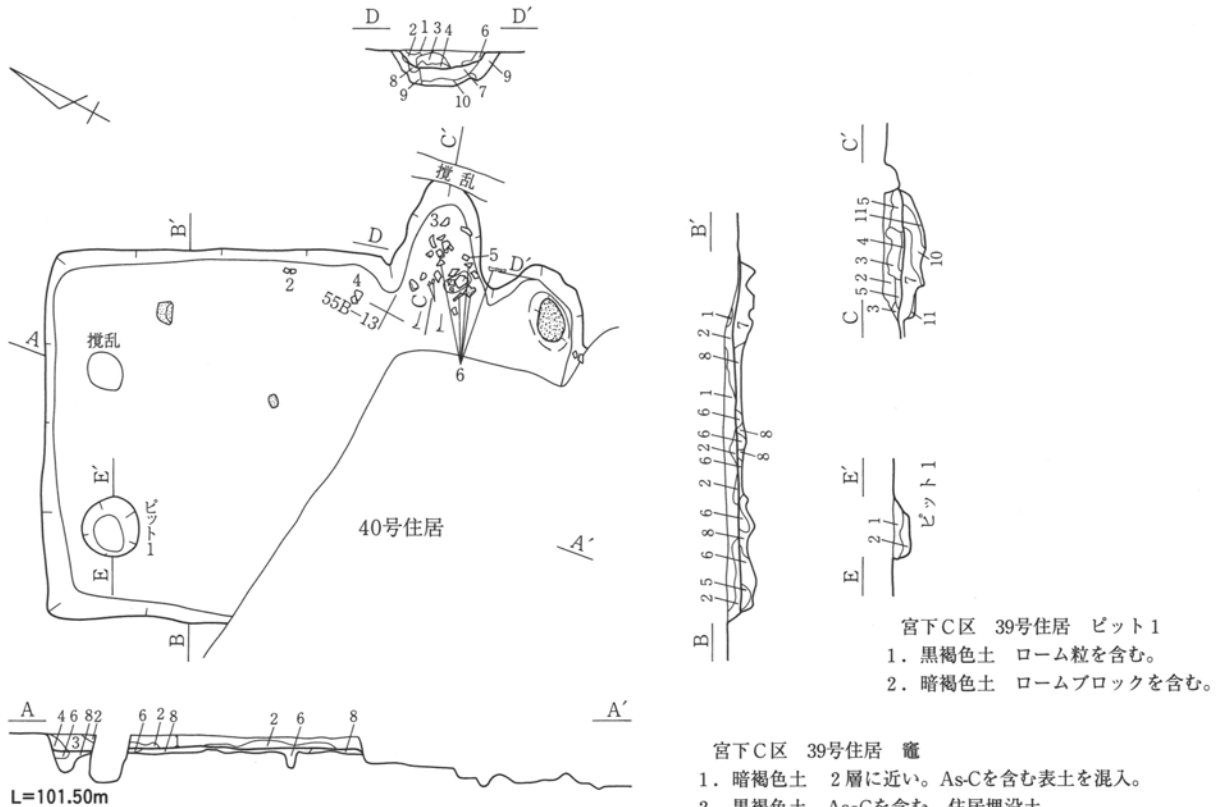
第306図 C区32・33号住居(2)

0 1:60 2m

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



第307図 C区33号住居出土遺物



宮下C区 39号住居 ピット1
 1. 黒褐色土 ローム粒を含む。
 2. 暗褐色土 ロームブロックを含む。

- L=101.50m
1. 黒褐色土 As-Cを含む。
 2. 黒褐色土 少量のAs-Cとローム粒・ブロックを含む。
 3. 黒褐色土 ローム粒と微量のロームブロックを含む。
 4. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
 5. 黒褐色土 ローム粒・ブロックを少量含む。
 6. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
 7. 暗褐色土 6層に近い。ロームブロックをやや多く含む。
 8. 黄褐色土 地山ロームと同様。

- 宮下C区 39号住居 竈
1. 暗褐色土 2層に近い。As-Cを含む表土を混入。
 2. 黒褐色土 As-Cを含む。住居埋没土。
 3. 褐色土 ロームに黒褐色土を少量混入。竈構築崩落土。
 4. 暗赤褐色土 焼土粒・ブロック主体。竈内壁崩落土。
 5. 黒褐色土 焼土粒、灰、少量のローム粒を含む。
 6. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。竈構築崩落土。
 7. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒を少量、灰を多く含む。
 8. 暗赤褐色土 焼土ブロック。
 9. 暗褐色土 ロームと黒褐色土の混土。竈構築土。
 10. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックと少量の焼土粒を含む。
 11. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。

第308図 C区39号住居

C区 39号住居

(第308・309図、PL65・74・134)

位置 55A・B-12・13

重複 40号住居と重複し、本遺構が40号住居により掘り込まれていた。

形状 他遺構と重複する部分があるが、南北を長軸とする長方形を呈すると推定される。規模は長軸4.00m、短軸3.00mである。

面積 (10.58)m² 方位 N-62°-E

床面 遺構確認面から10cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。南東隅の床面上から粘土塊を検出したが性格は不明である。

埋没土 少量のAs-Cとローム粒・ブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁南東隅寄りに造られていた。短い袖部が付く形状と考えられる。全長92cm、燃烧部幅50cm、焚口部幅79cmである。燃烧部底面に灰層が堆積していた。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

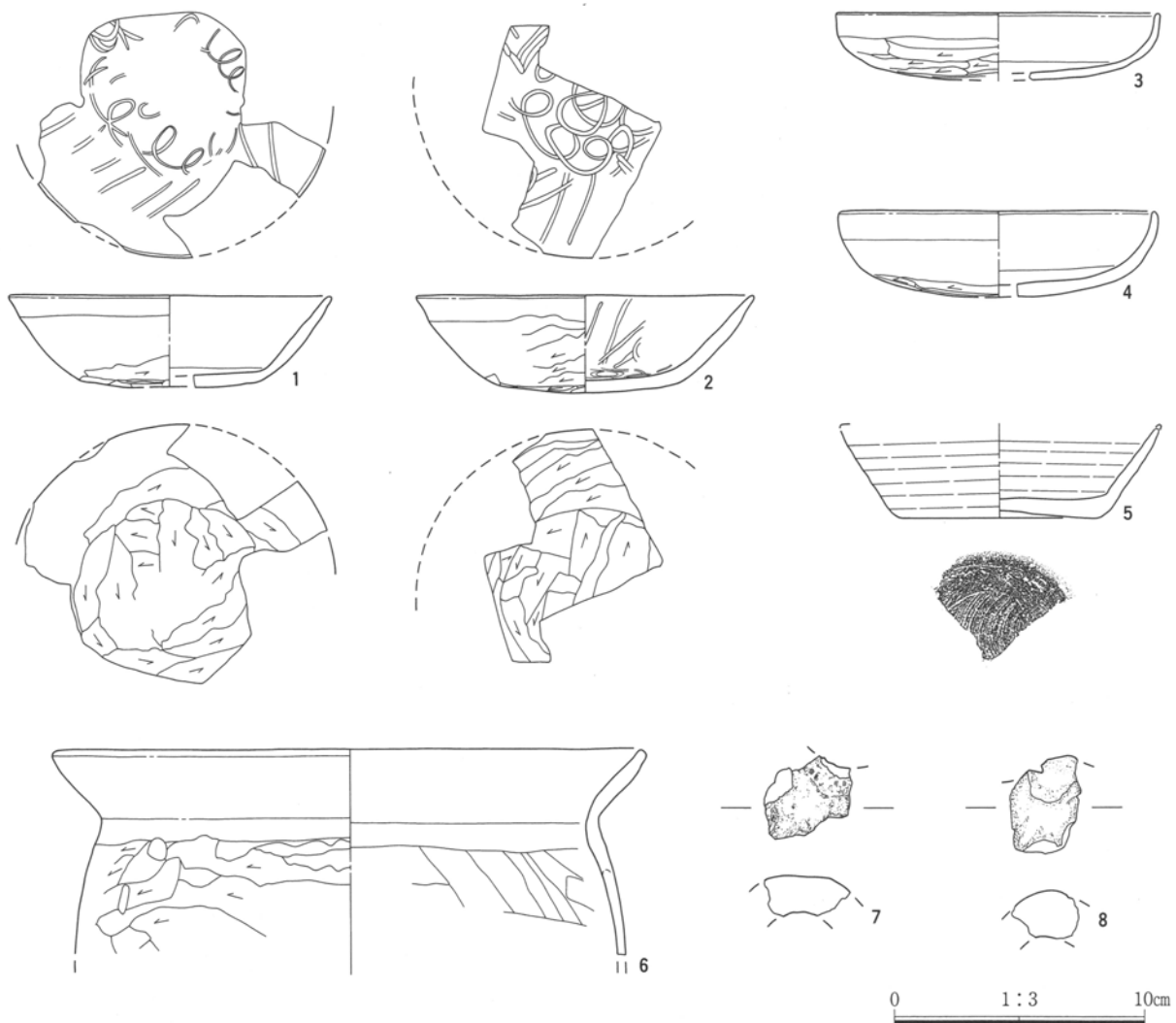
ピット 1本掘られていた。規模は長径47cm短径45cm、床面からの深さ28cmである。

貯蔵穴 確認できなかった。

遺物 竈燃烧部及び周辺から破片が多数出土した。杯(1・3)、須恵器杯(5)、甕(6)、羽口の破片(8)などである。

掲載した資料の他に土師器破片213点、須恵器破片4点、陶磁器破片4点、弥生土器破片2点が出土した。(観P64・65)

所見 奈良時代の住居と考えられる。



第309図 C区39号住居出土遺物

C区 45号住居 (第310・311図、PL66・133)

位置 54P・Q-8・9

重複 後世の溝と重複し、本遺構が溝により掘り込まれていた。後世の攪乱により本遺構の主要部分が壊されていた。

形状 他遺構と重複する部分があるが、南北を長軸とする長方形を呈すると推定される。規模は東西3.03m、南北の残存2.98mである。

面積 計測不能 **方位** N-109°-E

床面 遺構確認面から31cm程掘り込んで床面となる。確認した範囲では床面はほとんど平坦であった。床面中央はその大半が土坑状に掘り込まれていた。埋没土が床面上層と同様であったことから住居放棄後、ロームの採取などの目的で床面が掘り込まれた

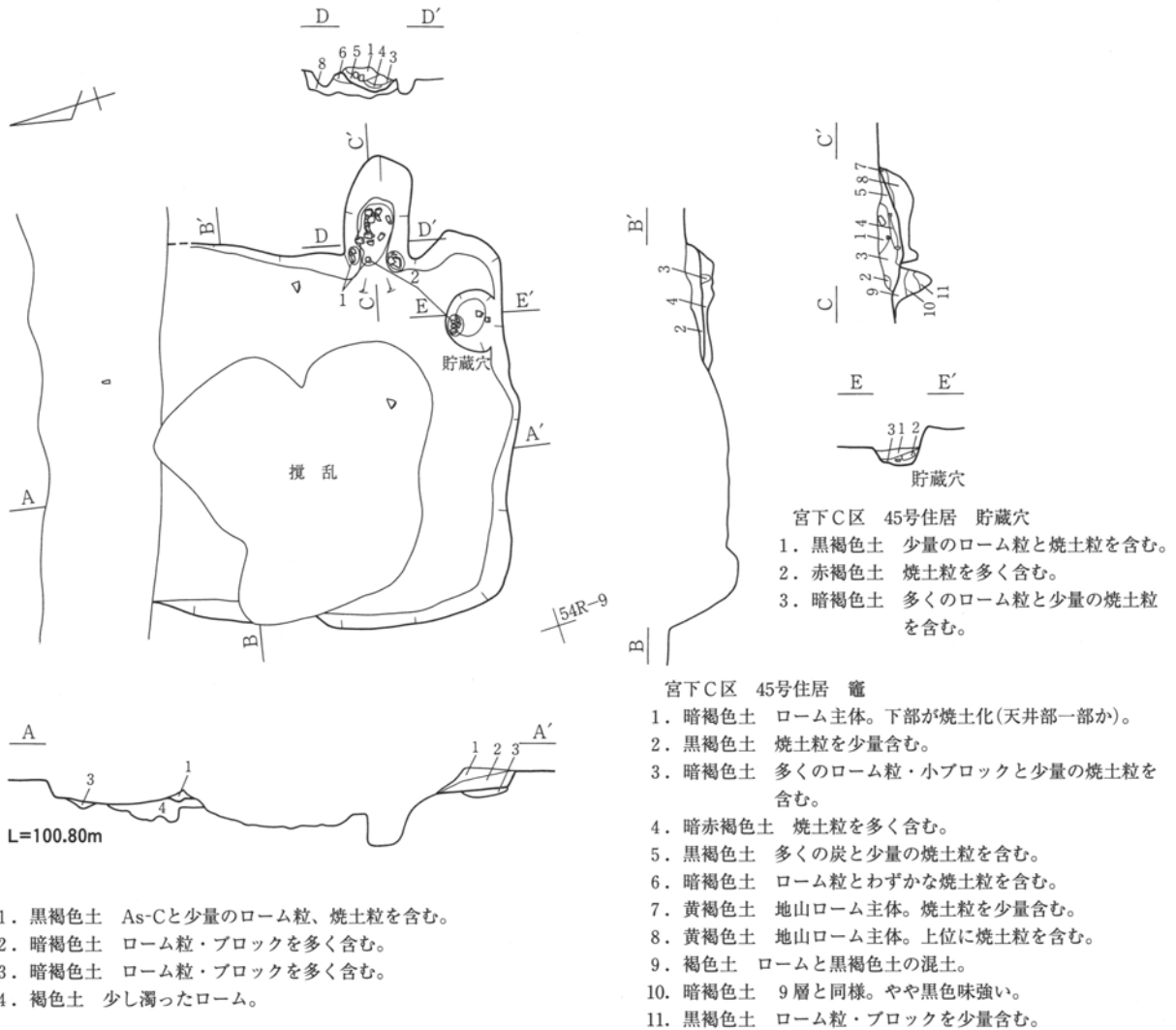
と思われる。住居が埋没する前の攪乱と考えられる。
埋没土 上層はAs-Cと少量の焼土粒を含む黒褐色土で、床面直上層はローム粒・ブロックを多く含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央南寄りに造られていた。煙道部は削平され、壁外に掘り込まれた燃焼部のみが残存していた。全長100cm、燃焼部幅28cm、焚口部幅34cmである。最終使用面直上層には多量の炭と少量の焼土粒が含まれていた。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 南壁際東寄りに掘られていた。規模は長径52cm短径36cm、床面からの深さ11cm程である。上端の形状は不定形を呈する。

遺物 竈燃焼部内から杯(1~3)が出土した。い



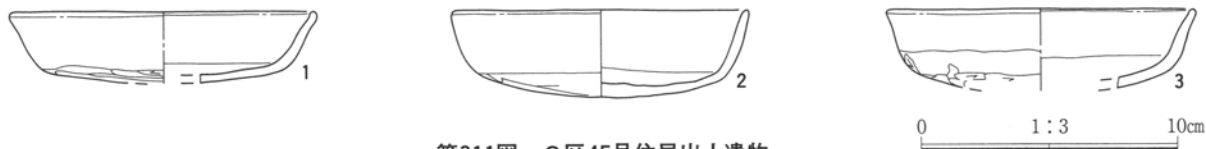
第310図 C区45号住居

0 1:60 2m

ずれも破片である。杯(2)は貯蔵穴内出土破片と接合した。掲載した資料の他に土師器破片113点、須恵器破片23点、軟質陶器破片3点、陶磁器破片3点、

弥生土器破片1点が出土した。(観P65)

所見 奈良時代の住居と考えられる。



第311図 C区45号住居出土遺物

C区 52号住居 (第312~314図、PL66・134)

位置 55C-11・12

重複 なし。後世の攪乱により本遺構が部分的に壊されていた。

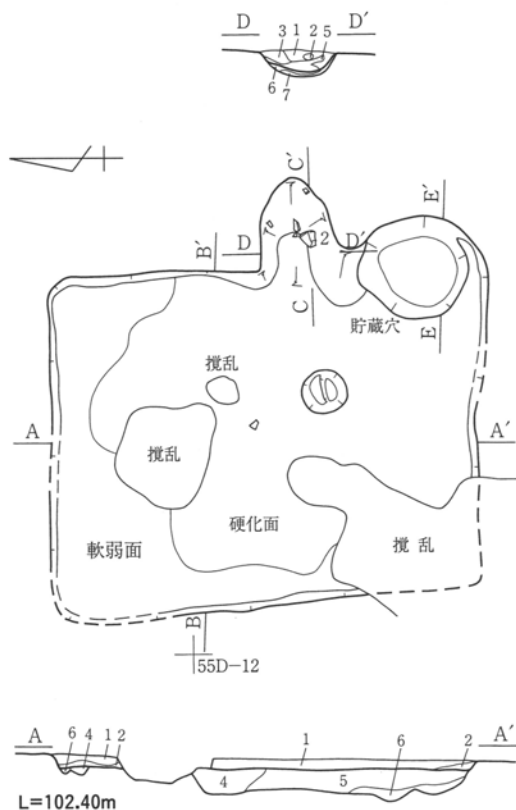
形状 南西隅をはじめ後世の攪乱により壊されている部分があるが、南北を長軸とする長方形を呈する。竈の右側は貯蔵穴の形状に沿って丸く張り出している。規模は長軸3.40m、短軸2.66mである。

面積 (8.56)m² 方位 N-90°-E

床面 遺構確認面から12cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で、中央部分で踏み固められ硬化していた。これに反し、北壁寄りの床面は軟弱であった。

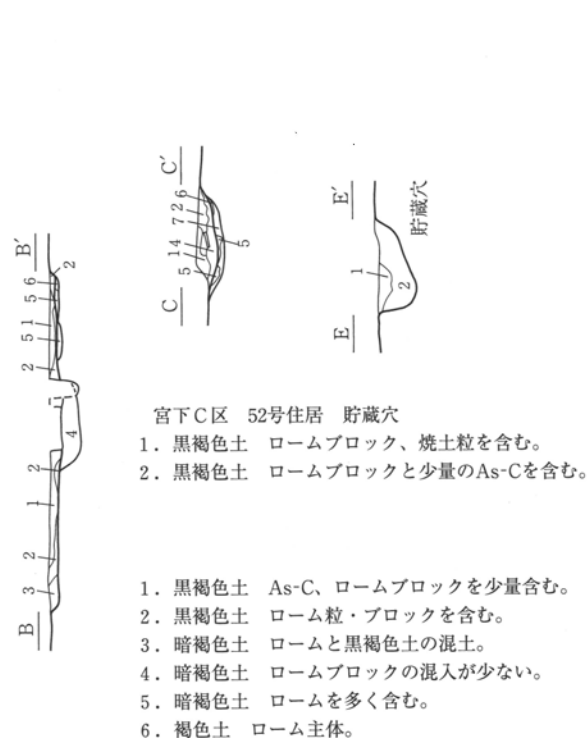
埋没土 床面直上層はAs-Cとロームブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。燃焼部



宮下C区 52号住居 竈

1. 黄褐色土 ローム主体。暗褐色土を少量含む。
2. 暗赤褐色土 多くの焼土粒・ブロックを含む。
3. 褐色土 多くの暗褐色土と焼土粒を含む。
4. 黒褐色土 少量の炭と焼土粒、多くのローム小ブロックを含む。



宮下C区 52号住居 貯蔵穴

1. 黒褐色土 ロームブロック、焼土粒を含む。
2. 黒褐色土 ロームブロックと少量のAs-Cを含む。
3. 黒褐色土 As-C、ロームブロックを少量含む。
4. 黒褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
5. 暗褐色土 ロームと黒褐色土の混土。
6. 暗褐色土 ロームブロックの混入が少ない。
7. 暗褐色土 ロームを多く含む。
8. 褐色土 ローム主体。
9. 黒褐色土 多くの炭と少量のローム小ブロックを含む。
10. 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を含む。灰と考えられる黒色粒子も含む。
11. 褐色土 やや濁ったローム。

第312図 C区52号住居(1)

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

は壁外に設けられていた。全長99cm、燃烧部幅26cm、焚口部幅52cmである。燃烧部下面には多くの炭が含まれていた。

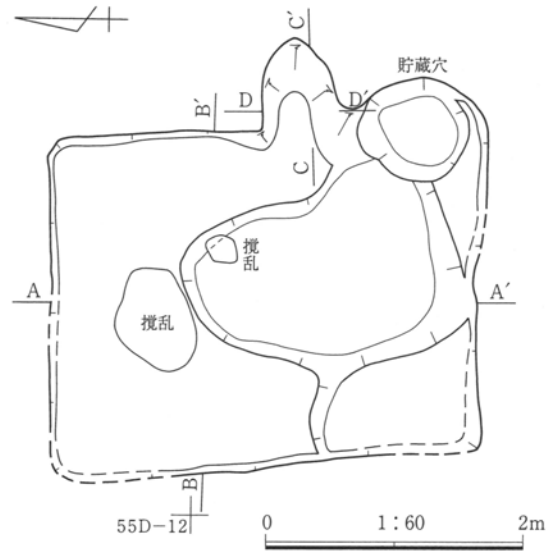
周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は長径89cm短径83cm、床面からの深さ31cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

遺物 床面上からの遺物の出土は少量であった。竈燃烧部内出土の須恵器甕の破片(2)と貯蔵穴埋没土中から出土の杯(1)の破片が主な資料である。

掲載した資料の他に須恵器破片2点、軟質陶器破片1点、弥生土器破片1点が出土した。(観P65)

所見 奈良時代の住居と考えられる。



第313図 C区52号住居(2)



第314図 C区52号住居出土遺物

C区 56号住居 (第315~317図、PL67・134)

位置 55 I・J-10・11

重複 なし。

形状 遺構の南側が調査区域外のため全体の形状は不明である。確認した範囲での規模は東西長4.50mであるが南北を長軸とする隅丸長方形と考えられる。北東部分に張り出し部分があった。

面積 計測不能 **方位** N-82°-E

床面 遺構確認面から55cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。貼り出し部分の床面は本体よりも10~15cmほど高く整えられていた。

埋没土 As-Cと少量のローム粒・ブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁に造られていた。中央からやや南壁寄りに位置するが、壁内に燃烧部を置き、奥壁が地山を掘り込むように立ち上がっている。袖部は黒褐色、

茶褐色土を貼って造り付けている。奥壁立ち上がり部分の土層観察から補修あるいは造り直しがあったことが知れる。全長136cm、燃烧部幅52cm、焚口部幅60cmである。竈埋没土中の焼土ブロック内に植物繊維がスサ状に残っていた。竈構築材が崩落、堆積したものと考えられる。

周溝 確認できた範囲内では北及び西の壁面下に掘られていた。幅は14~36cmで深さが3~5cmである。

柱穴 掘られていなかった。

ピット 1本掘られていた。規模は長径46cm短径43cm、深さ16cm程である。

貯蔵穴 東壁際に掘られていた。規模は長径52cm短径50cm、床面からの深さ30cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

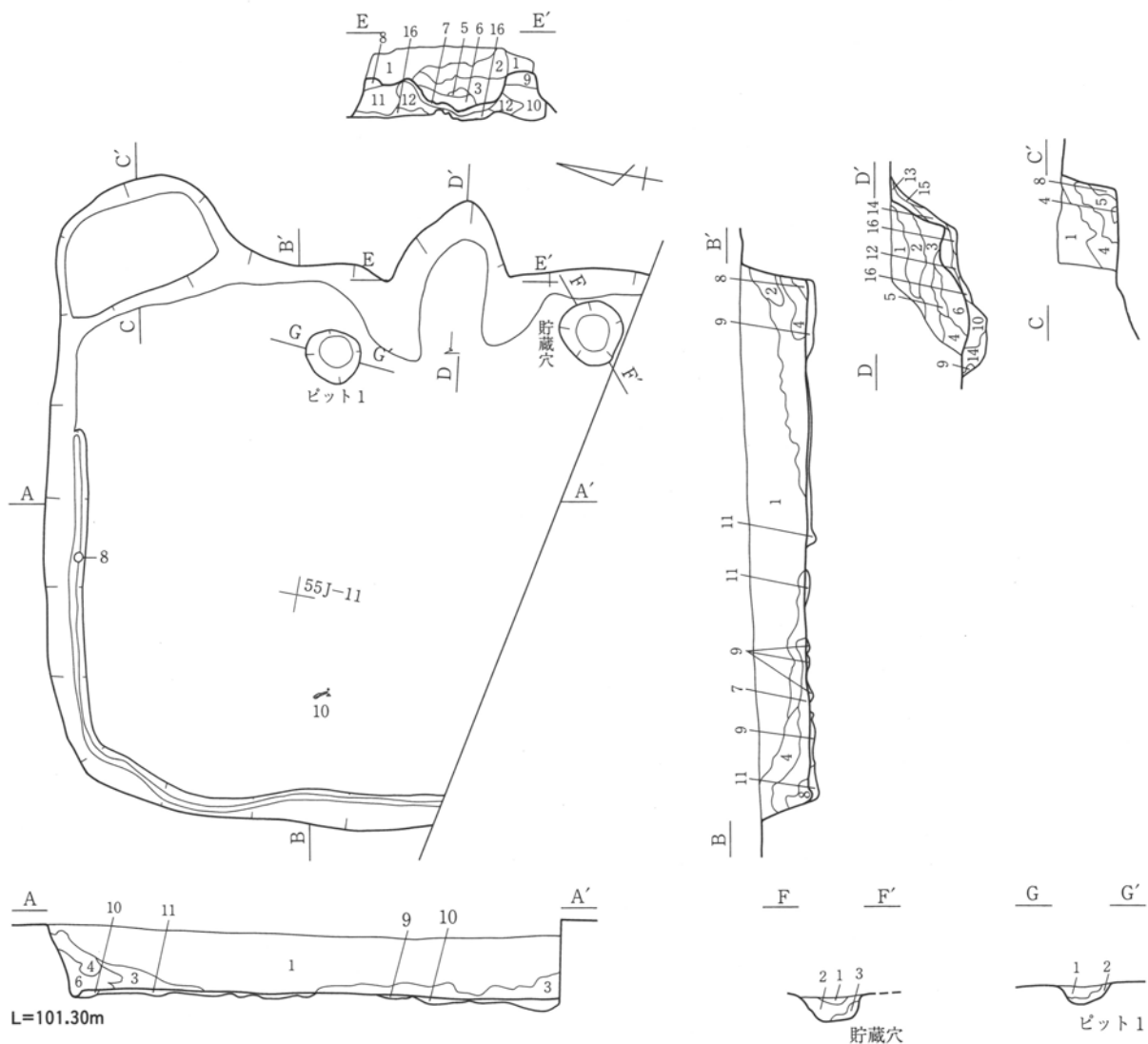
床下 床面下の精査により貼り出し部分で竈左側

の壁面下から北壁方向に向かって周溝が検出された。このことから貼り出し部分が時間を隔てて拡張されたものと考えられる。

遺物 床面直上からの出土遺物はほとんどみられなかった。北壁際から須恵器蓋の摘部分(8)が出土している。他に西側、床面から6cm離れた高さから

棒状鉄製品(10)が出土している。掲載した資料の他に土師器破片262点、須恵器破片14点、軟質陶器破片2点、陶磁器破片3点、弥生土器破片3点、縄文土器破片3点が出土している。(観P65・66)

所見 奈良時代の住居と考えられる。



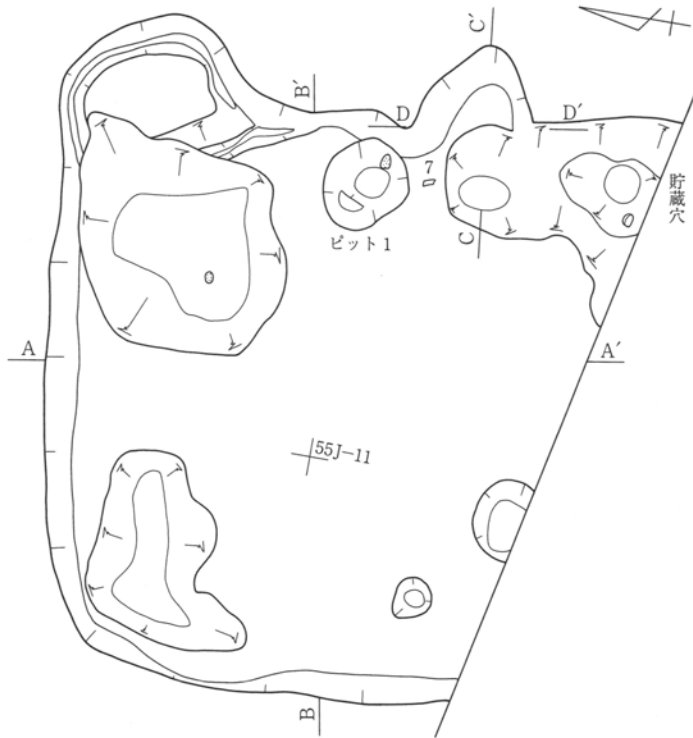
- 1. 暗褐色土 As-Cと少量のローム粒・ブロックを含む。
- 2. 黒褐色土 4層に近い。ロームブロックをやや多く含む。
- 3. 黒褐色土 As-Cと少量のローム粒・ブロックを含む。
- 4. 黒褐色土 As-Cと少量のローム粒・小ブロックを含む。
- 5. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックをわずかに含む。
- 6. 褐色土 地山ロームとほぼ同様。黒褐色土を少量混入。
- 7. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
- 8. 褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。
- 9. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
- 10. 暗褐色土 9層と同様。下位に灰色粘土ブロックを含む。
- 11. 褐色土 地山ロームとほぼ同様。暗褐色土を少量混入。

- 宮下C区 56号住居 貯蔵穴
- 1. 黒褐色土 少量のAs-Cとわずかな焼土粒を含む。
 - 2. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒・ブロックを含む。
 - 3. 暗褐色土 2層に近い。ロームブロックが多い。

- 宮下C区 56号住居 ピット1
- 1. 黒褐色土 少量の焼土粒とローム粒を含む。
 - 2. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。

0 1:60 2m

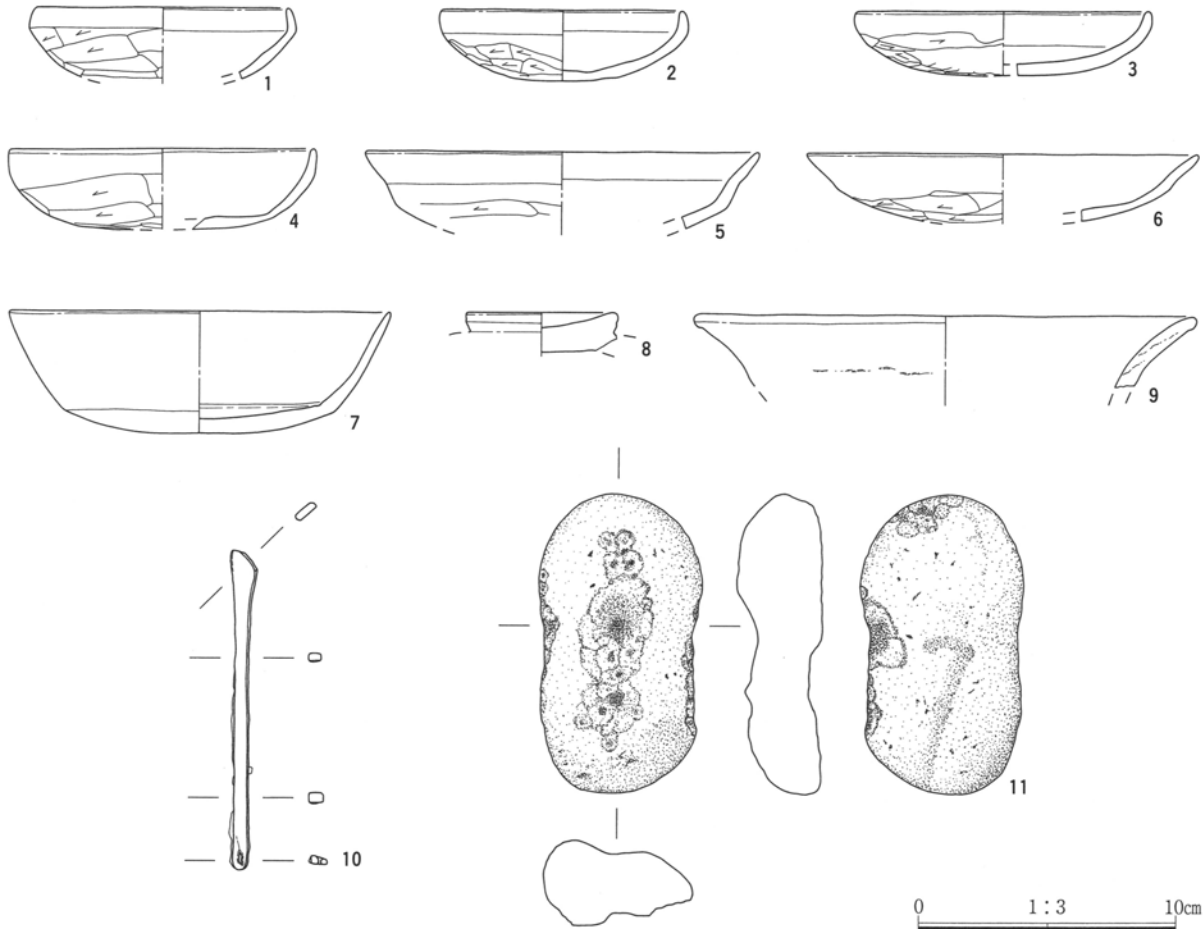
第315図 C区56号住居(1)



宮下C区 56号住居 竈

1. 暗褐色土 As-C、ローム粒・ブロックを含む。
2. 黒褐色土 As-Cと少量のローム粒を含む。
3. 暗褐色土 焼土粒・ブロックと少量のローム粒を含む。
4. 黒褐色土 3層に近い。焼土粒を少量含む。
5. 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
6. 暗灰褐色土 灰色粘土質土と少量のローム粒・ブロックを含む。
7. 黒色土 灰、炭と少量の焼土粒・ローム小ブロックを含む。
8. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
9. 黒褐色土 少量のローム粒とわずかな焼土粒が混入。
10. 暗褐色土 ロームブロックとわずかな焼土粒を含む。
11. 暗褐色土 9層よりローム分少ない。焼土なし。
12. 黒褐色土 少量のローム粒ブロック、焼土粒、炭、灰を含む。竈再構築土と思われる。
13. 黒褐色土 焼土粒、ローム粒・ブロックを含む。
14. 暗赤褐色土 焼土粒・ブロック、粘質土ブロックと少量のローム粒を含む。
15. 赤褐色土 上面は焼土化。初期の使用面と思われる。
16. 褐色土 ローム粒・ブロックが多い。焼土なし。

第316図 C区56号住居(2)



第317図 C区56号住居出土遺物

C区 60号住居

(第318~321図、PL67・134・135)

位置 55E・F-15・16

重複 南東部分で59号住居と重複し、本遺構が59号住居を掘り込んでいた。

形状 南北を長軸とする隅丸長方形を呈する。規模は長軸5.15m、短軸4.73mである。

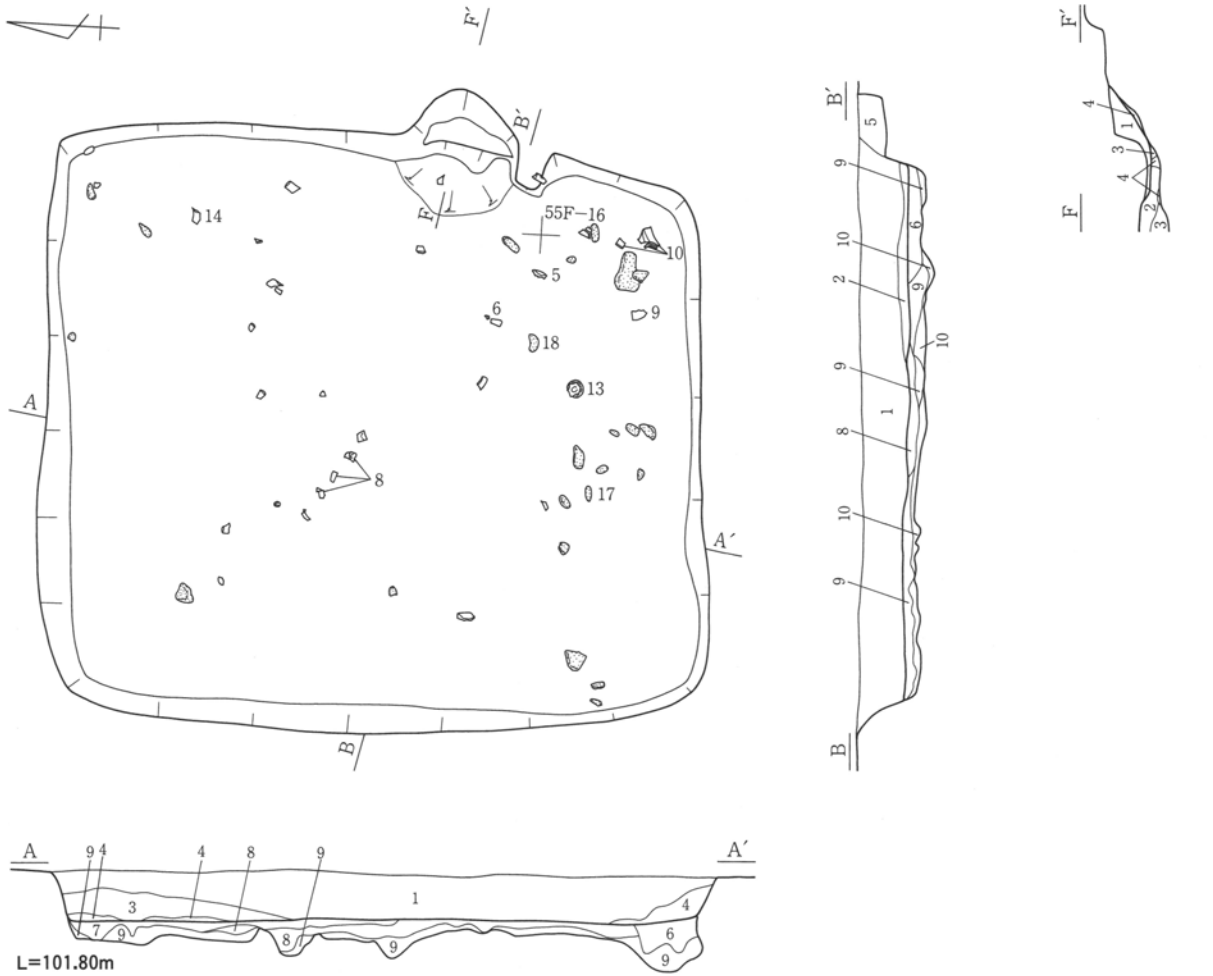
面積 20.87m² 方位 N-87°-E

床面 遺構確認面から39cm程掘り込んで床面となる。

る。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 床面直上層は大半が上位にAs-Cを多く含む暗黒褐色土で埋まっていた。竈付近は焼土、粘土を少量含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。燃烧部を壁内に設ける構造をとっていたと考えられるが、右袖部の基部が残存していただけであった。煙道部は攪乱により壊されていた。燃烧部の幅は80cmである。



1. 暗黒褐色土 As-Cを上位に多く含む。
2. 暗褐色土 焼土、粘土を少量含む。
3. 黒色土 As-C、ローム粒を少量含む。
4. 黄黒色土 ロームを多く含む黒色土。
5. 竈袖部
6. 暗褐色土 焼土粒、粘質土、灰を含む(竈部分)。
7. 暗褐色土 黒色土とロームの混土。
8. 暗褐色土 黒色土にロームを含む。
9. 褐色土 ローム粒を多量に含む。
10. 黄褐色土 地山ロームを多く含む。

宮下C区 60号住居 竈

1. 暗褐色土 焼土粒、炭化物、ロームブロックを含む。
2. 暗褐色土 多量の焼土粒と少量のローム粒を含む。
3. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
4. 黄褐色土 地山ロームを多く含む。

0 1:60 2m

第318図 C区60号住居(1)

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

周溝・柱穴 掘られていなかった。

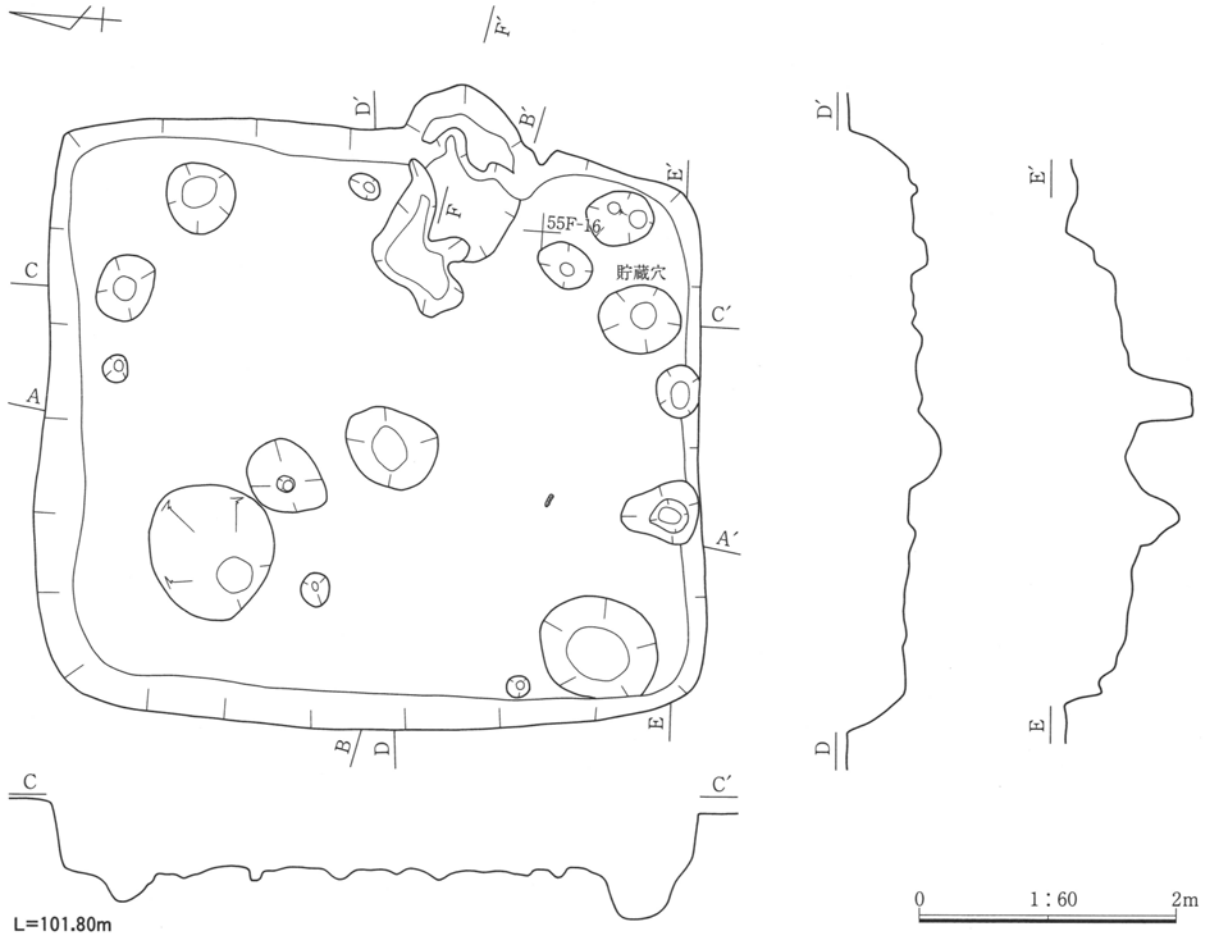
貯蔵穴 南壁際東寄りに掘られていた。床面下精査時に確認した。規模は長径64cm短径53cm、床面からの深さ47cmである。上端の形状は楕円形を呈する。

遺物 甕(10)が南東隅の床面上から、杯(1)が貯蔵穴内から出土したのを除くと床面直上からの出土

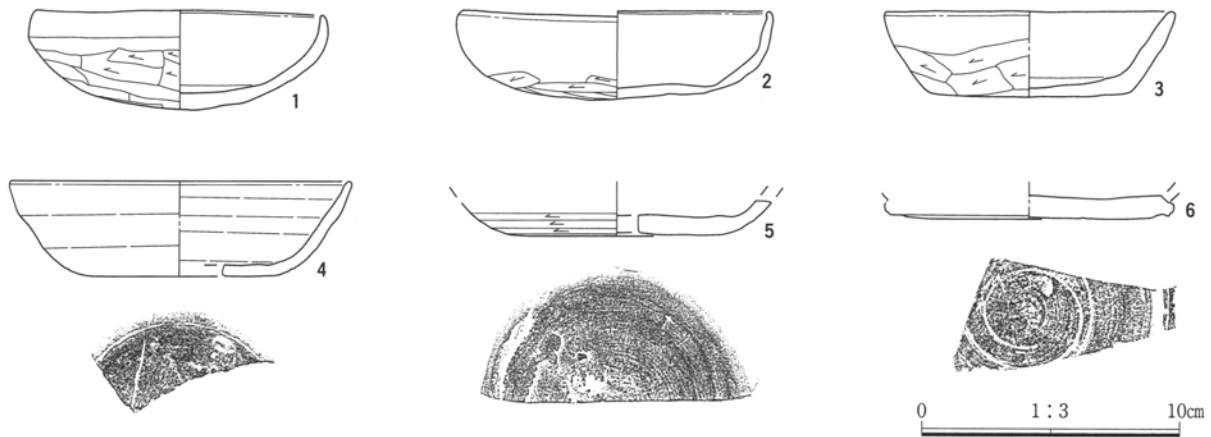
は少量で、床面から離れた埋没土中からの出土である。また、埋没土中から鉄製鎌(16)が出土した。

掲載した資料の他に土師器破片390点、須恵器破片34点、弥生土器破片19点、器種不明2点が出土した。(観P66・67)

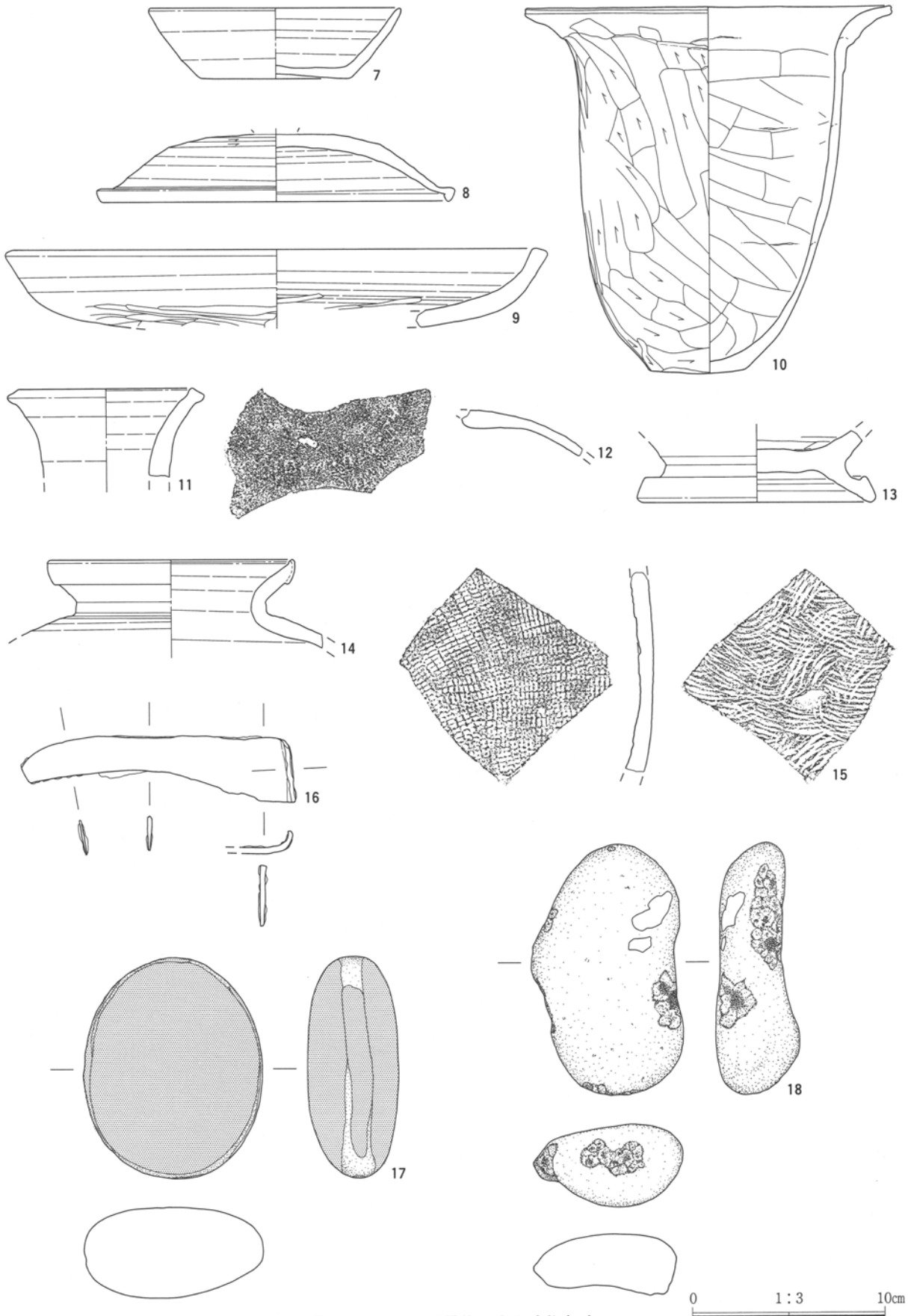
所見 奈良時代の住居と考えられる。



第319図 C区60号住居(2)



第320図 C区60号住居出土遺物(1)



第321図 C区60号住居出土遺物(2)

C区 64号住居 (第322図、PL67・134)

位置 55F-10

重複 西側部分で65号住居(竈部分)と重複し、本遺構が65号住居を掘り込んでいた。

形状 後世の攪乱により主要部分が壊されているため、全体の形状は不明である。

面積 計測不能 **方位** 計測不可

床面 遺構確認面から10cm程掘り込んで床面となる。確認した範囲で床面はほとんど平坦であった。

埋没土 住居埋没土の一部が残存していた。As-Cとローム粒を含む黒色土で埋まっていた。

竈 東壁の一部に設けられていた。右袖部には灰

色粘土が貼られていた。

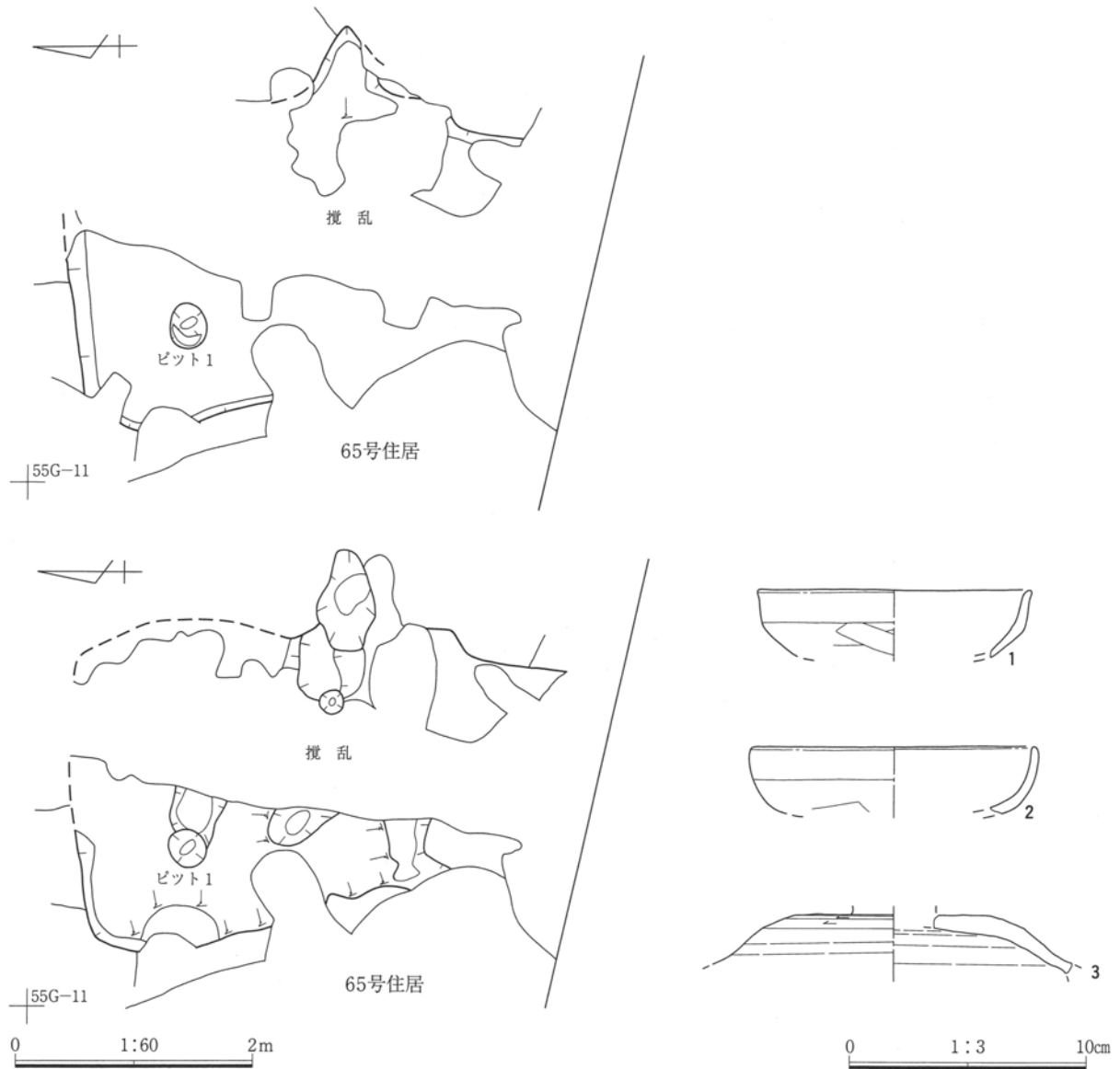
周溝・貯蔵穴 確認できなかった。

ピット 1本掘られていた。規模は長径38cm短径32cm、床面からの深さ19cmである。

遺物 杯(2)が竈埋没土中から出土した。掲載した資料の他に土師器破片104点、須恵器破片5点、軟質陶器破片9点、弥生土器破片1点が出土した。

(観P67・68)

所見 年代を決定するに足る資料の出土がないが、65号住居との重複関係から古墳時代後期より新しい時期の住居と考えられる。奈良時代の住居か。



第322図 C区64号住居・出土遺物

C区 67号住居

(第323~327図、PL68・69・80・135・136)

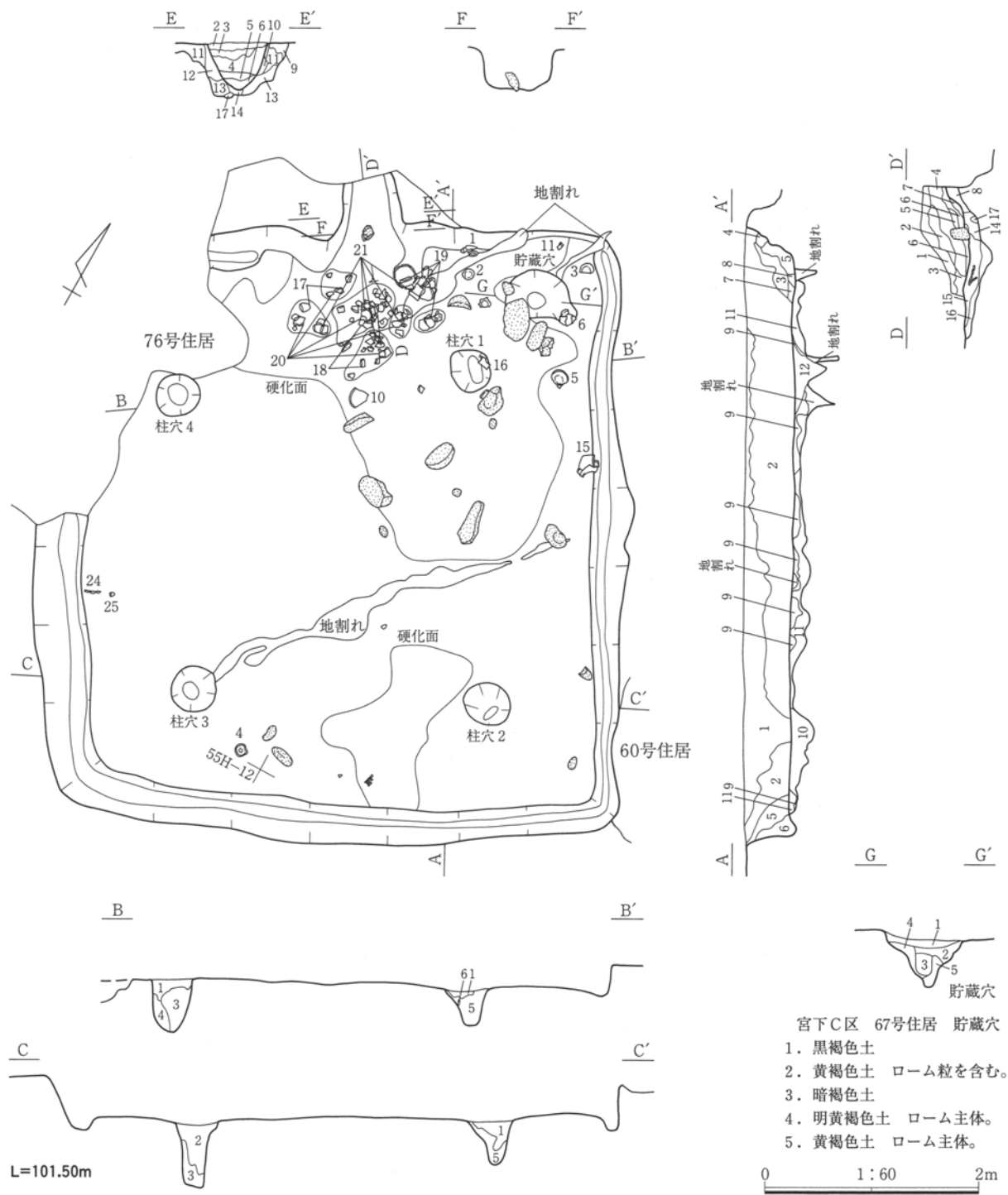
位置 55G・H-11~13

重複 東側で66号住居と、北西部分で68号・76号住居と重複する。本遺構が上記の遺構により掘り込まれていた。新旧関係は、東側で67号住居→66号住居、

北西部分で67号住居→76号住居→地割れ→68号住居である。

形状 他遺構と重複する部分があるが、南北を長軸とする方形を呈する。規模は長軸5.84m、短軸5.71mである。

面積 (25.06)m² 方位 N-30°-W

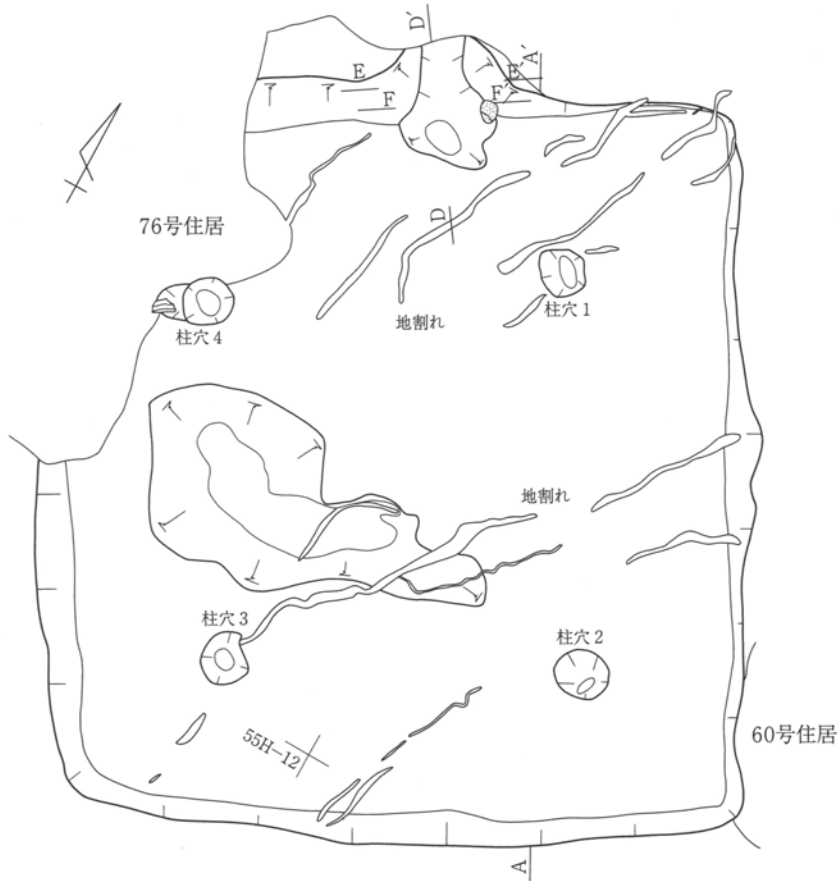


第323図 C区67号住居(1)

床面 遺構確認面から47cm程掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦であったが、南側で地割れが床面を破壊していた。

埋没土 床面直上層はAs-Cを少量を含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 北壁中央東寄りに造られていた。燃焼部幅50cm、焚口部幅70cmである。右袖部はその先端に甕(14)を据え補強としていた。燃焼部に支脚石が据えられたと思われる状態で残っていた。燃焼部下面に焼土粒が堆積し、その上に焼土化した天井部分が崩落し



1. 黒褐色土 As-Cと少量のローム粒を含む。
2. 黒褐色土 少量のAs-Cとローム粒を含む。
3. 黒色土 混入物ほとんどなし。
4. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
5. 黒褐色土 わずかなAs-Cと少量のローム粒を含む。
6. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
7. 黒褐色土 灰色粘質土が少量混入。
8. 暗灰色粘質土 粘質土主体。黒褐色土混入。
9. 黒褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
10. 暗褐色土 9層に類似するがロームの混入がやや多い。
11. 褐色土 ローム主体。黒褐色土を混入。
12. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
7. 黒褐色土 5層より焼土ブロックが少ない。
8. 黄褐色土 ローム主体。黒褐色土を少量混入。
9. 黒褐色土 As-Cを少量含む。
10. 褐色～赤褐色土 11層に比べロームの混入が多い。内壁は焼土化。
11. 暗褐色土 As-C、焼土粒を少量含む。ロームと黒褐色土の混土。
12. 暗褐色土 焼土ブロックを含む。粘質土。
13. 黒褐色土 焼土粒、ローム粒・ブロックを少量含む。
14. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒を少量含む。
15. 暗赤褐色土 焼土粒を含む。
16. 黒褐色土 少量の焼土粒とロームブロックを含む。
17. 地山ローム

宮下C区 67号住居 竈

1. 黒褐色土 As-Cを含む。住居埋没土。
2. 暗褐色土 少量のAs-Cとロームを含む。
3. 暗灰褐色土 灰色粘土ブロックと少量の焼土ブロックを含む。
4. 暗褐色土 焼土ブロックを多く含む。
5. 黒褐色土 焼土ブロックを含む。
6. 赤褐色土 焼土粒・ブロックを多く含む(天井部崩落土)。

宮下C区 67号住居 柱穴1・2・3・4

1. 黒褐色土 As-Cと少量のローム粒・ブロックを含む。
2. 黒褐色土 1層に近い。下位はロームブロックの混入が多い。
3. 褐色土 ローム粒主体。ロームブロックを少量含む。
4. 暗褐色土 3層に近い。やや暗い色相。
5. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
6. 灰褐色～灰色粘質土 柱穴脇に貼った物か。

第324図 C区67号住居(2)

0 1:60 2m

ていた。

周溝 他遺構との重複部分を除き、壁面下ではほぼ全体に掘られていた。幅は12~26cmで深さが4~14cmである。

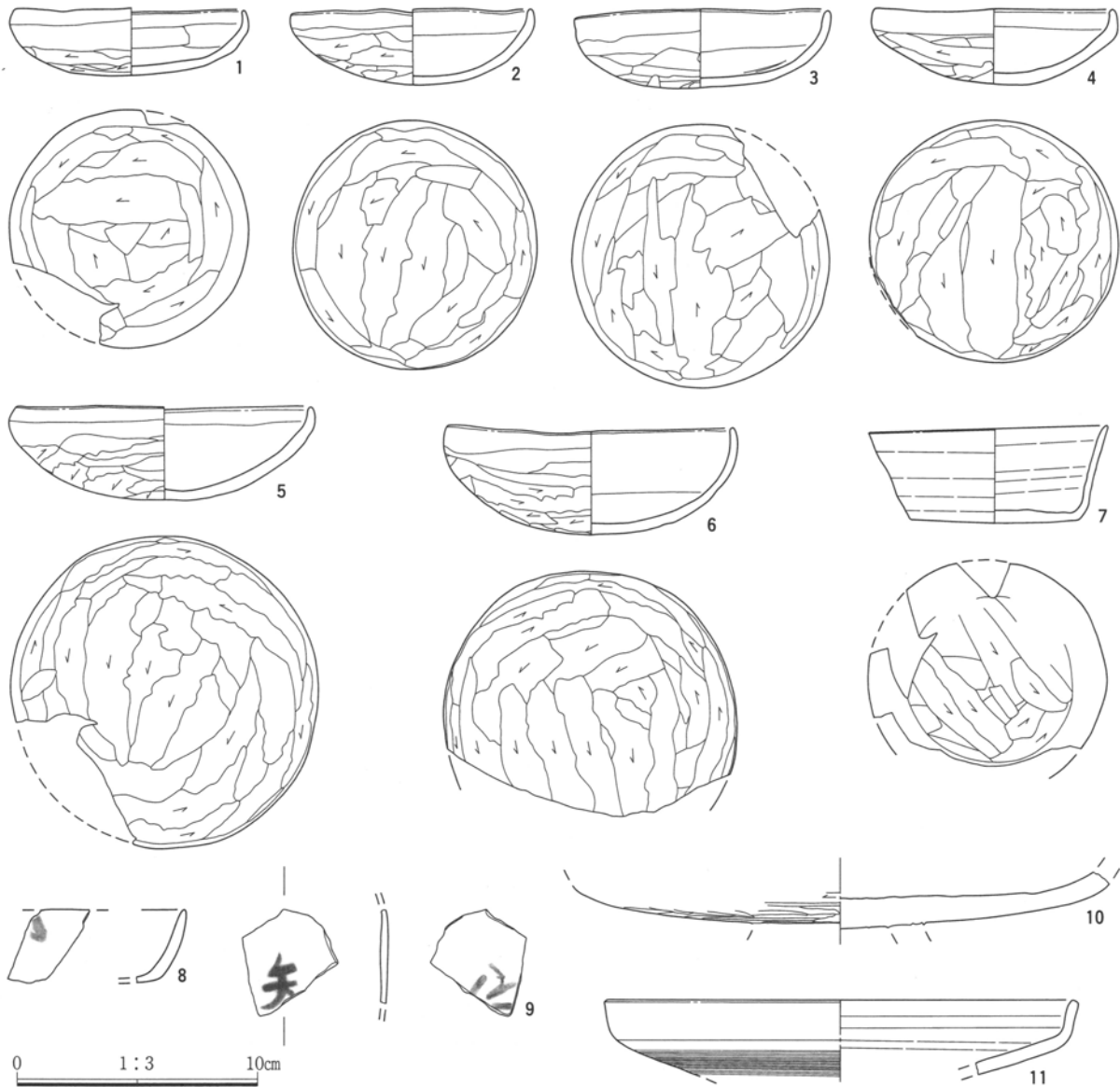
柱穴 4本掘られていた。柱穴1は長径40cm短径38cm、深さ34cm。柱穴2は長径40cm短径38cm、深さ50cm。柱穴3は長径43cm短径42cm、深さ68cm。柱穴4は長径42cm短径38cm、深さ99cmである。

貯蔵穴 北壁隅に掘られていた。規模は長径62cm短径45cm、床面からの深さ56cm程である。上端の形状は不定形を呈する。

遺物 竈焚口部前を中心に、甕(20・21)が出土、

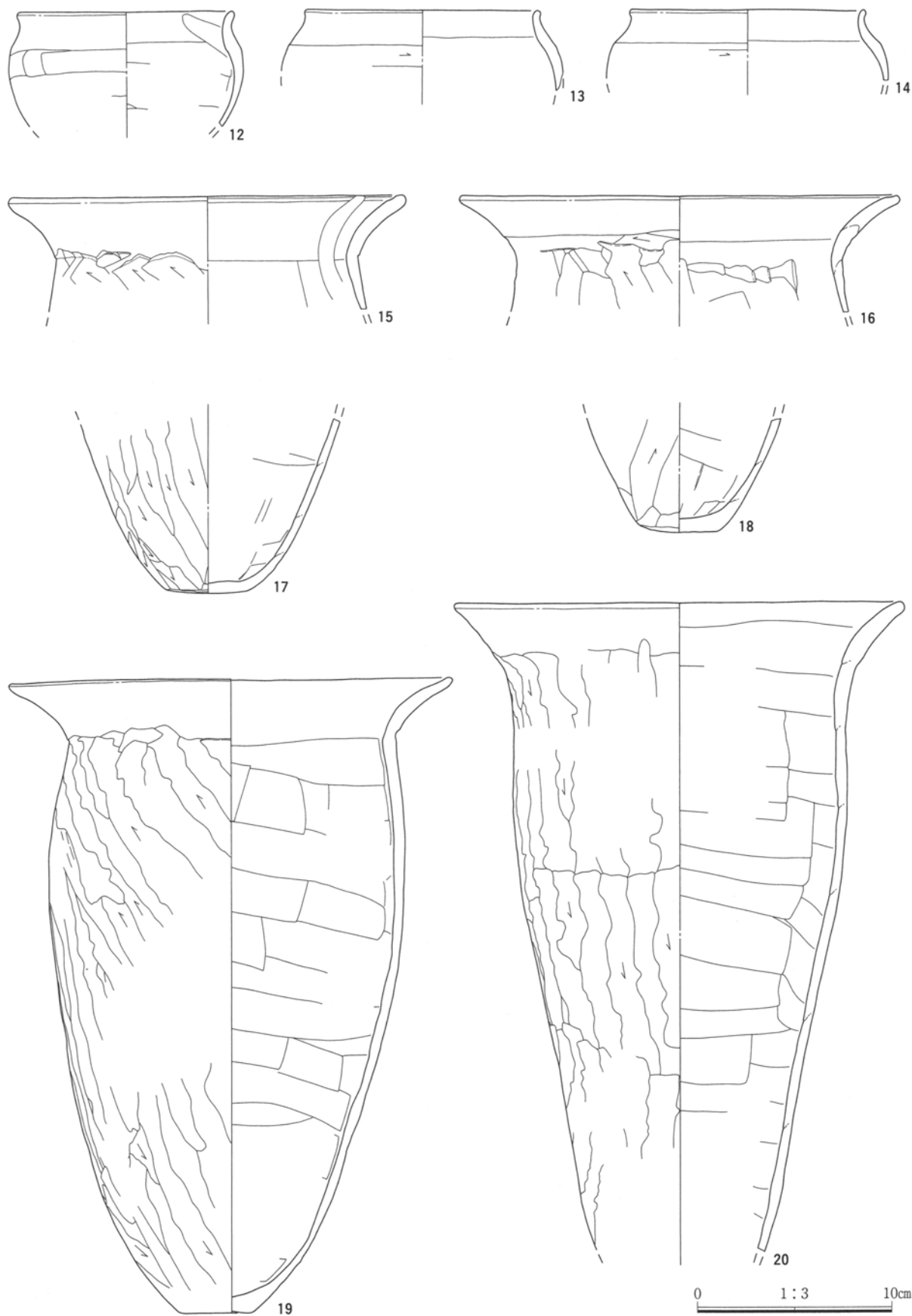
これに混じって須恵器杯(7)や盤の受け部破片(10)などが出土している。右袖部の右脇外側、床面からは杯(2)が、その壁際からは杯(1)がやや床面から離れて出土した。杯(6)は貯蔵穴の埋没土上層の出土である。埋没土中から墨書の記された杯(8・9)が出土している。西壁際の床面からは鉄鎌(24)が出土している。この他にも埋没土中から板状の鉄製品(23)が出土している。掲載した資料の他に土師器破片843点、須恵器破片11点、軟質陶器破片3点、弥生土器破片5点が出土した。(観P68・69)

所見 奈良時代の住居と考えられる。

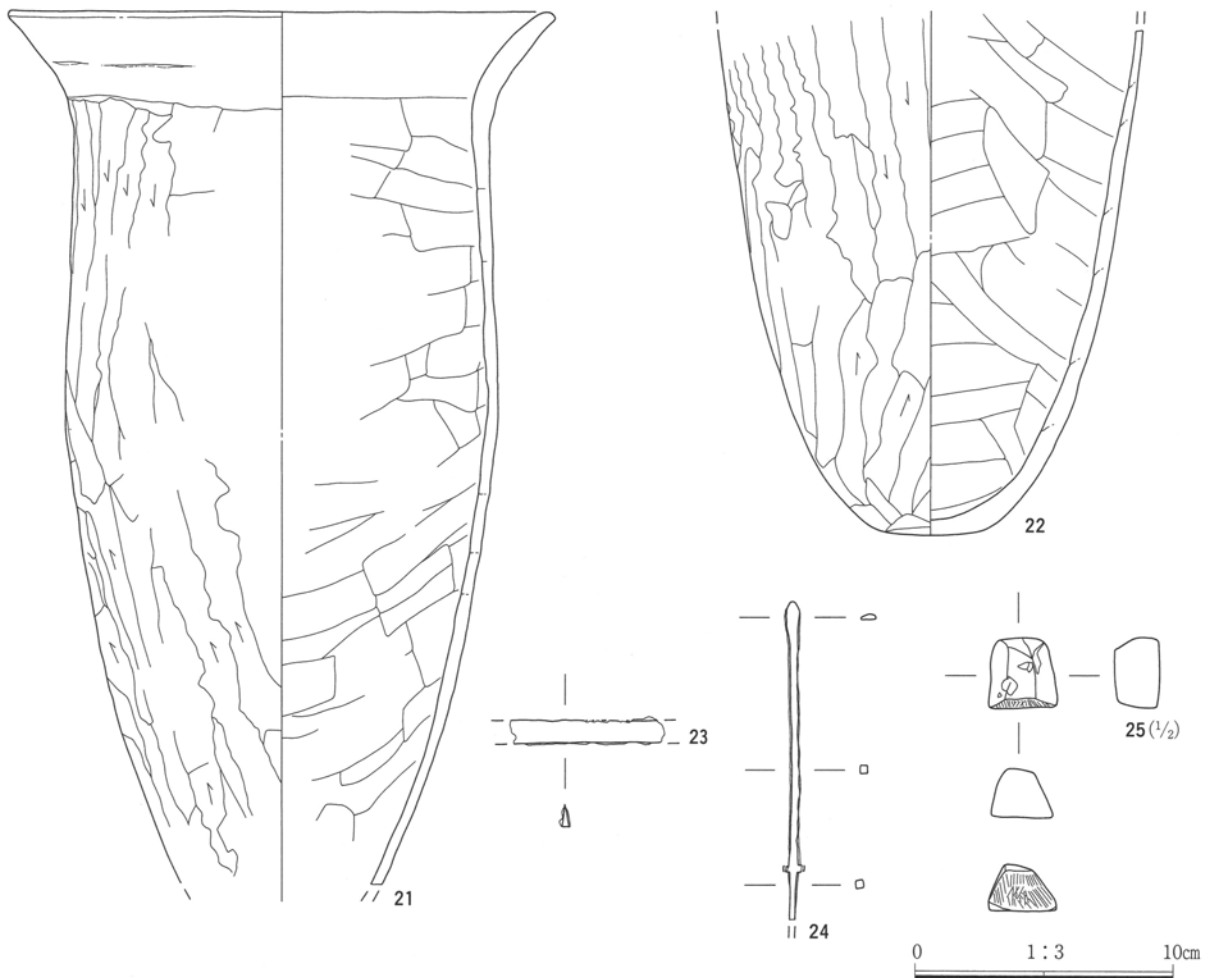


第325図 C区67号住居出土遺物(1)

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



第326図 C区67号住居出土遺物(2)



第327図 C区67号住居出土遺物(3)

C区 74号住居 (第328・329図、PL70・136)

位置 55J・K-15・16

重複 80号住居と重複し、本遺構が80号住居を掘り込んでいた。

形状 南北を長軸とする隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.17m、短軸3.17mである。

面積 10.57㎡ **方位** N-87°-E

床面 遺構確認面から38cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 上層はAs-Cとローム粒を含む暗褐色土で、床面直上層は上層よりローム粒を多く含む暗黄褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央南寄りに造られていた。一部煙道部基部が残存していた。全長106cm、燃烧部幅68cm、焚口部幅100cmである。燃烧部は天井部分の一部が残っており、火熱を受け焼土化していた。また、下面

は多量の灰と少量の焼土粒が堆積していた。掘り方面の精査で両袖部基部に小ビットを確認した。袖石を据えた穴であると考えられる。

周溝 掘られていなかった。

柱穴 確認できなかった。

貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は長径55cm短径52cm、床面からの深さ32cm程である。上端の形状はほぼ円形を呈する。

床下 床面下ほぼ全面に掘り方が存在していたと考えられるが、80号住居との重複部分では掘り方埋没土と80号住居埋没土との識別が困難であった。

遺物 竈内からの出土があったが底面からはやや離れた高さからである。燃烧部内から甕(14)の破片が、左袖部上からは杯(4)が、右袖部前から須恵器杯(10)が出土している。貯蔵穴底面から出土した須恵器杯(8)は北部分出土の破片が接合した。また、北東

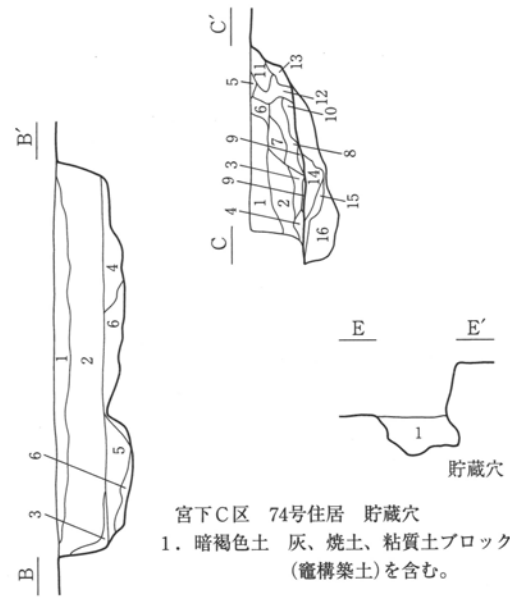
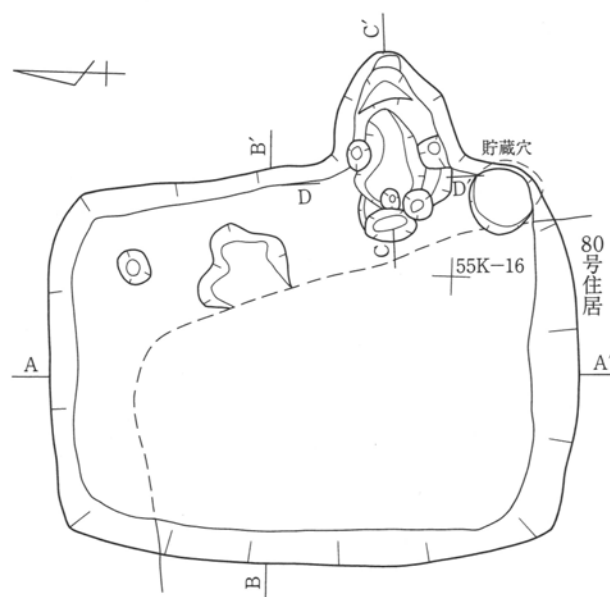
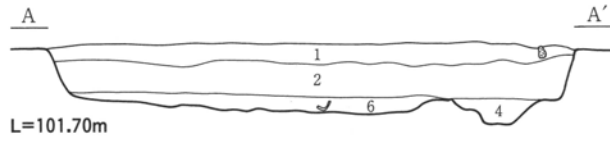
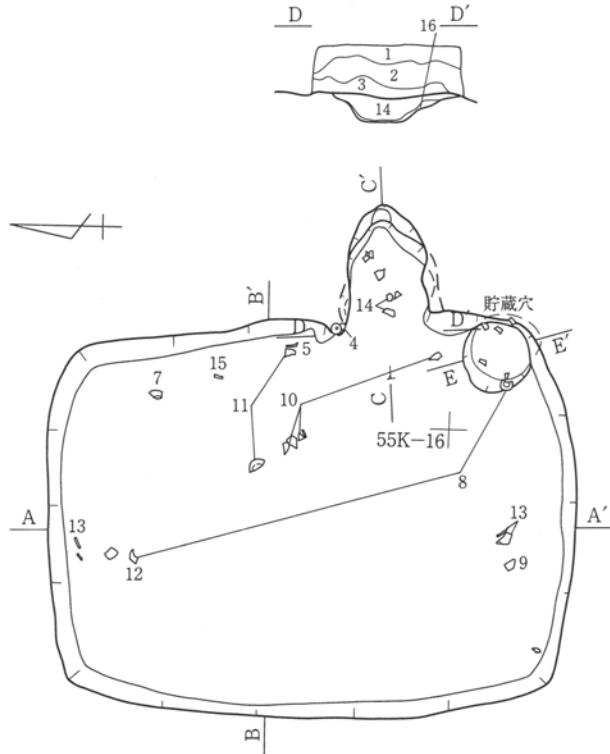
第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

部分出土の刀子片(15)は床面から4cm離れた出土である。

掲載した資料の他に土師器破片466点、須恵器破

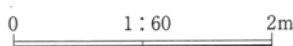
片39点、瓦1点、弥生土器破片27点、縄文土器破片2点が出土した。(観P70)

所見 奈良時代の住居と考えられる。

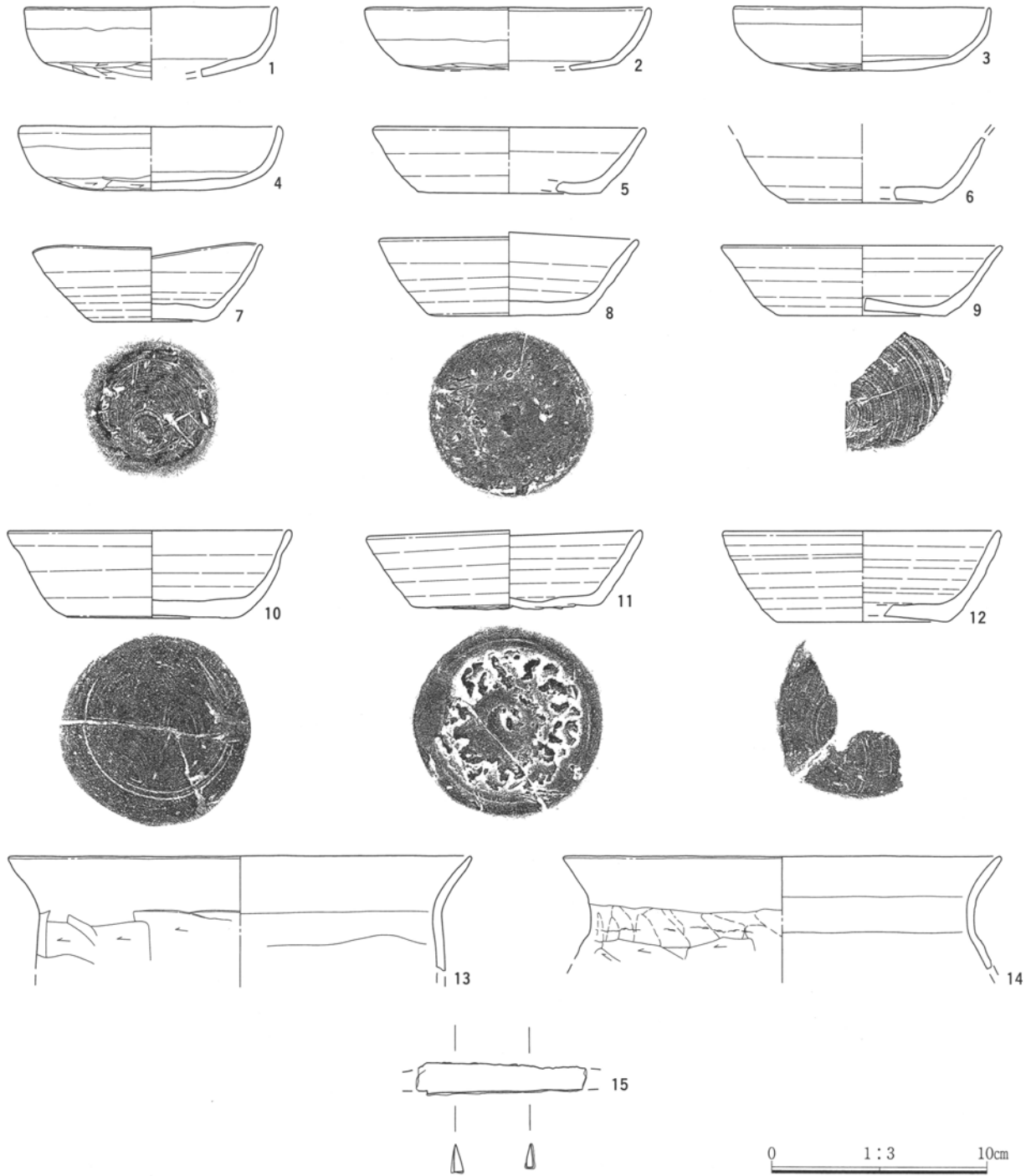


1. 暗褐色土 As-C・ローム粒をやや多く含む。
2. 暗黄褐色土 1層よりロームの量が多い。
3. 暗黄褐色土 ローム粒を含む。As-Cを含まない。
4. 黄黒色土 ローム粒主体で黒色土を少量含む。
5. 暗黄褐色土 ローム粒を均質に、As-Cを少量に含む。掘り方埋没土。
6. 黄褐色土 黒色土を少量含む。

- 宮下C区 74号住居 竈
1. 暗褐色土 As-Cを含む。砂質土。
 2. 暗褐色土 As-C、粘土粒をわずかに含む。
 3. 暗褐色土 焼土、粘質土、ロームブロックを含む。
 4. 灰褐色土 粘質土ブロック。
 5. 暗褐色土 As-Cをわずかに含む。
 6. 暗褐色土 焼土粒、粘質土を含む。
 7. 褐色土 粘質土を多く含む。
 8. 灰褐色土 粘質土、天井部崩落土。
 9. 黒褐色土 灰を多く含む。
 10. 赤褐色土 天井部崩落焼土。
 11. 赤褐色土 焼土ブロックを多く含む。
 12. 暗褐色土 粘質土をわずかに含む。
 13. 褐色土 少量の焼土、炭化物粒と多くのローム粒を含む。
 14. 黒色土 多量の灰とわずかな焼土粒を含む(灰層)。
 15. 暗褐色土 多くのローム粒と灰を含む。
 16. 褐色土 多くのローム粒・ブロックと焼土粒を含む。



第328図 C区74号住居



第329図 C区74号住居出土遺物

C区 79号住居 (第330・331図、PL70・136)

位置 55 I・J-17・18

重複 東側で78号住居と重複し、本遺構が78号住居より古い。後世の攪乱により東側の主要部分が壊されていた。

形状 後世の攪乱により壊されている部分があるが、南北を長軸とする長方形を呈すると推定される。

規模は長軸4.52m、短軸3.18mである。

面積 (13.81)m² **方位** N-86°-E

床面 遺構確認面から30cm程掘り込んで床面となる。床面には凹凸が幾らかあった。

埋没土 上層は暗褐色砂質土で、床面直上層はAs-Cを多く含む暗褐色土で埋まっていた。

竈・柱穴・貯蔵穴 確認できなかった。

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

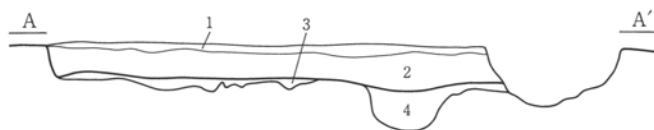
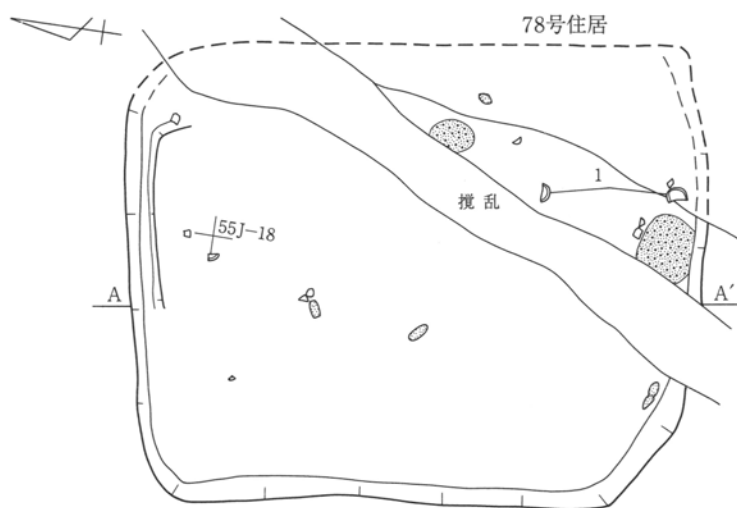
周溝 北壁面下の一部に掘られていた。幅は11~19cmで深さが3~4cmである。

遺物 皿(または盤)(1)は床面直上と南東壁際の攪乱部分から出土した破片が接合したものである。埋没土中からは墨書の記された須恵器杯(2)の破片や刀子の破片4点(5~8)が出土した。掘り方埋没

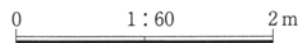
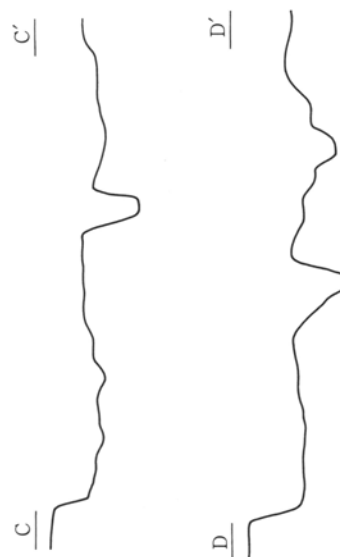
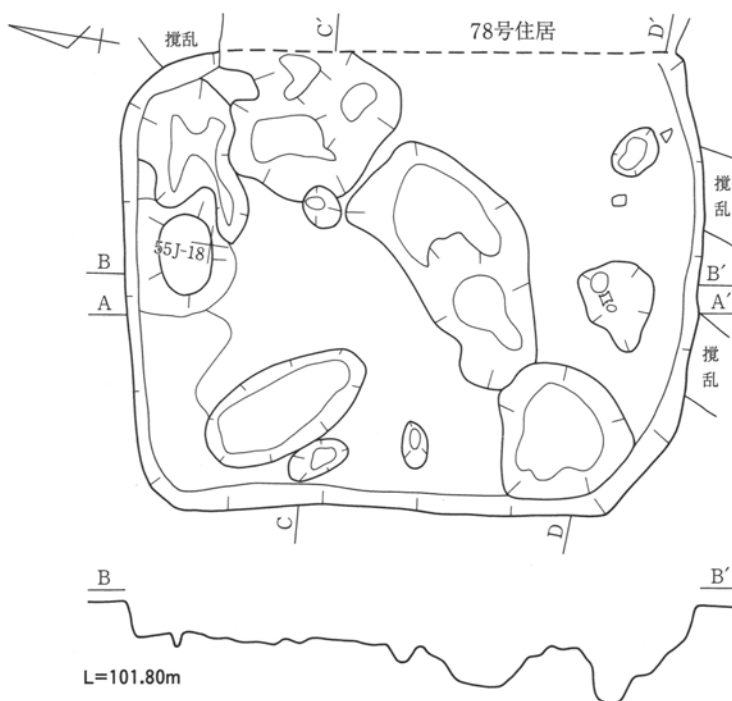
土内からは須恵器杯(2・3)や棒状鉄製品(9)が出土した。

掲載した資料の他に土師器破片369点、須恵器破片57点、弥生土器破片6点が出土した。(観P71)

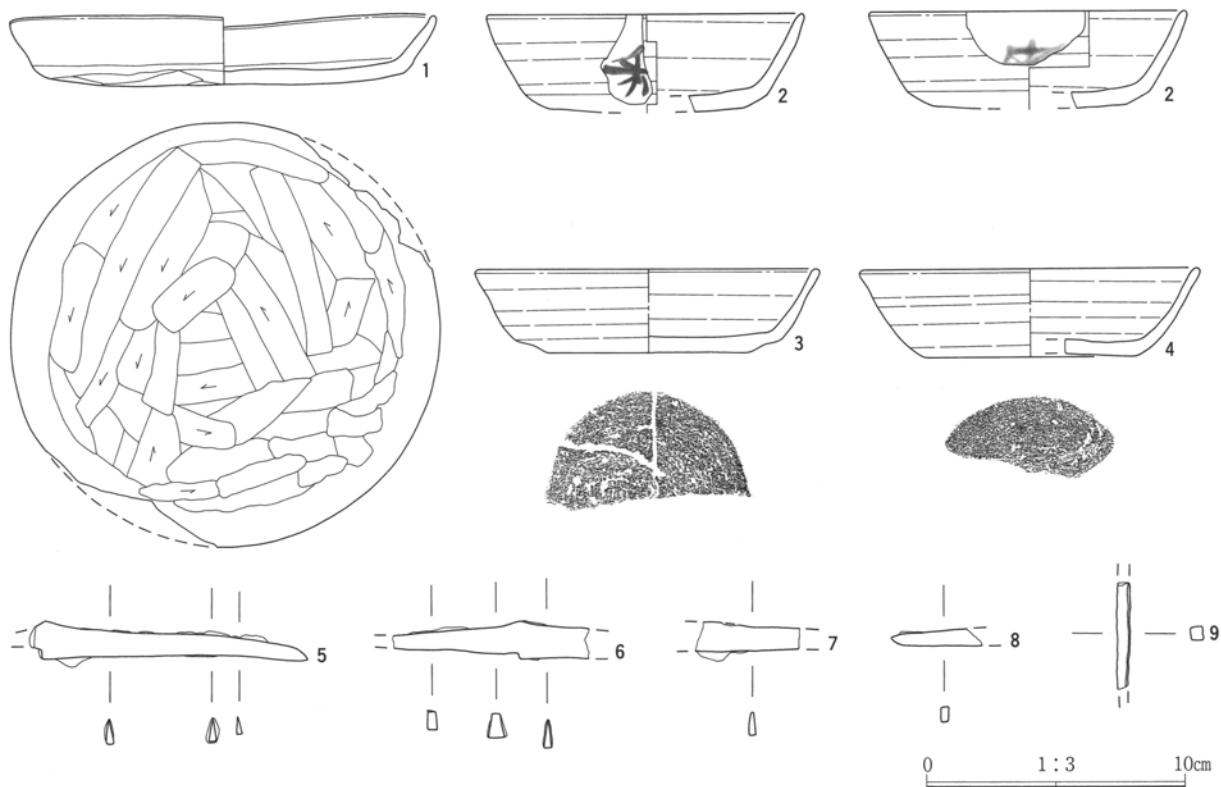
所見 奈良時代の住居と考えられる。



- 1. 暗褐色土 As-Cをわずかに含む砂質の層。
- 2. 暗褐色土 As-Cを多く含む。
- 3. 暗褐色土 黒褐色土とロームの混土。
- 4. 暗褐色土 焼土粒、炭化物を含む。ロームと黒褐色土の混土。



第330図 C区79号住居



第331図 C区79号住居出土遺物

C区 1号住居 (第332~335図、PL71・137)

概要 当初、本遺構を1軒の住居跡として調査に着手した。途中で北東部分で遺構の拡張が見られ、竈より張り出していることから2軒の住居跡が重複していると考え、調査の方針を変更した。しかし、東側部分(張り出しがある側)での竈を確認できず、また出土遺物にも時期差が認められず、結局、本遺構を1軒の住居跡として報告する。2号住居跡を欠番とする。

位置 55H-20、65H-1

重複 当初、2軒の住居が重複していると考えたが、調査の結果、住居床面の標高には差がほとんどなく、1軒の住居跡と判断し、重複なしと考えた。

形状 長軸を南北にする隅丸長方形を呈する。規模は長軸5.57m、短軸は3.12mである。北壁は4.00m、南壁は3.00mを測った。

面積 16.81㎡ **方位** N-97°-E

床面 遺構確認面から36cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 多くのAs-Cと少量のローム粒、焼土粒、

炭化物粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。補強のための礫が5個出土し、その内袖部先端の4点は向かい合い斜めに2個ずつ据えられていた。全長96cm、燃烧部幅40cm、焚口幅75cmである。袖部は住居内にわずかに延びていた。煙道部は基部が確認されるにとどまった。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 南東隅に貯蔵穴と考えられる痕跡が認められた。

床下 床面調査後、床下を調査した際、土坑とピットを各1本確認した。床下土坑1は中央やや北寄りに位置し、長径98cm短径87cmで床面からの深さは19cm程である。ピット1は竈左袖外側にあり、長径44cm短径40cmで床面からの深さは9cm程である。

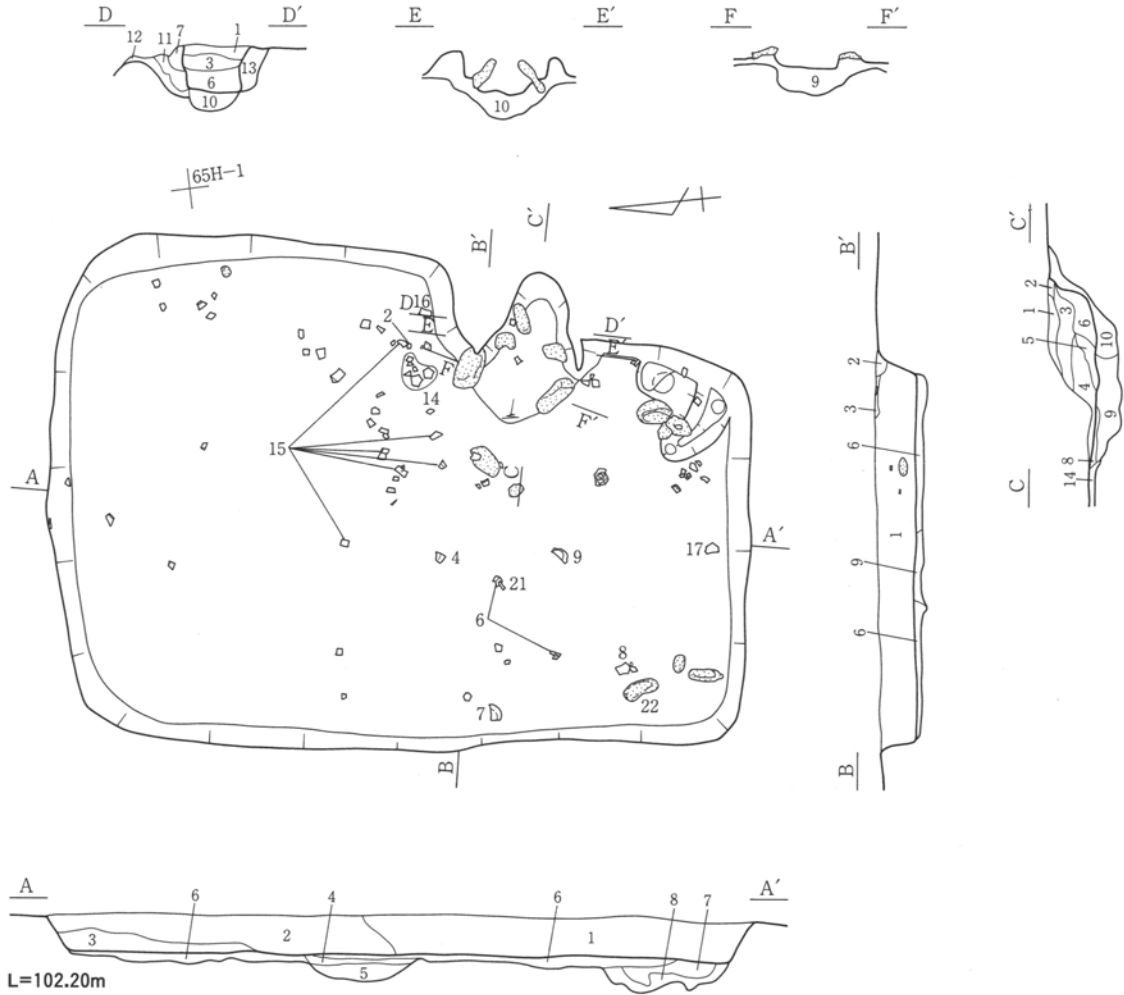
遺物 土師器杯・甕・須恵器杯・高台付杯などが出土した。ほぼ全面から出土したが、小破片となつての出土が多く、また床面直上からの資料も少量であった。須恵器杯(7)は西壁際、高台付杯(8)は南西部分で床面から4~5cm離れたの出土である。埋没

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

土中出土の杯(5)には墨書が記されていた。他に鉄製品(20・21)、土錘(19)が検出された。また、南西部分では床面から7cm離れて大型の砥石(22)が出土している。

掲載資料の他に土師器破片1,098点、須恵器破片70点、灰釉陶器破片3点、陶磁器破片1点、縄文土器破片3点が出土した。(観P72・73)

所見 平安時代の住居と考えられる。



1. 暗褐色土 多くのAs-Cと少量のローム粒を含む。
2. 暗褐色土 1層に類似。1層より黒色味をおびる。
3. 黒褐色土 As-Cを少量含む。
4. 暗褐色土とロームの混土層。床下土坑埋没土。
5. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒をわずかに含む。床下土坑埋没土。
6. 暗褐色土とロームの混土層 As-C、焼土粒を含む。
7. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒・小ブロック、炭化物を含む。
8. 暗褐色土とロームの混土層
9. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。

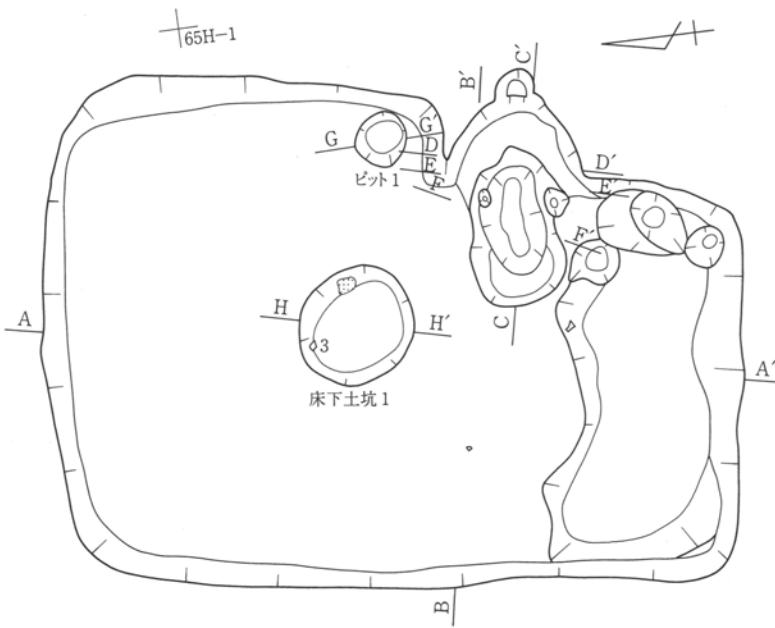
宮下C区 1号住居 竈

1. 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
2. 暗褐色土 焼土ブロックを含む。
3. 暗褐色土 焼土粒をわずかに含む。
4. 暗褐色土 粘質土を含む。
5. 暗褐色土 焼土ブロックを多く含む。
6. 暗褐色土 焼土を含む。
7. 暗褐色と赤褐色土の混土層 焼土が多く混入。
8. 暗褐色土 焼土ブロックを多く含む。
9. 暗褐色土 焼土ブロックを少量含む。
10. 赤褐色土 焼土をやや多く含む。
11. 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
12. 暗褐色土 ローム粒を含む。
13. 暗褐色土 焼土粒を少量含む。やや茶色味をおびる。
14. 暗褐色土 ロームブロックを含む。

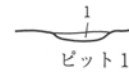
0 1:60 2m

第332図 C区1号住居(1)

第7節 奈良・平安時代の遺構と遺物



G G'

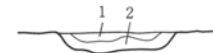


ピット1

宮下C区 1号住居 ピット1

1. 暗褐色土 ロームを混入。焼土粒を微量含む。

H H'



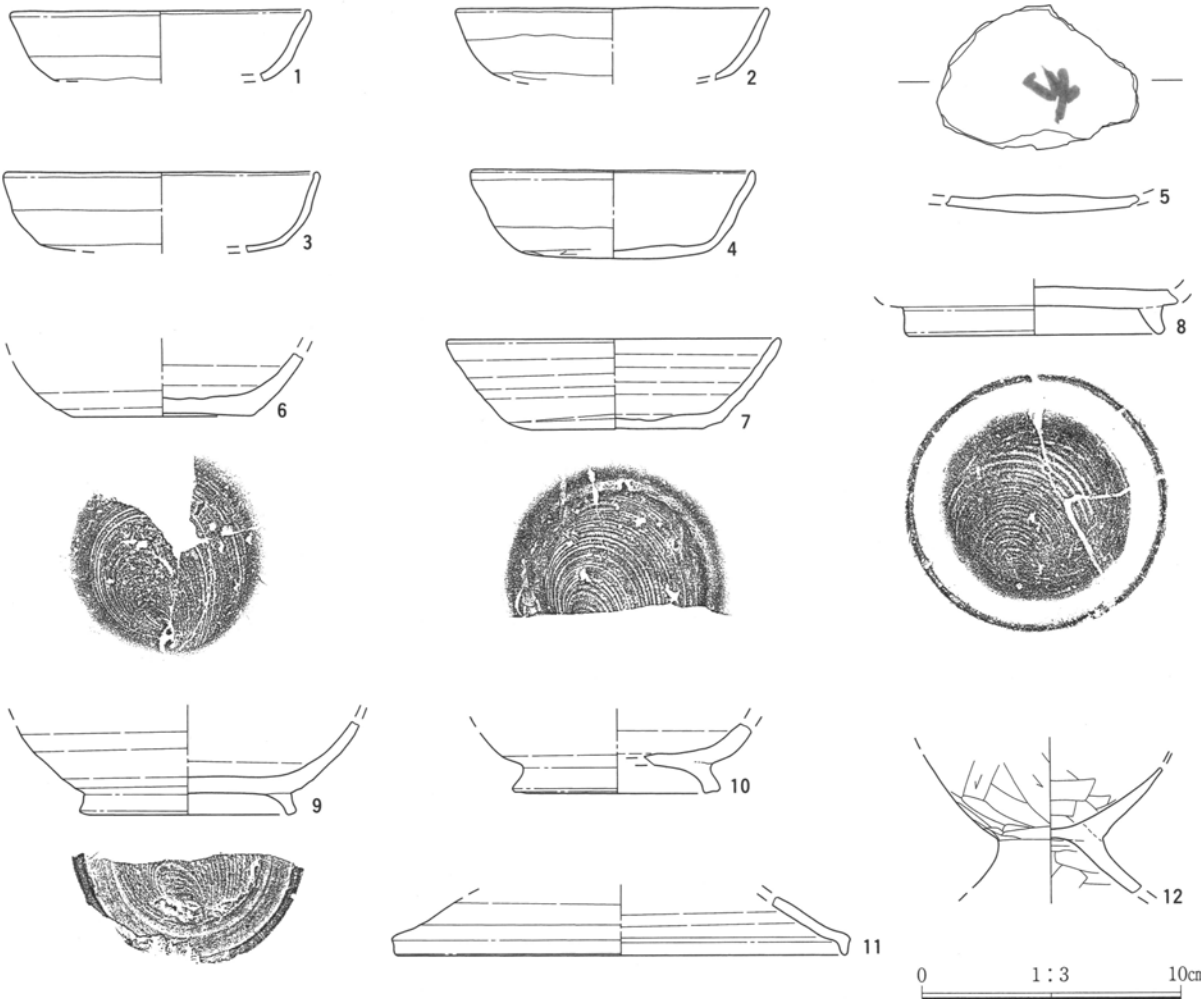
L=102.20m 床下土坑1

宮下C区 1号住居 床下土坑

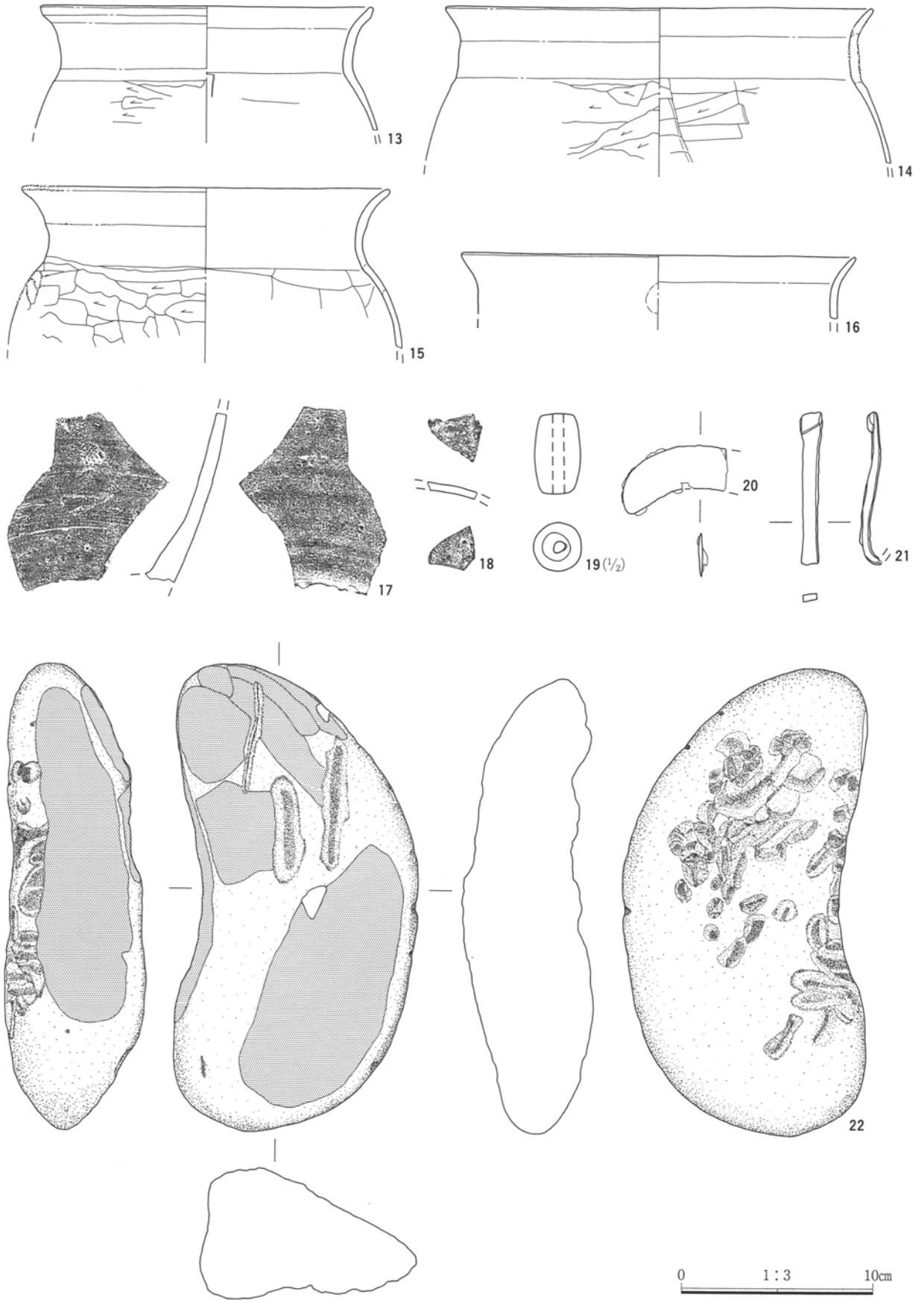
1. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒をわずかに含む。
2. 暗褐色土とロームの混土层 焼土粒、As-Cを含む。

0 1:60 2m

第333図 C区1号住居(2)



第334図 C区1号住居出土遺物(1)



第335図 C区1号住居出土遺物(2)

C区 22号住居

(第336~338図、PL71・137・138)

位置 55B・C-20、65B・C-1

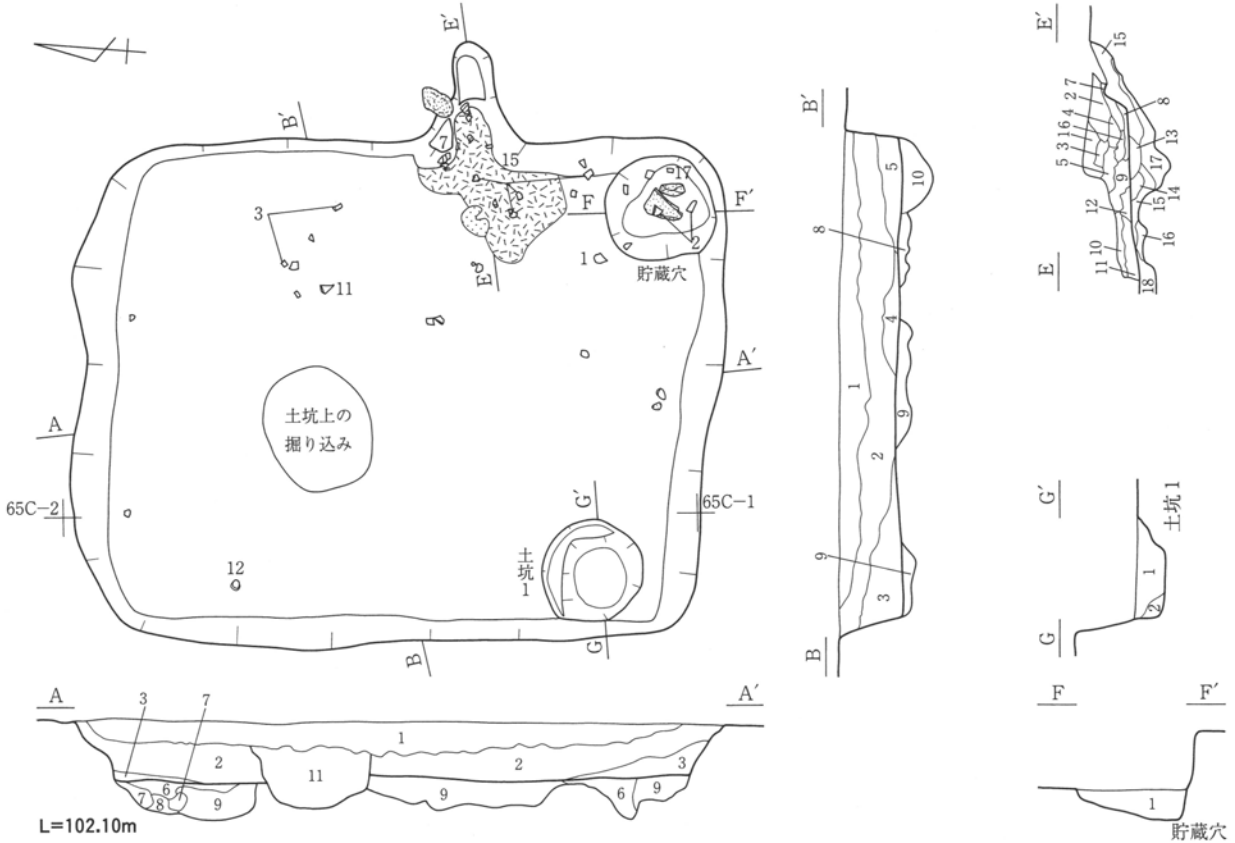
重複 北東部分で6号・8号溝と重複していた。住居が埋没する過程で、長径98cm短径83cmの土坑状の掘り込みが重なる。この中から杯(8)と須恵器杯(9)の一部が出土している。

形状 南北を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸5.02m、短軸3.94mである。

面積 16.11㎡ 方位 N-93°-E

床面 遺構確認面から46cm程掘り込んで床面となる。南東部分がやや低い。

埋没土 ローム粒・ブロックと軽石粒を含む暗褐色土で埋まっていた。



- 1. 暗褐色土 軽石粒、ローム粒を含む。
- 2. 暗褐色土 多くのローム粒・ブロックと軽石粒を含む。
- 3. 暗褐色土 2層よりローム粒・ブロックを多く含む。
- 4. 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混土。
- 5. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- 6. 黄暗褐色土 ロームと暗褐色土の混土。
- 7. 黄暗褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 8. 黄褐色土 ローム主体。
- 9. 黄褐色土 ロームブロックをやや多く含む。
- 10. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを含む。
- 11. 土坑状の掘り込み 22号住居埋没過程で掘り込まれ埋没した。

宮下C区 22号住居 貯蔵穴

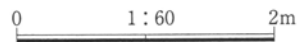
- 1. 黄暗褐色土 ロームブロックを少量含む。

宮下C区 22号住居 土坑1

- 1. 黄暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 2. 暗黄色土 壁面崩落土。

宮下C区 22号住居 竈

- 1. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、軽石粒を含む。
- 2. 黄褐色土 ローム粒、焼土粒を含む。天井部崩落土か。
- 3. 黄褐色土 2層よりローム、焼土の量が多い。
- 4. 明黄褐色土 ローム粒を多く含む。
- 5. 明黄褐色土 4層よりロームを多く、焼土粒・小ブロックを全体に含む。
- 6. 暗褐色土 ローム粒を混入。
- 7. 褐色土 焼土ブロックを多く、4層よりローム粒を少なく含む。
- 8. 暗褐色土 6層に焼土粒・ブロックを混入。
- 9. 暗褐色土 ロームの混土。焼土粒を含む。
- 10. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒・小ブロックを含む。
- 11. 黄褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
- 12. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを含む。
- 13. 褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 14. 黄褐色土 ローム粒を多く含む。
- 15. 褐色土 粘土粒をわずかに含む。
- 16. 褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
- 17. 褐色土 ロームブロックを含む。
- 18. 黄褐色土 ローム粒を多く含む。



第336図 C区22号住居(1)

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。全長99cm、燃焼部幅27cm、焚口部幅40cmである。燃焼部は住居内から一部地山を掘り込んで設置されていた。掘り方面には土坑状の掘り込みがみられた。煙道部は基部のみの残存であるが、燃焼部底面から弱い段をなして移行していると考えられる。燃焼部から焚口部手前にかけて灰が広がっていた。焼土ブロックも散見された。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は長径86cm短径82cmで床面からの深さは28cm程である。上端の形状はほぼ円形を呈する。底面に接して角閃石安山岩の礫が出土した。

土坑 南西隅に掘られていた。規模は直径81cmで床面からの深さは24cm程である。上端の形状は円形

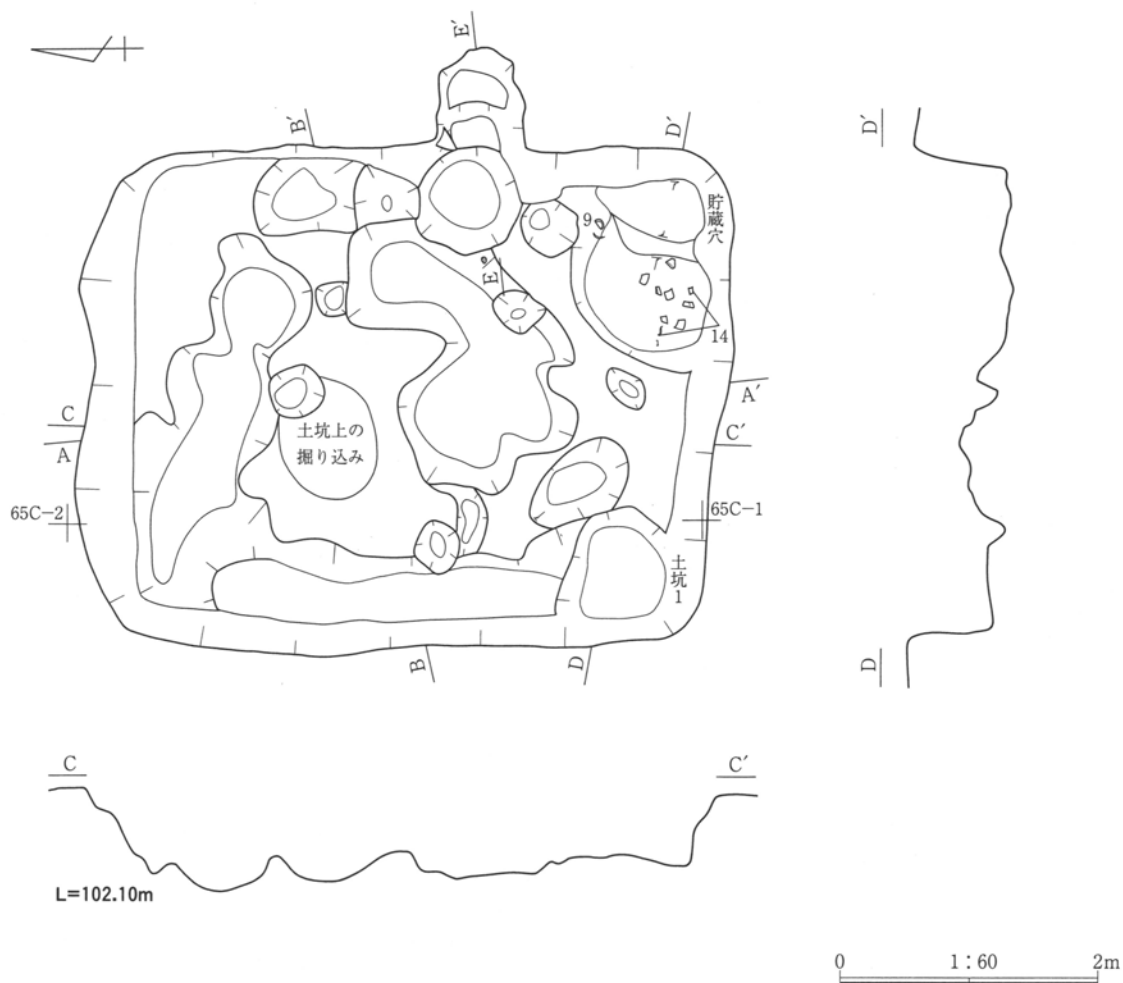
を呈する。

遺物 出土量は少なく破片状態で出土した資料が大半である。竈燃焼部・焚口部からは甕(15)、杯(1・4)が出土したが一部分の残存である。甕(15)は貯蔵穴内から破片が出土している。貯蔵穴内からは甕(14)と杯(2)が破片の状態で出土している。灰釉陶器蓋(12)はほぼ完形の資料で住居北西部分の床面から4cm離れての出土である。他に埋没土中から墨書が記された土師器杯(7)が出土している。

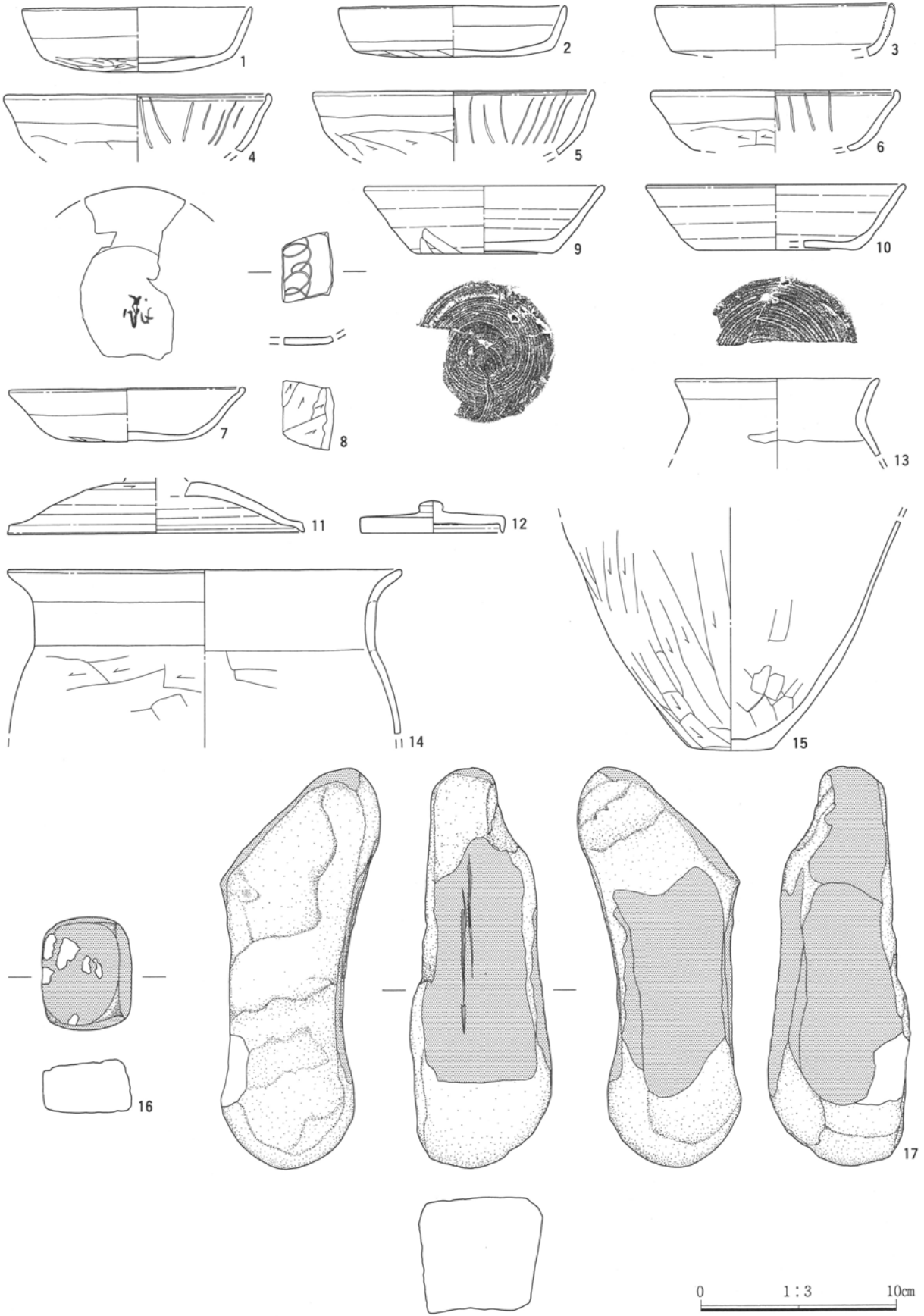
また、貯蔵穴内から砥石(17)が、竈焚口部から軽石製の砥石(16)が出土している。

掲載した資料の他に土師器破片1,021点、須恵器破片57点、軟質陶器破片1点、陶磁器破片2点、弥生土器破片6点が出土した。(観P73・74)

所見 平安時代の住居と考えられる。



第337図 C区22号住居(2)



第338図 C区22号住居出土遺物

C区 30号住居 (第339~341図、PL72・138)

位置 55D-15・16

重複 なし。後世の攪乱により住居の主要部分が壊されていた。

形状 南北を長軸とする方形を呈していたか。残存規模は南北長2.80m、東西長2.60mである。

面積 (6.46)m² **方位** N-105°-E

床面 残存した遺構確認面から18cm程掘り込んで床面となる。床面には凹凸が多少あった。

埋没土 As-Cを少量含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁はほぼ中央に造られていた。全長69cm、燃焼部幅31cm、焚口部幅69cmである。左右の袖部に袖

石が1点ずつ残っていた。

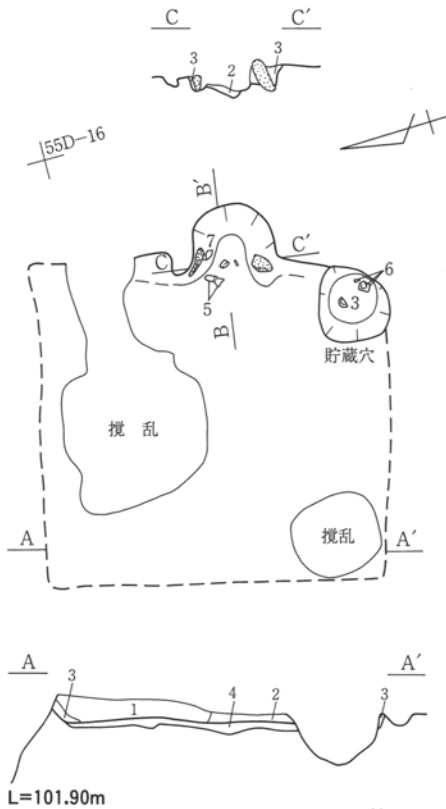
周溝・柱穴 不明。

貯蔵穴 南東隅に掘られていた。掘り方における規模は長径58cm短径54cm、深さ34cm程である。上端の形状はほぼ円形を呈する。

遺物 状態の良い資料の出土は見られず、竈燃焼部から焚口部内にかけて甕(5・7)や杯(1)、貯蔵穴内から須恵器杯(3)、甕(6)が出土している。

掲載した資料の他に土師器破片227点、須恵器破片3点、軟質陶器破片7点、陶磁器破片1点、埴輪? 1点が出土している。(観P74・75)

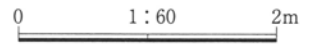
所見 平安時代の住居と考えられる。



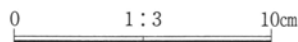
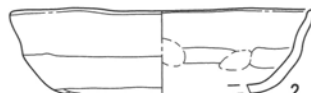
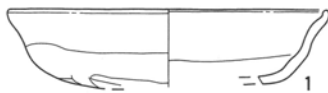
宮下C区 30号住居 竈

- 1. 黒褐色土 焼土粒・ブロック、ロームを混入。
- 2. 焼土主体
- 3. 黒褐色土 ローム粒を混入。

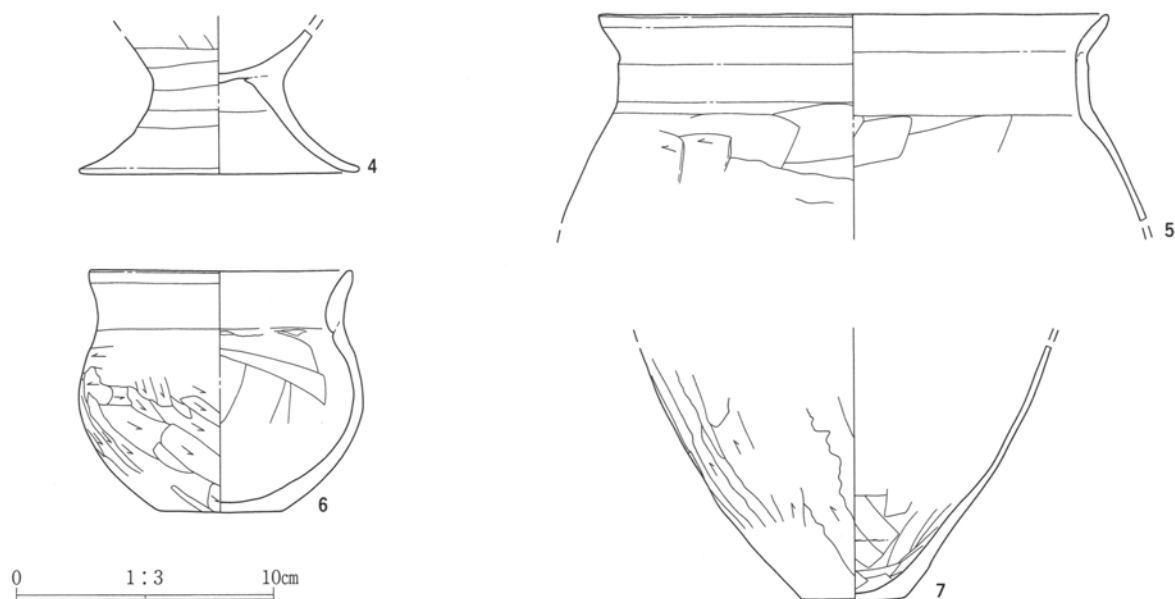
- 1. 黒褐色土 As-Cを含む。
- 2. 暗褐色土 As-Cを少量含む。
- 3. 暗褐色~黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 4. 暗褐色土 ロームブロックを含む。



第339図 C区30号住居



第340図 C区30号住居出土遺物(1)



第341図 C区30号住居出土遺物(2)

C区 35号住居 (第342~345図、PL72・138)

位置 54T-14・15

重複 北側で3号井戸と重複し、本遺構が3号井戸により掘り込まれている。

形状 南北に長軸を有し、北壁を下辺とする台形状を呈する。規模は長軸3.36m、短軸2.96mである。

面積 8.41m² **方位** N-98°-E

床面 遺構確認面から28cm程掘り込んで床面となる。南壁際は北壁際に比べ10cm程度低い。床面南側に硬化面が残り、特に竈手前部分は踏み固められ硬化していた。

埋没土 As-Cを含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。燃烧部は地山を大きく掘り込み壁外に設けられていた。煙道部は削平されていた。袖部は地山を掘り残し、住居内に短い基部が認められた。

支脚石1点が燃烧部左寄りに据えられていること、更に燃烧部幅から考えると、甕を2個を横並びに使用した竈の可能性が高いと考えられる。

焚口部は磔を組み合わせた鳥居状の構造がとられていたが、天井部を形造っていた角閃石安山岩の加工石材は床面に崩落し二折になっていた。天井石を支える磔は左側が2石、右側が1石、原位置を保っていた。燃烧部底面に灰層が堆積していた。

全長80cm、燃烧部幅47cm、焚口部幅70cmである。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は長径68cm短径65cm、床面からの深さ25cm程である。上端の形状は不定形を呈する。

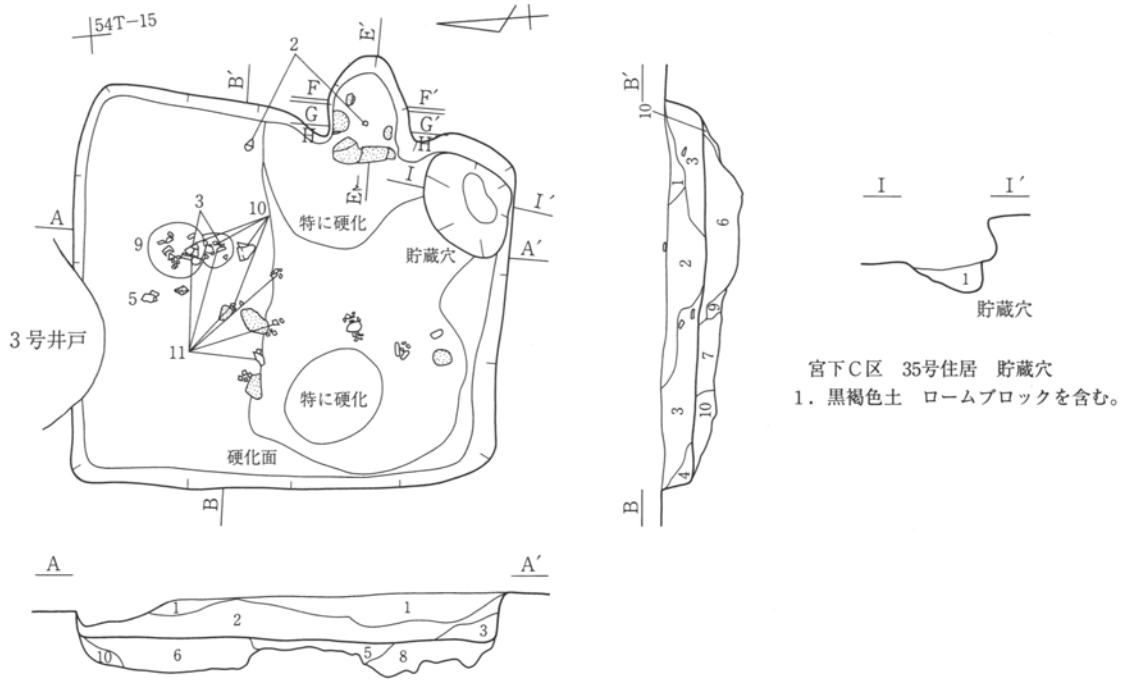
床下 床面下を精査したところ、床面下に10~15cmほどの掘り方埋没土が認められた。中央および北東部分には土坑状の掘り方を検出した。中央部分は長径106cm短径86cm以上、深さ10cm。北東部分は長径138cm短径136cm、深さ26cmである。

遺物 床面の中央から北壁寄りにかけて甕(10・11)が細片となり、床面直上から10cmほど離れた層中から出土している。埋没土中から棒状鉄製品(12)の一部が出土している。

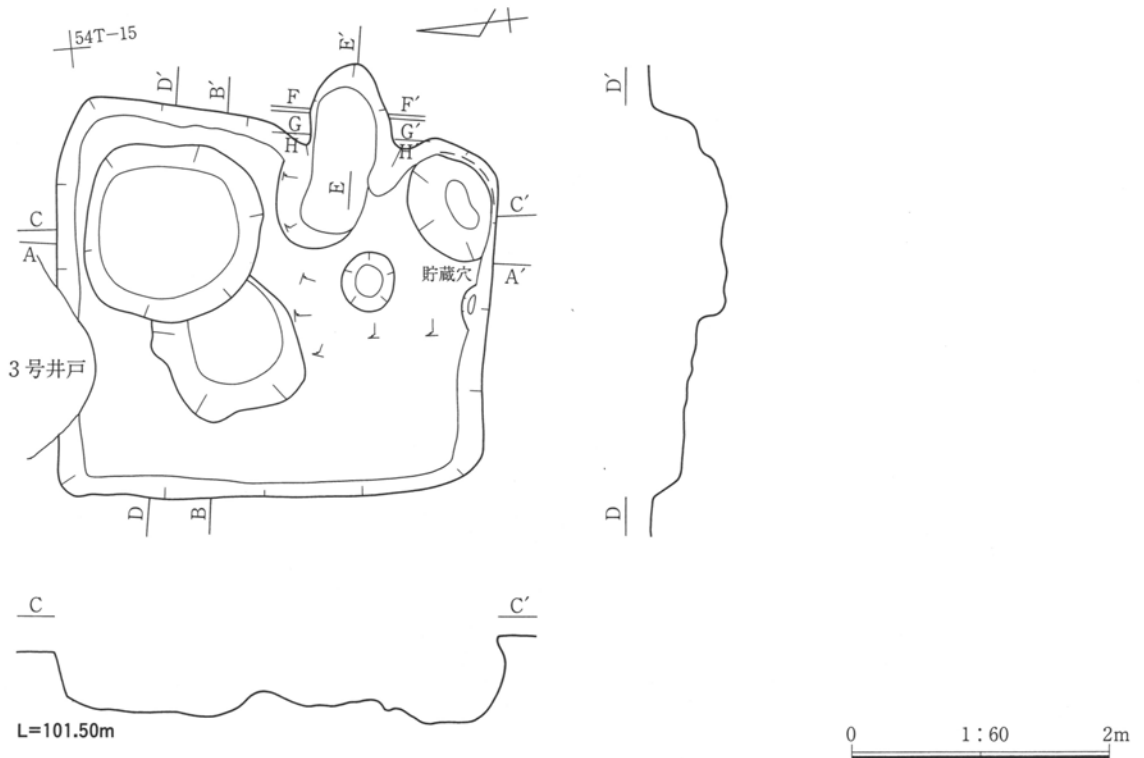
掲載した資料の他に土師器破片468点、須恵器破片33点、軟質陶器破片8点、陶磁器破片7点が出土している。(観P75・76)

所見 平安時代の住居と考えられる。

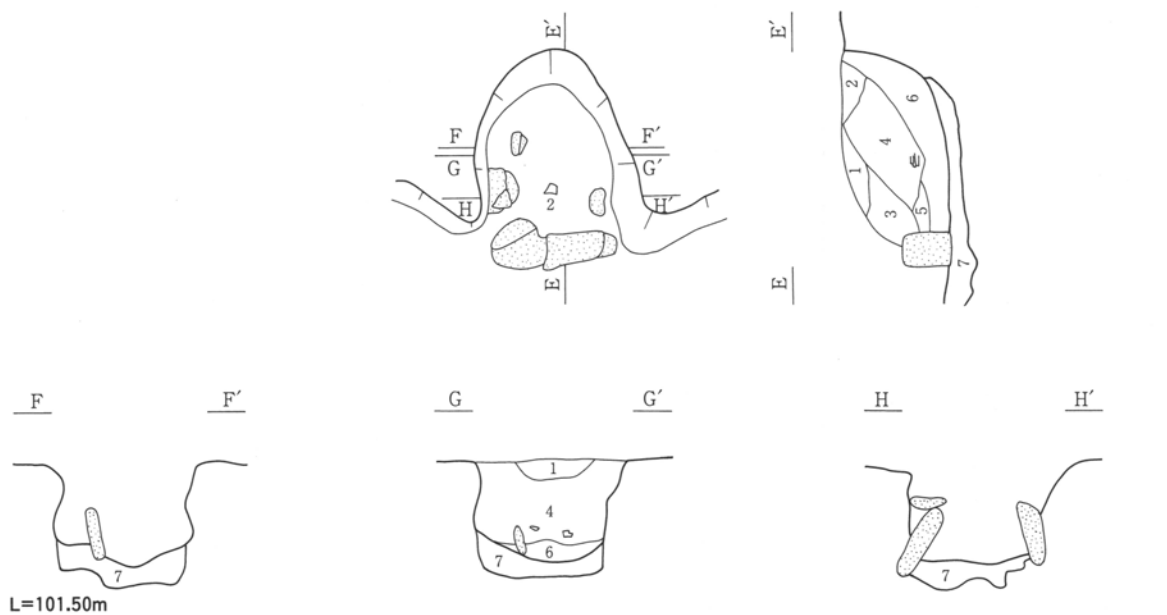
第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



- | | |
|----------------------------------|----------------------------|
| 1. 黒褐色土 As-C、ローム粒・ブロックを少量含む。 | 6. 暗褐色土 ロームブロックを含む。 |
| 2. 黒褐色土 As-Cを微量に、ロームブロックを部分的に含む。 | 7. 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。 |
| 3. 黒色土 As-Cを含む。 | 8. 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。 |
| 4. 暗褐色土 ロームブロックを含む。 | 9. 黄褐色土 ローム主体。 |
| 5. 暗褐色土 ロームブロックを斑に含む。 | 10. 褐色土 濁ったローム。ロームブロックを混入。 |



第342図 C区35号住居(1)

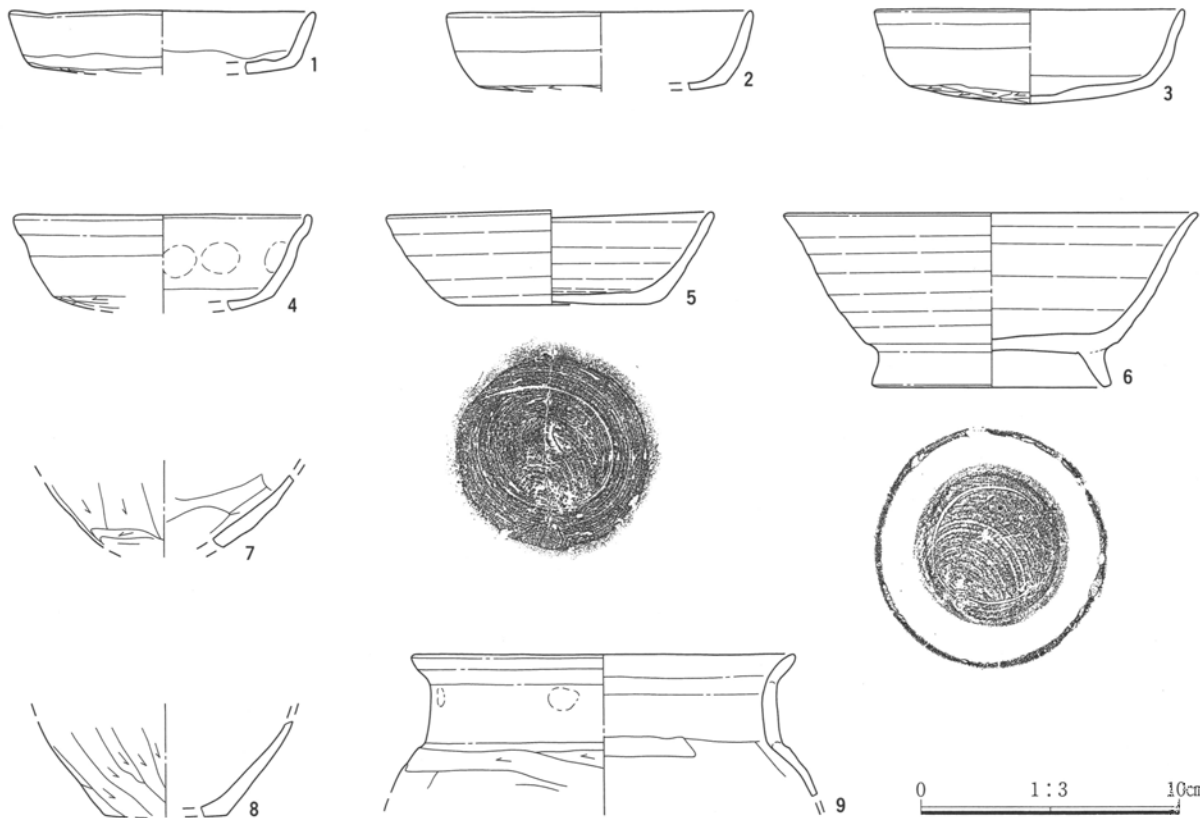


宮下C区 35号住居 竈

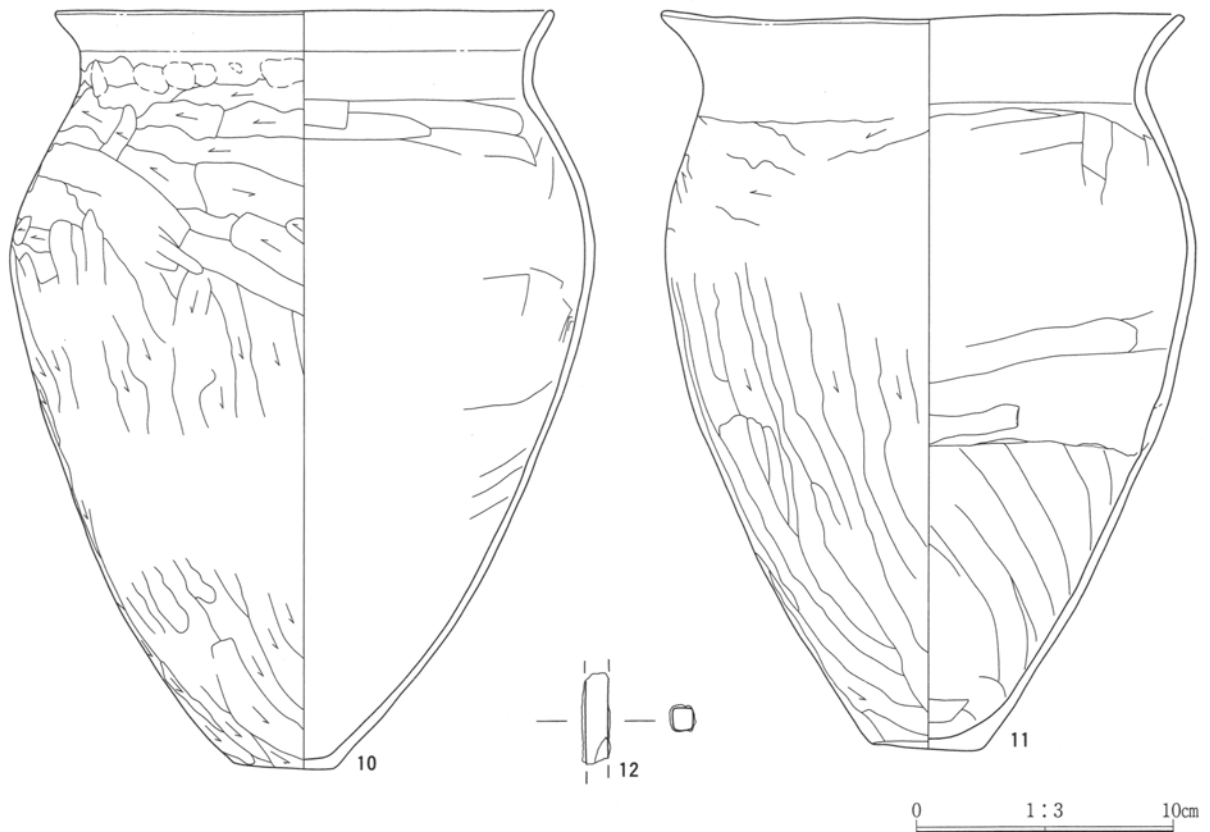
- 1. 黄褐色ローム 竈に貼った土。
- 2. 褐色ローム ローム、黒褐色土を混土。焼土粒含む。
- 3. 暗褐色土 焼土粒をわずかに含む。

- 4. 黒褐色土 焼土粒・ブロック、ロームブロックを含む。
- 5. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 6. 黒色土 焼土粒を含む。灰を混入。
- 7. 褐色土 少量の焼土粒と多くのローム小ブロックを含む。

第343図 C区35号住居(2)



第344図 C区35号住居出土遺物(1)



第345図 C区35号住居出土遺物(2)

C区 36号住居 (第346・347図、PL73・139)

位置 55A-14・15

重複 なし。後世の攪乱により北東隅・北西隅・南西隅が壊されていた。

形状 攪乱で壊されている部分があるが、東西を長軸とする方形を呈する。四隅はやや丸味を有する。規模は長軸3.84m、短軸3.53mである。

面積 (11.66)m² **方位** N-91°-E

床面 遺構確認面から18cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で、竈手前から中央部分にかけて硬化していた。

埋没土 上層はAs-Cを含む黒褐色土で、床面直上層はAs-Cとローム粒・ブロックを少量含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。攪乱により燃焼部・煙道部の一部が壊されていた。燃焼部底面はよく焼けて一部が焼土化していた。全長75cm、燃焼部幅66cm、焚口部幅82cmである。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

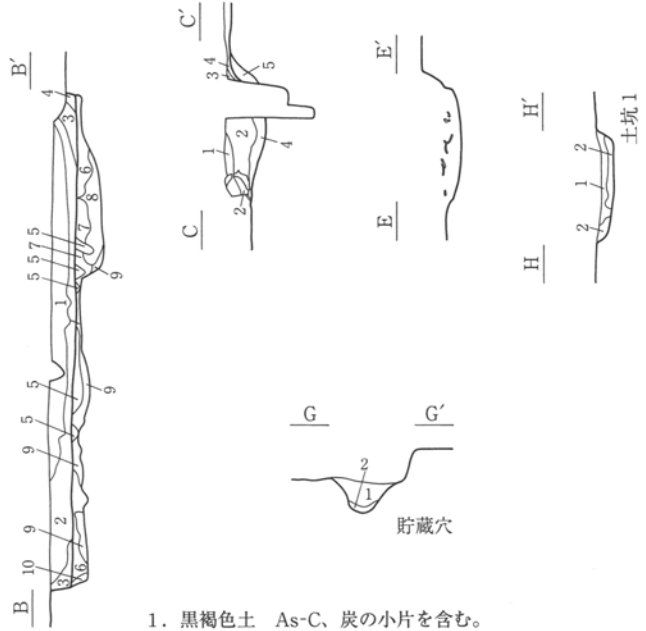
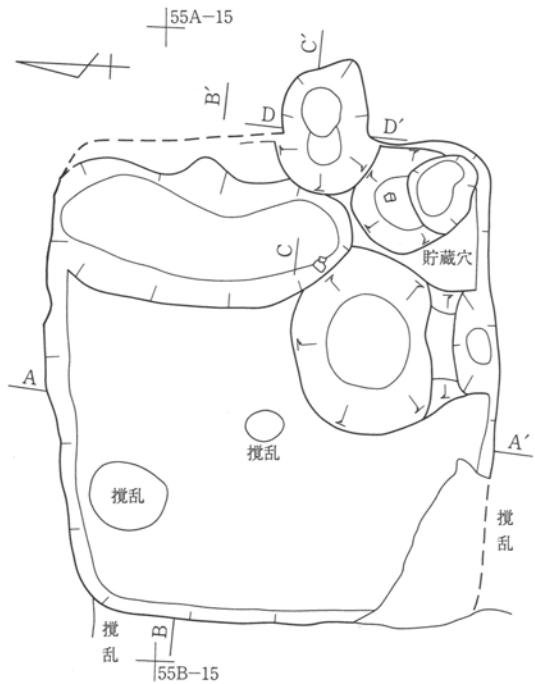
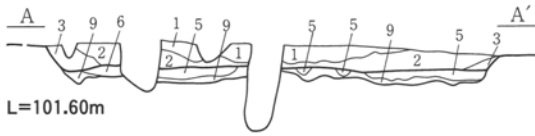
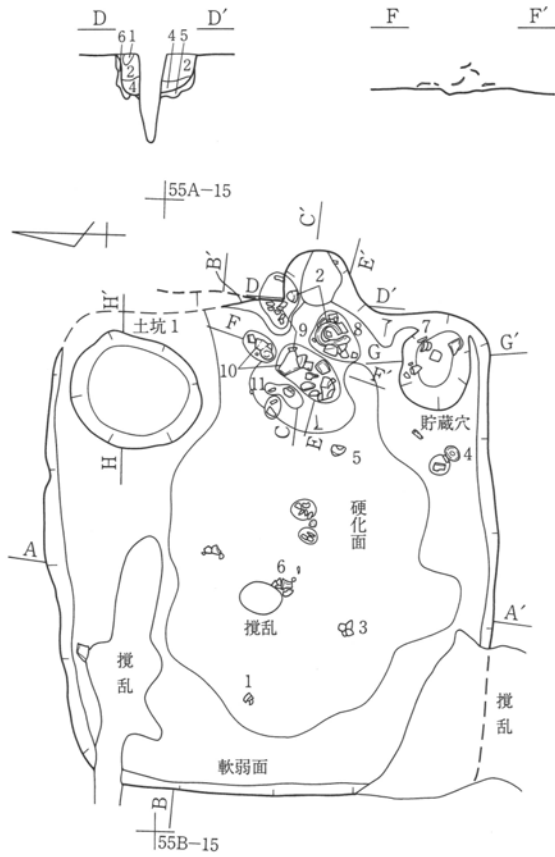
貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は長径68cm短径52cm、床面からの深さ29cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

土坑 北東部分に掘られていた。規模は長径103cm短径87cm、床面からの深さ17cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

遺物 竈焚口部手前を中心に土器が出土した。右袖部左手前には甕(8)が口縁部を上に向けてあった。更にその手前からは甕(8~11)が混在して出土した。また、杯(2)は底部内面に墨書が認められるものであるが、左袖部と焚口部出土の破片が接合している。須恵器杯(4)は南東の床面直上からの出土で、「主」の刻書がみられる。杯(1)は西側床面からわずかに離れた高さから出土したが、底部外面に墨書が認められた。

掲載した資料の他に土師器破片670点、須恵器破片80点、軟質陶器破片4点、陶磁器破片8点、器種不明破片1点が出土している。(観P76・77)

所見 平安時代の住居と考えられる。



1. 黒褐色土 As-C、炭の小片を含む。
2. 黒褐色土 As-C、ローム粒・ブロックを少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。
4. 黄褐色土 ブロック状に混入。
5. 黒褐色土 ロームブロックを含む。
6. 暗褐色土 ロームと黒褐色土の混土。
7. 褐色土 ロームブロックを含む。
8. 暗褐色土 5層より色調が明るい。
9. 褐色土 やや濁ったローム。
10. 褐色土

宮下C区 36号住居 竈

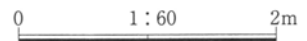
1. 黒褐色土 焼土粒、ローム粒が少量混入。
2. 暗褐色土 焼土、ローム粒・小ブロックを少量含む。
3. 暗褐色土 焼土を多く含む。
4. 黒色土 焼土粒を散見する。
5. 暗褐色土 焼土粒を含む。上面に焼土化した部分あり。
6. 暗褐色土 ロームが斑に混入。

宮下C区 36号住居 貯蔵穴

1. 暗赤褐色土 焼土粒・小ブロックが多量
ロームブロックが少量混入。
2. 暗褐色土 ロームブロックが多く混入。

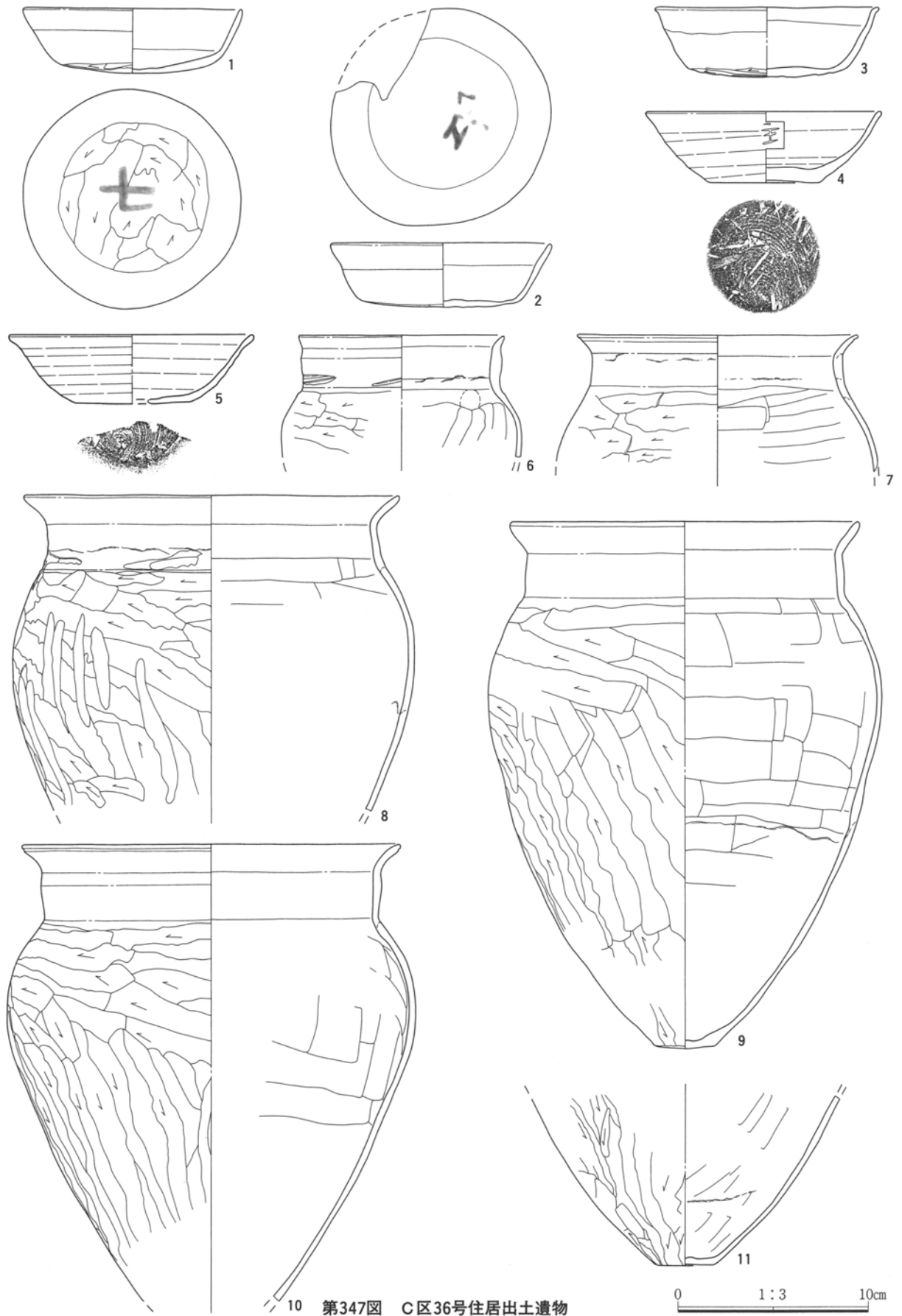
宮下C区 36号住居 土坑1

1. 暗褐色土 ロームブロックが少量混入。
2. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。



第346図 C区36号住居

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



第347図 C区36号住居出土遺物

C区 37号住居 (第348・349図、PL73・140)

位置 55A-13

重複 なし。攪乱により北西部分と北壁面の一部が壊されていた。

形状 後世の攪乱により壊されている部分があるが、南北を長軸とする台形を呈する。規模は長軸3.38m、短軸2.82mである。

面積 (8.06)m² **方位** N-93°-E

床面 遺構確認面から12cm程掘り込んで床面となる。北側と南側で段差があり、北側が5cm程度高い。

埋没土 As-Cとロームブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。掘り方の一部にAs-Cが少量含まれていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。燃焼部

は地山を大きく掘り込み、壁外に設けられていた。全長100cm、燃焼部幅43cm、焚口部幅65cmである。袖部の構築に地山ロームが利用されていた。

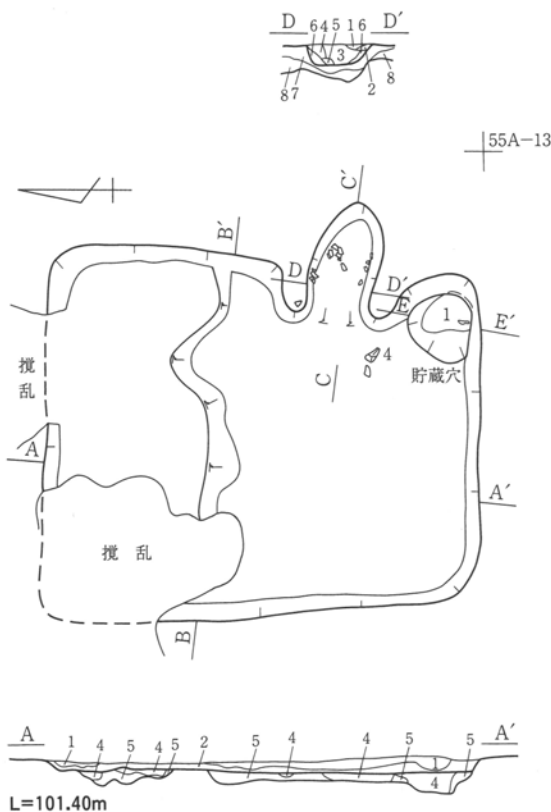
周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は長径51cm短径50cm、床面からの深さ34cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

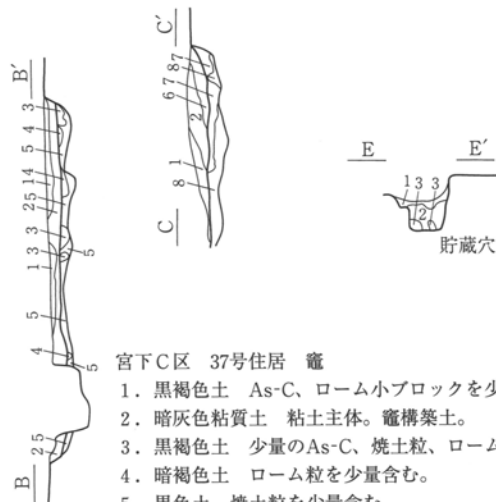
遺物 埋没土中から少量の出土があった。貯蔵穴内からは土師器杯(1)が破片の状態出土した。

掲載した資料の他に土師器破片145点、須恵器破片11点、軟質陶器破片11点、陶磁器破片3点が出土している。(観P77)

所見 出土遺物から平安時代と考えられる。



1. 黒褐色土 As-C、ロームブロックを少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
3. 黒褐色土 As-Cを少量含む。
4. 暗褐色土 ロームブロックを含み、部分的に斑状に含む。
5. 褐色土 やや濁ったローム。



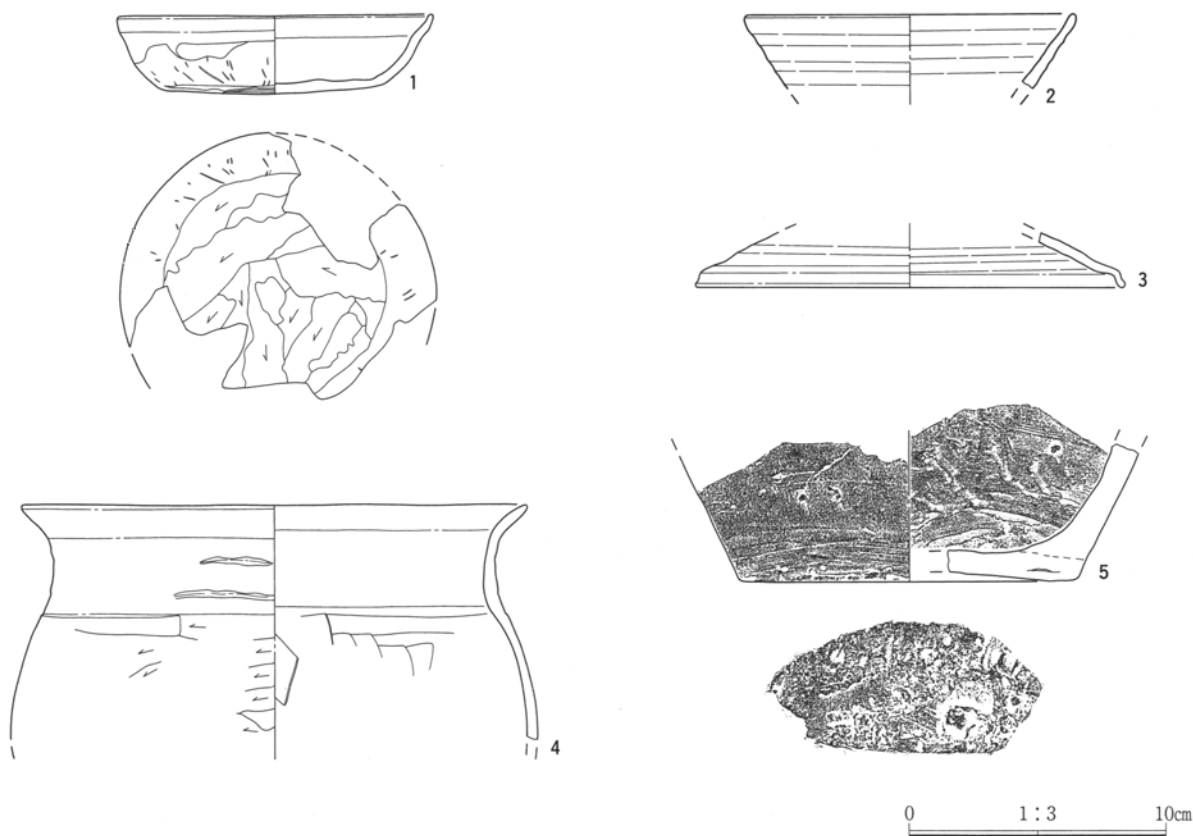
宮下C区 37号住居 竈

1. 黒褐色土 As-C、ローム小ブロックを少量含む。
2. 暗灰色粘質土 粘土主体。竈構築土。
3. 黒褐色土 少量のAs-C、焼土粒、ローム粒を含む。
4. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
5. 黒色土 焼土粒を少量含む。
6. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒を含む。
7. 暗褐色土 ローム粒と上位に多くの焼土粒を含む。
8. 褐色土 ロームと黒褐色土の混土。

宮下C区 37号住居 貯蔵穴

1. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
3. 黒色粘質土 粘土。

第348図 C区37号住居



第349図 C区37号住居出土遺物

C区 40号住居

(第350・351図、PL65・74・140)

位置 55A-12、55B-12・13

重複 東壁面の竈部分で38号住居と、北側で39号住居と重複し、本遺構が両遺構を掘り込んでいた。後世の攪乱により南西部分が壊されていた。

形状 後世の攪乱により壊されている部分があるが、東西を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸3.98m、短軸3.33mである。

面積 (11.58)m² 方位 N-94°-E

床面 遺構確認面から13cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 As-Cとロームブロックを含む黒褐色土。

竈 東壁中央に造られていた。全長78cm、燃烧部幅40cm、焚口部幅58cmである。燃烧部壁面の一部が焼土化していた。

周溝・柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

ピット 4本掘られていた。ピット1は長径32cm短径28cm、深さ25cm。ピット2は長径31cm短径29cm、

深さ16cm。ピット3は直径31cm、深さ17cm。ピット4は長径24cm短径20cm、深さ12cmである。

土坑 北西隅に掘られていた。規模は長径116cm、短径76cm、深さ28cmである。上端の形状は長円形を呈する。

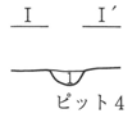
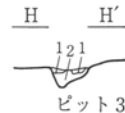
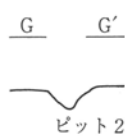
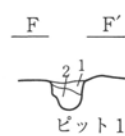
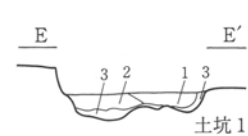
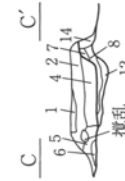
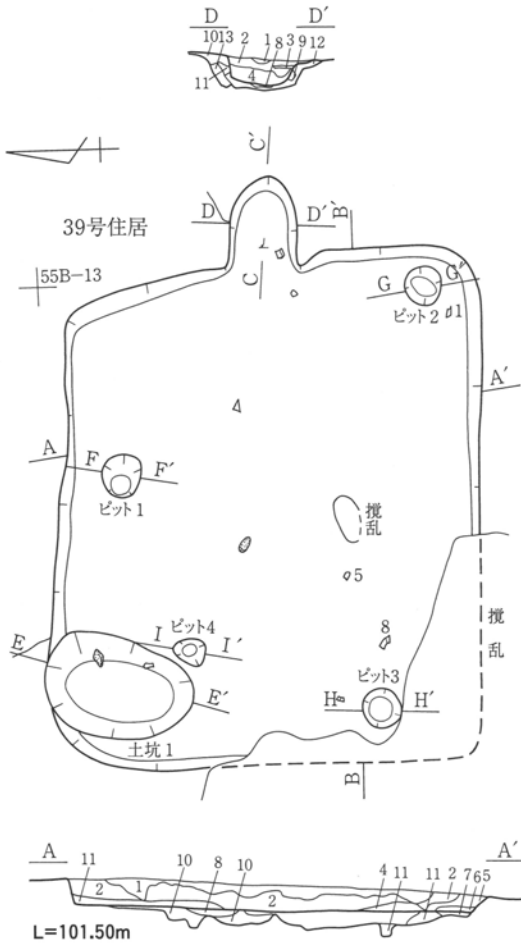
床下土坑 2基出土した。1は竈焚口部手前に掘り込まれていた平面不整形で皿上の土坑である。須恵器(7)が出土した。規模は長径162cm短径143cm、深さ29cmである。2は長径64cm、深さ23cmを測る。

遺物 全体的に土器の出土は少量で床面直上からは遺存状態の良い土器はみられなかった。須恵器杯(7・9)は掘り方内出土である。

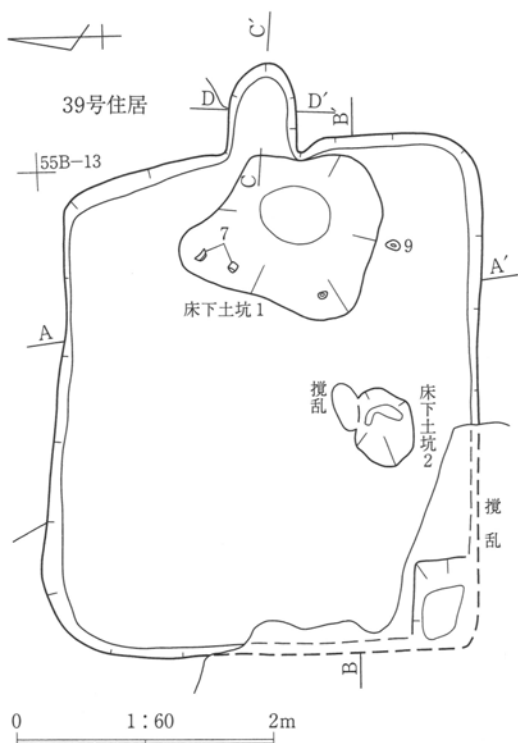
墨書の記された土器が4点出土している。須恵器杯(6)、杯(3)は埋没土中から、杯(4)は掘り方内からの出土でいずれも破片である。

掲載した資料の他に土師器破片217点、須恵器破片17点、陶磁器破片1点、縄文土器破片1点が出土している。(観P77・78)

所見 平安時代の住居と考えられる。



1. 黒褐色土 As-C、少量のローム小ブロックを含む。
2. 黒褐色土 1層よりAs-Cを多く含む。
3. 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
4. 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
5. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを含む。
6. 褐色土 ロームブロックを主体とする。
7. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。
8. 暗褐色土 7層に近い。ロームブロックは少ない。
9. 暗褐色土 7層より明るく、ローム粒を多く含む。
10. 黄褐色土 地山と同様のローム主体。
11. 褐色土 ロームブロックを多く含む。



宮下C区 40号住居 竈

1. 暗褐色土 ロームと黒褐色土が斑に混入。As-Cを少量含む。
2. 暗褐色土 ロームと黒褐色土の混土。焼土粒を少量含む。
3. 暗褐色土 1層より黒色味が強い。
4. 暗褐色土 焼土粒・ブロックと少量のローム粒を含む。
5. 褐色土 2層に近い。焼土粒を少量含む。
6. 黒褐色土 灰混入か。焼土粒・ローム粒をわずかに含む。
7. 褐色土 やや濁ったローム。竈構築土。焼土化した面あり。
8. 黒褐色土 ローム粒・小ブロックが少量混入。
9. 黒褐色土 8層よりローム粒がやや多い。焼土粒を含む。
10. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
11. 暗褐色土 ローム粒を混入。As-Cを含む。
12. 褐色土 ロームにやや黒褐色土を混入。
13. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを少量含む。39号住居床下。
14. 黒褐色土 As-Cを混入。38号住居埋没土。

宮下C区 40号住居 土坑1

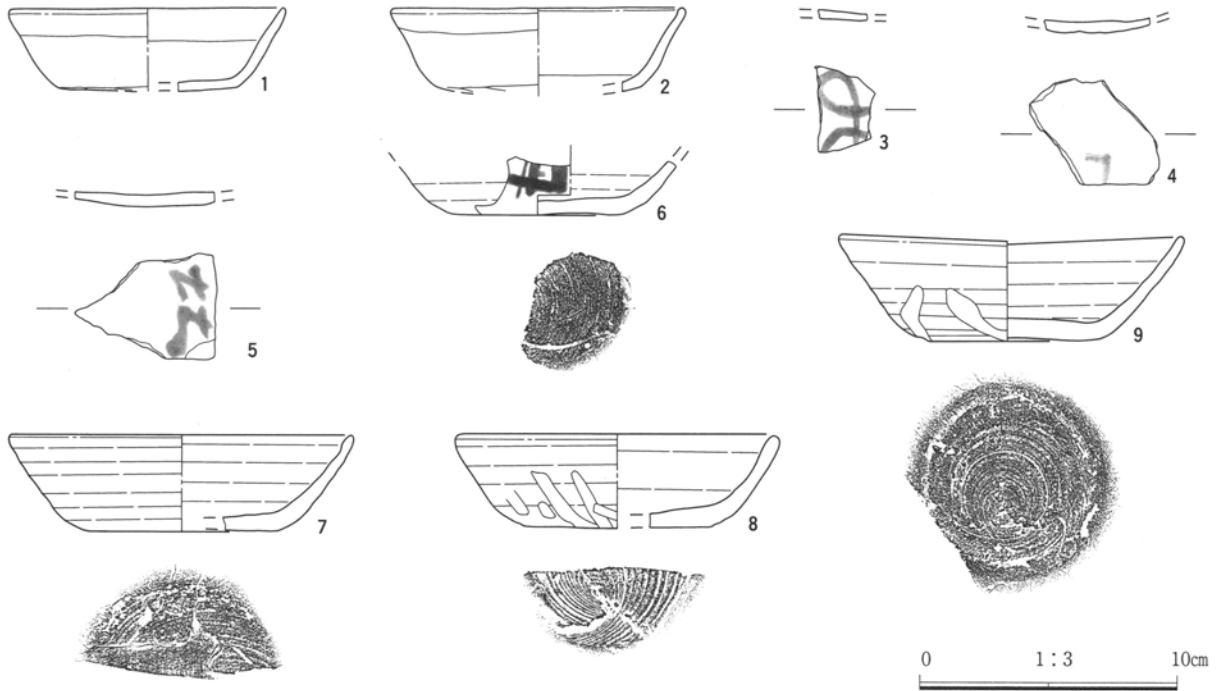
1. 黒褐色土 As-Cを上位に多く含む。
2. 黒褐色土 ローム粒・ブロックを少量含む。
3. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。

宮下C区 40号住居 ピット1・3・4

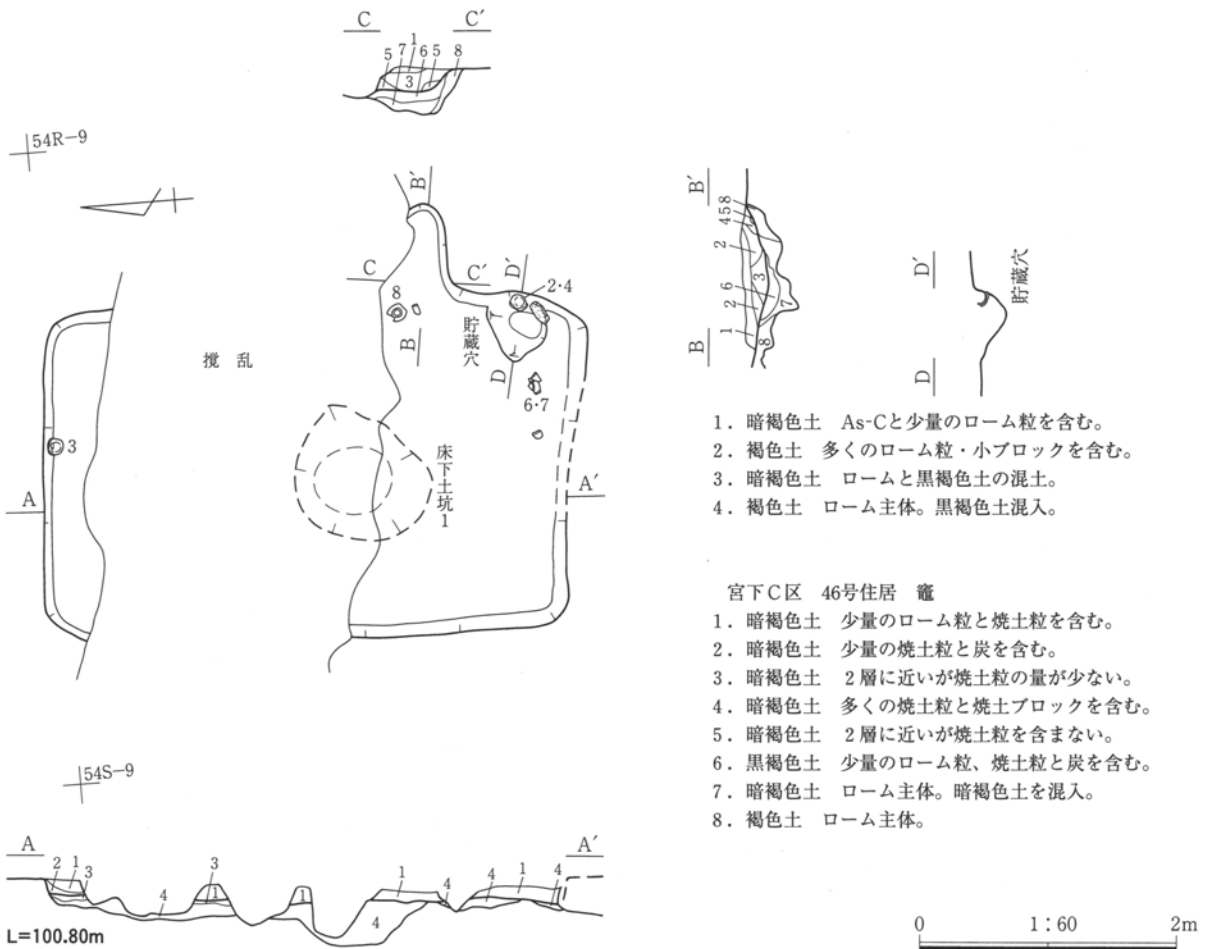
1. 黒褐色土 As-C、ローム粒を少量含む。
2. 黒褐色土 ローム粒・ブロックを含む。

第350図 C区40号住居

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



第351図 C区40号住居出土遺物



- 1. 暗褐色土 As-Cと少量のローム粒を含む。
- 2. 褐色土 多くのローム粒・小ブロックを含む。
- 3. 暗褐色土 ロームと黒褐色土の混入。
- 4. 褐色土 ローム主体。黒褐色土混入。

- 宮下C区 46号住居 竈
- 1. 暗褐色土 少量のローム粒と焼土粒を含む。
 - 2. 暗褐色土 少量の焼土粒と炭を含む。
 - 3. 暗褐色土 2層に近いが焼土粒の量が少ない。
 - 4. 暗褐色土 多くの焼土粒と焼土ブロックを含む。
 - 5. 暗褐色土 2層に近いが焼土粒を含まない。
 - 6. 黒褐色土 少量のローム粒、焼土粒と炭を含む。
 - 7. 暗褐色土 ローム主体。暗褐色土を混入。
 - 8. 褐色土 ローム主体。

第352図 C区46号住居

C区 46号住居 (第352・353図、PL74・140)

位置 54R-8・9

重複 なし。後世の耕作による攪乱が本遺構の掘り方まで及んでいた。

形状 後世の攪乱により壊されている部分があるが、南北を長軸とする長方形を呈すると推定される。規模は長軸4.18m、短軸2.78mである。

面積 (9.85)m² **方位** N-97°-E

床面 遺構確認面から21cm程掘り込んで床面となる。攪乱により床面の約半分が壊されていた。

埋没土 少量のローム粒とAs-Cを含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央南寄りに造られていた。後世の攪乱で左袖部が壊され、竈の規模は計測できなかった。燃焼部下面には少量の焼土粒と灰が堆積していた。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

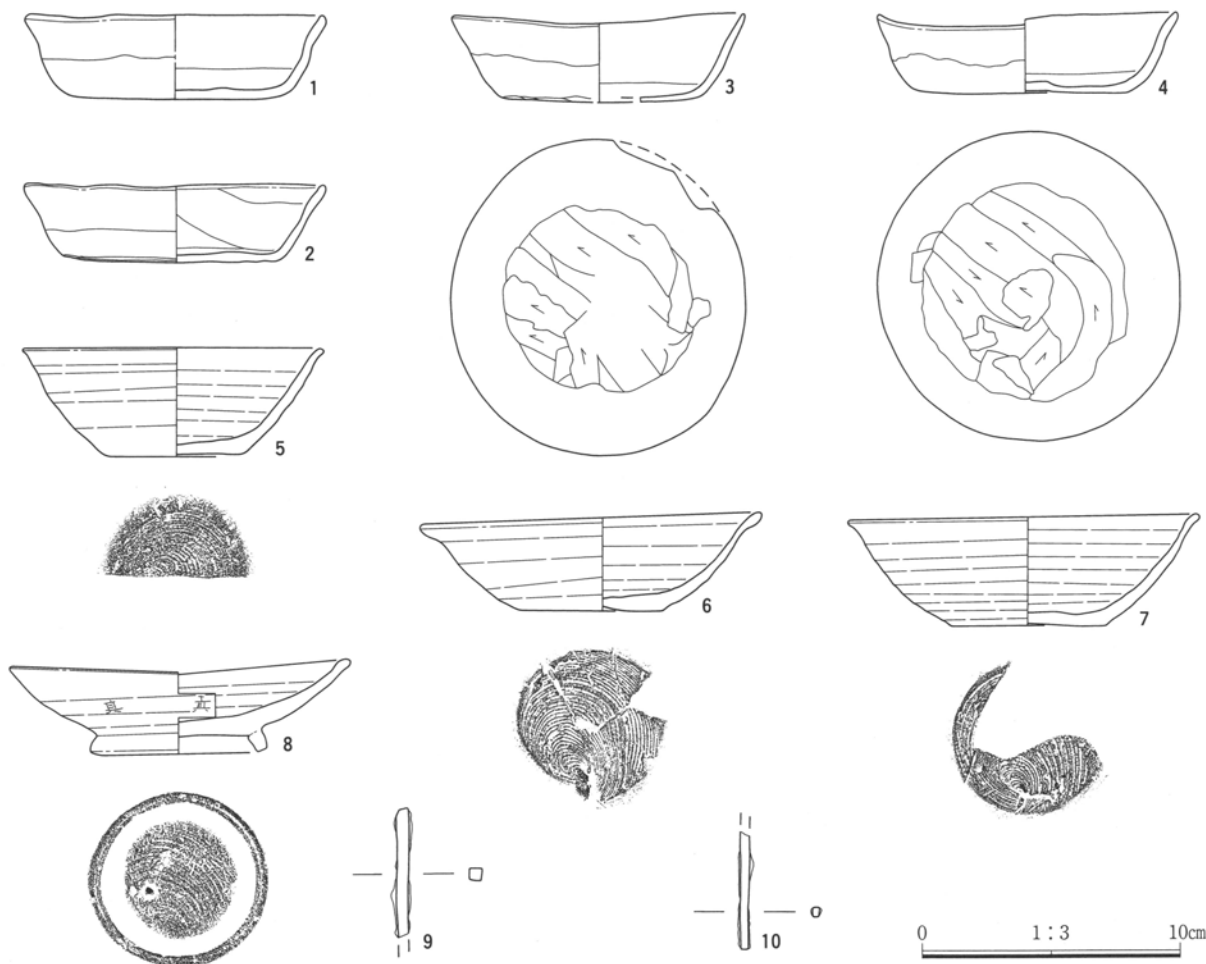
貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は長径54cm短径43cm、床面からの深さ20cm程である。上端の形状は不定形を呈する。杯2点(2・4)が折り重なって出土した。

床下 中央部分に平面円形に近い床下土坑が一基検出された。

遺物 貯蔵穴内出土の杯(2・4)の他に竈焚口部から刻書の記された須恵器高台付皿(8)が出土した。北壁際の床面直上からは杯(3)が、南東部分の床面からやや離れた高さからは須恵器杯(6・7)が出土している。また、埋没土中から棒状の鉄製品(9・10)が出土した。

掲載した資料の他に土師器破片118点、須恵器破片11点、軟質陶器破片7点、陶磁器破片3点が出土した。(観P78・79)

所見 平安時代の住居と考えられる。



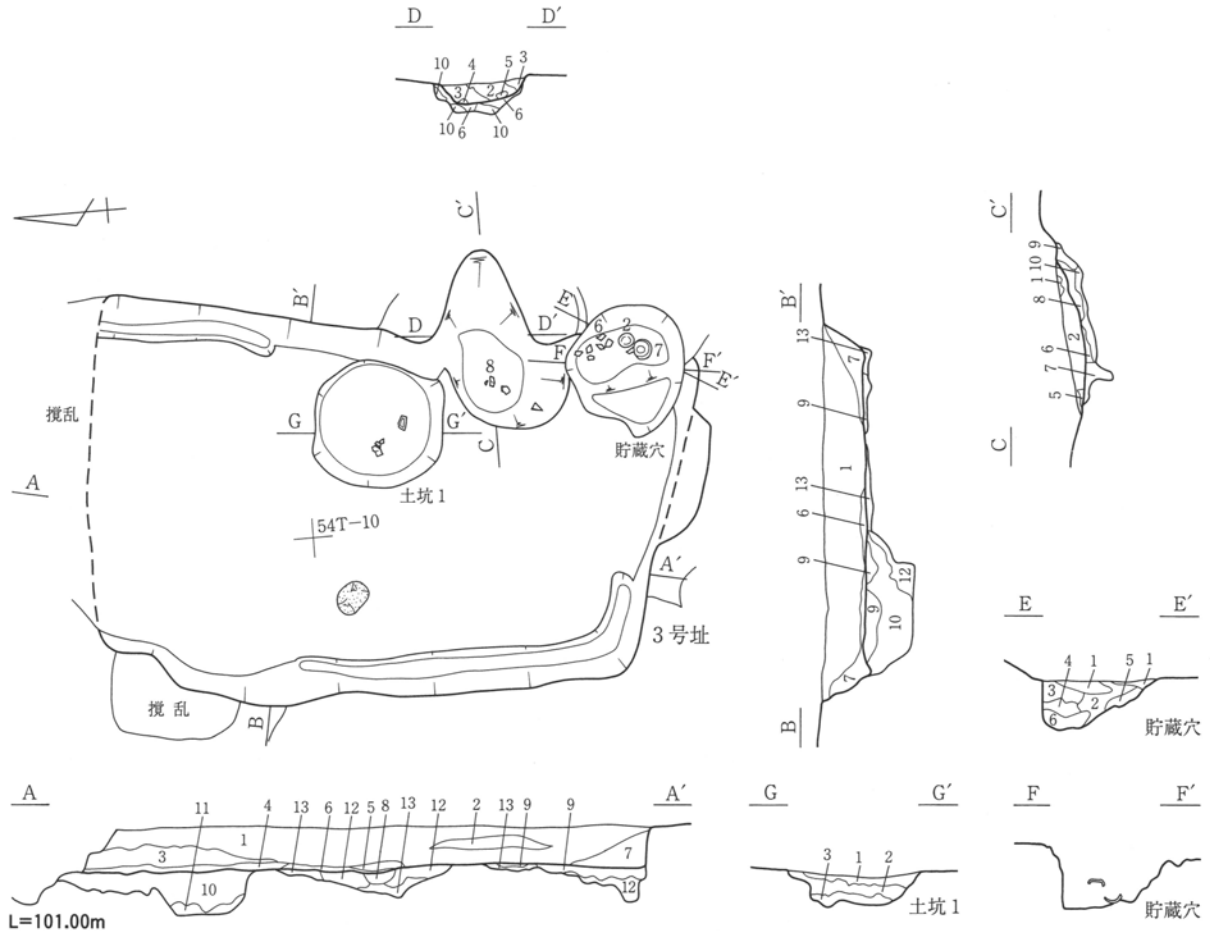
第353図 C区46号住居出土遺物

C区 47号住居 (第354~357図、PL75・141)

位置 54S・T-9・10

重複 西側で3号址を掘り込んでいた。後世の攪乱により本遺構が部分的に壊されていた。

形状 南北を長軸とする不整形を呈すると推定される。規模は長軸の残存4.55m、短軸2.78mである。北・南側の上端線は掘り方や遺構の残存状況から想定する。



1. 黒褐色土 As-Cと少量のローム粒・ブロックを含む。
2. 暗褐色土 As-Cと多くのローム粒を含む。
3. 暗褐色土 As-Cとローム粒・ブロックを含む。
4. 暗褐色土 3層と同様。焼土粒を混入。
5. 暗褐色土 As-Cを微量に、ロームブロックを多く斑に含む。
6. 暗褐色土 ロームブロックと少量の焼土粒を含む。
7. 暗褐色土 As-C、ローム粒・ブロックを含む。
8. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
9. 暗褐色土 8層に比べローム粒・ブロックは少ない。
10. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
11. 褐色土 多くのローム粒・ブロックを含む。
12. 褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
13. 黄褐色土 地山ロームと類似。黒褐色土をわずかに混入。

宮下C区 47号住居 竈

1. 赤褐色土 多くの焼土粒・ブロックを含む。
2. 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
3. 褐色土 多くのローム粒・小ブロックを含む。
4. 赤褐色土 焼土粒を多く含む。
5. 黄褐色土 ローム主体。

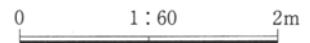
6. 暗褐色土 ローム粒と少量のロームブロックを含む。
7. 黒褐色土 少量のローム粒・ブロックと焼土粒を含む。灰混じりか。
8. 黒褐色土 灰、焼土粒、ロームブロックを含む。
9. 黒褐色土 10層に近い。やや黒色味強い。
10. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。

宮下C区 47号住居 貯蔵穴

1. 黒褐色土 As-Cと少量のローム粒を含む。
2. 暗褐色土 ローム粒が混入。
3. 暗褐色土 多くのローム粒・ブロックと少量の焼土粒を含む。
4. 黒褐色土 ローム粒・小ブロックと少量の焼土粒を含む。
5. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
6. 暗赤褐色土 ロームに焼土、黒色土を散見する。

宮下C区 47号住居 土坑1

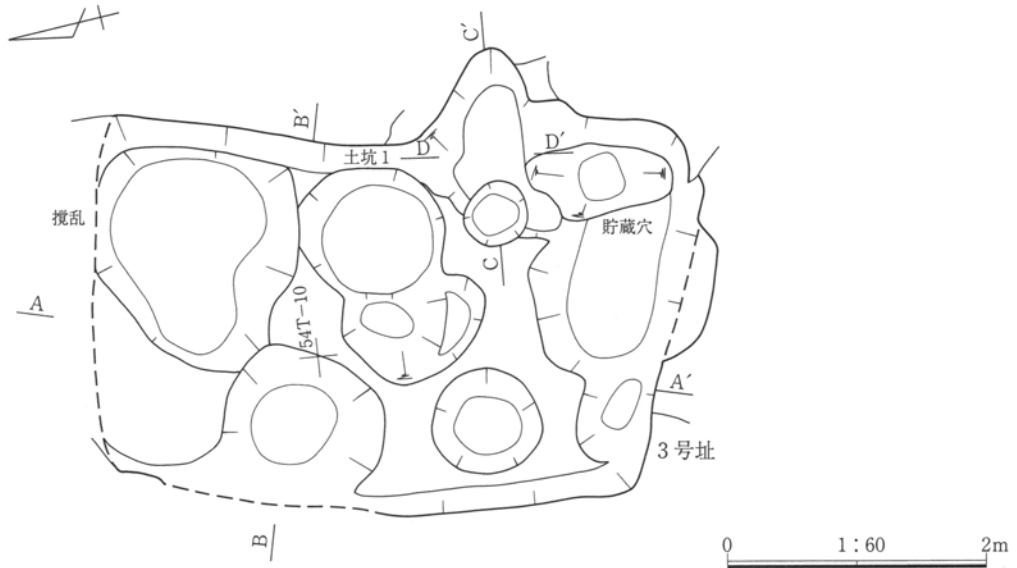
1. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒・小ブロックを含む。
2. 褐色土 ローム主体。ロームブロックを斑に含む。
3. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを含む。



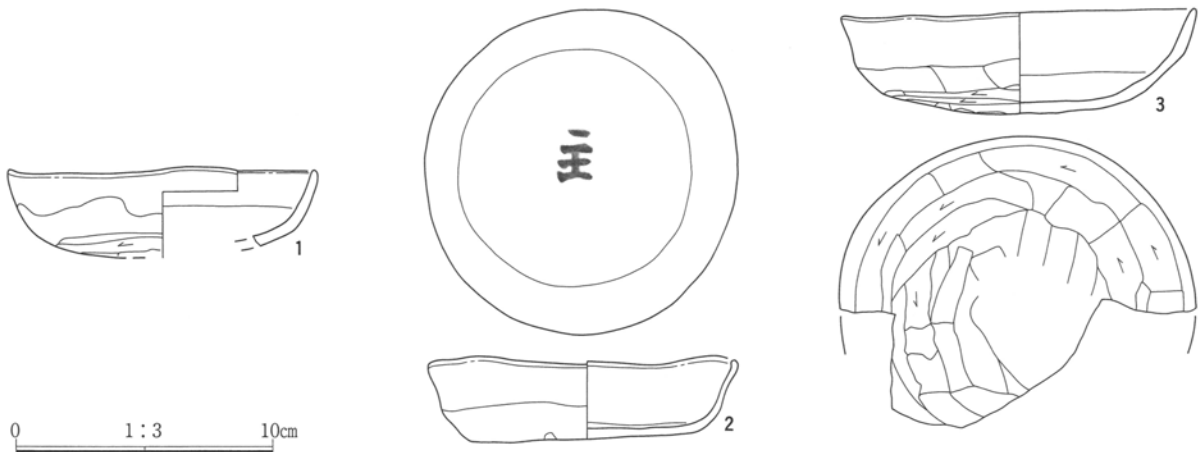
第354図 C区47号住居(1)

面積 (9.94)㎡ **方位** N-100°-E
床面 遺構確認面から36cm程掘り込んで床面となる。床面には凹凸が多少あった。
埋没土 As-Cと少量のローム粒・ブロックを含む黒褐色土で埋まり、床面の一部を直接覆っていた。
竈 東壁中央南寄りに造られていた。全長98cm、燃烧部幅30cm、焚口部幅91cmである。燃烧部下面には灰と焼土粒が堆積していた。
周溝 東・西・南壁面の一部に掘られていた。幅は26~34cmで深さが13~23cmである。
柱穴 掘られていなかった。
貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は直径94cm、床面からの深さ23cm程である。上端の形状はほぼ円形を呈する。

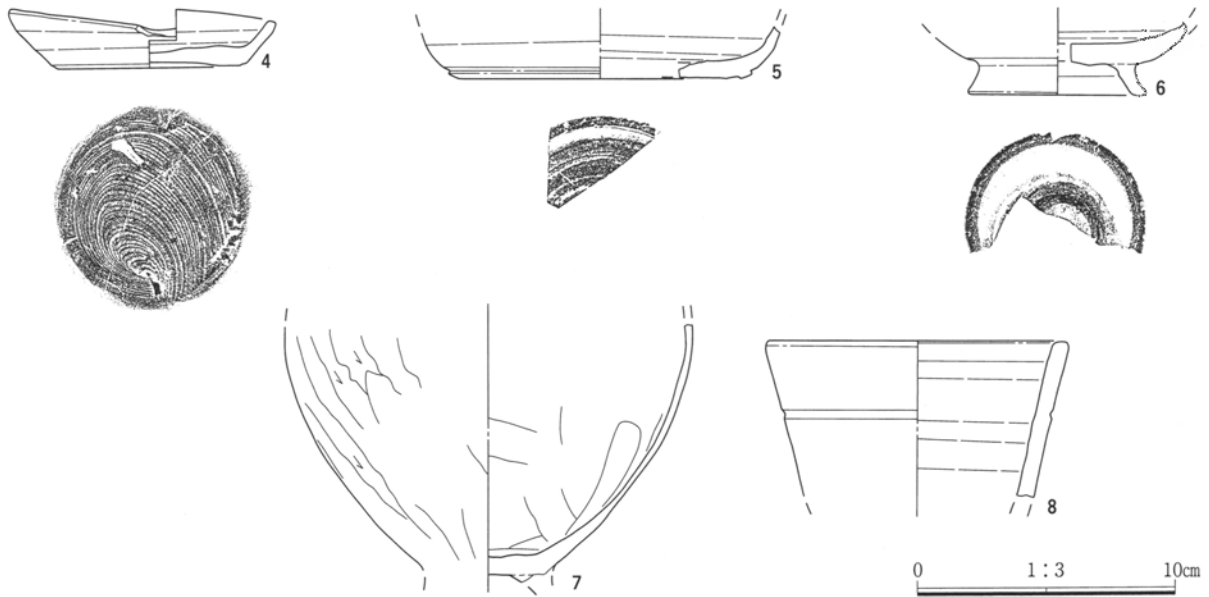
土坑 東壁面際ほぼ中央に掘られていた。規模は長径101cm短径98cm、床面からの深さ30cm程である。上端の形状はほぼ円形を呈する。
床下 床面の下位にはほぼ全面に平面円形の土坑状の掘り方が認められた。北東部分の一つについては、住居埋没土の断面観察により、竈を造り直す際に竈構築材を採掘するために掘削されたものとの調査所見が得られた。
遺物 床面上からの出土はほとんどみられなかった。貯蔵穴内からは台付甕(7)の下半部が底面に貼り付いて、底部外面に墨書の記された杯(1)が底面からやや離れた位置から出土した。(観P79・80)
所見 平安時代の住居と考えられる。



第355図 C区47号住居(2)



第356図 C区47号住居出土遺物(1)



第357図 C区47号住居出土遺物(2)

C区 49号住居 (第358~360図、PL75・141)

位置 54T-8・9

重複 南側で48号住居と重複する。切り合い関係は本遺構の掘り方が48号住居の掘り方に比べ浅い。新旧関係は本遺構が48号住居より新しい。後世の攪乱により本遺構床面の大部分が壊されていた。

形状 後世の攪乱により壊されている部分があるが、南北を長軸とする長方形を呈すると推定される。掘り方で遺構の残存状況から推定すると、規模は長軸3.60m、短軸2.66mである。

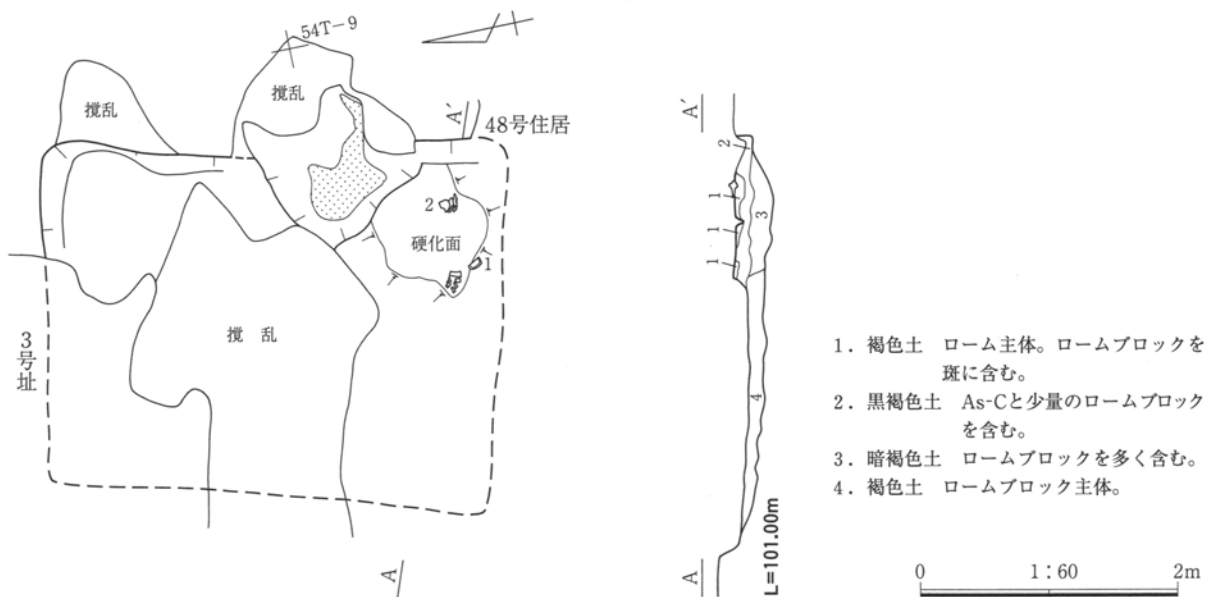
面積 (8.38)m² **方位** N-104°-E

床面 遺構確認面から15cm程掘り込んで床面となる。南東の一部分に硬化した床面が残っていた。

埋没土 後世の攪乱により床面上層の埋没土はほとんど残っていなかった。掘り方はAs-C、ロームブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていたが著しく削平を受け、詳細については不明である。燃焼部から竈手前にかけて焼土が散っていた。

周溝・柱穴・貯蔵穴 確認できなかった。



第358図 C区49号住居

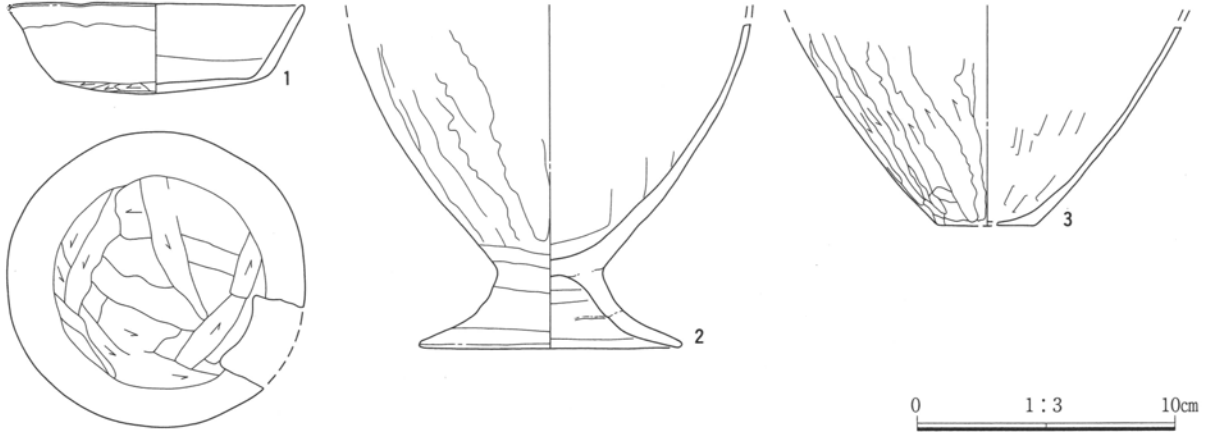
1. 褐色土 ローム主体。ロームブロックを斑に含む。
2. 黒褐色土 As-Cと少量のロームブロックを含む。
3. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
4. 褐色土 ロームブロック主体。

遺物 台付甕(2)が床面上からの出土である。他に掘り方内から杯(1)が出土している。

2点、軟質陶器破片4点、陶磁器破片5点が出土している。(観P80)

掲載した資料の他に土師器破片47点、須恵器破片

所見 平安時代の住居と考えられる。



第359図 C区49号住居出土遺物

C区 48号住居 (第360・361図、PL75)

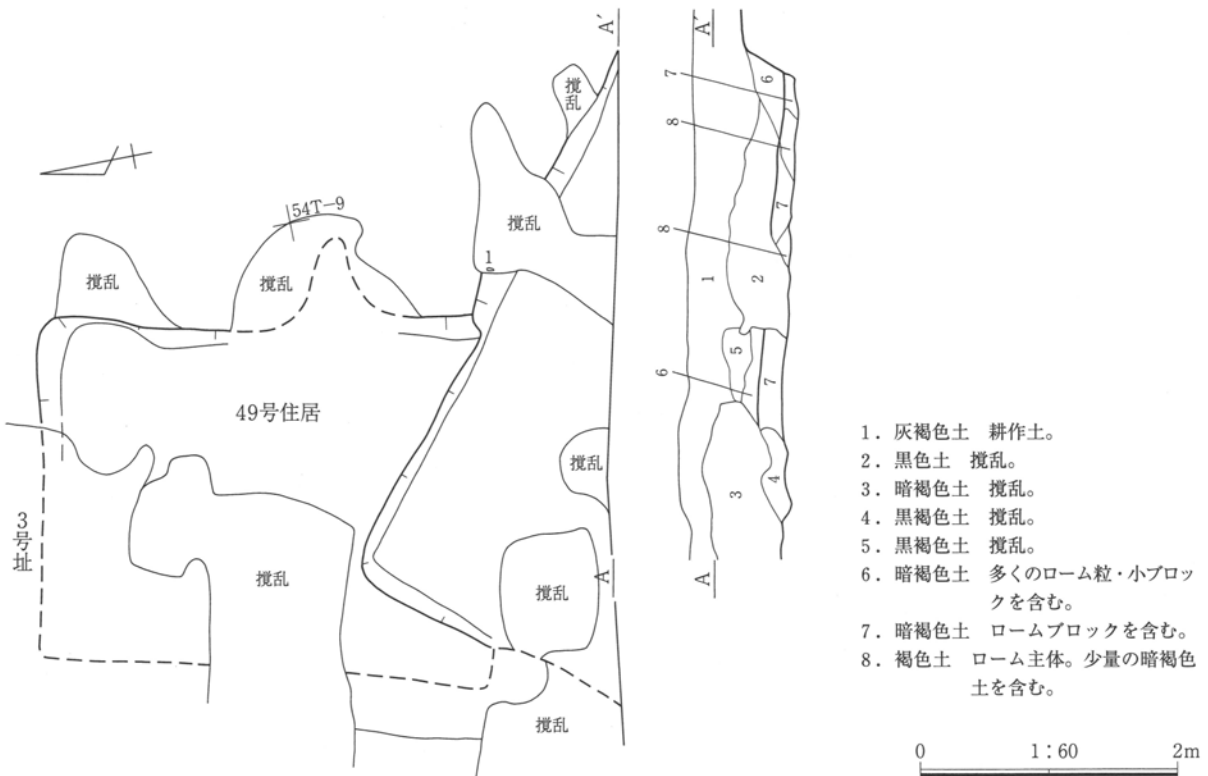
形状 遺構の南側が調査区域外のため全体の形状は不明である。確認した範囲での規模は東西長4.55m、南北長2.37mである。

位置 54S・T-8

重複 北東部分で49号住居と重複する。切り合い関係は本遺構の掘り方が49号住居のそれに比べ深い。新旧関係は本遺構が49号住居より古い。後世の攪乱により遺構の大半が壊されていた。

面積 計測不能 方位 計測不可

床面 遺構確認面から42cm程掘り込んで床面となる。確認した範囲で床面には東西で10cm程度の段差



第360図 C区48号住居・49号住居掘り方

があった。

埋没土 上層は後世の耕作土。床面直上層の一部は多くのローム粒・小ブロックを含む暗褐色土で埋まっていた。

竈・周溝・柱穴・貯蔵穴 確認できなかった。

遺物 出土遺物は掲載した須恵器甕(1) 1点のみである。(観P80)

所見 時期不明であるが平安時代の可能性が高い。



第361図 C区48号住居出土遺物

C区 51号住居 (第362・363図、PL75・141)

位置 55B・C-9・10

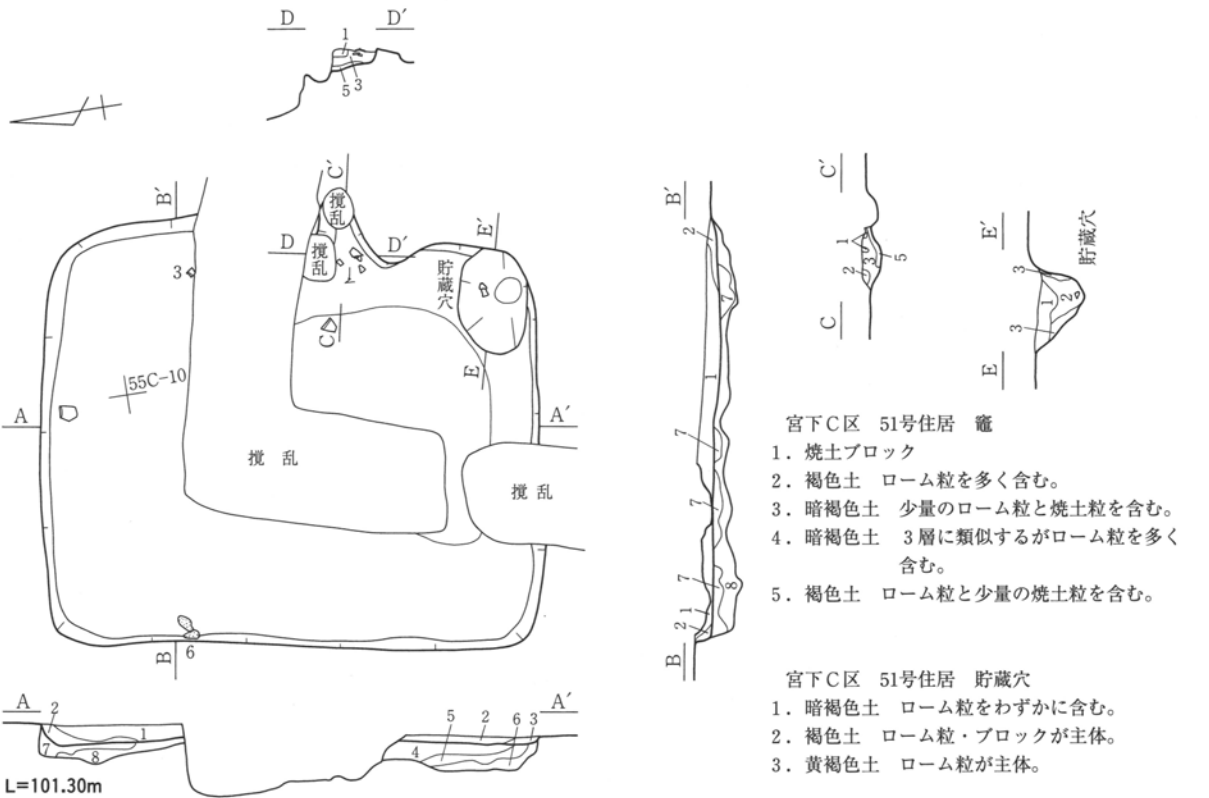
重複 なし。現代の攪乱(芋穴)により本遺構の一部が壊されていた。

形状 後世の攪乱により壊されている部分がある

が、南北を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸3.92m、短軸3.30mである。

面積 (11.21)m² **方位** N-100°-E

床面 遺構確認面から14cm程掘り込んで床面となる。床面には凹凸が多少あり、床面南側が硬化して



宮下C区 51号住居 竈

1. 焼土ブロック
2. 褐色土 ローム粒を多く含む。
3. 暗褐色土 少量のローム粒と焼土粒を含む。
4. 暗褐色土 3層に類似するがローム粒を多く含む。
5. 褐色土 ローム粒と少量の焼土粒を含む。

宮下C区 51号住居 貯蔵穴

1. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。
2. 褐色土 ローム粒・ブロックが主体。
3. 黄褐色土 ローム粒が主体。

1. 黒褐色土 As-Cと少量のロームブロックを含む。
2. 暗褐色土 多くのローム粒・ブロックを含む。
3. 暗褐色土 2層に近い。特にロームが多い。
4. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
5. 暗褐色土 焼土粒を含み、4層よりロームブロックは少ない。

6. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
7. 黒褐色土 ロームブロックを含む。
8. 褐色土 やや濁ったローム。

第362図 C区51号住居

いた。

埋没土 床面直上層はAs-Cと少量のロームブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。全長64cm、燃烧部幅29cm、焚口部幅55cmである。右袖部は短く残存していた。竈手前部分に構築材に使用されたと考えられる灰褐色粘質土が広がり、踏み固められていた。

周溝・柱穴 掘られていなかった。

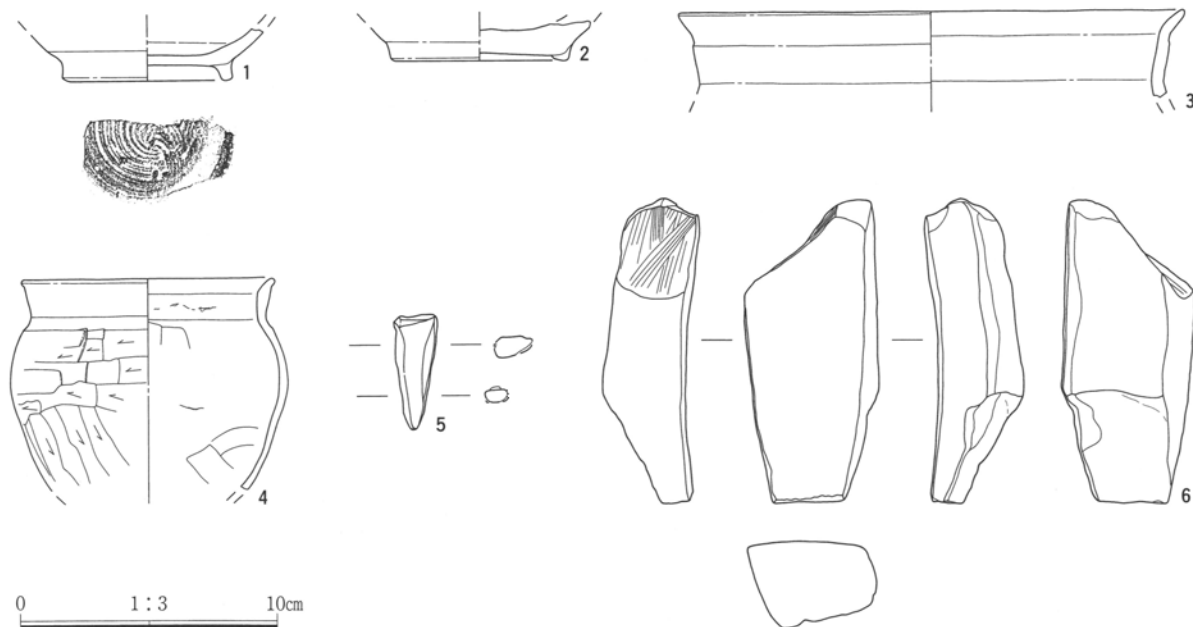
貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は長径79cm短径55cm、床面からの深さ25cm程である。上端の形状

は楕円形を呈する。

遺物 竈燃烧部内を中心に破片資料が出土したが、床面からの出土は甕(3)の口縁部破片のみである。埋没土中から鉄製楔(4)を得たが、多数の攪乱との重複関係から帰属を特定することには問題が残る。北西隅寄りの西壁際床面直上から砥石(6)が出土している。

掲載した資料の他に土師器破片78点、須恵器破片13点、軟質陶器破片3点、陶磁器破片3点、弥生土器破片1点が出土している。(観P80・81)

所見 平安時代の住居と考えられる。



第363図 C区51号住居出土遺物

C区 54号住居 (第364・365図、PL76・141)

位置 55C-14・15

重複 3号掘立柱建物(柱穴3基)と重複する。切り合い関係で本遺構が3号掘立柱建物の柱穴を切っていることから、新旧関係では本遺構は3号掘立柱建物より新しいと考えられる。

形状 南北を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸3.84m、短軸2.86mである。

面積 9.74m² **方位** N-97°-E

床面 遺構確認面から13cm程掘り込んで床面となる。床面には凹凸があった。

埋没土 床面直上層は白色軽石粒とロームブロック

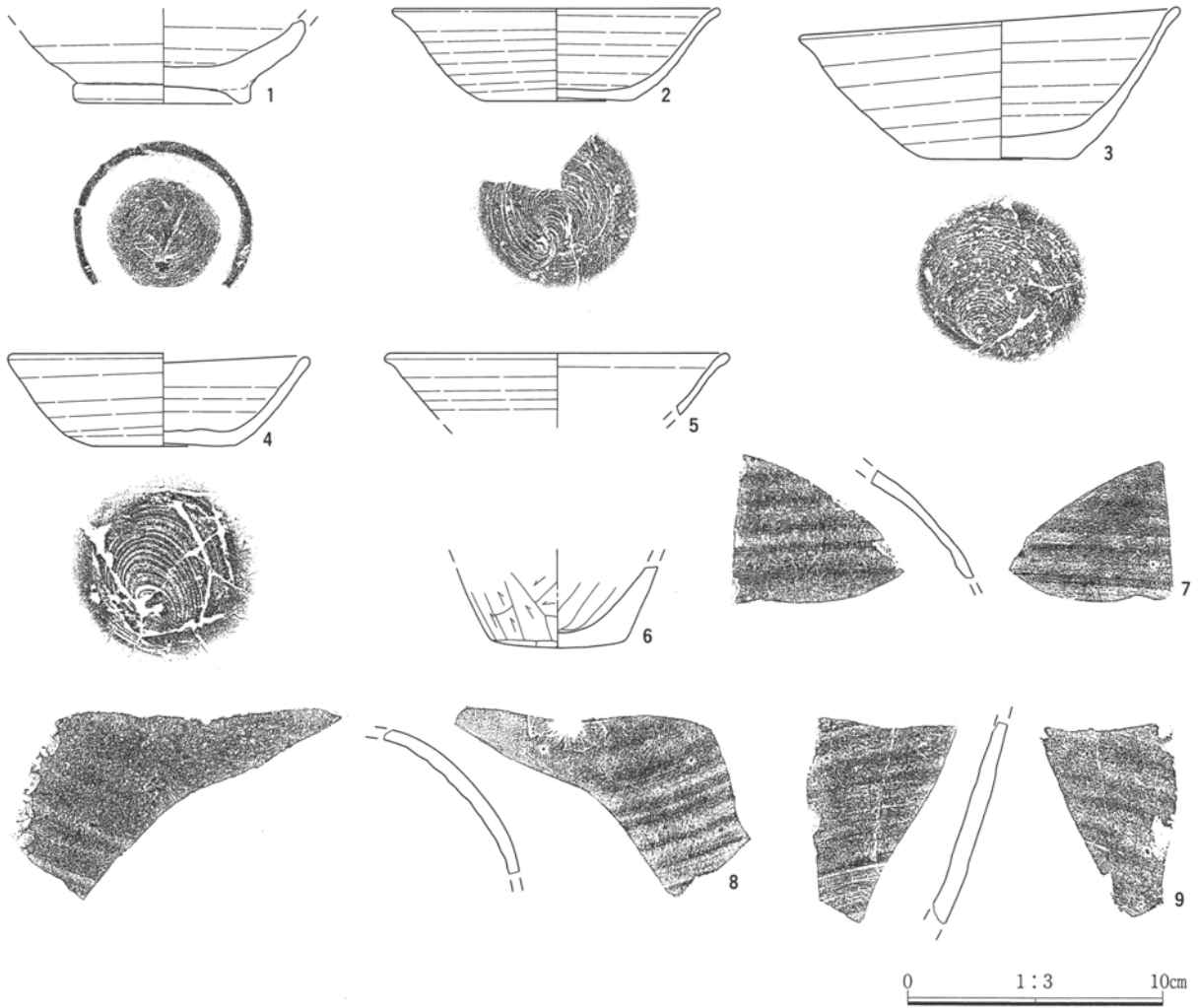
を含む黒褐色土で埋まっていた。掘り方はロームブロックを多く含む褐色土で厚さ2cm以上の貼床を施していた。

竈 後世の攪乱により一部が壊されているが、東壁中央南寄りに造られていた。燃烧部上面に灰層が堆積していた。全長54cm、燃烧部幅33cm、焚口部幅66cmである。

周溝・柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

ピット 床面下に1本掘られていた。規模は長径30cm短径24cm、深さ24.5cmである。

床下 中央やや南壁寄りあるいは南西隅に土坑状の掘り込みがある。床面は硬くしまり貼床状を呈し



第365図 C区54号住居出土遺物

C区 61号住居 (第366・367図、PL76・141)

位置 55H・I-18・19

重複 なし。本遺構が後世の攪乱により壊されていた。

形状 後世の攪乱により壊されている部分があるが、南北を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸3.70m、短軸3.04mである。

面積 (8.94)m² **方位** N-93°-E

床面 遺構確認面から41cm程掘り込んで床面となる。床面には凹凸が多少あった。

埋没土 As-C、ローム粒・ブロックを含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁やや南寄りに造られていた。わずかに袖の基部が残存していた。全長76cm、燃焼部幅52cm、焚口部幅70cmである。燃焼部の埋没土には焼土粒が

多く含まれていた。

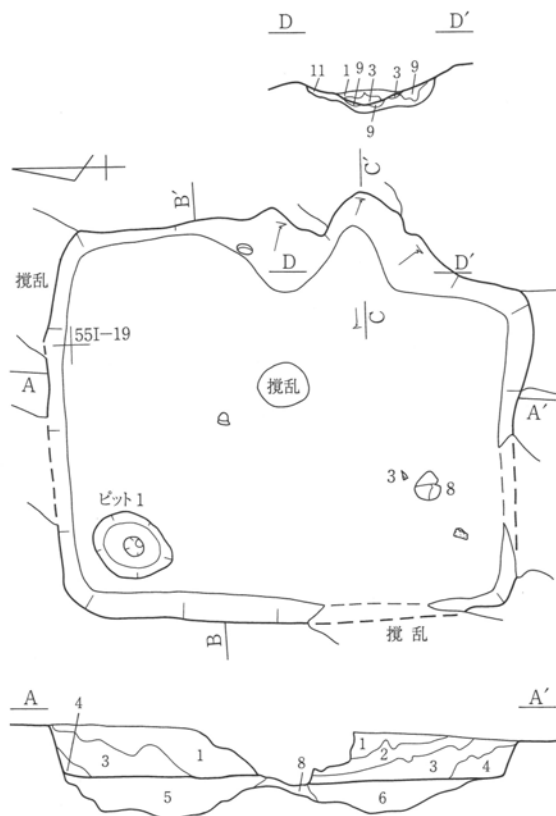
周溝・柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

ピット 北西隅寄りでピット1を検出した。長径64cm短径41cm、深さ13cm。床面下精査時に南西隅からピット2を北東隅からピット3を検出した。ピット2は長径58cm短径52cm、深さ16cm。ピット3は長径58cm短径50cm、深さ19cm。

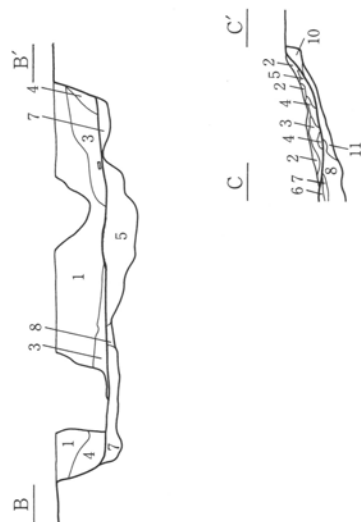
遺物 東壁際の床面から4cm離れた高さから杯(1)が、南西部分のやはり床面から4cm離れた高さから須恵器甕(8)の大型破片が出土している。また埋没土中から棒状鉄製品(9)の破片が出土している。

掲載した資料の他に土師器破片206点、須恵器破片23点が出土した。(観P81・82)

所見 平安時代の住居と考えられる。

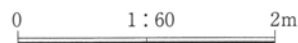
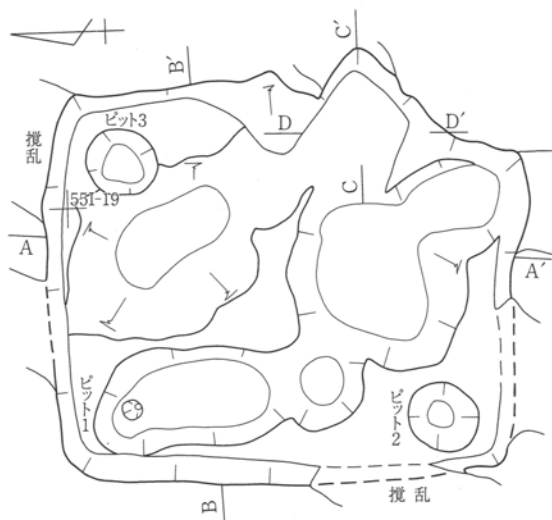


1. 黒褐色土 As-Cと少量のローム粒・ブロックを含む。
2. 褐色土 ローム粒と黒褐色土の混土。
3. 暗褐色土 少量のAs-C、粘土ブロックとローム粒・ブロックを含む。
4. 黒褐色土 少量のAs-Cとローム粒・ブロックを含む。
5. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
6. 暗褐色土 5層に近い。焼土粒・ブロックを少量含む。
7. 黒褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
8. 褐色土 地山ローム主体。黒褐色土を少量混入。

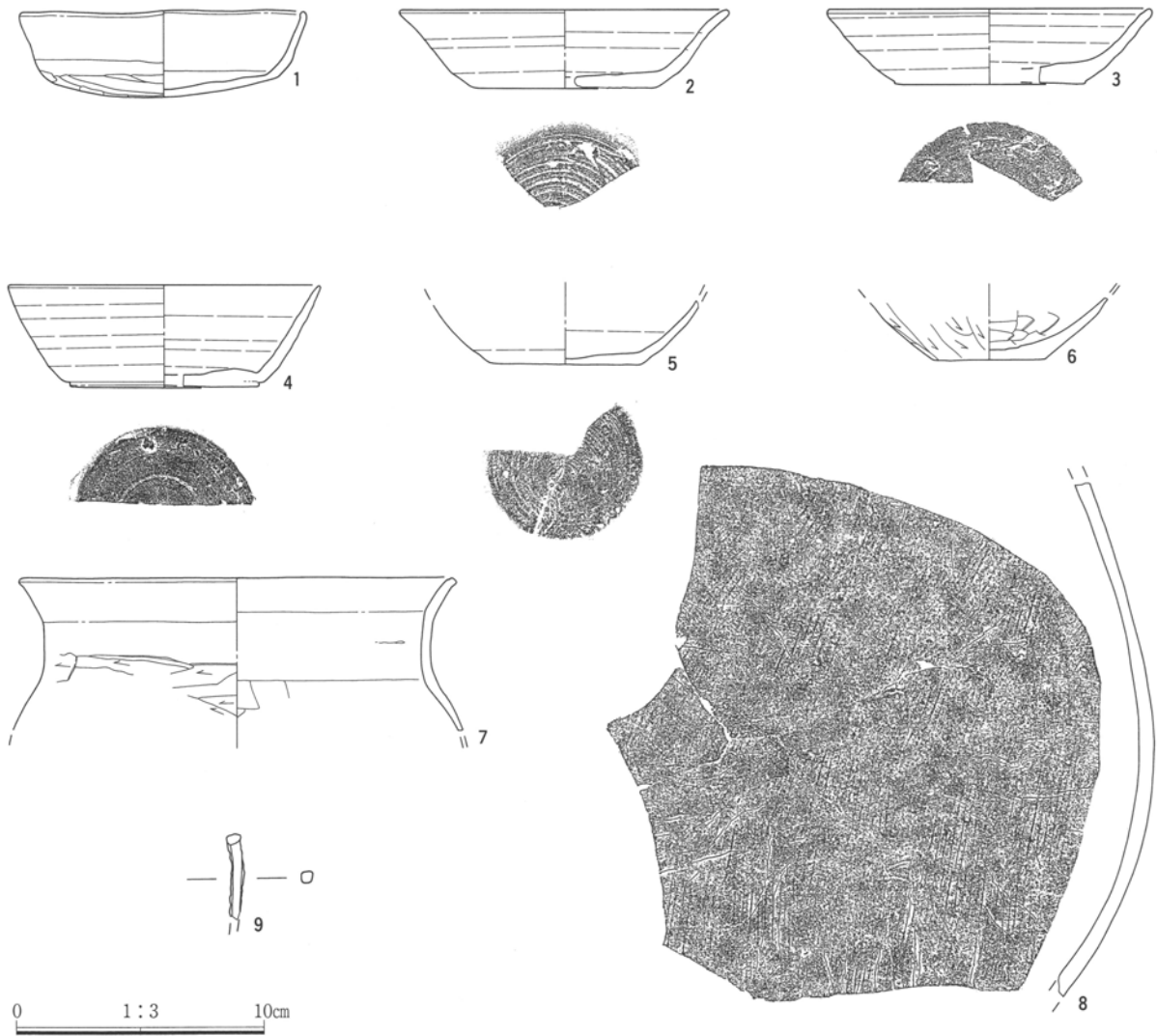


宮下C区 61号住居 竈

1. 褐色土 ロームと黒褐色土の混土。少量のローム粒と焼土粒を含む。竈構築土。
2. 褐色土 1層に近い。ローム、焼土粒が多い。
3. 黒褐色土 焼土粒・ブロック、灰、炭を含む。
4. 暗褐色土 1層と3層の混土。
5. 暗褐色土 ロームブロックを含む。
6. 黒褐色土 少量の焼土粒・ローム粒と細かな炭片を含む。灰を混入。
7. 暗褐色土 焼土粒・ブロックを含む。やや粘土質。
8. 黒褐色土 少量の焼土粒とローム粒・ブロックを含む。
9. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒・ブロックを含む。
10. 黒褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
11. 褐色土 ローム主体。上面に焼土を少量含む。



第366図 C区61号住居



第367図 C区61号住居出土遺物

C区 66号住居

(第368・369図、PL77・80・142)

位置 55F・G-12、55G-13

重複 南西部分で67号住居と重複し、本遺構が67号住居を掘り込んでいた。

形状 後世の溝や攪乱により壊されている部分があるが、南北を長軸とする隅丸長方形を呈すると推定される。規模は長軸3.98m、短軸3.19mである。

面積 (10.26)m² **方位** N-4°-E

床面 遺構確認面から28cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。

埋没土 As-Cとローム粒・ブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央南寄りに造られていた。全長106cm、

燃焼部幅80cm、焚口部幅81cmである。竈構築時に使用した石が6点出土した。

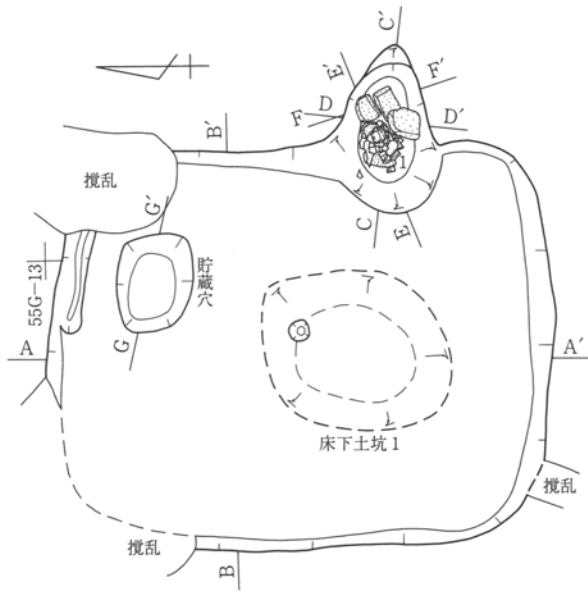
周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 北東部分に掘られていた。規模は長径80cm短径60cm、床面からの深さ20cm程である。上端の形状は不定形を呈する。

床下 床面調査後、床下を調査した際に床下土坑1基を確認した。規模は長径146cm短径125cm、床面からの深さ30cm程である。

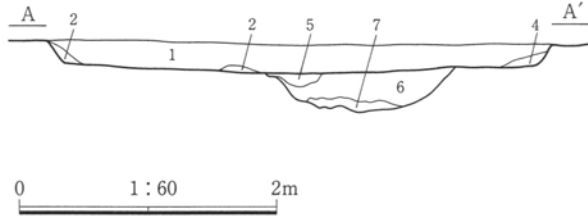
遺物 竈燃焼部内から甕(1)が出土した他は、良好な資料の出土はなかった。掲載した資料の他に土師器破片215点、須恵器破片20点、弥生土器破片2点が出土した。(観P82)

所見 平安時代の住居と考えられる。

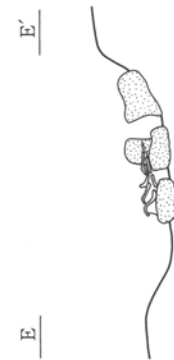
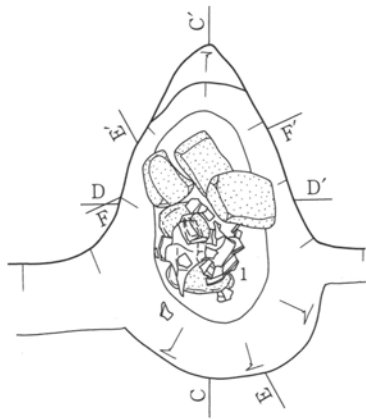


宮下C区 66号住居 貯蔵穴

1. 黒褐色土 As-C、ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土 1層よりローム粒・ブロックが多い。
3. 暗褐色土 2層よりローム粒・ブロックが多い。

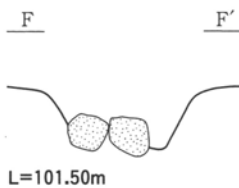
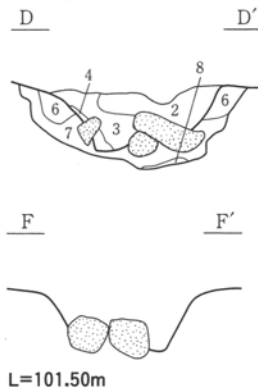


1. 黒褐色土 As-C、ローム粒・ブロックを含む。
2. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを多く含む。
3. 暗褐色土 ローム主体で2層以上にロームが多い。
4. 暗褐色土 As-C、ローム粒・小ブロックを少量含む。
5. 黒褐色土 ローム粒・小ブロックを少量含む。床下土坑埋没土。
6. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。床下土坑埋没土。
7. 暗褐色土 ローム粒を含む。床下土坑埋没土。

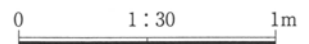


宮下C区 66号住居 竈

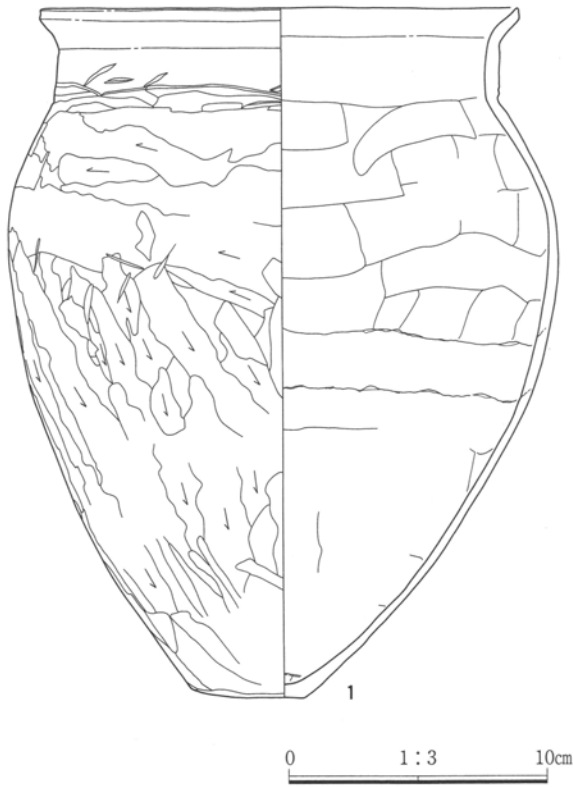
1. 黒褐色土 ローム粒、As-Cを少量含む。住居埋没土。
2. 暗褐色土 ローム粒を均質に含む。
3. 黒褐色土 1層よりローム粒多い。As-Cを混入。
4. 暗褐色土 2層に近い。ローム小ブロックを含む。
5. 黒褐色土 ローム粒・小ブロックと少量のAs-C、炭片を含む。
6. 黒褐色土 ローム粒、As-Cを含む。
7. 暗褐色土 ローム粒・ブロックと少量の焼土粒、炭片を含む。
8. 褐色土 7層よりローム多く含む。



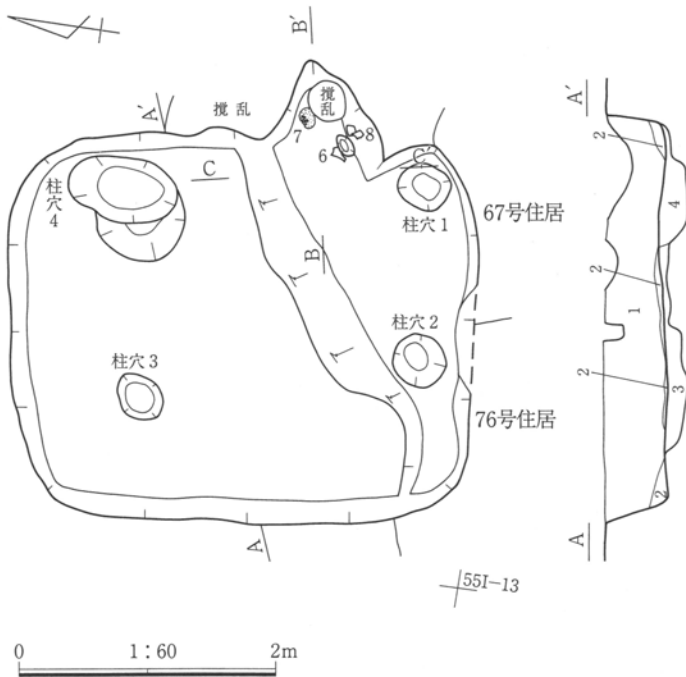
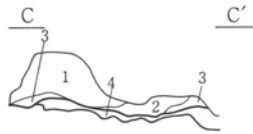
L=101.50m



第368図 C区66号住居



第369図 C区66号住居出土遺物



C区 68号住居

(第370~372図、PL77・80・142)

位置 55H-13

重複 南側で67号・76号住居と重複し、本遺構が両遺構を掘り込んでいた。新旧関係は、67号住居→76号住居→地割れ→68号住居である。

形状 他遺構と重複する部分があるが、南北を長軸とする隅丸長方形を呈する。規模は長軸3.71m、短軸3.06mである。

面積 8.98m² 方位 N-79°-E

床面 遺構確認面から47cm程掘り込んで床面となる。床面には凹凸があった。北側と南側では段差があり、南東隅をはじめ南側が10cm程低い。この段差は住居構築後の地割れに沿った地盤沈下と考えられる。

埋没土 床面直上層はAs-C、ローム粒を含む黒褐色土と、ローム主体の褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央南寄りに造られていた。全長98cm、燃烧部幅38cm、焚口部幅80cmである。燃烧部中央や



1. 黒褐色土 As-C、ローム粒を含む。
2. 褐色土 ローム主体。壁の崩落土。
3. 褐色土 多くのローム粒・ブロックとわずかな焼土粒を含む。
4. 暗褐色土 As-C、ローム粒・ブロックを含む。

宮下C区 68号住居 竈

1. 黒褐色土 As-C、ローム粒を含む。
2. 暗褐色土 As-C、ロームブロック、少量の焼土粒・ブロックを含む。
3. 黒色土 焼土粒、ローム粒を含む。灰層との混土。
4. 褐色土 炭化物、焼土粒、ローム粒を含む。

第370図 C区68号住居(1)

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

や北寄りに支脚石がほぼ据えられたと思われる状態で残っていた。

周溝 掘られていなかった。

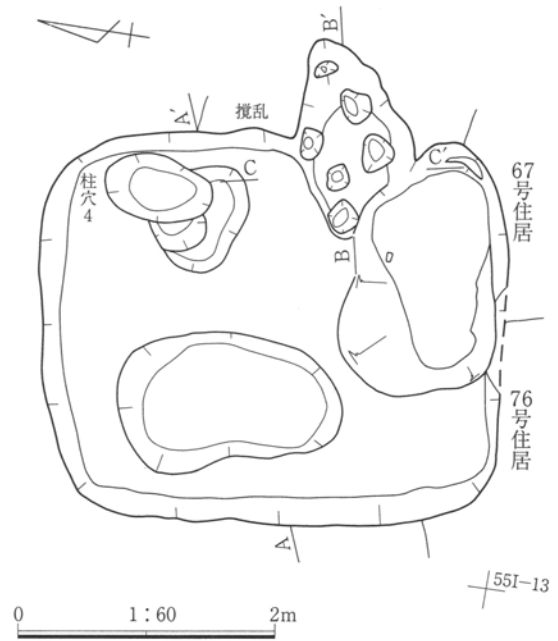
柱穴 4本掘られていた。柱穴1は長径41cm短径37cm、深さ14cm。柱穴2は長径42cm短径40cm、深さ19cm。柱穴3は長径36cm短径33cm、深さ7cm。柱穴4は長径86cm短径52cm、深さ37cmである。

貯蔵穴 掘られていなかった。

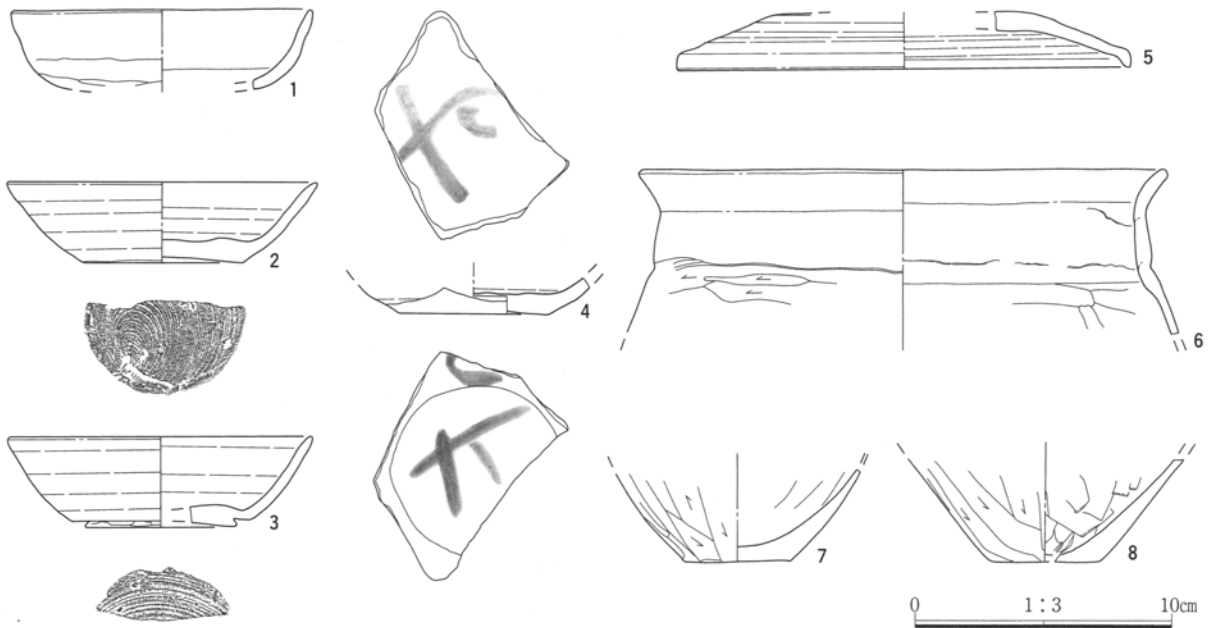
遺物 竈燃焼部内から甕(6~8)の小破片が出土しただけで、他は埋没土中からの出土である。墨書の記された杯(4)が出土している。

掲載した資料の他に土師器破片474点、須恵器破片50点、軟質陶器破片1点、陶磁器破片1点を出土した。(観P82・83)

所見 平安時代の住居と考えられる。



第371図 C区68号住居(2)



第372図 C区68号住居出土遺物

C区 70号住居 (第373~376図、PL78・142)

位置 55J・K-11・12

重複 西側で5号溝と重複し、本遺構が5号溝により掘り込まれていた。

形状 他遺構と重複する部分があるが、正方形に近い形状を呈すると考えられる。規模は南北4.10m、東西の残存長3.99mである。

面積 (13.18)m² **方位** N-104°-E

床面 遺構確認面から36cm程掘り込んで床面となる。床面には凹凸が幾らかあった。

埋没土 床面直上層はAs-Cを含む黒褐色土及び暗褐色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。全長103cm、燃焼部幅41cm、焚口部幅60cmである。燃焼部の

埋没土には焼土ブロックが多く含まれていた。

周溝 掘られていなかった。

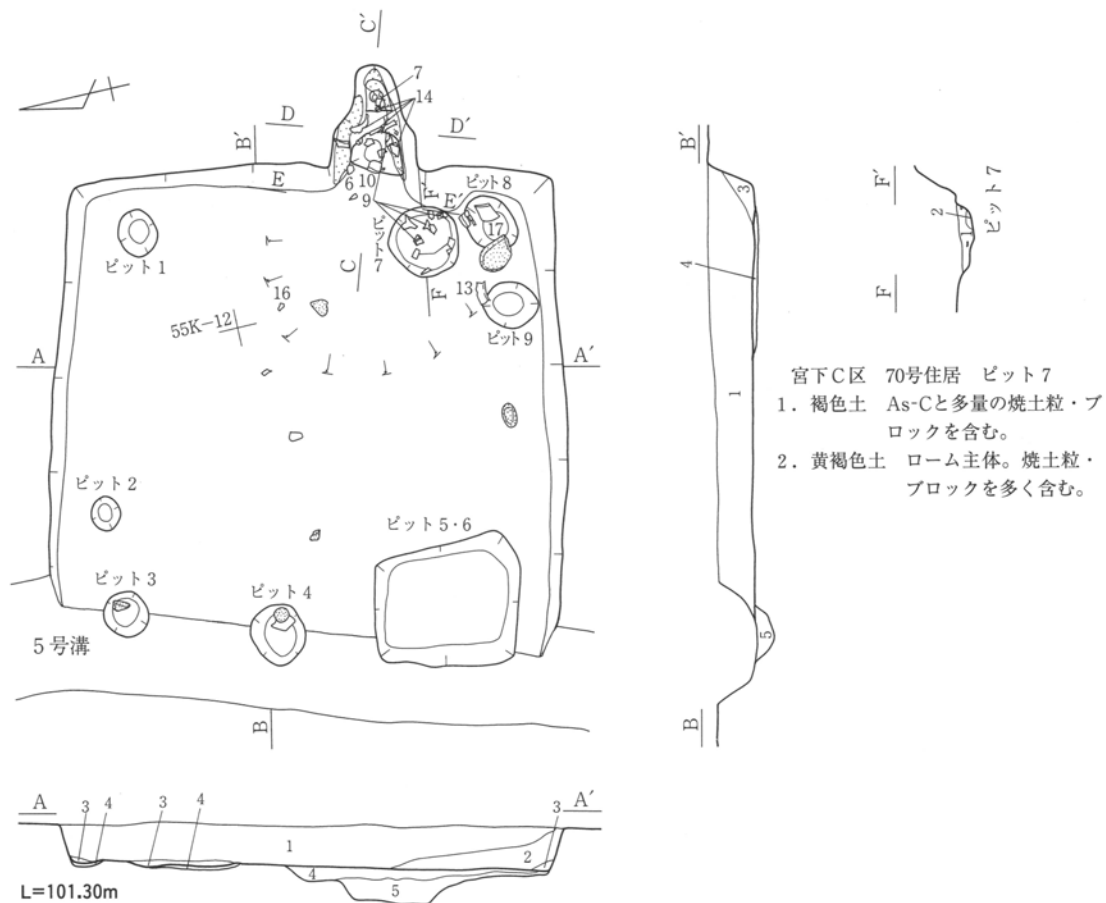
ピット 10本掘られていた。ピット1は長径38cm短径30cm、深さ5cm。ピット2は長径27cm短径22cm、深さ6cm。ピット3は長径37cm短径36cm、深さ7cm。ピット4は長径52cm短径45cm、深さ15cmである。ピット5とピット6は重複し、深さ10.5cm。ピット7は直径55cm、深さ9cm。ピット8は長径48cm短径39cm、深さ43cm。ピット9は長径75cm短径73cm、深さ30cm。ピット10は長径46cm短径39cm、深さ16cmである。

貯蔵穴 ピット8がその可能性を有している。

遺物 竈内から多数の破片が出土している。須恵器高台付皿(7)は最奥部から口縁部を下にした出土である。台付甕(11)は燃焼部に細片となっていた。須恵器杯(6)、台付甕(9)は竈内と右袖部前にあるピット7出土の破片が接合したものである。ピット7からは杯(2)も出土した。埋没土中から墨書の記された杯(4)が出土している。また、東部分の床面からは4cm離れて釘と考えられる鉄製品(16)が出土している。

掲載した資料の他に土師器破片718点、須恵器破片65点、陶磁器破片1点、弥生土器破片15点が出土した。(観P83・84)

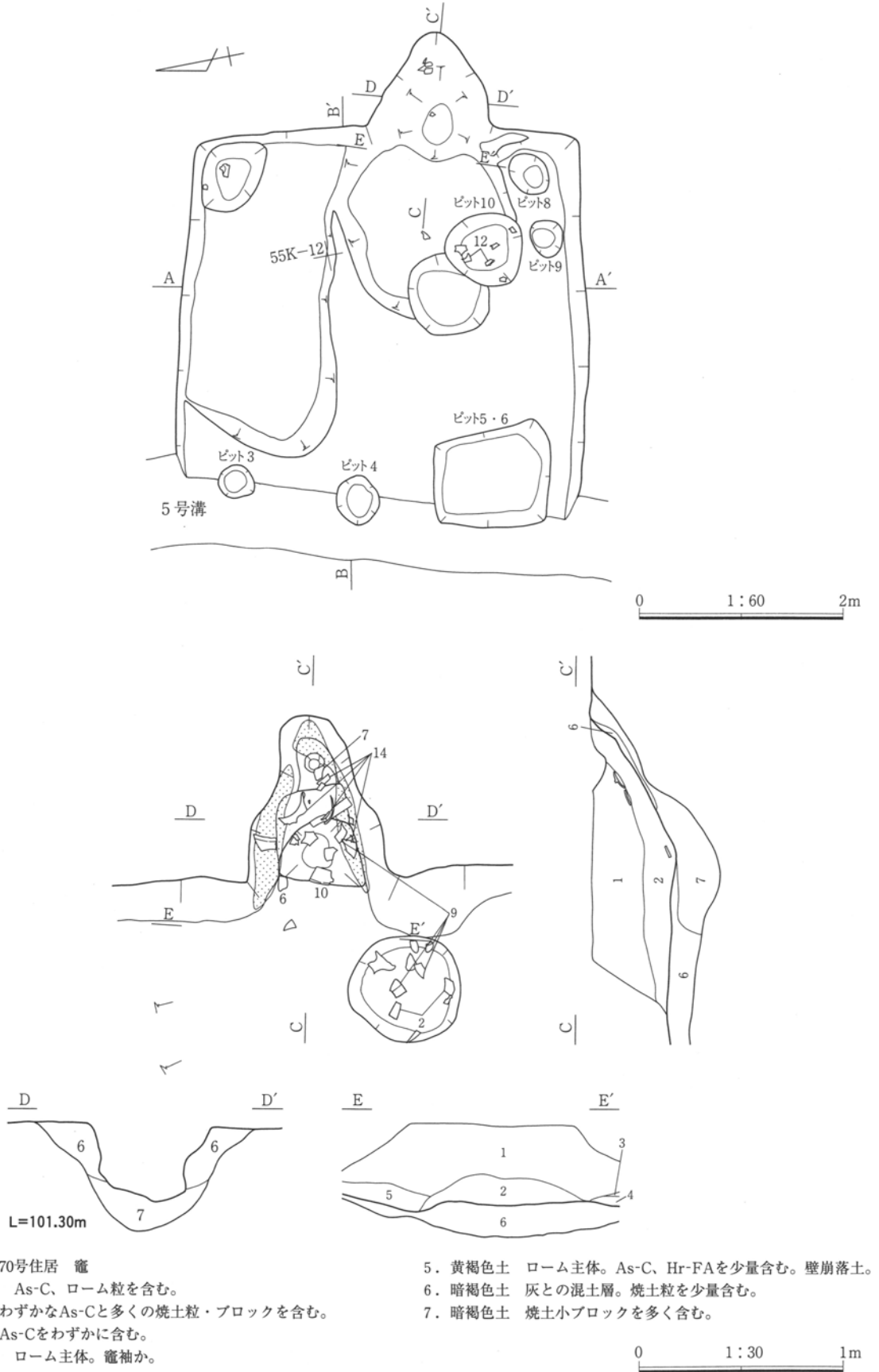
所見 平安時代の住居と考えられる。



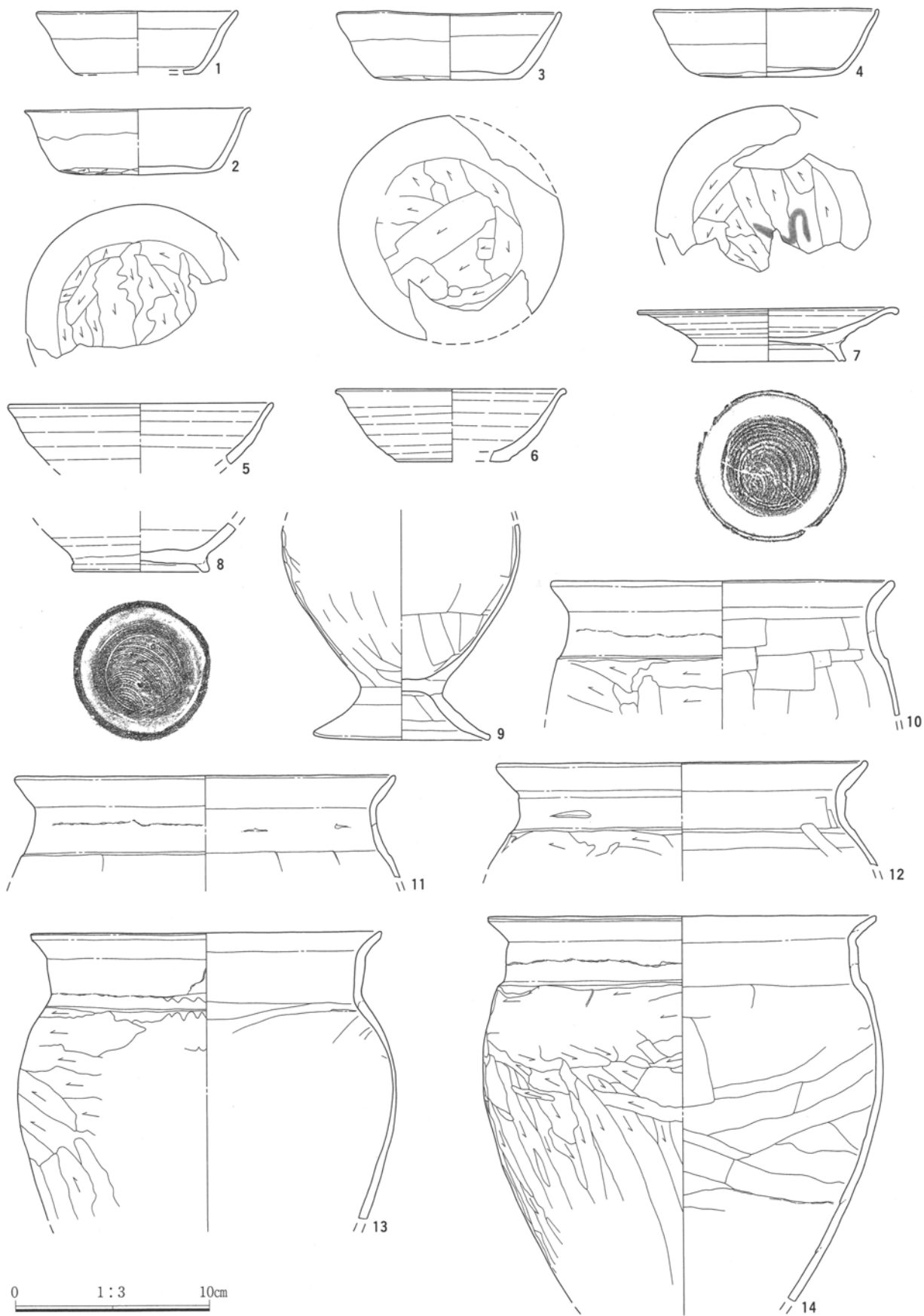
1. 黒褐色土 As-Cを含む。黒色土と黄褐色土の混土。
2. 暗褐色土 As-Cを含む。
3. 黄褐色土 ローム主体。As-Cを少量含む。壁面崩落土。
4. 黄褐色土 ローム主体。As-C、焼土粒を少量含む。
5. 暗褐色土 少量のAs-C、ローム粒と多くの焼土粒・ブロックを含む。

0 1:60 2m

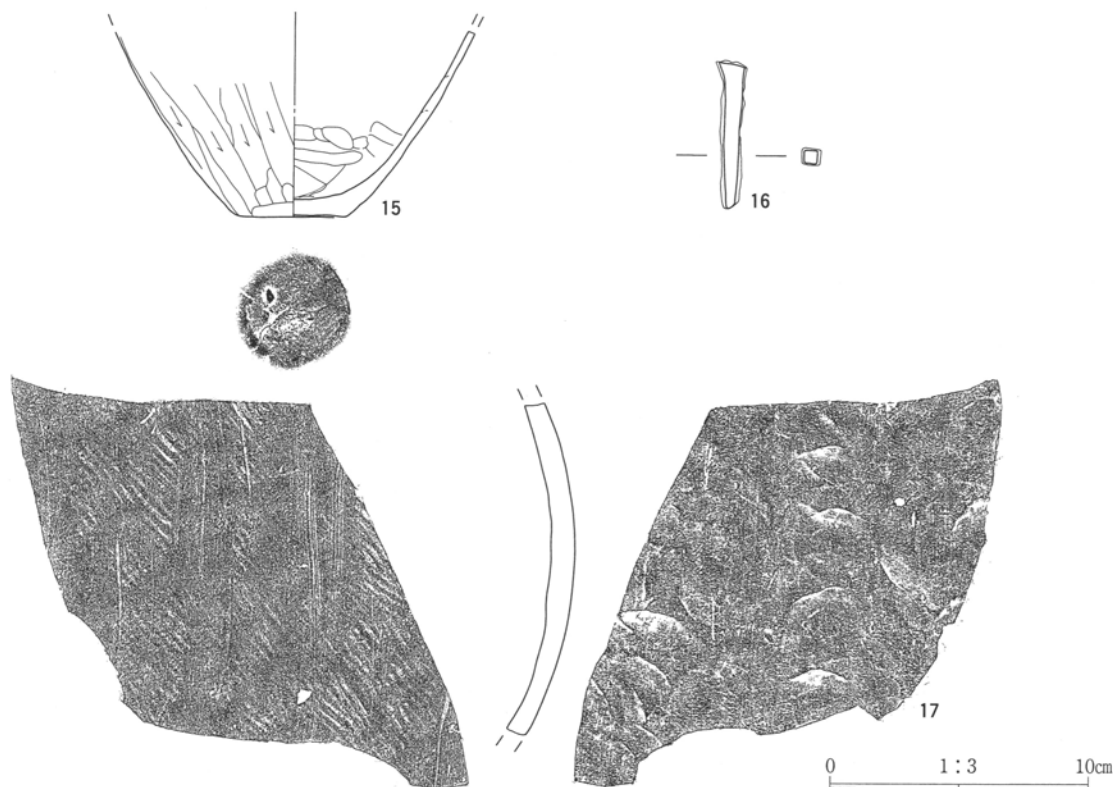
第373図 C区70号住居(1)



第374図 C区70号住居(2)



第375図 C区70号住居出土遺物(1)



第376図 C区70号住居出土遺物(2)

C区 72号住居 (第377・378図、PL78・143)

位置 55 I・J-12・13

重複 南西部分で71号住居跡と重複し、本遺構が71号住居を掘り込んでいた。後世の攪乱により本遺構の北西部分が壊されていた。

形状 南北を長軸とする隅丸長方形を呈すると推定される。規模は長軸4.76m、短軸3.86mである。

面積 (14.51)㎡ **方位** N-85°-E

床面 遺構確認面から33cm程掘り込んで床面となる。床面には凹凸が多少あった。

埋没土 床面直上層はAs-Cとローム粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

竈 竈2基が設けられていた。竈1は東壁南寄りに造られて、燃烧部幅が40cmである。

竈2は東壁中央に造られ、燃烧部幅が34cmである。新旧関係は竈1が竈2より新しい。

周溝 西壁際で一部検出した。

柱穴 4本掘られていた。柱穴1は長径38cm短径35cm、深さ19cm。柱穴2は長径48cm短径42cm、深さ9.5cm。柱穴4は長径44cm短径36cm、深さ12cmである。

柱穴3は攪乱により部分的に壊されていて全体の形状が不明だが、床面からの深さが12cmである。いずれも深さの浅い掘り込みであった。

貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は長径68cm短径60cm、深さ16cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。調査時に床面を掘りすぎたため実際の深度はもう少し大きいと考えられる。

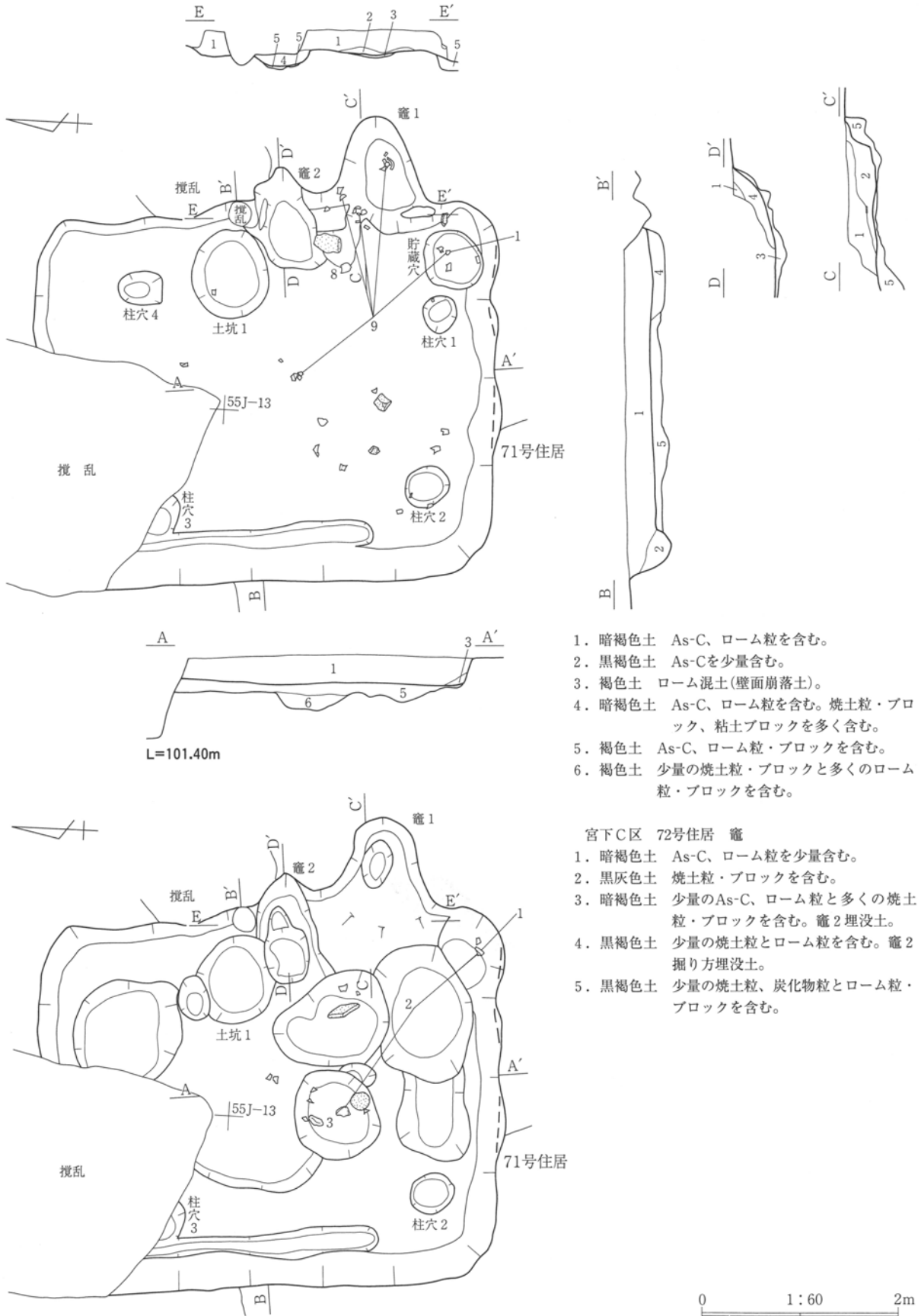
土坑 東側中央やや北寄りに掘られていた。規模は長径90cm短径80cm、深さ18cmである。上端の形状は楕円形を呈する。貯蔵穴の可能性が考えられる。

床下 全面的に土坑状の掘り方を有していた。

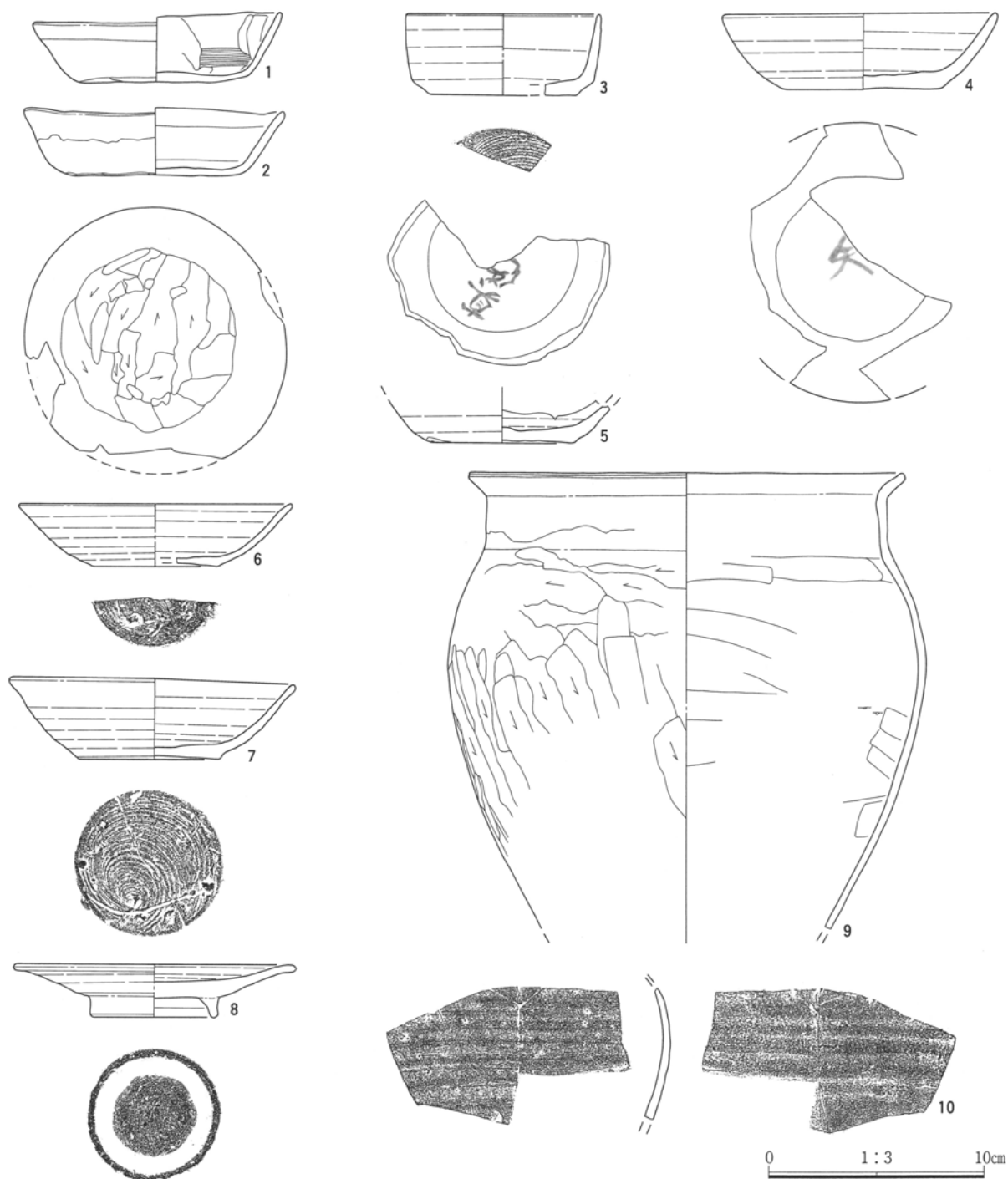
遺物 竈1の燃烧部内から甕(9)が出土している。東側、焚口部の左前から須恵器高台付皿(8)が、貯蔵穴内から杯(1)が出土している。また、埋没土中出土の須恵器杯(4・5)には墨書が記されていた。

掲載した資料の他に土師器破片891点、須恵器破片56点、陶磁器破片1点、弥生土器破片2点が出土した。(観P84・85)

所見 平安時代の住居と考えられる。



第377図 C区72号住居



第378図 C区72号住居出土遺物

C区 75号住居 (第379・380図、PL79・143)

位置 55J・K-17・18

重複 なし。

形状 南北を長軸とする長方形を呈する。規模は長軸4.15m、短軸3.12mである。

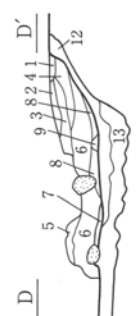
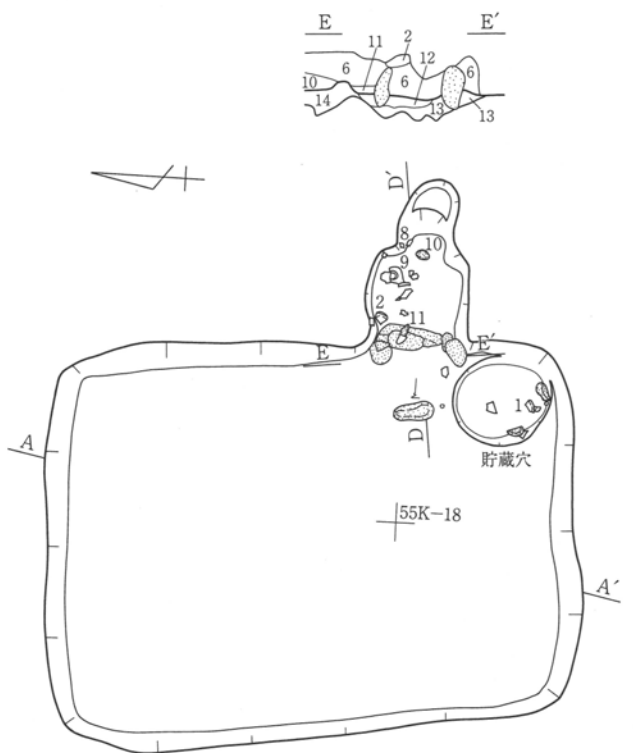
面積 10.67m² **方位** N-87°-E

床面 遺構確認面から32cm程掘り込んで床面とな

る。床面には凹凸が幾らかあった。

埋没土 上層は多くのローム粒とAs-Cを含む暗褐色土で、床面直上層は上層より多くのロームとAs-Cを含む暗黄褐色土で埋まっていた。

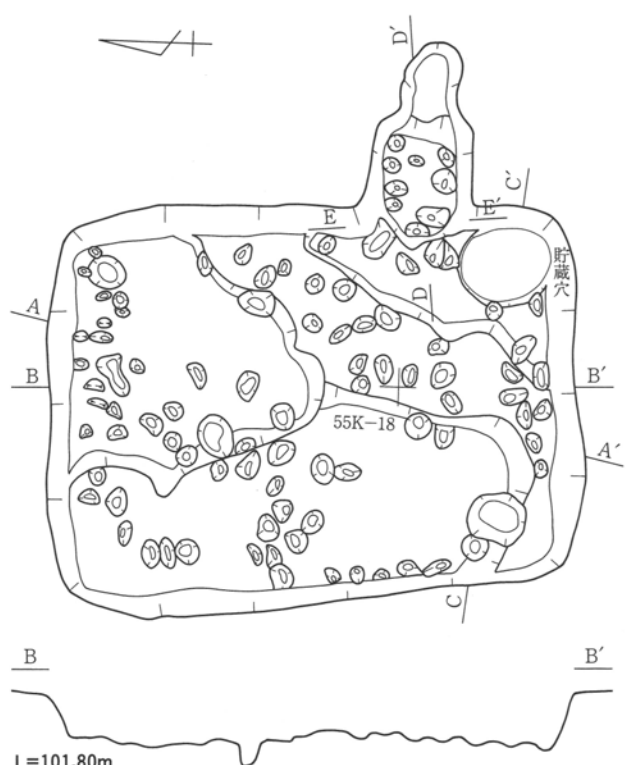
竈 東壁中央南寄りに造られていた。全長151cm、燃焼部幅68cm、焚口部幅63cmである。左右の袖部に一对の袖石がほぼ据えられたと思われる状態で検出



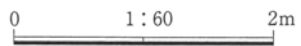
- 1. 暗褐色土 As-C、ローム粒を多く含む。
- 2. 暗黄褐色土 As-Cと1層より多くのローム含む。
- 3. 黒褐色土 As-C、ローム粒を含む。
- 4. 黄黒色土 ロームと黒色土の混土。

宮下C区 75号住居 竈

- 1. 暗褐色土 As-Cの混土。
- 2. 褐色土 焼土を多量に含む。別遺構の埋没土か。
- 3. 褐色土 2層より焼土粒が少ない。
- 4. 褐色土 少量の焼土粒とローム粒を含む。
- 5. 暗灰茶色土 住居埋没土。
- 6. 暗灰褐色土 焼土粒、As-Cを少量含む。
- 7. 灰褐色土 焼土と灰が混入。
- 8. 褐色土 焼土粒、灰を含む。
- 9. 赤褐色土 焼土ブロック。
- 10. 暗灰黄色土 ロームを混入。住居埋没土。
- 11. 灰青色土 焼土。袖石の外側に埋め込まれる。
- 12. 黒色土 焼土を少量含む。竈使用面。
- 13. 黄黒色土 ロームと黒色土の混土。
- 14. 黄色土 地山ローム。



L=101.80m



第379図 C区75号住居

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

された。二つの袖石の間に焚口部の天井を補強していたと考えられる長大な礫が底面に落下して出土した。また、この礫から床面中央方向に50cm程の位置にも礫が据えられていた。焚口部手前を区切る役割をしていたか。

掘り方面の精査から、本竈は両側壁、奥壁の三面が直線をなす掘り方を有し、これに細い溝状の煙道部が付く構造であったことが理解できる。

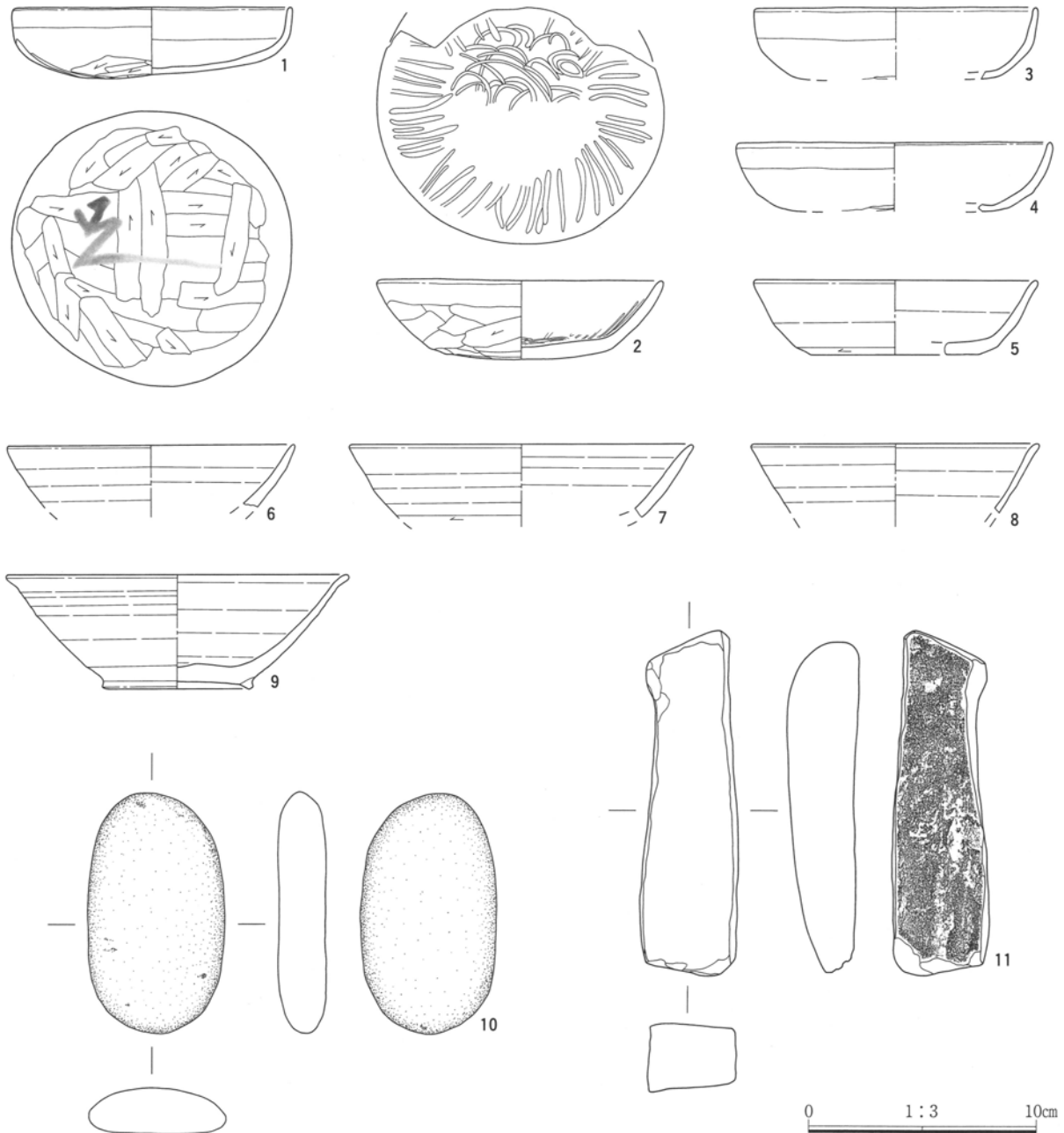
周溝・柱穴 掘られていなかった。

貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は長径76cm短径69cm、床面からの深さ24cm程である。上端の形状は楕円形を呈する。

遺物 竈燃焼部内から須恵器高台付椀(9)と杯(2)が出土した。貯蔵穴から出土した杯(1)には墨書が記されていた。掲載した資料の他に土師器破片169点、須恵器破片15点、弥生土器破片9点が出土した。

(観P85・86)

所見 平安時代の住居と考えられる。



第380図 C区75号住居出土遺物

C区 76号住居

(第381~384図、PL79・80・143・144)

位置 55H・I-12・13

重複 東側で67号住居と、北東部分で68号住居と重複する。新旧関係は、67号住居→76号住居→(地割れ)→68号住居である。

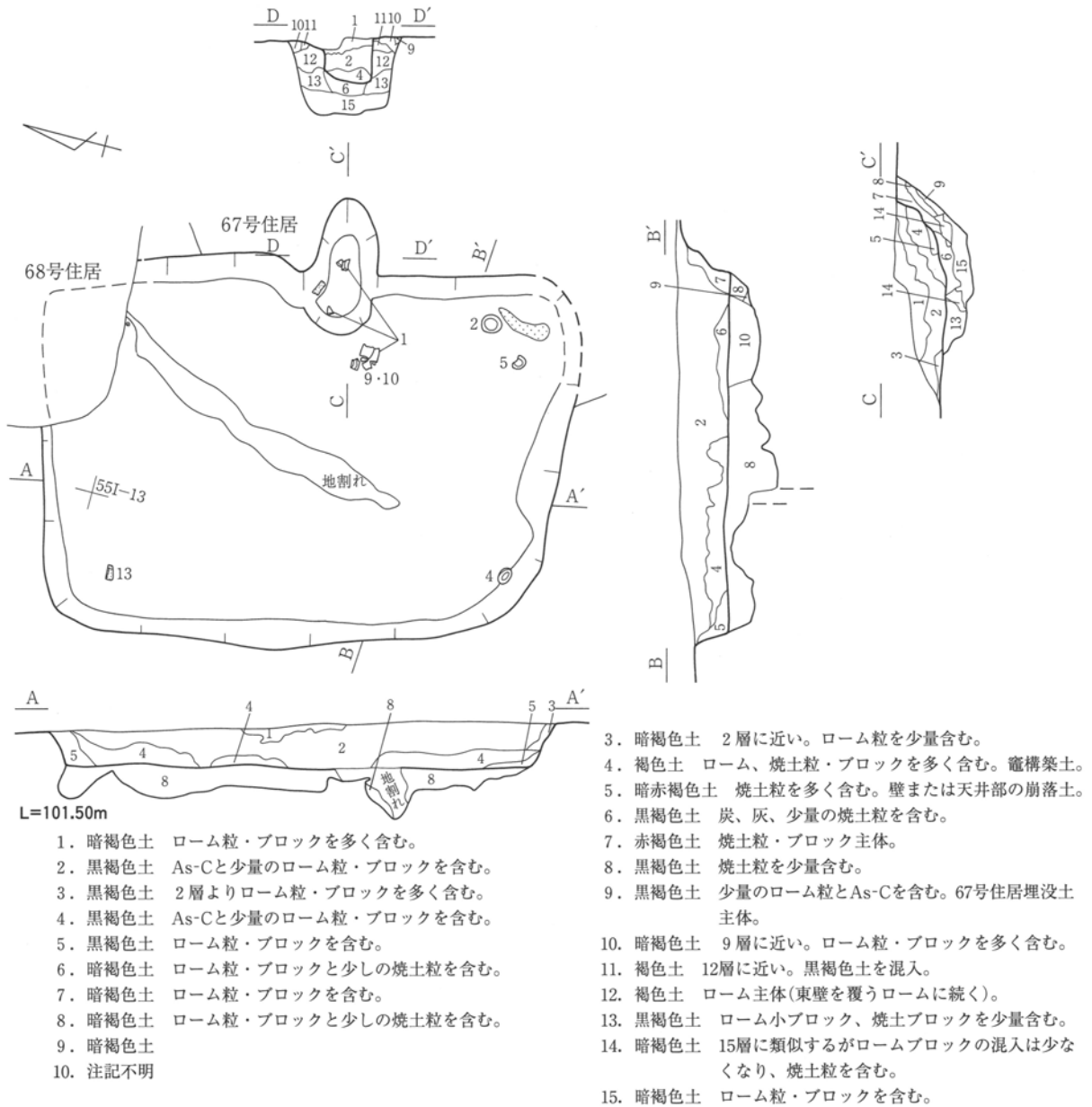
形状 他遺構と重複する部分があるが、南北を長軸とする隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.60m、短軸3.42mである。

面積 (12.06)m² 方位 N-80°-E

床面 遺構確認面から42cm程掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦であった。また、床面に地割れが入り、この中に黒色土が入っていた。

埋没土 上層はAs-Cとローム粒・ブロックを少量含む黒褐色土で床面中央部を覆っていた。床面直上層はAs-Cと少量のローム粒・ブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

竈 東壁ほぼ中央に造られていた。67号住居と重



L=101.50m

1. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。
2. 黒褐色土 As-Cと少量のローム粒・ブロックを含む。
3. 黒褐色土 2層よりローム粒・ブロックを多く含む。
4. 黒褐色土 As-Cと少量のローム粒・ブロックを含む。
5. 黒褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
6. 暗褐色土 ローム粒・ブロックと少しの焼土粒を含む。
7. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
8. 暗褐色土 ローム粒・ブロックと少しの焼土粒を含む。
9. 暗褐色土
10. 注記不明

3. 暗褐色土 2層に近い。ローム粒を少量含む。
4. 褐色土 ローム、焼土粒・ブロックを多く含む。竈構築土。
5. 暗赤褐色土 焼土粒を多く含む。壁または天井部の崩落土。
6. 黒褐色土 炭、灰、少量の焼土粒を含む。
7. 赤褐色土 焼土粒・ブロック主体。
8. 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
9. 黒褐色土 少量のローム粒とAs-Cを含む。67号住居埋没土主体。
10. 暗褐色土 9層に近い。ローム粒・ブロックを多く含む。
11. 褐色土 12層に近い。黒褐色土を混入。
12. 褐色土 ローム主体(東壁を覆うロームに続く)。
13. 黒褐色土 ローム小ブロック、焼土ブロックを少量含む。
14. 暗褐色土 15層に類似するがロームブロックの混入は少なくなり、焼土粒を含む。
15. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。

宮下C区 76号住居 竈

1. 暗褐色土 ローム粒・ブロックと少量のAs-C、焼土粒を含む。
2. 褐色土 多くのローム粒と少量の焼土粒・ブロックを含む。

第381図 C区76号住居(1)

0 1:60 2m

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

複する東壁面(北部の地山ロームを除く)にロームが貼られていた。竈の造り替えてロームを貼った時、同時に東壁面にもロームを貼ったと考えられる。左袖部には礫を据え補強していた。全長119cm、燃烧部幅26cm、焚口部幅61cmである。燃烧部及び煙道部の壁面に焼土が多量に散っていた。

周溝・柱穴・貯蔵穴 掘られていなかった。

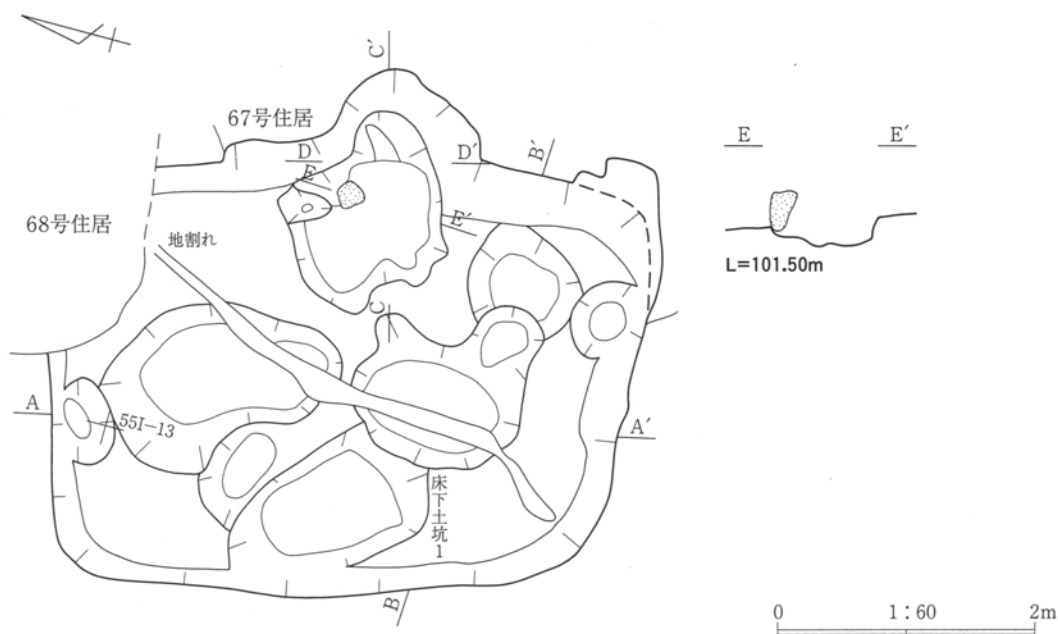
床 下 床面調査後、床下を調査した際に土坑1基を確認した。規模は長径178cm短径97cm、床面からの深さ29cm程である。

遺物 杯(1)は竈燃烧部と焚口部前出土破片が接

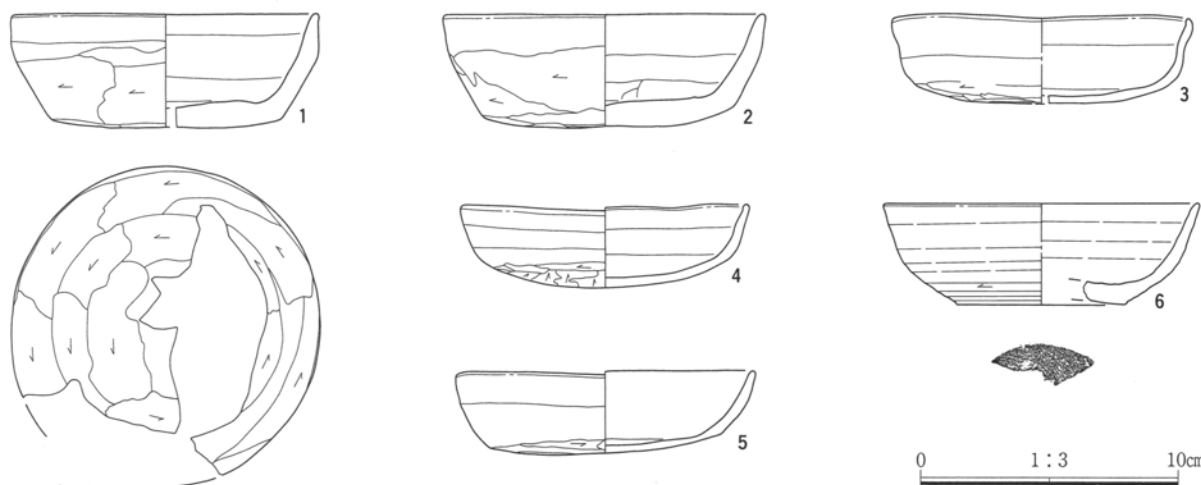
合した。また、焚口部前からは甕(10)、須恵器高台付椀(9)の破片が出土している。南東部分の床面からは杯(2)が、床面から9cm離れて杯(5)が出土している。砥石(13)は南西隅の床面から出土した。北東隅の埋没土中からは神功開寶(11)が出土している。

掲載した資料の他に土師器破片1,055点、須恵器破片25点、陶磁器破片2点、弥生土器破片7点が出土した。(観P86・87)

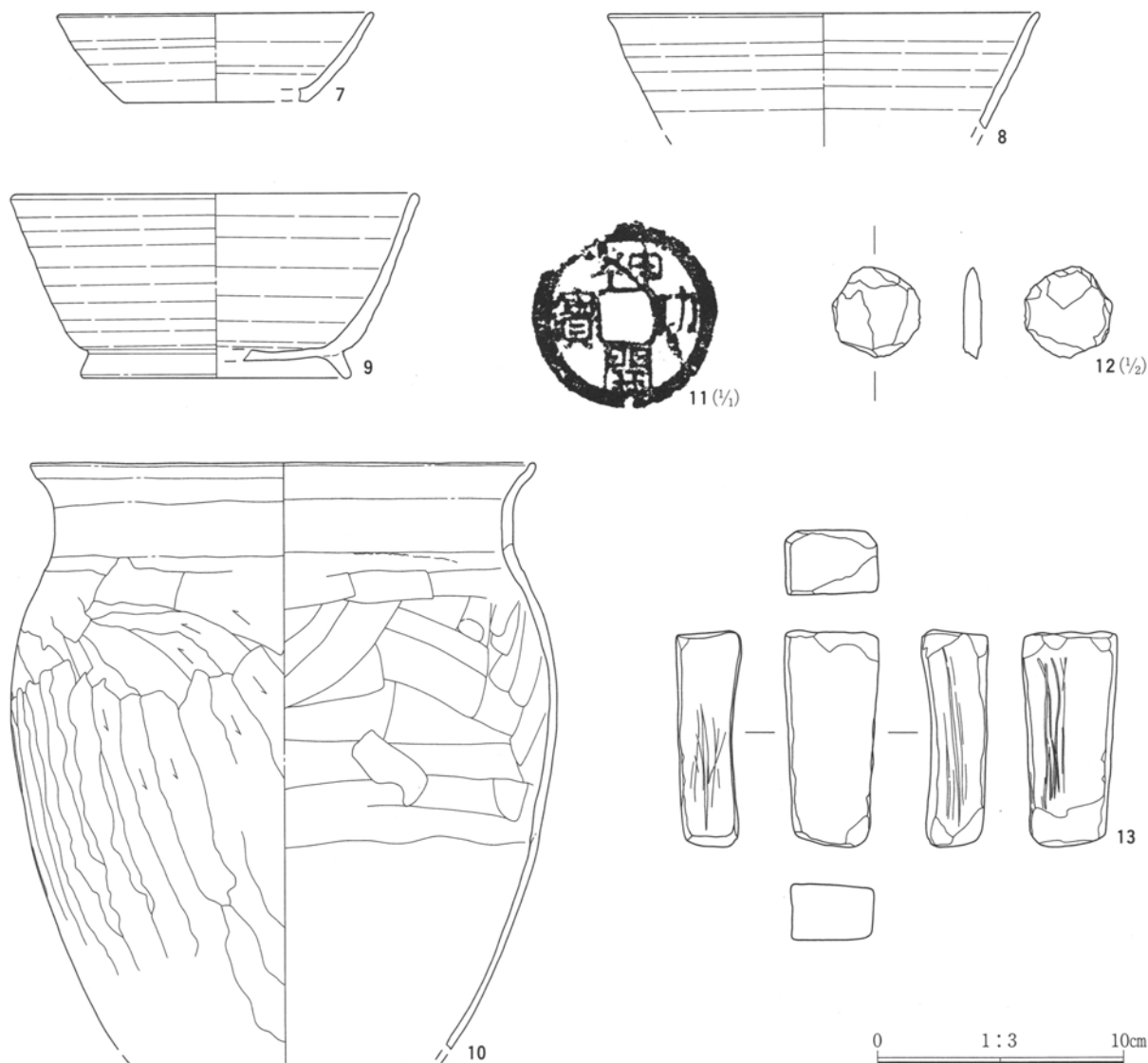
所見 奈良～平安時代(8世紀末から9世紀初頭)の住居と考えられる。



第382図 C区76号住居(2)



第383図 C区76号住居出土遺物(1)



第384図 C区76号住居出土遺物(2)

C区 78号住居 (第385・386図、PL81・144)

位置 55I-17・18

重複 東側で58号住居と、西側で79号住居と重複し、本遺構が両遺構より新しい。新旧関係は、58号住居→79号住居→78号住居である。

形状 他遺構と重複する部分や攪乱により壊されている部分があり、全体の形状は不明である。確認した範囲での規模は南北長3.56mである。

面積 計測不能 **方位** N-93°-E

床面 遺構確認面から21cm程掘り込んで床面となる。床面は南側が北側に比べ4cm低く、南側に非常に緩やかに傾斜していた。

埋没土 床面直上層はローム粒、軽石粒、微量の焼

土粒含む灰黒色土で埋まっていた。

竈 東壁中央やや南寄りに造られていた。全長69cm、燃烧部幅35cm、焚口部幅62cmである。右袖部基部には補強のための礫が据えられていた。

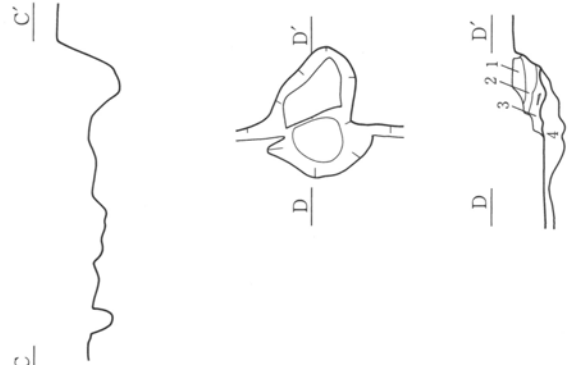
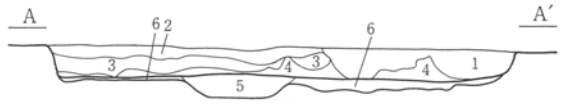
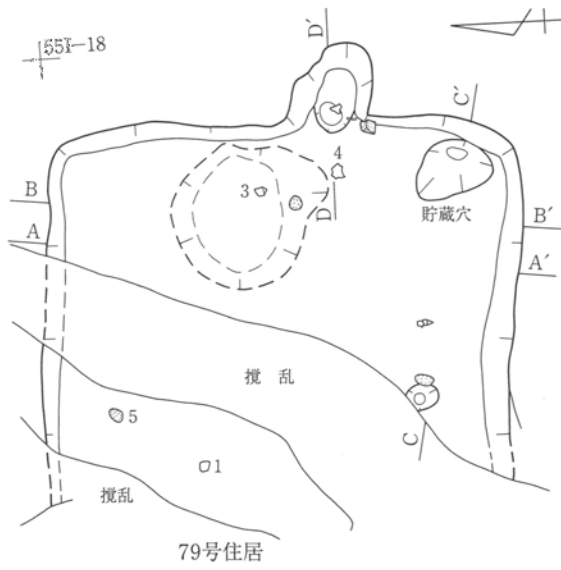
周溝・柱穴 確認範囲では掘られていなかった。

貯蔵穴 南東隅に掘られていた。規模は長径48cm短径45cmで床面からの深さは28cm程である。上端の形状は不定形を呈する。

遺物 須恵器高台付椀(4)は竈燃烧部内の破片と竈前の床面出土の破片が接合したものである。

掲載した資料の他に土師器破片249点、須恵器破片24点、弥生土器破片3点出土した。(観P87-88)

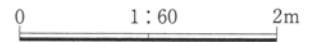
所見 平安時代の住居と考えられる。



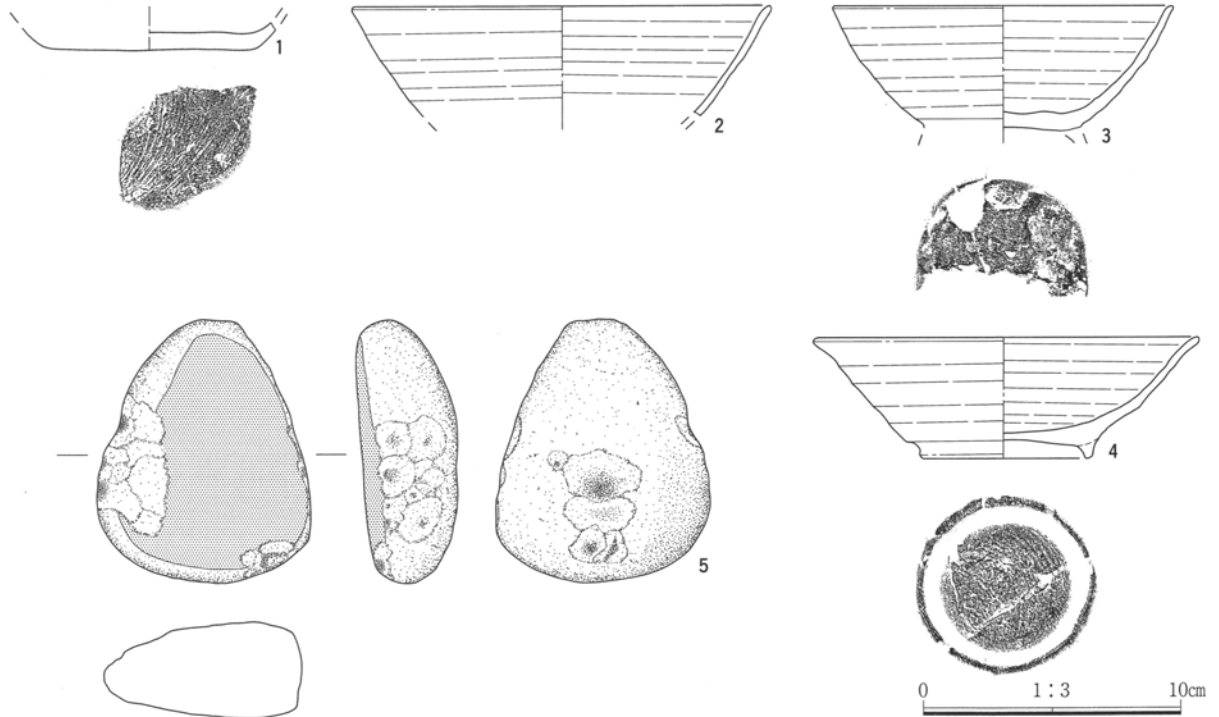
1. 灰黒色土 軽石を含む。
2. 灰黒色土 軽石を少量含む。
3. 灰黒色土 軽石を含む。
4. 灰黒色土 軽石と少量のロームと微量の焼土粒を含む。
5. 暗褐色土 黒褐色土、焼土粒・ブロック、ロームの混土 (床下土坑。以前の竈構築土で埋めたものか)。
6. 暗褐色土 黒褐色土とロームの混土。

宮下C区 78号住居 竈

1. 褐色土 焼土粒、ローム、軽石を含む。
2. 褐色土 1層よりロームが多く、軽石は少ない。
3. 黄褐色土 多量のロームと焼土ブロックを含む。
4. 褐色土 焼土、炭化物と多量のロームを含む。



第385図 C区78号住居



第386図 C区78号住居出土遺物

B区 6号住居 (第387図、PL81)

位置 45D-14・15

重複 4号・16号住居と重複し、これに後出する。

形状 全体に削平を受けたため東壁の一部とその周辺を検出したに止まった。残存範囲は南北3.72m、東西1.37mである。

面積 計測不能 **方位** N-62°-E

埋没土 暗褐色土と黄褐色土が堆積していた。

床面 掘り込みを検出することはできなかった。

竈 東壁に造られていたがほとんど削平を受けており、詳細は不明である。燃焼部は一部壁面を掘り込んで壁外に及んでいたと考えられる。

周溝・柱穴・貯蔵穴 確認できなかった。

遺物 全くなかった。

所見 掘削時期は不明である。

C区 50号住居 (第388図、PL81)

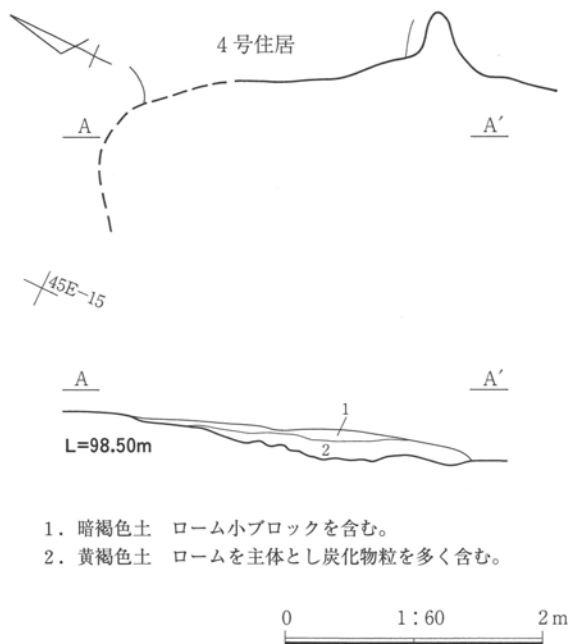
位置 55A・B-9・10

重複 なし。後世の攪乱(道跡等)により本遺構の主要部分が壊されていた。

形状 後世の攪乱により壊されている部分があるが、南北を長軸とする方形を呈すると推定される。規模は長軸3.50m以上、短軸3.36m以上である。

面積 (9.41)m² **方位** N-91°-E

床面 遺構の残存状況が悪く、床面は確認できな



第387図 B区6号住居

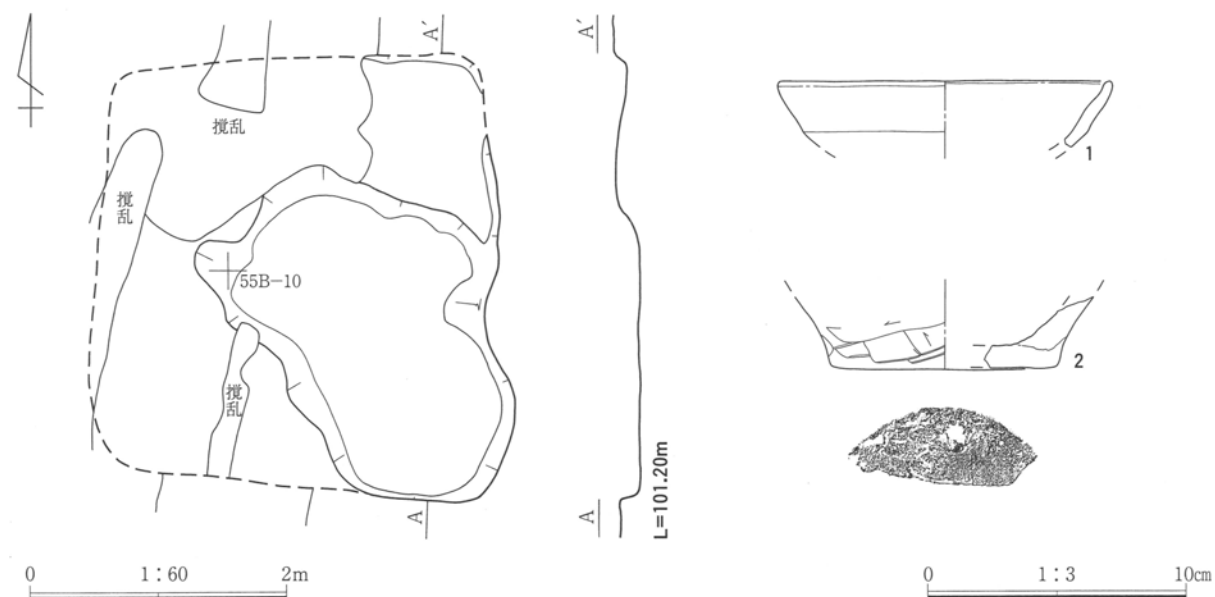
かった。焼土痕を北東部分で確認した。

埋没土 焼土痕付近は焼土を含む暗褐色土やロームブロックを含む黒褐色土で埋まっていた。

炉・竈・周溝・柱穴・貯蔵穴 確認できなかった。

遺物 埋没土中から少量の遺物が出土した。掲載した資料の他に土師器破片7点が出土している。(観P 88)

所見 掘削の時期は不明である。



第388図 C区50号住居・出土遺物

3 掘立柱建物

C区1号掘立柱建物(第389図、PL81)

位置 55C・B-15・16

重複 P5が12号溝と重複し、これに切られる。

形状 2間×2間(北列4.33m、西列4.21m)の東西棟である。南列の中央P6も攪乱を受け、削平されたと考えられる。

柱穴 掘り方はいずれも長円形を呈しており、基本は円形であったと考えられる。P1は深さ59cm、P3は深さ49cm、P8は深さ51cmを測ったが、その他は深さ27~29cmとあまり明瞭な掘り込みではなかった。埋没土は黒褐色土、暗褐色土が主体であった。

面積 19.31m² 方位 N-88°-E

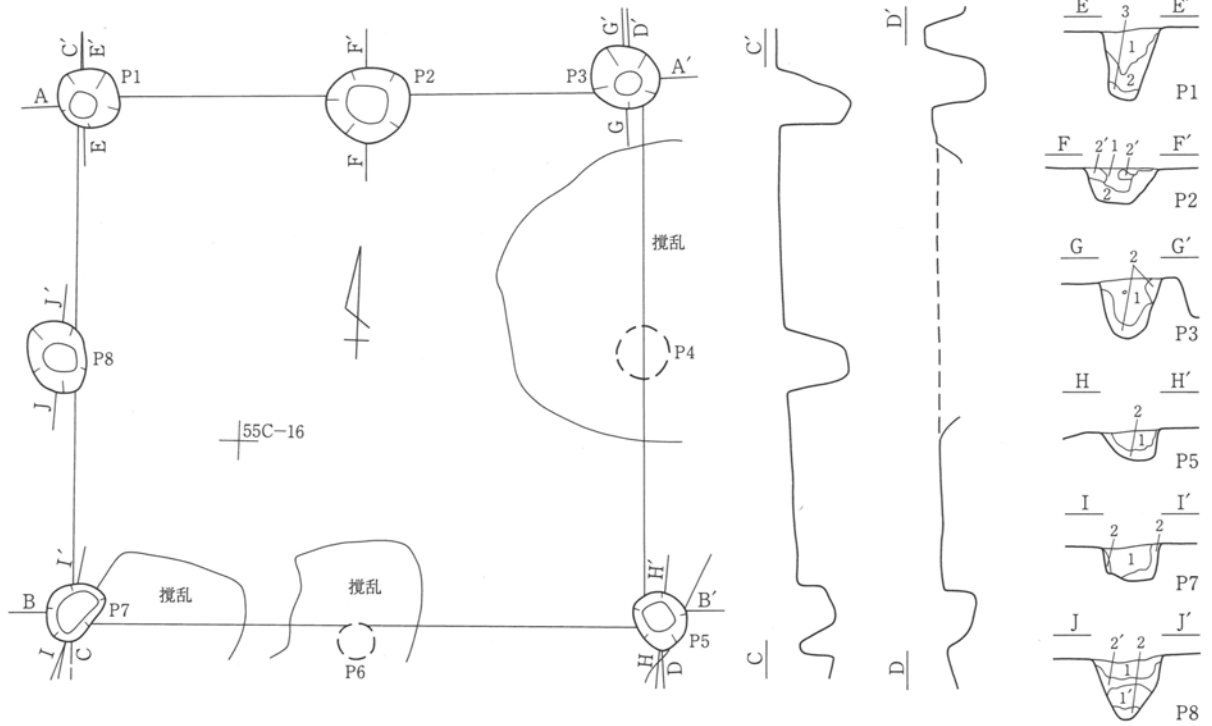
遺物 柱穴埋没土中から弥生土器破片を9点出土

しているが、本遺構に直接伴う出土遺物はない。

所見 築造時期については不明である。調査の所見では柱穴の埋没土が古墳~奈良時代の堅穴住居の埋没土と類似するとして、古代の遺構との指摘が成されている。

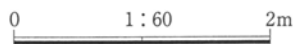
第11表 C区1号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	2間×2間		面積		19.31m ²	
主軸方向	N-88°-E		庇		無し	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
北辺(4.33)	1	52	48	59	円形	2.27
	2	66	61	29	円形	2.07
南辺(4.21)	3	55	48	49	円形	-
	4	-	-	-	-	-
西辺(4.64)	5	46	39	27	円形	2.40
	6	-	-	-	-	2.26
東辺(3.99)	7	51	38	29	楕円形	1.99
	8	60	45	51	楕円形	2.01



1. 黒褐色土 黒色味強い。As-Cを含む。ローム粒を少し含む。
- 1'. 黒褐色土 1層とほぼ同じ。やや軟質。As-Cはやや少ない。
2. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。やや軟質。
- 2'. 暗褐色土 ローム粒を含む。ロームブロックをわずかに含む。
3. 褐色土 地山のロームを主体とする。少量の暗褐色土を含む。軟質。

L=101.80m



第389図 C区1号掘立柱建物

C区2号掘立柱建物 (第390・391図、PL81)

位置 65J・I-1・2

重複 重複関係にある遺構はなかった。

形状 3間×2間(北辺6.00m、東辺3.62m)の東西棟である。梁行、桁行とも四隅の柱穴を結ぶラインより外側に中間の柱穴が掘り込まれている。柱間の間隔は規則性を欠いている。

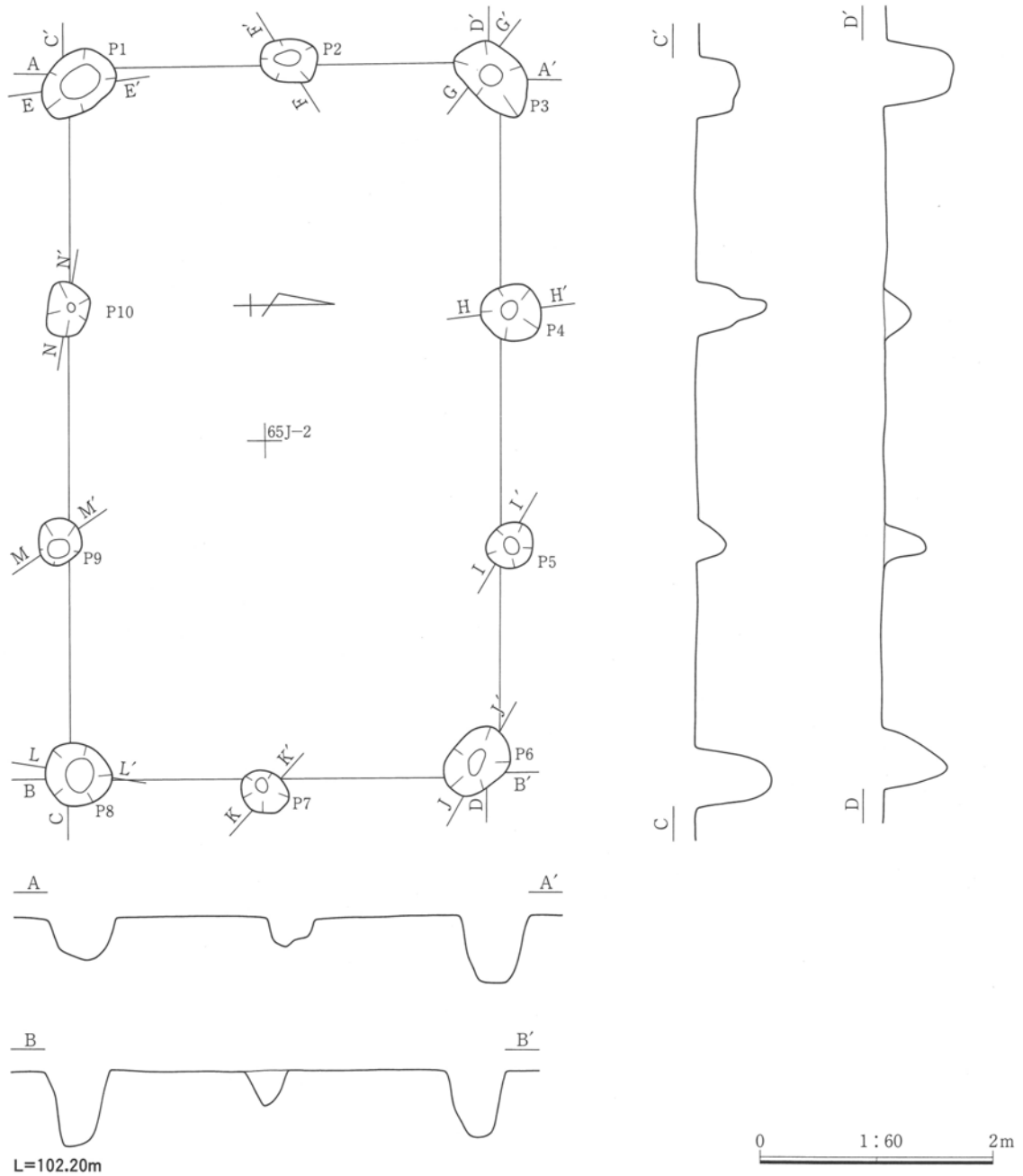
柱穴 掘り方は円形を基本としている。南西隅のP1を除く各隅の柱穴は深さ58cm以上の掘り方を有

するが、全体としてはP9の25cmからP5の107cmまで深さのばらつきが大きかった。

面積 23.35㎡ **方位** N-88°-E

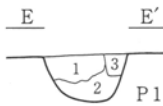
遺物 土師器破片1点が出土した他は本遺構に直接伴う出土遺物はなかった。

所見 詳細な築造時期については不明であるが、1・3号掘立柱建物と主軸方向が共通しており、両者に近い時期の遺構である可能性も考えられる。

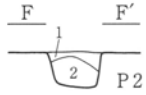


第390図 C区2号掘立柱建物(1)

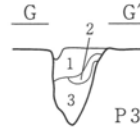
第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



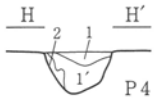
- E E' 1. 黒褐色土 黒色味強い。As-Cを含む。ローム粒・ブロックを少し含む。
 2. 暗褐色土 1層よりローム粒多く色調は明るい。As-Cをわずかに含む。やや軟質。
 3. 褐色土 ローム粒多く含む。黒褐色土少し含む。1層に近い部分に少しAs-Cを含む。



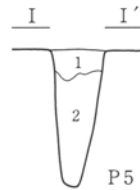
- F F' 1. 暗褐色土 白色軽石、ローム小ブロックを多く含む。
 2. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。



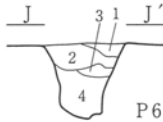
- G G' 1. 暗褐色土 白色軽石、ローム粒を多く含む。
 2. 黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土小ブロックを多く含む。
 3. 暗褐色土 1層に同じ。



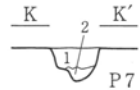
- H H' 1. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを混入。As-Cを少し含む。
 1'. 暗褐色土 1層より暗い。ローム粒が少し混じるが混入物は少ない。やや軟質。
 2. 褐色土 地山と同様のローム。少し黒褐色土を混入。やや軟質。



- I I' 1. 暗褐色土 白色軽石、ローム小ブロックを多く含む。
 2. 黒褐色土 ローム粒を多く含む。

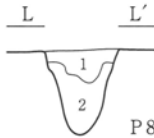
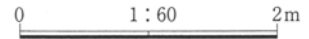


- J J' 1. 暗褐色土 ローム粒を非常に多く含む。
 2. 黒褐色土 白色軽石、ローム粒を多く含む。
 3. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
 4. 黒褐色土 2層に同じ。

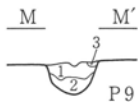


- K K' 1. 黒褐色土 白色軽石、ローム小ブロックを多く含む。
 2. 暗褐色土 ローム粒を非常に多く含む。

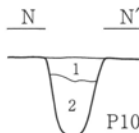
L=102.20m



- L L' 1. 黒褐色土 P1の1と同質。
 2. 暗褐色土 P1の2と同質。



- M M' 1. 黒褐色土 P1の1と同質。
 2. 暗褐色土 P1の2と同質。
 3. 褐色土 P1の3と同質。



- N N' 1. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
 2. 暗褐色土 1層に類似するがより多くローム粒を含む。

第391図 C区2号堀立柱建物(2)

C区3号掘立柱建物(第392図、PL82)

位置 55C・B-14・15

重複 54号住居と重複しこれに先出する。

形状 3間×2間(南列5.83m、西列3.77m)の東西棟である。北東隅のP6は後世の攪乱を受け削平されていた。

西辺中間に位置するP2は、北西隅のP3と南西隅のP1を結ぶラインより外側に位置している。

柱穴 円形を基本としているが、平面規模の相違は大きい。深さは最も深いP4が39cmであった。埋没土は暗褐色土か黒褐色土である。

第12表 C区2号掘立柱建物計測値一覧

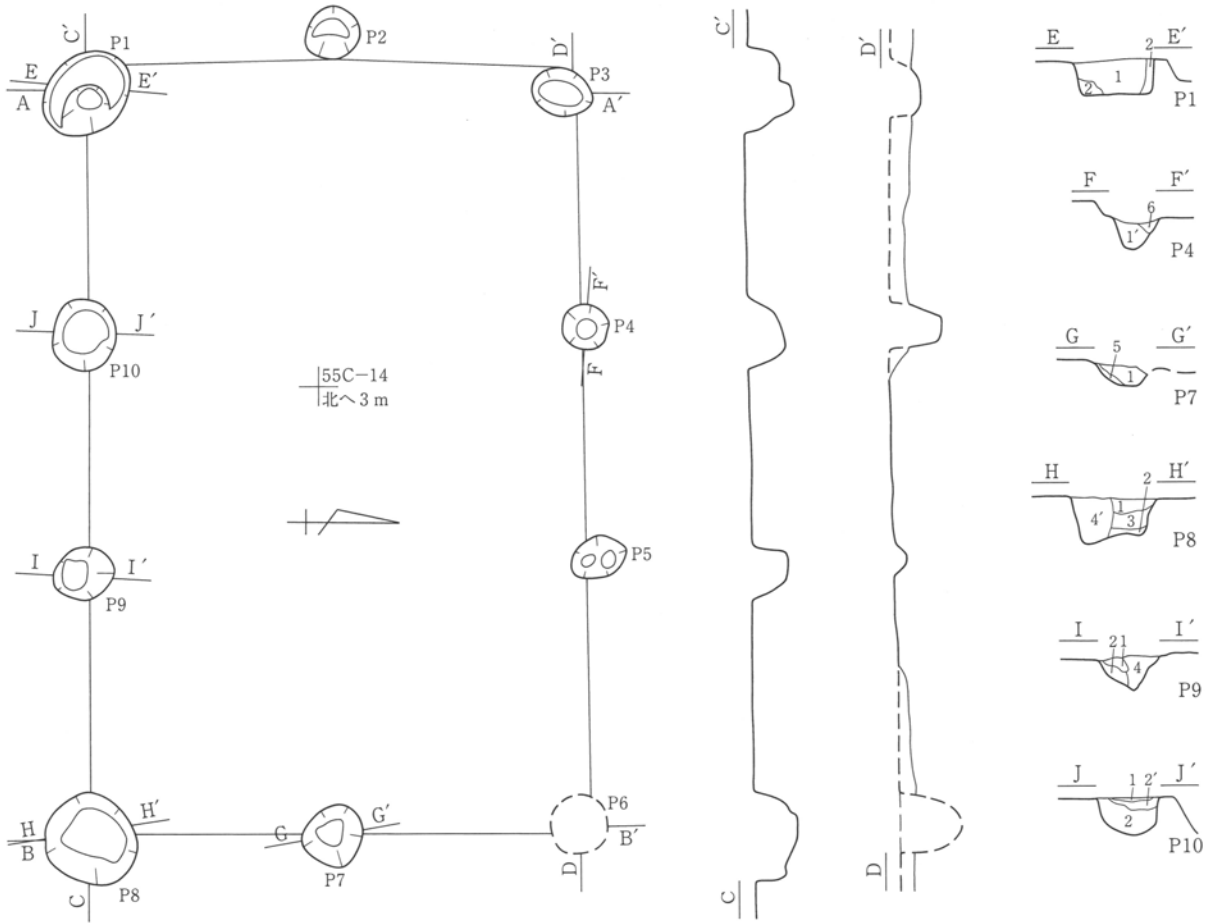
建物全体規模	2間×2間		面積	23.35㎡		
主軸方向	N-88°-E		庇	無し		
桁・梁行の規模(m)	柱穴Na	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
西辺(3.62)	1	70	50	36	楕円形	1.85
	2	49	38	28	楕円形	1.79
北辺(6.00)	3	76	47	70	楕円形	2.06
	4	55	49	38	円形	2.06
	5	44	39	107	円形	1.91
東辺(3.48)	6	65	47	58	楕円形	1.89
	7	43	36	33	円形	1.61
南辺(6.06)	8	69	55	67	円形	1.98
	9	42	39	25	円形	2.12
	10	47	37	61	楕円形	1.98

面積 (24.08)㎡ 方位 N-88°-W

遺物 本遺構に直接伴う出土遺物はなかった。掲載した資料の他に土師器破片20点が出土した。

(観P88)

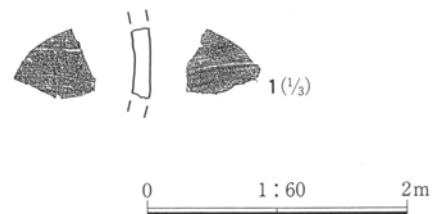
所見 詳細な掘削築造時期については不明であるが54号住居が平安時代の住居であることから本遺構の年代はそれ以前のこととなる。調査の所見では北辺のP3~P5は直径が小さく浅いことから、柵列に止まる可能性も指摘されていたが、今回は掘立柱建物として報告した。



- 1. 黒褐色土 黒色味強い。As-C、ローム粒を含む。
- 1'. 黒褐色土 黒色味強い。ローム粒は目立たない。As-Cの混入は1層に比べ少ない。
- 2. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。やや軟質。
- 2'. 暗褐色土 ローム粒・ブロック少し含む。2層よりやや暗い。
- 3. 暗褐色土 1・2層の混土層。1層のように黒色味の強い土層中にローム粒・ブロックを多く含む。
- 4. 暗褐色土 色調は2層よりやや暗め。As-Cを少し含む。ローム粒が散見される。
- 4'. 暗褐色土 4層に近い。ローム粒をわずかに含む。
- 5. 暗褐色土 地山のロームを主体とする。黒褐色土が少し混じる。
- 6. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックと黒褐色土の混土層。ロームブロックは壁面の崩壊に伴うものと考えられる。

第13表 C区3号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	3間×2間		面積	(24.08㎡)		
主軸方向	N-88°-W		庇	無し		
桁・梁行の規模(m)	柱穴Na	規模 (cm)			形状	次ピットとの間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
西辺 (3.77)	1	76	61	36	楕円形	2.01
	2	44	40	15	円形	1.90
北辺 (5.84)	3	50	39	7	楕円形	1.86
	4	38	37	39	円形	1.83
東辺 (3.95)	5	46	32	11	楕円形	2.13
	7	49	44	17	円形	1.86
南辺 (5.83)	8	75	68	34	円形	2.06
	9	49	41	28	円形	1.93
	10	56	48	31	円形	1.84



第392図 C区3号掘立柱建物・出土遺物

C区4号掘立柱建物 (第393図、PL82)

位置 65D・E-8・9

形状 2間×2間(北列3.93m、東列4.03m)の棟である。梁行・桁行がほぼ同規模であるが、他の掘立柱建物との関係を考えて東西棟であったものと考えられる。南列が4.17mに及ぶことからP3の位置する南東隅は鈍角をなしている。

柱穴 円形を基本としており、大径でしっかりした掘り方を有している。埋没土は黒褐色土、黄褐色土を主体とする。

面積 16.13m² **方位** N-77°-E

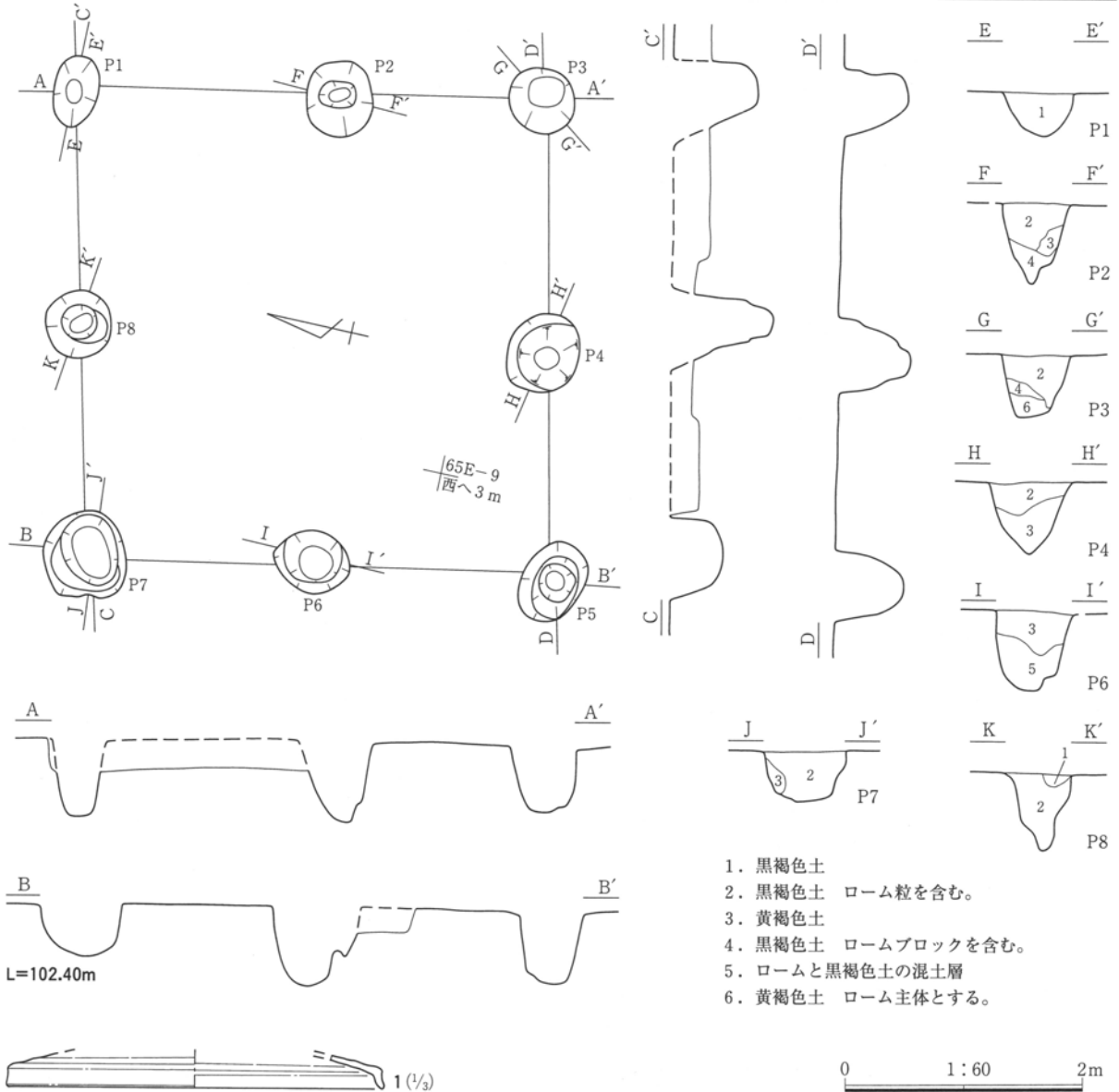
遺物 掲載した資料の他に土師器破片11点、須恵

器破片1点が出土している。(観P88)

所見 築造時期については断定できないが、柱穴埋没土中から9世紀代の土師器が出土していることから、それ以降、平安時代の可能性が考えられる。

第14表 C区4号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	2間×2間		面積	16.13m ²		
主軸方向	N-77°-E		庇	無し		
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
東辺(4.03)	1	62	38	39	楕円形	2.26
	2	64	57	67	円形	1.76
南辺(4.17)	3	60	55	54	円形	2.27
	4	72	61	61.5	円形	1.90
西辺(3.96)	5	73	52	58.5	楕円形	2.06
	6	67	54	69	楕円形	1.93
北辺(3.93)	7	78	69	45	楕円形	1.95
	8	58	56	68	円形	1.99



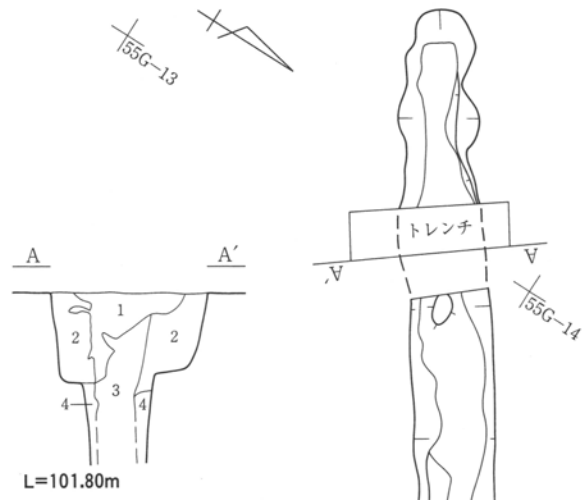
第393図 C区4号掘立柱建物・出土遺物

4 地割れ

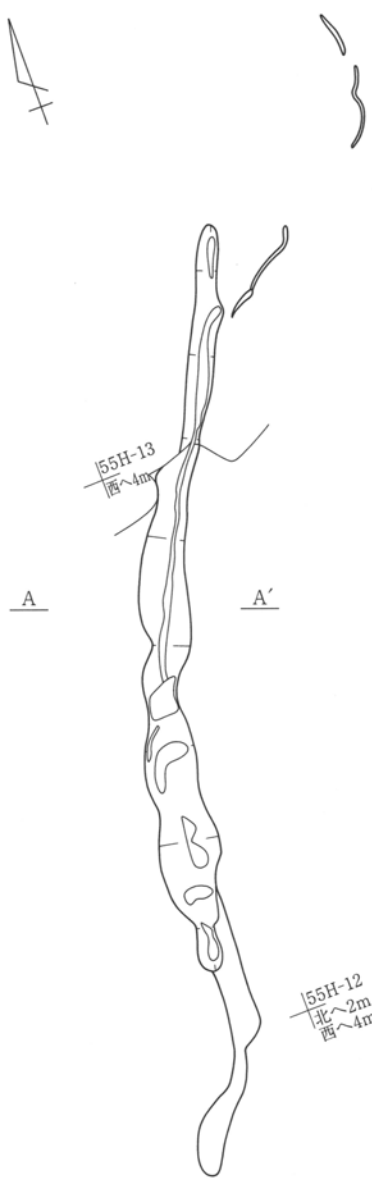
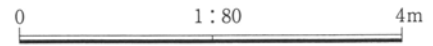
富田宮下遺跡、富田細田遺跡においては遺構の確認・検出作業、旧石器時代の調査時に多くの地割れや噴砂が検出された。

55F-14グリッド周辺の地割れは、遺構確認時に検出された。N-60°-Eの方向に延びており、長さ9.06m、最大幅0.88mを測った。割れ口は確認面から1.8mまで掘り下げたが以下は未確認である。内部には黒褐色土、黄褐色土が流入していた。

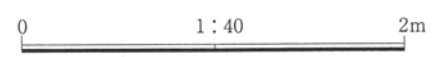
C区76号住居周辺においても多数の地割れが検出された。67号住居の掘り方面精査では第324図に提



- 宮下C区 55-14G周辺 地割れ
1. 黒褐色土 黒色土が主体。ローム粒のブロックを少量含む。As-Cを少量含む。
 2. 黄褐色土 ローム粒を均質に含む。
 3. 黄褐色土 2層より黒色味をおびる。
 4. 黒褐色土 黒色土を混入する。暗色帯に相当する層と思われる。



- 宮下C区 76号住居内地割れ
1. 黒褐色土 黒褐色土にローム粒が混入する。軟質。上部からの落ち込みと考えられる。
 2. 褐色土 地山に比べ白色味をおび、明るい。周囲のロームが崩れたものを主体とする。やや軟質。
 3. 淡黄褐色土 周囲に比べ白く明るい。粘土質の土。淡黄色のパミスの粒も含む(Hr-HPと考えられる)。このパミスは下位に行くに従って増える。また下位の方がやや暗く漸移的にHr-HP(X層)の色調に近づく。しまりよし。



第394図 C区地割れ

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

示したように0.5~1.5m程の間隔ではほぼ並行する大小規模の亀裂が9本以上確認できた。

第394図下の地割れは68号・76号住居と重複するもので、割れ口は76号住居の床面から1.9m下位のHr-HP層にまで達しており、その層から填砂が上昇していた。この部分の土層に対する科学的分析については第5章第3節に詳述した。

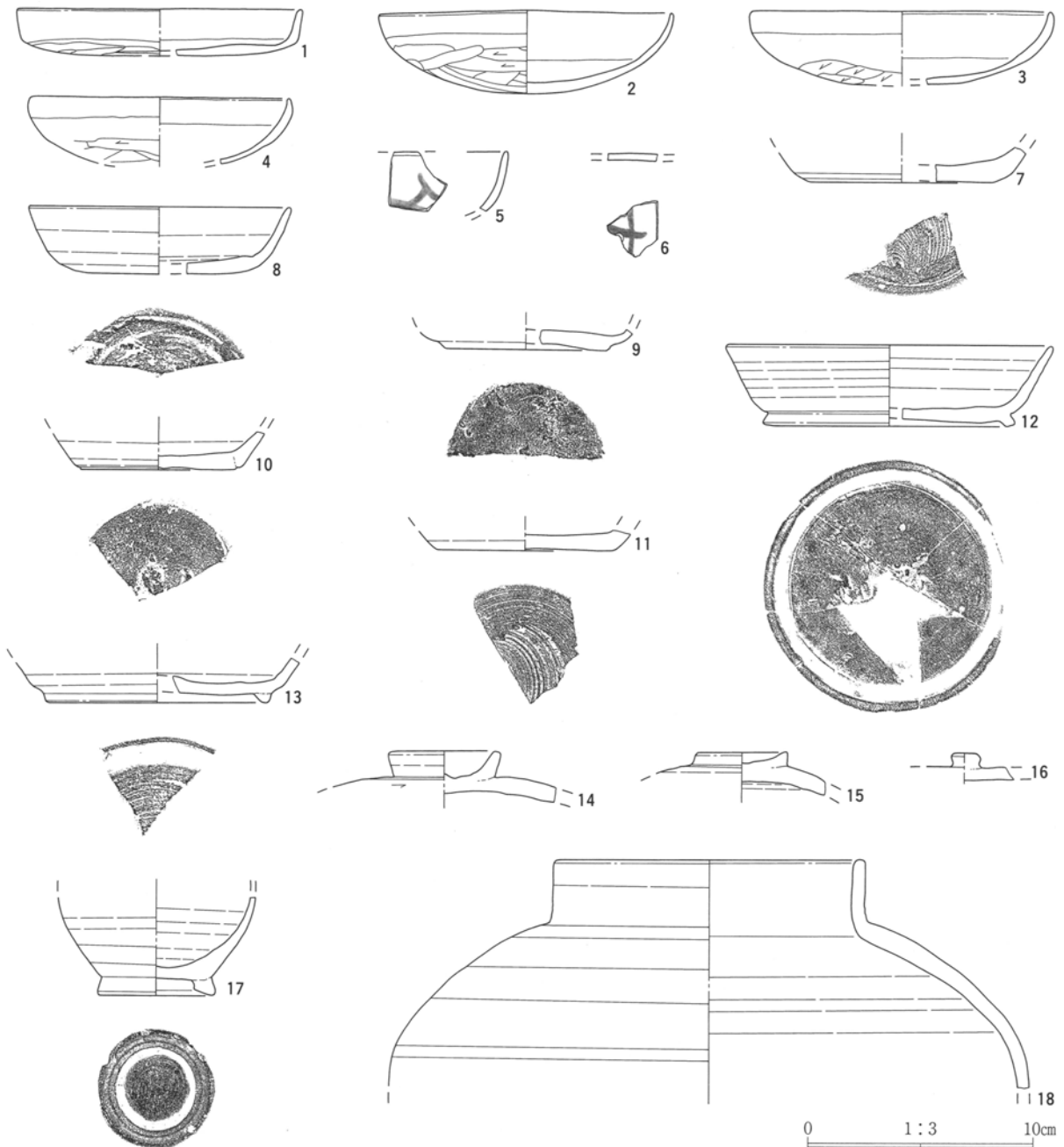
住居との新旧関係は、76号住居(8世紀末~9世紀初頭)→地割れ→68号住居(9世紀後半)である。こ

のことからこの地割れは818(弘仁9)年の地震による可能性が高い。

5 遺構外出土遺物(第395図、PL144)

ここでは、竪穴住居出土資料中には認められなかった遺構外出土の資料を中心に報告する。

1~6は土師器杯である。5・6は墨書が認められた。7以下は須恵器である。8~10は底部にヘラケズリ調整が施されている。17は高台付の壺、18は広口の直口壺の上半部破片である。(観P88・89)



第395図 奈良・平安時代の遺構外出土遺物

第8節 中世以降の遺構と遺物

1 概要

中・近世の遺構としては掘立柱建物3棟、井戸12基、溝38条、土坑32基、道状遺構1条、遺構址1基が検出された。

B区3号・8号土坑は古銭を伴い墓と考えられる。溝にはA区15号・16号溝のように流水の痕跡が認められるものは少数で、B区1号・2号溝のよう区画溝の性格を有するものが多数であった。

各遺構からは少量であったが、陶磁器、土師質皿、軟質陶器、砥石、石臼、石鉢、五輪塔等が出土した。

2 掘立柱建物

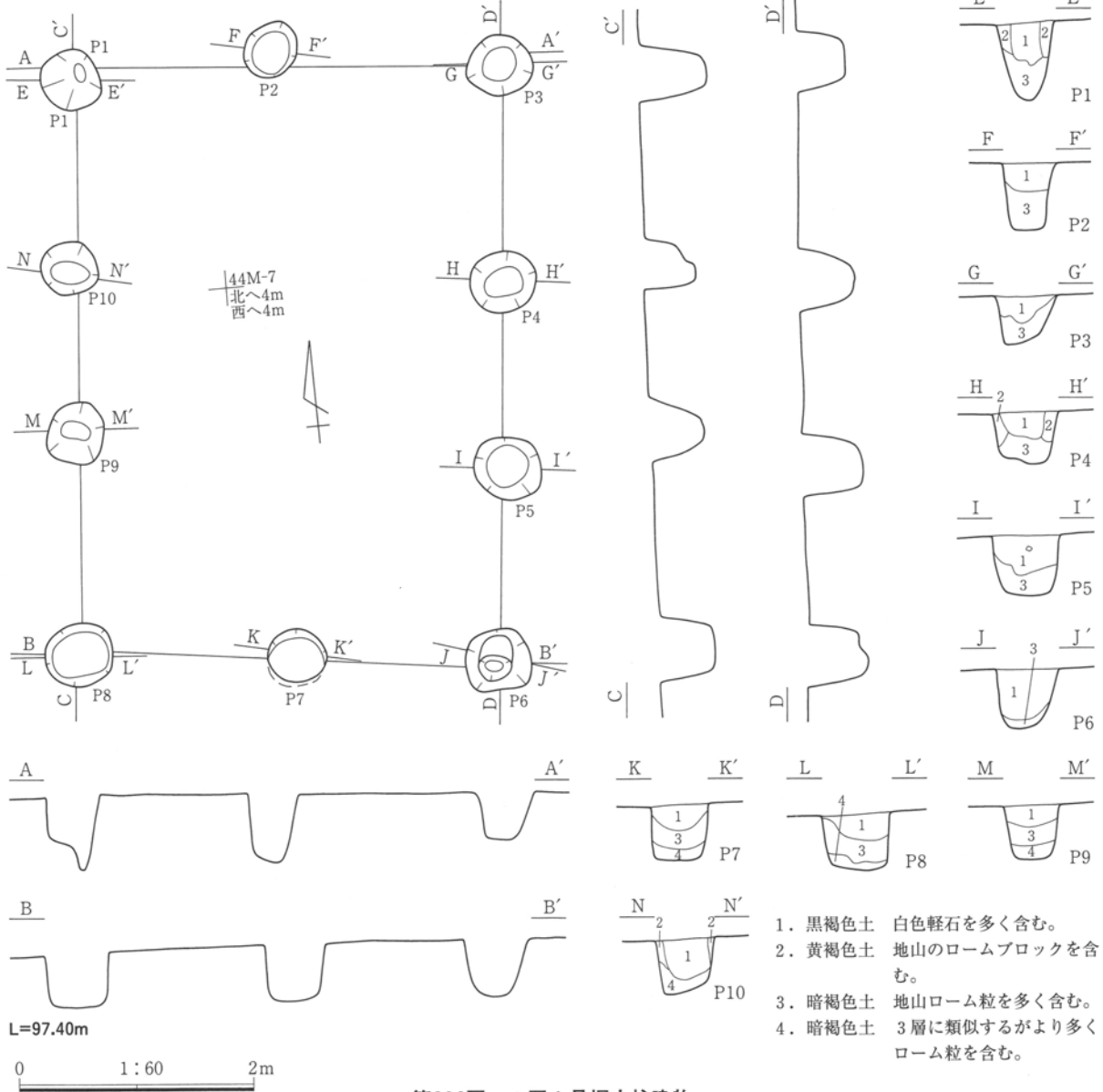
A区1号掘立柱建物(第396図)

位置 44N・M-7・8

重複 重複する遺構はない。

形状 3間×2間(東列5.19m、南列3.62m)の南北棟である。北列中央に位置するP2はやや外側寄りに掘り込まれている。

柱穴 円形を基本としている。いずれも長径50cmを越える掘り方を有しており、P3がやや浅い他は47cm以上の深さが残されていた。埋没土は黒褐色土、黄褐色土、暗褐色土が堆積していたが柱痕は確認できなかった。



第396図 A区1号掘立柱建物

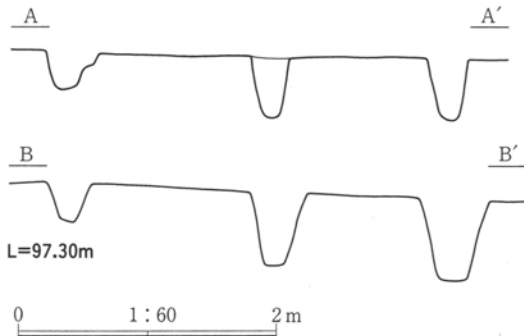
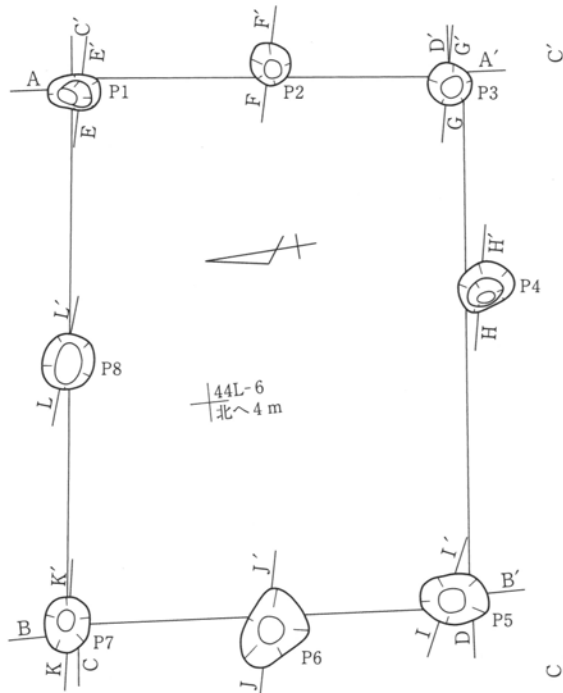
面積 19.0m² 方位 N-6°-E

遺物 土師器破片5点が出土したが、本遺構に直接伴う遺物はない。

所見 詳細な築造時期は不明である。

第15表 A区1号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	3間×2間			面積	19.00m ²	
主軸方向	N-6°-E			庇	無し	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
北辺(3.67)	1	52	50	68.5	円形	1.78
	2	51	44	59	楕円形	2.00
東辺(5.19)	3	55	54	31.5	円形	1.89
	4	59	52	47	円形	1.58
南辺(3.62)	5	62	55	51	円形	1.73
	6	61	60	50	円形	1.73
西辺(5.03)	7	52	46	49	円形	1.90
	8	61	54	47.5	楕円形	1.94
	9	54	37	48.5	楕円形	1.36
	10	51	44	50.5	円形	1.73



A区 2号掘立柱建物(第397図、PL83)

位置 44K・L-6・7

重複 重複する遺構はない。

形状 2間×2間(北列4.13m、西列3.07m)の東西棟である。各柱穴の位置、柱間の間隔にはばらつきが多く、整然としない造りである。

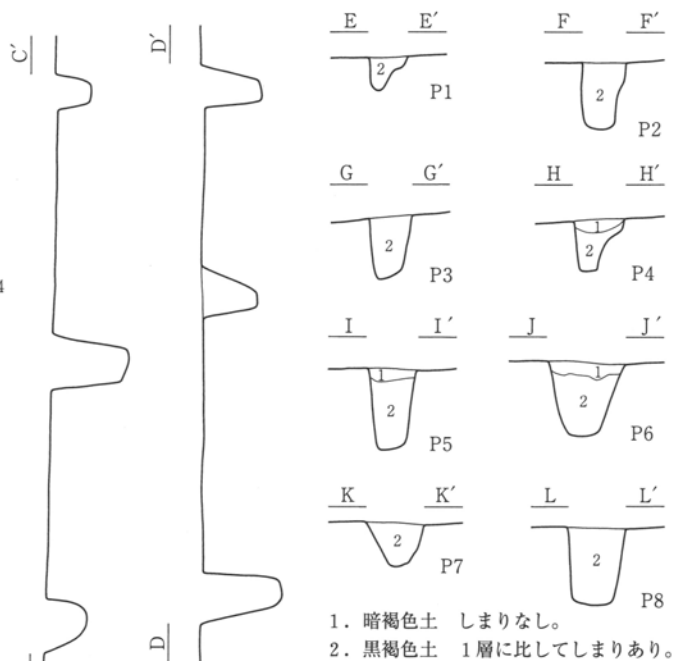
柱穴 円形を基本としている。P1とP7は掘り込みが浅いが他は深さ40cm以上の残存であった。

埋没土は暗褐色土、黒褐色土である。

面積 13.47m² 方位 N-84°-W

遺物 土師器破片1点が出土したが、本遺構に直接伴う出土遺物はない。

所見 詳細な築造時期は不明である。



第16表 A区2号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	2間×2間			面積	13.47m ²	
主軸方向	N-84°-W			庇	無し	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
東辺(3.10)	1	42	28	28.5	楕円形	1.66
	2	34	31	54	円形	1.43
南辺(4.04)	3	35	32	50.5	円形	1.69
	4	45	35	42.5	楕円形	2.40
西辺(3.07)	5	54	40	65	楕円形	1.47
	6	63	42	60.5	楕円形	1.63
北辺(4.13)	7	45	35	35.5	楕円形	2.02
	8	45	42	61	楕円形	2.11

第397図 A区2号掘立柱建物

B区1号掘立柱建物 (第398図、PL83)

位置 45A・B-10・11

重複 重複する遺構はない。

形状 2間×1間(南列4.82m、東列3.43m)の東西棟である。柱穴の位置は比較的整然としている。

柱穴 円形を基本としている。断面形は中央部分がさらに細く深くなる形状のものが多数あった。P2がやや浅い他はいずれも40cm以上の深さを残していた。

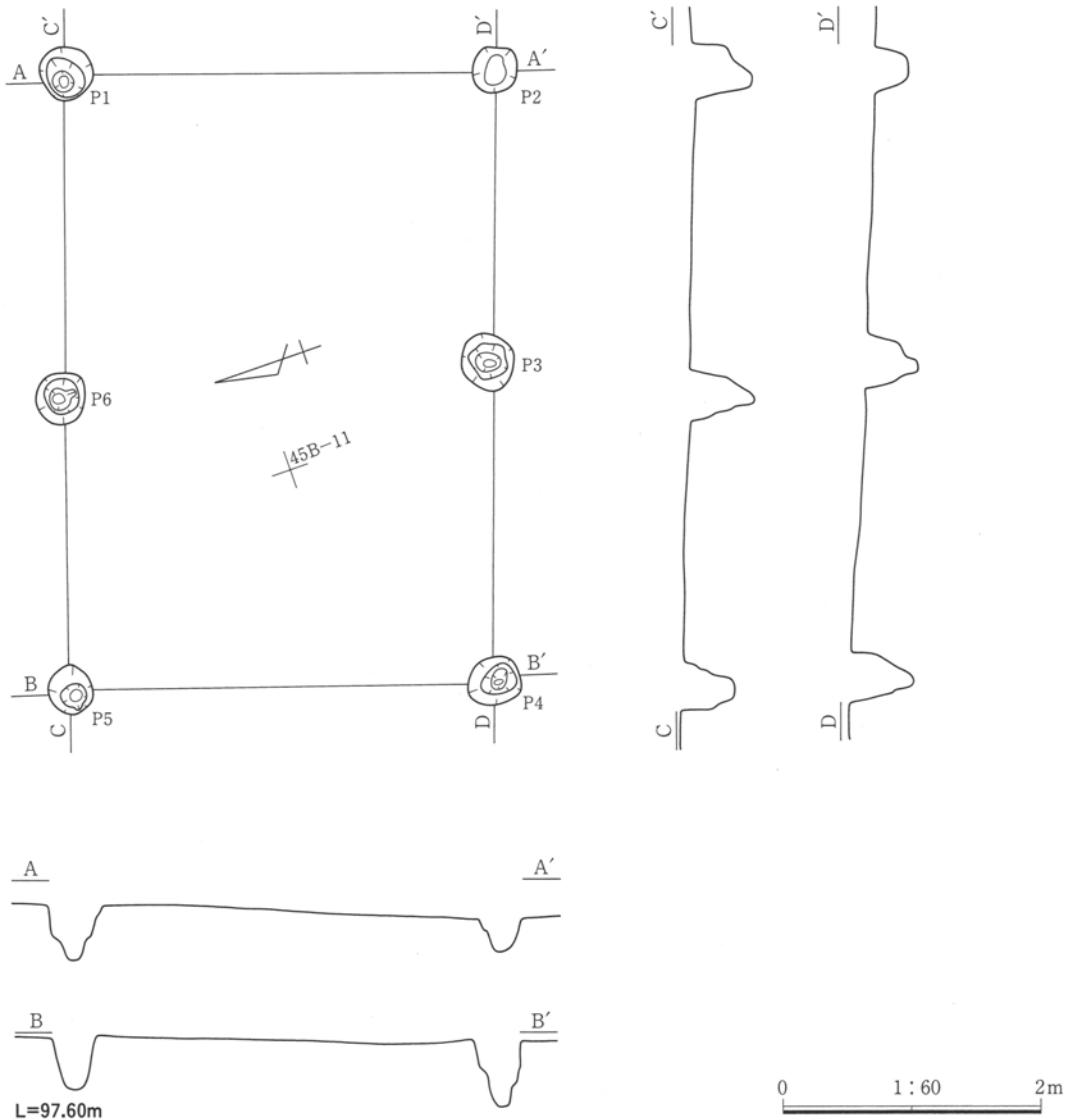
面積 16.27m² **方位** N-71°-W

遺物 土師器破片4点、須恵器破片2点が出土したが、本遺構に直接伴う出土遺物はない。

所見 詳細な築造時期は不明である。柱穴埋没土中から須恵器の破片を出土することから、古代以降の遺構と考えられる。また、主軸が西側に掘られた1号・2号溝の走向と共通することから、近世の遺構と考えられる。

第17表 B区1号掘立柱建物計測値一覧

建物全体規模	2間×1間		面積	16.27m ²		
主軸方向	N-71°-W		庇	無し		
桁・梁行の規模(m)	柱穴No	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
東辺(3.43)	1	43	43	49	円形	3.43
南辺(4.82)	2	37	35	27.5	円形	2.50
	3	43	43	42.5	楕円形	2.51
西辺(3.34)	4	43	37	53	円形	3.34
北辺(4.83)	5	38	35	42.5	円形	2.35
	6	43	38	52.5	円形	2.49



第398図 B区1号掘立柱建物

3 井戸

A区 1号井戸 (第399図、PL83)

位置 44P-7

重複 重複する遺構はない。

形状 井桁、井筒等は確認できなかった。掘り方の平面形は円形を呈し、長径1.94m、短径1.65mであった。断面形は深さ1.74mを測り、底面から上方に向かって徐々に開き、上方でその度合いを強める形状であった。底面の直径は約0.80mである。壁面に明瞭な透水層はみられない。

方位 計測不可

埋没土 上・中層に暗褐色土が堆積、上層は砂質である。下層には粘性のある黒褐色土が堆積、礫も含まれていた。

所見 出土遺物はなく、詳細な掘削時期は不明である。

A区 2号井戸 (第399・406図、PL83・144)

位置 44M・N-10

重複 12号溝に後出する。

形状 掘り方の平面形は円形であるが、中段での形状は北西から南東方向に長軸を有する長円形に近いものであった。規模は長径2.63m、短径2.04mである。断面形は上位が漏斗状に外反して立ち上がるものであるが、深さ1.02mまで確認、以下は出水のため未完掘である。

方位 N-62°-W

埋没土 暗灰褐色土、暗褐色土が20~30cm程の厚さで堆積している。

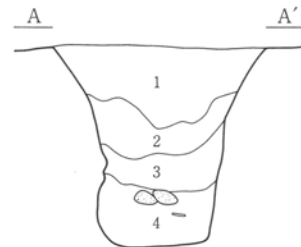
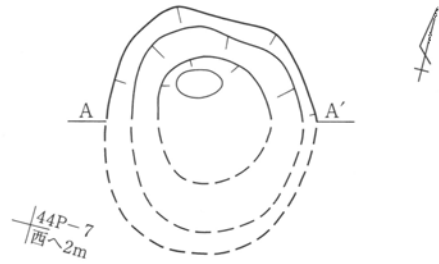
所見 埋没土中から石臼(1)が出土した。詳細な掘削時期は不明であるが、近世以降の井戸と考えられる。埋没土中から土師器破片2点、須恵器破片2点が出土しているが混入品と考えられる。(観P90)

A区 3号井戸 (第400・406図、PL83・144)

位置 44N-10

重複 重複する遺構はない。

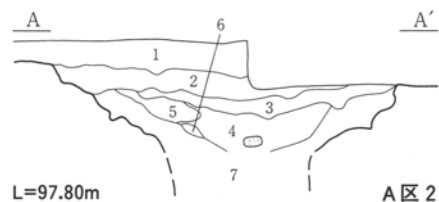
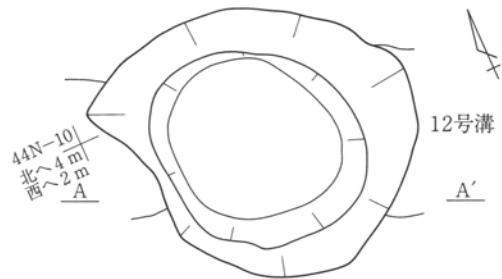
形状 掘り方の平面形は円形で長径1.04m、短径0.94mを測った。深さは0.80mである。壁面に明瞭な透水層はみられなかった。



L=97.30m

A区1号井戸

1. 暗褐色土 全体にしまりなく砂質。
2. 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
3. 暗褐色土 2層に類似するがより多くロームブロックを含む。
4. 黒褐色土 粘性あり。



L=97.80m

A区2号井戸

1. 暗灰褐色土 圃場整備時に埋め戻した土粒。
2. 暗褐色土 ローム粒を含む。橙色の粒あり。
3. 暗灰褐色土 ローム粒を少量含む。2層より灰色味をおび、1層より明るい。
4. 暗灰褐色土 ロームの小ブロックを少量、斑状に含む。3層より色調は暗い。やや軟質。
5. 暗褐色土 3層に類似するがローム粒・小ブロックが多い。
6. 褐色土 ロームを主体とする。ブロック状に堆積。やや粘性をおびる。
7. 暗灰褐色土 混入物はない。やや粘性をおびる。

0 1:60 2m

第399図 A区1・2号井戸

方位 N-74°-E

埋没土 上層には暗褐色土とロームブロックの混土層が、中・下層には砂質の黒褐色土が堆積していた。

所見 埋没土中から石臼(1)が出土しているが、詳細な掘削時期は不明である。近世以降の井戸か。また、深さが浅く、他の機能を想定する必要もあろうか。(観P90)

A区 5号井戸 (第400図、PL84)

位置 44O-15・16

重複 重複する遺構はなかった。

形状 掘り方の平面形は円形を基本としているが、上端では東西方向に長軸を有していた。規模は長径1.84m以上、短径1.24mである。断面形は上半が漏斗状に外反、下半が筒状を呈していたと考えられるが、深さ0.96mまでを検出、以下は出水のため未完掘である。底面までの深さは1.9m程が想定される。

方位 N-52°-W

埋没土 混入物を変えながら10~30cmの厚さで黒褐色土が堆積している。人為的に埋め戻された痕跡は認められない。

所見 埋没土中から土師器破片3点、須恵器破片1点が出土しているが、混入品と考えられる。そのため詳細な掘削時期は不明である。近世以降の井戸か。

A区 6号井戸 (第401・407図、PL84・144)

位置 44M-11

重複 重複する遺構はない。

形状 掘り方の平面形は円形を呈する。規模は長径2.40m、短径2.25mを測る。断面形は上半が外反著しく立ち上がる形状である。深さは1.83mで、榛名八崎テフラを掘り抜き、大胡火碎流相当層にまで到達していた。榛名八崎テフラと大胡火碎流相当層が透水層であったと考えられる。

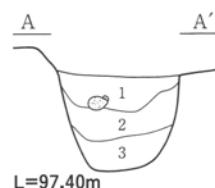
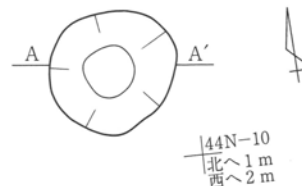
方位 N-86°30'-W

埋没土 上層から中層にかけてはローム粒・ブロックを混入する土層が、下層には砂粒を含む土層が堆積していた。

遺物 埋没土中から石臼(1)の小破片、須恵器甕

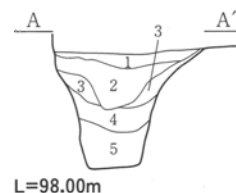
(2~4)が出土した。掲載した資料の他に土師器破片13点、須恵器破片4点が出土した。(観P90)

所見 詳細な掘削年代は不明であるが、石臼の破片が出土したことを考えると、中・近世の井戸と考えられる。



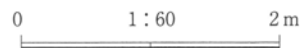
A区3号井戸

1. 暗褐色土とロームブロックの混土層
2. 黒褐色土 砂質。しまりなし。
3. 黒褐色土 2層と同色、同質の土層。途中5cm程の厚さでローム粒が縞状に堆積している。



A区5号井戸

1. 黒褐色土 茶褐色土の小ブロックをまばらに含む。白色軽石をごくわずかに含む。
2. 黒褐色土 1層に類似するが茶褐色土小ブロックの混入が多くなり、全体に茶色味を増す。
3. 黒褐色土 茶褐色土のブロックは2層よりも大きくなる。
4. 黒褐色土 炭化物をわずかに含む。
5. 黒褐色土 黒褐色土と茶褐色土が混土状をなすが、色調は黒色味が強い。



第400図 A区3・5号井戸

B区 1号井戸 (第401・407図、PL84・145)

位置 44Q・R-14

重複 24号土坑と重複し、これに後出する。

形状 井桁・井筒等は確認できなかった。掘り方の平面形は円形で、長径1.21m、短径1.18mであった。深さ1.68mを測り、断面形は上方に向かって徐々に開く形状である。底面の直径は0.93mである。

方位 N-1°-W

遺物 埋没土中から五輪塔の水輪(1)が出土している。(観P90)

所見 詳細な掘削時期は不明であるが、中・近世の井戸と考えられる。

B区 2号井戸 (第401・407図、PL84・145)

位置 44S・T-15

重複 重複する遺構はなかった。

形状 掘り方の平面形は長円形で長径1.03m、短径0.83mである。断面形は筒状を呈し、上端に向かって若干外傾する程度である。底面の直径は短径で0.63mである。

方位 N-4°-W

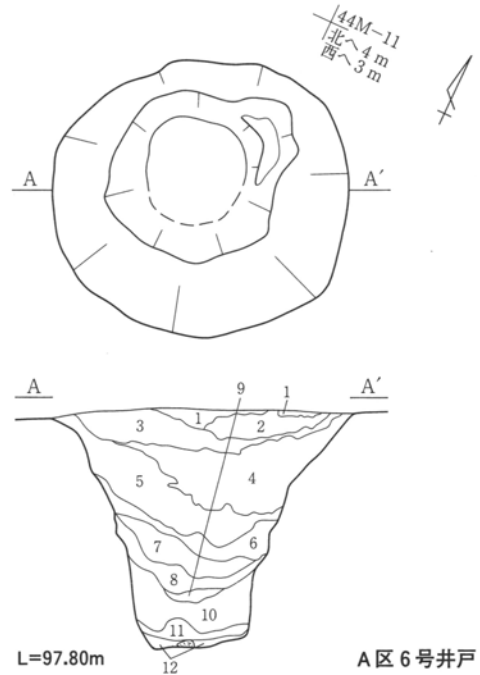
埋没土 上半に黒色砂壤土が、下半に暗褐色土ブロックを含む黄褐色ローム土が堆積していた。

遺物 埋没土中から須恵器杯(1・2)・蓋(3)・甕(5)などが出土したがいずれも破片である。

掲載した資料の他に土師器破片3点、須恵器破片

1点が出土した。(観P91)

所見 詳細な掘削時期は不明である。

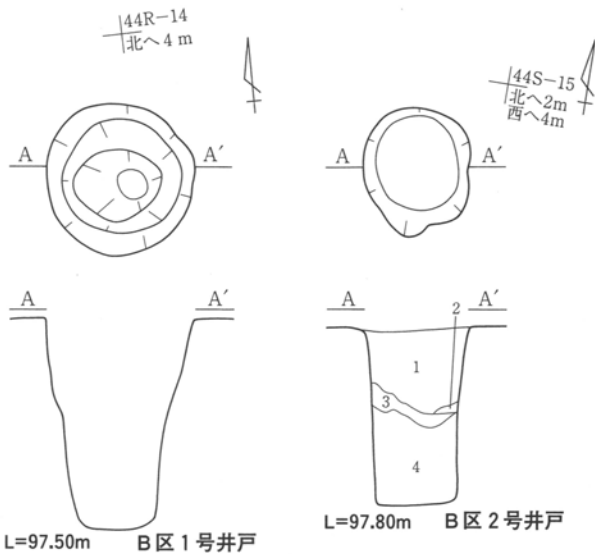


宮下A区 6号井戸

1. 黒色土 As-CまたはHr-FAと考えられる軽石を含む。硬くしまる。
2. 黒褐色土 ロームを含む。1層同様の軽石をわずかに含む。硬くしまる。
3. 褐色土 黒褐色土を少し含むローム粘土質。地山の暗色帯上位に近い。左側はやや黒褐色土多く含む。暗赤褐色の鉄分凝集粒を含む。
4. 黒色土 ローム粒・ブロックを含む。1層同様の軽石を含む(1層より少量)。下位はやや軟質。
5. 褐色土 ロームを主体とする。黒褐色土を少し含む。3層のように粘土質ではない。やや軟質。
6. 黒褐色土 ローム粒を少し含む。底部にロームブロックを少し含む。軟質。
7. 黒色土 ローム粒・ブロック、As-Cと考えられる軽石を少し含む。やや軟質。
8. 暗灰褐色土 7層よりやや灰色味をおびる。やや砂粒を含む。ローム粒・ブロックを含む。やや軟質。
9. 暗灰褐色土 ロームの混入はない。砂質。やや軟質。
10. 褐色ローム・黒褐色土・灰褐色土の互層 ロームや粘性のある土粒がラミナ状に堆積する。
11. 暗灰色土 やや灰色がかった黒色味をおびた粘質の土粒。下位には砂粒を含む。軟質。
12. 赤褐色土 井戸の底のローム層に鉄分が凝集し固まったと考えられる。赤色味があり硬くしまっている。

宮下B区 2号井戸

1. 黒色土 砂質。黄褐色ロームブロックを少量含む。
2. 暗褐色土 粘性に乏しく、しまり弱い。
3. 黄褐色土
4. 黄褐色ローム土 暗褐色土ブロックを少量含む。



第401図 A区6号井戸、B区1・2号井戸

0 1:60 2m

B区 3号井戸 (第402・408図、PL84・145)

位置 44Q-19・20

重複 9号住居より後出であるが、3号・4号溝との新旧関係は不明である。

形状 掘り方の平面形は円形で長径2.54m、短径2.37mである。断面形は漏斗状を呈し確認面から1.4m下位に変換点を有し、上方に向かって大きく外反する。確認面から3.98m下位まで壁面を確認したが完掘できなかった。底面までの深さは5.26mである。

方位 N-22°-E

埋没土 上層1～5層は不自然な堆積状況であった。6層以下は自然堆積であった。

遺物 軟質陶器内耳焙烙(1)・内耳鍋(2)、施釉陶器甕(3・4)、砥石(5・6)が出土している。

掲載した資料の他に土師器破片53点、須恵器破片1点、陶磁器破片2点、軟質陶器破片6点、石臼破片1点が出土した。(観P91)

所見 詳細な掘削時期は不明であるが、陶磁器の小破片や軟質陶器片の出土から江戸時代の井戸と考えられる。

B区 4号井戸 (第403図、PL85)

位置 44R-16

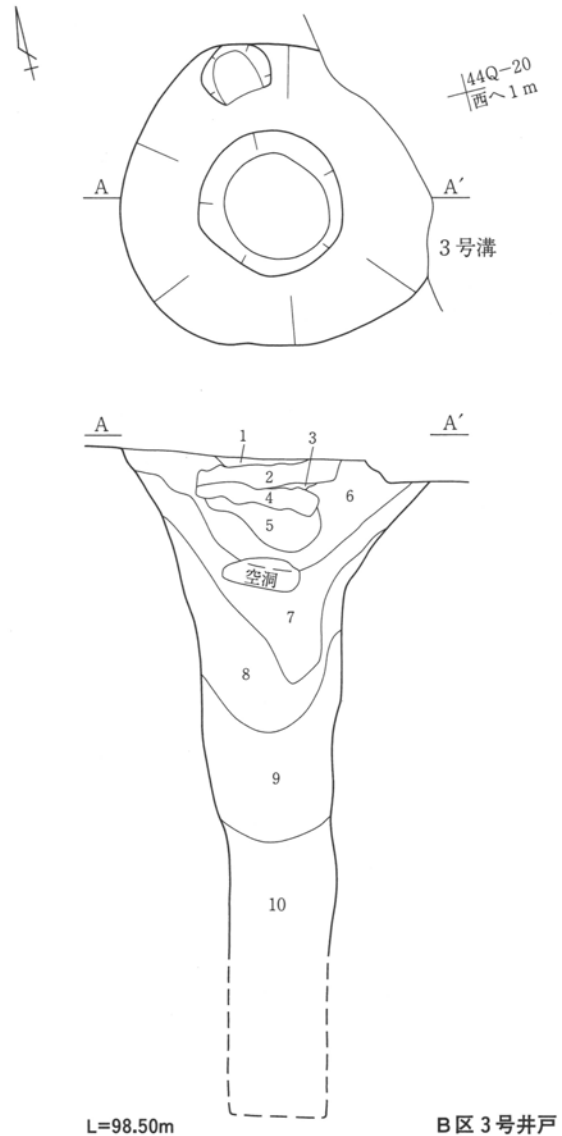
重複 9号溝と重複するが新旧関係は不明である。

形状 掘り方の平面形は円形を呈するが、北東部分の立ち上がりがやや外反気味であったため、ここに長径がある。壁面は上端から1.08m下位に平坦面を有した後北西方向に井筒をずらし、ここから底面までの深さ1.72mの間は直径を徐々に狭めていた。底面に礫が散見された。長径1.40m短径1.14m、深さ2.73mである。

方位 N-60°-E

埋没土 暗褐色土、黒褐色土が堆積していた。

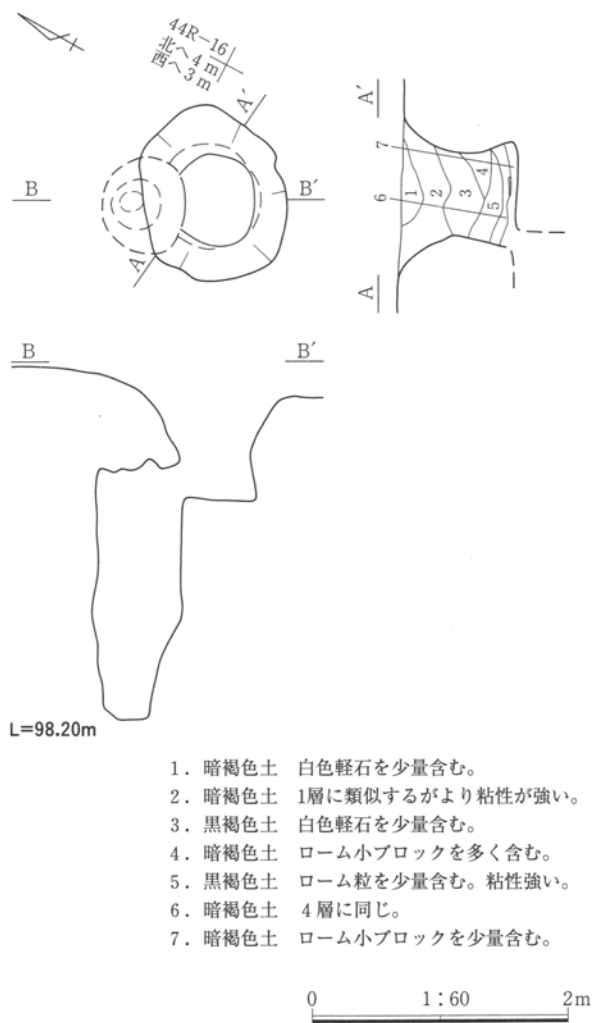
所見 出土遺物は全くなく、詳細な掘削時期は不明である。



1. 黒褐色土 白色軽石をやや多く含む。
2. 黒褐色土 ロームブロックと黒色土ブロックを多く含む。堆積状態は不均質である。白色軽石を少量含む。しまりは強い。
3. 黄褐色土 ローム粒を多く含む。
4. 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。しまり強い。
5. にぶい黄褐色土 ロームブロックを少量含む、ローム粒を多く含む。
6. 暗褐色土 ローム粒、炭化物を少量含む。ややしまりあり。
7. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりなし。
8. 暗褐色土とローム起源の黄褐色土の薄い互層 5cm前後の厚さ。しまりなし。
9. ローム起源の黄褐色土(3～5cmの厚さ)が主体となり、暗褐色土(1～2cmの厚さ)と互層 しまりなし。やや粘性あり。
10. にぶい黄褐色土と黒褐色土の互層 粘性強い。しまり全くなし。

0 1:60 2m

第402図 B区3号井戸



第403図 B区4号井戸

1. 暗褐色土 白色軽石を少量含む。
2. 暗褐色土 1層に類似するがより粘性が強い。
3. 黒褐色土 白色軽石を少量含む。
4. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
5. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。粘性強い。
6. 暗褐色土 4層に同じ。
7. 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。

C区 1号井戸 (第404・408図、PL85・145)

位置 55D-13・14

重複 重複する遺構はない。

形状 井桁・井筒等は確認できなかった。掘り方の平面形は直径3m前後の円形を呈していたと考えられるが、南方向の壁面は最大幅90cm、長さ90cmにわたり突出している。断面形は深さ1.60~1.80mまでは漏斗状に外傾して立ち上がる。南側の突出部分は傾斜が緩やかで階段状の掘り方が設けられていた。それ以下はほぼ垂直に掘り込まれ、底面までの深さは5.62mを測る。底面の直径は85cmである。

方位 N-6°-E

埋没土 確認面から深さ145cmまでの堆積状態を確認した。黒褐色土、黒色土、褐色土などが15~40cmの厚さでレンズ状に堆積していた。

遺物 埋没土中から施釉陶器丸皿(1・2)が出土しており、使用年代を示す遺物の一つと考えられる。

掲載した資料の他に土師器破片158点、須恵器破片10点、陶磁器破片2点が出土した。(観P92)

所見 調査の所見では中世以降、埋没土出土の陶磁器の存在を重視すれば近世以降の遺構と考えられる。

C区 3号井戸

(第405・408・409図、PL85・145・146)

位置 54T-15

重複 35号住居と重複、これに後出する。

形状 井桁等は確認できなかった。掘り方の平面形は円形を基本としていたと考えられるが、東壁はやや外方に張り出していた。規模は長径2.20m、短径1.79mを測った。壁面は深さ3.49mまで確認したが未完掘である。断面形は深さ0.7mまでが漏斗状を呈し、以下は南壁に若干のあぐりがみられるが、ほぼ垂直の掘り方を有していた。

方位 N-87°30'-E

埋没土 不明である。

遺物 埋没土中から施釉陶器碗(2)・香炉(3)・鉢(4)、土師質土器皿(1)、軟質陶器(5~9)が出土している。掲載した資料の他に土師器破片15点、須恵器破片4点、軟質陶器破片1点、陶磁器破片1点を出土した。(観P92)

所見 調査時の所見では江戸時代末期から明治時代の井戸と考えられている。

C区 4号井戸 (第405・409図、PL85・146)

位置 55G-17

重複 重複する遺構はない。

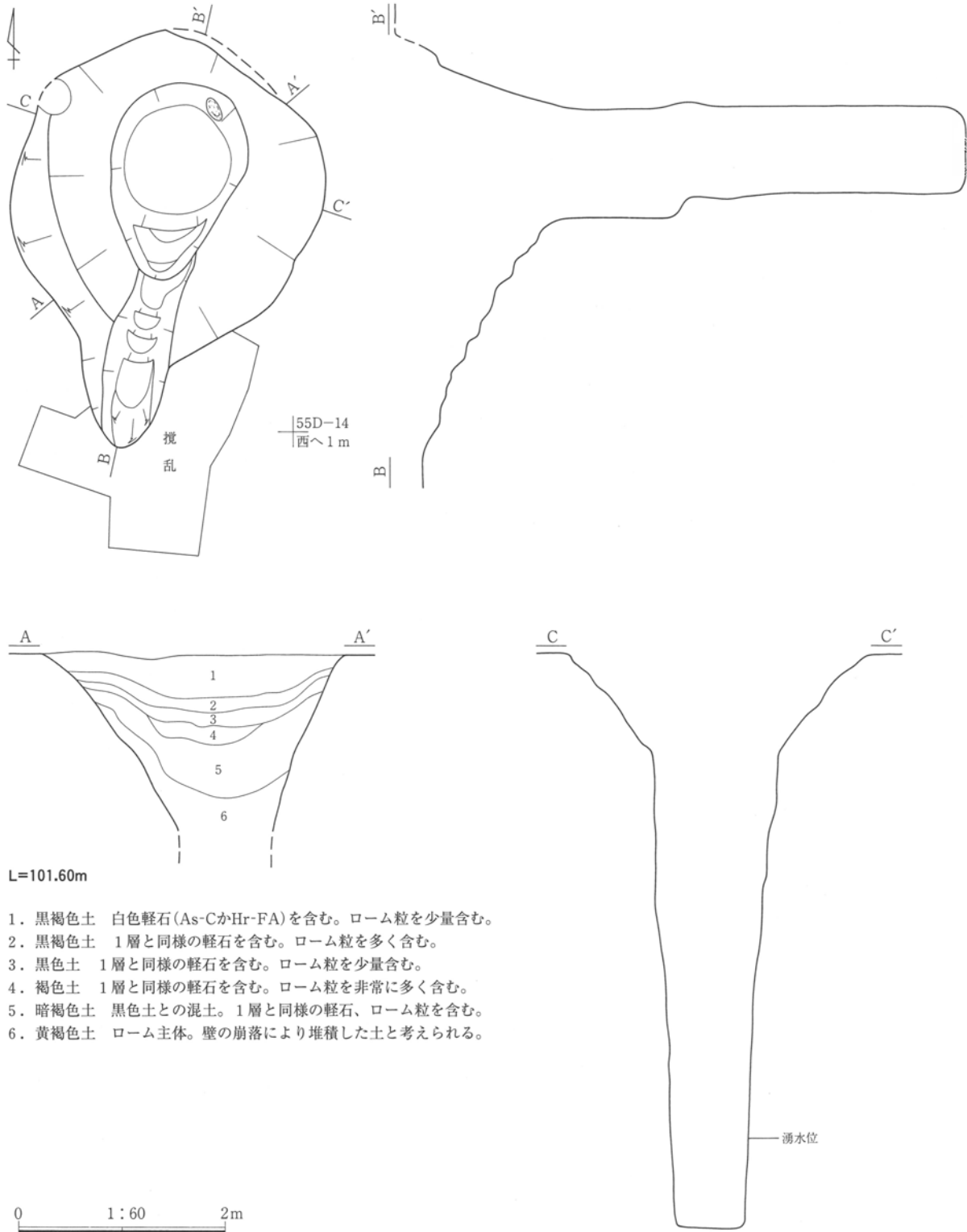
形状 井桁等は検出されなかった。平面形は円形を基本とする。規模は東西方向で直径1.16mを測る。壁面の深さは2.88mである。断面形は下位に向けて徐々にその形を狭めていた。底面近くの直径は約0.5mである。

方位 計測不可

埋没土 褐色土、黄褐色土、灰黄褐色土、黒色土が堆積していた。

遺物 埋没土の上層から杯(1・2)が出土している。掲載した資料の他に土師器破片6点、須恵器破片4点が出土した。(観P93)

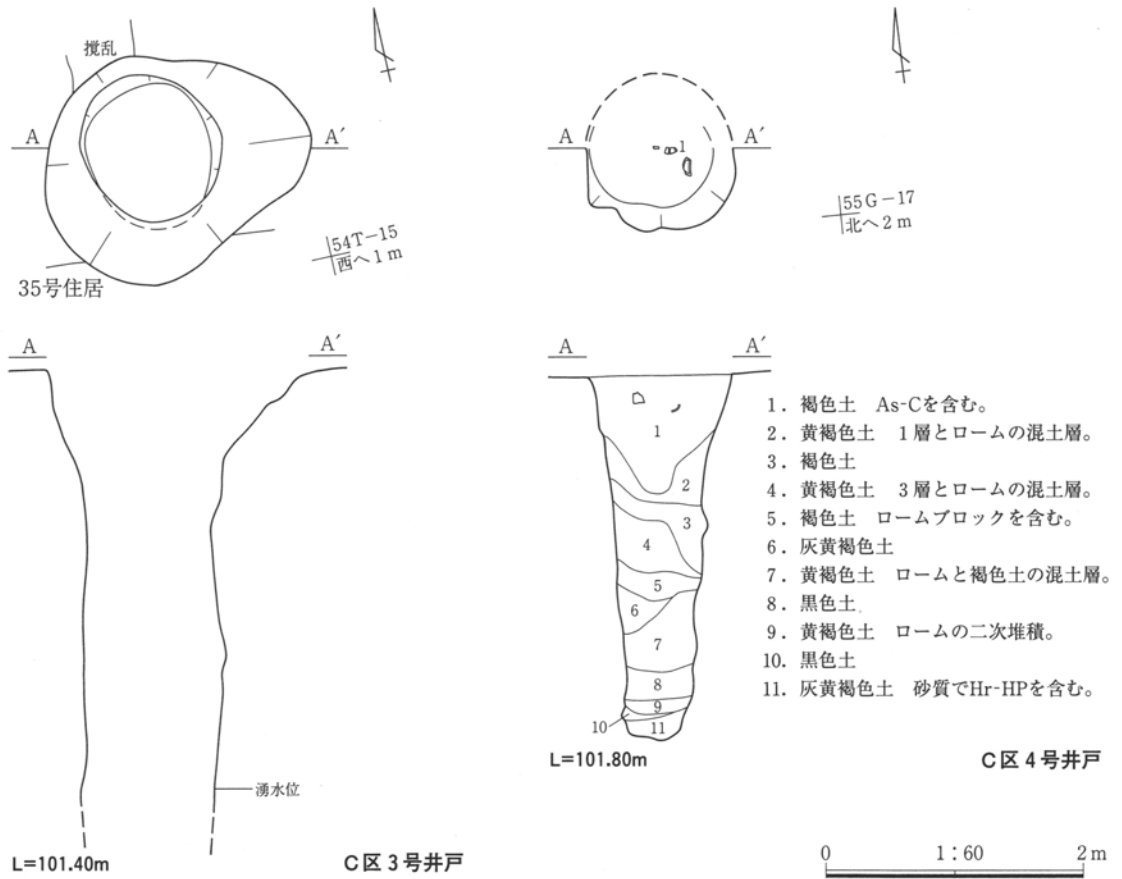
所見 掲載した土師器杯は平安時代の所産であるが、本遺構の詳細な掘削時期は不明である。



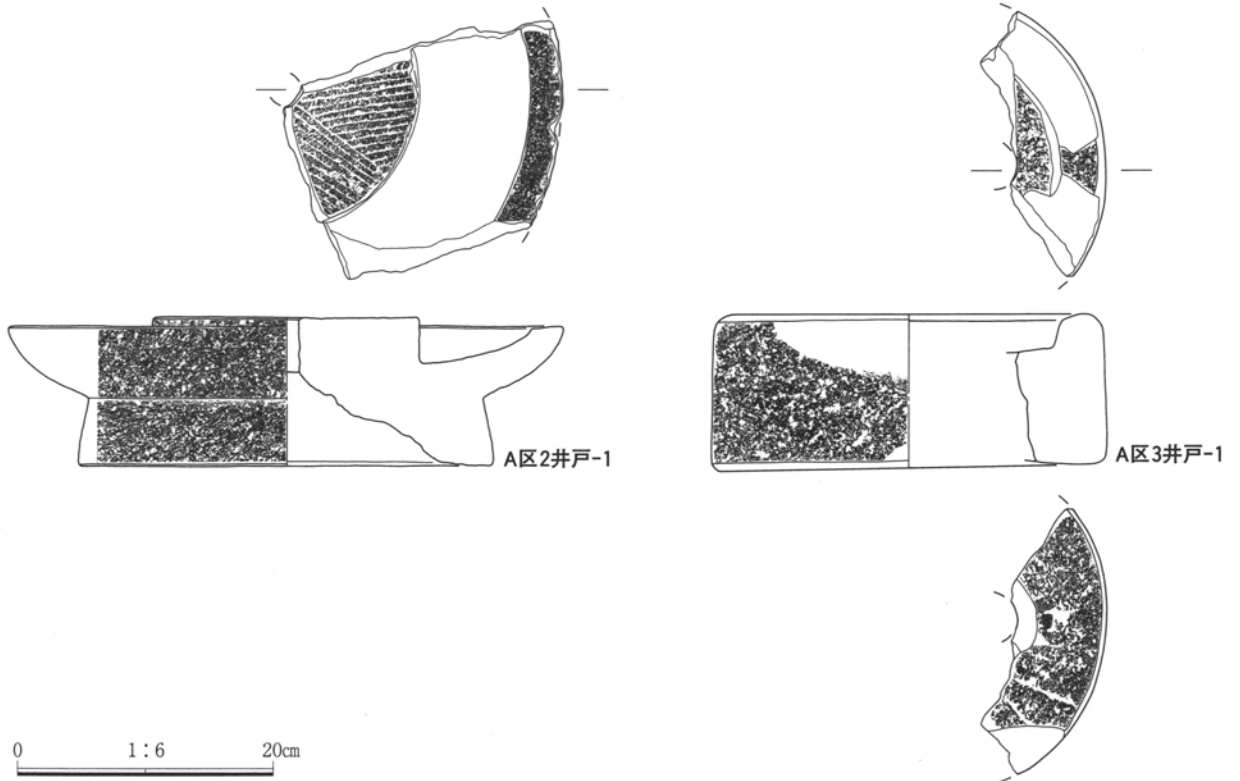
1. 黒褐色土 白色軽石(As-CかHr-FA)を含む。ローム粒を少量含む。
2. 黒褐色土 1層と同様の軽石を含む。ローム粒を多く含む。
3. 黒色土 1層と同様の軽石を含む。ローム粒を少量含む。
4. 褐色土 1層と同様の軽石を含む。ローム粒を非常に多く含む。
5. 暗褐色土 黒色土との混土。1層と同様の軽石、ローム粒を含む。
6. 黄褐色土 ローム主体。壁の崩落により堆積した土と考えられる。

第404図 C区1号井戸

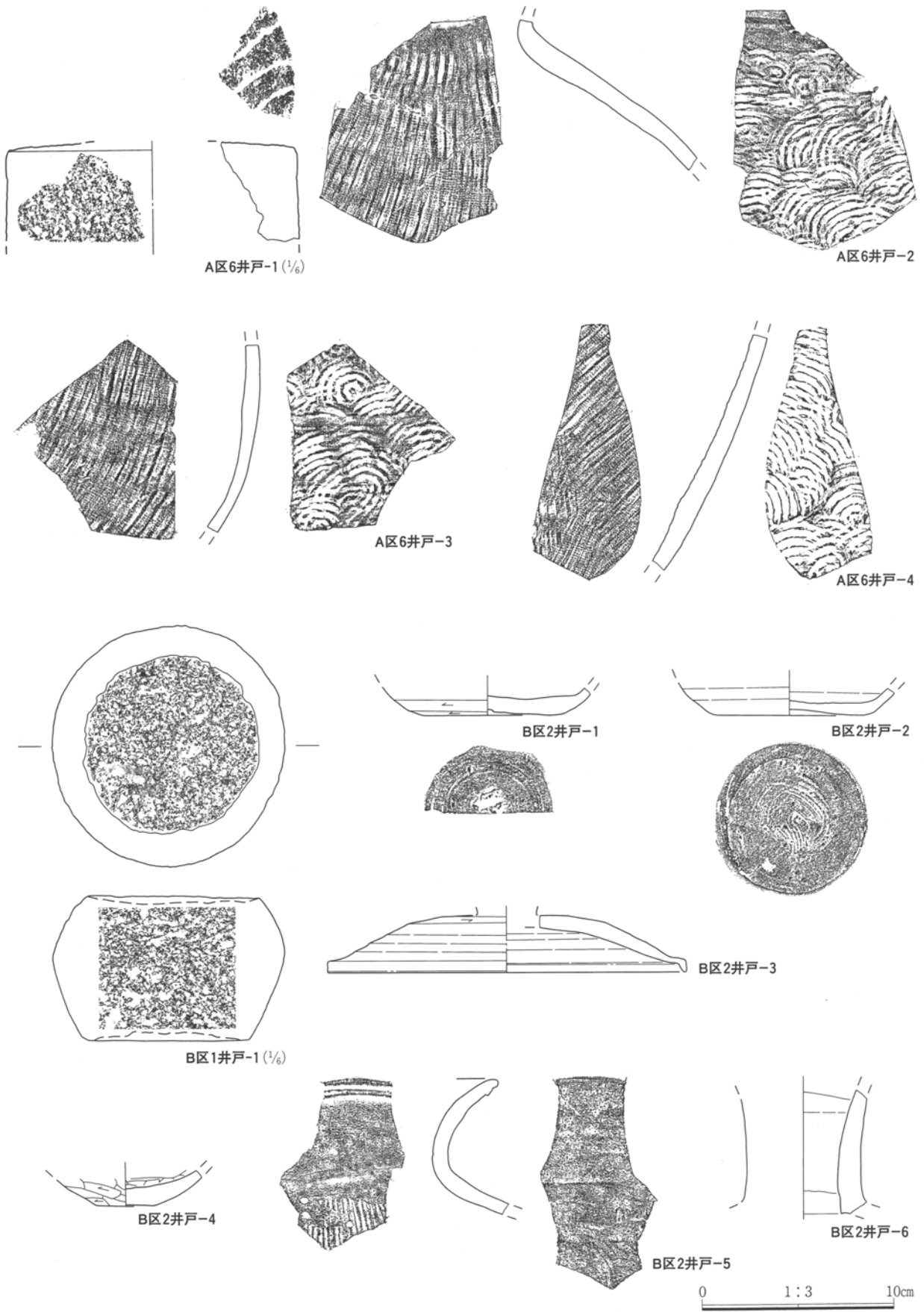
第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



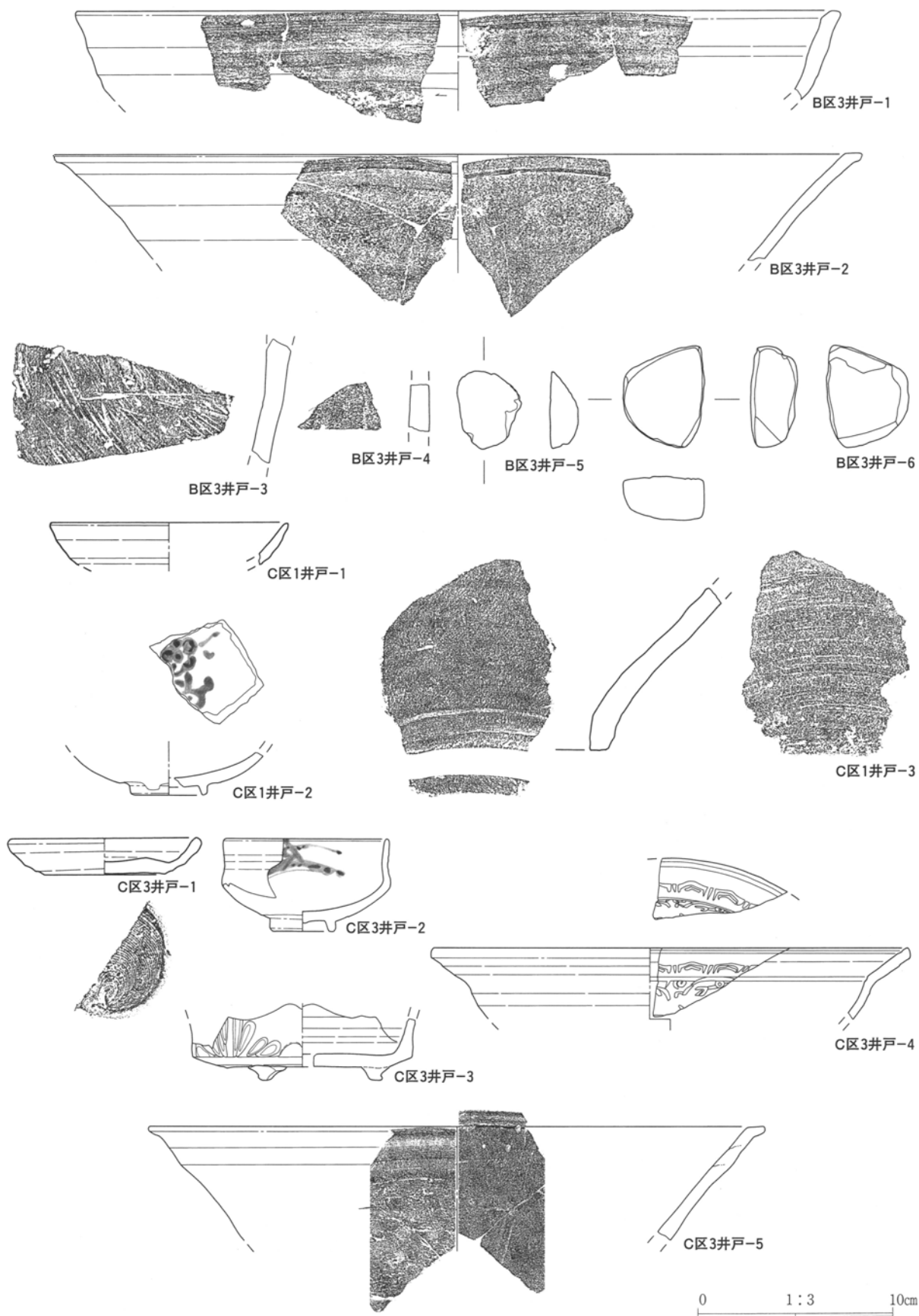
第405図 C区3・4号井戸



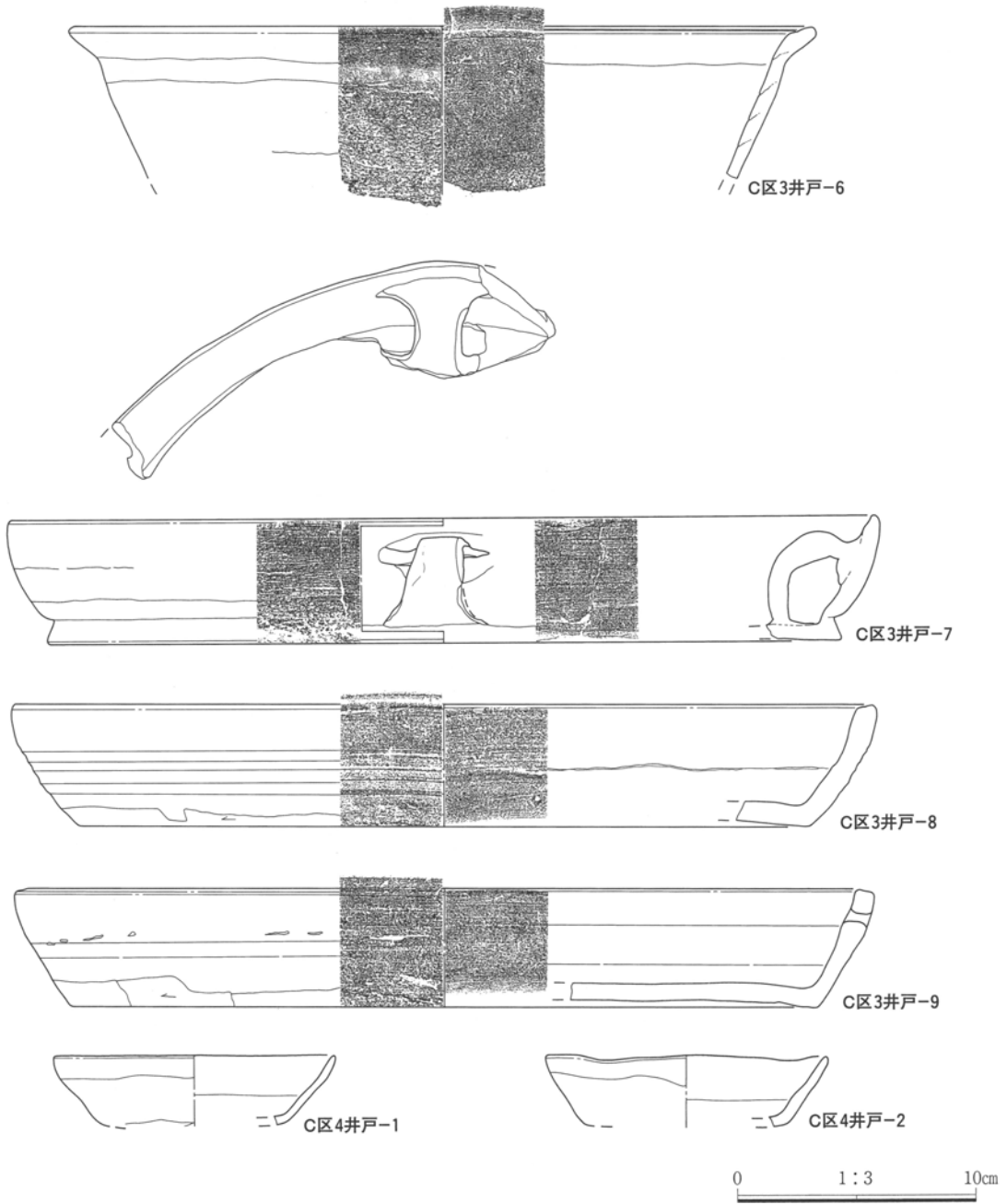
第406図 A区2・3号井戸出土遺物



第407図 A区6号井戸、B区1・2号井戸出土遺物



第408図 B区3号井戸、C区1・3(1)号井戸出土遺物



第409図 C区3(2)・4号井戸出土遺物

4 溝

A区 12号溝

(第410・411・433・434図、PL86・87・146)

位置 44G-5~44O-10

重複 2号住居に後出し、2号井戸に先出する。
15号・16号溝との前後関係は不明である。

形状 東西方向の溝で69.49mを検出した。途中で大きく走向を変える地点がある。西端は15・16号溝と重複しており、これより以西については不明で

ある。B区では検出されていない。44L-9グリッドまではN-71°-Wの方向に延びている。その後南方向に折れ、大きく弧を描いている。44J-7グリッド以東はN-60°-Wの走向を取り、44G-5グリッドで立ち上がっている。断面形は逆台形状を呈している。2号井戸との重複地点の東側44M-10グリッド内では底面が約36cmの段差をもって東側が一段深くなる状況が認められた他は西から東側に向かって徐々に深さを増していた。規模は上幅が0.92~2.92

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

m、下幅0.26～1.36mである。深さは44I-6グリッドで1.14mを測った。

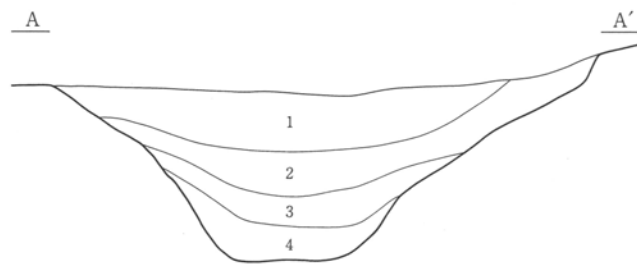
44M-10グリッドと44J-7グリッドでは礫が集中して検出された。前者は2号井戸の掘削に先立ち本遺構を埋め戻した際に意図的に入れられた可能性が考えられる。土砂に混じって多数の礫が出土している。また、後者では南北の下端に沿った石列とこの列間から3個大礫が検出された。北列中には石臼(7)が含まれていた。

方位 N-71°-W、N-60°-W

埋没土 混入物、粘性の度合いで4層に分層可能な黒褐色土が堆積していた。流水はなかった可能性が高い。

遺物 44J-7グリッドの埋没土中から茶臼(6・7)が出土した。また44J-7グリッドの礫集中区の東側からは不明石製品(5)が出土している。この他に軟質陶器内耳鍋片(1・2)・火鉢と考えられる破片(3)、砥石(4)、石臼(9)が出土している。土師器破片24点、須恵器破片3点、軟質陶器破片1点は資料化しなかった。(観P93・94)

所見 出土遺物の様相から近世以降の溝と考えられる。

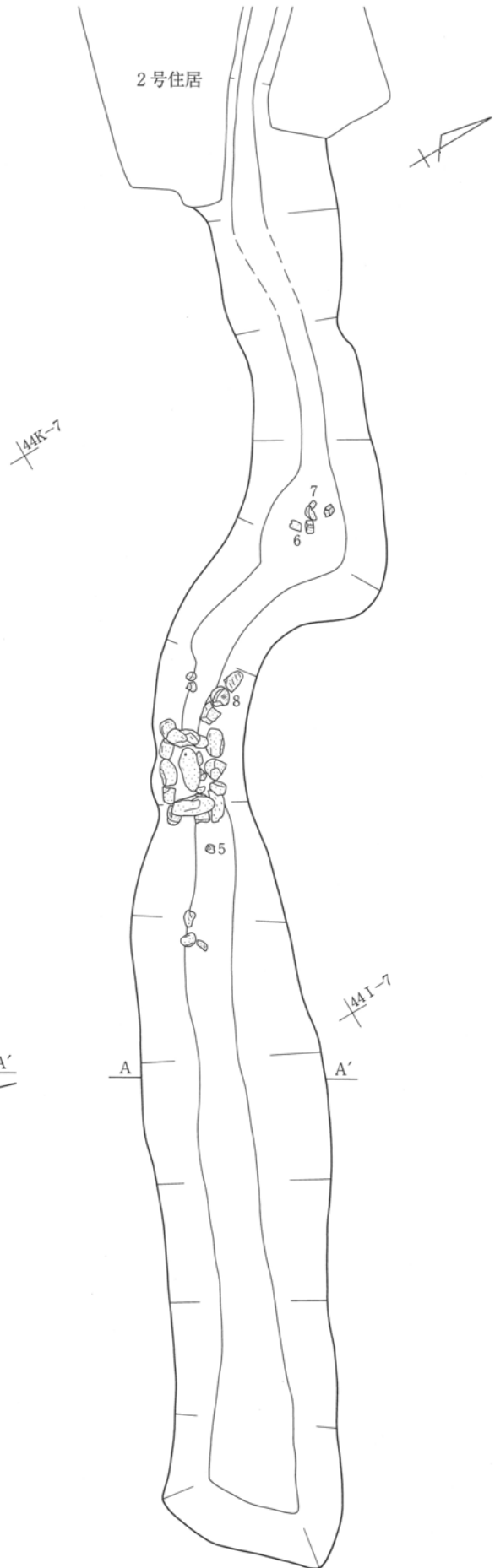


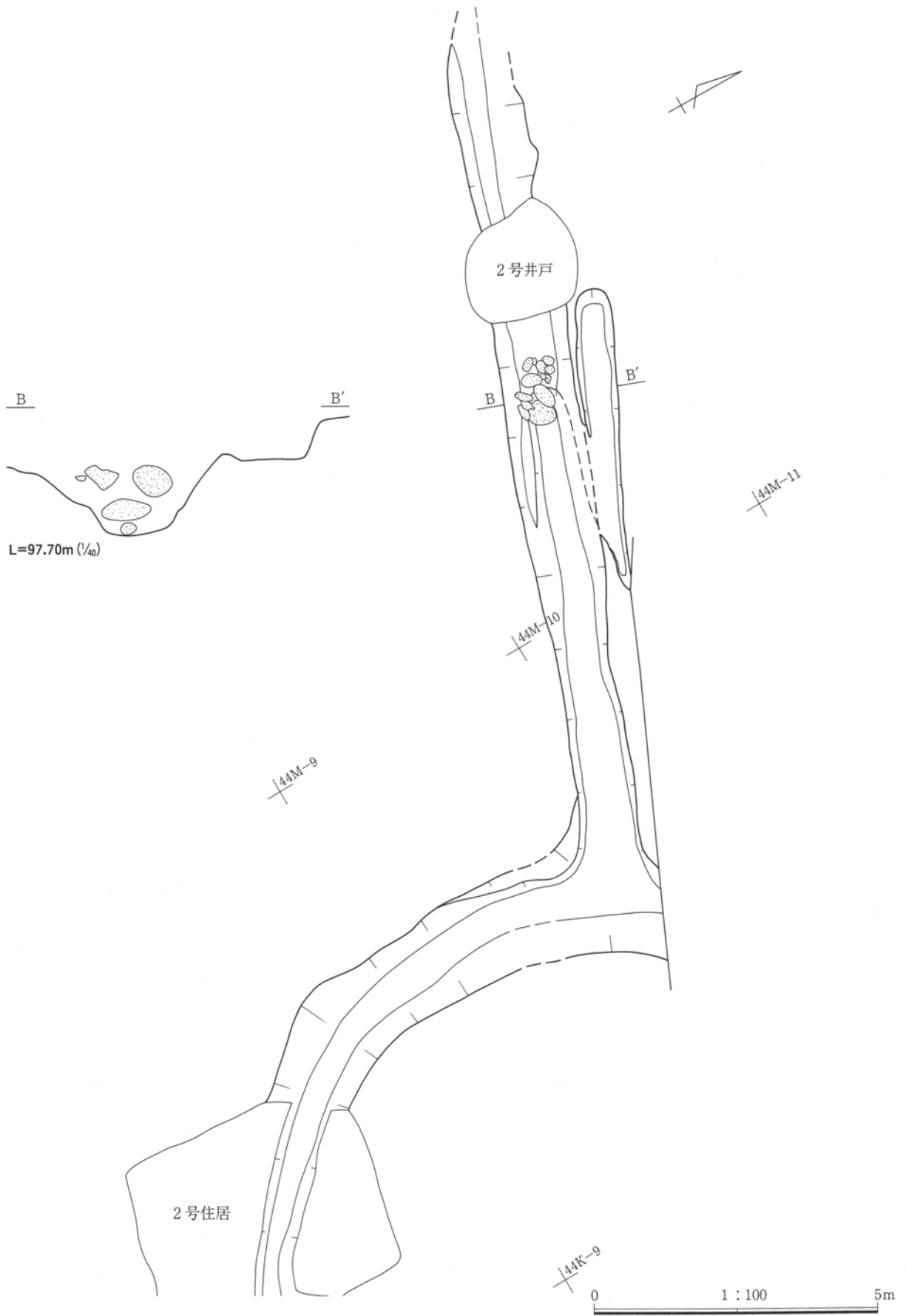
L=97.20m (1/40)

1. 黒褐色土 しまりあり。白色軽石を含む。
2. 黒褐色土 ややしまりあり。白色軽石を1層より少量含む。
3. 黒褐色土 ややしまりなし。
4. 黒褐色土 しまりなし。粘質。

0 1 : 100 5m

第410図 A区12号溝(1)





第411図 A区12号溝(2)

A区 13号溝 (第412図、PL87)

位置 44I-4~44O-6

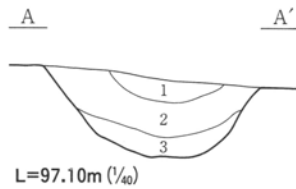
重複 重複する遺構はない。

形状 東西方向の溝である。44L-5グリッドを頂点にわずかに弧を描くが、ほぼ直線を指向している。西端は壁面を成し立ち上がっていたが、東端は攪乱を受けていた。長さ30.75mを検出した。断面形状は逆台形状で、上幅は1.10~2.10m、下幅は0.40~0.78mを測った。深さは西端で0.75mである。

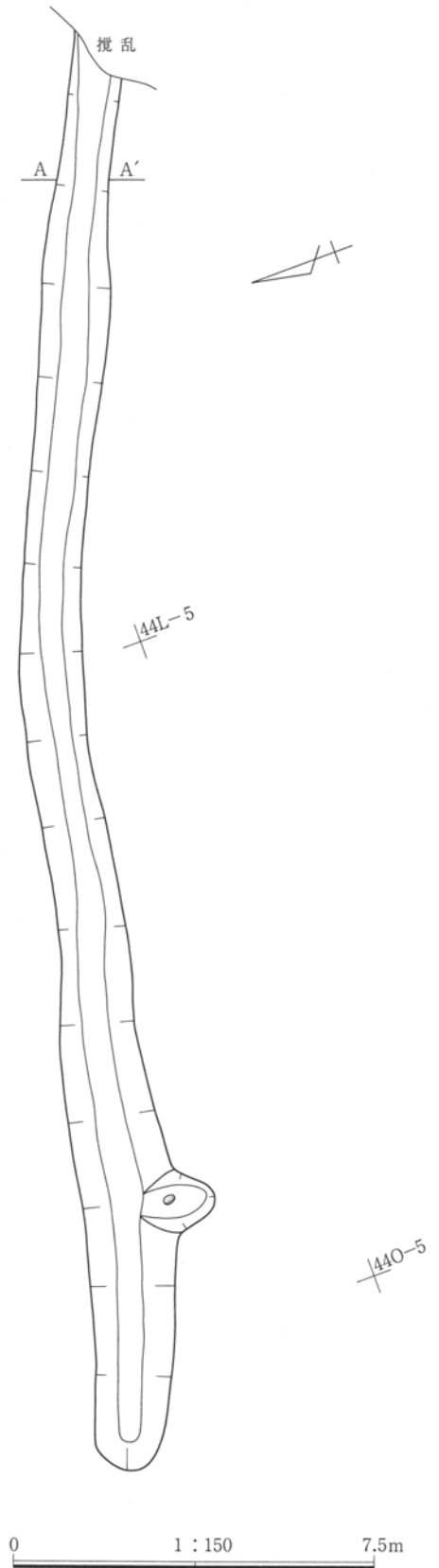
方位 N-65°-W、N-75°-W

埋没土 混入物により分層が可能であった。黒褐色土3層が堆積していた。

所見 出土遺物が全くなく、詳細な掘削時期も不明であるが、近世以降の溝と考えられる。



1. 黒褐色土 白色軽石粒を含む。砂粒が大きくザラザラしている。
2. 黒褐色土 白色軽石粒を含む。
3. 黒褐色土 しまりあり。



第412図 A区13号溝

A区 14号溝 (第413図、PL87)

位置 44L-3~44P-5

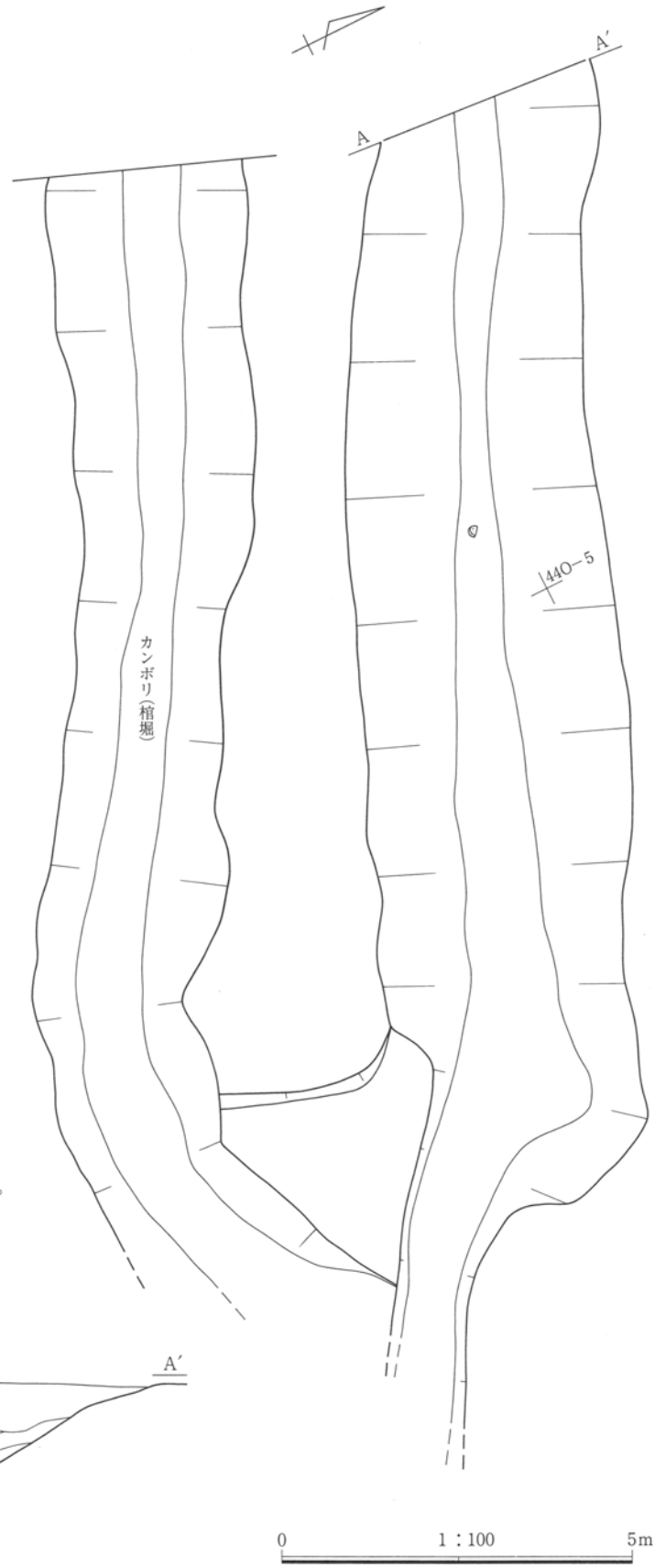
重複 重複する遺構はない。

形状 東西方向の溝である。長さ18.83mを検出した。東端は地形の傾斜の関係から掘り込みが浅くなり、44L-3グリッドで途切れている。西端は現道下に向かって伸びているようで、B区の調査では検出されなかった。断面形は底面の狭い逆台形状を呈していた。規模は上幅が1.07~3.84m、下幅0.36~2.04mである。深さは44N-4グリッドで1.07mを測った。

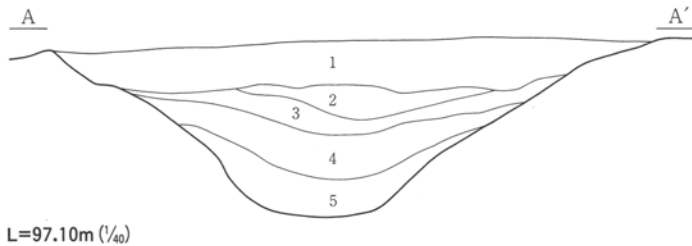
方位 N-64°-W

埋没土 上層に黒褐色土、中・下層に締まりのある暗褐色土が堆積している。

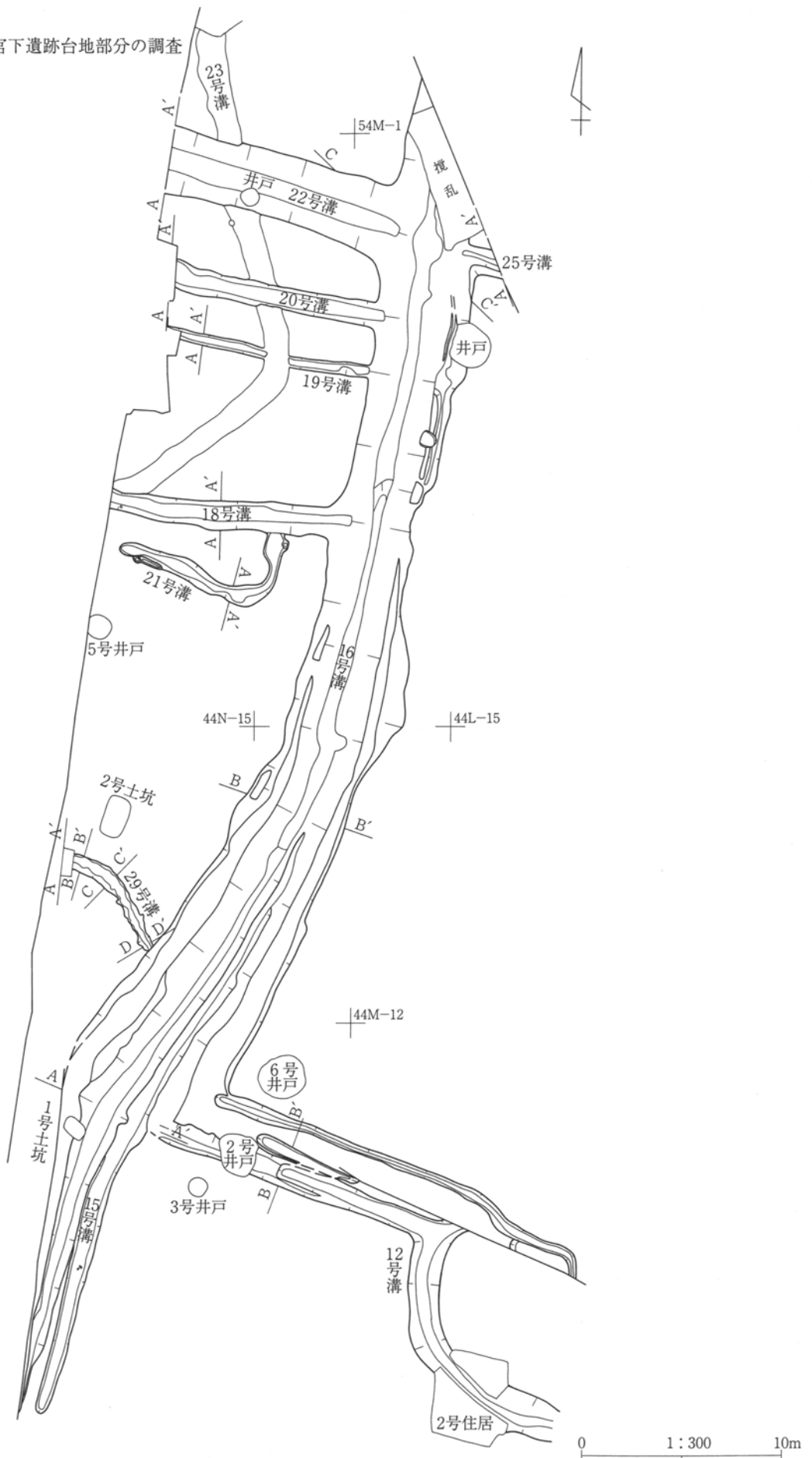
所見 出土遺物は全くなかったが近世以降の溝と考えられる。なお、南側に平行して延びる棺堀は圃場整備以前まで使用されていた水路である。



1. 黒褐色土 白色軽石粒とローム粒を含む。しまりあり。
2. 黒褐色土 ロームをブロック状に含む。
3. 暗褐色土 しまりあり。
4. 暗褐色土 しまりあり。
5. 暗褐色土 粘質。



第413図 A区14号溝



第414図 A区12・15・16・18~22・25・29号溝

A区 15号溝

(第414～416・434図、PL90・146・147)

概要 16号溝と走向をほぼ等しくしている。土層堆積状況の観察から16号溝が完全に埋没した後に改めて掘削されたことが確認された。

位置 44P-8～44K-19

重複 16号溝に後出する。12号・18号～20号・22号・25号溝と重複する。

形状 南北方向の溝である。長さ60.80mを検出した。直線を指向しているが44M-15グリッド、44O-10グリッドに変換点を有し、その方向をわずかに変えている。南端は確認面が低かったため壁面の残存も低くなり途切れてしまっている。44O-11グリッド以西は東壁のみの検出であったが44K-17グリッドから44K-19グリッドの間で検出した下幅20cm弱の溝が15号溝の底面と考えられる。44K-19グリッドにおける底面の標高は97.97mで同じ地点における16号溝の底面が97.02mであるのと比較すると2本の溝は走向をほぼ同じくしながら掘削の状況を大きく異にしていたことが理解できる。断面形は上方に向かって外傾著しく立ち上がる逆台形状を呈する。規模は44O-11グリッドで上幅3.00m、下幅1.00m、深さ0.91mであった。

方位 N-27°-E、N-14°-E

埋没土 上・中層に茶褐色土が、下層に暗褐色土が堆積する。中・下層では灰褐色土がラミナ状に堆積しており、流水があったことが確認される。

遺物 埋没土中から軟質陶器内耳鍋破片(1)、施釉陶器甕(2・3)・播鉢(4)、板碑(6)が出土している。この他に土師器破片141点、須恵器破片42点、軟質陶器破片3点、陶磁器破片6点が出土している。ただし調査の都合上16号溝と同時に遺構確認を行ったため、これらの遺物の中には16号溝に帰属するものも含まれる。(観P94)

所見 近世の溝と考えられるが、明治時代初めには埋没している。流水があったことが確認できたが用水路として機能していたか否かは断定できない。

A区 16号溝 (第414～416図、PL90)

位置 44P-8～44L-20

重複 15号溝に先出する。12号・18号～20号・22号・25号溝、1号土坑と重複する。

形状 南北方向の溝である。長さ62.13mを検出した。南北両端とも調査区域外に及んでいる。15号溝と走向をほぼ等しくしており、44M-15グリッド、44O-10グリッドで走向を変えている。断面形は上方に向かって外傾著しく立ち上がる逆台形状を呈する。規模は44O-11グリッドで上幅3.08m以上、下幅1.00m、深さ1.35mであった。底面の標高は南端で96.28m、北端で97.15mである。底面は南方向に向かって徐々に低くなっていたが、18号溝に接する44L-17グリッドの地点で約30cmの段差が、44M-13グリッドの地点で約15cmの段差が生じていた。他に堰、橋脚などの施設の存在を想定させるような遺構は検出されなかった。

方位 N-11°-E、N-37°-E、N-13°-E

埋没土 上半に暗褐色土、下半上層に灰褐色土と下半下層に黒褐色土が堆積していた。いずれも砂粒を多く含む土層であることから、流水があったことが確認される。

遺物 埋没土中から石臼(5)が出土している。(観P94)

所見 近世の溝と考えられる。用水路として機能していたか否かは断定できない。

A区 18号溝

(第414・417・435図、PL56・90・91・147)

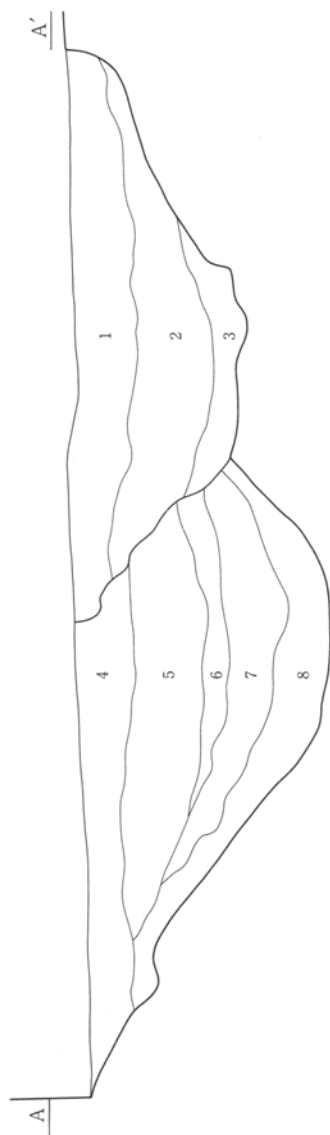
概要 現道を挟んだ西側でB区5号溝が検出されている。同一溝の可能性も考えられる。

位置 44M-17～44O-17

重複 23号溝より後出する。15号・16号・21号溝との新旧関係は判然としない。

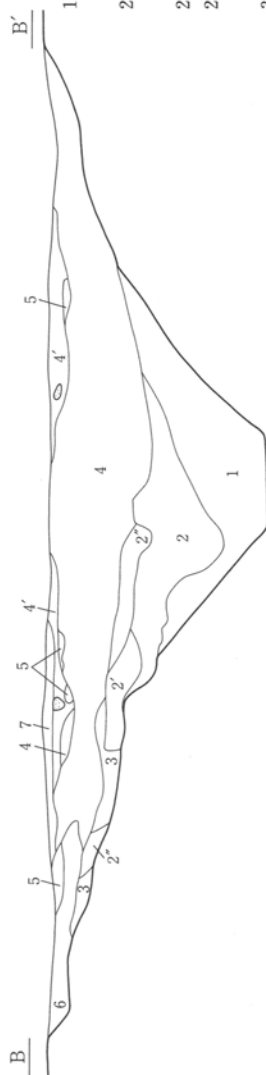
形状 東西方向の溝である。東端は15号・16号溝と重複、それらより東側には延びていない。断面形は逆台形である。規模は上幅が0.44～0.77m、下幅が0.20～0.25mである。深さは東側寄りで0.51mを測った。

方位 N-85°-W



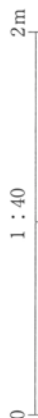
L=97.70m

1. 茶褐色土 暗褐色土をブロック状に含む。直径1~2mm大。白色軽石を多く含む。
2. 茶褐色土 1層より茶色味が強い。ラミナ状に灰褐色土、川砂を含む。白色軽石を少量含む。
3. 暗褐色土 ラミナ状に灰褐色土を含む。黄褐色ローム粒を含む。
4. 暗褐色土 直径2~3mm白色軽石を含む。粘性をややおび、しまりもある。
5. 暗褐色土 5層より黒色味が強い。ラミナ状に赤褐色土(川砂の酸化したものか)を含む。直径2~3mmの白色軽石を含む。しまりあり。
6. 灰褐色土 ラミナ状に赤褐色土を含む。
7. 灰褐色土と赤褐色土がラミナ状に互層 下位は9層への漸移層。
8. 黒褐色土 黄褐色ローム土を少量含む。最下位は、部分的に酸化の為、赤褐色化している。

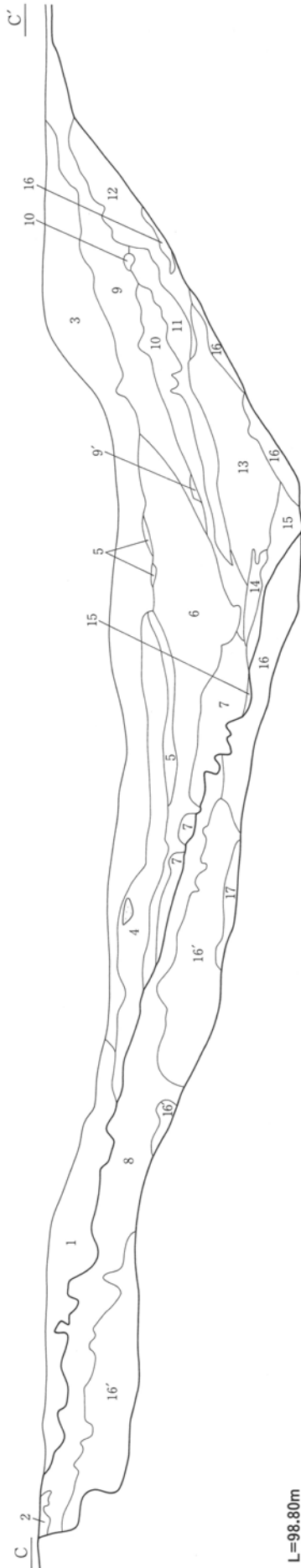


L=97.90m

1. 暗褐色土 砂粒混じりのローム。薄く層状にロームの多い部分と砂の多い部分があるが境界はあまりはっきりしない。やや粘土質の部分あり。
2. 暗灰褐色土 灰色味がかった粘土質の土を主体とする。直径2cm以下の明褐色のロームブロックを少量含む。
- 2'. 暗灰褐色土 2層に比して明褐色のロームブロックを多く含む。
- 2''. 暗黄褐色土 色調は4層に近いが、土質は粘土質の2層に近い。2層よりロームブロックをやや多く含む。
3. 暗灰褐色土 2層ほど粘土質ではない。やや砂粒を多く含む。
4. 暗黄褐色土 黄褐色のロームブロックを少量含む。下位に付近のローム中にみられる暗赤褐色の鉄マンガンの凝集粒がよく見られる。ローム混じりの土層。西側部分がやや暗い。
- 4'. 黄褐色土 4層に近い。ややローム部分多い。石を含む。
5. 暗灰色土 暗灰色の粘土質の土層。
6. 暗灰褐色土 ロームブロックを含む。やや砂粒を含む。2''層と3層にやや類似する。
7. 暗褐色土 ローム粒を含む。



第415図 A区15・16号溝(1)



L=98.80m

1. 黒褐色土 ローム粒・ブロックを含む。ロームは混入の多い部分と少ない部分があり均質でない。やや軟質。
2. 黒色土 As-Cを含む。黒色味が強い(古代の土)。右壁(やや西側に多い)から入り込んだと思われる。
3. 暗褐色土 やや灰色がかる。やや砂質。ローム粒わずかに含む。
4. 暗褐色土 やや粘土質。ローム粒をわずかに含む。礫も含まれる。
5. 暗褐色土 3層に近い。3層よりややローム粒が目立つ。やや砂質。
6. 暗灰褐色土 砂質。砂粒を多く含む。礫を少し含む。ローム粒をわずかに含む。
7. 黒褐色土 粘土質の土を含む。ローム粒・ブロックを含む。10層に近い。砂粒の方が多い溝の中央よりは粘土質の土粒を含む。
8. 黒褐色土 黒色味強め。混入物は少ない。ローム粒わずかに含む(22号溝の主たる埋没土)。
9. 褐色土 ローム粒を多く含む。ローム粒、暗褐色土混じり。ロームブロックをわずかに含む。やや軟質。
- 9'. 褐色土 ロームブロックを多く含む。
10. 黒褐色土 砂質。ローム粒を含むが上・下の9・11層より少量。7層よりはややロームは多い。
11. 暗褐色土 ローム粒を多く、ロームブロックを少量含む。9層に類似するがロームの混入が少なく砂質である。溝の中央から西側の部分は砂粒の混入が少ない。
12. 黒褐色土 8層に類似するが色調がやや明るい。混入物は少ないが、ローム粒・ブロックを少し含む。
13. 暗褐色土 砂質。しまりよし(溝として使用中の堆積か)。ローム粒の目立つ部分と黒色味の強い層で、横縞のラミナの状態をつくる。
14. 黒褐色土 混入物は少ない。ローム粒を少し含む。しまり良い。8層に類似する。
15. 黒褐色土 14層に近い。ややローム粒が多くなり色調も明るい。
16. 褐色土 ローム粒を主体とする。やや黒褐色土混じり。しまりよし。ロームブロックを含む。
- 16'. 暗褐色土と黒褐色土の混土層 16層に類似するがやや黒褐色土の割合が多い。東側上位はローム粒が少ない。
17. 褐色土 ローム粒との混土層



第416図 A区15・16号溝(2)

埋没土 最下層に黒褐色土が、これより上層には暗褐色土が堆積していた。調査時の所見では人為的に埋め戻された可能性が指摘されている。流水の痕跡は確認できない。

遺物 埋没土中から出土した須恵器杯(1)を資料化した。この他に土師器破片6点、須恵器破片8点が出土した。(観P95)

所見 詳細な掘削時期は不明であるが、近世以降の区画溝と考えられる。

A区 19号溝

(第414・417・435図、PL91・147)

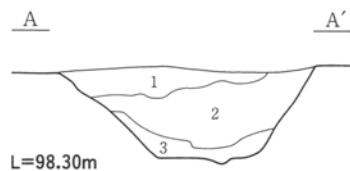
概要 現道を挟んだ西側でB区4号溝が検出されている。同一溝である可能性が高い。

位置 44L-18~44O-19

重複 23号溝に後出する。15号・16号溝との新旧関係は不明である。

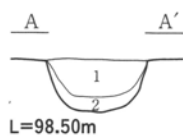
形状 東西方向の溝である。長さ9.90mを検出した。断面形は逆台形状を呈していた。規模は上幅が0.26~0.36m、下幅が0.10~0.20mである。深さは西側で0.28mを測った。

方位 N-84°-W



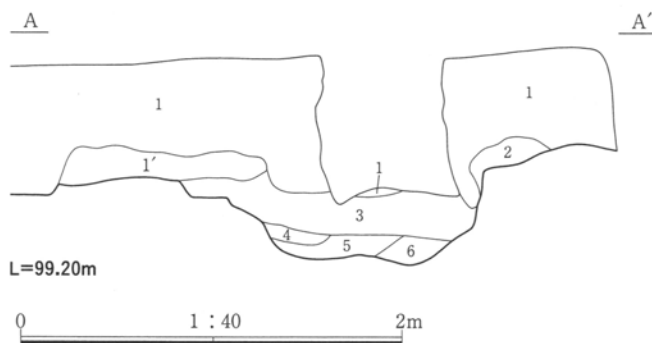
宮下A区 18号溝

1. 暗褐色土 黒褐色土とローム粒の混土層。ロームブロックが全体的にみられ、比較的良く混じっている。直径1~2mm程の白色軽石を少し含む。しまりよし。
2. 暗褐色土 1層よりややローム分が多く明るい。ローム粒・ブロックを含む。1層よりやや軟質。黒色味強い部分もある。
3. 黒褐色土 ローム粒を少し含む。地山の暗褐色土も少し含む。混入物は少ない。



宮下A区 19号溝

1. 黒褐色土 混入物は少ない。As-Cと考えられる軽石わずかに含む。地山のような暗褐色土が少し混じる。やや軟質。
2. 黒褐色土 1層より明るい。地山の暗褐色土を含む。やや軟質。



宮下A区 20号溝

1. 暗褐色土 ローム粒が少し混じる。As-Cをわずかに含む(表土。圃場整備時に移動した土粒か)。
- 1'. 暗褐色土 1層に近い。ややローム粒を多く含む。
2. 黒褐色土 2層の土粒に暗褐色土が混じる。
3. 暗灰褐色土 やや灰色味。As-Cをわずかに含む(江戸~明治の頃の土粒)。
4. 暗灰褐色土 3層に近い、ロームブロック少し含む。
5. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。ロームブロックは輪郭がはっきりしない。溝の底に堆積した土粒。
6. 黒褐色土 地山とほぼ同様の土。やや軟質(掘削時に掘り上げなかった土粒か)。

埋没土 流水の痕跡は確認できない。

遺物 埋没土中から出土した磁器碗(1)を資料化した。この他に土師器破片18点、須恵器破片3点、陶磁器破片1点が出土した。(観P95)

所見 近世以降の区画溝と考えられる。

A区 20号溝 (第414・417・435図、PL91)

概要 現道を挟んで西側にB区2号溝が検出されている。同一溝と考えられる。B区54T-1グリッドで屈曲、45B-15グリッドに達する区画溝である。北側に22号溝が位置する。

位置 44L-19~44N-19

重複 23号溝に後出するが15号・16号溝との新旧関係は不明である。

形状 東西方向の溝である。長さ10.73mを検出した。断面形は逆台形を呈している。規模は上幅が0.54~0.72m、下幅が0.36~0.68mである。深さは23号溝との交差部分で0.53mを測った。

方位 N-80°-W

埋没土 暗灰褐色土、暗褐色土、黒褐色土が堆積、北側から流れ込んだものであろうか。流水の痕跡は確認できない。

第417図 A区18~20号溝

遺物 埋没土中から出土した碗と考えられる施釉陶器(1)を資料化した。この他に土師器破片32点、須恵器破片2点、軟質陶器破片1点、弥生土器破片1点が出土した。(観P95)

所見 近世以降の区画溝と考えられる。

A区 21号溝 (第414・418図、PL90・91)

位置 44M-16~44O-16

重複 18号溝と重複するが、新旧関係は不明。

形状 18号溝から枝分かれするように南方向に伸び、3m程で西方向に屈曲、44O-16グリッドで途切れている。長さは延べで10.68mを測る。断面形状は皿状を呈するが企画性を欠いている。規模は上幅が0.46~1.30m、下幅が0.18~0.84mである。深さは最深で0.32mを測った。

方位 N-68°-W、N-0°

埋没土 全層にわたり黒褐色土が堆積していた。流水の痕跡は確認できない。

所見 出土遺物は全くなく、詳細な掘削時期・性格も不明であった。近世以降の溝と考えられる。

A区 22号溝

(第414・418・435図、PL91・92・147)

概要 現道を挟んでB区1号溝が検出されており、これと同一溝と考えられる。B区54T-2グリッドに隅を有する区画溝で、南端は44P-20グリッドまで検出した。

位置 44L-19~54N-1

重複 23号溝に後出する。15号・16号・25号溝との新旧関係は不明である。調査時の所見では15号・16号溝とほぼ同時期に埋没したとされる。

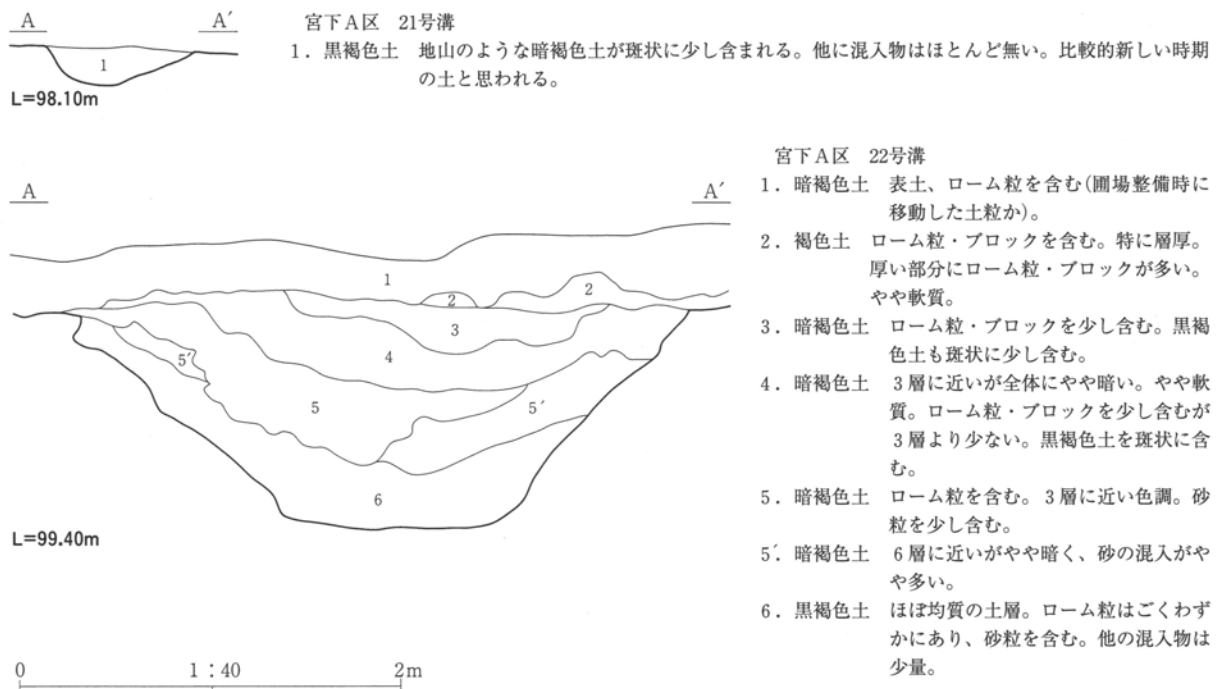
形状 東西方向の溝で東側は15号・16号溝に接している。A区では長さ12.20mを検出した。規模は上幅3.02~3.58m、下幅0.98~1.06mである。深さは東端寄りでは1.15mを測った。

方位 N-74°-W

埋没土 最下層に黒褐色土が堆積している他は暗褐色土・褐色土が堆積、混入物の相異により分層が可能であった。

遺物 埋没土中から軟質陶器内耳鍋(1)・鉢(2)、鉄鎌(3)が出土している。この他に土師器破片210点、須恵器破片16点、軟質陶器破片2点が出土した。(観P95)

所見 近世の区画溝と考えられる。



第418図 A区21・22号溝

A区 25号溝 (第414・419図、PL92)

概要 22号溝が15号・16号溝と接した地点の東側で検出した。走向は22号溝とほぼ一致するが、規模、底面の高さが著しく異なることから22号溝とは別遺構として報告する。

位置 44K-19

重複 15号・16号溝と重複するが新旧関係は不明である。

形状 わずか1.83mを検出しただけで、東端は調査区域外に延びている。断面形は逆台形を呈しており、中位に弱い陵を有していた。規模は上幅が0.66~0.70m、下幅が0.12~0.14mである。深さは西側で0.69mを測った。

方位 N-74°-W

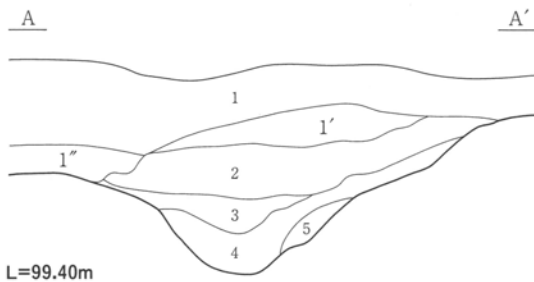
埋没土 上層から茶褐色土、黒褐色土、暗褐色土の順に堆積、ロームとの混土層であった。流水の痕跡は確認できなかった。

遺物 埋没土中から土師器破片4点、須恵器破片2点が出土したが本遺構に伴うものとは考えられず、資料化は行わなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明であるが、近世以降の区画溝と考えられる。

A区 24号溝 (第419・420図、PL88)

位置 44I・J-9



重複 26号溝との新旧関係は不明である。

形状 東西方向に直線的に延びる溝であるが両端とも攪乱、削平を受け全体像を把握することができなかった。検出した長さは7.56mである。断面形は底面の幅が狭い逆台形を呈している。規模は上幅が1.54~1.70m、下幅が0.40~0.52mである。深さは最深で0.84mを測った。

方位 N-72°-E

埋没土 最上層に暗褐色土、以下底面に至るまで黒褐色土が堆積していた。全層にわたり砂質である。流水の痕跡は確認できなかった。

所見 出土遺物は全くなく、詳細な掘削時期・性格は不明である。

A区 26号溝 (第420図、PL88)

位置 44I-9・10

重複 27号溝との新旧関係は不明である。

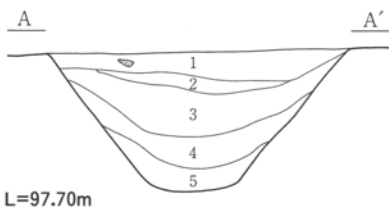
形状 東側は攪乱を受けており、検出した長さは3.94mに止まった。西側は立ち上がって端部をなしている。断面形は逆台形状を呈していた。掘り込みは西端が最も幅広くなっており、規模は上幅が最大で1.94m、下幅が0.38~0.92mである。深さは西端で0.7mであった。

方位 N-82°-W

埋没土 上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積す

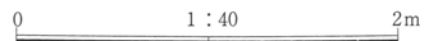
宮下A区 25号溝

1. 茶褐色土 ローム粒と暗褐色土の混土層。しまりなし。表土。
- 1'. 茶褐色土 暗褐色土を主体としたローム粒との混土層。表土。
- 1''. 茶褐色土 暗褐色土を主体としたローム粒。1'層よりは茶色味が強い。表土。
2. 黒褐色土 As-C混じりの黒色土ブロックと暗褐色土、ロームの混土層。
3. 暗褐色土 暗褐色土とロームの混土層。
4. 暗褐色土 暗褐色土とロームの混土層。3層よりも黄色味が弱い。
5. 暗褐色土 暗褐色土とロームの混土層。ロームブロックを含む。



宮下A区 24号溝

1. 暗褐色土 砂質。しまりなし。
2. 黒褐色土 砂質。茶褐色土を混入する。
3. 黒褐色土 砂質。茶褐色土の小ブロック、炭化物を含む。2層よりも灰色味強い。
4. 黒褐色土 砂質。As-C混じりの黒色土ブロックを含む。
5. 黒褐色土 砂質。下位は茶色味をおびる。

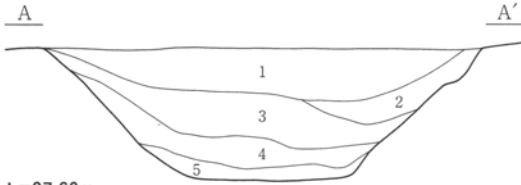


第419図 A区25・24号溝

る。流水の痕跡は確認できない。

遺物 埋没土中から土師器破片6点が出土したが、本遺構に伴うものとは考えられず資料化は行わなかった。

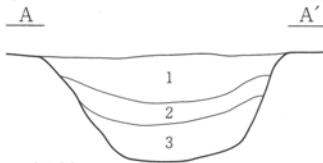
所見 詳細な掘削時期・性格は不明である。近世以降の遺構と考えられる。



L=97.60m

宮下A区 26号溝

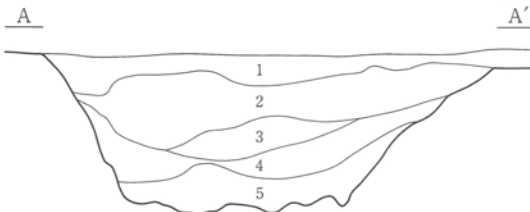
1. 黒褐色土 As-C混じりの黒色土ブロックを主体とした暗褐色土。
2. 黒褐色土 1層よりも黒色味強い。
3. 暗褐色土 黒色土の小ブロック、白色軽石を少量含む。
4. 暗褐色土 3層に類するが、混入物はなくなる。
5. 暗褐色土 灰褐色土の小ブロックを混入する。



L=97.80m

宮下A区 27号溝

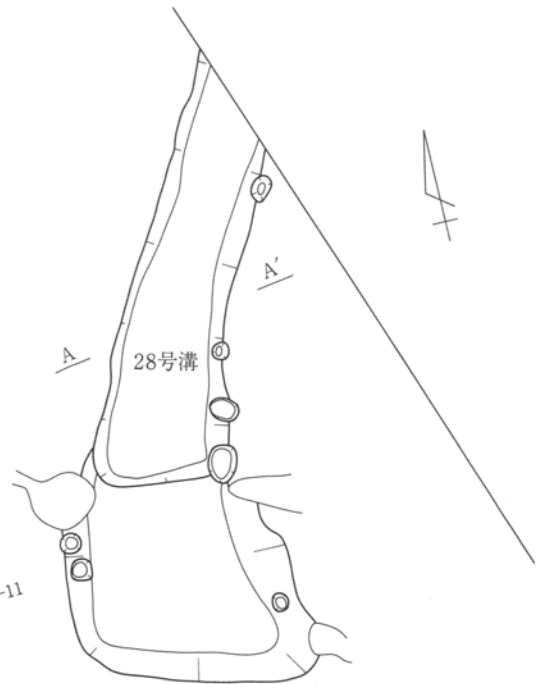
1. 黒褐色土 黒褐色土の小ブロックと暗褐色土の小ブロックとの混土层。As-Cを霜降り状に含む。
2. 黒褐色土 黒褐色土を主体とした暗褐色土小ブロックとの混土层。As-Cをわずかに混入する。
3. 黒褐色土 暗褐色土の小ブロックを含む。As-Cをわずかに含む。



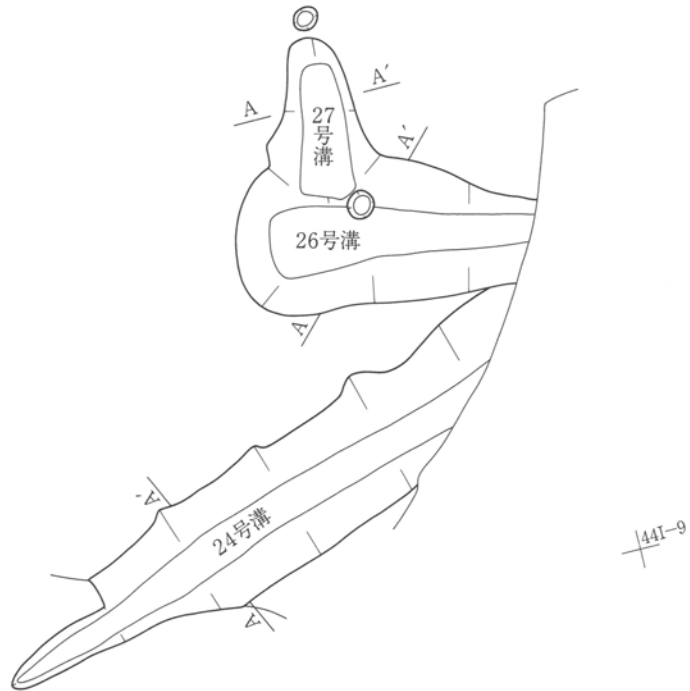
L=97.80m (1/40)

宮下A区 28号溝

1. 黒褐色土 砂質。白色軽石をやや混入する。上位に鉄分凝集の層がある。
2. 黒褐色土 ロームブロックを主体とする黒褐色土ブロックとの混土层。
3. 黒褐色土 黒褐色土を主体とするロームブロックとの混土层。
4. 黒褐色土 黒褐色土ブロックとロームブロックとの混土层。
5. 暗褐色土 ロームがブロック状に堆積している。



44J-11



44I-9

0 1 : 100 5m

第420図 A区24・26～28号溝

A区 27号溝 (第420図、PL88)

位置 44I-10

重複 26号溝との新旧関係は不明である。

形状 残存長2.16mの土坑状の掘り込みである。北側は立ち上がり端部をなしていた。規模は上幅が0.69~1.46m、下幅が0.40~0.74mである。深さは0.57mである。

方位 N-8°-E

埋没土 上層から黒褐色土の小ブロックと暗褐色土の小ブロックの混土層、黒褐色土を主体とした暗褐色土小ブロックとの混土層、黒褐色土の順で堆積している。流水の痕跡はなかった。

遺物 埋没土中から土師器破片6点が出土したが本遺構に伴うものとは考えられず、資料化は行わなかった。

所見 詳細な掘削時期・性格は不明である。近世以降の遺構と考えられる。

A区 28号溝 (第420・435図、PL147)

位置 44I-10~44H-12

重複 7号住居に後出する。

形状 南北方向の溝で、西側に弧を描いている。南端は44I-10グリッドで立ち上がり端部をなしている。北側は調査区域外に及んでいる。底面は北側

に向かって低くなり、2箇所に14cm、17cmの段差がみられる。検出した長さは7.32m、上幅は1.20~3.00m、下幅は0.76~2.16mを測る。深さは南端で0.39mである。

方位 N-30°-E、N-13°-E

埋没土 全層にわたり黒褐色土とロームブロックの混土層が堆積していた。両土粒の混入状況により分層が可能であった。

遺物 埋没土中から出土した鉢と考えられる施釉陶器(1)を資料化した。この他に土師器破片3点が出土した。(観P95)

所見 詳細な掘削時期・性格は不明である。近世以降の遺構と考えられる。

A区 29号溝 (第421・435図、PL88)

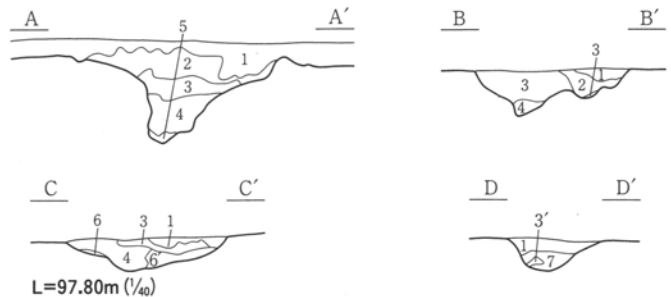
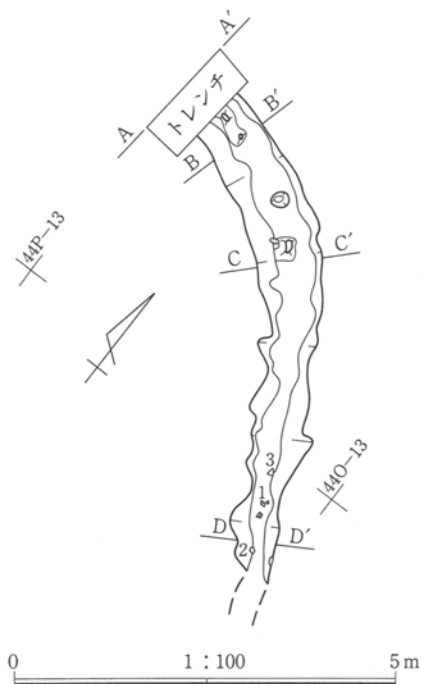
位置 44O-12・13

重複 重複する遺構はない。

形状 長さ6.35mにわたり検出した。北側に弧を描く曲線をなしていた。西端は調査区域外に及び、もう一端は削平を受け途切れていた。規模は上幅が0.42~0.94m、下幅が0.08~0.60mである。西端における深さは0.29mを測った。

方位 N-70°-W、N-27°-W

埋没土 黒色土、黒褐色土が堆積しており、砂粒を



1. 黒色土 As-Cやあまり発泡のないHr-FAを含む。黒色味強い。
2. 黒褐色土 地山の土粒に砂粒と1層の黒色土が混じっている。As-CやHr-FAを少し含む。
3. 黒褐色土 2層に近いが砂の成分が多く、2~3層程度レンズ状にラミナのように、砂層を含む。軽石少し含む。
- 3'. 暗褐色土 砂中心の層。3層に類似するが薄く堆積。軽石は含まない。
4. 黒色土 砂を多く含む。As-C、Hr-FAを含む。
5. 暗褐色土 硬くしまっている。底面近くに部分的に見られる。
6. 褐色土 5層より色調が明るい。
- 6'. 褐色土 ロームブロックを少量含む。
7. 褐色土 ロームを主体とし、これに暗褐色土を少し含む。地山よりやや軟質。

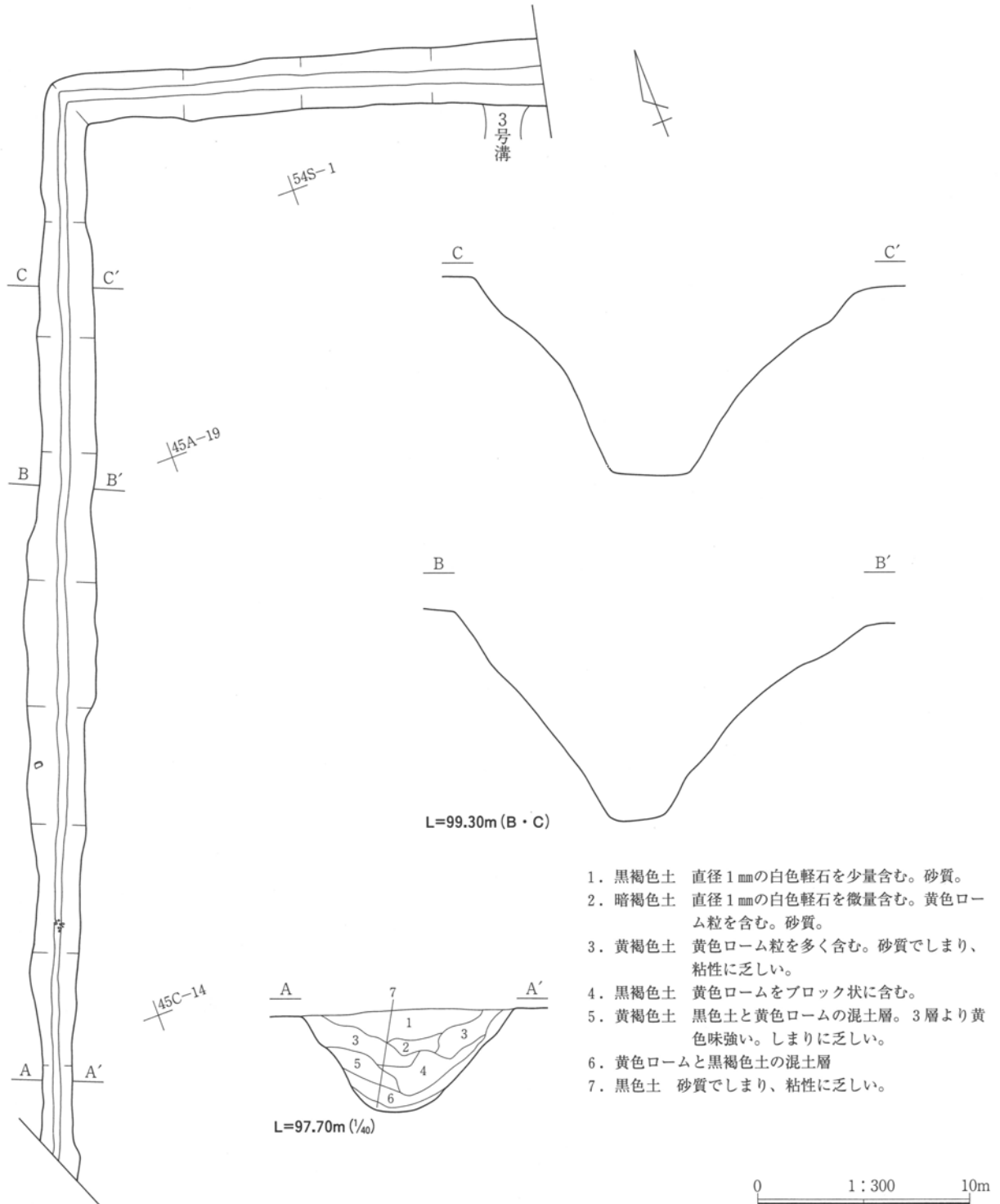
第421図 A区29号溝

多数含んでいる。As-C、角閃石安山岩の軽石も散見する。

遺物 埋没土中から土師器破片28点、須恵器破片2点が出土したが、本溝へ帰属については断定できない。土師器杯(1・2)、須恵器高杯(3)を資料化

した。(観P95・96)

所見 断面形が一定でなく、壁面・底面等も整っていない。性格不明である。埋没土が他の溝とやや異なるが掘削時期についても断定できない。



第422図 B区1号溝

B区 1号溝 (第422・435・436図、PL92・147)

概要 54T-2グリッドに北西隅を有する区画溝である。西辺は約52.3mを検出、南端は調査区域外に延びている。北辺は現道を挟みA区に達し、44K-20グリッドでA区16号溝と接している(調査時A区では22号溝と呼称)。43.1mを検出した。内面に走向をほぼ等しくする2号溝、4号溝を検出した。

位置 54P-1~45D-12

重複 2号住居をはじめ6軒の竪穴住居と重複するがいずれの住居よりも後出である。また、19号土坑より後出である。3号溝との新旧関係は不明瞭であるが、調査の所見では1号溝が後出と考えられている。

形状 断面形は底面に狭い平坦面を有し、両壁面の立ち上がりが外傾著しい形状を呈しており、いわゆる薬研堀の形状である。規模は上幅で1.40~3.50m、下幅で0.25~0.90mを測る。深さは45B-17グリッド内南端から約5.1mの東壁で1.62mである。

方位 N-72°-W、N-19°-E

埋没土 黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土が小単位で堆積している。土層の状況からは土塁の存在は確認できない。流水はなかったと考えられる。

遺物 西辺を中心に埋没土中から多数の遺物が出土したがその大半は土師器や須恵器であった。本遺構に伴う資料は陶器甕(3)、軟質陶器火鉢(5)、石臼(12)、洪武通寶(8)が考えられる。

掲載した資料の他に土師器破片660点、須恵器破片146点、軟質陶器破片7点、陶磁器破片6点、砥石1点、板碑破片1点、弥生土器破片6点が出土した。(観P96)

所見 出土遺物の様相から江戸時代の屋敷を区画する溝(堀)と考えられる。

B区 2号溝 (第423・436図、PL93・147)

概要 54T-1グリッドでほぼ直角に屈曲する区画溝である。西辺は27.73mを検出、南端は10号住居の東側、45B-15グリッドは削平を受けている。北辺は現道を挟みA区に達し、44L-19グリッドでA区16号溝に接する(調査時A区では20号溝と呼称)。

17.75mを検出した。外側に1号溝が位置する。西辺、南辺ともその間隔は約3.7mとほぼ一定である。内側には4号溝が位置する。北辺における両溝の間隔は3.8m程である。

位置 44P-19~45B-15

重複 9号住居をはじめ4軒の住居、3・4号溝、22号土坑と重複、いずれの遺構より後出である。

形状 断面形は上幅に対し下幅、底面の幅を有しており、壁面の立ち上がりは1号溝に増して外傾著しかった。規模は上幅で0.70~2.30m、下幅で0.30~0.70mを測る。深さは54T-1グリッド内の西壁で0.47mである。

方位 N-75°-W、N-21°-E

埋没土 暗褐色土を主体に堆積していた。北辺では北側から、西辺では西側からの土砂の流入により埋没していったことが観察される。流水の痕跡は認められない。

遺物 44T-19グリッド内の、西壁際の埋没土中から施釉陶器碗(3)が出土したのをはじめ、施釉陶器(2~4・7・8)、軟質陶器(5・6)が出土している。掲載した資料の他に土師器破片75点、須恵器破片11点、陶磁器破片12点、軟質陶器破片12点が出土した。(観P97)

所見 出土遺物の様相から江戸時代の溝と考えられる。

B区 4号溝 (第423図、PL93)

概要 44F-20グリッドではほぼ直角に屈曲する区画溝である。西辺は約24.85mを検出、南端は45A-15グリッドで削平を受けている。北辺は現道を越えA区に達し、44L-19グリッドで16号溝に接している(調査時A区19号溝と呼称した)。現道までが13.80m、A区16号溝までが約38.0mである。

西辺では同じ南北方向に2号・4号・10号・11号の各溝が位置し、東側から西側に向けて順次新たに掘削されていった状況が土層断面の観察から判明している。

位置 44Q-19~45A-15

重複 0号住居、3号・10号溝に後出、2号溝に

先出する。3号井戸との関係は不明である。

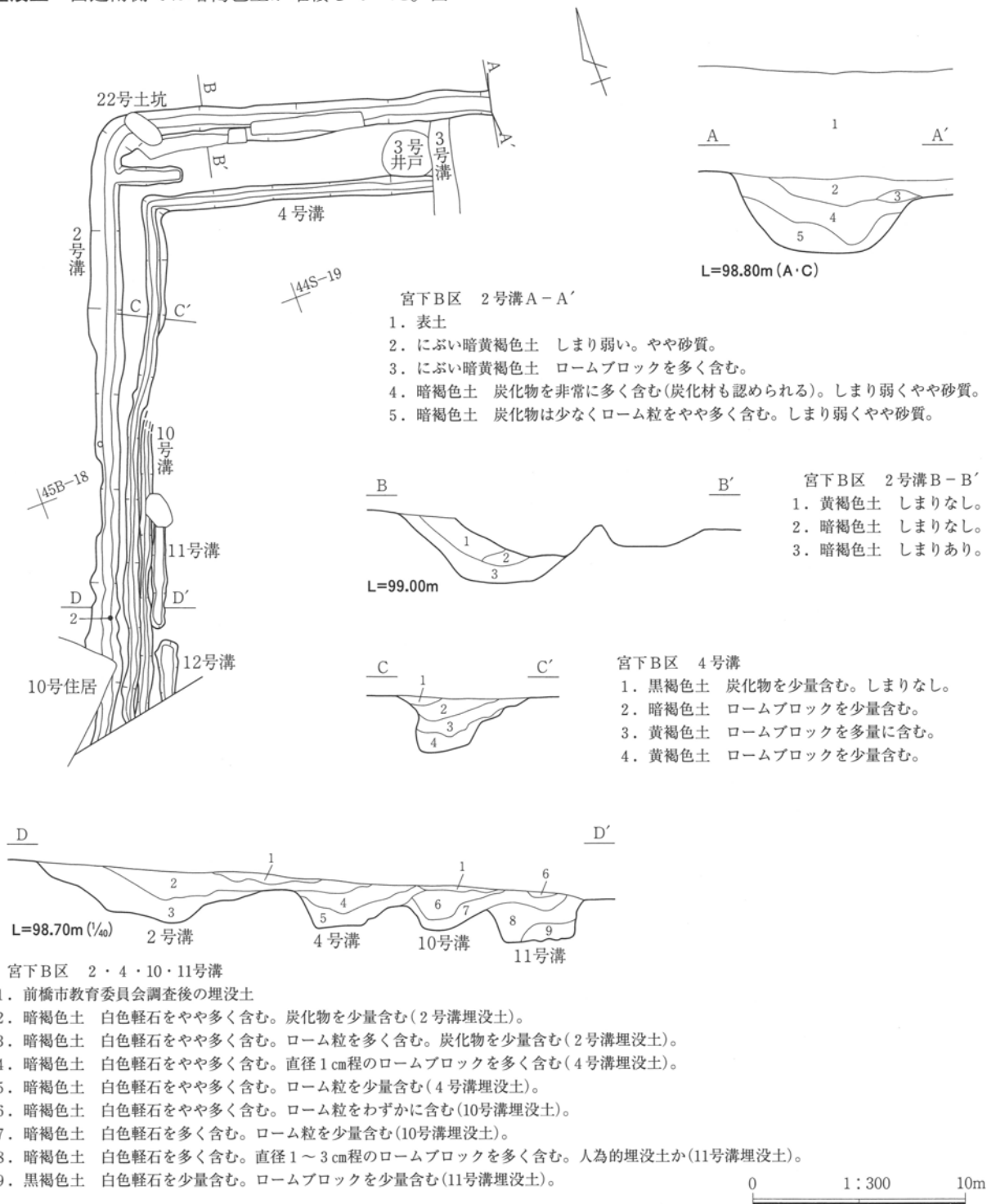
形状 断面形は外傾著しい逆台形である。規模は上幅が0.50~1.20m、下幅が0.10~0.40mである。深さは45A-16グリッドで0.41mである。

方位 N-74°-W、N-21°-E

埋没土 西辺南側では暗褐色土が堆積していた。西

辺北側では下半にロームブロックの混入が目立った。

所見 埋没土中から土師器破片が4点出土したが本遺構に帰属するものとは考えられない。詳細な掘削時期は不明であるが、走向が1号・2号溝と共通することから区画溝と考えられる。



第423図 B区2・4・10~12号溝

B区 10号溝 (第423図、PL93)

位置 44T-18~45A-15

重複 0号住居、11号溝に後出、4号溝に先出する。

形状 4号溝の東側に位置する南北溝である。南端は削平されている。北端も0号住居との重複部分以北には延びていない。長さは13.40mを検出した。断面形は外傾著しい逆台形を呈していた。上幅は0.36~0.60m、下幅0.08~0.30mである。深さは南端寄り0.17mを測った。

方位 N-21°-E

埋没土 暗褐色土が堆積していた。流水の痕跡は確認できなかった。

所見 出土遺物はなく、詳細な掘削時期は不明である。4号溝との同一性についても断定できなかった。

B区 11号溝 (第423図、PL93)

位置 44T-17、45A-16・17

重複 10号溝と重複、これに先出する。

形状 10号溝の東側に位置する南北溝である。北端は攪乱を受け未検出である。底面は南側に向かって低くなるが、端部は途切れ、立ち上がっている。長さは4.60m、上幅0.50~0.70m、下幅0.30~0.45mである。深さは0.25mを測った。

方位 N-23°-E

埋没土 上層の暗褐色土は人為的による埋め戻しか。下層は黒褐色土が堆積していた。流水の痕跡は認められなかった。

所見 出土遺物はなく、詳細な掘削時期は不明である。性格も断定することが困難である。南側に位置する12号溝との関係も不明である。

B区 12号溝 (第423図)

位置 45A-15・16

重複 重複する遺構はない。

形状 10号溝の東側に位置する南北溝である。長さ2.3mを検出ただけで南端は削平を受けていた。断面形は箱形であった。上幅は0.70~1.10m、下幅は0.30~0.60m、深さ0.21mであった。

方位 N-20°-E

所見 出土遺物はなく、詳細な掘削時期は不明である。性格も断定できない。

B区 3号溝 (第424・437図、PL94)

概要 南北方向に直線的に延びる。54Q-1グリッドで1号溝に接し、これより北側には延びない。南端は徐々に浅くなり、44R-15で途絶えてしまっている。

位置 44R-15、54P-1

重複 重複するいずれの住居、23号土坑に後出、いずれかの溝に先出する。3号井戸との関係は不明である。

形状 長さ29.0mにわたり検出した。断面形は底面の幅が狭い逆台形を呈しており、壁面の外傾は顕著であった。規模は上幅で0.44~2.12m、下幅で0.22~0.38mである。深さは北端で0.64mを測った。

方位 N-16°-E

埋没土 混入物を変えながら全層で暗褐色土が堆積していた。

遺物 須恵器提瓶(1)の破片の他、掲載しなかったが、土師器破片188点、須恵器破片10点、陶磁器破片1点が出土した。(観P97)

所見 詳細な掘削時期は不明である。

B区 5号溝 (第425図、PL94)

概要 現道を挟んでA区18号溝と走向を同じくする。

位置 44P-17~44R-17

重複 3号溝と重複、これに後出する。

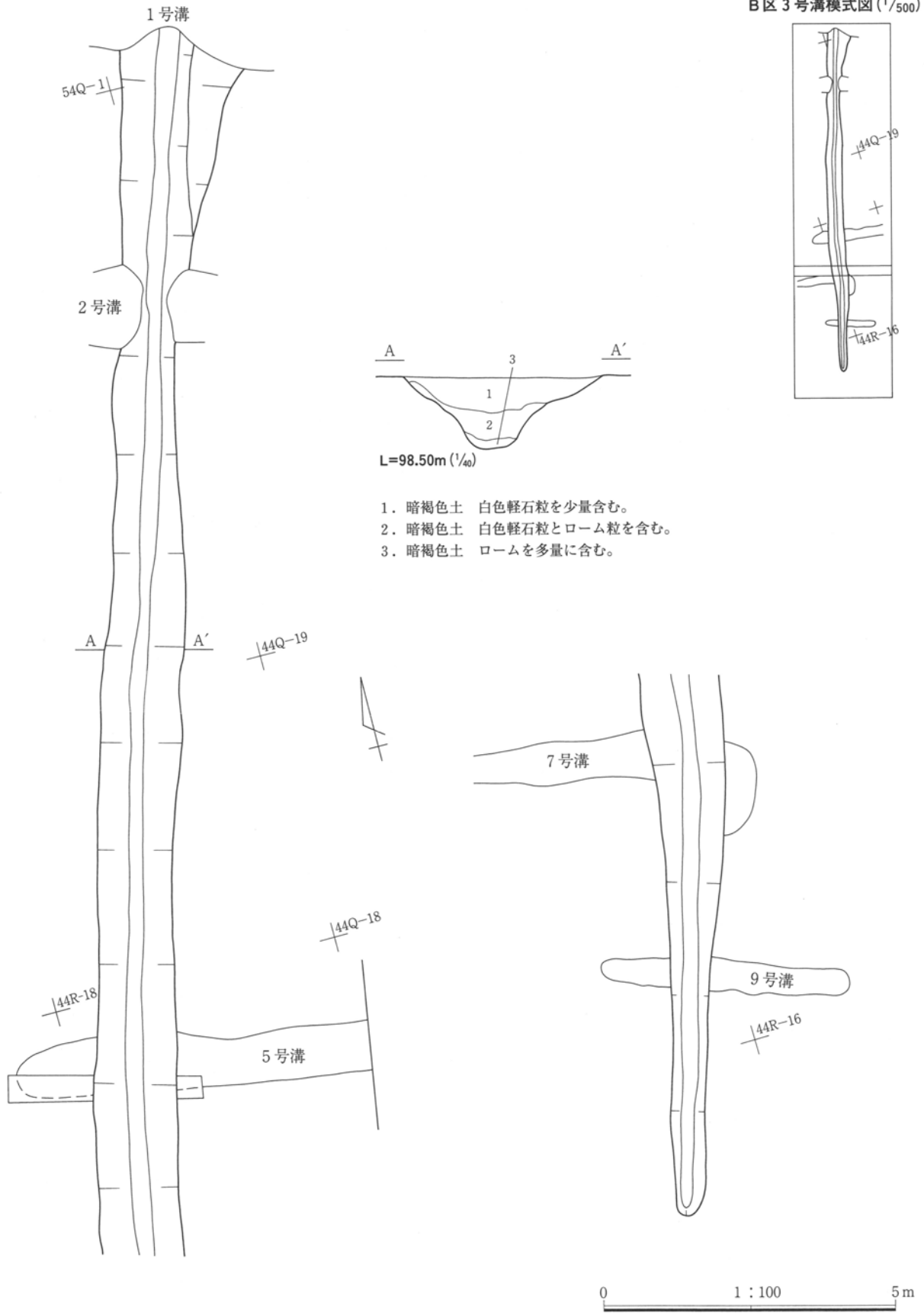
形状 東西方向の溝である。東端は現道下に延びている。西端は丸味をおびて立ち上がっている。検出した規模は長さ5.42m、上幅は0.78~1.06m、下幅は0.48~0.60mである。深さは西端で0.27mである。

方位 N-81°-W

埋没土 暗褐色土、黒褐色土が堆積していた。流水の痕跡は確認できなかった。

所見 埋没土中から土師器破片31点、弥生土器破片1点が出土したが、これらは本遺構の掘削時期を示すものではない。性格も断定できない。

B区3号溝模式図(1/500)



第424図 B区3号溝

B区 6号溝 (第425図、PL94)

位置 44R・S-18

重複 0号住居と重複、これに後出する。

形状 5号溝の西側に位置する東西方向の溝である。東端は北方向に弱く弧を描いている。西端は0号住居との重複により不明瞭になっている。断面形は皿状を呈していた。検出した規模は、長さ6.72m、上幅0.32~0.66m、下幅0.22~0.38mで、深さ0.14mである。

方位 N-74°-W、N-87°-E

埋没土 暗褐色土一層が堆積していた。流水の痕跡はみられない。

所見 出土遺物がなく、詳細な掘削時期は不明である。性格も断定できない。

B区 7号溝 (第425図、PL94)

位置 44Q-16~44T-16

重複 3号溝と重複、これに後出する。

形状 東西方向を基本とする溝であるが、西側寄りの2.75mの部分は走向を南西方向に変えている。断面形は皿状を呈する。検出した規模は長さ14.83m、上幅0.25~1.52m、下幅0.10~0.50mである。深さは3号溝西壁との重複部分で0.33m、他は0.08~0.19mである。

方位 N-35°-E、N-71°-W、N-50°-W

埋没土 暗褐色土一層が堆積していた。流水の痕跡はみられない。

所見 出土遺物はなく、詳細な掘削時期は不明である。性格も不明である。

B区 8号溝 (第425・437図、PL94・147)

位置 44S・T-16

重複 9号溝と重複、これに後出する。

形状 東西方向の溝で長さ5.62mを検出した。断面形は逆台形状であった。規模は上幅0.50~0.76m、下幅0.24~0.40mである。深さは中央部分で0.22mを測った。

方位 N-76°-W

埋没土 暗褐色土一層が堆積していた。流水の痕跡はみられない。

所見 埋没土中から施釉陶器(1~4)の破片が出土しており江戸時代の掘削と考えられる。性格は断定できない。(観P97)

B区 9号溝 (第425図、PL94)

位置 44Q-16~44S-16

重複 3号溝より後出で、8号溝に先出する。

形状 8号溝と走向をほぼ等しくする。8号溝との重複部分で2.53mを検出、中程が途切れるが3号溝の東側部分で3.98mを検出、東端でピットと重複していた。両端を結んだ長さは9.17m、上幅0.44~0.56m、下幅0.07~0.24mを測る。深さは0.26mである。

方位 N-70°-W

埋没土 暗褐色土一層が堆積していた。流水の痕跡はみられない。

所見 出土遺物はなく、詳細な掘削時期は不明である。性格も断定できない。

B区 13号溝 (第426図、PL95)

概要 B区の南端、小区画の調査区内で検出した。現道を挟むA区でもその一部を検出した。

位置 44S-4~45A-5

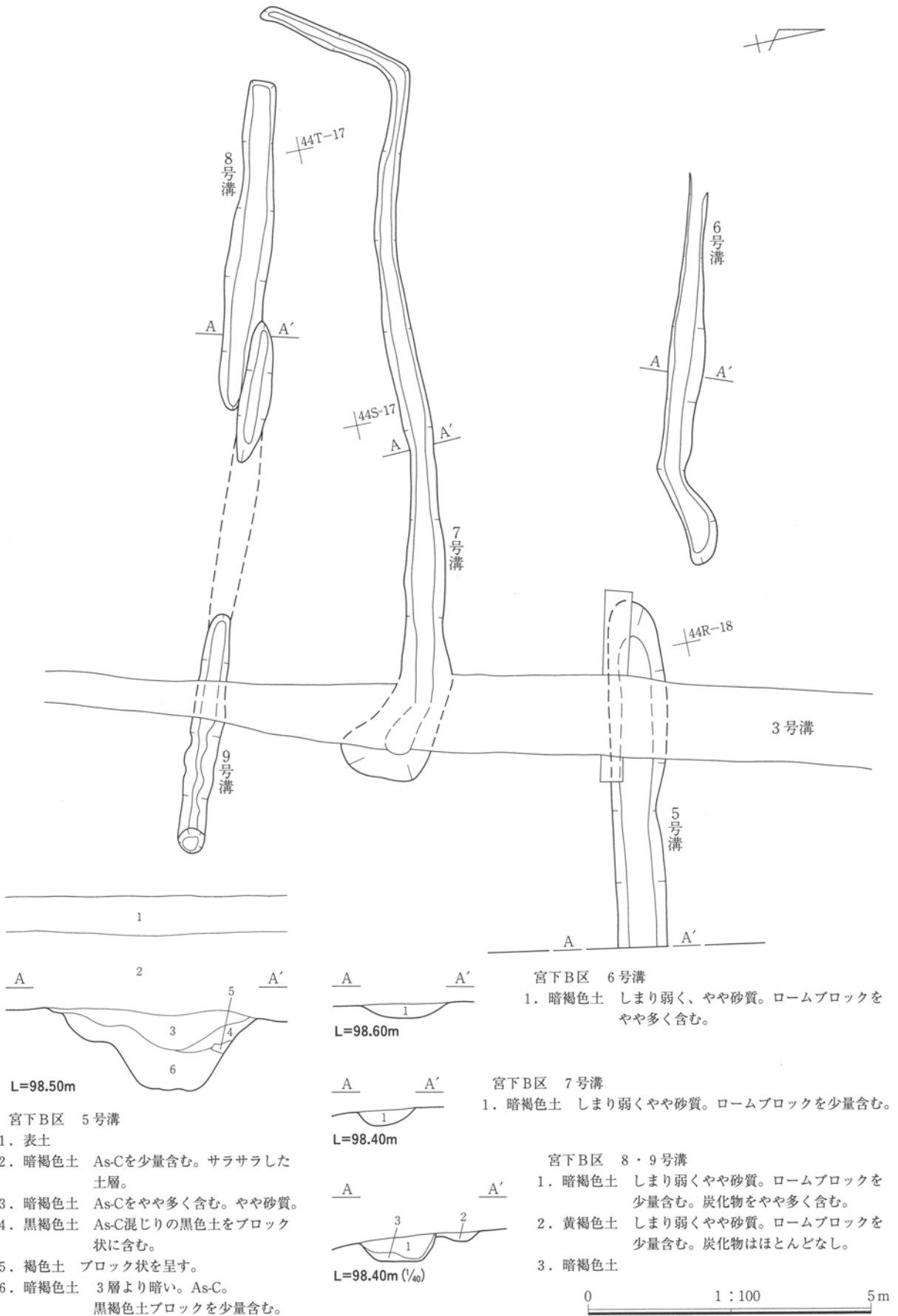
重複 17号住居に後出する。

形状 東西方向の溝で、長さ15.38mを検出、西端は調査区域外に及ぶ。断面形は逆台形で、中位に変換点を有し、上半は著しく外傾する。規模は、上幅1.16~2.06m、下幅0.54~0.64mである。深さは東端寄り0.66mである。底面は東側に向かって下がっている。調査区東端から西側方向に3.55mの地点では南北両壁の法面に一本ずつ小穴が穿たれていた。それぞれの規模は南側が長径46cm、短径34cm、北側が長径40cm短径34cmである。

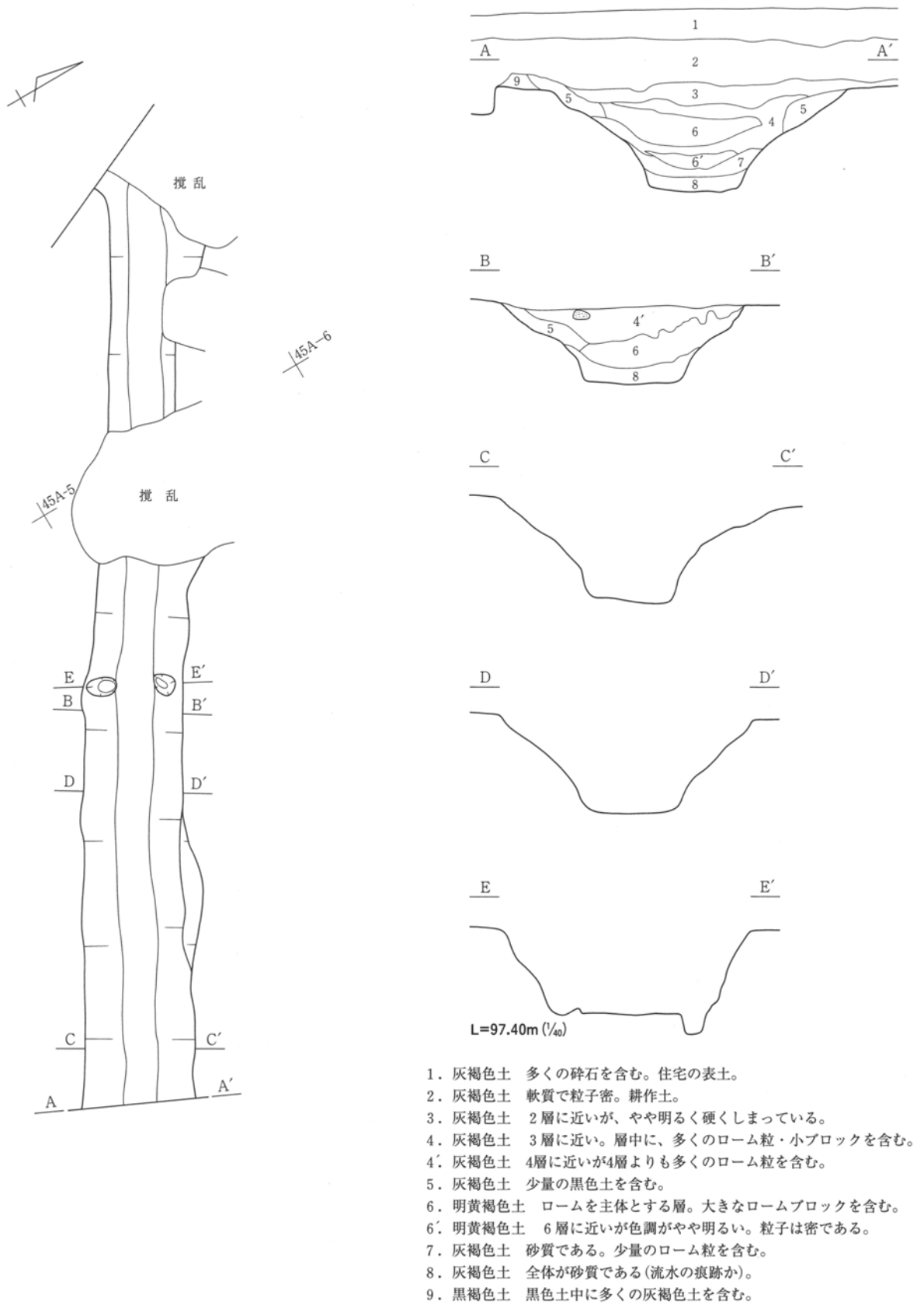
方位 N-59°-W

埋没土 中位にロームを主体とする明黄褐色土が堆積していた。最下層の灰褐色土は全体に砂質で流水があった可能性が指摘されている。

所見 出土遺物はなく、詳細な掘削時期は不明であるが、調査時の所見では近世以降のものとされた。



第425図 B区 5～9号溝



第426図 B区13号溝

C区 1号溝

(第427・428・437図、PL96・147・148)

位置 54S-19、65J-5

重複 3号・4号土坑、2号・12号溝、14号～16号・19号・20号・23号・24号住居と重複する。いずれの住居、3号土坑より後出、他の土坑、溝との新旧関係は不明である。

形状 調査区の中央からやや北側寄りで検出した東西方向の溝である。東端は調査区域外に及ぶ。西端は65J-5グリッドで削平を受け途切れている。走行は東南東から西北西を指すが、54C-20グリッドから65C-1グリッドの間は北方向に向きを変えている。途中、65F-3グリッドでは未検出であったが、これは削平を受けたためと考えられる。

総長は67.19m、東側検出部分が40.57m、西側が21.70mである。規模は上幅が0.30～1.60m、下幅が0.12～1.28mであった。深さは0.37mである。

方位 N-49°～55°-W

埋没土 主として灰褐色土、暗褐色土が堆積していた。流水の痕跡は確認できなかった。

遺物 染付碗(1・3・4)・皿(5)、施釉陶器碗(2)・皿(6・7)・香炉(8)・徳利(9・10・12)・甕(11)、軟質陶器(13・14)を資料化した。掲載した資料の他に陶磁器破片62点、軟質陶器破片32点、土師器破片399点、須恵器破片25点、弥生土器破片3点、縄文土器破片1点が出土した。(観P98)

所見 陶磁器、軟質陶器を多数出土することからこれらの遺物の年代から近世以降の掘削と考えられる。屋敷の区画溝と考えられる。

C区 2号溝 (第429・437・438図、PL95・148)

位置 65B-6、65D-2

重複 1号溝、19号住居、3号土坑と重複する。19号住居より後出である。1号溝との関係は不明である。

形状 南北方向の溝で走向はほぼ直線を指向している。検出した長さは23.33m、北端は調査区域外に及ぶ。南端は65D-2グリッドで1号溝と重複する部分で不明瞭になる。

規模は上幅が0.88～1.74m、下幅が0.10～0.64mである。最も良好であった地点の深さは0.47mであった。

方位 N-20°-E

埋没土 暗褐色土、黄褐色土が堆積していた。流水の痕跡は確認できなかった。

遺物 染付碗(1・2)・皿あるいは鉢(4)、施釉陶器碗(3)・軟質陶器(5・6)を資料化した。

掲載した資料の他に陶磁器破片6点、軟質陶器破片3点、土師器破片100点、須恵器破片5点、砥石1点、弥生土器破片1点が出土した。(観P98・99)

所見 近世以降の掘削と考えられる。屋敷の区画溝と考えられる。

C区 5号溝 (第430・438図、PL148)

位置 55K-11・12

重複 70号・73号住居と重複する。両住居より後出であると考えられる。

形状 南北方向の溝である。北端は73号住居との重複のため検出が困難となり、南端は調査区域外に及ぶため、長さ6.43mの検出にとどまった。規模は上幅が0.92～1.02m、下幅が0.36～0.50mを測った。深さは0.30mである。

方位 N-10°-E、N-23°-E

埋没土 流水の痕跡は確認できなかった。

遺物 染付碗(1)・施釉陶器香炉(2)、軟質陶器香炉または火舎(3)を資料化した。掲載した資料の他に陶磁器破片2点、土師器破片21点、須恵器破片1点が出土した。(観P99)

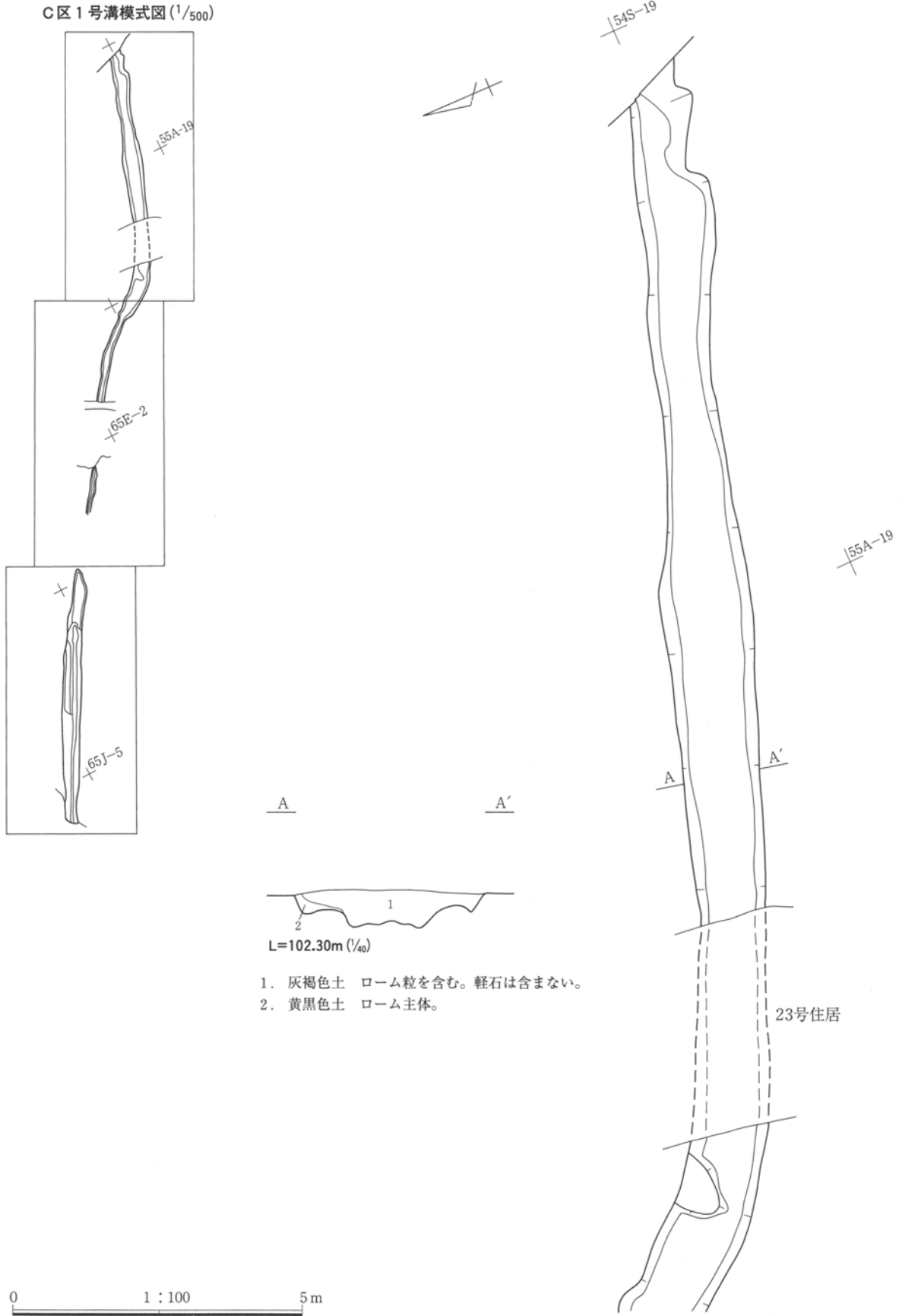
所見 近世以降の掘削で、性格は不明である。

C区 6号溝 (第431・438図、PL96・148)

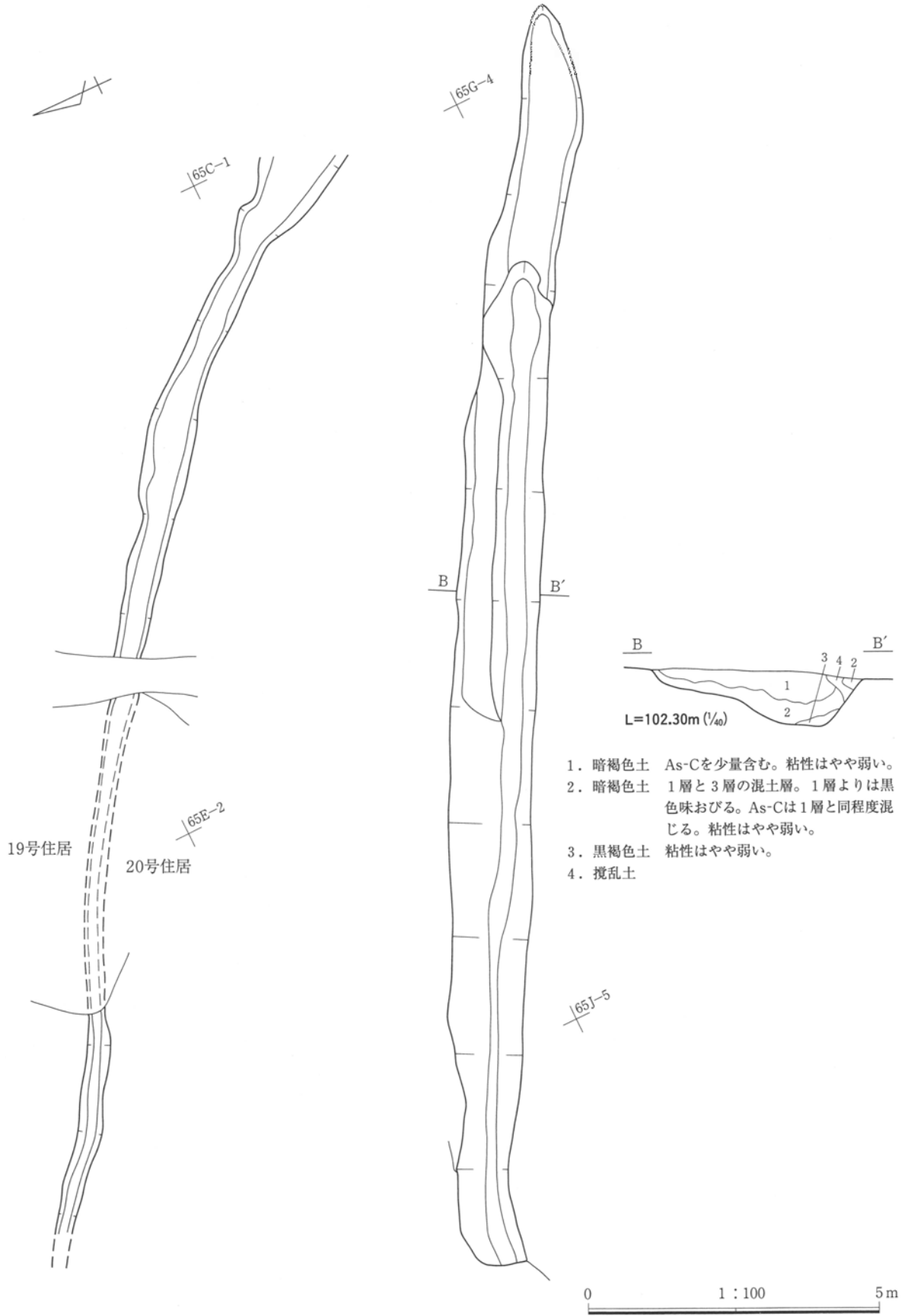
位置 65A・B-1

重複 22号住居と重複する。これに後出すると考えられる。

形状 東西方向の溝で7号～10号溝とはほぼ平行する。検出した長さは5.02mである。西端の状況は22号溝と重複するため不明である。規模は上幅が0.36～0.58m、下幅は0.22～0.40mである。深さは0.33mである。

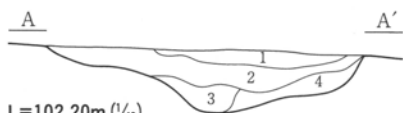
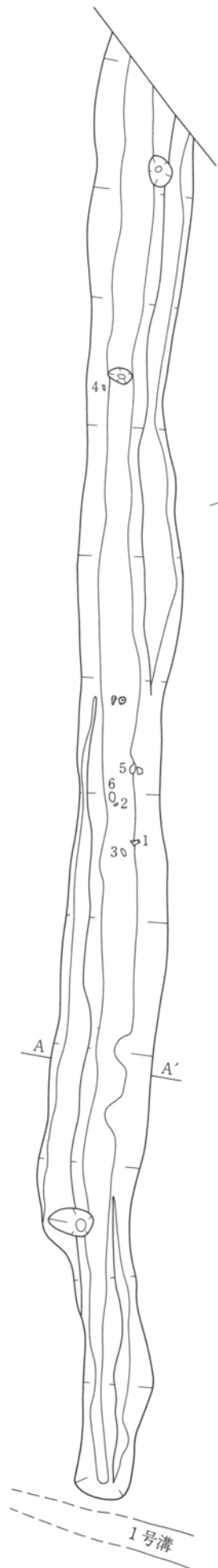


第427図 C区1号溝(1)



1. 暗褐色土 As-Cを少量含む。粘性はやや弱い。
2. 暗褐色土 1層と3層の混土层。1層よりは黒色味おびる。As-Cは1層と同程度混じる。粘性はやや弱い。
3. 黒褐色土 粘性はやや弱い。
4. 攪乱土

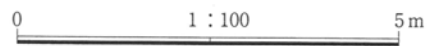
第428図 C区1号溝(2)



L=102.20m (1/40)

1. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒をやや多く含み、黄色味がかっている。
3. 暗褐色土 2層よりさらにロームの混入量多くなる。
4. 黄褐色土 ローム粒と暗褐色土の混土層。

第429図 C区2号溝



方位 N-71°-W、N-77°-E

埋没土 灰黒色土が堆積していた。流水の痕跡は確認できなかった。

遺物 施釉陶器香炉(1)・乗燭(2)を資料化した。掲載した資料の他に陶磁器破片8点、軟質陶器破片1点、土師器破片80点、須恵器破片4点、弥生土器破片2点が出土した。(観P99)

所見 近世以降の掘削で、性格は不明である。

C区 7号溝 (第431・438図、PL96)

位置 65A・B-1

重複 22号住居と重複していたと考えられる。

形状 東西方向の溝である。検出長は2.28mで、西端は22号住居との重複で不明瞭になっている。規模は上幅が0.52~0.60m、下幅が0.32~0.36mである。深さは0.26mである。

方位 N-70°-W

埋没土 灰黒色土が堆積していた。流水の痕跡は認められなかった。

遺物 施釉陶器碗(1)を資料化した。掲載した資料の他に土師器破片10点が出土した。(観P99)

所見 近世以降の掘削で、性格は不明である。

C区 8号溝 (第431・438図、PL148)

位置 64T-1~65B-1

重複 22号住居、6号・10号溝と重複する。22号

住居より後出と考えられる。

形状 東西方向の溝である。検出長は11.8mであるが、西端は22号住居との重複により確認できなかった。規模は上幅0.46~0.96m、下幅0.28~0.58mである。深さは0.43mである。

方位 N-76°-W

埋没土 灰黒色土が堆積していた。流水の痕跡は認められなかった。

遺物 施釉陶器香炉(1)を資料化した。掲載した資料の他に陶磁器破片4点、土師器破片55点、須恵器破片9点が出土した。(観P99)

所見 近世以降の掘削で、性格は不明である。

C区 9号溝 (第431・438図)

位置 65B-1・2

重複 10号溝と重複する。新旧関係は不明である。

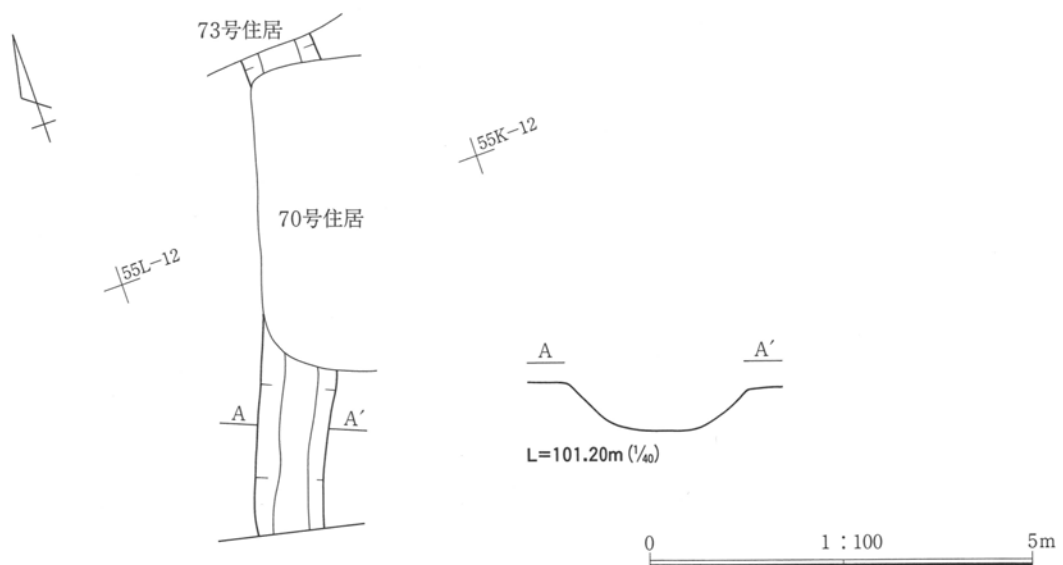
形状 65B-2グリッド内ではほぼ直角に屈曲する溝である。総長6.57mを測るが、東端の状況は10号溝との重複により不明である。

方位 N-71°-W、N-23°-E

埋没土 灰黒色土が堆積していた。流水の痕跡は認められなかった。

遺物 施釉陶器香炉(1)を資料化した。掲載した資料の他に土師器破片3点が出土した。(観P100)

所見 近世以降の掘削で、性格は不明である。



第430図 C区5号溝

C区 10号溝 (第431図)

位置 65A・B-1

重複 8号・9号溝と重複する。新旧関係は不明である。

形状 東西方向の溝であるが、8号・9号溝との重複により、全体形状を把握することは困難であった。検出長は5.57mである。規模は上幅が0.50~0.60m、下幅が0.28~0.40mである。深さは0.34mである。

方位 N-76°-W

遺物 出土遺物はなかった。

所見 遺物の出土がないことから詳細な掘削時期

は不明である。性格も不明である。

C区 12号溝 (第432・438図、PL96)

位置 55B-15~54T-19

重複 28号・29号・33号住居、1号溝と重複する。住居よりは後出する。1号溝との関係は不明である。

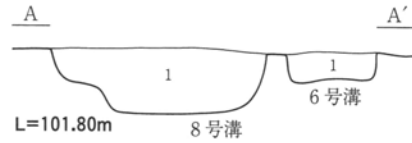
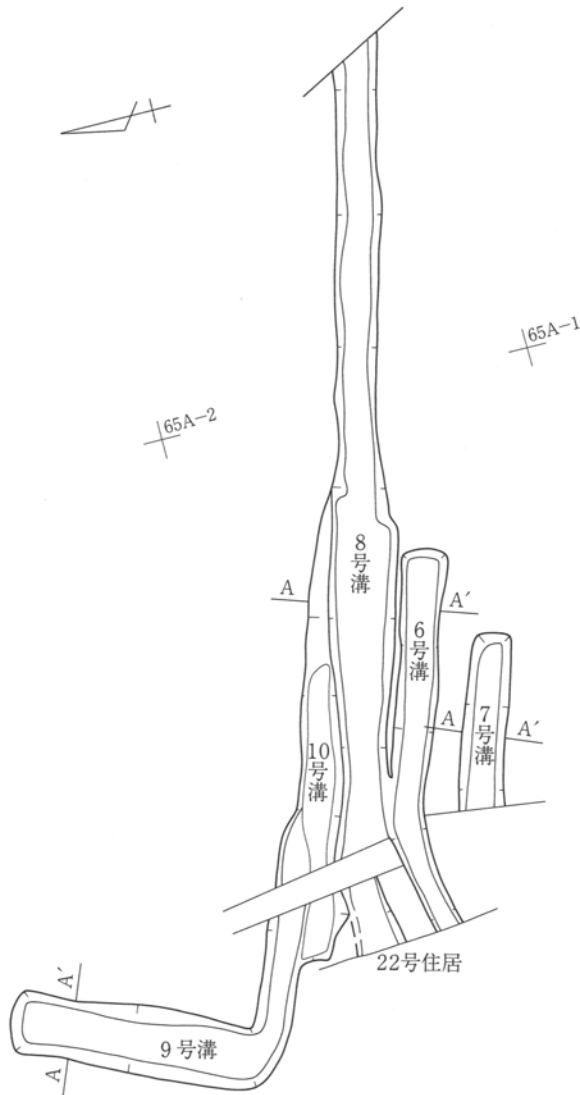
形状 南北溝である。北端は54T-19グリッドで1号溝に接するが前後関係は不明である。長さは21.88mを検出した。規模は上幅が0.60~1.22m、下幅が0.36~0.82mである。深さは0.21mである。

方位 N-22°-E、N-31°-E

埋没土 黒色土、黒褐色土が堆積している。流水の痕跡は認められなかった。

遺物 軟質陶器(1)を資料化した。掲載した資料の他に土師器破片179点、須恵器破片18点が出土した。(観P100)

所見 近世以降の掘削と考えられる。区画溝としての性格が考えられる。

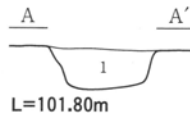


宮下C区 6号溝

1. 灰黒色土 ローム粒を少量含む。軽石を含まない。

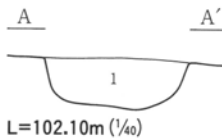
宮下C区 8号溝

1. 灰黒色土 全体の1/5程の割合でローム粒を含む。軽石を含まない。



宮下C区 7号溝

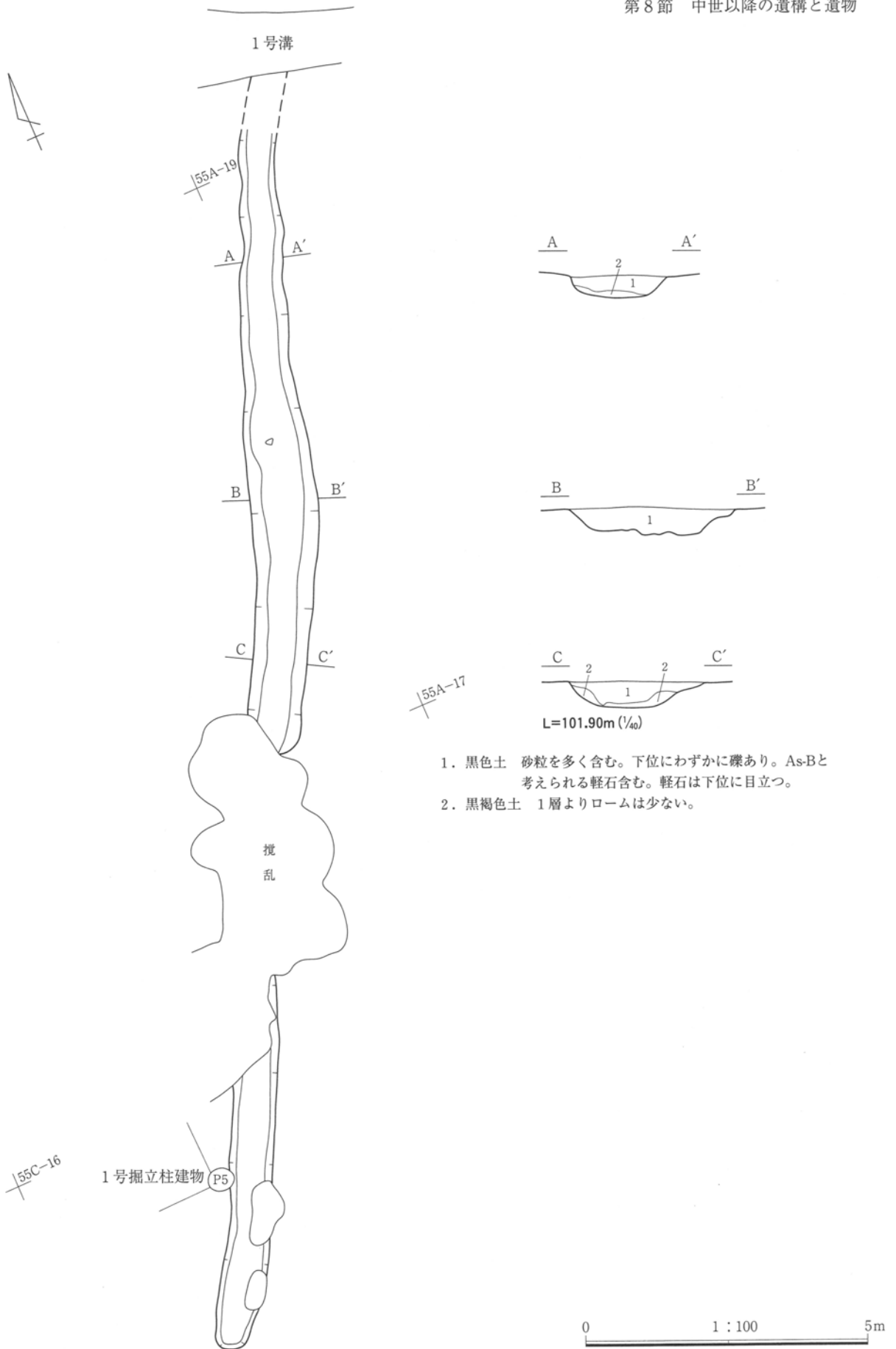
1. 灰黒色土 ローム粒を少量含む。



宮下C区 9号溝

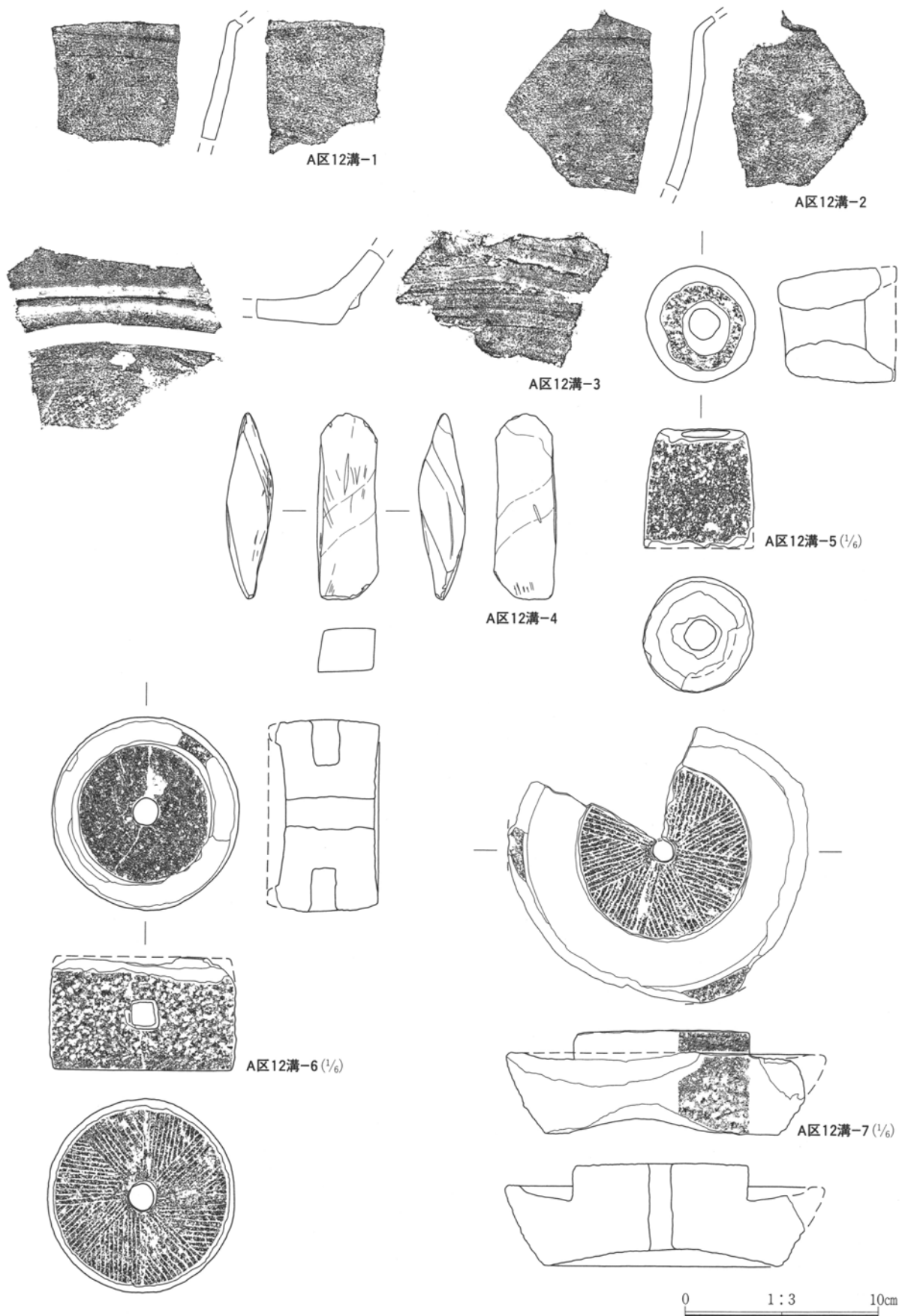
1. 灰黒色土 軽石をごく少量含む。

第431図 C区6~10号溝

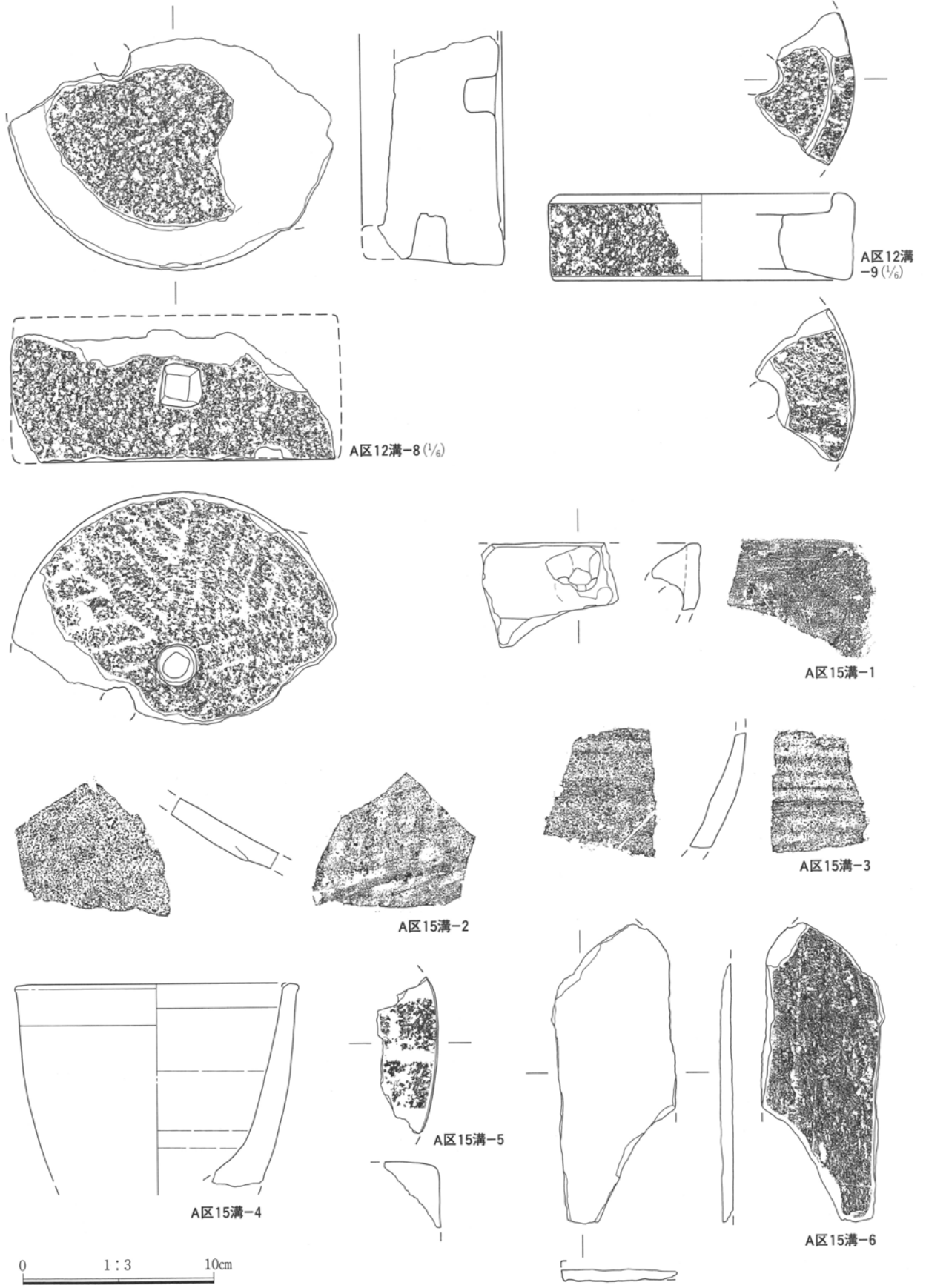


- 1. 黒色土 砂粒を多く含む。下位にわずかに礫あり。As-Bと
考えられる軽石含む。軽石は下位に目立つ。
- 2. 黒褐色土 1層よりロームは少ない。

第432図 C区12号溝

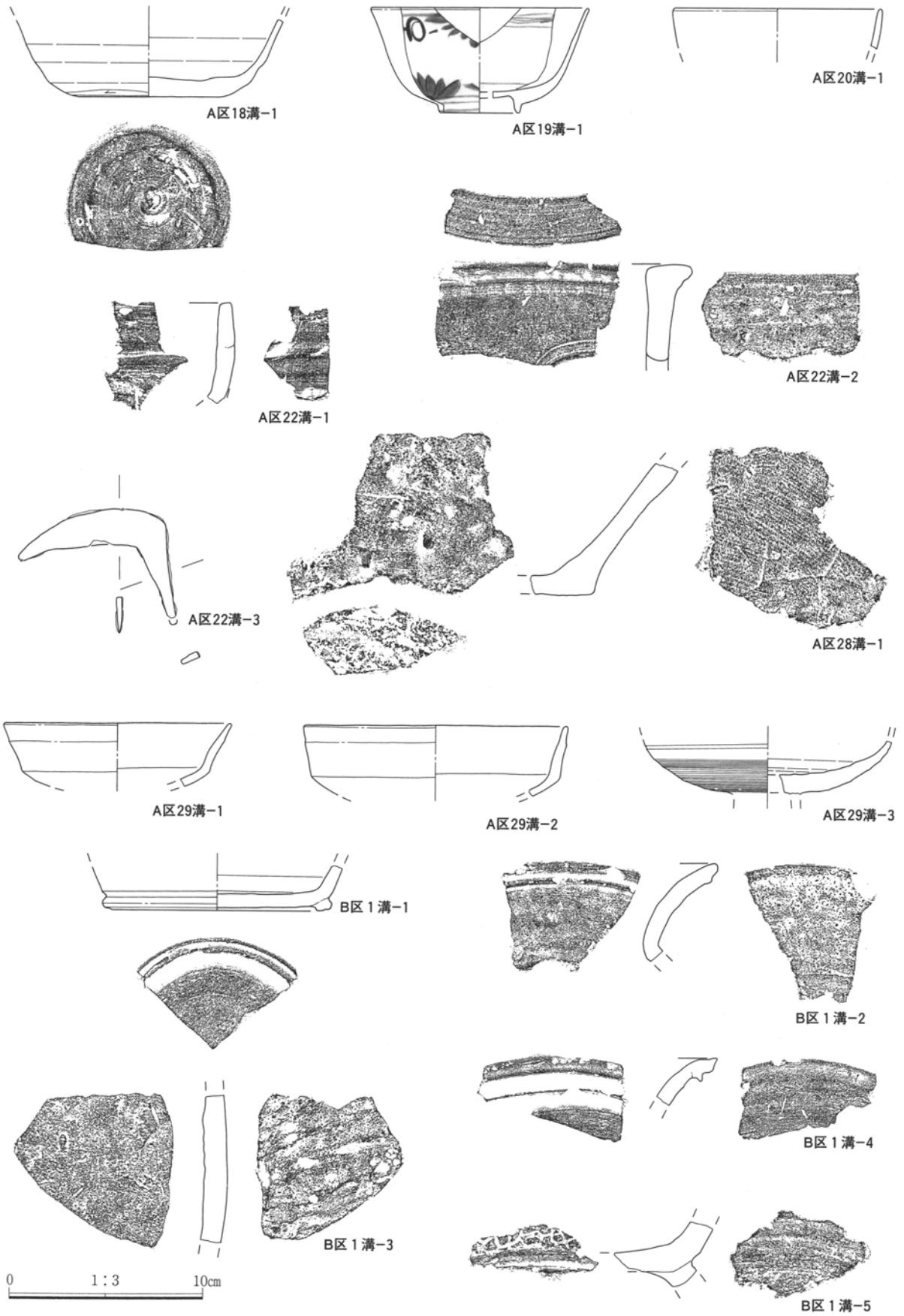


第433図 A区12号溝出土遺物(1)

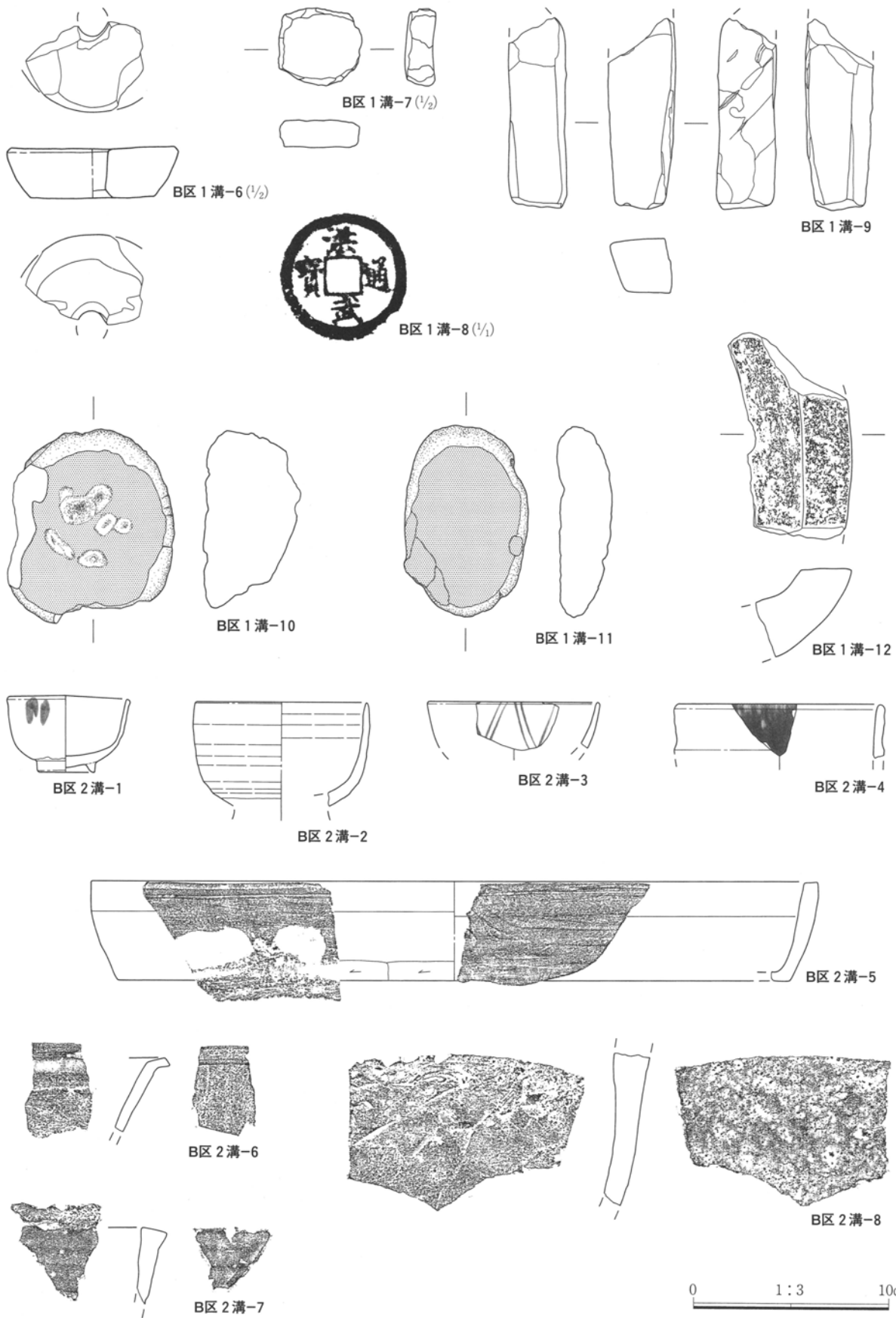


第434図 A区12(2)・15号溝出土遺物

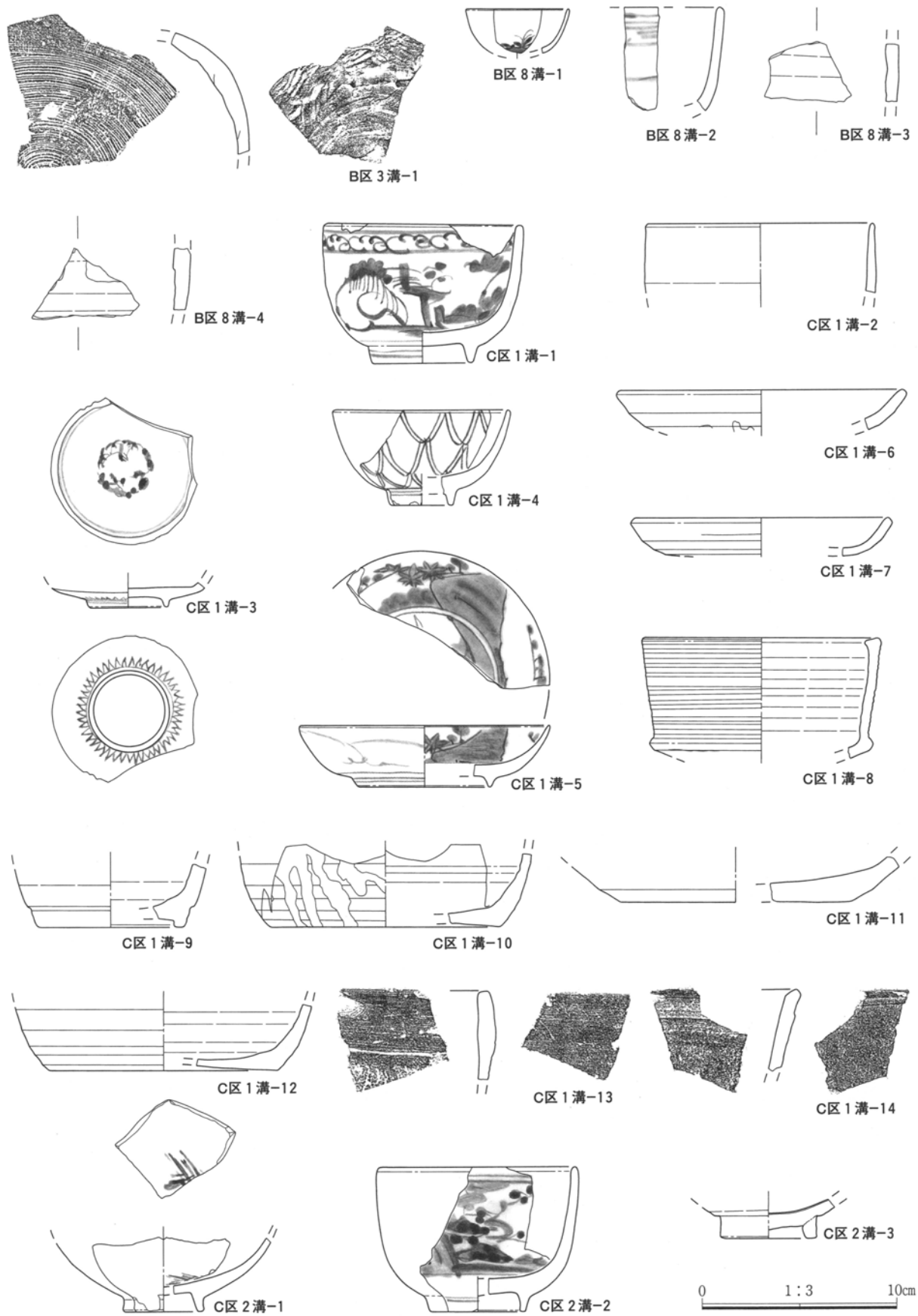
第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



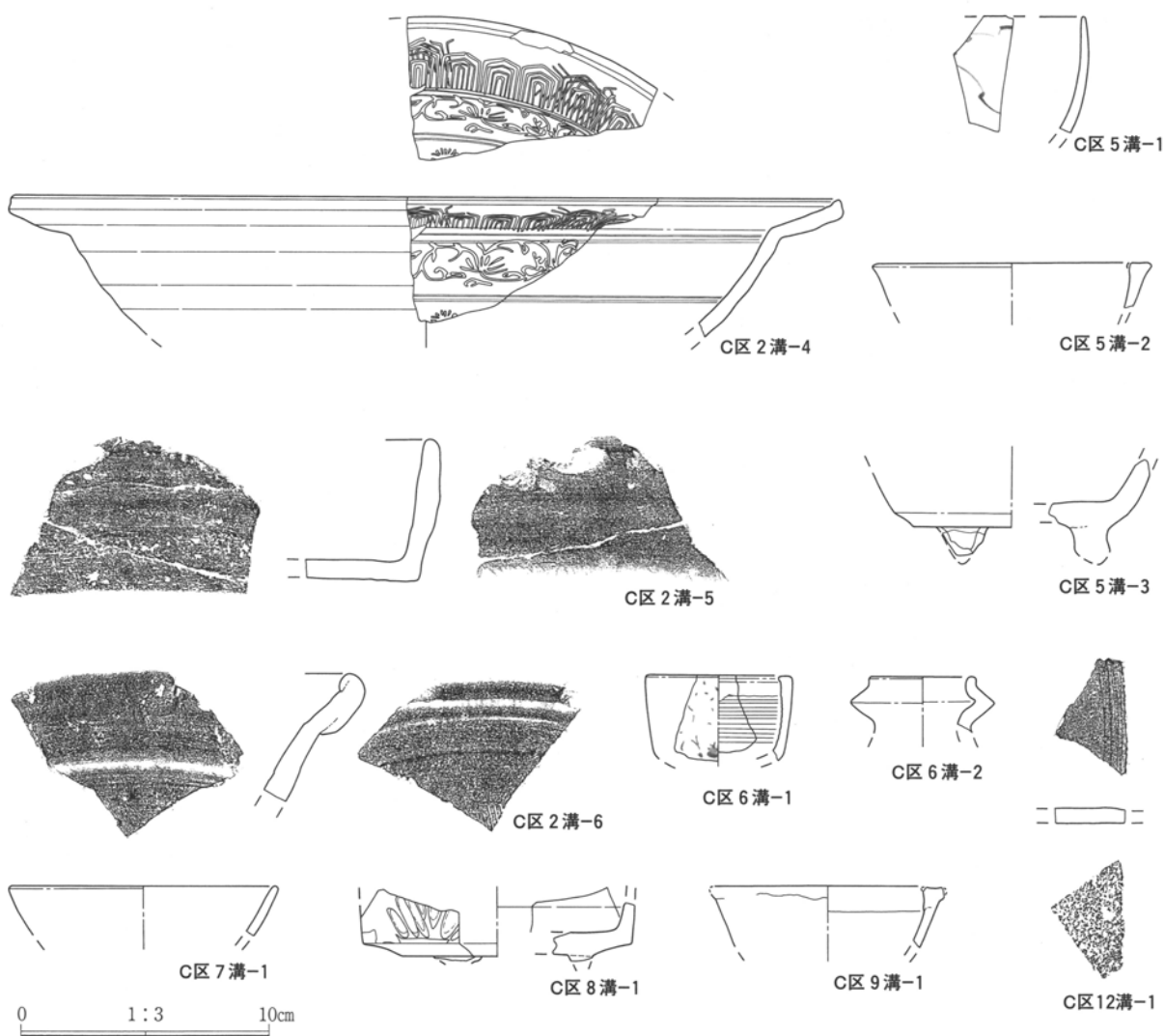
第435図 A区18~20・22・28・29号溝、B区1号溝(1)出土遺物



第436図 B区1(2)・2号溝出土遺物



第437図 B区3・8号溝、C区1・2(1)号溝出土遺物



第438図 C区2(2)・5～9・12号溝出土遺物

5 土坑

A区 1号土坑 (第439図、PL97)

位置 440-10・11

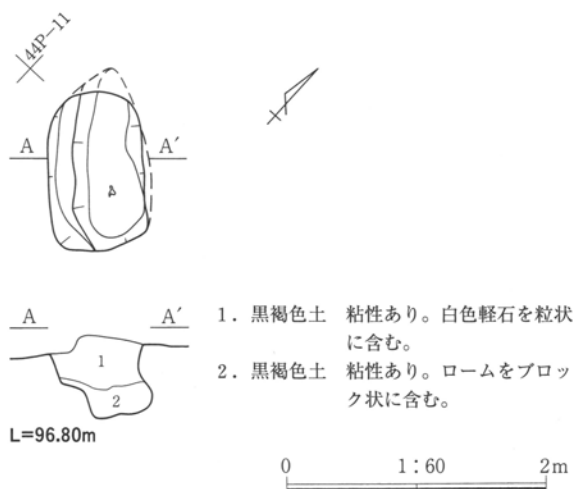
重複 16号溝の西側法面に位置し、これに先出すると考えられる。

形状 確認面における平面形は長円形を呈していたが、断面形は不整形であった。斜め方向に掘り込まれたため北側、東側の下端はオーバーハングしていた。底面も平坦ではなかった。規模は長径1.23m 短径0.76m、深さ0.68mである。底面における長径は1.33mであった。

方位 N-44°-W

埋没土 黒褐色土が混入物を変えて上・下2層となり堆積していた。

所見 出土遺物はなく、詳細な掘削時期・性格は不明である。



第439図 A区1号土坑

A区 2号土坑 (第440図、PL97)

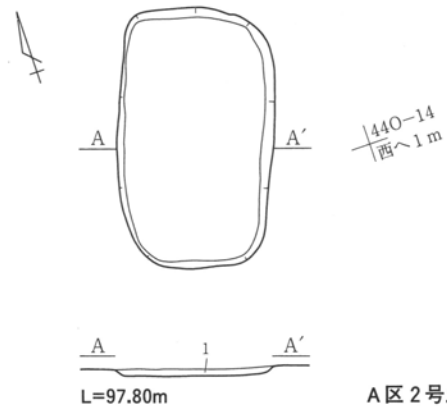
位置 44O-13・14

重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は南北に長軸を有する隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.06m短軸1.25m、深さ0.14mである。

方位 N-18°-E

所見 出土遺物がなく、詳細な掘削時期・性格は不明。近世以降の土坑か。



1. 黒褐色土 全体に砂質。As-Cと思われる白色軽石を均質に少量含む。

B区 1号土坑 (第440図、PL97)

位置 44T-10、45A-10

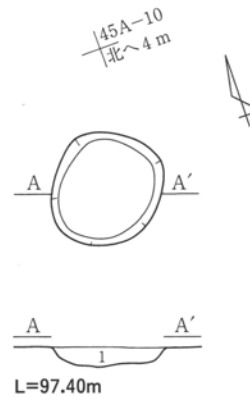
重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は円形を基本としている。長径0.98m短径0.85mを測る。深さは0.20mである。断面形は皿状を呈していた。

方位 N-71°-E

埋没土 黒褐色土が堆積していた。

所見 出土遺物はなかった。詳細な掘削時期は不明である。



1. 黒褐色土 黄褐色ロームをブロック状に含む。

B区 2号土坑 (第440図、PL97)

位置 45C-11

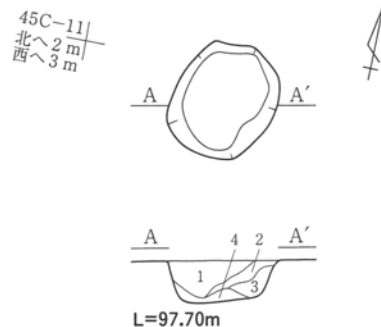
重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は長円形を基本としていたものと考えられるが、下端のラインは一定ではない。長径0.97m短径0.79m、深さ0.34mを測る。

方位 N-24°-E

埋没土 上層・中層には黒褐色土、暗褐色土が、下層には黄褐色土が堆積している。

所見 出土遺物はなかった。詳細な掘削時期は不明である。



1. 黒褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
 2. 暗褐色土 ロームブロックを非常に多く含む。
 3. 黒褐色土 1層に類似するがより多くロームブロックを含む。
 4. 黄褐色土 ロームを主体とするが黒色土粒を多く含む。

B区 3号土坑 (第441・450図、PL97・148)

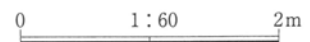
位置 45C-12

重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は長円形を基本としていたと考えられるが、検出時は不整形であった。長径1.13m短径0.74m、深さ0.58mを測る。

方位 N-11°-W

埋没土 厚さ6cmから20cmで5層の土層が堆積して



第440図 A区2号、B区1・2号土坑

いた。

遺物 底面直上から土師質土器皿(1)が出土している。他に土師器破片1点が出土した。また東壁際の底面から10cm離れた位置から、古銭3枚が重なって出土している。種類は元豊通寶(2)、至和元寶(3)、皇宋通寶(4)各1枚である。(観P100)

所見 遺物の出土状況から墓と考えられる。中世から近世の掘削と考えられる。

B区 7号土坑 (第441図、PL97)

位置 45B-12・13

重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は長方形を基本としていたと考えられようか。規模は長軸1.47m短軸0.99m、深さ0.40mを測る。

埋没土 暗褐色土、黄褐色土が堆積していた。

所見 出土遺物はなかった。詳細な掘削時期は不明である。

B区 8号土坑

(第441・450図、PL97・148・149)

位置 45A・B-13 **方位** N-15°-E

重複 9号・10号土坑に後出する。

形状 平面形は長円形を呈していたものと考えられる。断面形は上方に向かって大きく外反していた。規模は長径の残存が1.84m短径1.10m、深さ0.48mを測った。

埋没土 黄褐色土、暗褐色土が堆積する。

遺物 北東壁際の床面から12cm離れた高さから古銭7枚が出土している。種類は 寧元寶(2)、皇宋通寶(3)、天符通寶(5)、宣和通寶(6)、元豊通寶(7)、永楽通寶(1)、不明銭(4)の各1枚である。掲載した資料の他に土師器破片6点が出土した。(観P100)

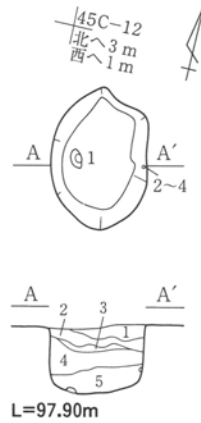
所見 遺物の状況から墓と考えられる。中世から近世の掘削と考えられる。

B区 10号土坑 (第441図)

位置 45A・B-13

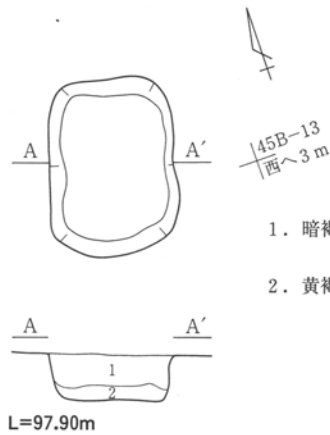
重複 9号土坑に後出、8号土坑に先出する。

形状 8号・9号土坑と同時に調査を行ったため全体形状、規模を把握することができなかった。残存



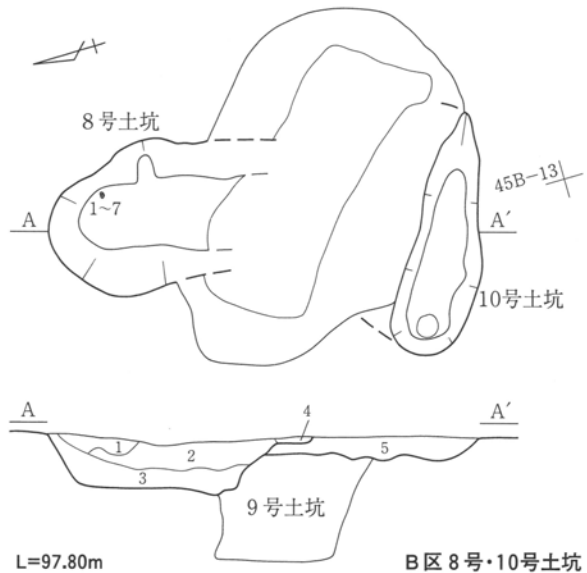
- 1. 黒褐色土 白色軽石を多く含む。
- 2. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 3. 黄褐色土 ロームを主体とする層。
- 4. 暗褐色土 2層と同質。
- 5. 暗褐色土 ローム小ブロックを非常に多く含む。

B区3号土坑



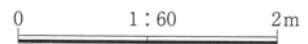
- 1. 暗褐色土 黄褐色ロームブロックを含む。
- 2. 黄褐色土 黄褐色ロームを主体とし黒褐色土ブロックを少量含む。

B区7号土坑



B区8号・10号土坑

- 1. 暗褐色土 白色軽石を少量含む。黄褐色ローム土が混入する。
- 2. 黄褐色土 暗褐色土をブロック状に含む。
- 3. 暗褐色土 1層より黒色味が強い。白色軽石をわずかに含む。
- 4. 暗褐色土
- 5. 黄褐色土 黄褐色ロームと暗褐色土との混土层。



第441図 B区3・7・8・10号土坑

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査

規模は東西1.92m、南北1.67m、深さ0.33mである。

方位 N-65°-W

埋没土 黄褐色土一層の堆積である。

所見 出土遺物はなかった。詳細な掘削時期・性格については不明である。

B区 11号土坑 (第442図、PL98)

位置 44T-11・12

重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は不整形である。西壁は一部が舌状に内側に張り出している。長径1.38m短径1.12m、深さ0.33mである。

方位 N-40°30'-E

埋没土 暗褐色土が堆積していた。

所見 出土遺物はなかった。詳細な掘削時期・性格については不明である。

B区 12号土坑 (第442図、PL98)

位置 44R-14・15

重複 24号土坑と重複する。直接の前後関係は確認できなかったが本遺構が後出と考えられる。

形状 上端の平面形は長円形を呈するが、壁面の立ち上がりは一定でない。長径2.18m短径1.24m、深さ0.82mである。

方位 N-45°-E

埋没土 東壁寄りには黒褐色土が上層から下層にいたるまで堆積していた。

所見 出土遺物はなかった。詳細な掘削時期・性格については不明である。

B区 14号土坑 (第442図、PL98)

位置 44R-17・18

重複 重複する遺構はない。

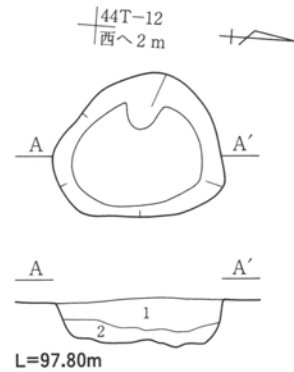
形状 平面形は隅丸の長方形であったと考えられる。長軸1.66m、短軸0.77m、深さ0.36mである。

方位 N-29°-E

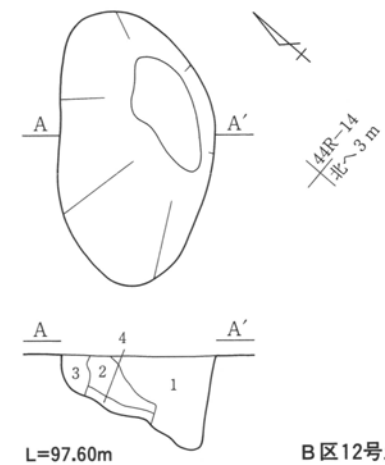
埋没土 黒褐色土が堆積していた。

遺物 埋没土中から土師器破片12点、須恵器破片2点、陶磁器破片1点が出土した。

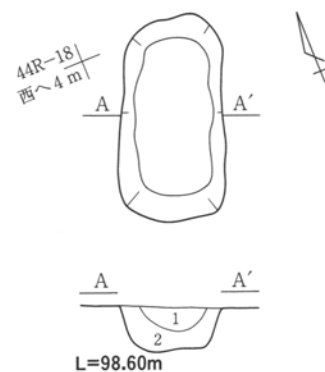
所見 詳細な掘削時期・性格については不明である。



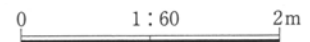
1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 黄褐色ロームを少量含む。



1. 黒褐色土 茶褐色土ブロックを含む。黄褐色ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土 茶褐色土ブロックを含む。黄褐色ローム粒を少量含む。
3. 茶褐色土 黄褐色ローム粒を少量含む。
4. 黄褐色土 黄褐色ロームを主体とし、暗褐色土ブロックを少量含む。



1. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまりなし。
2. 黒褐色土 ロームをブロック状に含む。しまりなし。



第442図 B区11・12・14号土坑

C区 4号土坑 (第443図、PL98)

位置 65E-2

重複 1号溝、19号・20号住居と重複している。

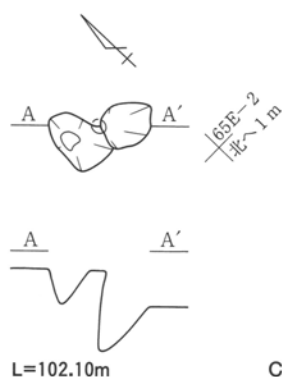
形状 小ピット状の掘り込みで北西方向にオーバーハングしている。長径0.44m短径0.33m、深さ0.63mを測る。西側にも同規模のピットが重複している。

方位 N-65°-W

埋没土 黒褐色土、暗褐色土が堆積している。

遺物 埋没土中から須恵器瓶の破片4点と土師器破片6点を出土したが資料化するに足るものではなかった。

所見 詳細な掘削時期・性格については不明である。



C区4号土坑

C区 5号土坑 (第443図、PL99)

位置 55K-17

重複 重複する遺構はない。

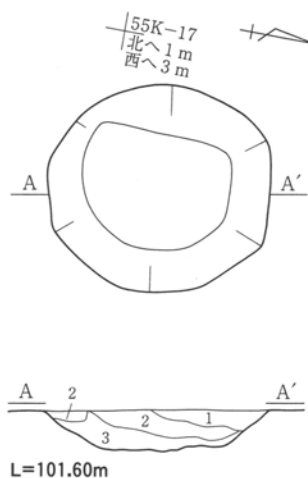
形状 平面形は長円形を呈していたと考えられる。長径1.82m短径1.65mを測る。深さは0.34mである。断面形は皿状を呈し、立ち上がりは外傾著しい。

方位 N-31°-W

埋没土 暗褐色土と黒褐色土がレンズ状に堆積していた。

遺物 埋没土中から土師器破片5点、須恵器破片3点が出土したが資料化するに足るものではなかった。

所見 詳細な掘削時期については不明である。



C区5号土坑

1. 暗褐色土 白色軽石、ローム粒・小ブロックを多く含む。
2. 黒褐色土 白色軽石、ローム小ブロックを少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒を非常に多く含む。

C区 7号土坑 (第443図、PL99)

位置 55F-17

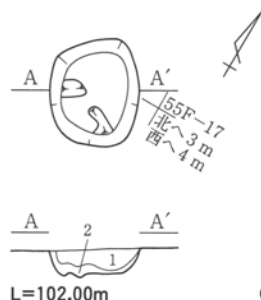
重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は長円形を基本としていたと考えられる。規模は長径0.84m短径0.70m、深さ0.28mを測る。底面には2箇所不定形のくぼみがみられた。

方位 N-36°-W

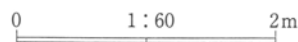
埋没土 上層に暗褐色土が下層に黄褐色土が堆積していた。

遺物 埋没土中から土師器破片4点、弥生土器破片1点が出土したが資料化するに足るものではなかった。



C区7号土坑

1. 暗褐色土 白色軽石を少量含む。
2. 黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土小ブロックを少量含む。



第443図 C区4・5・7号土坑

所見 詳細な掘削時期は不明である。

C区 8号土坑 (第444図、PL99)

位置 55F-16

重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は円形に近い形状である。規模は長径1.00m短径0.94m、深さ0.61mを測る。北西部分に直径約0.40m、深さ0.24mのピット状の掘り込みがみられる。

方位 N-0°

埋没土 上・中層に黒褐色土が堆積する。

遺物 埋没土中から土師器破片1点を出土しているが資料化するに足るものではなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

C区 9号土坑 (第444図、PL99)

位置 65D・E-3

重複 19号住居と重複する。新旧関係は不明である。

形状 ピット状の掘り込みを有していた。北側は浅く舌状に立ち上がっている。規模は長径1.02m短径0.40m、深さ0.57mを測った。

方位 N-40°-W

埋没土 暗褐色土、褐色土が堆積している。

遺物 埋没土中から土師器破片・須恵器破片が出土したが資料化するに足るものではなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

C区 10号土坑 (第444図、PL99)

位置 55H・I-15

重複 重複する遺構はない。

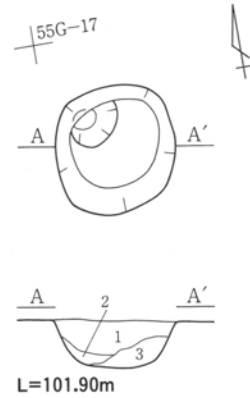
形状 平面形は長円形に近い形状である。規模は長径1.08m短径0.93m、深さ0.31mである。断面形の立ち上がりは緩やかである。

方位 N-18°30'-W

埋没土 暗褐色土と黒褐色土が互層をなしていた。

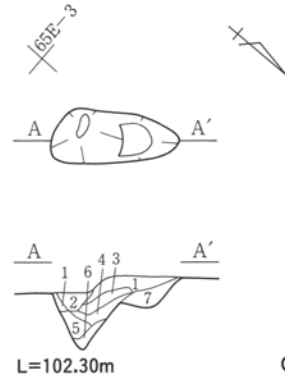
遺物 埋没土中から土師器破片1点を出土したが資料化するに足るものではなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明である。



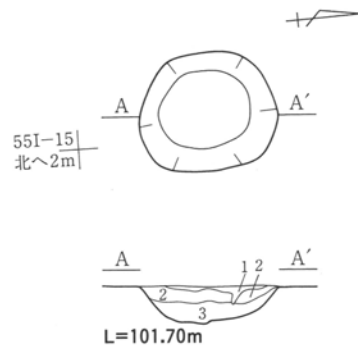
C区8号土坑

1. 黒褐色土 白色軽石を多く含む。ローム粒を少量含む。
2. 暗褐色土 白色軽石を少量含む。ローム粒を多く含む。
3. 暗褐色土 2層に類似するがより多くのローム粒を含む。



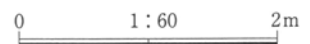
C区9号土坑

1. 暗褐色土 As-Cを含む。
2. 暗褐色土 1層より軽石が多く黒色味が強い。
3. 暗褐色土 軽石はわずかでローム粒を含む。
4. 褐色土 軽石はわずかでローム粒を多く含む。
5. 暗褐色土 4層よりロームの混入が少なく黒色味強い。
6. 褐色土 ロームブロックの混入が多い。
7. 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。



C区10号土坑

1. 暗褐色土 しまりなく全体にボソボソしている。
2. 黒褐色土 白色軽石を多く含む。
3. 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。



第444図 C区8~10号土坑

C区 11号土坑 (第445図、PL99)

位置 55H-15

重複 重複する遺構はない。

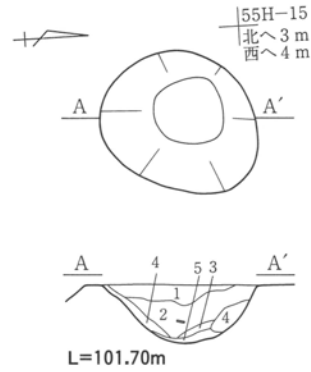
形状 平面形は円形あるいは長円形を基本としていたと考えられる。規模は長径1.29m短径1.12m、深さ0.46mを測る。断面形は北西部分を除いて緩やかな立ち上がりであった。

方位 N-32°-E

埋没土 黒褐色土、暗褐色土が堆積していた。

遺物 埋没土中から土師器破片14点、須恵器破片1点が出土したが資料化するに足るものではなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明である。



C区11号土坑

1. 黒褐色土 白色軽石、ローム粒を多く含む。
2. 黒褐色土 1層に類似するがより多くロームを含む。
3. 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
4. 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを多く含む。
5. 暗褐色土 4層に類似するがより多くローム小ブロックを含む。

C区 12号土坑 (第445図、PL99)

位置 55H-15

重複 重複する遺構はない。

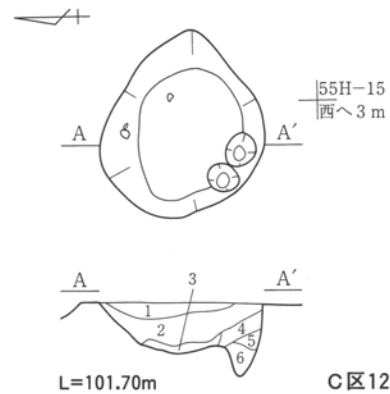
形状 平面形は長円形を基本とする不整形を呈する。規模は長径1.48m短径1.39m、深さ0.39mを測る。南壁際に長径約0.25mのピットが2本並んでいる。土層の観察からは同時存在あるいは本遺構の掘り込み以前に存在していたものと考えられる。

方位 N-85°-W

埋没土 上・中層に暗褐色土、下層に黒褐色土が堆積している。

遺物 埋没土中から土師器破片19点、須恵器破片1点、縄文土器破片1点を出土しているがいずれも資料化するに足るものではなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明である。



C区12号土坑

1. 暗褐色土 しまりなく全体にボソボソしている。
2. 暗褐色土 白色軽石、ロームブロックを多く含む。
3. 暗褐色土 ローム小ブロックを非常に多く含む。
4. 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
5. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
6. 暗褐色土 5層に類似するがより多くロームブロックを含む。

C区 13号土坑 (第445図、PL99)

位置 55G-15

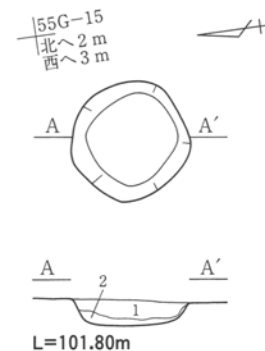
重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は円形を呈している。規模は長径0.92m短径0.91m、深さ0.31mを測る。

方位 N-39°-W

埋没土 黒褐色土を主体とし、下層に黄褐色土が堆積している。

所見 出土遺物は全くなく詳細な掘削時期は不明である。



C区13号土坑

1. 黒褐色土 ローム小ブロック、白色軽石を多く含む。
2. 黄褐色土 ロームを主体とし黒色土小ブロックを少量含む。

0 1:60 2m

第445図 C区11~13号土坑

C区 14号土坑 (第446図、PL100)

位置 55G-15

重複 重複する遺構はない。

形状 円形を基本とする不整形である。長径1.04m短径1.00m、深さ0.29mを測る。掘り込みは浅い鉢状を呈し、底面は狭小である。

方位 N-82°-W

埋没土 暗褐色土が堆積していた。

所見 出土遺物は全くなく詳細な掘削時期は不明である。

C区 15号土坑 (第446図、PL100)

位置 55H-14

重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は円形を基本としている。規模は長径0.91m短径0.89m、深さ0.26mを測る。壁面は外傾して立ち上がる。

方位 N-86°-W

埋没土 黒褐色土を主体とし、下層に黄褐色土が堆積している。

遺物 埋没土中から土師器破片5点が出土しているが資料化するに足るものではなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

C区 20号土坑 (第446図、PL100)

位置 54T-20

重複 南西部分に小ピットが重複している。

形状 平面形は長円形を呈する。規模は長径0.87m短径0.68m、深さ0.35mを測る。

方位 N-85°30'-W

埋没土 暗黄黒色土が全層にわたり堆積している。

遺物 埋没土中から土師器破片2点が出土しているが資料化するに足るものではなかった。

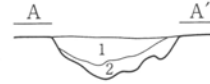
所見 詳細な掘削時期は不明である。

C区 21号土坑 (第446図、PL100)

位置 65A-1・2

重複 重複する遺構はない。

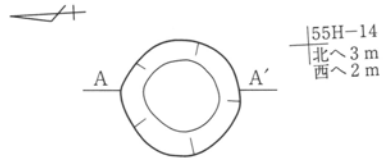
形状 平面形は円形を基本としていたと考えられる。長径0.73m短径0.70m、深さ0.26mを測る。壁面は西側の立ち上がりが緩やかである。



L=101.80m

C区14号土坑

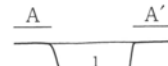
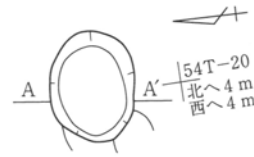
1. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。白色軽石を少量含む。
2. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。



L=101.70m

C区15号土坑

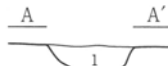
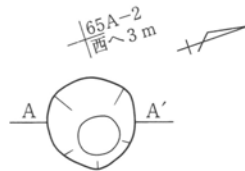
1. 黒褐色土 白色軽石粒とローム粒を少量含む。
2. 黄褐色土 ロームを多量に含む。



L=101.70m

C区20号土坑

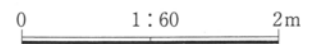
1. 暗黄色土 ローム粒を少量含む。軽石をごく少量含む。



L=101.80m

C区21号土坑

1. 暗黄色土 ローム粒を少量含む。



第446図 C区14・15・20・21号土坑

方位 N-80°-W

埋没土 暗黄黒色土が堆積していた。

所見 出土遺物は全くなく詳細な掘削時期は不明である。

C区 22号土坑 (第447図)

位置 64T-1

重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は円形を呈する。長径0.43m短径0.40m、深さ0.21mを測る。断面形は楕円状を呈している。

方位 N-85°30'-W

埋没土 暗黄黒色土が堆積している。

遺物 埋没土中から土師器破片3点が出土したが資料化するに足るものではなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

C区 23号土坑 (第447図、PL100)

位置 54T-20

重複 重複する遺構はない。

形状 上端の平面形は円形を呈しているが、底面は北西寄りに偏在している。東壁には深さ20cm程の中段がみられた。規模は長径0.55m短径0.52m、深さ0.33mを測る。

方位 N-68°-E

埋没土 灰黒色土、黄黒色土が堆積している。

所見 出土遺物は全くなく詳細な掘削時期は不明である。

C区 24号土坑 (第447図、PL100)

位置 64T-20

重複 重複する遺構はない。

形状 平面形は円形を基本とする不整形である。規模は長径0.60m短径0.51m、深さ0.29mを測る。

方位 N-62°-W

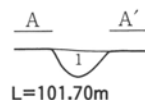
埋没土 黒色土が堆積している。

所見 出土遺物は全くなく詳細な掘削時期は不明である。

C区 27号土坑 (第447図)

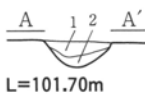
位置 54S-15・16

重複 34号住居と重複し、これより後出と考えら



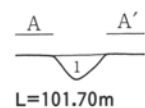
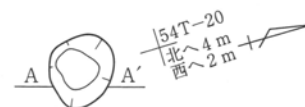
C区22号土坑

1. 暗黄色土 ローム粒を少量含む。



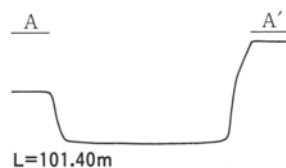
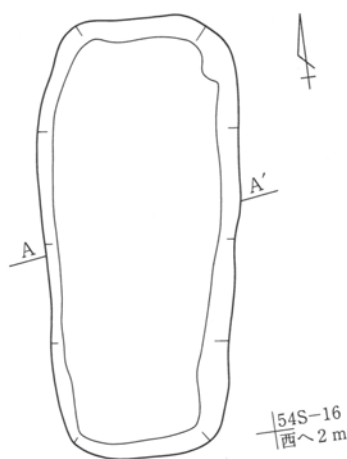
C区23号土坑

1. 灰黒色土 ローム粒を少量含む。
2. 黄黒色土 ロームを主体とし黒色土を含む。

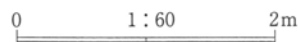


C区24号土坑

1. 黒色土 As-Cを少量含む。



C区27号土坑



第447図 C区22~24・27号土坑

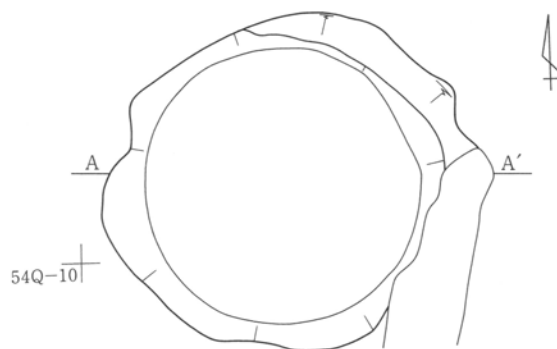
れる。

形状 平面形は隅丸の長方形である。規模は長軸3.46m短軸1.57m、深さ0.66mを測る。壁面は外傾弱く立ち上がり、底面はほぼ水平である。

方位 N-75°-E

埋没土 不明である。

所見 出土遺物は全くなく詳細な掘削時期は不明である。



C区 28号土坑 (第448図、PL100)

位置 54P-9・10

重複 東壁の一部にピットが重複する。

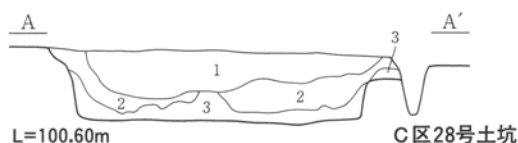
形状 下端の平面形は円形を呈している。規模は長径2.74m短径2.60m、深さ0.60mを測る。東壁の一部はピット、耕作痕と重複して乱れている。

面積 計測不能 **方位** N-82°-E

埋没土 上半に黒色土が、下半に暗褐色土、褐色土が堆積する。

遺物 埋没土中から土師器破片4点が出土したが資料化するに足るものではなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明である。



1. 黒色土 下位はやや褐色味をおびる。As-Cと考えられる軽石を混入する。
2. 暗褐色土 ローム粒を含む。ローム小ブロックも少量含む。
3. 褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。

C区 29号土坑 (第448図、PL100)

位置 55A-17

重複 重複する遺構はない。

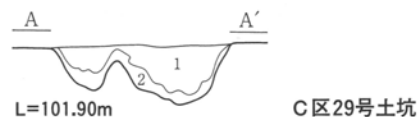
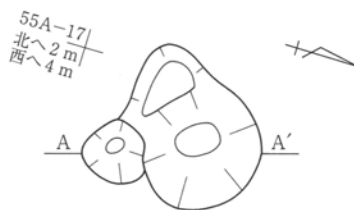
形状 平面形は複数の掘り込みが重複したような不整形を呈している。調査時の土層の観察から切り合い関係はなく、同一遺構として記載されている。規模は長径1.32m短径0.94m、深さ0.49mを測る。南西部分は舌状に張り出し、深さ0.14mの中段を有する。

方位 N-53°-E

埋没土 大半が黒褐色土、底面近くに暗褐色土が堆積している。

遺物 埋没土中から土師器破片27点が出土したが資料化するに足るものではなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

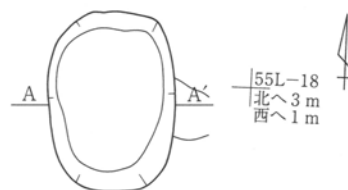


1. 黒褐色土 黒色味強い。As-Cを含む。
2. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。

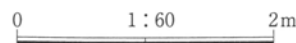
C区 30号土坑 (第448図、PL101)

位置 55L-18

重複 東壁の一部は攪乱状の掘り込みにより削平



1. 黒褐色土 黒色味強い。As-Cを含む。ローム粒を少し含む。
2. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。



第448図 C区28~30号土坑

を受けている。

形状 平面形は長円形に近い形状である。規模は長径が1.43m短径1.01m、深さ0.24mを測る。

方位 N-0°

埋没土 底面近くに暗褐色土が堆積している他は大半が黒褐色土である。

遺物 埋没土中から土師器破片28点、須恵器破片1点が出土したが資料化するに足るものではなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

C区 32号土坑 (第449図、PL101)

位置 65D-8・9

重複 重複する遺構はない。

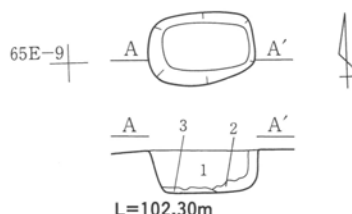
形状 平面形は隅丸長方形を呈していた。規模は長軸0.85m短軸0.59m、深さ0.31mを測る。

方位 N-88°-E

埋没土 底面近くに褐色土が堆積する他は大半が黒褐色土である。

遺物 埋没土中から土師器破片3点が出土したが資料化するに足るものではなかった。

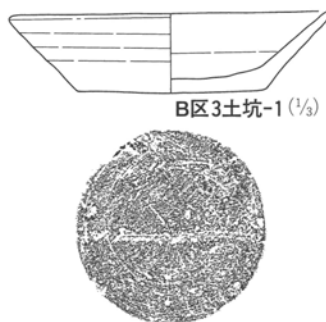
所見 詳細な掘削時期は不明である。



1. 黒褐色土 黒色味強い。上位にAs-Cを多く含む。
2. 暗褐色土 ローム粒を含む。下位に少しロームブロックが含まれる。As-Cを少し含む。
3. 褐色土 地山のロームブロックを主体としこれに黒褐色土が少し混じる。

0 1:60 2m

第449図 C区32号土坑



B区3土坑-1 (1/3)



B区3土坑-2



B区3土坑-3



B区3土坑-4



B区8土坑-1



B区8土坑-2



B区8土坑-3



B区8土坑-4



B区8土坑-5



B区8土坑-6



B区8土坑-7

第450図 B区3・8号土坑出土遺物

0 1:1 2cm

6 道状遺構

C区 道状遺構 (第451図、PL101・149)

重複 重複する遺構はない。

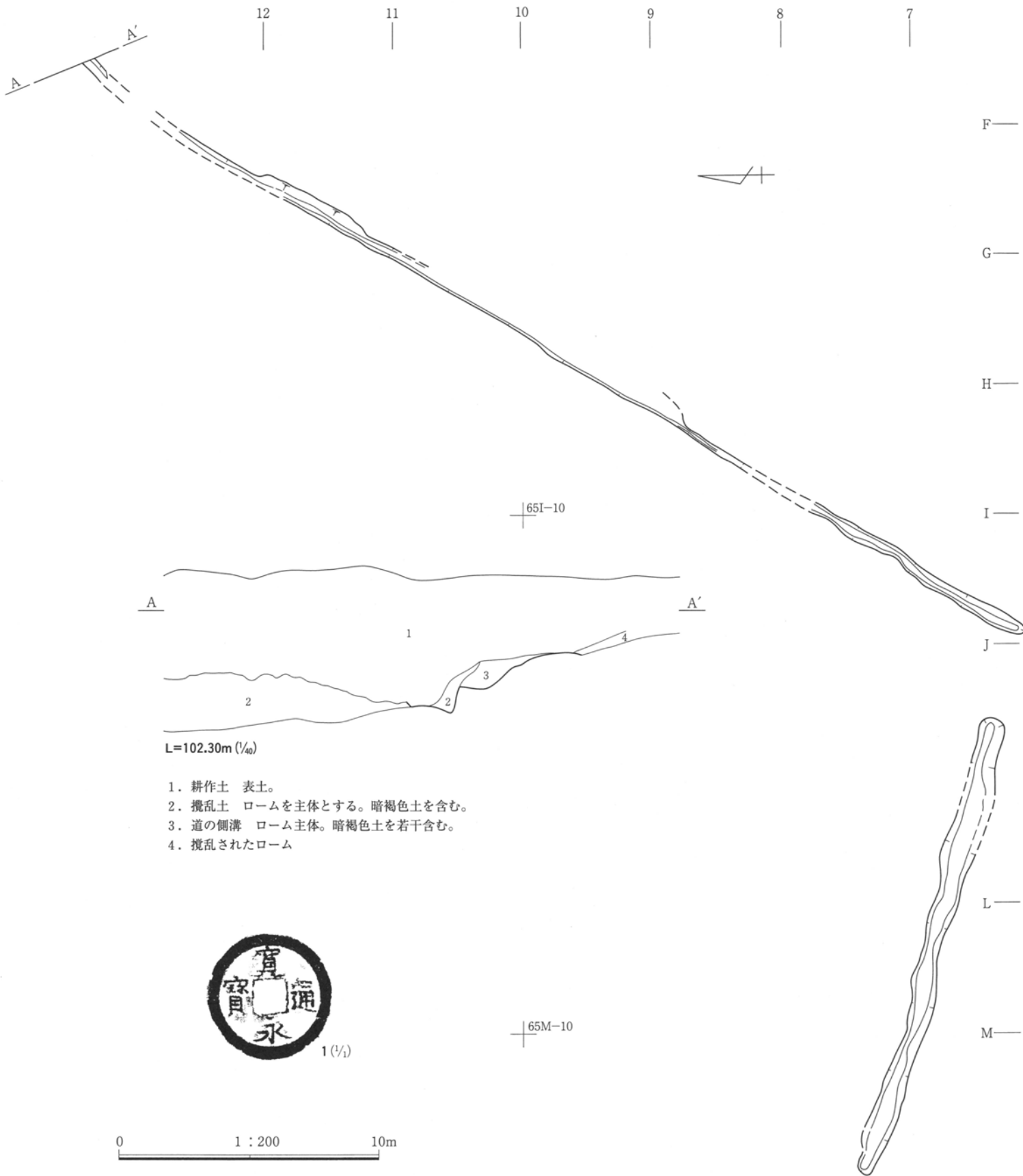
形状 調査時藤岡・大胡線から25mほど土取りのため既に表土が著しく削平されていたが、その掘削範囲の東端に沿って南北方向に硬化面が検出された。走行はN-29°-Eで、65T-6グリッドで方向をN-73°-Wに変えている。

埋没土 硬化面の上位には表土層が厚く堆積していた。

遺物 寛永通寶(1) 1枚が出土している。(観P100)

所見 調査者は台地縁辺部に土取り以前に道路状遺構が存在したと考えている。寛永通寶の出土から江戸時代に機能していた可能性が考えられるが、使用期間を断定するにはいたらない。

第4章 富田宮下遺跡台地部分の調査



第451図 C区道状遺構・出土遺物

7 遺構址

C区 3号址 (第452・453図、PL101)

位置 54T-9・10

重複 東側で平安時代47号住居と重複する。新旧関係は確認できなかった。北側では風倒木痕と重複、中央部分が壊されている。

形状 他遺構と重複する部分があるが、南北を長軸とする隅丸長方形を呈すると推定される。規模は南北の残存が長軸3.53m、東西の残存が2.88mである。遺構確認面から19cm程掘り込んで底面となる。

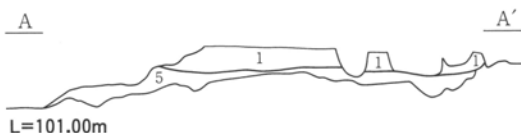
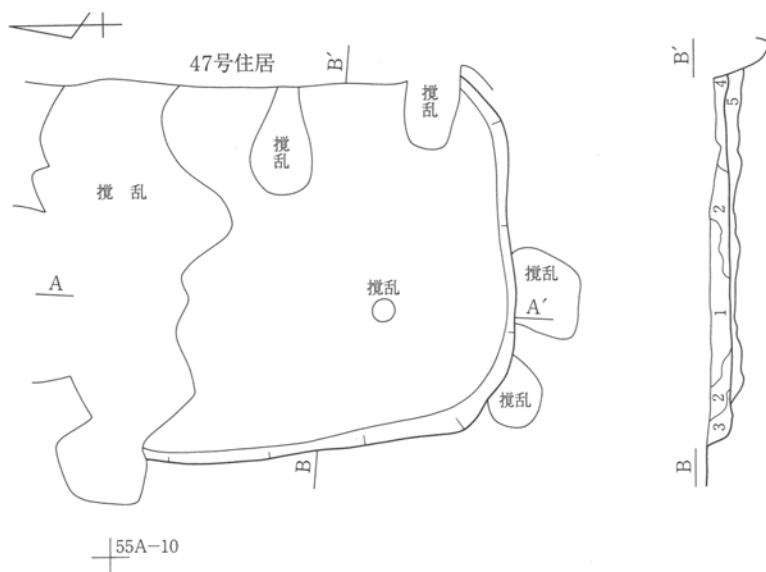
底面はほとんど平坦であった。

面積 計測不能 方位 N-1°-W

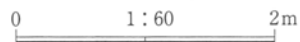
埋没土 底面直上層はローム粒・ブロックを含む暗褐色土で埋まっていた。

遺物 埋没土中から少量出土しただけである。杯(1・2)、須恵器甕(3)の破片を資料化した。(観P101)

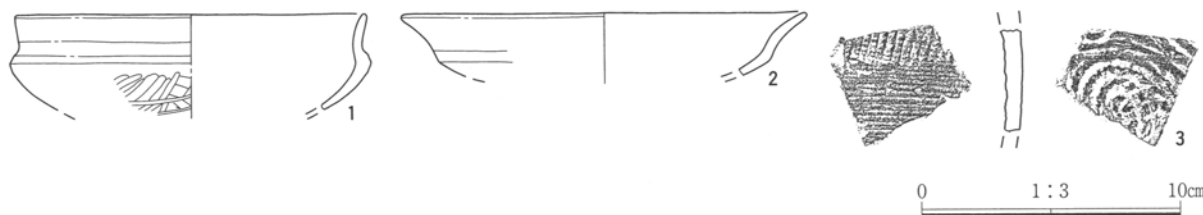
所見 竈をはじめとした堅穴住居のもつ諸施設は検出されなかった。出土遺物は古墳時代後期のものであるが遺構の築造時期の断定は困難である。



- 1. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
- 2. 黒褐色土 ローム粒・ブロックを含む。
- 3. 暗褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。しまり弱い。
- 4. 黒褐色土 混入物は少ない。ローム粒・ブロックを少し含む。
- 5. 黒褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。全体に軟質でしまり弱い。



第452図 C区3号址



第453図 C区3号址出土遺物

8 遺構外出土遺物

(第454~459図、P L 149~151)

ここでは遺構外から出土した遺物について報告する。

1~13は土器・陶磁器・土製品である。

1~4は、土師質土器皿である。1は灯明皿で、底面中央に焼成後の穿孔が施されている。

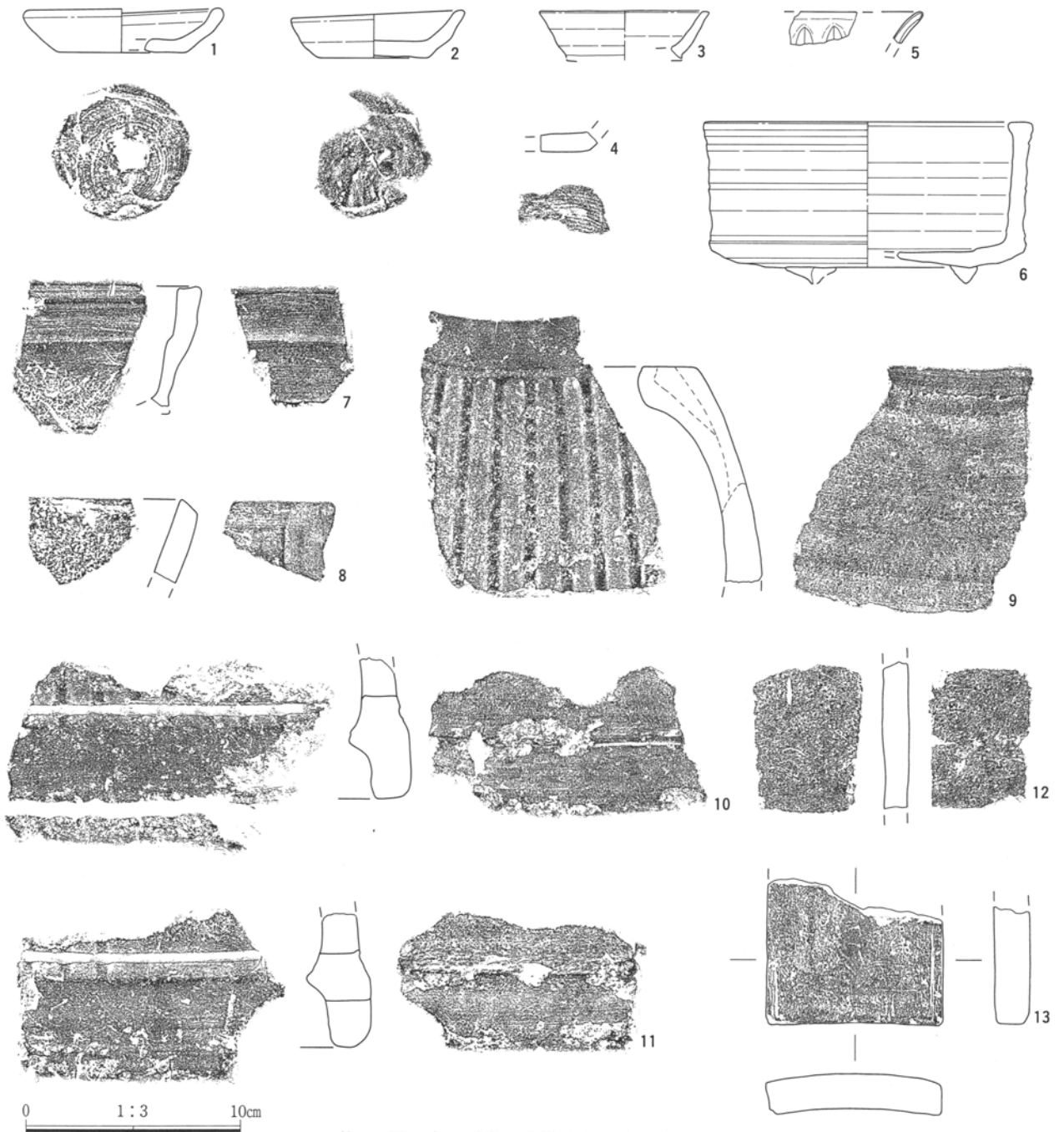
5は青磁碗の破片である。6は施釉陶器の香炉、

12は陶器の甕である。

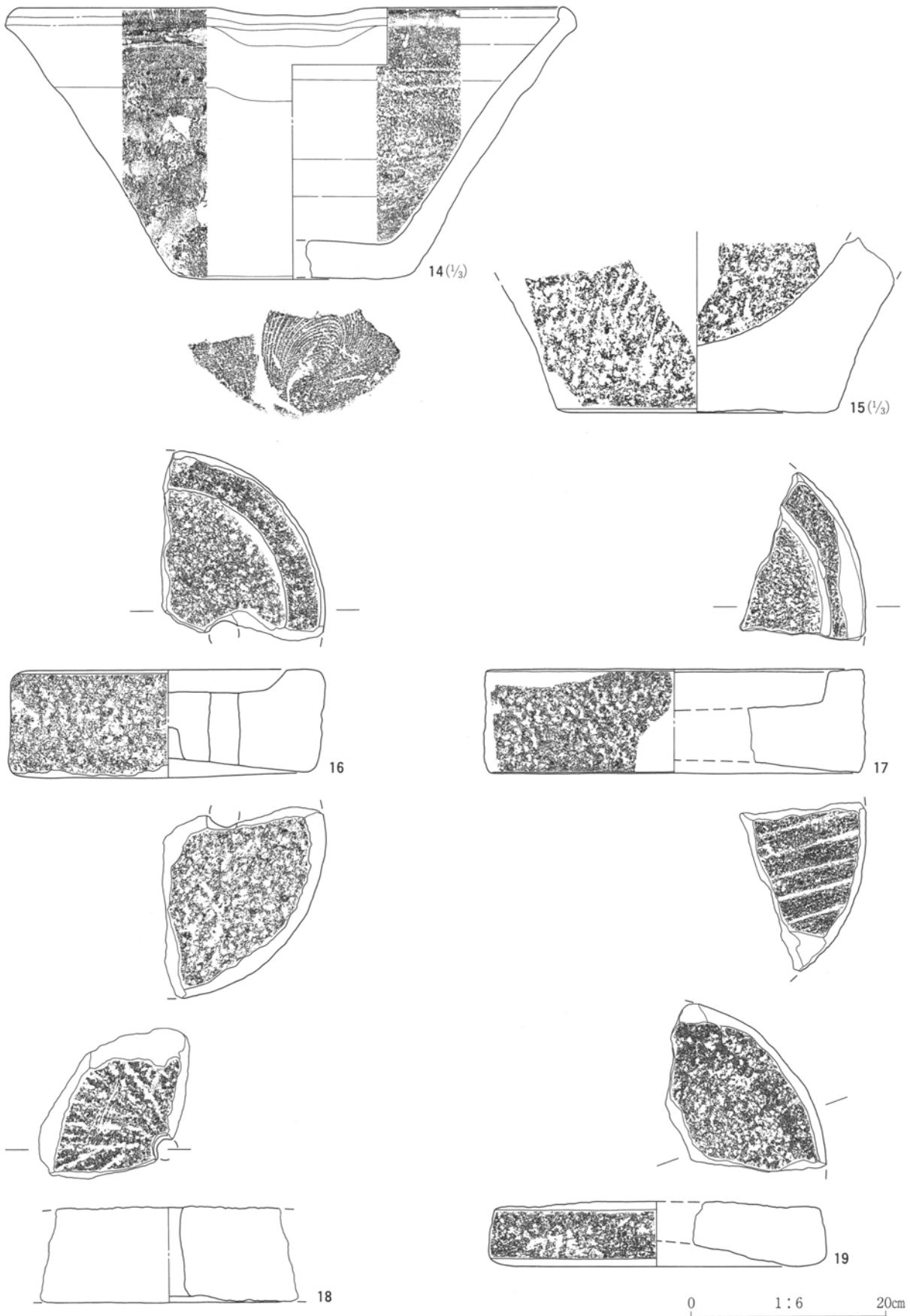
7~11と14は軟質陶器である。7は焙烙の破片である。8~11は火鉢の破片で9~11は同一個体の大型品である。10・11は脚台部の破片である。14は播鉢で、口縁部に片口が見られる。

13は熨斗瓦の破片である。

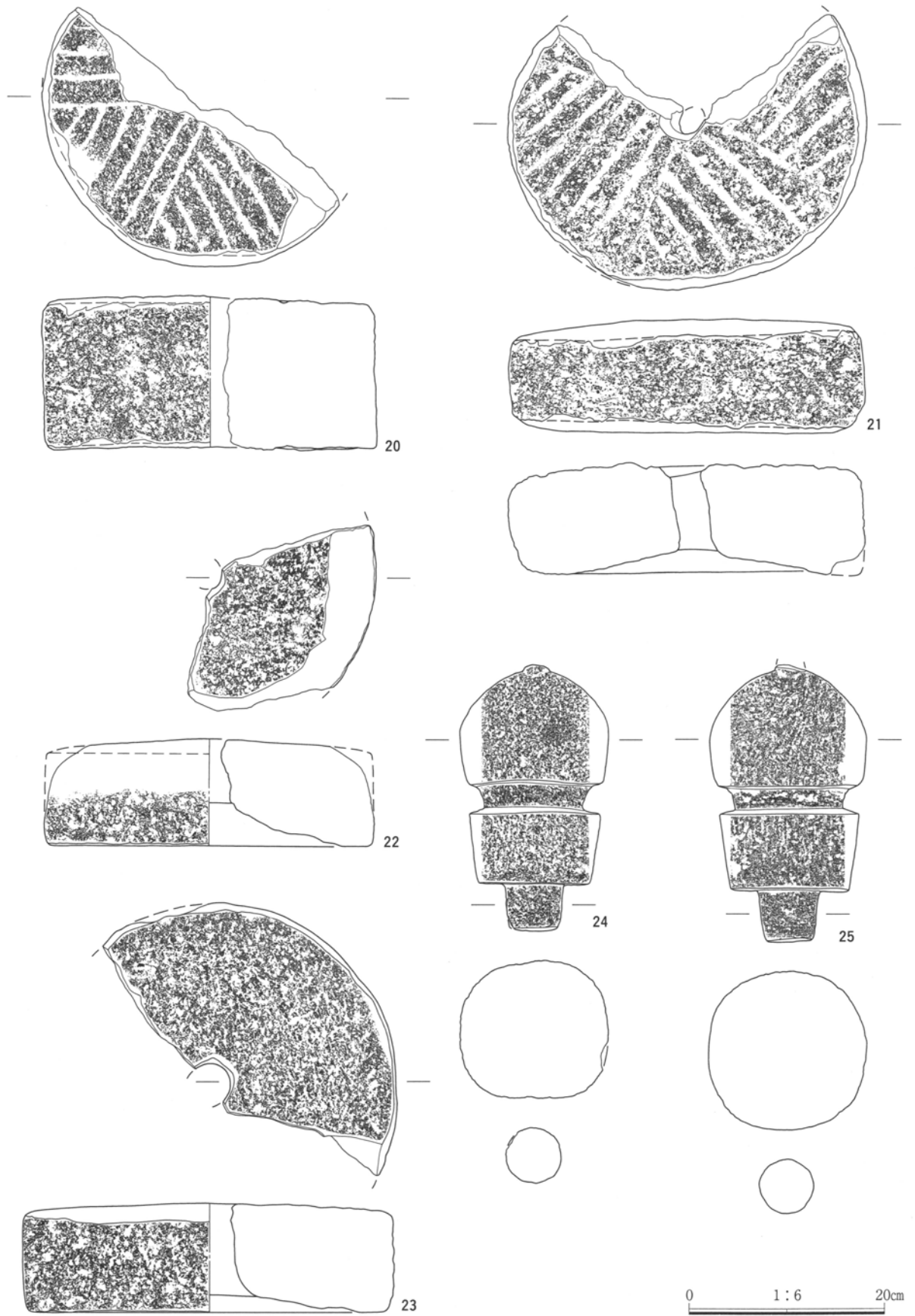
15~41は石製品である。15は播鉢である。16~23は石臼である。いずれも粉ひき用で、16・17が上臼



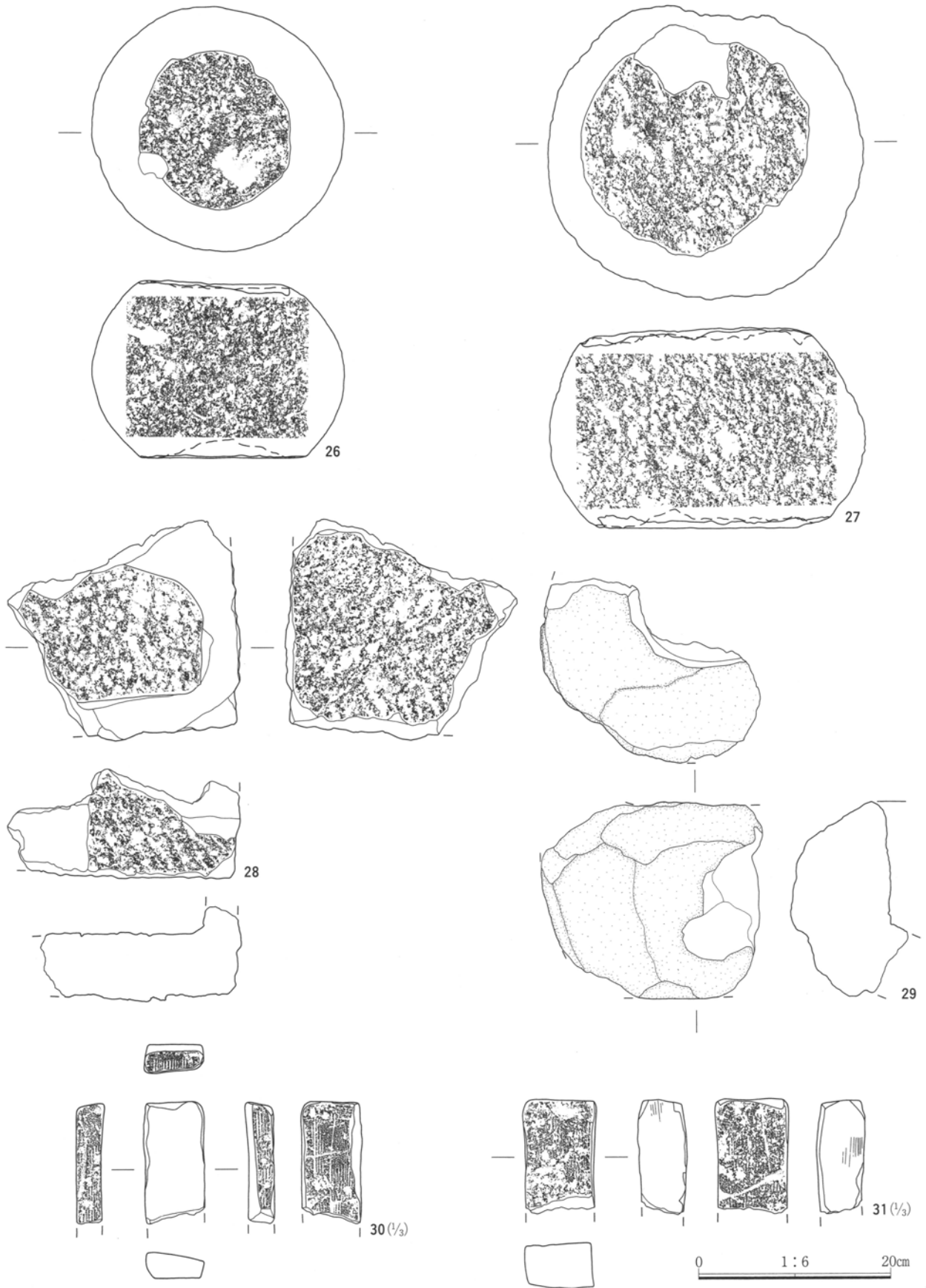
第454図 中・近世の遺構外出土遺物(1)



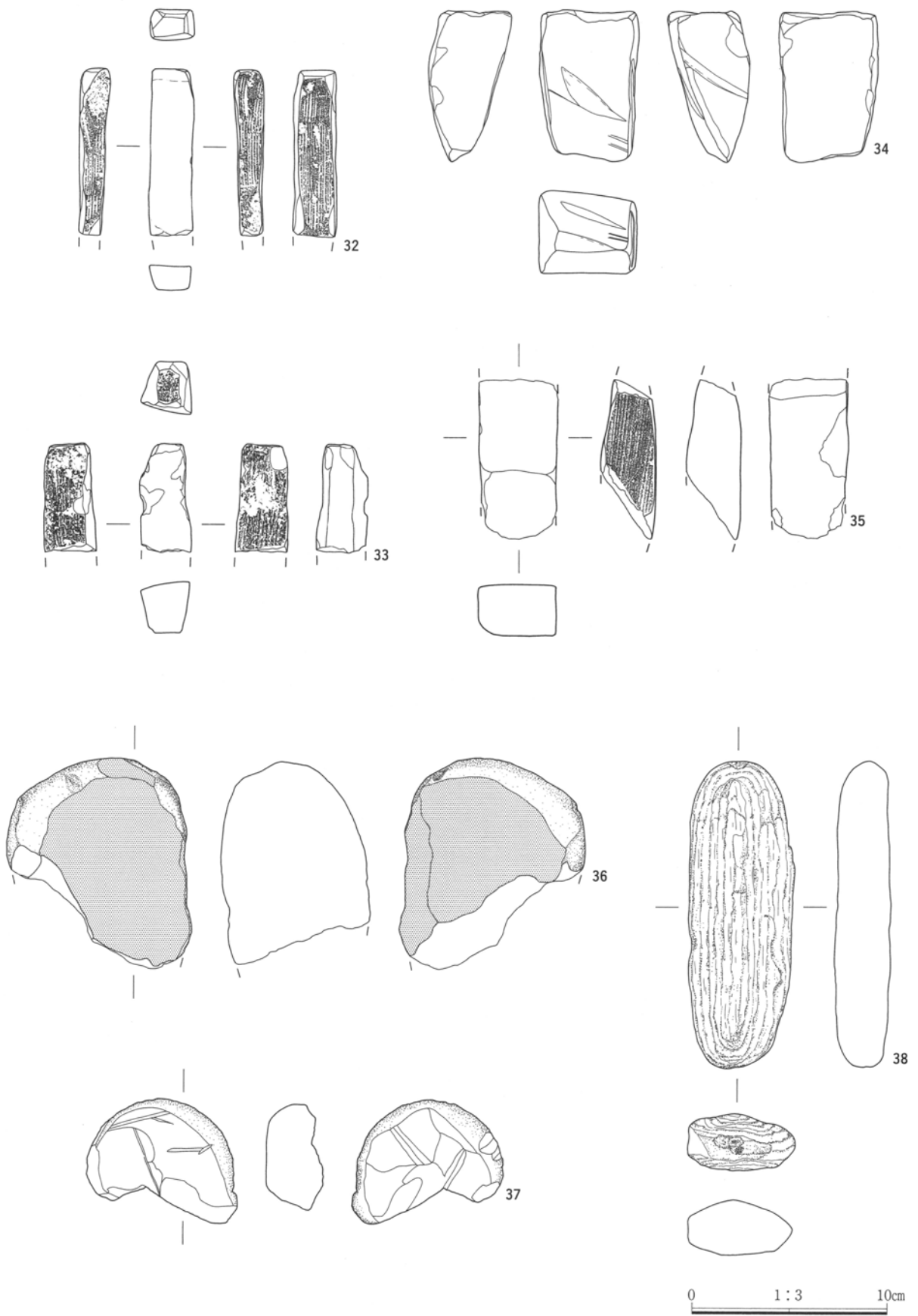
第455図 中・近世の遺構外出土遺物(2)



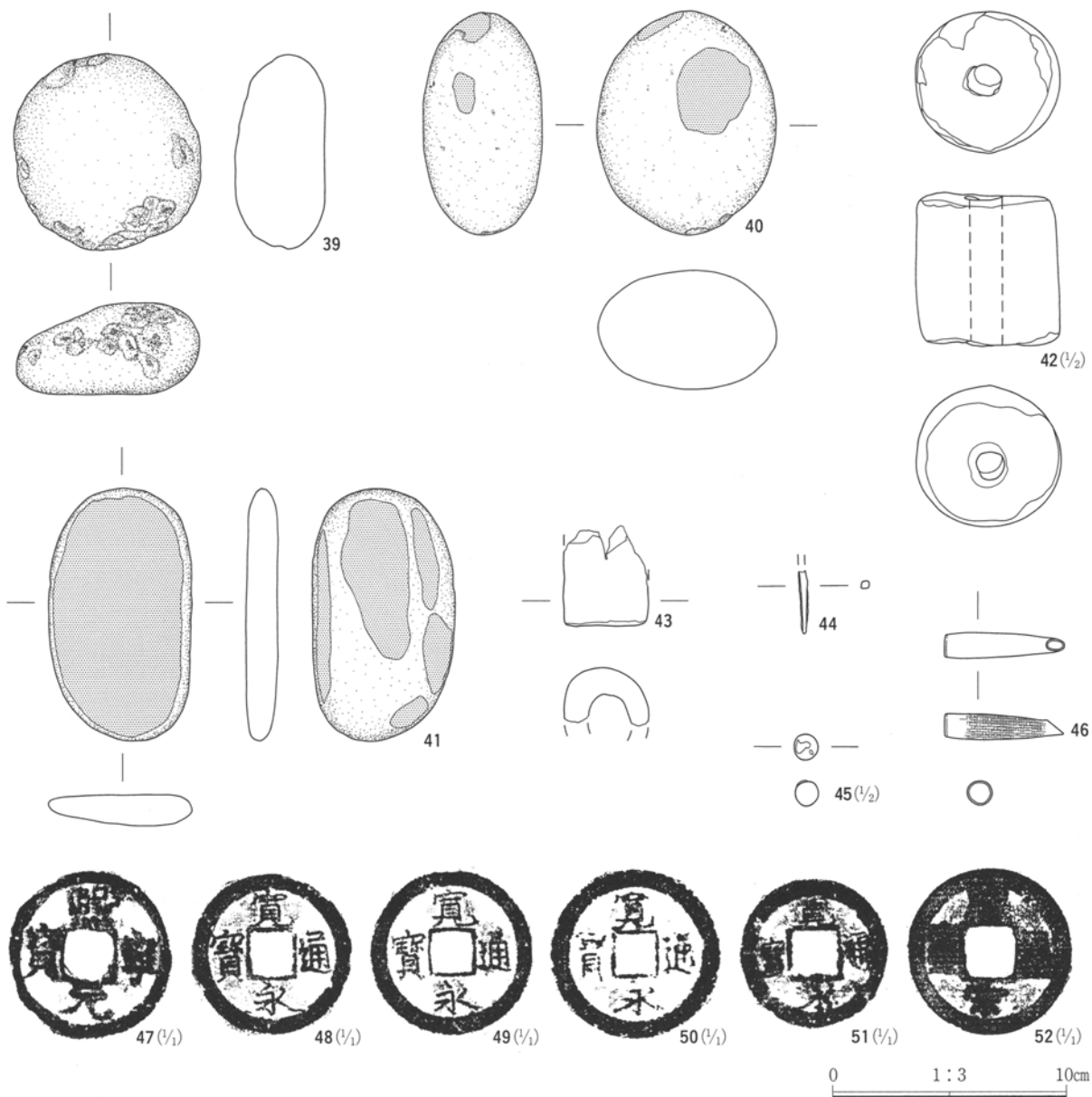
第456図 中・近世の遺構外出土遺物(3)



第457図 中・近世の遺構外出土遺物(4)



第458図 中・近世の遺構外出土遺物(5)



第459図 中・近世の遺構外出土遺物(6)

で、16には供給孔の一部が残存する。18以下は下臼である。20が厚さ19.7cmである他は6.8~11.8cmと薄い。使用による磨耗のためと考えられる。

24~27は五輪塔である。24・25は空風輪、26・27は水輪である。28・29は器種・用途が不明である。

30~37は砥石である。30~33は短冊形を呈している。34は石材が砂岩で形状も楔形を呈し、他の砥石と異なる特徴を有している。36・37は自然礫を利用した砥石である。

38~41は敲石・磨石である。時期不明であるが縄文時代の所産である可能性もある。

42は用途不明の土製品である。中央に焼成前の穿孔が貫通している。

44以下は金属製品である。45は非鉄製の小球で鉄砲玉の可能性が考えられる。46は煙管の吸口である。47~52は古銭である。47は熙寧元寶、48~51は寛永通寶、52は皇宋通寶である。(観P 101~105)

第5章 自然科学分析

第1節 富田細田遺跡の土層とテフラ

株式会社古環境研究所

1 はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、堆積年代の不明な土層や水田遺構が検出された富田細田遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層や水田遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、C区西壁およびC区南壁の2地点である。

2 土層の層序

(1) C区西壁

C区西壁では、下位より灰色がかった褐色土（層厚10cm以上）、黒灰色土（層厚13cm）、黄色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径7mm）、黄灰色軽石混じり暗灰色土（層厚11cm、軽石の最大径7mm）、灰色砂層（層厚2cm）、白色軽石混じり灰色土（層厚6cm、軽石の最大径12mm）、白色軽石混じり黄灰色砂質土（層厚14cm、軽石の最大径13mm）、黄灰色砂層（層厚2cm）、暗褐色土（層厚4cm）、黒褐色土（層厚0.5cm）、成層したテフラ層（層厚10.8cm）、砂混じりで灰色がかった褐色土（層厚24cm）、灰褐色土（層厚5cm）、黄色がかった灰色土（層厚9cm）が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より青灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、橙褐色粗粒火山灰層（層厚1cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、桃色細粒火山灰層（層厚3cm）からなる。このテフラ層は、その層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1972)に同定される。発掘調査では、白色軽石混じり灰色土の上面およびAs-Bの直下から水田遺構が検出されている。

(2) C区南壁

C区南壁では、下位より灰色砂層（層厚6cm以上）、暗灰色砂質土（層厚5cm）、黄灰色軽石層（層厚6cm、軽石の最大径7mm）、暗褐色土（層厚2cm）、黄灰色砂層（層厚3cm）、褐色粘質土（層厚4cm）、灰色砂層（層厚0.3cm）、褐色土（層厚0.8cm）、淘汰の良い灰色砂層（層厚8cm）、礫混じり灰色砂層（層厚19cm、礫の最大径5mm）、灰褐色土（層厚6cm）、白色軽石混じり褐灰色土（層厚11cm、軽石の最大径14mm）、灰色砂層（層厚9cm）、砂混じり灰褐色土（層厚5cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、砂混じり灰褐色土（層厚28cm）、白色軽石混じり灰褐色土（層厚17cm、軽石の最大径3mm）、灰褐色表土（層厚19cm）が認められる。発掘調査では、灰色粗粒火山灰層の直下から水田遺構が検出されている。

3 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

C区西壁およびC区南壁の2地点において、基本的に5cmごとに採取された土壌試料のうち21点について、テフラ検出分析を行い、テフラ粒子の特徴およびテフラの降灰層準の把握を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第1表に示す。C区西壁では、試料7の軽石層にスポンジ状に比較的よく発泡した灰白色軽石（最大径5.8mm）がとくに多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。また試料4から上位の試料で、斑晶に斜方輝石や角閃石をもつ白色軽石（最大径5.1mm）が連続的に検出される。軽石の発泡はさほど良くない。とくに試料4にこの軽石が多く含まれていることから、試料4付近にその降灰層準があると考えられる。

C区南壁でも、試料10の軽石層にスポンジ状に比較的よく発泡した灰白色軽石（最大径5.1mm）がとくに多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。このことから、この軽石層は、C区西壁の試料7の軽石層に対比される。また、試料6には斑晶に斜方輝石や角閃石をもつ白色軽石（最大径4.1mm）が連続的に検出される。軽石の発泡はさほど良くない。とくに試料6にこの軽石が多く含まれていることから、試料6付近にその降灰層準があると考えられる。試料2の火山灰層には、比較的よく発泡した淡褐色軽石（最大径4.3mm）がとくに多く含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。これらの特徴から、試料2の火山灰層はAs-Bに同定される。試料1には、As-Bに由来する軽石のほかに、光沢をもつ白色軽石（最大径1.8mm）が少量認められた。この軽石は、その特徴から1783年(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に由来すると考えられる。

4 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

C区西壁の試料7の軽石層および試料4付近に降灰層準があると考えられたテフラと、示標テフラとの同定を行うために、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)により屈折率の測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。試料7に含まれる火山ガラス(n)と斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.513-1.519と1.706-1.711である。層相、軽石の岩相、重鉱物の組合せ、火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、このテフラ層は4世紀中葉¹⁾に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。また、試料4に含まれる斜方輝石(γ)と角閃石(n_2)の屈折率は、各々1.707-1.711と1.671-1.677である。この試料に含まれるテフラは、軽石の岩相、重鉱物の組合せ、斜方輝石や角閃石の屈折率などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来すると考えられる。

以上のことから、C区西壁付近で検出されている下位の水田面の層位は、Hr-FAより上位でAs-Bの下位にあると考えられる。

5 小結

富田細田遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間C軽石 (As-C, 4世紀中葉¹⁾)、榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ (As-B, 1108年)、浅間A軽石 (As-A, 1783年)などを検出することができた。本遺跡で検出された2層準の水田遺構の層位は、下位よりHr-FAの上位でAs-Bの下位およびAs-B直下にあると考えられる。

第18表 富田細田遺跡におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
C区西壁	1	++	灰白>白	30,22
	2	++	灰白>白	20,21
	3	++	灰白, 白	19,41
	4	+++	白>灰白	5.1,1.4
	5	++	灰白	3.2
	6	+++	灰白	5.1
	7	++++	灰白	5.8
	8	+	灰白	3.0
	9	+	白	1.0
C区南壁	1	++	淡褐>白	4.9,1.8
	2	++++	淡褐	4.3
	3	+	灰白	1.8
	4	+++	白	2.9
	5	+	灰白	2.0
	6	++	白>灰白	4.1,2.8
	7	+	灰白	2.1
	8	++	灰白	2.1
	9	+++	灰白	3.2
	10	++++	灰白	5.1
	11	+	灰白	1.3
	12	+	白	0.9

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない。最大径の単位は, mm。

第19表 富田細田遺跡における屈折率測定結果

地点	試料	gl (n)	重鉱物	opx (γ)	ho (n ₂)
C区西壁	4	-	opx>ho	1.707-1.711	1.671-1.677
	7	1.513-1.519	opx>cpx	1.706-1.711	-

gl: 火山ガラス, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石。屈折率の測定は, 温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) による。

註

1 西暦300年前後とする見方もある (友廣, 1988など)

文献

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.

新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.

新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.

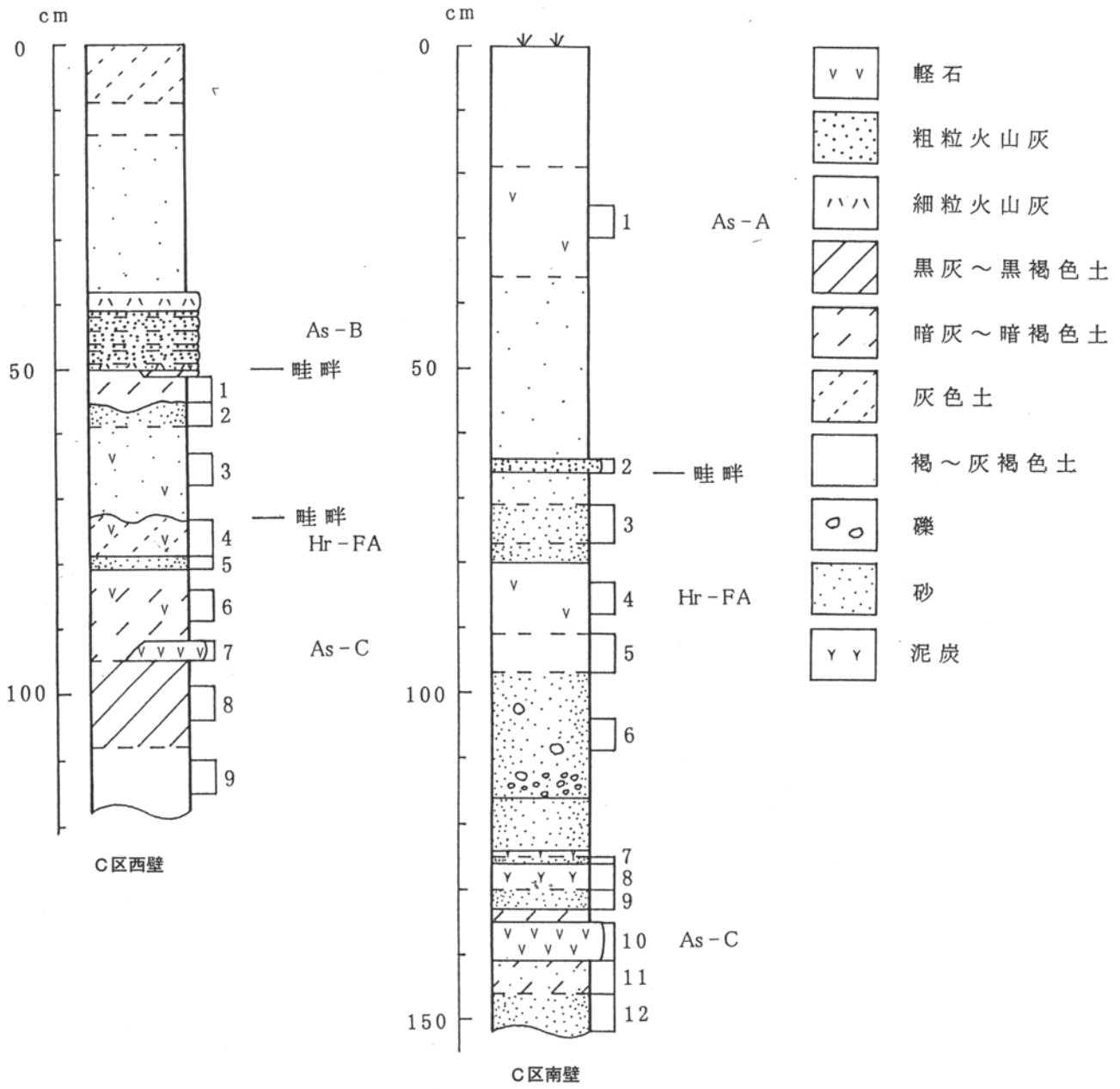
荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質。地団研専報, no.14, p.1-45.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, p.276

坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.

友廣哲也 (1988) 古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.



第460図 C区壁面の土層柱状図

第2節 富田細田遺跡におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である (藤原・杉山, 1984)。

2 試料

試料は、C区西壁およびC区南壁の2地点から採取された計17点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヒエ属 (ヒエ) は8.40、ヨシ属 (ヨシ) は6.41、ススキ属 (ススキ) は1.24、タケ亜科は0.48である。

4 分析結果

水田跡 (稲作跡) の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5 考察

(1) 水田跡の検討

水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、密度が

3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) C区西壁

As-B直下層（試料1）からAs-Cの下層（試料8）までの層準について分析を行った。その結果、As-B直下層（試料1）からHr-FA直下層（試料6）までの各層からイネが検出された。このうち、Hr-FA混層（畦畔検出、試料5）では密度が6,000個/gと高い値であり、As-Bの下層（試料2）からHr-FAの上層（試料4）にかけても、3,800~4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-B直下（畦畔検出、試料1）では、密度が1,500個/gと比較的低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

Hr-FA直下層（試料6）では、密度が800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) C区南壁

As-B直下層（試料1）からAs-Cの下層（試料8）までの層準について分析を行った。その結果、As-B直下層（試料1）からHr-FAの下層（試料4）までの各層からイネが検出された。このうち、Hr-FA混層（試料5）では密度が6,800個/gと高い値である。したがって、同層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-B直下層（畦畔検出、試料1）では密度が2,200個/gと比較的低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。Hr-FA直下層（試料3）やその下層（試料4）では、密度が1,000個/g未満と低い値である。

(2) ヒエ属型について

C区西壁のAs-B直下層（試料1）、Hr-FA直下層（試料6）、As-Cの下層（試料8）では、ヒエ属型が検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、これらを識別することは困難である（杉山ほか, 1988）。また、密度も1,000個/g前後と低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

(3) 堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。

おもな分類群の推定生産量によると、Hr-FA下層より上位ではヨシ属が優勢であり、とくにC区西壁のAs-B直下（試料1）ではヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。また、As-Cの上下層ではタケ亜科が比較的多くなっていることが分かる。

以上のことから、As-Cの上下層の堆積当時は、タケ亜科が生育するような比較的乾燥した堆積環境であったと考えられるが、Hr-FA下層からAs-B直下層にかけてはヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。

第5章 自然科学分析

なお、As-Bの降灰直前には何らかの原因によって水田が放棄され、ヨシ属が繁茂する湿地の状況になっていた可能性が考えられる。このような状況は前橋市周辺などでも一般に認められており、比較的広い範囲に及ぶ現象として注目される。

6 まとめ

プラント・オパール分析の結果、畦畔が検出された榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）混層からはイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、畦畔が検出された浅間Bテフラ（As-B, 1108年）直下層でも比較的少量ながらイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと判断された。さらに、As-Bの下層やHr-FAの下層などでも、稲作が行われていた可能性が認められた。

文献

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—。考古学と自然科学, 20, p.81-92.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

第20表 富田細田遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料								
		C区・西壁								
		1	2	3	4	5	5'	6	7	8
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	15	38	45	45	60	15	8		
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type	8						15		8
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	106	53		30	15	8	46	23	8
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	15		8	15	30		8	8	31
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	23	53	53	52	67	75	53	105	115

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.44	1.12	1.33	1.32	1.75	0.44	0.22		
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type	0.64						1.28		0.64
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	6.69	3.35		1.89	0.94	0.47	2.87	1.42	0.48
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.19		0.09	0.19	0.37		0.09	0.09	0.38
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.11	0.25	0.25	0.25	0.32	0.36	0.26	0.50	0.55

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

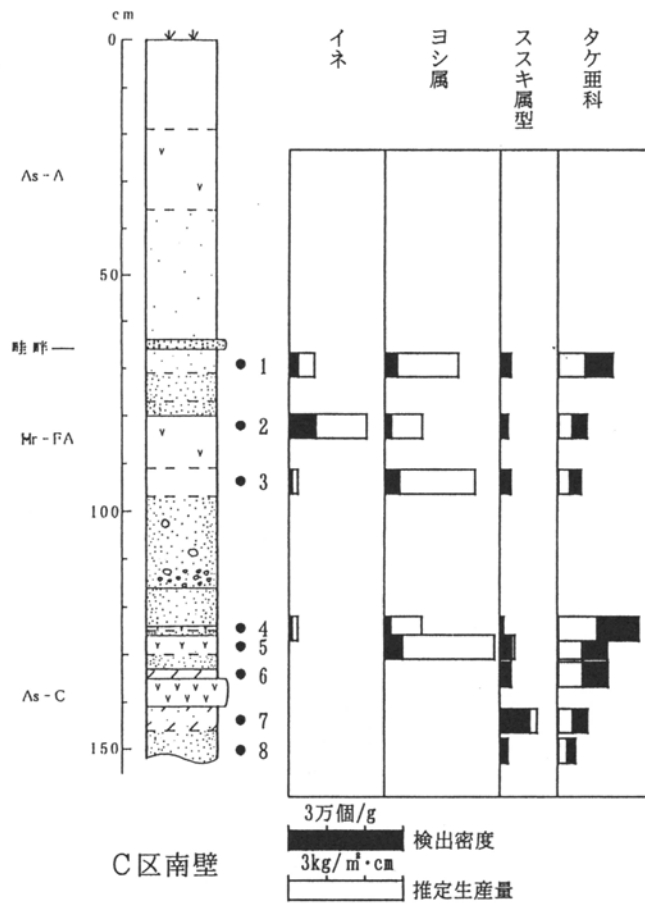
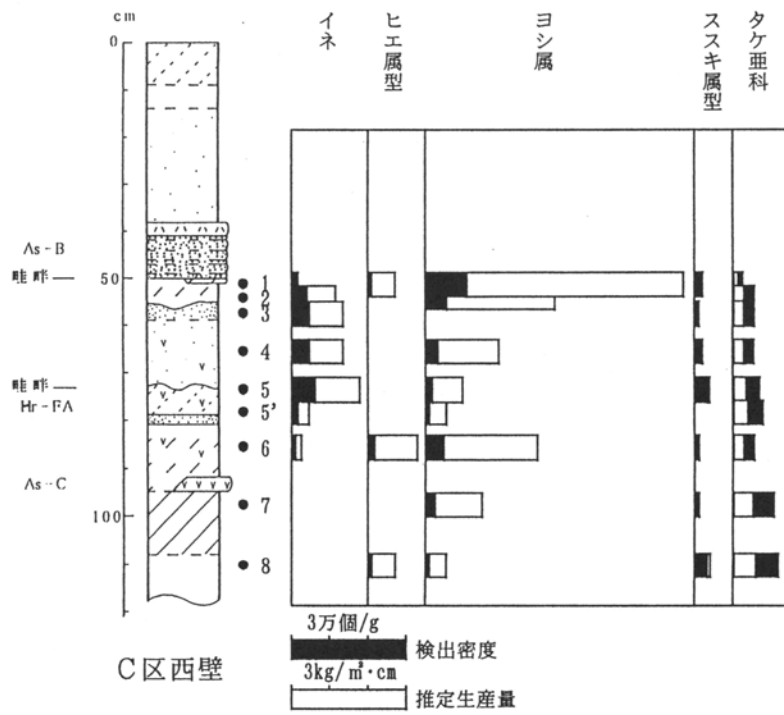
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料								
		C区・西壁								
		1	2	3	4	5	6	7	8	
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	22	68	7	7					
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type	30	15	37	15	45				
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	22	15	22	7	30	23	76	15	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	142	75	60	209	128	129	76	45	

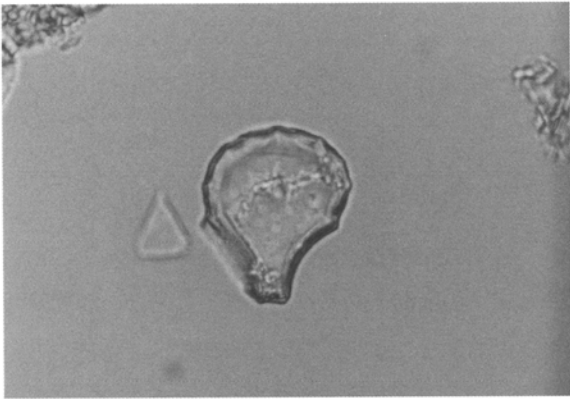
推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.66	1.99	0.22	0.22					
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type	1.89	0.95	2.37	0.94	2.84				
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.28	0.19	0.28	0.09	0.37	0.28	0.94	0.19	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.68	0.36	0.29	1.00	0.61	0.62	0.36	0.22	

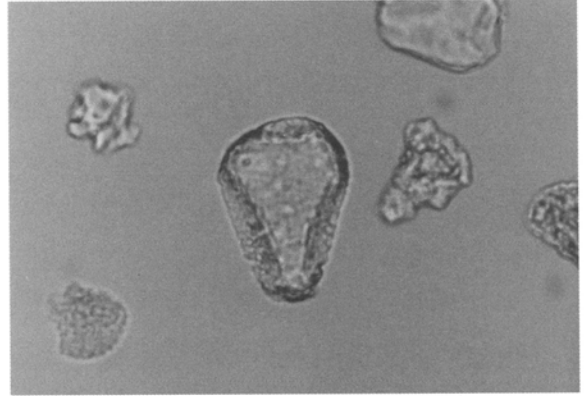
※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



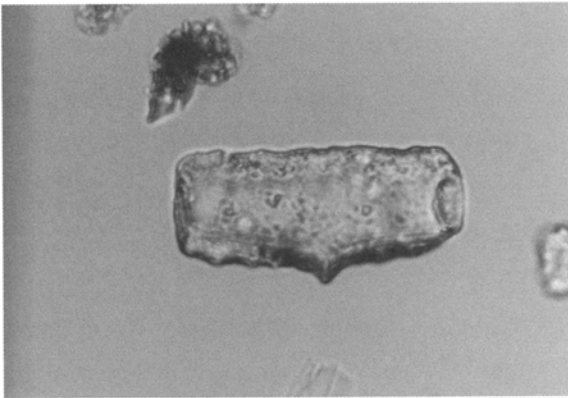
第461図 富田細田遺跡におけるプラント・オパール分析結果



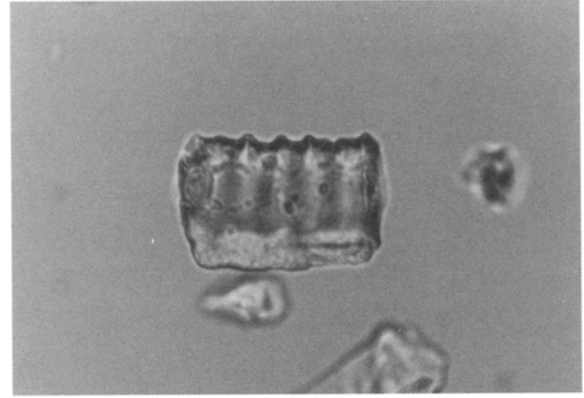
1



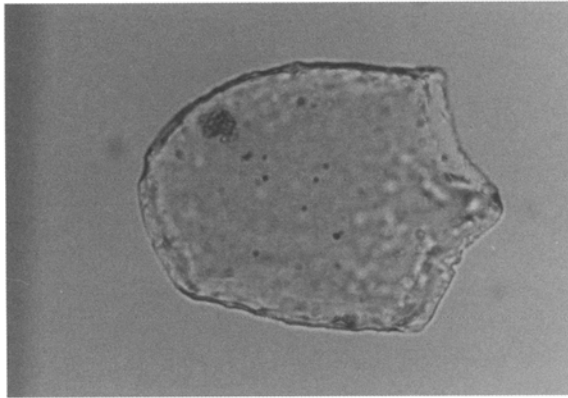
4



2



5



3



6

0 50 100 μ m

No	分類群	地点	試料名
1	イネ	C区南壁	1
2	キビ族型	C区南壁	4
3	ヨシ属	C区南壁	6
4	ススキ属型	C区南壁	4
5	ネザサ節型	C区南壁	2
6	マダケ属型	C区南壁	1

図版2 植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真（倍率はすべて400倍）

第3節 富田宮下遺跡の土層とテフラ

株式会社古環境研究所

1 はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層や噴砂が検出された富田宮下遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ分析や屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、C区76住居セクションH-H'、C区54S-11グリッド、C区55G-13グリッドの3地点である。

2 土層層序

(1) C区76住居セクションH-H'

C区76住居セクションH-H'では、下位より若干赤みをおびた褐色土（層厚16cm以上）、成層したテフラ層（層厚27cm）、褐色土（層厚49cm）、若干色調が暗い灰褐色土（層厚15cm）、灰色石質岩片混じり暗灰褐色土（層厚11cm、石質岩片の最大径4mm）、若干色調が暗い灰褐色土（層厚35cm）、褐色土（層厚18cm）、橙色軽石に富む褐色砂質土（層厚12cm、軽石の最大径3mm）、橙色軽石層（層厚9cm、軽石の最大径4mm）、褐色砂質土（層厚11cm）が認められる（図1）。

これらのうち成層したテフラ層は、下位より風化が進んだ黄白色軽石層（層厚3cm）、風化がやや進んだ黄白色軽石層（層厚12cm）、黄色軽石層（層厚12cm、軽石の最大径27mm、石質岩片の最大径12mm）からなる。

このテフラ層は、その層相から約4.1～4.4万年前¹⁾に榛名火山から噴出した榛名八崎軽石（Hr-HP、新井、1962、鈴木、1976、大島、1986）に同定される。この地点では、これらのうち最下部付近から発達した噴砂が認められる。噴砂の下部は黄白色軽石（最大径13mm）、中部は黄白色軽石（最大径12mm）を含む黄灰色土、上部は黒褐色土から構成されている。

(2) C区54S-11グリッド

C区54S-11グリッドでは、噴砂（流動化現象）の発生部をよく観察することができた（図2）。ここでは、成層したテフラ層は、下位より風化が進んだ黄白色軽石層（層厚3cm、石質岩片の最大径9mm）、風化が進んだ褐色細粒部（層厚2cm）、風化が進んだ黄白色軽石層（層厚9cm、石質岩片の最大径14mm）、黄色軽石層（層厚8cm、軽石の最大径33mm、石質岩片の最大径12mm）からなる。このテフラ層は、その層相からHr-HPに同定される。流動化現象は、これらのうち風化が進んだ褐色細粒部で発生しているようにみえる。

(3) C区55G-13グリッド

C区55G-13グリッドでは、下位より灰色石質岩片混で若干色調が暗い灰褐色土（層厚27cm、石質岩片の最大径11mm）、褐色土（層厚4cm）、橙色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径5mm、石質岩片の最大径2mm）、褐色土（層厚15cm）、暗灰色粗粒火山灰混じり橙色軽石層（層厚16cm、軽石の最大径4mm）が認められる（図3）。

3 テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

テフラの特徴とその降灰層準を把握するために、C区76住居セクションH-H'において採取された試料8点

を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。分析対象となった試料に、軽石は認められなかった。火山ガラスとしては、試料5や試料3に無色透明のバブル型ガラスが少量ずつ認められた。

4 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

示標テフラとの同定を行うために、また噴砂構成物の起源を明らかにするために、6点の試料を対象に温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。C区76号住居セクションH-H'の試料15には、重鉱物として、普通角閃石、カミングトン閃石、斜方輝石がごく少量ずつ含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.708-1.711である。また普通角閃石(n_2)とカミングトン閃石(n_2)の屈折率は、各々1.672-1.677と1.660-1.663である。試料5に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.499-1.501である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、普通角閃石がごく少量含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.700-1.709である。この試料には、ほかに高温型石英も認められる。C区55G-13グリッドの試料1のテフラ層には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.701-1.712である。ほかに、この試料には高温型石英が認められる。

一方、噴砂を構成するC区76住居セクションH-H'の試料18に含まれる重鉱物としては、斜方輝石や普通角閃石が認められる。斜方輝石(γ)と普通角閃石(n_2)の屈折率は、順に1.707-1.711と1.672-1.677である。試料17に含まれる重鉱物としては、斜方輝石や普通角閃石が認められる。斜方輝石(γ)と普通角閃石(n_2)の屈折率は、順に1.708-1.711と1.671-1.677である。またC区54S-11グリッドの試料1に含まれる重鉱物は、斜方輝石や普通角閃石である。これらの屈折率は、順に1.708-1.711と1.671-1.677である。

5 考察

C区76住居セクションH-H'の試料15に含まれるテフラは、その特徴から約2.5~3万年前に榛名火山から噴出した榛名箱田テフラ(Hr-HA, 早田, 1996)と考えられる。試料5に含まれる無色透明のバブル型ガラスは、その特徴から約2.4~2.5万年前¹⁾に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995)に由来すると考えられる。この試料には、高温型石英も認められることや斜方輝石の屈折率などから、ほかに約1.9~2.4万年前¹⁾に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 早田, 1996, 未公表資料)の最下部の室田軽石(MP, 早田, 1990)に由来するテフラ粒子も含まれていると推定される。したがって、試料1のテフラ層については、層相も合わせると、As-BP Groupの中・上部に同定される。

C区55G-13グリッドの試料1のテフラ層についても、重鉱物組成や斜方輝石の屈折率、さらに高温型石英が含まれることなどから、MPに同定される。

噴砂の構成層から採取されたC区76住居セクションH-H'の試料18、試料17およびC区54S-11グリッドの

第5章 自然科学分析

試料1に含まれるテフラ粒子には、共通した特徴が認められ、それはHr-HPの特徴と一致する。以上のことから、流動化現象は、層相観察の結果のように、Hr-HPの下部で発生したと考えられる。

6 小結

富田宮下遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より榛名八崎軽石 (Hr-HP, 約4.1~4.4万年前)、榛名箱田テフラ (Hr-HA, 約2.5~3万年前)、始良Tn火山灰 (AT, 約2.4~2.5万年前¹⁾)、浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 約1.9~2.4万年前¹⁾) を検出することができた。そして、本遺跡において検出された噴砂はHr-HP下部において発生していることが明らかになった。

註

1 放射性炭素 (¹⁴C) 年代

文献

新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.

新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.

池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器¹⁴C年代. 第四紀研究, 34, p.377-379.

町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, p.339-347.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276 p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰 (AT) の¹⁴C年代. 第四紀研究, 26, p.79-83.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山, 黒班~前掛期のテフラ層序. 日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.

大島 治 (1986) 榛名火山. 日本の地質「関東地方」地質編集委員会編「関東地方」, p.222-224.

早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土. 群馬県史通史編, 1, p.37-129.

早田 勉 (1996) 関東地方~東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

鈴木正男 (1976) 過去を探る科学. 講談社, 234 p.

第21表 富田宮下遺跡におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
C区76住居	1	-	-	-	-	-	-
	3	-	-	-	+	bw	透明
	5	-	-	-	+	bw	透明
	7	-	-	-	-	-	-
	9	-	-	-	-	-	-
	11	-	-	-	-	-	-
	13	-	-	-	-	-	-
	15	-	-	-	-	-	-

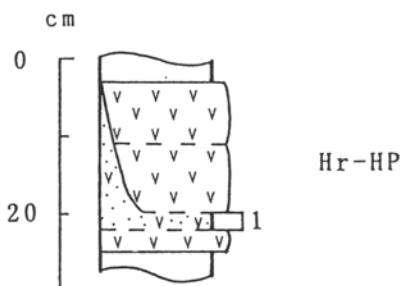
++++:とくに多い, +++:多い, ++:中程度, +:少ない,
 -:認められない. 最大径の単位は, mm. bw:バブル型.

第22表 富田宮下遺跡における屈折率測定結果

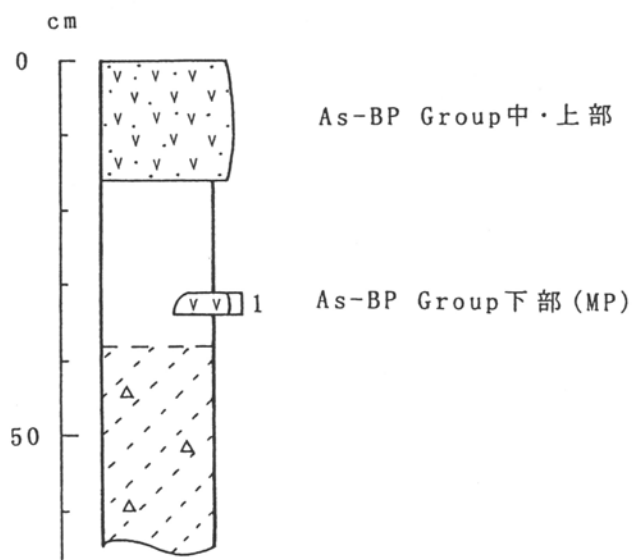
地点	試料	火山ガラス(n)	重鉱物	斜方輝石(γ)	角閃石(n_2)
C区76住居	5	1.499-1.501	opx>cpx,(ho)	1.700-1.709	-
C区76住居	15	-	(ho,cum>opx)	1.708-1.711	ho:1.672-1.677 cum:1.660-1.663
C区76住居	17	-	opx,ho	1.708-1.711	1.671-1.677
C区76住居	18	-	opx>ho	1.707-1.711	1.672-1.677
C区54S-11	1	-	opx>ho	1.708-1.711	1.671-1.677
C区55G-13	1	-	opx>cpx	1.701-1.712	-

屈折率の測定は,温度一定型測定法(新井,1972,1993)による. opx:斜方輝石, cpx

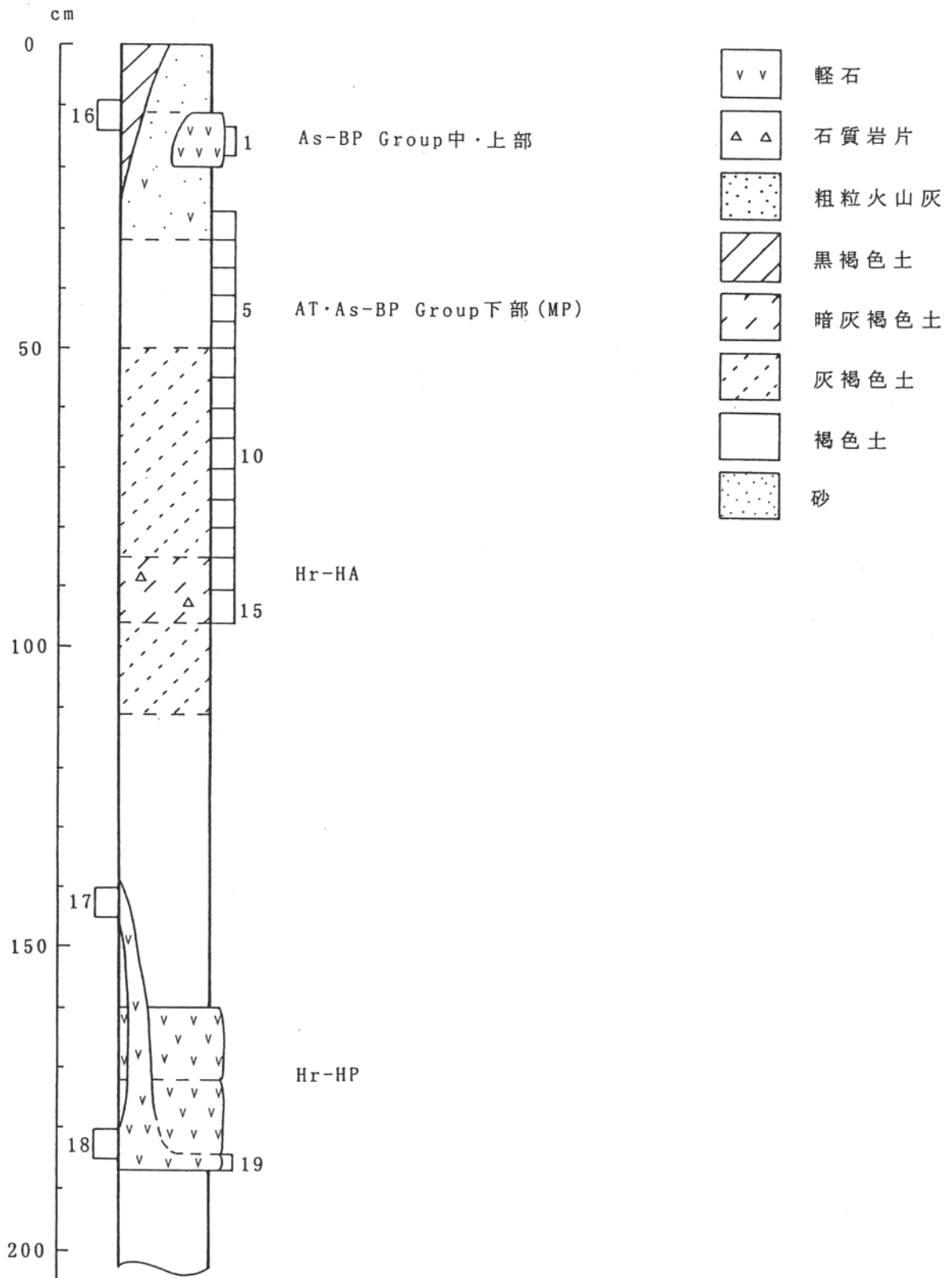
:単斜輝石, ho:普通角閃石, cum:カミングトン閃石. ()は, 量が少ないことを示す.



第462図 C区54S-11グリッドの土層柱状図(一部)



第463図 C区55G-13グリッドの土層柱状図(一部)



第464図 C区76号住居セクションH-H'の土層柱状図

第4節 富田宮下遺跡C区26号住居跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

ここでは、古墳時代前期のC区26号竪穴住居跡の東南部から出土した炭化材7点の樹種同定結果を報告する。

当遺跡は、赤城山南麓端部の標高約100mの台地南端近くに立地している。当遺跡一帯は、古墳時代前期に集落が発展した。今回調査した住居跡は、集落形成初期の頃の住居跡である。この時期に、使用されていた建築材樹種を明らかにし、伐採採取したであろう遺跡周辺の森林植生を推定する参考資料として、この調査は実施された。

2 方法

同定は、炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子(株)製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材は、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

3 結果

同定結果の一覧を、表1に示した。

炭化材7試料は、すべてコナラ節であり、年輪幅が非常に狭いぬか目材であった。樹種同定用試料は、出土炭化材の一部を取った小破片であり、使用されていた形状や木取りなどは不明であり、採取された破片も材のどの部位か分からないが、すべての試料が成長が遅く年輪幅が狭い材である点が共通していた。

材組織記載

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1

年輪の始めに大型の管孔が1～2層配列し、その後は薄壁で孔口は角形の小型の管孔が火炎状や放射状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースが発達している。放射組織はほぼ同性、単列と集合状があり、道管との壁孔は大きくて交互状や柵状に配列している。

コナラ節はカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワが属し、暖帯から温帯に生育する落葉高木である。やや乾燥した陽光地に多く生育している。災害跡地や人為的な開発地にも多く生育する。

4 まとめ

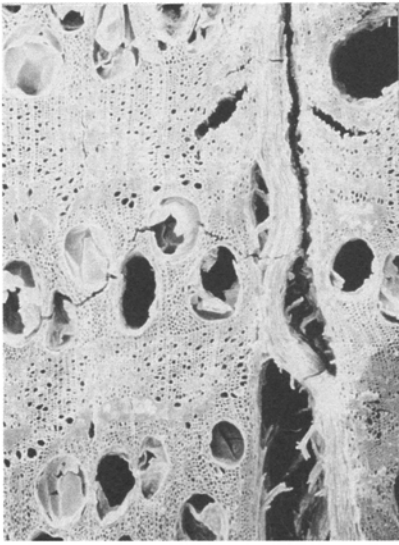
今までに、関東一円では古墳時代の住居建築材にクヌギ節とコナラ節が多用されていたことが知られているが、当住居跡の東南部から出土した7点の炭化材もすべてコナラ節であった。また、同定試料は一部分の破片であったが、すべてが年輪幅の狭いぬか目材であった。

コナラ節は、二次林を構成する主要樹種として知られている。ぬか目材は、老木の辺材部分や、生育条件が悪化した時に形成される。人為的に管理されている里山の雑木林いわゆる二次林に生育している材には、ぬか目材は少ないと思われる。従って当住居跡の調査したすべての炭化材樹種がコナラ節の材であったことは、二次林が成立していたと解釈もできるが、遺跡周辺には自然林がありそこに生育していたコナラ節の材を利用していた可能性もある。

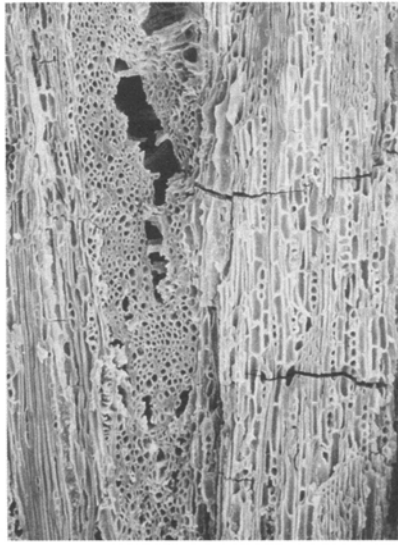
第23表 富田宮下遺跡C区26号住居出土炭化材樹種同定結果

出土遺構	No	試料番号	樹種	備考
26号住居跡	1	C26-29	コナラ節	ぬか目材、1年輪は1mm前後
26号住居跡	2	C26-30	コナラ節	ぬか目材、1年輪は1mm前後
26号住居跡	3	C26-31	コナラ節	ぬか目材、1年輪は1mm前後
26号住居跡	4	C26-32	コナラ節	ぬか目材、1年輪は1mm前後
26号住居跡	5	C26-33	コナラ節	ぬか目材、1年輪は1mm前後
26号住居跡	6	C26-34	コナラ節	ぬか目材、1年輪は1~1.5mm前後
26号住居跡	7	C26-35	コナラ節	ぬか目材、1年輪は1mm前後

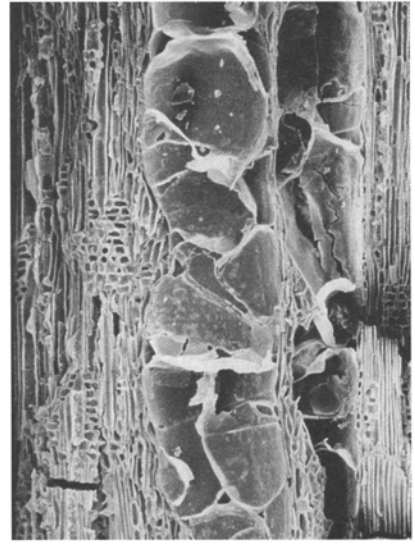
図版3 富田宮下遺跡C区26号住居跡出土炭化材走査電子顕微鏡写真



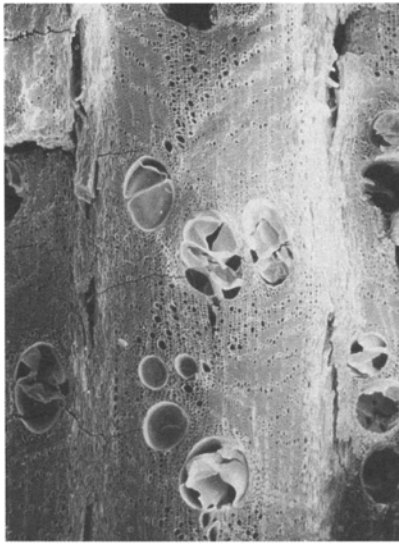
1 a コナラ節(横断面)
C26-35 bar: 1.0mm



1 b コナラ節(接線断面)
C26-35 bar: 0.5mm



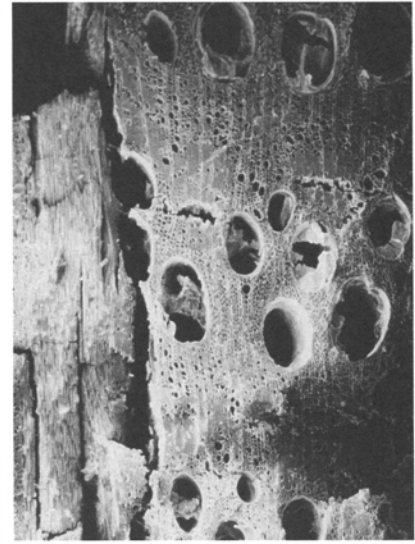
1 c コナラ節(放射断面)
C26-35 bar: 0.5mm



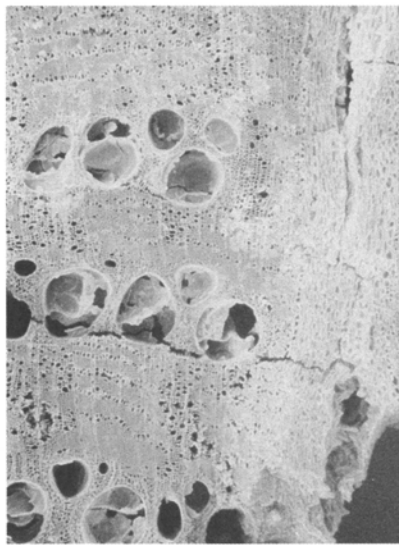
2 コナラ節(横断面)
C26-29 bar: 1.0mm



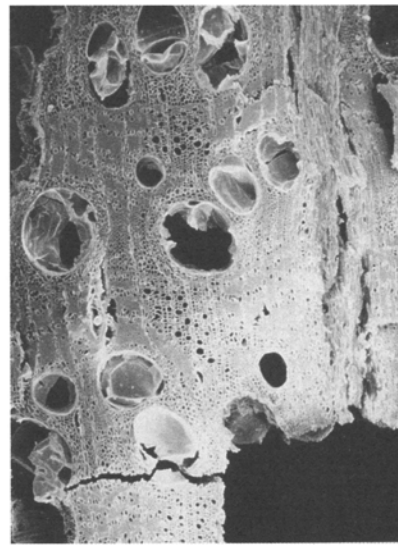
3 コナラ節(横断面)
C26-30 bar: 1.0mm



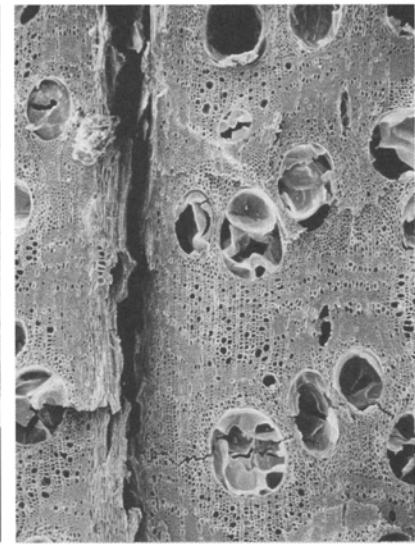
4 コナラ節(横断面)
C26-31 bar: 1.0mm



5 コナラ節(横断面)
C26-32 bar: 1.0mm



6 コナラ節(横断面)
C26-33 bar: 1.0mm



7 コナラ節(横断面)
C26-34 bar: 1.0mm

第6章 成果と問題点

第1節 調査のまとめ

1 富田細田遺跡

富田細田遺跡では、主な遺構として、C・D区から中世～近世の溝、C・D・E区から平安時代の水田跡、C区から奈良・平安時代の水田跡を確認した。また、本遺跡では、遺構外から古墳時代の土師器が出土したが、奈良・平安時代以前の遺構は確認できなかった。

A区では女堀の遺構確認のためトレンチ試掘調査を3箇所で行った。いずれの箇所においても現表土下は砂礫層が続き、女堀の痕跡を確認することができなかった。B区でも、女堀と遺構面の確認をするためにトレンチ試掘調査を2箇所で行った。ここでも女堀の痕跡を確認することができなかった。遺構面としては、近代の台風（キャサリン台風が想定される）後の復旧水田を確認することができた。

C区では、近世の掘立柱建物跡1棟、中世以降の溝、古代末～中世の復旧溝、1108(天仁元)年降下の浅間B軽石(As-B)に覆われた水田跡、奈良・平安時代の洪水層に覆われた水田跡及び溝等を確認した。As-B下水田面では、ほぼ南北と東西に走る畦畔を確認した。南北の高低差や地形の勾配を利用して、用水は水口を通過して北から南の区画へ供給されたと考えられる。調査区北側の市道付近では、浅間B軽石の残存状態が悪く、はっきりと畦畔を確認することができなかった。As-B下水田耕土下の洪水層に覆われた水田面では、南北・東西方向に走る畦畔、C区北東部で多数の耕作痕を確認した。水田1枚あたりの平均面積は、As-B下水田より洪水層下水田の方が広がった。調査区の北側及び西側にいくに従い洪水層の残りが悪くなっていた。またC区でも実施したプラント・オパール分析の結果からも、浅間B軽石(As-B)直下層や榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)混層からイネが検出され、稲作が行われてい

たと判断された。更に、As-Bの下層やHr-FAの下層などでも、稲作が行われていた可能性が認められた。

D区では、トレンチ試掘調査を行った。C区で確認した中世以降の溝の続きを土層断面で確認した。As-B下では水田耕土を確認したが、洪水層下では畦畔を確認することはできなかった。

E区では、1108(天仁元)年降下の浅間B軽石に覆われた水田跡、及びその下層から溝5条、土坑1基、畠跡を確認した。

2 富田宮下遺跡(低地部)

A区低地部では、中世以降の溜井2基及び溝、1108(天仁元)年降下の浅間B軽石に覆われた水田跡及び溝を確認した。中世面では、溜井2基とそれに伴う溝が確認されたが、水田跡は確認できなかった。

As-B下水田面では畦畔と水口の痕跡を一部で確認した。A区は全体的にAs-Bの堆積状況が悪く、畦畔が判然としなかった。As-C混土上面・下面では、As-C混土中から土師器・高杯片等が出土したが、古墳時代の遺構は確認できなかった。

このように、富田細田遺跡・富田宮下遺跡(低地部)はともに、荒砥川右岸の沖積地に位置し、奈良・平安時代から近・現代までと、この地域の稲作を中心とする生産地としての役割を果たしてきたといえる。(山村)

3 富田宮下遺跡台地部分

低地部に続く富田宮下遺跡の台地部分では、弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代にかけての堅穴住居群が展開していた。検出した軒数は103軒であった。

また、B区北側部分では1980(昭和55)年に前橋市教育委員会により70軒の堅穴住居が調査されている(注1)。その内訳は弥生時代末から古墳時代前期3軒、古墳時代後期8軒で、その他の59軒は奈良・平安時代とされている。この内容は本調査におけるB

・C区で検出した竪穴住居の時期とはほぼ同様である。このことから両者の成果を一体として、本遺跡における居住域の変遷を理解する必要があることがわかる。

弥生時代から奈良・平安時代の出土土器と居住域の変遷については節を改めて後述することとし、本節では縄文時代から中・近世に至る遺構・遺物について概略、そのまとめを行うこととする。

縄文時代の陥し穴 縄文時代の遺構としては平面形が長円形の土坑をB区で13基、C区で1基検出した。出土遺物がなく、掘削時期は不明であるが、C区33号土坑のように底面に逆茂木を設置したと考えられる小ピットを検出した例もあり、これらの土坑を陥し穴と判断した。

B区の陥し穴は、第70図に示したようにA区南側に広がる沖積地に向かって徐々に下がる傾斜地に等高線に直行するよう長軸を設定して穿たれていた。周辺から住居の検出がないことから、調査区一帯が狩猟の空間であった可能性が考えられる。

また、遺構を伴わなかったが、C区を中心に縄文土器の散布が認められた。出土土器の時期は、前期黒浜式・諸磯b式・諸磯c式、中期加曾利E式が主体であった。

石器ではA区7号住居の柱穴埋没土中から有舌尖頭器が出土したことが特記される。

弥生時代の竪穴住居 今回の調査で検出された住居の中で最も古い時期の住居はC区16号住居である。出土した3個体の壺と大小の甕、小型壺、小型台付甕などの器形・文様構成からは弥生時代中期中葉の特徴を看取することができ、栗林式に併行する時期の所産と考えられる。

本遺跡周辺における弥生時代中期から後期にいたる時期の竪穴住居の検出例は、荒砥前原遺跡、荒砥島原遺跡、荒砥北三木堂遺跡、荒口前原遺跡、頭無遺跡などが知られるだけである。C区16号住居とその出土土器は、弥生時代中期後半の遺跡分布が稀薄な本周辺地域において良好な新資料を追加することとなる。

また、C区11号住居出土の壺(5)やC区19号住居出土の短頸壺(1)は、中期中葉でもやや古い時期の特徴をおびた土器として注目される。

遺構外から出土した弥生土器は5群に大別して報告した。第1群は、中期中葉栗林式の特徴を有する土器群である。壺を中心に太い沈線による区画文、縄文施文、甕を中心とする櫛描波状文・簾状文を施す資料が見られる。

第2群は、中期後葉の北島式に類似する特徴を有する土器群である。沈線による区画文とその内部に縄文を充填する資料が見られる。

第3群は、中期後葉の川原町口式の特徴を有する資料である。細い沈線による連弧文や同心円文が顕著に見られる。

第4群は、後期樽式の特徴を有する資料である。波形の乱れた櫛描波状文や3連止めの簾状文などが施されている。

第5群は、後期の赤井戸・吉ヶ谷式(注2)の特徴を示す資料である。器面に縄文を施文するものや、口縁部に第116図116や第117図129のように輪積痕を残す資料が見られる。古墳時代前期の資料との区分が困難であることからここに一括掲載した。

C区1号址及び遺構外から1点ずつ出土した磨製石斧の出土も注意される。

弥生時代末から古墳時代前期の竪穴住居 この時期の住居は8軒が検出された。形状は、C区26号住居が長方形を呈していた他は方形あるいは隅丸方形であった。C区26号・27号・53号・77号住居では、床面の一部に段差を有する、いわゆるベッド状遺構が見られた。

また、C区26号・27号・73号・77号・80号住居の5軒では埋没土中には浅間C軽石の堆積が確認された。宮下遺跡で調査した50号・51号・55号の3軒の住居も埋没土中に浅間C軽石の堆積が認められたことからC区26号住居などの今回調査した住居と同時期の所産であると考えられる。

宮下遺跡調査の3軒を含むこの段階の住居からは、櫛描文施文や縄文施文、粘土紐の輪積み痕を残す土

器が出土している。前者は樽式土器の系譜を引く土器である。後者は赤井戸・吉ヶ谷式土器の系譜を引くものである。ともに土師器と共伴するものと考えられる。

本遺跡の場合は、樽式土器の系譜を引く土器の出土が顕著であるのに対し、赤井戸・吉ヶ谷式土器の系譜を引き、口縁部に輪積痕を残す土器の存在は比較的少量であった。また、縄文を施文する個体はほとんど含まれない状況である。C区58号住居の壺(1)、C区59号住居の壺(1)は、口縁部に輪積痕を残し、胴部上位に簾状文、波状文を施すという赤井戸・吉ヶ谷式と樽式、両者の特徴を受容した個体である。

本遺跡の周辺、荒砥地域一帯では弥生土器の系譜を引く土器群と土師器が混在して出土する堅穴住居の調査例が多数知られている。

その中で本遺跡と同様、樽式土器の系譜を引く土器が多数出土した住居が検出された遺跡としては村主遺跡や中山B遺跡が知られる。両遺跡とも樽式土器、吉ヶ谷・赤井戸式土器、両者の系譜を引く土器を出土する住居が検出されている。その中には一住居内から樽式土器の系譜を引く土器と吉ヶ谷・赤井戸式土器の系譜を引く土器が共伴する住居も見られる。また、少数ではあるが、本遺跡出土土器と同様、一個体の土器に輪積痕と櫛描文の双方の特徴が認められる資料も出土している。

赤井戸・吉ヶ谷式土器を多数出土する堅穴住居が検出された遺跡としては大道遺跡、下境Ⅰ遺跡、北原遺跡、山王遺跡、熊の穴遺跡(横俵遺跡群Ⅳ)、下縄引Ⅱ遺跡(内堀遺跡群Ⅵ)などがその代表である。ただしそれらの土器には縄文が施されているものは少量で、口縁部に輪積痕が認められ、器形に赤井戸・吉ヶ谷式の系譜を引く無文の土器が多数である。

古墳時代前期の堅穴住居 この時期の堅穴住居は14軒を検出した。住居の形状はやや長軸の長い方形が含まれるものの大勢は隅丸の方形である。貯蔵穴を南東隅に、炉を床面中央より北側寄りに配置する事例が多いことから、南壁に出入り口の存在が想定

されるが、細部の相違点も多く必ずしも画一的ではない。

これらの住居から出土した土器組成について見ると、残存状態が不良であったC区24号・57号住居の2軒を除くと小型器台・埴(鉢)を伴出している。甕は、必ずしもS字甕が主体とは言えず、C区4号・12号住居をはじめ4軒の住居では、S字甕と単純な平縁口縁の甕が共伴している。このことは本遺跡周辺の古墳時代前期の遺跡で多数見られる特徴である。また、出土したS字甕は、肩部に横方向のハケメを伴わない、いわゆる廻間編年のS字甕C類(注3)である。

古墳時代中期の堅穴住居 A区5号住居が前段階の住居群に続く住居である。A区1号遺構址もこの段階の遺構と考えられる。ともに出土土器の中に屈折脚の高杯が見られる。しかしながらこの時期の住居・遺構はこれだけで前段階と比較して極端に減少する。そして、5世紀中頃以降の住居は調査対象地内には全く見られない。この後、調査区域内に住居が造られるようになるのは6世紀後半である。ただしそのことをもって本遺跡周辺における農耕集落の形成が断絶したと考えることには慎重でありたい。

第5章に掲載したよう富田細田遺跡のプラント・オパール分析の結果からは、Hr-FA層下で稲作が行われたことを示す成果が得られている。

また、本遺跡の北東0.2kmにある東原遺跡では7基の円墳が調査された。その成果によればこの古墳群は5世紀後半に形成が開始されていることから、いわゆる初期群集墳の一例であることが知られる。さらにこの古墳群から0.3kmの位置にあるおとうか山古墳は直径30mの円墳で、周堀中にHr-FAの堆積が確認されている。この古墳が、5世紀後半から6世紀初頭における本遺跡周辺地域の中核をなす古墳であったことが知れるとともに東原古墳群形成の端緒となっている可能性も考えられる。

この2点からも、本遺跡周辺の調査対象地外に5世紀後半の集落が形成されていたことが充分想定されることである。古墳時代前期に形成された集落は

「伝統集落」となり、占地を変えながら荒砥川右岸の沖積地を生産域とする農耕集落が継続して形成されていたものと考えられる。

古墳時代後期の住居 この時期の竪穴住居は26軒を検出した。形状は、方形の他にB区8号・C区13号住居に代表される縦長方形、C区3号住居に代表される横長方形を呈する事例などバラエティーが見られた。また、規模の格差も顕著となる。B区10号で床面積が55m²を超えるのに対し、C区3号住居は6.01m²であった。

竈は、壁面中央部の壁外に煙道を掘削、燃烧部の大半は壁内に設ける形状である。これは他遺跡でもこの時期の住居にみられる通有の構造である。袖部先端に礫や土器を転用して補強材として据えた事例も見られた。B区3号・C区3号・C区65号住居では専用の土製支脚が、B区10号住居からは土器を二次利用した支脚が見られた。竈の設置される壁面は大半が東側であったが、C区18号住居をはじめ少数例で北側に設置された例が見られた。これらはいずれも大型住居の部類に入るものであった。貯蔵穴は竈の右手隅に設置されている事例が多数であった。

出土遺物は、土師器が主体で、須恵器の出土は極めて少量であった。

奈良・平安時代の竪穴住居 この時期の竪穴住居は51軒を検出した。本遺跡において竪穴住居が最も多く造られた時期がこの段階である。B区と重複する宮下遺跡でも同様の傾向が見られる。これらの竪穴住居は、調査区の全域にわたり分布しているが、古墳時代後期とは密集地点を若干移しながら集落の形成が継続されていたことが解る。

住居の形状には正方形、横長・縦長長方形が見られるが主体は横長の長方形である。規模の大きなものには4本の柱穴が検出されたが、小規模のものは不明瞭である。平安時代の住居における柱穴検出例は皆無である。貯蔵穴の検出は少数であるが、竈右手側に設置されていた。

竈は燃烧部・煙道部とも壁外に掘り込む構造に移行している。焚口部分の補強に土器・礫が使用され

る事例は前時期と同様である。C区35号住居では角閃石安山岩の切石が使用されていたことが注目される。

出土土器の中に土釜・羽釜が見られないことから調査区内で検出した竪穴住居の年代はその下限が10世紀代にはほとんど及ばないものと考えられる。また、灰釉陶器の共伴が極めて少量であることも特徴的である。墨書土器、皇朝十二銭については後述する。

鉄製品の出土は奈良時代に集中している。出土した鉄製品は、農具を主体としている点は他の遺跡と同様の傾向である。

8世紀代の住居ではA区7号住居から鉈が、C区5号・20号・60号住居からは鎌が出土している。C区74号・79号住居からは刀子が出土した。この他にC区28号住居からは刀子状棒状品、C区56号住居からは鉄鏃状の棒状品、C区67号住居から鉄鏃、C区33号住居から鉄刀の一部が出土している。

9世紀代ではC区1号住居から鎌が、C区51号住居から楔が出土している。

墨書土器 本遺跡の調査においては第24表に掲示したとおり14軒の竪穴住居他から墨書土器23点、刻書土器3点の合計26点の文字資料が出土した。墨書の記された土器の出土遺構、器種、部位、釈文については第24表に整理したとおりである。土器の器種は、土師器杯、須恵器杯・皿である。甕などの大型品の事例は検出されていない。記された部位は口縁部外面と底部の内外面である。

墨書の内容は「方」、「寸」、「初」、「七」、「足」、「矢(?)」、「中(?)」、「真継」などである。線刻文字の記された資料としてはC区36号住居の「主」(焼成前)、C区46号住居の「真(?)」(焼成後)、B区8号住居土師器杯(1)(判読不明-焼成後)が見られた。「主」は墨書資料が江木下大日遺跡をはじめ多くの遺跡から出土している。「真継」を除いていずれも一文字であること、共通した文字もないことなどから、これらの墨書土器の意味、用途、機能について考えることは困難である。

第24表 富田宮下遺跡出土墨書土器一覧

番号	出土遺構	器種	部位	文字
1	B区8住-1	土師器杯	内面-口縁部	*不明
★2	B区11住-3	土師器杯?	外面-底部	不明
3	C区1住-5	土師器杯	内面-底部	方
4	C区10住-5	土師器杯	内面-底部	寸
5	C区10住-6	土師器杯	外面-底部	初
6	C区10住-4	土師器杯	内外面-底部	不明
★7	C区22住-7	土師器杯	内面-底部	不明
8	C区36住-1	土師器杯	外面-底部	七
9	C区36住-2	土師器杯	内面-底部	中?
10	C区36住-4	須恵器杯	外面-口縁部	*主
11	C区40住-3	土師器杯	外面-底部	不明
12	C区40住-4	土師器杯	外面-底部	不明
13	C区40住-5	土師器杯	外面-底部	不明
14	C区40住-6	須恵器杯	外面-口縁部	不明
15	C区46住-8	須恵器皿	外面-口縁部	*真?

*は線刻

番号	出土遺構	器種	部位	文字
16	C区47住-2	土師器杯	内面-底部	主
★17	C区67住-8	土師器杯	外面-口縁部	不明
★18	C区67住-9	土師器杯	内面-底部	不明
			外面-底部	矢?
19	C区68住-4	須恵器杯	外面-口縁部	不明
			内外面-底部	不明
20	C区70住-4	土師器杯	外面-底部	不明
21	C区72住-4	須恵器杯	外面-底部	矢?
22	C区72住-5	須恵器杯	内面-底部	真継
23	C区75住-1	土師器杯	外面-底部	足
★24	C区79住-2	須恵器杯	外面-口縁部	不明
			外面-口縁部	不明
25	遺構外奈平-6	土師器杯	外面-底部	不明
26	遺構外奈平-5	土師器杯	外面-口縁部	不明

★は8世紀、他は9世紀の住居出土

ただし、墨書土器を出土した竪穴住居についてみると一部が8世紀代、9世紀前半の時期と考えられるものの、9世紀後半の築造が主体である。墨書土器も住居と同時期の所産と考えられる。その中、9世紀代の住居においては調査で検出した21軒の住居中8軒から墨書土器が出土している。それらの住居の形状においては特別な状況を見いだすことはできないが、規模については全ての住居の床面積が9.5㎡以上を有していた。C区1号住居は、16.81㎡と検出した住居中最大級である。C区22号住居も16.11㎡と大型の部類となる。これに対し、8㎡以下の住居から墨書土器の出土はなかった。

住居規模の大小がその住居に居住する構成員の階層の優劣を必ずしも的確に反映するとは断言できないが何らかの一傾向を示しているように考えられる。

ところで律令制下の東国村落内の住居等から出土する墨書土器の変遷については高島英之氏の指摘がある(注4)。高島氏の見解によると集落から出土する墨書土器は、8世紀前半に出現、8世紀中葉以降村落内に本格化、9世紀になると次第に増加、9世紀中葉から10世紀にかけて飛躍的に展開するという。9世紀以降は文字が大きくなり、字形も乱れ、稚拙な書体となるという。本遺跡における墨書出土住居の大半が9世紀代であること、C区10号住居杯(5)のような太い書体で記された事例の存在は、高島氏の指摘されたとおりの様相を呈しているといえる。

本遺跡から東北東方向2.1kmに位置する上西原遺跡では寺院跡と考えられる方形区画内の竪穴住居、溝、井戸から9世紀を中心に8世紀後半から10世紀にかけて土器に「大」、「院」などの文字を記した墨書土器約150点が発見されている。また、上西原遺跡の周辺においては中鶴谷・頭無・大久保・川籠皆戸・荒砥小学校校庭遺跡などの集落遺跡で、墨書土器が出土する事例が多数知られている。これらの遺跡と上西原遺跡の関連性が考えられるところである。

本遺跡の奈良・平安時代集落における墨書土器の受容と展開の背景については本地域全体の文字資料の様相を分析する中で判明するものと考えられる。今後の課題としたい。

神功開寶 C区76号住居から神功開寶1枚が出土した。神功開寶は、765(天平神護元)年初鑄で、皇朝十二銭の中では和同開珎の次に出土例が多く、2001年の集成で2,494枚が記録(注5)されている。

群馬県内での出土例は本遺跡で6例目となる。他に、上野国分僧寺・尼寺中間地域I区210号土坑、芳賀北部団地遺跡H区87号住居、東長岡戸井口遺跡出土(2枚)、桐生市童子の出土が知られる。

群馬県内出土の古代銭貨の出土については大西雅広氏の集成がある(注6)。これを基にその後管見にふれたものを追加したのが第25表である。また、その分布状況は第464図のとおりである。皇朝十二銭は、群馬県内では現在までに27遺跡から貞元大寶を

除く11種、約50枚が出土している。また、この他に藤岡市上栗須遺跡I区6号古墳から富本銭1枚が出土している。

大西氏は、これらの銭貨の分布について、律令期の公共施設である官衙、官営工房などの諸施設、寺院等の遺跡との関連から、「古代銭貨は律令期にお

第25表 富田宮下遺跡出土墨書土器一覧

番号	遺跡名	遺構名	所在地	富本銭	開		萬年通寶	神功開寶	隆平永寶	富壽神寶	承和昌寶	長年大寶	饒益神寶	貞觀通寶	寛平大寶	延喜通寶	乾元大寶	不計	備考	
					同	珠														
1	山王廃寺跡		前橋市総社町						2	7									9	寺院、埋納?
2	上野国分僧寺 尼寺中間地域	I区210号土坑	前橋市元総社町 高崎市東国分町					1											1	
3	"	A区187号住居	"								1								1	
4	"	G区77号住居	"							1									1	
5	"	F区122号土坑	"									1							1	
6	"	B区83号住居	"										1						1	
7	鳥羽遺跡	K-2号住居	前橋市鳥羽町													1			1	
8	元総社西川遺跡	151号住居	前橋市元総社町									1							1	
9	引間松葉遺跡	17号土坑	高崎市引間町										1						1	
10	冷水村東・西 国分新田遺跡	遺構外	高崎市冷水町				1												1	
11	三ッ寺大下IV 遺跡	12号住居	高崎市三ッ寺町													1			1	
12	熊野堂遺跡	105号住居	高崎市大八木町			1													1	
13	下芝五反田遺跡	17号溝	高崎市箕郷町下 芝			1													1	
14	愛宕山遺跡	4号住居	安中市松井田町 松井田				1												1	
15	中里見原遺跡	第3号住居	高崎市中里見町												1				1	
16	引間遺跡	2号墳	高崎市中上豊岡町				1												1	古墳
17	豊岡後原I遺跡	I-19号住居	高崎市下豊岡町			1													1	
18	上栗須遺跡	I区-6号古墳	藤岡市上栗須町	1															1	
19	綿貫観音山古墳	墓坑4	高崎市綿貫町										1	1			2		4	墓塚
20	大久保A遺跡	II区87号住居	吉岡町大久保							1									1	
21	戸神諏訪IV遺跡	5号住居	沼田市町田町										1						1	
22	中畦遺跡	1号住居	渋川市赤城町中 畦							1									1	
23	白井二位屋遺跡	54号住居	渋川市白井			1													1	
24	芝山遺跡	H-7号住居	渋川市北橋町下 箱田			1													1	
25	白山古墳		前橋市苗ヶ島町			8													8	古墳
26	芳賀北部団地 遺跡	H-83号住居	前橋市勝沢町					1											1	
27	富田宮下遺跡	C区76号住居	前橋市富田町					1											1	
28	群馬県荒砥村		前橋市				1												1	中世一括埋納
29	東長岡戸井口 遺跡	遺構外	太田市東長岡戸 井口・安良岡町					2											2	
30	弁天塚古墳	16号墳	太田市矢田堀町																1	古墳? 遺物所在不明
31	牛沢		太田市牛沢町					1	1										2	中世一括埋納
32	童子		桐生市川内町					1											1	
合計				1		15	3	6	3	11	1	2	3	1	1	2	2	0	51?	



第465図 群馬県内出土の皇朝十二銭出土分布図

ける枢要地域に集中する傾向が認められる」として
いる。また、東山道駅路との関連も考えられるとし
ている。

皇朝十二銭を出土する遺構は、古墳への副葬の他
に堅穴住居、土坑、寺院などがある。その出土要因
については埋納、地鎮・祭祀に伴うもの、単なる放
棄などが想定されている(注7)。

堅穴住居からは1枚ずつ出土する例が多いとされ
る。今回の調査で神功開寶を出土したC区76号住
居は、その規模、長軸4.60m、短軸3.42m、面積12.6
㎡を測り、やや大型の部類であるが集落の中で突出
したものではない。床面との関係からは廃棄や混入
とは断定できない。床下土坑からの出土ではなく床
下埋納ではない。

遺物も土師器杯・甕、須恵器杯・高台付椀が出土
したものの、特別な器種・器形は見られない。墨書
土器の出土もなかった。本住居が社会的・経済的に

何らかの地位を有するよう
な階層を構成員とするか否
かについて調査の所見から
判断することは困難である。

ではなぜ本遺跡のC区76
号住居から出土したのか。
本遺跡の位置は、東山道駅
路のルートからは北方向に
大きく外れていることから、
先にも上げた上西原遺跡や
江木下大日遺跡の掘立柱建
物群、今井道上遺跡で検出
された富有層の屋敷地とさ
れる方形区画遺構などとの
関連性を考慮しなければなら
ないものと考えられるが、
今回、その出土要因につ
いて断定することはでき
なかった。

最後に、皇朝十二銭につ
いてはこれらとの共伴をも

って土器の製作・使用年代を規定するような基準資
料として評価する向きもあったが、C区76号住居出
土土器はその特徴から9世紀初頭から前半の所産と
考えられる。これは神功開寶の初鑄年765年とは明
らかに時間差が生じている。銭貨との共伴関係から
土器の製作・使用年代を決定することの困難さは既
に多くの指摘があるところである。

近世の遺構 中・近世以降の所産と考えられる遺
構としては溝・井戸・土坑・掘立柱建物などを検出
した。各々の遺構から出土した遺物とその年代は第
26表のとおりである。いずれの遺構も江戸期を中心
とするものと考えられる。

これらの遺構の中で、その存在が、1871(明治6)
年作成の壬申地引絵図に表記されているものが認め
られる。本遺跡周辺における明治期の地割りは、耕
地図(群馬県勢多郡城南村荒砥地区全図)を間に介
在させて比較しても、1980(昭和55)年に実施された

第26表 富田宮下遺跡中・近世以降出土遺物一覧

	陶磁器	軟質陶器	その他土器	石製品	備考
A区2号井戸 3号井戸 6号井戸 B区1号井戸 2号井戸 3号井戸 C区1号井戸 3号井戸 4号井戸	瀬戸・美濃(17~18C) 京・信楽(18C中~後)、瀬戸・美濃(江戸)	焙烙、内耳鍋(江戸) 焜炉(江戸以降) 焙烙、内耳鍋(江戸)	須恵器 須恵器、土師器 土師質皿 土師器	茶臼 石臼 石臼 五輪塔 砥石	水輪 古代の井戸?
A区12号溝 15号溝 18号溝 19号溝 20号溝 22号溝 28号溝 29号溝 B区1号溝 2号溝 3号溝 8号溝 C区1号溝 2号溝 5号溝 6号溝 7号溝 8号溝 9号溝 12号溝 B区3号土坑 8号土坑 C区道状遺構	常滑甕(中世) 磁器(明治) 肥前?(江戸) 常滑甕(中世~近世) 常滑甕(中世~江戸) 瀬戸・美濃(17~18C、18C中、18後~19C前)、肥前(18C)、常滑甕(江戸~近・現代) 肥前、瀬戸・美濃(江戸) 肥前・波佐見、瀬戸・美濃(17末~18C中~後) 肥前、瀬戸・美濃(17末~18後、18C、18C(前・中、江戸)) 肥前波佐見(江戸) 瀬戸・美濃、(18C、江戸) 肥前?(江戸) 瀬戸・美濃(江戸) 製作地不詳? 土師質土器	内耳鍋、火鉢(江戸) 内耳鍋(江戸?) 焙烙(江戸) 焙烙、鍋、火鉢(江戸~近代) 焙烙、内耳鍋(江戸) 焙烙(江戸) 香炉?(江戸) 焙烙(江戸)	須恵器 須恵器のみ 土師器、須恵器 須恵器 須恵器提瓶	茶臼、砥石 板碑、石臼 砥石、茶臼 磨石	石臼 16号溝と重複 鎌 銭1枚(洪武通寶) 銭3枚(寛永通宝なし) 銭7枚(寛永通宝なし) 銭1枚(寛永通宝)

圃場整備事業前の地割り(前橋市現形図)と基本的に道路・宅地・田畑の位置や区割りが大きく変化していないことがわかる。ただし、B区西方に位置していた正法院は北方約400mの現在地に移動している。本調査では検出されなかったが前橋市教育委員会の調査時に確認された南北溝、宮下遺跡堀3は絵図から正法院の寺域の東辺を区画するもので、併行して道路を伴うものであったことが見てとれる。圃場整備後に削平されたものと考えられる。

C区1号・2号溝は、江戸期以来の地割りに則しており、検出した2条の溝は地割りに沿って設けられた区画溝と考えられる。1号溝には圃場整備前ま

では道路が併設されていた。1号溝は長く赤石家の屋敷地北辺を画する区画溝であったものと考えられる。

C区北西部で検出された道路状遺構も775-3番地(調査時)の地割りに沿って検出された遺構で、江戸期には既に存在していたものと考えられる。

B区及びA区南側の調査においては江戸期の屋敷地を区画すると考えられる溝を検出した。検出したのはB区1号溝で、北西隅を中心に北辺43m、西辺53mを確認した。端部は未検出である。前橋市教育委員会調査時には西辺80mを確認したが南端の状況は不明であった。検出部分については壬申地引絵図、前橋市現形図に鍵の手状の地割りが認められること

第6章 成果と問題点

から溝の存在が後生の土地利用に影響を与えたものと考えられる。

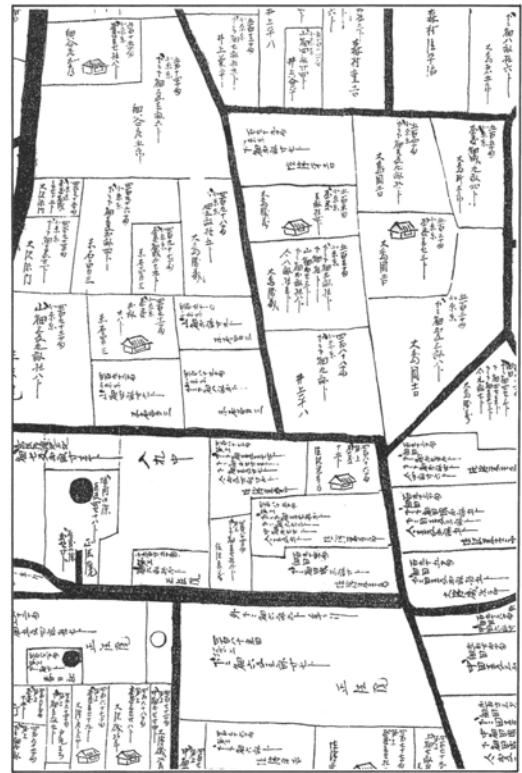
西辺南端は、B区南側を東西方向に流れていた「カンポリ」に接していた可能性が宮下遺跡の報告時に既に指摘されている。あるいは南辺については、「カンポリ」の北側で検出されたA区14号溝が区画溝の一部である可能性も考えられる。東辺についてもその詳細は不明であるが、圃場整備前、塩澤家の屋敷地の東側を通過していた南北方向の道路までと推定されている。屋敷地の規模は最大に見積るとすれば南北約86m、東西約74mを想定することができる。

B区1号溝の内側にはこれに平行するようにB区2号溝が認められ、さらにその内側に4号溝が検出された。1号溝と2号溝の間の土塁の存在については埋没土の観察からは確定できなかったが、反対に完全に否定することもできない。

区画内から検出された遺構は少なく、A・B区含め少なく、掘立柱建物3棟、井戸9基、土坑11基を検出したに止まった。B区3号・8号土坑の2基は古銭が出土していることから墓と考えられる。古銭の中には中国銭と伴にその鏝銭が出土していることから土坑の年代は江戸期に下がる可能性も考えられる。

以上のような遺構に対し、A区を南北方向に縦断して検出された15号・16号溝であるが、16号溝を掘り返してその東側に15号溝が位置するという関係があり、共に流水があったものと考えられる。両溝とも出土遺物は少量であるが江戸期の遺構と考えられる。前述のB区1号溝他からなる方形区画との前後関係は、本溝が、方形区画溝に先立つものと判断したい。壬申地引絵図ではA区北半部分は塩澤家の宅地として描かれており、これらの溝が明治期以降の周辺の地割りに全く影響を与えていないことがわかった。

ところで富田町には元和9(1623)年に記された「上野国勢多郡富田之郷根元記」という文書がある(注8・9)。この文書は、元和8(1622)年までの「富田之郷居住之面々」の由来を記したもので、天

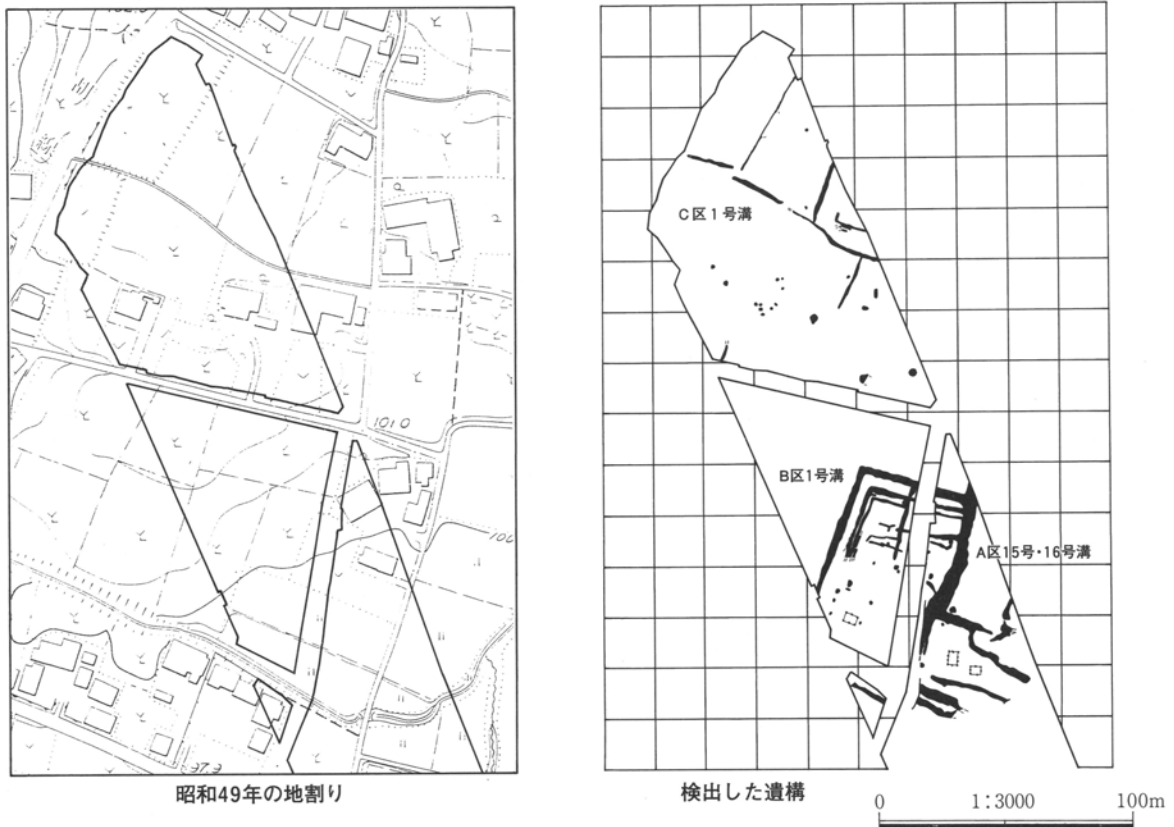


明治6年時の地割り

正16(1588)年から元和8(1622)年までに富田村に入植した当村草分25家が挙げられている。その中には本遺跡に関係すると考えられる記述も見られる。それらからは、赤石兵庫長政が天正17(1589)年に移住してきたこと、正法院(世良田長楽寺末寺)が慶長4(1599)年に地方支配寺に定まったこと、塩澤市之進の次男平吉が元和8(1622)年に移住してきたことなどがわかる。この赤石家・塩澤家両家は、ともに明治6(1873)年の絵図に記載され、本調査区内に位置している2家にあたると思われる。

ただし、この「根元記」文書には絵図ではなく、塩澤家宅と今回調査した方形区画を有する屋敷地との位置関係をこの資料から知ることはできない。

今回検出した方形区画は、明治期の絵図に描かれた塩澤家の屋敷地(すなわち調査直前)とは位置をやや異にしている。「根元記」の記述に従えば、塩澤家は元和8(1622)年にこの地に移住している。当初から現在地に居をかまえたのであれば、A区15号・16号溝はそれ以前の掘削ということになるが出土



第466図 富田宮下遺跡中・近世以降の遺構と区割りの変遷

遺物には江戸期のものも含まれている。塩澤家が当初、方形区画に屋敷を構えた後、現在の屋敷地に移動した可能性も考えられるがいずれの遺構からも出土遺物が少量であることなどからその変遷を詳細に追うことは困難な状況にあった。

まとめ 低地部に続く富田宮下遺跡台地部分の調査・整理事業の結果、本遺跡においては弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落が形成され、多数の竪穴住居が展開していたことが確認された。その結果、富田細田遺跡、富田宮下遺跡低地部の成果と合わせ、赤城山南麓における古代の生産域と居住域の位置関係やその変遷、立地条件を考察する上で、有効な資料を提供することとなるであろう。(徳江)

業団「南蛇井増光寺遺跡Ⅴ」1977で示した考え方に従った。

- 3 赤塚次郎「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財調査センター 1990
- 4 高島英之『古代出土文字資料の研究』2000
- 5 芝田 悟「報告第7回研究大会『畿内・七道からみた古代銭貨』『出土銭貨』第16号 2001
- 6 大西雅広「上野国」『畿内七道からみた古代銭貨』出土銭貨研究会 2000
- 7 中沢 悟「関東地方出土皇朝十二銭の様相—土器年代を探る第一歩として—」『研究紀要』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 8 「富田町共有文書」『前橋市史』第6巻 1985
- 9 築瀬大輔「赤城南麓「江木谷」の中世の景観—記録と記憶による景観復元の試み—」『群馬歴史民俗』第20号 1999

註

- 1 前橋市教育委員会「富田遺跡群（昭和55年度）」1981
- 2 本報告においては大木紳一郎氏が、群馬県埋蔵文化財調査事

第2節 富田細田遺跡における洪水層下水田について

ここでは富田細田遺跡C区で確認された洪水層下水田跡について、調査の結果、判明したことを上げておきたい。

1 埋没土について

今回の調査で荒砥川右岸の沖積地において洪水層下水田跡が確認されたのは細田遺跡C区のみである。細田遺跡C区では北側及び西側にいくに従い洪水層の残存量が少なかった。南壁土層中では洪水層が0.02～0.19m程堆積していた。西壁土層中では洪水層が0.03m程の厚さで、上位と下位の土層に挟まれる状態で、部分的に堆積していた。洪水層は、灰白色砂質土やにぶい黄褐色土であった。

2 耕土について

水田耕土は、白色軽石を含む黄灰色砂質土や褐灰色土で、締まり粘性共に中程度である。軽石の最大径14mmである。耕土の層厚は0.09～0.24m前後である。ただし、西側土層中には洪水層の堆積が少なく、また洪水層が混入した耕土が部分的に認められた。

3 区画について

細田C区では36区画が確認された。そのうち区画がわかるものは18区画で、面積は9.6～232.1㎡、平均面積は77.8㎡である。田面の標高は94.60～95.50mで、高低差は0.90mである。北側の水田から南側の水田までは直線距離で約90mである。北から南方向への平均勾配は約1%である。東西畦畔はほぼ南北の高低に合わせてつくられている。東西・南北の畦畔は、その設定間隔が一定でない。畦畔は、地形の微妙な勾配に合わせて設けられているように思われる。形や面積には規格性がみられない。確認された水田の範囲では、この水田跡の地割りが条里制に基づくものとは言い難い。

4 時期について

洪水層下水田面の層位は、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)より上位で浅間B軽石(As-B)下位にあると考えられる。したがって、洪水層下水田のおお

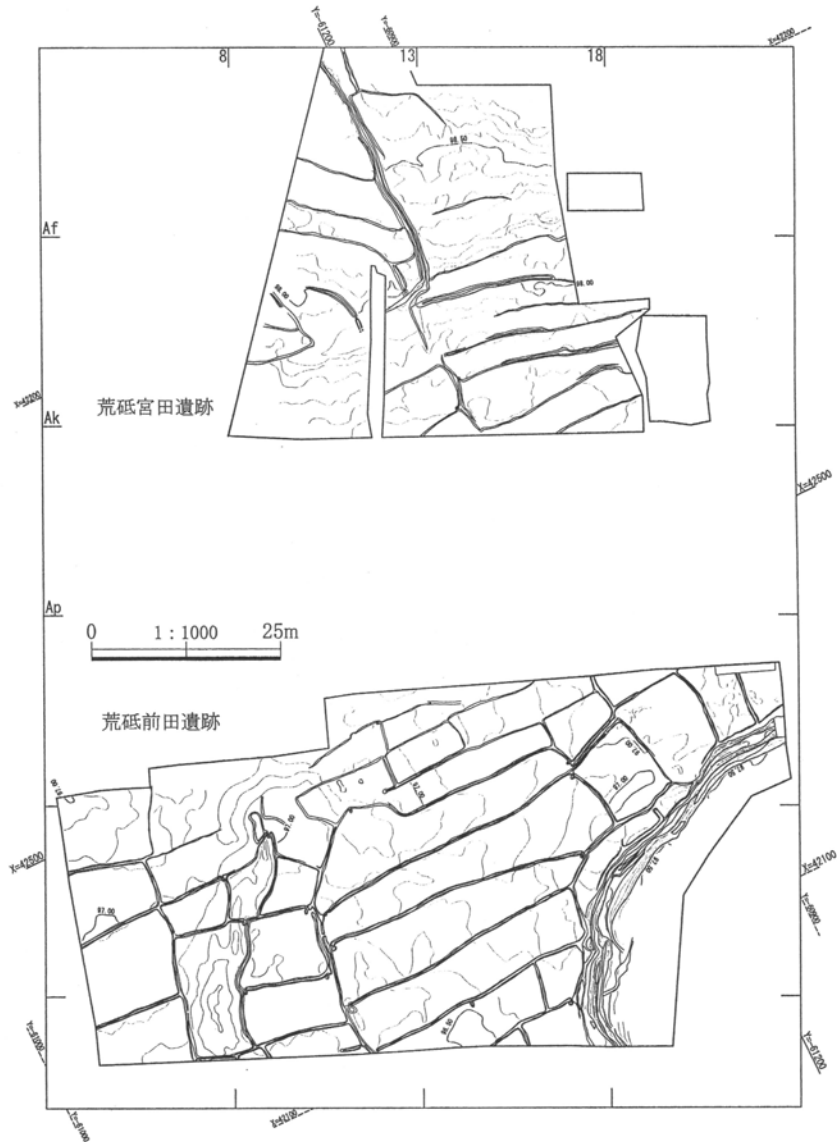
よその時期は、古墳時代後期以降、平安時代末以前である。水田面から須恵器杯1点が出土した。また、水田面を掘り込む10号溝からは須恵器杯1点(酸化焰燃焼)が出土した。水田跡と同様に10号溝も洪水層に覆われていた。出土した遺物の年代から、水田の埋没時期は10世紀前半を下らないと考えられる。

5 検討資料

近年、荒砥川周辺の発掘調査で洪水層に覆われた水田跡が幾つか確認されている。最近の報告としては、平成14年度に調査が行われた荒砥前田Ⅱ遺跡である。荒砥前田Ⅱ遺跡の低地部で、As-B下畠跡の下層にある洪水層下から水田跡を確認したと報告されている。その時期は奈良・平安時代に位置づけられている。荒砥川両岸の地域は、奈良・平安時代に広範囲で洪水災害を被ったと推測される。ここで細田C区で発見された洪水層下水田跡との同時性を考える上で、比較検討の必要性があると思われる遺跡・洪水層下水田跡を取り上げてみた。



第467図 富田細田遺跡C区洪水層下水田



第468図 荒砥宮田遺跡・荒砥前田遺跡洪水層下水田

(1) 荒砥前田遺跡

調査年次 昭和56年。

現在地 前橋市荒口町。

確認場所 約2,000m²。

埋没土 層厚10cm前後の灰白砂層と、粒径5～10mm大の輝石安山岩や軽石からなる層厚20cm前後の礫層で構成されている。

耕土 黒泥土に近い粘質土で、多量のAs-Cと少量のHr-FPを含む。

区画 形状や面積の確認できる20の区画と、用水路1条が検出された。各区画の規模は、長方形を基調として最大32×8m(面積157m²)から最小4×2m

(面積7m²)のものまであり、一定していない。

時期 氾濫層の層位的な位置からみてその下限は1108(天仁元年)のAs-B降下以前であり、かつ水田の耕作土中の榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)の存在から、その上限は6世紀中葉以降に比定できる。また少量であるが耕作土上面より出土した土師器の年代を重視すれば、水田埋没時期は9世紀前半に比定される可能性が高い。

(2) 荒砥宮田遺跡

調査年次 昭和58年。

現在地 前橋市荒口町。

確認場所 1区の南端。

埋没土 砂礫。

耕土 耕作土に榛名山二ツ岳軽石を含み、この水田上にB軽石水田が検出されている。

時期 古墳時代後期以降、平安末以前である。

(3) 下増田越渡遺跡

調査年次 平成8・9年。

現在地 前橋市下増田町・上増田町。

確認場所 A1区、B1区、C区、D1・2区、E区。

埋没土 黄褐色砂質土（E区南壁）。

耕土 灰色粘質土+淡黄色粘質土 Bk（E区南壁）。

区画 区画のわかるものはE区の7区画で、112.30～217.00m²と一定しない。平均面積152.50m²。

時期 8世紀後半～9世紀中頃（洪水層下水田の下位・上位で確認された竪穴住居の時代・時期から推定した）。

(4) 中原遺跡群Ⅰ

調査年次 平成4年。

現在地 前橋市上増田町。

確認場所 B～D₂区。

埋没土 褐灰色粗砂層。818(弘仁9)年洪水層。粘性を有し、締まりややあり。上部にHr-FP(榛名二ツ岳伊香保テフラ：6世紀中葉降下)、下部に細砂が入り、亜角礫や角礫に富む。平均約30cmの厚さ。

耕土 褐灰微砂層。平安時代水田畦畔確認層。粘性・締まりともにあり。

区画 長方形・台形・平行四辺形など多種多様であった。形や面積に規格性がみられず、条里制に起因する水田とは様相を異にしている。畦畔に囲まれた1つの水田単位を全面確認できたのはわずかであり、確認された水田面は61区画である。

時期 奈良・平安時代。

(5) 中原遺跡群Ⅱ

調査年次 平成4年。

現在地 前橋市上増田町・笈井町・今井町。

確認場所 ほぼ全域。

埋没土 褐灰色粗砂層。礫を含む818(弘仁9)年洪水層(A2・3区、B2区)。

耕土 褐灰色土層。粘性・締まりあり。Hr-FP粒とAs-C軽石粒を含む。(平安時代水田層)。

区画 条里地割れにもとづく方形区画が大半を占めるが、それ以外に変則的区画のものもあり、方形状の変則区画や楕円状の区画が見られる。また地形(水路、溝等の方向や地形)に合わせたものなどがある。水田一区画の形状や面積は規則性が見られず、区割制の水田とは様相を異にしているところもある。

時期 平安時代。

(6) 中原遺跡群Ⅳ

調査年次 平成6年。

現在地 前橋市上増田町。

確認場所 A区、B区。

埋没土 褐灰色粗砂層。818年洪水層。粘性を有し、締まりややあり。上部にHr-FP(榛名-伊香保テフラ：6世紀中葉降下)、下部に細砂が入り、亜角礫や角礫に富む。

耕土 褐灰色微砂層。平安時代水田畦畔確認層。粘性・締まりともにあり。

区画 約109m間隔の大畦畔によって方格に区画された条里制の水田址で、坪内部の土地区画は、半折型であるといえよう。

時期 平安時代初期。

(7) 中原遺跡群Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ

調査年次 平成5・6・7年。

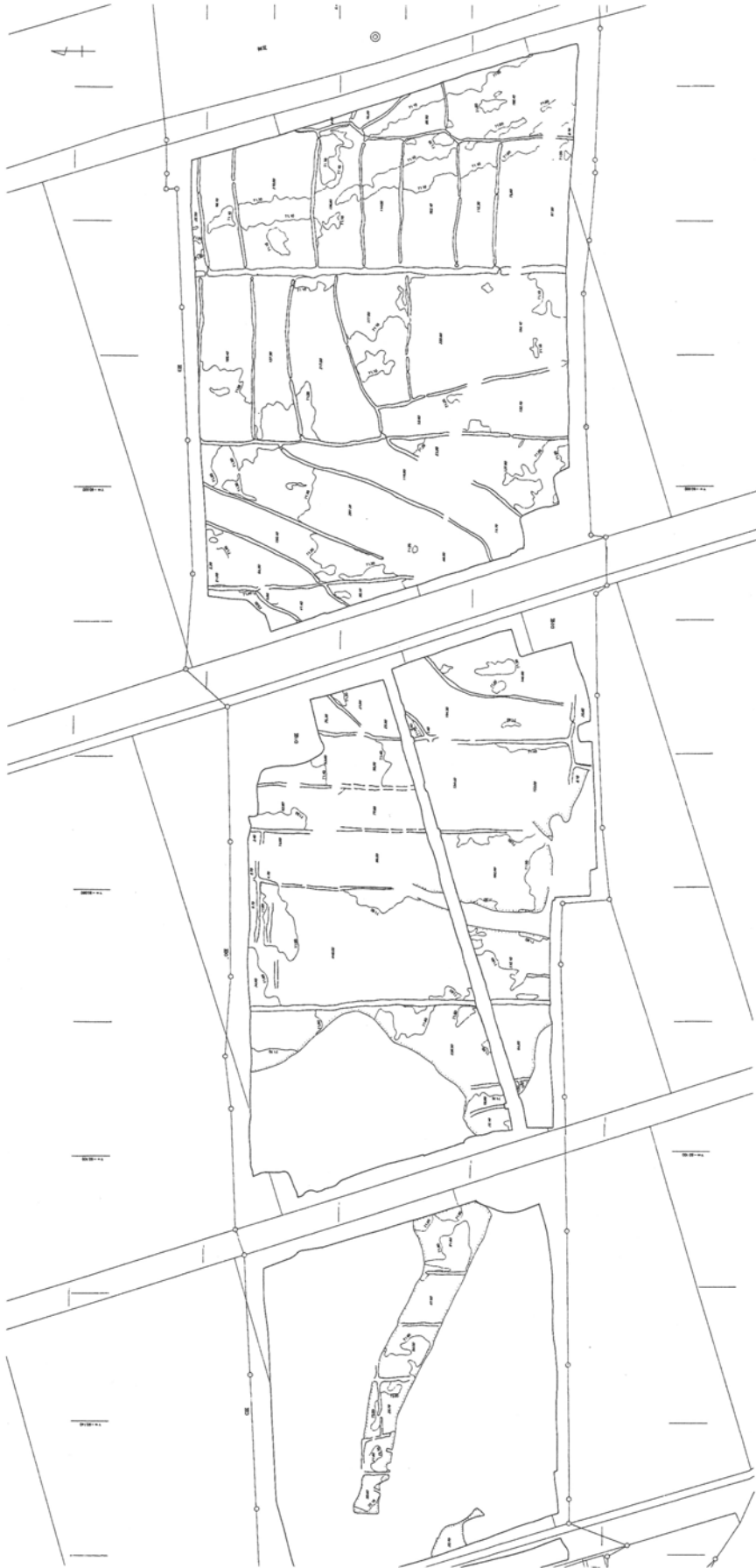
現在地 前橋市上増田町・笈井町。

確認場所 Ⅲ(B5区、C3～5区、D3～5区)、Ⅴ(D2・3・4・6区、E2・3・4・6・7区、F3・4・6・7区)、Ⅶ(C4区、D4・5区、E4・5区)。

埋没土 灰褐色細砂粗砂層。小礫を含む(818年洪水堆積層)。10～47cmの厚さで堆積。

耕土 褐灰色土層。粘性・締まりあり。Hr-FP粒をわずか含む(平安時代水田層)。

区画 東西・南北方向の大畦畔が検出され、角度も東西・南北方向にはほぼ直交する。また中原遺跡群Ⅱで検出した大畦畔とつながりを持ち、約109mの間隔にあてはまり、坪境をなすが、小畦畔は規則性が



第469図 下増田越渡遺跡洪水層下水田



第470図 中原遺跡群A・B区水田

見られず、地形に沿った変則区画（曲線や斜め）が多くみられる。さらに条里制区割りにみる長地型や半折型にあてはめてみると、部分的に半折型（東西12間、南北30間）に類似するところもあるが、ほとんど区割りが崩れ、水田面積も統一性がなく大小様々な区画をなしていた。

時期 平安時代。

6 課題

細田遺跡C区の水田を埋めた洪水はいつ起きたのか。水田の時期を決定する鍵層として、この洪水層が注目される。中原遺跡群で確認した洪水層下水田

跡は『類聚国史』に記される、818(弘仁9)年の地震に起因する洪水堆積物で埋没した水田跡として、とらえられている。細田遺跡C区で確認した洪水層が、818年の地震に伴うものと確定する証拠は、現段階ではない。逆にその可能性を完全に否定することはできない。またこの水田跡は条里水田の地割りや規模とはその内容を異にしていた。この水田の営まれた時期を含め、奈良・平安時代の条里制水田の変遷の上で、この水田跡がどのように位置づけられるのか検討するのが課題である。

(平成16年3月 成稿)

第3節 富田宮下遺跡出土土器の変遷

富田宮下遺跡の調査において弥生時代から奈良・平安時代にいたる間の竪穴住居103軒を検出したことは第4章で報告してきたとおりである。ここではこれらの竪穴住居から出土した土器を分類し、その変遷について検討を加え、次節において居住域の変遷を検討するための基礎的作業をしたい。

1段階 C区16号住居出土の土器に代表される。器種は、壺、甕、小型台付甕が見られる。

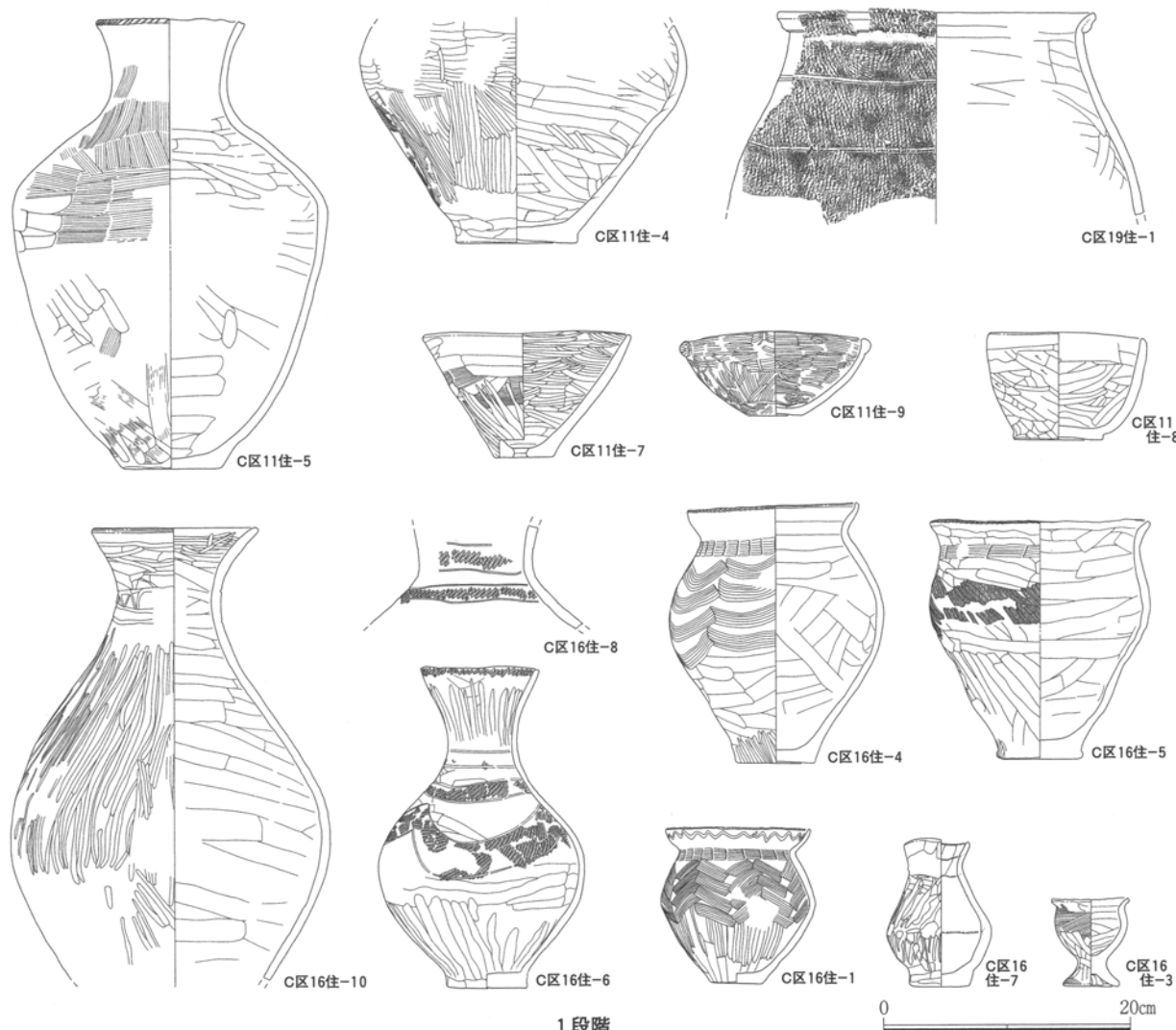
壺は、大・中型と小型のものが見られる。大・中型には漏斗状の口縁部を有し、頸部あるいは胴部上半部に区画内の帯縄文を配すもの(6・8)と頸部の沈線区画内に山形文を配するもの(10)の2者がある。

小型品は無文である。

甕は、中・小型のものが見られる。いずれも頸部に等間隔簾状文を施しているが、胴部上半の文様が、縄文施文のもの(5)と羽状あるいはその崩れたものと考えられる弧状の櫛描文が施したもの(1・4)に細分できる。

C区16号住居の他にこの段階と考えられるものとして、C区11号住居の壺(5)がある。この壺は、強く張った肩部から緩やかに外反して立ち上がる口縁部が延びる形状を呈するもので、口縁部先端にヘラ状工具による刻みが一周している。器面の調整はハケメの上にヘラナデを重ねている。鉢、赤色塗彩の鉢、有孔鉢などと伴に出土している。

C区19号住居出土の短頸壺(1)は折り返し口縁か



第471図 富田宮下遺跡出土土器の変遷(1)

ら続く胴部外面に縄文を施文している。

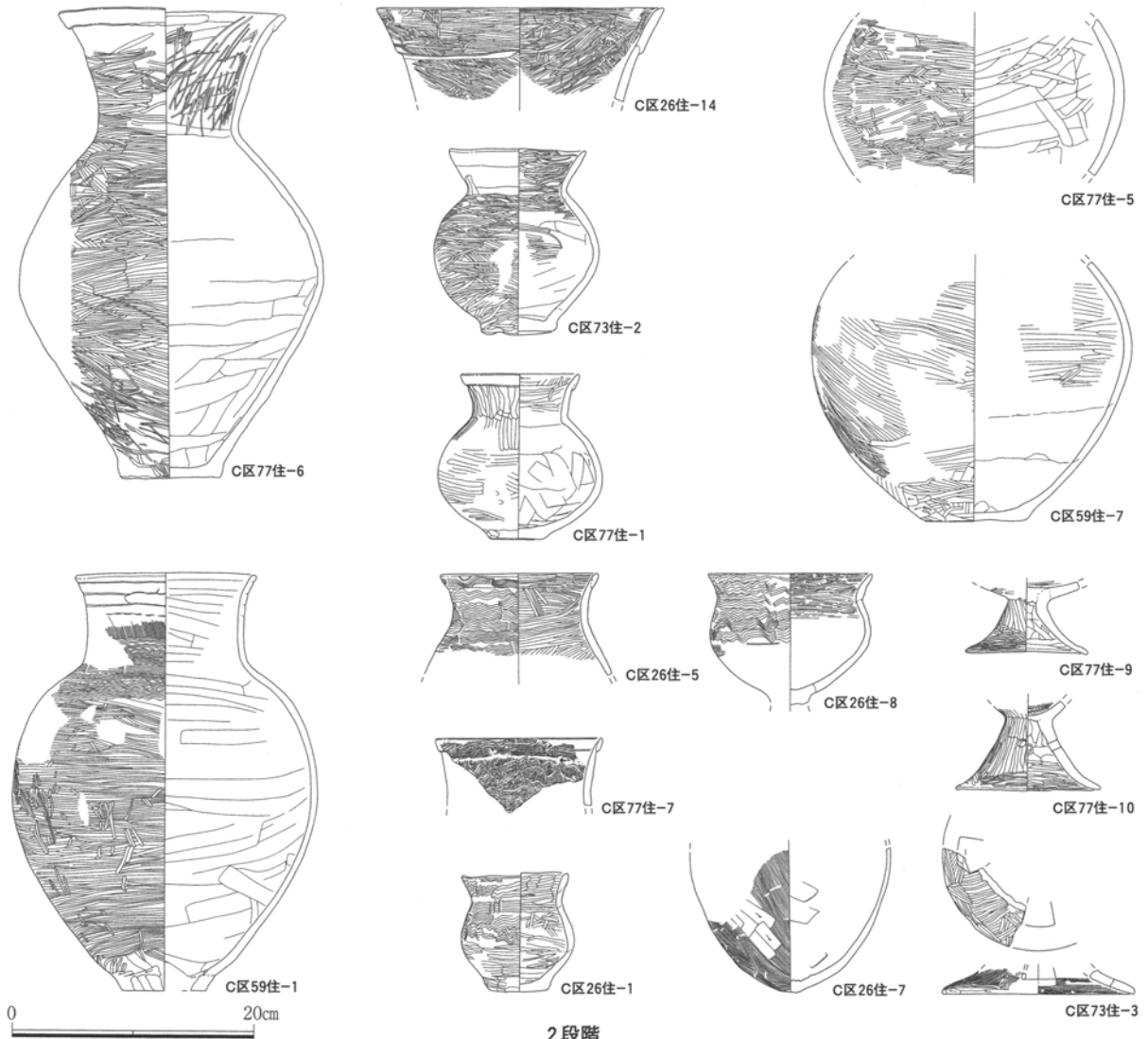
2段階 C区26号・59号・73号・77号住居出土の土器に代表される。器種には壺・甕・台付甕・高杯・鉢が認められる。

壺・甕には櫛描文による波状文・簾状文を施したものと口縁部に輪積痕の見られるものが多くある。縄文を施文する事例は認められなかった。

壺は大型品では胴部から口縁部が外反して長く立ち上がる形状のもの（C区77住-6）がある。小型品では球形の胴部を有するもの（C区73住-2・77住-1）がある。いずれも甕に比して頸部がくびれ、口縁部が著しく外反して立ち上がる形状である。この他に胴部が球形を呈するもの（C区77住-5・59

住-7）がある。甕は、頸部にしまりが無く、緩やかに外反して立ち上がる口縁部を有するものが見られる。口縁部には輪積み、あるいは折り返しの技法が見られる（C区26住-5・59住-1・77住-7）。小型品（C区26住-1）も見られた。この他に口縁部の形状が不明であるが不安定な底部を有し、胴部にハケメを施したもの（C区26住-7）もある。台付甕は短い口縁部に半球形の胴部が続くもの（C区26住-8）がある。

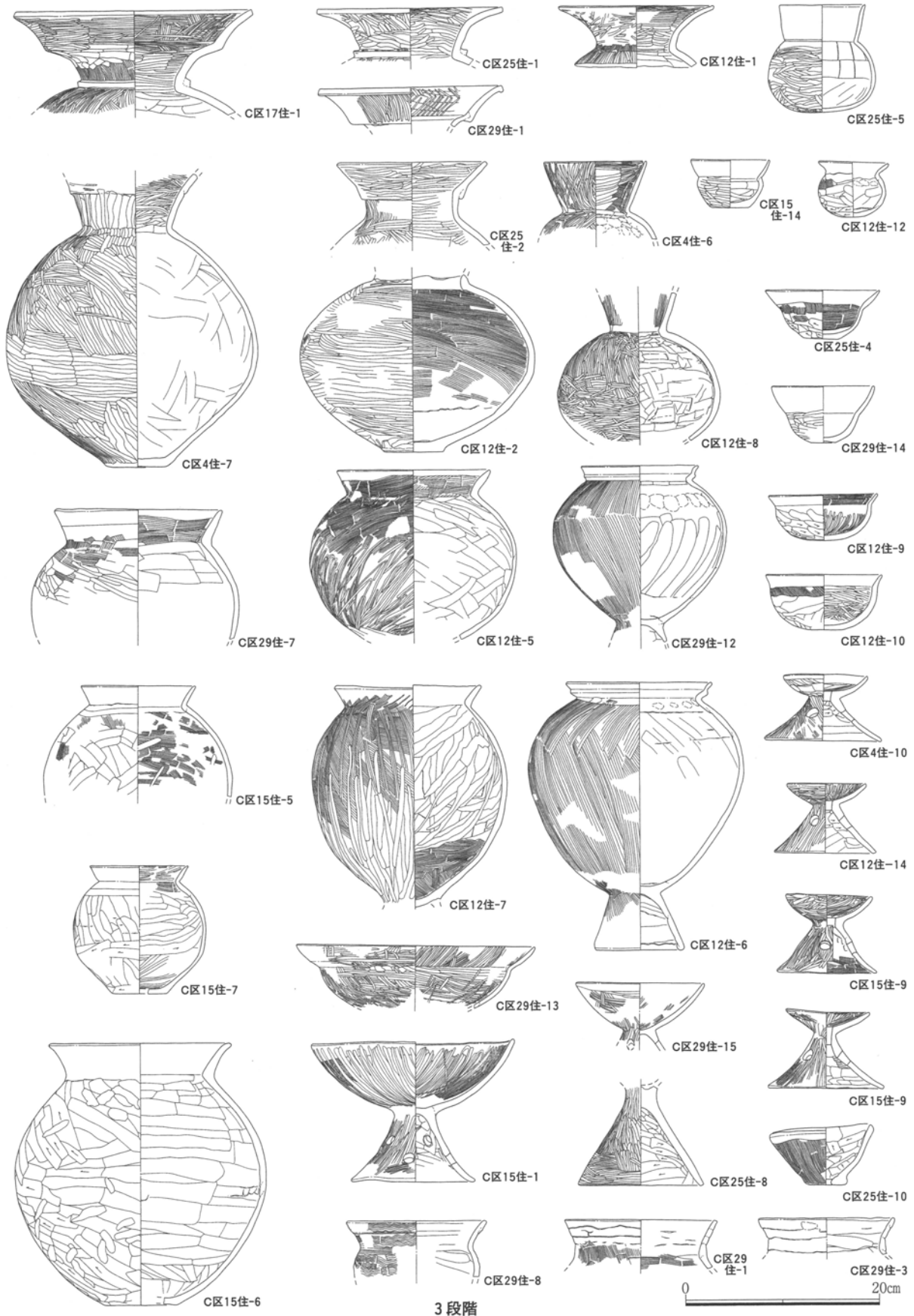
3段階 C区12号・15号・29号住居出土の土器に代表される。器種には壺・甕・高杯・器台・鉢・埴・有孔鉢が認められる。それぞれの器種ごとに細部の相違が多く見られる。



2段階

第472図 富田宮下遺跡出土土器の変遷(2)

第3節 富田宮下遺跡出土土器の変遷



3段階

第473図 富田宮下遺跡出土土器の変遷(3)

第6章 成果と問題点

壺は、口縁部の形状が、単純口縁のもの（C区25住-1他）と二重口縁のもの（C区17住-1他）がある。この他に口縁部がくの字状に外傾して直線的に立ち上がるもの（C区4住-6・12住-8・25住-5）が見られる。甕は、口縁部の形状が単純口縁のものとS字口縁のものがある。S字甕は脚台がつくもので、肩部にヨコ方向のハケメを重ねないもの（C区29住-12他）である。単純口縁のものにも台付甕（C区12住-7）がある。器台は、いずれも小型品で脚部が内彎するものはない。高杯は、良好な資料が少なかった。杯部は彎曲して斜め上方に向かって立ち上がるもの（C区15住-1）で、口径が裾部径を上回っている。埴は、いわゆる小型丸底土器である。口径が器高を上回る形状で丸底と平底がある。鉢は、口縁部が底部から屈曲後斜め上方に向かって立ち上がるもので大型品（C区29住-13）と小型品（C区12住-9・10）がある。この他に弥生土器の系譜を引くと考えられる高杯脚部（C区25住-8）、甕口縁部（C区29住-1・3）、甕（C区29住-18）、有孔鉢（C区25住-10）などが出土しているが客体的である。

4段階 A区5号住居に代表される土器群である。A区4号住居もこの段階と考えられる。多くの器種が欠落しており、土師器甕・埴・鉢・高杯が見られた。

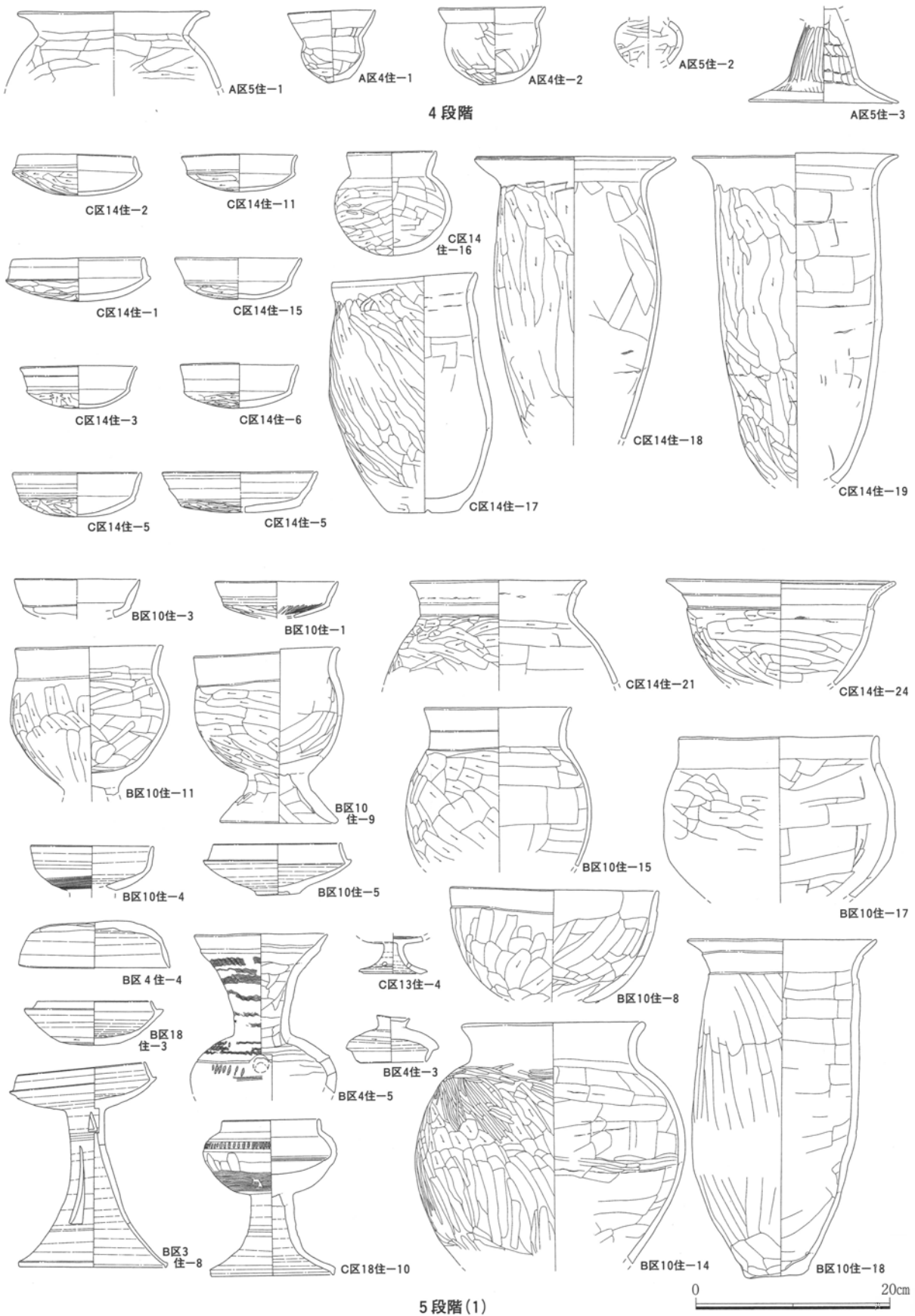
土師器甕は、口縁部がくの字状に立ち上がる形状（A区5住-1）で、外面の調整はヘラナデである。高杯の脚部（A区5住-3）は、いわゆる屈折脚である。埴・鉢（A区4住-1・2）はいずれもヘラナデ・ヘラケズリの調整が加えられている。

5段階 C区14号・C区55号・B区10号住居出土の土器に代表される。器種は、土師器杯・皿・甕・甗・壺・短頸壺・高杯・鉢と須恵器杯蓋・杯身・高杯・蓋（長頸壺か）・甗などが認められる。土師器杯は、須恵器杯蓋模倣のもので、外反する口縁部を有するもの（C区14住-11他）、外反する口縁部の中位に稜を有するもの（C区14住-5他）。この他に口縁部が内折して立ち上がる杯身模倣のもの（C区

14住-2他）が見られた。土師器皿は、浅い底部から口縁部が外傾強く立ち上がるもの（C区55住-3）である。土師器甕は長胴のもの（B区10住-18他）と丸胴のもの（B区10住-14他）の2者があり、さらに細別が可能である。外面の調整は、タテあるいは斜めタテ方向である。土師器台付甕は外傾弱く立ち上がる口縁部にハの字状に外反する脚台部が付くもの（B区10住-9他）が見られる。土師器鉢は、形状が半球形を呈するもの（B区10住-8）と口縁部が強く外反するもの（C区14住-24）が見られる。土師器壺は、大型品（C区14住-26）が出土している。土師器短頸壺は、丸底で、口縁部が上方に立ち上がるもの（C区14住-16・55住-8）と内傾気味に立ち上がるもの（C区55住-7）がある。土師器甗は、底抜けの大型品（C区55住-19）と有孔鉢形のもの（C区55住-11）がある。土師器高杯は、口縁部が大きく外反して立ち上がるもの（C区55住-10）が見られる。

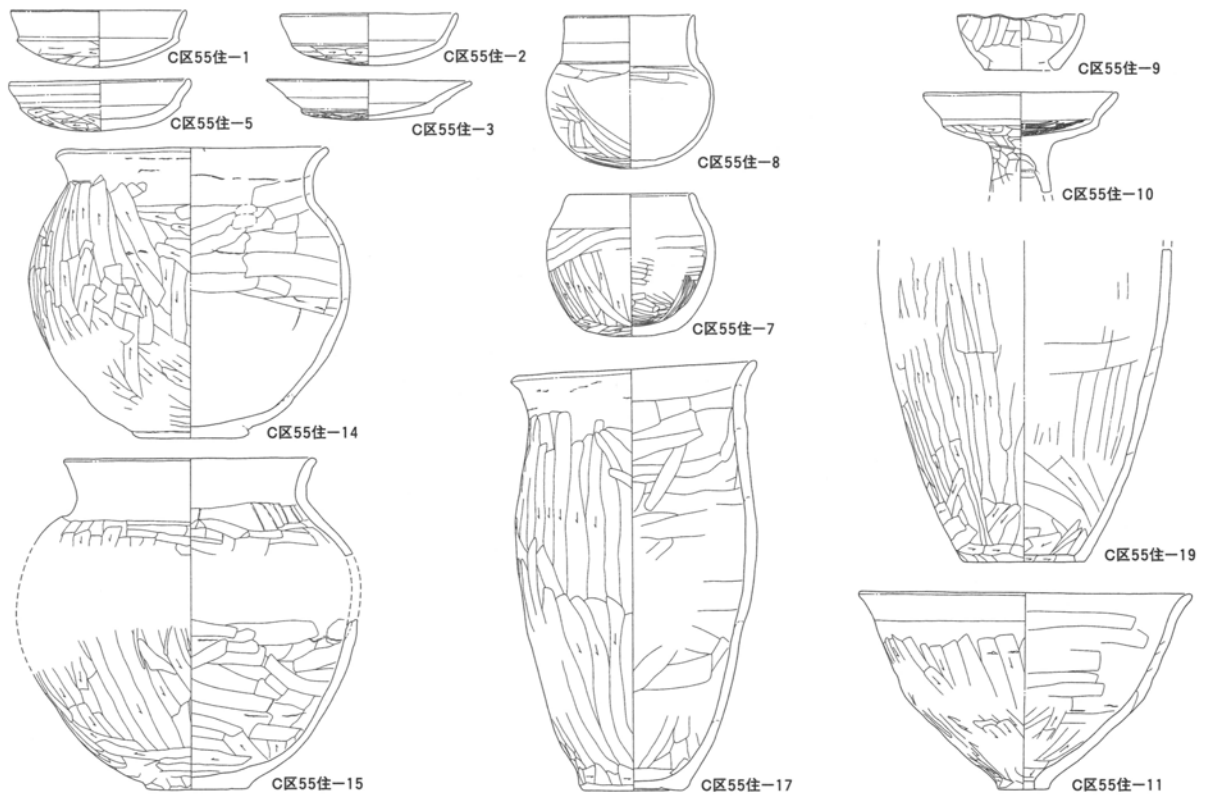
須恵器杯蓋（B区4住-4）は、大径で天井部は張らず平坦である。須恵器杯身（C区18住-3）は、口縁部が内傾して短く立ち上がる。須恵器高杯は無蓋のもの（B区10住-4）と有蓋のもの（B区10住-5・B区3住-8）がある。B区3住-8は長脚2段である。須恵器蓋（B区4住-3）は長頸壺の蓋の可能性はあるが、器肉が厚く、内面に大きなかえりが付いている。須恵器甗の器肉も厚く、粗雑な作りであった。

6段階 A区6号住居・C区41号住居出土の土器に代表される。器種は、土師器杯・甕・甗と須恵器甕が認められただけで、残存状況は不良であった。土師器杯は口縁部が丸底の底部から内彎して立ち上がる形状のもの（A区6住-1他）が見られた。これには大径のもの（C区41住-1）もある。土師器甕は、長胴のものと丸胴のものがある。長胴のものは口縁部の立ち上がりバラエティーがある（A区6住-11・12）。丸胴のものは小型品（A区6住-6）もある。土師器甗は底抜けで器高が低く、鉢状を呈していた（A区6住-7）。須恵器の良好な資料

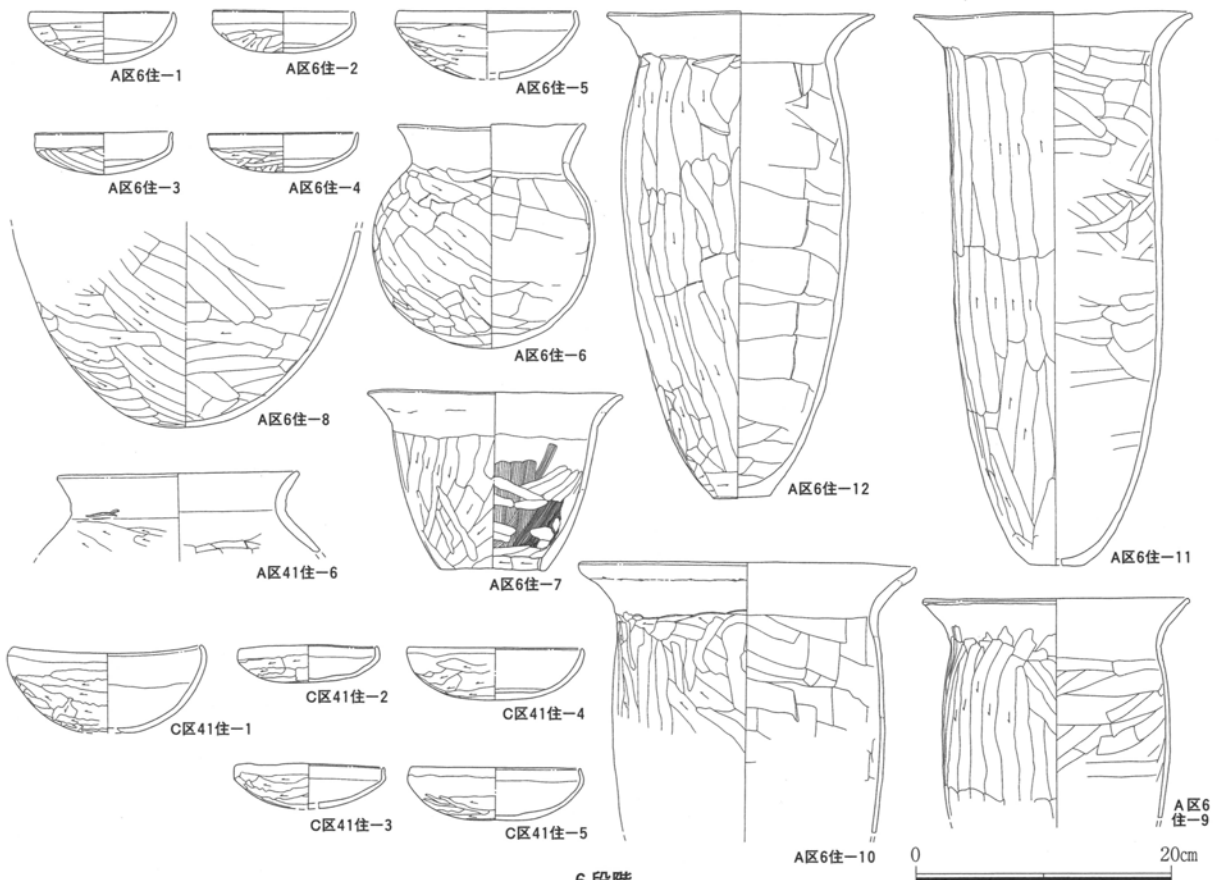


第474図 富田宮下遺跡出土土器の変遷(4)

第6章 成果と問題点

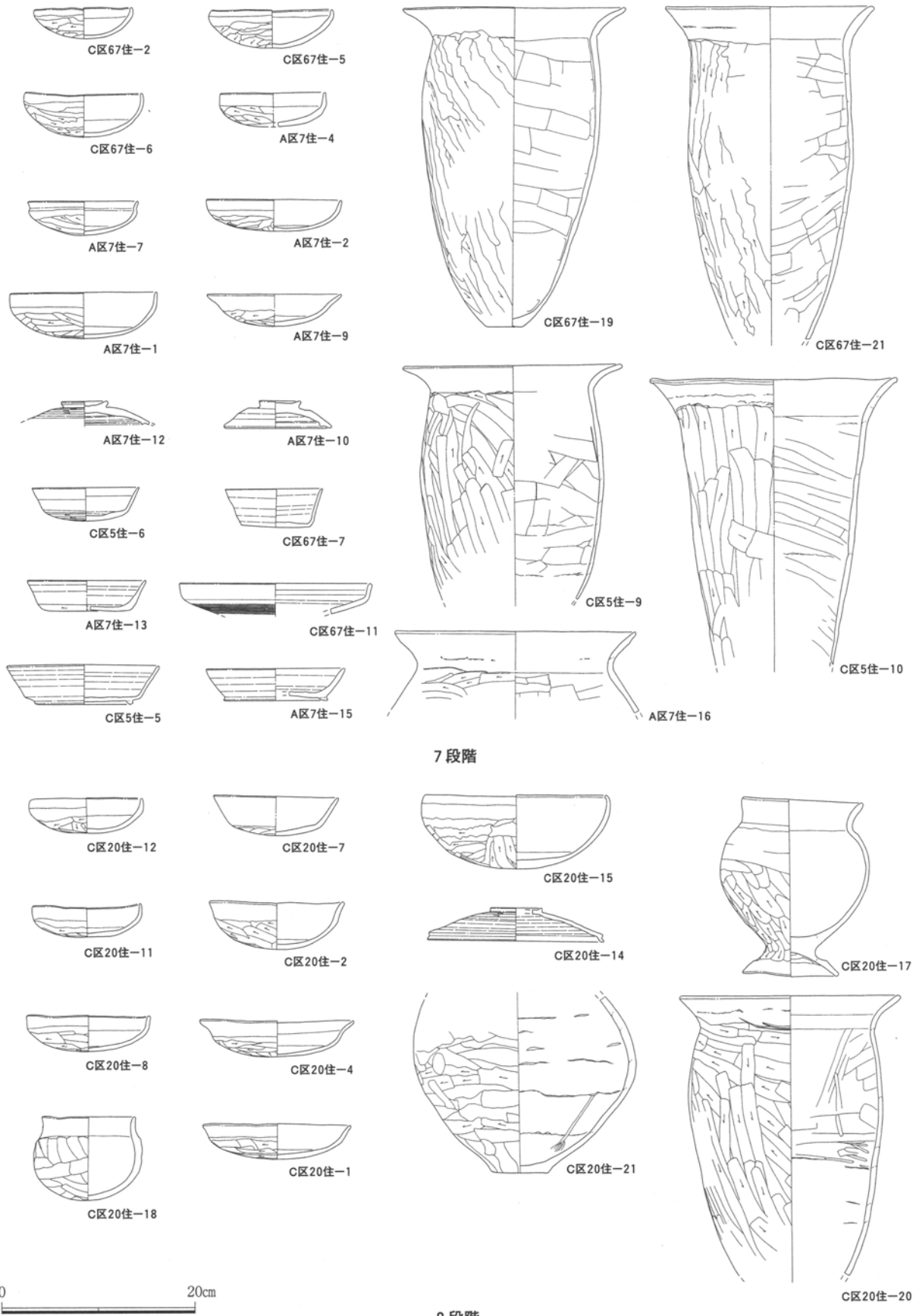


5段階(2)



6段階

第475図 富田宮下遺跡出土土器の変遷(5)



第476図 富田宮下遺跡出土土器の変遷(6)

の共伴はなかった。

7段階 A区7号住居・C区67号住居出土の土器に代表される。器種は土師器杯・甕と須恵器杯身・高台付杯・杯蓋・盤・甕・台付壺が認められる。

土師器杯は、口縁部が内彎して立ち上がる形状のもの（C区67住-2他）が多く見られる。内彎の度合いで細別可能である。皿状を呈し、口縁部が斜めヨコ方向に立ち上がる形状のもの（A区7住-9）が見られる。土師器甕は長胴と丸胴の2者が見られる。長胴のものは口縁部がラッパ状に大きく外反するもの（C区5住-10）と屈曲後外反して立ち上がるもの（C区67住-19）がある。丸胴のもの（A区7住-16）は口縁部がくの字状に立ち上がるものでヨコ方向のヘラケズリが見られる。須恵器杯身は、底部の調整が回転ヘラケズリのもの（C区5住-6）、手持ちヘラケズリのもの（C区67住-7）とヘラによる切り離しの施されたもの（A区7住-13）の3者が見られる。須恵器高台付杯は底径が大きく、低い断面台形の高台が付くもの（C区5住-5）である。底部は回転を伴うヘラ調整である。須恵器杯蓋は、内面の端部寄りに小さなかえりが見られた。つまみは環状を呈している（A区7住-10・12）。

8段階 C区20号住居出土の土器に代表される。器種は、土師器杯・甕・台付甕と須恵器杯蓋・甕・広口壺が認められる。

土師器杯は、口縁部が内彎して立ち上がるもの（C区20住-12他）、斜めヨコ方向に立ち上がる皿状を呈するもの（C区20住-1・4）、鉢状の大型品（C区20住-15）もある。土師器甕は、長胴のもの（C区20住-20）と丸胴のもの（C区20住-21）がある。この他に小型品（C区20住-18）も見られる。台付甕は口縁部がくの字状に屈曲して立ち上がるもの（C区20住-17）である。須恵器杯蓋は、天井部の張りが弱く環状のつまみが付く。端部は短く垂直気味に折れ、内面のかえりは消滅している（C区20住-14）。

9段階 C区35号・76号住居出土の土器に代表される。器種は、土師器杯・甕と須恵器杯・高台付椀が認められる。

土師器杯は、底部の形状が平底あるいはやや丸味を残す程度の形状となる（C区76住-3他）。この他に全体の器肉が厚手の作りのもの（C区76住-1・2）が見られる。土師器甕は口縁部が胴部から弱く屈曲した後くの字状に外反して立ち上がる形状である（C区35住-10・76住-10）。外面のヘラケズリは上位が斜めヨコ、以下が斜めタテ方向である。須恵器杯は底径が大きい形状で、底部の切り離しは回転糸切り（C区35住-10他）である。須恵器高台付椀は口縁部の深味を有し、高台部も高い（C区35住-5・C区76住-9）。

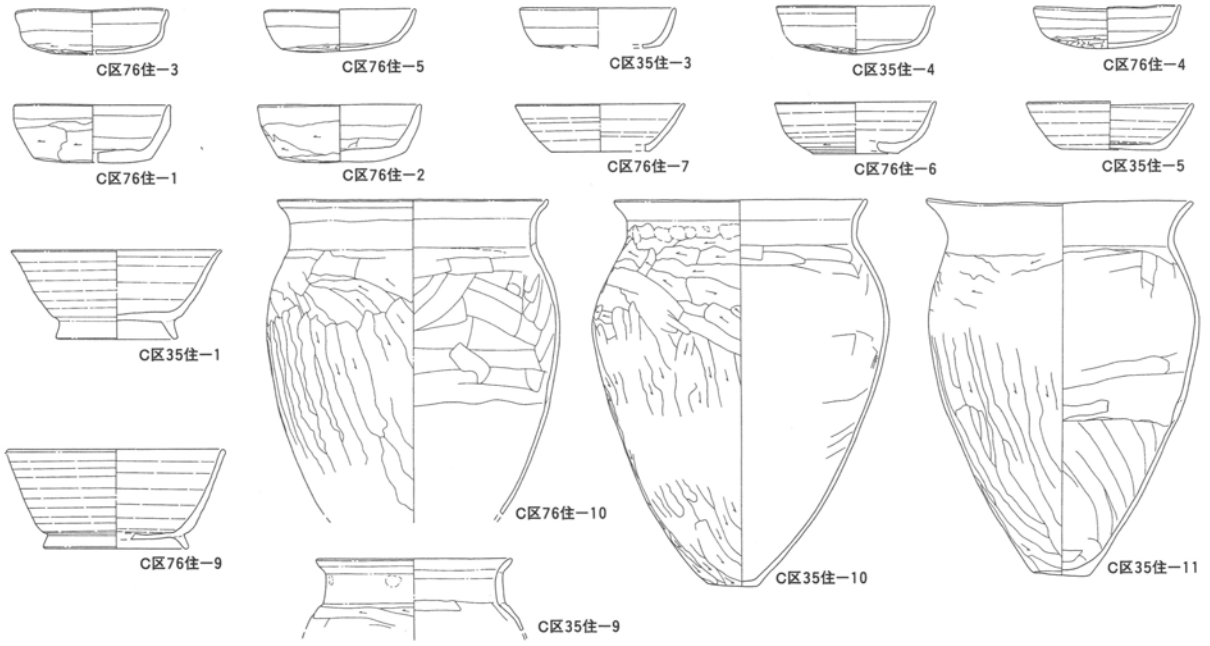
10段階 C区36号・70号・51号住居出土の土器に代表される。器種は、土師器杯・甕・台付甕と須恵器杯・高台付椀・高台付皿が認められる。

土師器杯は底部が平底のもの（C区70住-3）を主体に、やや丸味を残すものが少量見られる。土師器甕は口縁部の断面形がコの字状を呈している（C区36住-9・70住-14）。外面の調整は前段階と同様である。小型品（C区36住-6）もあるが台付甕となる可能性もある。土師器台付甕は口縁部の形状が不明である（C区70住-9）が、甕と同様の形状と考えられる。脚台部は低く、ハの字状に外反する。須恵器杯は底径が小さく、口縁部の先端が摘まれたように外反している（C区36住-5）。底部は回転糸切り離しである。高台付椀は高台部が低い形状である（C区51住-1）。高台付皿は口縁部が浅く、内彎気味に立ち上がるものと外反著しく斜め方向に延びるもの（C区70住-7）が見られる。

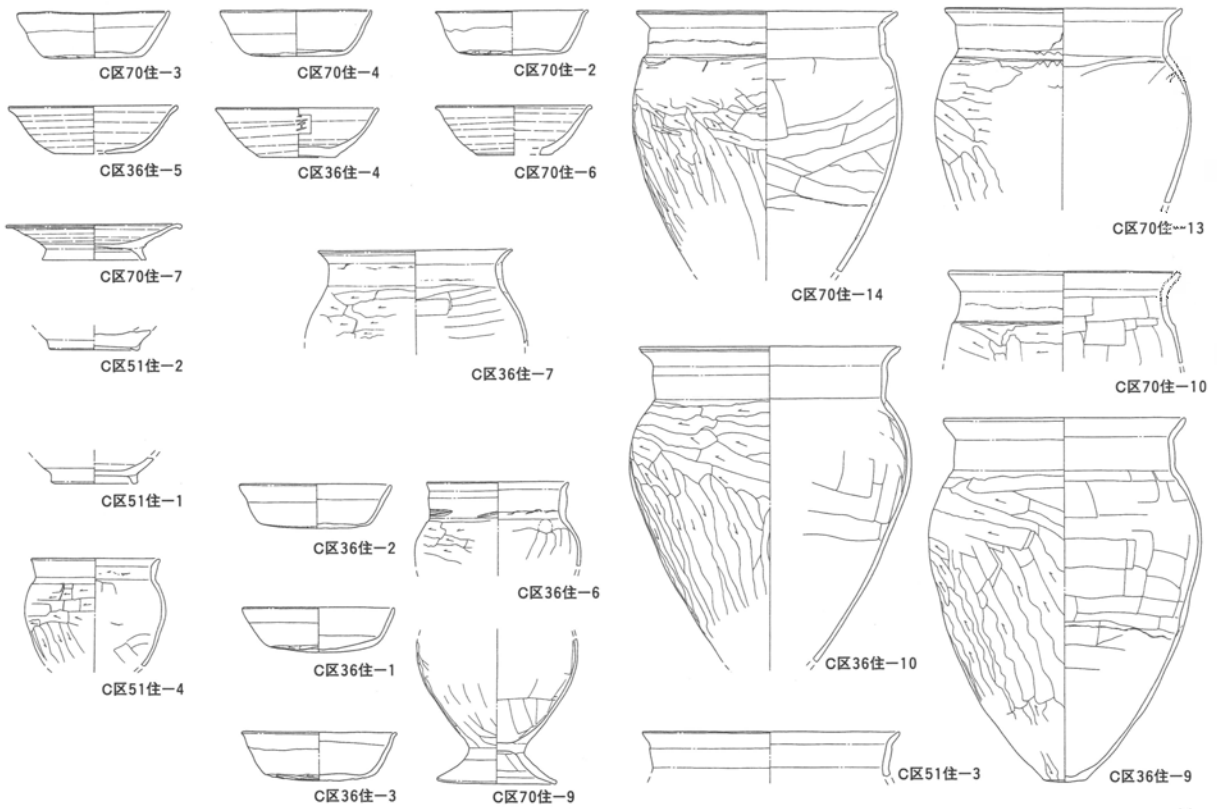
変遷のまとめ 1段階のC区16号住居出土の土器群は、弥生時代中期後半、栗林式段階に併行するものと考えられるが縄文施文を主体とする壺・甕、沈線、櫛描文を主体とする壺・甕が併存する点が荒砥北三木堂遺跡をはじめとした本遺跡周辺の同時期の土器群と共通する点である。

本遺跡周辺からの出土例を見ると帯縄文を施す壺の事例としては荒砥北三木堂遺跡壺2a類があげられる（注2）。甕の文様構成として胴部縄文施文例は同じ荒砥北三木堂遺跡甕1類・2類と、羽状文施文

第3節 富田宮下遺跡出土土器の変遷



9段階



10段階

第477図 富田宮下遺跡出土土器の変遷(7)

例である。

後述のC区11号・19号の2住居出土の壺は個々にみるとC区16号住居出土の土器群より古い様相を呈しているが他の共伴土器の形状、赤色塗彩鉢の存在

などを考慮すると古い段階に加えることには一考を要するものと考えられる。

2段階の土器群は弥生土器の特徴を有する櫛描文や口縁部に輪積み痕を有する点などが後述の3段階

例としては荒砥島原遺跡出土土器などが共通する事の土器群と区分される点である。また、小型器台や埴は認められない。1段階の土器群との間には時間的断絶が認められる。時期的な位置付けとすると弥生時代末から古墳時代前期の土器群と考えられるが大別すれば古墳時代前半に位置づけられよう。

3段階の土器群は土師器が主体となっている。S字甕の特徴からは古墳時代前期でも後葉に位置付けられる資料が多いが、甕の採用は必ずしもS字甕が主体ではない。C区15号住居のヘラケズリ・ヘラナデを施した甕はS字甕と共伴しているが、後出的な特徴を有している。

4段階の土器群は古墳時代前期から中期にかけての所産と考えられる。A区1号遺構址出土の土器もこの段階に含まれるものと考えられるが、住居出土の土器よりやや後出であろうか。

5段階と4段階との間には時間的断絶が存在する。土師器杯は内彎して立ち上がる口縁部や内斜口縁部の資料は無く、須恵器蓋模倣杯も外反、あるいは外傾気味に立ち上がる。土師器甕の長胴化も顕著となる。共伴する須恵器の形状からは6世紀後半を中心とする時期が考えられる。

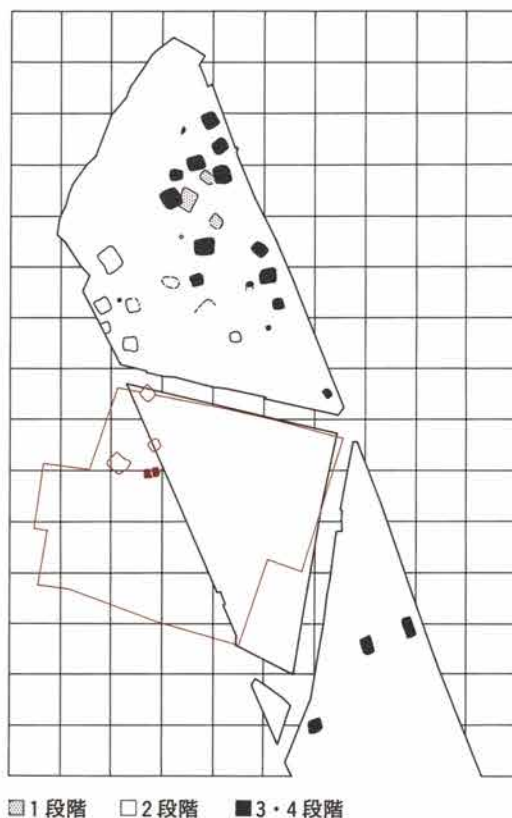
6段階になると土師器甕の長胴化は段階で頂点となり、7段階以降は短胴化に転じる。5段階の間にも短時間ながら時間的断絶が存在するものと考えられる。7世紀代とその前後の時期の所産と考えられる。

7段階の須恵器蓋は内面端部に小さなかえりを伴う形状である。8世紀前半の時期と考えられる。

8段階になると須恵器蓋には内面のかえりが消滅し、端部が折れ曲がる形状となる。8世紀後半の所産と考えられる。

9段階になると土師器杯の平底化は顕著になる。須恵器杯の底部調整は回転を伴う糸切り離しである。9世紀前半所産と考えられる。

10段階の土器群は土師器甕の特徴から9世紀後半以降の所産と考えられる。C区51号住居出土は土師器甕の口縁部が潰れ始めていることや須恵器高台付

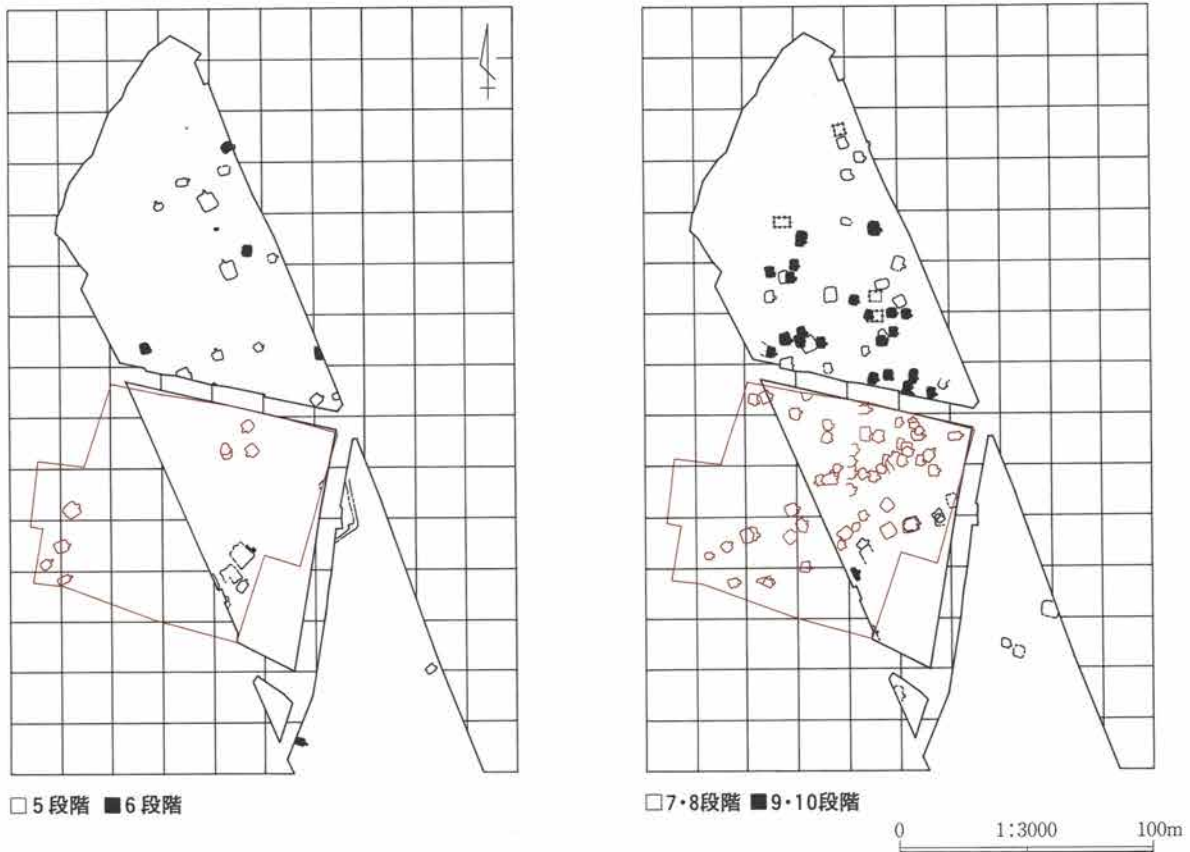


腕の高台部が低くなってきていることから本遺跡の中で最も新しい竪穴住居の一つとなると考えられるものの、羽釜や土釜が認められないことから10世紀代に下るものではないものと考えられる。本遺跡においては灰釉陶器の混入は極めて少量であった。

第4節 富田宮下遺跡における竪穴住居の構成と居住域の変遷

ここでは土器の分析作業に基づいた居住域の変遷状況について竪穴住居の構成も加味しながら検討しておきたい。

1段階（弥生時代中期後半） この段階の築造と考えられる竪穴住居は3軒である。3軒は大・中・小型に分類できる。平面形はいずれも長方形で、炬の位置が床面の中央からやや壁寄りであることが共通している。検出数が少数であるため、全体的な立地傾向が把握されているか否か懸念されるものの台地縁辺からやや内部に入り込んで分布していること



第478図 富田宮下遺跡検出竪穴住居の変遷

が確認できる。

2段階（弥生時代末～古墳時代前期） この段階に比定できる竪穴住居は8軒である。その規模には大・中・小型の住居が見られた。平面形は、大・中型が長方形、中・小型が正方形である。炉は2本の柱穴を結んだ線上に位置している。ベッド状遺構をもつ例が4例あった。

1段階との間に若干の時間的断絶を経ているものの台地内部のやや西寄りの小範囲に展開している。

3段階（古墳時代前期） この段階に比定できる竪穴住居は13軒である。住居の構成は、大・中・小型がある。C区25号住居が長方形の他は正方形を基本としていた。炉は2柱穴を結んだ線上より中央寄りに位置している。

その分布は、2段階がC区西側寄りに集中していたのに対し、3段階ではその中心がC区東側になるとともにその範囲をA区沖積地寄りの台地縁辺にま

で拡大している。

4段階（古墳時代前期～中期） この段階に比定される竪穴住居の検出数は2軒となり3段階から著しく減少している。

5段階（古墳時代後期） この段階に比定される竪穴住居は20軒である。大・中・小型が見られたが、小型の住居が多く検出された。平面形も正方形、縦長長方形、横長長方形と多種であった。竈は東壁あるいは北壁中央付近に設置されていた。大型住居では支柱穴4本が検出されたが、中・小型ではその存在が不明瞭であった。

その分布はA区の台地縁辺からC区の台地内部まで間隔を保ちながらも広範囲におよんでいた。

6段階（7世紀） この段階に比定される竪穴住居は6軒であった。規模は中型2軒、小型4軒で、平面形は統一性が無く、正方形、縦長長方形、横長長方形が見られた。

広範囲にわたり散漫に分布しており、一時期に群をなすことは無かったものと考えられる。

7・8段階（奈良時代） この段階に比定される竪穴住居は27軒である。大・中・小型が存在する。平面形は、正方形か横長長方形が主体であったが、B区15号住居は縦長長方形であった。竈は東壁の中央からやや南寄りに設置されていた。大・中型住居では4本の柱穴が検出された。

その分布は、台地内部を中心に、一部台地縁辺部にいたる範囲まで分布していた。

9・10段階（平安時代） この段階に比定される竪穴住居は21軒である。住居の規模は中・小型で、平面形は横長長方形を主体に縦長長方形が併存する状況であった。竈の位置は前段階と変化無く、主柱穴が検出されたものは無かった。

その分布は7・8段階同様台地内部に集中しており、小群に近いまとまりが認められた。ただし、台地縁辺寄りには見られなくなる。

居住域の変遷について 今回検出した竪穴住居からなる集落は赤城山南麓の南北方向に帯状にのびる洪積台地上に立地している。調査地点付近での幅は200mから450mである。台地の東側には荒砥川に沿った沖積地が、西側には大泉坊川に伴う沖積地が認められる。富田宮下遺跡の集落は、これらの沖積地を水田農耕の基盤として弥生時代中期後半の1段階以降展開してきたものと考えられるが各時期の居住域と生産域の対応関係については今回の調査成果からでは必ずしも明確にすることができなかった。

竪穴住居の分布からは、調査区内だけを見ると1段階と2段階の間、4段階と5段階の間に空白期が存在する。また、4段階と6段階も住居の形成数が激減している。これは集落の断絶と考えるより、居住域の中心が調査区外にその占地場所を移動したと考える方が妥当であることは4段階と5段階の間、5世紀後半の築造と考えられるおとうか山古墳や東原遺跡の群集墳中の古墳の存在や、富田細田遺跡におけるプラントオパール分析の結果、Hr-FAの下層からも少量であったがイネが検出されていることか

らも想定されるものである。

1段階と2段階の間に空白期が存在するものの、弥生時代から古墳時代前期においては本台地上の居住域が台地の西側、大泉坊川流域の沖積地を生産域として成立していたことが予想される。1段階の集落は、富田宮下遺跡と富田西原遺跡の境界付近を北東方向に延びる小枝状の沖積地が大泉坊川の沖積地と合流する地点を生産域としていた可能性が考えられる。次の2段階では竪穴住居の分布が台地の比較的内部に展開する状況が認められ、3段階以後の住居の分布からは東側、荒砥川流域の沖積地をも生産域としたような立地に変化していることが見て取れる。ただし、荒砥川縁辺の沖積地がどの段階で開田されたかについては不明である。先にあげた古墳分布の在り方からすれば5段階までには徐々に生産域として安定したものとなっていったものと考えられる。

9・10段階の竪穴住居は、本調査および宮下遺跡の調査成果をあわせるとこの段階の竪穴住居が最も多く検出されている。この段階の沖積地においては、富田細田遺跡で検出されたよう818(弘仁9)年に起きたと考えられる洪水により荒砥川縁辺の水田が被災している。被災水田がどのようにして復旧されたかについては調査成果から具体的に明示することはできないが、この水田は比較的早く耕地(畠地に転換された可能性もあり)に復旧されたものと考えられる。その結果、水田に接する台地上の縁辺のみならず奥部まで台地全体が居住域として利用されることとなったものであろう。ただし富田細田E区では畠跡が検出されたことから高標高地では一時期、荒砥宮田遺跡や荒砥前田遺跡のように畠地への転換がなされた可能性もある。

今回の調査においては10段階以降、竪穴住居の検出は無かったが、富田宮下遺跡の集落はその後も継続して形成されていたと考えられる。それは富田細田遺跡E区で検出された1号溝や富田細田遺跡C区・E区及び富田宮下遺跡A区で検出された浅間B軽石下の水田の存在から充分裏付けられることである。

第4節 富田宮下遺跡における竪穴住居の構成と居住域の変遷

第27表 富田宮下遺跡検出竪穴住居一覧

※規模〈 〉は残存値を示す

区	No	時代 時期	グリッド	規 模 (長軸×短軸)m	面 積 ㎡	主 軸 方 位	竈 (炉)	掲 載 遺物数	本 文 頁	観察表 頁	写真図版頁		
											遺 構	遺 物	
C	11	弥生中 1段階	65D・E-5・6、65F-6	〈5.06〉×3.58	15.15	N-39°-E	炉	19	85~87	9・10	25	104	
C	16		65F・G-3~5	7.91×6.08	45.25	N-31°-W	炉	20	87~91	10・11	25・26	105	
C	19		65D-1~3、65E-2・3	〈4.20〉×3.78	不明	N-26°-E	炉	11	91~94	12	26	106	
C	26	弥生末 ~ 古墳前 2段階	55L・M-18~20、55N-19・20	8.86×6.90	57.66	N-35°-W	炉	22	94~98	12~14	26・27	106・107	
C	27		55M-13・14	4.02×〈2.78〉	不明	N-21°-W	炉	6	99・100	14	27	107	
C	53		55B・C-13	3.86×3.78	12.51	N-5°-W	炉	4	100~102	15	28	107	
C	58		55G・H・I-17・18	不明	(20.34)	不明	炉	6	102・103	15	28・29	107	
C	59		55E-15・16、55F-15	〈6.75〉×〈3.71〉	不明	N-38°-E	不明	9	103~105	15・16	29	108	
C	73		55K・L-12・13	5.50×4.99	22.77	N-2°-W	炉	4	106~108	16	30	108	
C	77		55M・N-15・16	5.15×5.00	22.31	N-30°-W	炉	12	108~111	17・18	31~33	108・109	
C	80		55J・K-15・16	4.84×4.83	19.75	N-13°-W	炉	15	111~113	18・19	33	109	
C	4		古墳前 3段階	65D-10・11、65E-9~11	5.78×5.77	31.69	N-27°-W	炉	13	124~127	19・20	34・35	112
C	6			65C・E-8、65D-7~9	5.00×4.96	(19.91)	N-34°-W	炉	7	128~130	21	36	112
C	12	65E・F-6・7、65G-7		6.32×5.13	27.06	N-20°-W	炉	14	130~134	21~23	36・37	113	
C	15	65G・H-3~5、65I-4		6.76×6.52	38.20	N-31°-W	炉	17	134~139	23・24	38	114	
C	17	65C・D-5・6		6.17×6.12	(32.42)	N-12°-W	炉	2	139~141	25	39	115	
C	21	65G-9		〈2.10〉×〈1.18〉	不明	不明	不明	1	141・142	25	39	115	
C	24	54T-19・20、55A-19・20		5.34×4.26	(22.05)	N-40°-W	炉	4	142~144	25	39	115	
C	25	55D-20、55E・F-19・20、65E・F-1		7.17×5.88	36.38	N-7°-W	炉	10	144~147	25・26	40	115	
C	29	54T-17・18、55A-17・18		6.24×5.60	(31.24)	N-4°-W	炉	15	148~150	26・27	41	115	
C	32	55A・B-17		2.23×1.70	不明	不明	不明	1	150・151 264・265	28	-	-	
C	34	54ST-15・16		3.86×3.60	(10.84)	N-10°-W	炉	10	151・152	28	42	116	
C	43	54O・P-8・9		3.28×2.70	(8.32)	N-39°-W	炉	4	152・153	28・29	42・43	116	
C	57	55E・F-17・18		4.34×4.08	15.37	N-17°-W	不明	2	153・154	29	43	116	
A	4	古墳中 4段階		44L・M-8・9	5.53×〈2.36〉	(23.75)	N-14°-W	不明	2	123・124	19	34	112
A	5			44P・Q-2・3	5.04×4.96	(20.84)	N-7°-W	不明	3	154・155	29	34	116
A	1	古墳後 5段階 6段階	44G・H-6・7	3.57×3.16	9.45	N-48°-E	東壁	1	160・161	31	45	-	
B	2		45C・D-12	〈2.50〉×〈2.37〉	不明	N-27°-E	北壁	3	161・162	31	45	117	
B	3		45B・C-13・14	4.47×2.99	11.61	N-53°-E	北壁	11	162~164	31~33	45	117	
B	4		45C・D-14・15	〈5.76〉×〈3.52〉	不明	N-53°-E	東壁?	7	164~167	33・34	46	117・118	
B	5		45B・C-14、45C-15	4.18×4.00	不明	N-30°-W	南壁	3	167~169	34	46	118	
B	10		45A-16、45B・C-15~17	8.02×7.89	(55.45)	N-48°-W	北壁	22	169~175	34~36	46	118・119	
B	13		54P-1・2	2.68×1.00	不明	N-23°-W	不明	2	175・176	36	47	-	
B	16		45D・E-13・14	6.18(南北長のみ)	不明	不明	不明	2	176・177	36	47	-	
C	3		65H-3、65I-3・4	3.39×2.46	6.01	N-23°-W	北壁	2	178・179	36	47	120	
C	9		65C・D-9	4.04×2.97	9.38	N-78°-E	東壁	5	179~181	37	48	120	
C	13		65F・G-5	4.50×2.64	9.58	N-80°-E	東壁	7	181~184	37・38	48	120	
C	14		54T-19・20	3.16×2.74	6.08	N-75°-E	東壁	29	184~190	38~40	49	121・122	
C	18		65D・E-3・4	6.60×6.32	33.57	N-25°-W	北壁	15	190~194	41	50	123	
C	38		55A-12	3.10×2.96	7.40	N-60°-E	東壁	1	194・195	42	50	123	
C	42		54N・O-8、54O-9	〈2.76〉×2.63	不明	不明	不明	1	196・197	42	51	123	
C	44		54P・Q-7・8	4.10×3.87	13.03	N-46°-E	東壁	8	197~199	42	51	123	
C	55		55C・D-17~19	6.14×5.28	28.90	N-20°-W	北壁	21	200~204	43~45	52	124	
C	62	55D-11・12	3.46×3.20	8.91	N-19°-W	北壁	1	205・206	45	51	124		
C	65	55F-10、55G-10・11	4.69×4.28	(17.90)	N-79°-E	東壁	7	206~209	45	51	124・125		
A	6	44Q・R-1	3.59×2.40	7.79	N-94°-E	東壁	12	209~212	46	53	125		
B	12	45A・B-16、45B-17	〈4.60〉×〈1.14〉	不明	N-65°-E	東壁	1	212・213	47	54	-		
C	7	65C-7・8、65D-8	3.94×3.72	10.31	N-53°-E	南東隅	9	213~215	47	54	126		
C	23	55A・B-19・20	3.90×3.52	10.97	N-103°-E	東壁	10	215~218	47・48	54・55	126		
C	41	55P-11・12	4.60×〈3.13〉	不明	不明	不明	6	218・219	48・49	55	126		
C	63	54D・E-9	不明	不明	不明	東壁	4	219・220	49	55	127		
C	71	55I・J-12	4.12×3.58	(12.63)	N-70°-E	東壁	8	221・222	49	56	127		
A	2	奈良 7段階 8段階	44K・L-7・8	4.39×3.53	(12.37)	N-102°-E	東壁	4	225~227	50・51	57	127	
A	3		44L・M-8・9	3.23×3.12	7.65	N-98°-E	東壁	2	227・228	51	57	127	
A	7		44I-10~12、44H-10・11	〈5.77〉×〈5.46〉	(27.22)	N-2°-W	東壁	18	228~232	51・52	57・58	127・128	

第6章 成果と問題点

区	No	時代 時期	グリッド	規模 (長軸×短軸)m	面積 ㎡	主軸 方位	竈 (炉)	掲載 遺物数	本文 頁	観察表 頁	写真図版頁	
											遺構	遺物
B	0	奈良	44S・T-17・18	5.44×5.42	(24.62)	N-78°-E	東壁	3	232・233	52	58	-
B	1	7段階	45B-9、45C-9・10	〈4.53〉×〈1.62〉		N-57°-E	東壁	3	233・234	53	58	128
B	7	8段階	45C・D-15・16	4.48×〈4.00〉		N-48°-E	不明	5	235・236	53	58	128
B	8		44Q・R-18・19	4.73×3.27	(12.93)	N-87°-E	東壁	7	236~238	53・54	59	128
B	9		44P・Q-19・20	5.34×4.12	(18.59)	N-15°30'-E	東壁?	10	238~241	54・55	59	128・129
B	11		45C・D-16・17	〈4.10〉×3.68	(11.63)	N-54°-E	東壁	7	241~243	56	60	129
B	14		44Q・R-18・19	〈3.85〉×3.67		N-48°-E	東壁	4	243・244	56・57	60	130
B	15		44Q・R-18	3.43×2.21	(6.32)	N-48°-E	東壁	3	245・246	57	61	130
B	17		44A-4・5、54T-4・5	〈5.54〉×3.79		N-85°-W	東壁	6	246・247	57・58	61	130
C	5		65D・E-7・8	4.32×3.72	13.67	N-76°-E	東壁	11	247~250	58・59	62	130
C	8		65C・D-6・7	4.02×3.43	11.52	N-89°-E	東壁	3	250~252	59	61	-
C	10		65D・E-5・6	4.04×3.65	9.75	N-86°-E	東壁	9	252~254	59	62	131
C	20		65D・E-1・2	3.53×3.06	9.00	N-97°-E	東壁	30	255~259	60~62	63	131~133
C	28		54T-18・19、55T-18・19	4.93×3.86	15.94	N-108°-E	東壁	12	260~262	62・63	64	133
C	31		54T・55A-15・16	〈3.80〉×4.13		N-73°-E	東壁	9	262~264	63	64	133
C	33		55A・B-16・17	5.00×3.55	(15.45)	N-80°-E	東壁	8	264~266	64	65	134
C	39		55A・B-12・13	4.00×3.00	(10.58)	N-62°-E	東壁	8	266・267	64・65	65・74	134
C	45		54P・Q-8・9	3.03×〈2.98〉		N-109°-E	東壁	3	268・269	65	66	133
C	52		55C-11・12	3.40×2.66	(8.56)	N-90°-E	東壁	2	269・270	65	66	134
C	56		55I・J-10・11	〈4.82〉×4.50		N-82°-E	東壁	11	270~272	65・66	67	134
C	60		55E・F-15・16	5.15×4.73	20.87	N-87°-E	東壁	18	273~275	66・67	67	134・135
C	64		55F-10	不明	不明	不明	東壁	3	276	67・68	67	134
C	67		55G・H-11~13	5.84×5.71	(25.06)	N-30°-W	北壁	25	277~281	68・69	68・69	135・136
C	74		55J・K-15・16	4.17×3.17	10.57	N-87°-E	東壁	15	281~283	70	70	136
C	79		55I・J-17・18	4.52×3.18	(13.81)	N-86°-E	不明	9	283~285	71	70	136
C	1	平安	55H-20、65H-1	5.57×3.12	16.81	N-97°-E	東壁	22	285~288	72・73	71	137
C	22	9段階	55B・C-20、65B・C-1	5.02×3.94	16.11	N-93°-E	東壁	17	289~291	73・74	71	137・138
C	30	10段階	55D-15・16	〈2.80〉×〈2.60〉	(6.46)	N-105°-E	東壁	7	292・293	74・75	72	138
C	35		54T-14・15	3.36×2.96	8.41	N-98°-E	東壁	12	293~296	75・76	72	138
C	36		55A-14・15	3.84×3.53	(11.66)	N-91°-E	東壁	11	296~298	76・77	73	139
C	37		55A-13	3.38×2.82	(8.06)	N-93°-E	東壁	5	299・300	77	73	140
C	40		55A-12、55B-12・13	3.98×3.33	(11.58)	N-94°-E	東壁	9	300~302	77・78	65・74	140
C	46		54R-8・9	4.18×2.78	(9.85)	N-97°-E	東壁	10	302・303	78・79	74	140
C	47		54S・T-9・10	〈4.55〉×2.78	(9.94)	N-100°-E	東壁	8	304~306	79・80	75	141
C	48		54S・T-8	〈4.55〉×〈2.37〉		不明	不明	1	307・308	80	75	-
C	49		54T-8・9	〈3.60〉×〈2.66〉	(8.38)	N-104°-E	東壁	3	306・307	80	75	141
C	51		55B・C-9・10	3.92×3.30	(11.21)	N-100°-E	東壁	6	308・309	80・81	75	141
C	54		55C-14・15	3.84×2.86	9.74	N-97°-E	東壁	9	309~311	81	76	141
C	61		55H・I-18・19	3.70×3.04	(8.94)	N-93°-E	東壁	9	311~313	81・82	76	141
C	66		55F・G-12、55G-13	3.98×3.19	(10.26)	N-4°-E	東壁	1	313~315	82	77・80	142
C	68		55H-13	3.71×3.06	8.98	N-79°-E	東壁	8	315・316	82・83	77・80	142
C	70		55J・K-11・12	4.10×〈3.99〉	(13.18)	N-104°-E	東壁	17	316~320	83・84	78	142
C	72		55I・J-12・13	4.76×3.86	14.51	N-85°-E	東壁	10	320~322	84・85	78	143
C	75		55J・K-17・18	4.15×3.12	10.67	N-87°-E	東壁	11	322~324	85・86	79	143
C	76		55H・I-12・13	4.60×3.42	12.06	N-80°-E	東壁	13	325~327	86・87	79・80	143・144
C	78		55I-17・18	〈3.90〉×3.56		N-93°-E	東壁	5	327・328	87・88	81	144
B	6	不明	45D-14・15	〈3.72〉×〈1.37〉		N-62°-E	東壁	0	329	-	81	-
C	50	不明	55A・B-9・10	〈3.50〉×〈3.36〉	(9.41)	N-91°-E	不明	2	329	88	81	-

参考文献

- 群馬県『上毛古墳綜覧』1938
- 山崎 一『群馬県古城壘址の研究』上巻 1971
- 前橋市教育委員会『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』1979
- 前橋市教育委員会『富田遺跡群』1981
- 前橋市教育委員会『富田遺跡群・西大室遺跡群』1982
- 前橋市教育委員会『鶴谷遺跡群発掘調査概報』1980
- 前橋市教育委員会『鶴谷遺跡群発掘調査概報Ⅱ』1981
- 前橋市教育委員会『鶴谷遺跡群Ⅱ』1982
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『梅木遺跡』1986
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群Ⅰ』1990
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群Ⅱ』1991
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群Ⅲ』1991
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群Ⅳ』1992
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群Ⅵ』1993
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『柳久保遺跡群Ⅰ』1985
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『柳久保遺跡群Ⅵ』1988
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『柳久保遺跡群Ⅶ』1988
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『小稲荷遺跡』1987
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『地田栗Ⅲ遺跡』1994
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『中原遺跡群Ⅰ』1993
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『中原遺跡群Ⅱ』1994
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『中原遺跡群Ⅳ』1995
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『中原遺跡群Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ』1996
- 新里村教育委員会『赤城山麓の歴史地震－弘仁九年に発生した地震とその災害』1991
- 大胡町教育委員会『天神風呂遺跡』1981
- 大胡町教育委員会『中川原遺跡群小林・山神・大畑遺跡』1992
- 大胡町教育委員会『中川原遺跡群上ノ山遺跡』1992
- 大胡町教育委員会『西小路遺跡』1994
- 大胡町教育委員会『上大屋南部遺跡群上大屋下組遺跡・上大屋中組遺跡・上大屋天王山遺跡』1999
- 大胡町教育委員会『茂木山神Ⅱ遺跡』2001
- 群馬県教育委員会『荒砥五反田遺跡』1978
- 群馬県教育委員会『山崎遺跡・寺東遺跡・寺前遺跡・東前田北遺跡・東原西遺跡・新山遺跡』1984
- 群馬県教育委員会『堤東遺跡』1985
- 群馬県教育委員会『舞台・西大室丸山』1991
- 群馬県教育委員会『富士山Ⅰ遺跡1号古墳』1991
- 群馬県教育委員会『丸山・北原』1992
- 群馬県教育委員会『上諏訪山A・B・中山A・東原A・B』1992

参考文献

- 群馬県教育委員会『下境Ⅰ・Ⅱ』1996
- 群馬県教育委員会『西大室丸山遺跡』1997
- 群馬県教育委員会『諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡』1998
- 群馬県教育委員会『上西原遺跡』1999
- 群馬県教育委員会『村主遺跡・谷津遺跡』2000
- 群馬県教育委員会『北田下遺跡・中畑遺跡・中山B遺跡』2001
- 群馬県教育委員会『山王遺跡・大道遺跡・阿弥陀井戸道上遺跡・天神遺跡・元屋敷遺跡』2002
- 群馬県教育委員会『中屋敷Ⅰ遺跡・明神山遺跡・伊勢山遺跡・中島遺跡・西裏遺跡』2003
- 群馬県企業局『萱野・下田中・矢場遺跡』1991
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥東原遺跡』1979
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥上川久保遺跡』1982
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥島原遺跡』1984
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥洗橋遺跡 荒砥宮西遺跡』1985
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥二之堰遺跡』1985
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥前原遺跡 赤石城址』1985
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥北原遺跡 今井神社古墳群 荒砥青柳遺跡』1986
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥天之宮遺跡』1988
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『二之宮宮下東遺跡』1988
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ』1991
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『今井白山遺跡』1993
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥宮川遺跡 荒砥宮原遺跡』1993
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『白倉下原・天引|向原遺跡Ⅲ《弥生・古墳時代本文編》』1994
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥大日塚遺跡』1994
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『今井道上遺跡』1994
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『筑井八日市遺跡』1994
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『小島田八日市遺跡』1994
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』1995
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『今井道上・道下遺跡』1995
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ』1996
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥下押切Ⅱ遺跡・荒砥中屋敷Ⅱ遺跡』1999
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥荒子遺跡』2000
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥諏訪西遺跡Ⅰ』2002
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥諏訪西遺跡Ⅱ 荒砥諏訪遺跡』2003
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥宮田遺跡Ⅰ』2003
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥宮田遺跡Ⅱ 荒砥前田遺跡』2004
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬遺跡大事典』1999
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報19』2000
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報20』2001

抄 録

書名ふりがな	とみだほそだいせき、とみだみやしたいせき
書名	富田細田遺跡、富田宮下遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第384集
編著者名	山村英二、徳江秀夫
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20061228
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	とみだほそだいせき
遺跡名	富田細田遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししとみだまちあざほそだ
遺跡所在地	群馬県前橋市富田町字細田
市町村コード	10201
遺跡番号	—
北緯(日本測地系)	362317
東経(日本測地系)	1390915
北緯(世界測地系)	362328
東経(世界測地系)	1390903
調査期間	19990401-19990930、20010111-20010220
調査面積	13208
調査原因	道路建設工事
種別	集落/田畑
主な時代	奈良平安/中近世
遺跡概要	集落-奈良平安-溝14+土坑6-須恵器+土師器/集落-中近世-掘立柱建物1+溝9+土坑1-陶磁器+銭貨/田畑-奈良平安-水田2+畑1
特記事項	818(弘仁九)年の洪水層、1108(天仁元)年降下の浅間B軽石により埋没した2面の水田
遺跡名ふりがな	とみだみやしたいせき
遺跡名	富田宮下遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししとみだまちあざみやした
遺跡所在地	群馬県前橋市富田町字宮下
市町村コード	10201
遺跡番号	—
北緯(日本測地系)	362327
東経(日本測地系)	1390910
北緯(世界測地系)	362338
東経(世界測地系)	1390858
調査期間	19990802-20010331
調査面積	22379
調査原因	道路建設工事
種別	集落/田畑/その他
主な時代	縄文/弥生/古墳/奈良平安/中近世
遺跡概要	集落-縄文-土坑14/集落-弥生-竪穴住居11-弥生土器/集落-古墳-竪穴住居41+土坑2+溝1-須恵器+土師器+紡錘車+砥石/集落-奈良平安-竪穴住居51+掘立柱建物4+土坑1-須恵器+土師器+鉄器+砥石+銭貨/集落-中近世-掘立柱建物3+井戸12+溝45+溜井2+土坑32-陶磁器+軟質陶器+石臼+五輪塔/田畑-平安-水田/その他-含層-縄文+弥生-縄文土器・石器+弥生土器+石器
特記事項	弥生時代中期から平安時代の集落。平安時代竪穴住居から神功開寶出土



財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書第384集

富田細田遺跡/富田宮下遺跡 一般国道17号(上武道路)改築工事に
《本文編》 伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18(2006)年12月21日 印刷

平成18(2006)年12月28日 刊行

編集・発行/国 土 交 通 省

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784-2

T E L (0279) 52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/株式会社開文社印刷所